

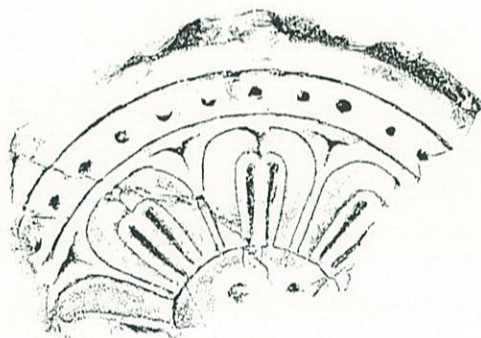
(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第51集

八尾市 若草町所在

小 阪 合 遺 跡

—都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書—

本文篇



2000年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



第Ⅳ面 川200出土 和同開珎



墨書土器



緑釉単彩陶器（上）と緑釉陶器（下）



韓式系土器（上）と初期須恵器（下）

序 文

我が国最大級の沖積平野にある河内平野には、未知の遺跡が地中深くに数多く埋もれている。その一端を解明したのは、1976年から10年余にわたって実施した近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査である。しかし沖積地の遺跡は、丘陵地の遺跡と違って地表にその痕跡を残すことは少なく、不意の工事に際して発見されることが多い。

河内平野の南端の八尾市に所在する小阪合遺跡は、1955年同市若草町で実施された大阪府住宅供給公社山本団地建設の際、土器が出土したことで周知された。その後土地区画整理事業や楠根川改修工事に伴う発掘調査が、財団法人八尾市文化財調査研究会などによって、今日に至るまで継続的に実施されている。

一連の調査の結果小阪合遺跡は、主として弥生時代後期から古墳時代を通して営まれた集落遺跡であることが明らかとなった。中でも弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて、吉備・山陰など他地域との活発な交流を窺わせる資料が数多く出土しており、当地一帯の先進性を物語る。

今回の調査地は小阪合遺跡の北西端に位置し、弥生時代後期から平安時代にかけての多量の遺物が出土した。詳細は本書をご覧頂きたいが、特に奈良・平安時代の墨書土器・皇朝銭、平安時代の施釉陶器は、古代における調査地周辺の性格を考える上で貴重な資料と言えよう。

最後に調査に際しては、大阪府教育委員会、都市基盤整備公団をはじめとする関係各位より、多大なるご指導・ご協力を頂いた。衷心より感謝の意を表すとともに、今後とも当センターの事業になお一層のご支援を賜るようお願いする。

2000年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪 井 清 足

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市若草町所在小阪合（こざかあい）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都市基盤整備公団 関西支社（旧 住宅都市整備公団 関西支社）八尾団地建替えに伴い、同社の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 現地調査は、同センター中部調査事務所調査第1係技師 駒井正明、本間元樹を担当者として、1997年12月26日から1998年12月25日迄行い、続いて整理作業は上記2名に主査 陣内暢子、専門調査員 松田留美を加えた4名にて実施した。
4. 調査中に検出した旧楠根川砂層の堆積状況については松田順一郎氏（財団法人東大阪市文化財協会）より、土器棺については角南聡一郎氏（財団法人元興寺文化財研究所）より、動物遺体については安部みき子氏（大阪市立大学）より、それぞれ玉稿を賜った。また英文サマリーは佐々木憲一氏（明治大学）のお手を煩わせた。
5. 調査・整理にあたっては、都市基盤整備公団関西支社をはじめ、以下の方々からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表する（五十音順、敬称略）。
安藤文良、家田淳一、石神 怡、上田 睦、上原真人、白川雄一、内田正俊、大久保徹也、大野 薫、岡田清一、岡田直樹、岡本武司、奥 和之、尾上 実、亀田修一、川口宏海、川畑 聡、久保和士、古閑正浩、近藤 広、近藤康司、嶋谷和彦、清水みき、高萩千秋、田中清美、坪田真一、虎間英喜、虎間麻美、永井久美男、成瀬正和、成海佳子、西口陽一、西村公助、蓮本和博、濱野俊一、原田昌則、伴野幸一、樋口 薫、平尾政幸、福永信雄、古川晴久、松村隆文、松本忠幸、宮崎泰史、森岡秀人、森下英治、森本めぐみ、安村俊史、山田幸弘、山田隆一、吉川義彦、吉田 晶、丸亀市立郡家小学校
6. 現場写真は調査担当者が、遺物写真は片山彰一（中部調査事務所）が撮影し、山口誠治、立花るりに原稿を依頼した。また同センター職員より全般にわたって教示・協力を得た。
（現地調査）川端（楠本）佳子、斎藤理耶、清水香奈、辻田多江、辻田有美、松下知代
（整理作業）川端佳子、喜多裕子、斎藤理耶、里 百代、清水芳子、白井美紀子、高江洲耐子、竹田博美、武智あゆみ、辻田多江、辻田有美、遠山美樹子、西田登姿子、福井真美寿、増井英子、松下知代、松永茂子、山本麻理、渡邊真弓
7. 本書の執筆は各担当が行い、文責は目次に示した。編集実務は駒井が担当した。
8. 調査、整理の過程で作成した図面類、写真、出土遺物などは、(財)大阪府文化財調査研究センター中部調査事務所にて保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した遺構実測図、その他の図に付された北方位は、全て国土座標第Ⅵ座標系の座標北を示す。
2. 本書で用いる標高は全て東京湾平均海面で、図中では原則的にT.P.+を省略した。
3. 遺構図、付図に記入した座標値の単位kmはすべて省略した。
4. 付図の中のピットは番号のみで表記した。
5. 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1995年版を用いた。
6. 本書では、本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は全て一致する。
7. 出土遺物は原則的に、土器類を縮尺1／4、石器を同2／3、木器を同1／3・1／6、金属製品を原寸で掲載した。
8. 黒色土器については、黒色部分にスクリーントーンを貼った。
9. 土器類の断面については、須恵器（須恵質を含む）・施釉陶器・磁器を黒塗り、瓦器をスクリーントーン、その他を白抜きとした。
10. 口縁部残存部分が1／6以下の土器は、実測図の口縁部水平線に縦線2本を入れて表現した。
11. 石器の黒塗り部分は、新欠を表わす。

目 次

巻頭図版

1. 第Ⅲ面 川200出土 和同開珎
2. 墨書土器
3. 緑釉単彩陶器（上）と緑釉陶器（下）
4. 韓式系土器（上）と初期須恵器（下）

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 序章	（駒井）	1
第Ⅱ章 位置と環境		3
第1節 位置と環境	（松田）	3
第2節 文献史料からみた小阪合遺跡とその周辺	（駒井）	8
第Ⅲ章 調査・整理の方法		13
第1節 調査の方法	（駒井）	13
第2節 整理の方法	（駒井）	15
第Ⅳ章 調査成果		16
第1節 層序	（本間）	16
第2節 遺構	（本間）	21
第3節 遺構出土遺物	（駒井、松田、陣内）	66
第4節 包含層出土遺物	（駒井）	183
第5節 施釉陶器	（駒井）	190
第6節 墨書・刻書土器	（駒井）	193
第7節 瓦	（駒井）	203
第8節 その他の石製品	（駒井）	207
第9節 金属製品	（駒井）	208
第Ⅴ章 遺構・遺物の検討		
第1節 出土瓦の検討	（駒井）	217
第2節 奈良・平安時代の小阪合遺跡とその周辺	（駒井）	223
第Ⅵ章 98-1~7区発掘調査の年代測定と微化石分析	（松田 順一郎）	236
第1節 放射性炭素年代測定結果	（株式会社 地球科学研究所）	238
第2節 大阪府小阪合遺跡の花粉分析結果	（パリノ・サーヴェイ株式会社）	242
第3節 大阪府小阪合遺跡の植物珪酸体化石分析結果	（株式会社 古環境研究所）	252

第Ⅶ章 考察	258
第1節 八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達 ..(松田 順一郎)	259
第2節 土器棺と土器棺もどき	(角南 聡一郎) 277
第3節 土器に付着した組織痕について	(立花 るりこ) 292
第4節 小阪合遺跡出土の動物遺体	(安部 みき子) 296
第5節 小阪合遺跡出土植物遺体	(山口 誠治) 302
第Ⅷ章 まとめ	306
資料編	307
基礎データ編	341
英文サマリー	456

表 目 次

表 1	周辺遺跡調査概要	5
表 2	第Ⅲ面 落込み416 (上層) 出土土師器構成	152
表 3	第Ⅲ面 落込み416 (上層) 出土須恵器構成	152
表 4	施釉陶器一覧表	192
表 5	墨書・刻書土器一覧表	200
表 6	錢貨計測値	214
表 7	98-2区 (a) の花粉分析結果	243
表 8	98-7区の花分析結果	245
表 9	大阪府、小阪合遺跡の植物珪酸体分析結果	255
表10	正倉院宝物に見られる奈良時代の布帛の織密度	295
表11	小阪合遺跡出土のウマとウシの同定表	296
表12	ウマとウシの出現頻度表	299
表13	ウマの体高の推定値	299
表14	植物遺体同定結果一覧	302
表15	出土木製遺物の樹種鑑定結果	303
表16	小阪合モモ核計測値	304
表17	大阪府下出土奈良・平安時代文字資料集成	307
表18	大阪府下出土皇朝錢集成	326
表19	大阪府出土陶硯集成	331
表20	小阪合遺跡 遺構面の対照	340
表21	小阪合遺跡 遺構の種類と数	341
表22	溝一覧	343
表23	土坑一覧	347
表24	ピット一覧	349
表25	遺物観察表	359

写真一覧

写真 1	第Ⅱ面 98-7区 土坑568網代出土状況	20
写真 2	第Ⅶ面 98-7区 水田跡 (北から)	20
写真 3	讃岐国分寺出土瓦	220
写真 4	讃岐国分寺・宝幢寺跡出土瓦	221
写真 5	花粉化石 (1)	249
写真 6	花粉化石 (2)	250

写真7	花粉化石 (3)	251
写真8	植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真	257
写真9	土師器皿A (533) 組織痕	292
写真10	土師器碗A (560) 組織痕	293
写真11	須恵器坏 (339) 組織痕	293
写真12	小阪合遺跡出土動物遺体 (1)	300
写真13	小阪合遺跡出土動物遺体 (2)	301

挿図目次

図1	調査地位置図	1
図2	周辺の遺跡	4
図3	中河内地域の旧郡郷域	9
図4	調査地区割り図	14
図5	土層断面模式図	17
図6	第Ⅰ面 遺構配置図	21
図7	第Ⅰ面 98-5区 掘立柱建物935	22
図8	第Ⅱ面 遺構配置図	23
図9	第Ⅱ面 98-5区 井戸103・104, 98-7区 井戸560・561・564・567	25
図10	第Ⅱ面 98-7区 井戸565・566, 98-5区 土坑136・274, 98-7区 土坑562・563・568	27
図11	第Ⅲ面 遺構配置図(平安時代後期以降)	30
図12	第Ⅲ面 98-1区 井戸195, 98-3区 井戸538, 98-4区 井戸352, 98-6区 井戸354	31
図13	第Ⅲ面 遺構配置図(平安時代前期)	33
図14	第Ⅲ面 98-2区 井戸255, 98-3区 井戸507・528・531, 98-4区 井戸349, 98-7区 井戸721・846	34
図15	第Ⅲ面 98-7区 井戸844・845, 98-3区 土坑443・452	35
図16	第Ⅲ面 98-3区 土坑502, 98-7区 土坑722	37
図17	第Ⅲ面 98-6区 掘立柱建物937	38
図18	第Ⅲ面 遺構配置図(奈良時代)	40
図19	第Ⅲ面 川719 護岸施設	41
図20	第Ⅲ面 川200・719 遺物出土分布図(左/土器・右/獣骨)	42
図21	第Ⅲ面 川200・719 出土皇朝銭分布図	43
図22	和同開珎出土状況(B群)	44
図23	第Ⅲ面 98-7区 井戸723	45
図24	第Ⅲ面 98-1区 井戸1, 98-7区 井戸720, 土坑822	46
図25	第Ⅲ面 遺構配置図(古墳時代)	47
図26	第Ⅲ面 98-7区 住居857	48
図27	第Ⅲ面 98-7区 住居865	49
図28	第Ⅲ面 98-2区 土坑243・244, 98-4区 土坑331・350 遺物出土状況	51
図29	第Ⅲ面 98-2区 掘立柱建物936, 98-4区 ピット328	52
図30	第Ⅲ面 98-7区 井戸788・850, ピット752・760・767・769・770・799・802・810	53
図31	第Ⅳ面 遺構配置図	55
図32	第Ⅳ面 98-1区 土坑100, 98-2区 土坑288, 落込み310	56
図33	第Ⅴ面 遺構配置図	57
図34	第Ⅴ面 98-5区 溝216 遺物出土状況	58
図35	第Ⅴ面 98-1区 井戸196・197・198, 98-6区 井戸414, 98-7区 井戸866	59

図36	第V面	98-5区 土坑321, 98-7区 土坑890・897	60
図37	第VI面	遺構配置図	62
図38	第VII面	水田跡	63
図39	第VIII面	遺構配置図(上) (第III面) 住居865下層 掘立柱建物938(下)	64
図40	第I面	ピット55・59・79・89 出土遺物	66
図41	第II面	溝569・122 出土遺物	67
図42	第II面	井戸560・561・564・567 出土遺物	68
図43	第II面	井戸567井戸枠	69
図44	第II面	井戸566・565 出土遺物	70
図45	第II面	土坑570・568・608・577 出土遺物	72
図46	第II面	ピット177, 落込み138 出土遺物	73
図47	第III面	溝330・332・235・793・326 出土遺物	74
図48	第III面	住居857 出土遺物	75
図49	第III面	住居865, 住居865上層 出土遺物	76
図50	第III面	井戸507 出土遺物	78
図51	第III面	井戸255・528・531・844 出土遺物	79
図52	第III面	井戸1・723・788 出土遺物	81
図53	第III面	井戸1井戸枠	82
図54	第III面	土坑443 出土遺物	83
図55	第III面	土坑502・722・452・202・201 出土遺物	84
図56	第III面	土坑537・331 出土遺物	85
図57	第III面	土坑350 出土遺物(1)	86
図58	第III面	土坑350 出土遺物(2)	87
図59	第III面	土坑435 出土遺物(1)	89
図60	第III面	土坑435 出土遺物(2)	90
図61	第III面	土坑435 出土遺物(3)	91
図62	第III面	土坑435 出土遺物(4)	92
図63	第III面	土坑435 出土遺物(5)	93
図64	第III面	土坑435 出土遺物(6)	94
図65	第III面	土坑244・243 出土遺物	96
図66	第III面	ピット740・796・527 出土遺物	97
図67	第III面	川200・719 出土遺物(1)	99
図68	第III面	川200・719 出土遺物(2)	100
図69	第III面	川200・719 出土遺物(3)	101
図70	第III面	川200・719 出土遺物(4)	103
図71	第III面	川200・719 出土遺物(5)	105
図72	第III面	川200・719 出土遺物(6)	106
図73	第III面	川200・719 出土遺物(7)	107

图74	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (8)	·····	108
图75	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (9)	·····	109
图76	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (10)	·····	110
图77	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (11)	·····	111
图78	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (12)	·····	112
图79	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (13)	·····	113
图80	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (14)	·····	114
图81	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (15)	·····	115
图82	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (16)	·····	116
图83	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (17)	·····	117
图84	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (18)	·····	117
图85	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (19)	·····	118
图86	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (20)	·····	119
图87	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (21)	·····	120
图88	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (22)	·····	121
图89	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (23)	·····	122
图90	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (24)	·····	123
图91	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (25)	·····	124
图92	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (26)	·····	125
图93	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (27)	·····	126
图94	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (28)	·····	127
图95	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (29)	·····	129
图96	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (30)	·····	129
图97	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (31)	·····	130
图98	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (32)	·····	131
图99	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (33)	·····	132
图100	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (34)	·····	134
图101	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (35)	·····	135
图102	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (36)	·····	135
图103	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (37)	·····	136
图104	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (38)	·····	137
图105	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (39)	·····	138
图106	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (40)	·····	138
图107	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (41)	·····	139
图108	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (42)	·····	140
图109	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (43)	·····	141
图110	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (44)	·····	142
图111	第Ⅲ面	川200·719	出土遺物 (45)	·····	143

図112	第Ⅲ面	川200・719	出土遺物 (46)	144
図113	第Ⅲ面	落込み341	出土遺物	145
図114	第Ⅲ面	落込み217	出土遺物	146
図115	第Ⅲ面	落込み416	出土 土師器の形態分類 (1)	149
図116	第Ⅲ面	落込み416	出土 土師器の形態分類 (2)	150
図117	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (1)	153
図118	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (2)	154
図119	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (3)	155
図120	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (4)	156
図121	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (5)	157
図122	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (6)	158
図123	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (7)	159
図124	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (8)	160
図125	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (9)	161
図126	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (10)	162
図127	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (11)	163
図128	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (12)	164
図129	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (13)	165
図130	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (14)	166
図131	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (15)	167
図132	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (16)	168
図133	第Ⅲ面	落込み416	出土遺物 (17)	169
図134	第Ⅳ面	溝309, 土坑284・100	出土遺物	170
図135	第Ⅳ面	落込み310	出土遺物 (1)	172
図136	第Ⅳ面	落込み310	出土遺物 (2)	173
図137	第Ⅴ面	溝216	出土遺物	174
図138	第Ⅴ面	井戸866, 土坑321	出土遺物	175
図139	第Ⅴ面	井戸414・538・198	出土遺物	175
図140	第Ⅴ面	土坑890・543・897	出土遺物	176
図141	第Ⅴ面	川410	出土遺物	177
図142	第Ⅴ面	川415	出土遺物 (1)	178
図143	第Ⅴ面	川415	出土遺物 (2)	179
図144	第Ⅴ面	川415	出土遺物 (3)	180
図145	第Ⅴ面	川415	出土遺物 (4)	181
図146	第Ⅴ面	川415	出土遺物 (5)	182
図147	第Ⅷ面		出土遺物	182
図148	包含層		出土遺物 (1)	184
図149	包含層		出土遺物 (2)	185

図150	包含層 出土遺物 (3)	186
図151	包含層 出土遺物 (4)	187
図152	包含層 出土遺物 (5)	188
図153	包含層 出土遺物 (6)	189
図154	施釉陶器 (1)	190
図155	施釉陶器 (2)	191
図156	墨書・刻書土器 (1)	194
図157	墨書・刻書土器 (2)	195
図158	墨書・刻書土器 (3)	196
図159	墨書・刻書土器 (4)	197
図160	墨書・刻書土器 (5)	198
図161	墨書・刻書土器 (6)	199
図162	墨書・刻書土器 (7)	200
図163	墨書・刻書土器 (8)	202
図164	瓦 (1)	203
図165	瓦 (2)	204
図166	瓦 (3)	205
図167	瓦 (4)	206
図168	紡錘車・有孔円板・不明石製品	207
図169	銚帯	208
図170	皇朝銭 (1)	209
図171	皇朝銭 (2)	210
図172	皇朝銭 (3)	211
図173	皇朝銭 (4)	212
図174	皇朝銭 (5)	213
図175	讃岐国分寺・宝幢寺・山内瓦窯位置図	217
図176	範傷の進度	219
図177	古代瓦分布図 (川200・719を除く)	224
図178	東郷廃寺周辺の調査地点と想定寺域	227
図179	若江郡所在の古代寺院出土瓦	229
図180	若江郡における奈良時代～平安時代前期の遺構・遺物分布図	232
図181	年代試料および微化石分析試料採取層準	237
図182	98-2区 (a) の主要花粉化石の層位分布	244
図183	小阪合遺跡98-7区の植物珪酸体分析結果	256
図184	調査地の位置と河内平野南東部の地形分類	259
図185	調査地近傍のボーリング柱状図	260
図186	小阪合遺跡と大竹西遺跡の流路充填堆積物の岩石種組成	262
図187	流路充填堆積物の粒径頻度分布	263

図188	流路充填堆積物柱状断面の層序対比と堆積ユニット	266
図189	流路充填堆積物横断面の層理のスケッチ	267
図190	小阪合遺跡の河川地形の変遷模式図	273
図191	土器棺もどき（入れ子）	279
図192	土器棺もどき（装身具・威儀具 1）	280
図193	土器棺もどき（装身具・威儀具 2）	281
図194	土器棺もどき（石1）	283
図195	土器棺もどき（石2）	284
図196	土器棺もどき（食物・動物）	285
図197	土器棺もどき（何も出土しない）	287
図198	小阪合遺跡の土器棺	291
図199	製塩土器（880）内面の組織痕（左）とその模式図（右）	293
図200	小阪合遺跡出土モモ核体積のヒストグラム	305
図201	瑠璃鉄釉虚無僧根付	306

第1章 序章

はじめに 小阪合遺跡は河内平野南部、大阪府八尾市若草町一帯に所在する。近代以降八尾市はそれまでの綿・菜種生産を主とする農村から、交通網の整備により軽工業あるいは住宅地へと変貌を遂げた。今回の調査は、敗戦後活発に繰り広げられた宅地開発の最中に建設された都市基盤整備公団八尾団地建替に伴って実施した（図1）。ここでは当団地建設までの経緯に触れてみたい。

近代における変貌 八尾市は、江戸時代を通じて商品作物としての綿・菜種生産で高い収益を上げており、特に綿作は東大阪市にかけて全国屈指の生産地として知られていた。東大阪市にまたがる池島・福万寺遺跡で検出された島畑は、排水の悪い水田に綿花栽培を目的として作られたものである。ところが殖産興業政策による近代紡績業の勃興は、輸入綿花・綿糸・綿織物の増加をもたらした反面、在来の木綿を圧迫し、大正初期には著しく衰退させた。

紡績をはじめとする繊維工業、金属・化学工業など大阪における近代工業の隆盛は、隣接地域にも工業化の波をもたらした。八尾市域では、マッチ・製油・ブラシ・捻糸工業が相次いで創業したが、その後これらの多くが発展した要因として、大阪市との地理的關係はいうまでもなく奈良・八尾街道や大阪鉄道の開通が大きい。なおブラシ工業は今日でも全国トップクラスの生産高をあげている。

交通網の整備 大阪鉄道は、1887年に湊町～^{みなとまち}樫原市今井町に至る鉄道敷設を請願し、1892年湊町～奈良間が全通した。同鉄道は、1900年大阪～名古屋間を全通させた関西鉄道に合併され（関西鉄道株式会社に社名変更）、1907年鉄道国有法によって国有となり、関西本線と称するに至った。同年天王寺～柏原間は複線化し、1908年志紀停車場、1909年久宝寺停車場が設置された。

一方1906年、奈良電気鉄道株式会社による大阪上本町6丁目～奈良市三条町に至る鉄道敷設が認可された。1910年大阪電気軌道株式会社と改称し（以下大軌）、途中生駒トンネル建設に難渋したが、1914年開業に至る。1923年大軌は^{あじろ}足代（現布施）から八尾に至る鉄道建設に着手、1924年に完成、1929年には桜井まで全通した。八尾市域には久宝寺口・大軌八尾・大軌山本・高安・恩智の5駅が設置されたことにより、大阪市内や大和方面への交通は飛躍的に前進した。

民鉄の宅地開発 鉄道網の整備とともに大軌は沿線開発に乗り出したが、その最たるものが宅地開発であった。鉄道会社による宅地開発は、阪神電鉄が1905年西宮で始めた借家経営をその嚆矢とする。1910年開業の箕面有馬電気軌道株式会社は、鉄道用地とともに住宅地の買収を進め、その分譲益を鉄道経営に還元する方法をとった。同社は、大阪府豊能郡池田町室町（現大阪府池田市）の分譲を皮切りに西摂地域の宅地開発を行ったが、住宅地開発は沿線の人口を増加させ、安定的な鉄道利用者の確保に繋がった。他の関西民鉄が一斉に倣ったことはいうまでもない。

大軌は、1916年以降奈良線沿線に生駒・^{ぬかた}額田・小阪、桜井線沿線に山本・長瀬といった土地・建物の分譲を開始した。八尾市域では、1925年の大軌山本開業とともに従

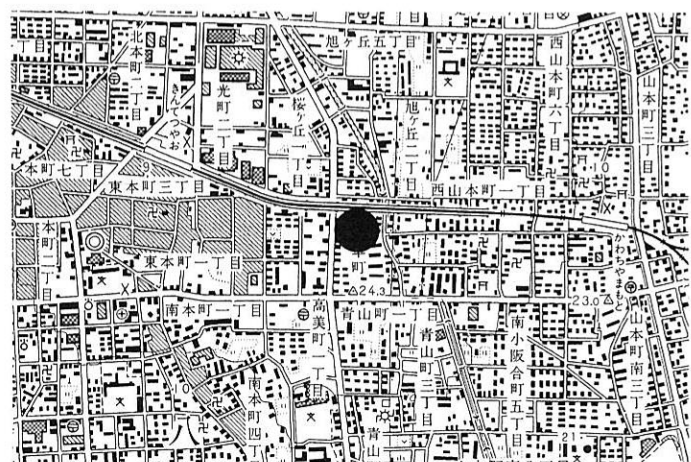


図1 調査地位置図 (S=1/25000)

来の新田地帯（旧河床部分）が住宅地として発展、長瀬川の植松・安中^{あんなか}・三津、玉串川の柏村・山本地区などがこれであった。

以後八尾市域の宅地開発は増加し、1941年には北山本地区で第1期事業として111戸の営団住宅が建設され、1944年までに327戸を数えた。この背景の一つには、市域がアジア太平洋戦争による大阪市民の疎開地であったことにもよる。

八尾市の成立と住宅誘致 敗戦後は復員・引揚者増加に伴う住宅不足で、1946年木の本地区にあった大阪陸軍航空廠跡地に府営住宅264戸、1947年には安中地区に営団住宅110戸、1948年には隣接地に府営住宅40戸建設を相次いで建設した。

このような人口増加の中で、1948年八尾市が大阪府下では14番目の市として発足、中河内地域では1937年の布施市に続く2番目の市となった。八尾市の中核は交通・流通商業・行政・文教の中心地であった旧八尾町で、製糸業・製油業などの近代工場が建ち並ぶ^{りゅうげ}旧龍華町、中世以来の寺内町の伝統を受け継いだ旧久宝寺村、さらに純農村地帯の村々から構成された。

その後も以下のような住宅誘致政策が実施された。1951年萱振地区に府営住宅352戸、翌年市営住宅92戸が建設され、1952・1953・1955年度にわたって継続。1954年志紀地区に府営住宅300戸、町営住宅20戸、1955年府営木造住宅450戸、簡易耐火住宅100戸建設。1955年小阪合地区に府住宅協会の山本共同住宅として鉄筋4階建4棟128戸、1956・1957年住宅都市整備公団による鉄筋5階建3棟120戸、2階建住宅37棟202戸建設、南山本地区に住宅都市整備公団鉄筋4階建12棟328戸建設。1957年度から近鉄による高安・万願寺・中野地区の分譲住宅建設などである。

公団八尾団地 今回の調査対象となったのは、小阪合地区に1956～57年にかけて建設された住宅都市整備公団2階建テラス住宅80戸10棟分の用地（6135m²）である。同公団は、1956年大阪府堺市所在金岡団地の管理開始（入居開始）を皮切に次々に団地建設を行ったが、1957年管理開始の八尾団地は初期の物件である。これらはいずれも築30年前後を経過しており、金岡団地は1992年建替え着手し、現在は「サンヴァリエ金岡」として生まれ変わろうとしている。

一般に公団の場合建替えに際しては、2年の折衝期間と2年の工事期間、計4年を費やすという。しかし八尾団地の場合小阪合遺跡内に位置するため、さらに埋蔵文化財調査に1年を充てた。つまり第1期工事として1995年9月に建替えを開始し（折衝開始）、1997年建物解体、その後発掘調査を実施し、2000年12月入居開始を目標に現在工事が進められている。これが完成すると9～12階建3棟、262戸が入居可能という。

参考文献

『八尾市史』1958 大阪府八尾市役所

『八尾市史（近代）本文編』1983 八尾市役所

橋本雅夫『阪急電車青春物語』1996 草思社

『東大阪市史 近代Ⅱ』1997 東大阪市

『鉄道ピクトリアル 663』1997 鉄道図書刊行会

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 位置と環境

はじめに 小阪合遺跡は八尾市の中央部に位置し、南小阪合町、青山町、若草町一帯に所在する。これまでに大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会により約60次にわたって小規模な発掘調査が行われ、弥生時代中期から中世にいたるまで連綿と営まれてきた遺跡であることが知られる。地形的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地する。北側を萱振遺跡、東郷遺跡、西側を成法寺遺跡、矢作遺跡、南側を中田遺跡、東弓削遺跡に隣接する。

八尾市のある河内平野は大阪の中央東部に位置する。今からおよそ7000～6000年前(縄文時代前期)、現在の大阪湾の海岸線は河内平野にまで及び、東は生駒山麓、南は八尾市、北は高槻付近にまで達し、河内湾を形成していた。この河内湾は淀川、古川、寝屋川、大和川、東除川、西除川などの三角州や砂州の発達により約3000～2000年前頃(縄文時代晩期～弥生時代前半)には河内潟、約1800～1600年前頃(弥生時代後期～古墳時代前期)には湖となり、次第に陸地化していく¹⁾。

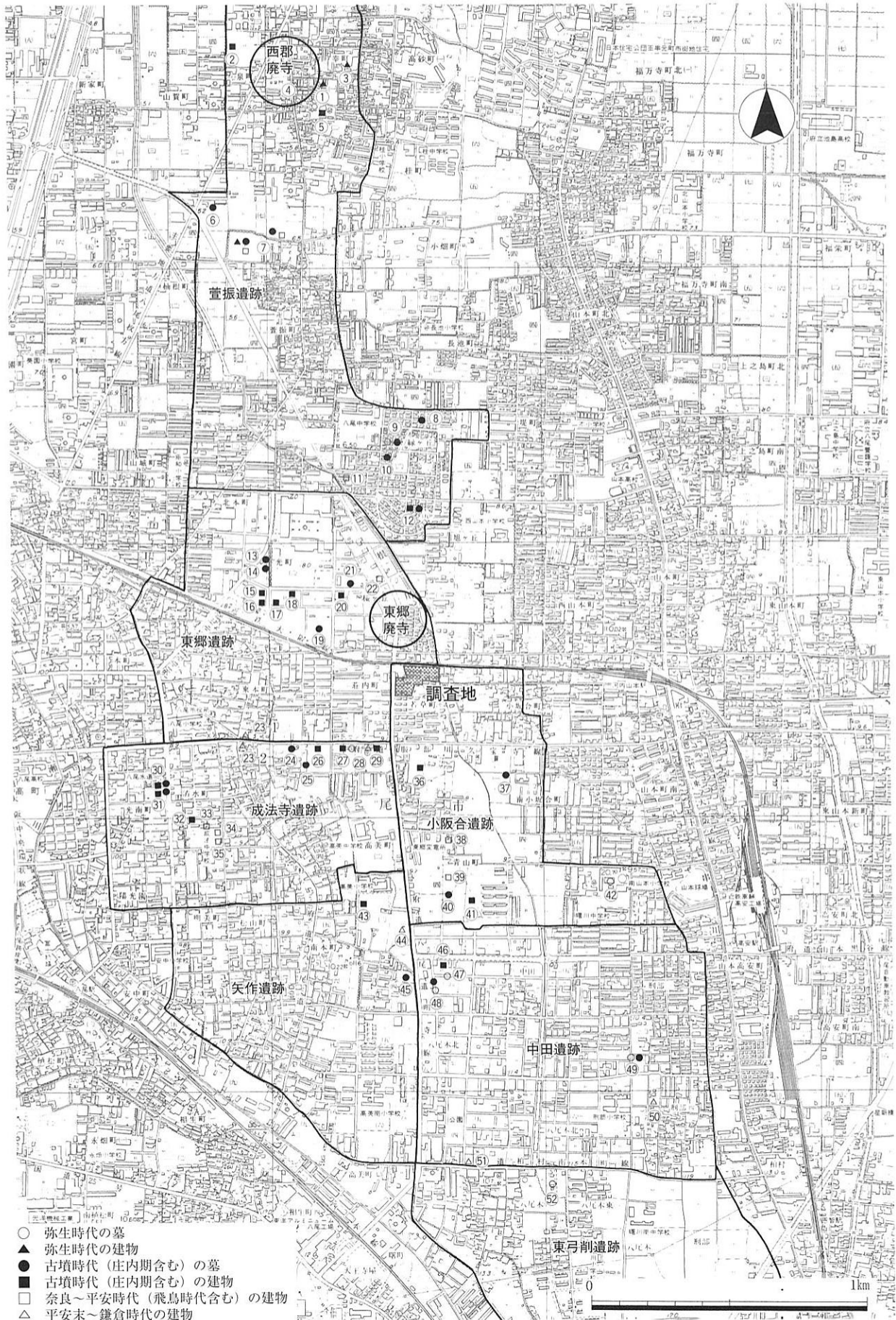
河内平野は大小の河川により豊富な水と肥沃な土壌がもたらされる一方、『続日本紀』等に水害や治水の記事がみられるように、大雨の時は洪水を引き起こし度重なる被災と復興の繰り返しであったことがわかる。そのことを裏付けるように、発掘調査においても各地で洪水の痕跡や河川跡が多くみつまっている。以下小阪合遺跡とその周辺遺跡の概要を時期ごとに記す。

縄文時代 八尾市内では縄文前期～晩期の土器が出土している恩智遺跡が知られる。小阪合遺跡を含む周辺では萱振遺跡、東郷遺跡において自然河川から縄文土器が出土している。明確な遺構は検出されていないが、周辺に集落が存在する可能性がある。

弥生時代 旧大和川の分流には三角州が発達し、前期の山賀、亀井、八尾南遺跡をはじめとして多くの弥生時代の遺跡が営まれる。玉串川や長瀬川によって形成された三角州地帯では中期に入り安定した生活が営まれるようになる。後期になると小阪合遺跡周辺では中期に比べて遺構と遺物の検出数が増加し、集落規模が拡大する傾向がみられる。中期では小阪合遺跡において居住域²⁾を確認している。

萱振遺跡では北部で生産域(表番号No.7、以下表番号省略)と南部で墓域(No.9)、東郷遺跡では居住域³⁾、成法寺遺跡では北東部で墓域(No.27)、東弓削遺跡では遺跡の北部から中田遺跡の南部にかけて居住域と墓域を検出している⁴⁾。中田遺跡では前期の土坑がみつまっている。後期では小阪合遺跡において居住域⁵⁾と生産域⁶⁾、墓域(No.42)を確認している。また、(財)八尾市文化財調査研究会が行った第20次調査で出土した横櫛は最古のもので当時の服飾を知る貴重な資料である。萱振遺跡では北部の第6次調査(No.1)で検出した竪穴住居を中心とする地域⁷⁾と南部に居住域⁸⁾、東郷遺跡では居住域と生産域⁹⁾、成法寺遺跡では北東部と北西部で居住域¹⁰⁾、中田遺跡では墓域(No.47～49)を検出している。矢作遺跡では東部から小阪合遺跡南部にかけて集落の広がり¹¹⁾を確認している¹²⁾。

古墳時代 本市域は大和王権の中心であった大和に近い¹³⁾ため、有力豪族や渡来系氏族が多く居住した地域である。生駒山麓において前期には向山、西ノ山古墳など、中期は北・中河内において最大規模を誇る心合寺山古墳、後期は巨石横穴式石室をもつ愛宕塚古墳、平野部において前期には美園、萱振1号墳など、後期には山賀、萱振2号墳などがつくられる。また河内では吉備、山陰、四国、北陸、東海の他地域から搬入された土器が出土していることから、瀬戸内から河内湖の水運を利用してこれらの地方



- 弥生時代の墓
- △ 弥生時代の建物
- 古墳時代(庄内期含む)の墓
- 古墳時代(庄内期含む)の建物
- 奈良～平安時代(飛鳥時代含む)の建物
- △ 平安末～鎌倉時代の建物

図2 周辺の遺跡

表1 周辺遺跡調査概要

No.	遺跡名	遺構	文献
1	萱振第6次	弥生後期：竪穴住居	『(財)八尾市文化財調査研究会報告52』1996 (財)八尾市文化財調査研究会
2	萱振第7次	古墳後期～飛鳥前期：掘立柱建物	同上
3	萱振第13次	弥生後期：隅丸方形住居	同上
4	萱振A第1次	鎌倉前～中期：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』1987 (財)八尾市文化財調査研究会
5	萱振第16次	古墳後期：掘立柱建物	『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1995 (財)八尾市文化財調査研究会
6	萱振 (91-166)	古墳：周溝か	『八尾市文化財調査報告25』1992 八尾市教育委員会
7	萱振	弥生後期：掘立柱建物、庄内期：方形周溝墓群 古墳前期：萱振1号墳、中・後期：壺棺墓、土坑墓、土器棺墓 奈良：掘立柱建物	『萱振遺跡』『大阪府文化財調査報告書第39輯』1992 大阪府教育委員会
8	萱振第3次	古墳後期：萱振2号墳	『(財)八尾市文化財調査研究会報告20』1990 (財)八尾市文化財調査研究会
9	萱振	弥生中期：土器棺、古墳：壺棺	『萱振遺跡発掘調査概要Ⅱ』1984 大阪府教育委員会
10	萱振	古墳初頭：土器棺墓群	『萱振遺跡発掘調査概要Ⅰ』1983 大阪府教育委員会
11	萱振第8次	平安：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
12	萱振第12次	布留式期(古)：掘立柱建物、竪穴住居 布留式期(新)：方墳	『平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
13	東郷第21次	古墳初頭：方形周溝墓	『八尾市文化財調査報告13』1986 八尾市教育委員会
14	東郷第17次	庄内～布留式期：方形周溝墓	『(財)八尾市文化財調査研究会報告6』1985 (財)八尾市文化財調査研究会
15	東郷第14次	古墳前期：竪穴住居	『(財)八尾市文化財調査研究会報告17』1989 (財)八尾市文化財調査研究会
16	東郷第5次	庄内～布留式期：竪穴住居、掘立柱建物	『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』1983 八尾市教育委員会
17	東郷第8次	庄内～布留式期：竪穴住居、掘立柱建物	同上
18	東郷第11次	古墳前期：竪穴住居	『(財)八尾市文化財調査研究会報告17』1989 (財)八尾市文化財調査研究会
19	東郷第20次	庄内期：方形周溝墓、土坑墓	『(財)八尾市文化財調査研究会報告9』1986 (財)八尾市文化財調査研究会
20	東郷第22次	布留式期：掘立柱建物	『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』1987 八尾市教育委員会
21	東郷第24次	古墳中期：方形墳の周溝	『(財)八尾市文化財調査研究会報告29』1991 (財)八尾市文化財調査研究会
22	東郷第1次	平安前期：掘立柱建物	『八尾市文化財調査報告6』1981 八尾市教育委員会
23-1	東郷	鎌倉：掘立柱建物	『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要Ⅷ』1995 大阪府教育委員会
23-2	成法寺	鎌倉：掘立柱建物	同上
24	成法寺	庄内式期：円形周溝墓	『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1986 大阪府教育委員会
25	成法寺第4次	庄内式期(古)：方形周溝墓	『(財)八尾市文化財調査研究会報告33』1991 (財)八尾市文化財調査研究会

No.	遺跡名	遺構	文献
26	成法寺	古墳初頭：竪穴住居 古墳前期：竪穴住居、掘立柱建物	『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1987 大阪府教育委員会
27	成法寺	弥生中期：方形周溝墓 古墳前期：竪穴住居	『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ』1989 大阪府教育委員会
28	成法寺 (93-1)	中世：掘立柱建物	『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ』1994 大阪府教育委員会
29	成法寺	古墳中期：竪穴住居	『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ』1990 大阪府教育委員会
30	成法寺	古墳前期：方形周溝墓、古墳後期：掘立柱建物	『成法寺遺跡－八尾市光町1丁目29番地の調査－』1983 八尾市教育委員会
31	成法寺第5次	古墳前期：方形周溝墓、中期：円筒埴輪棺 後期：掘立柱建物群	『(財)八尾市文化財調査研究会報告35』1992 (財)八尾市文化財調査研究会
32	成法寺第2次	古墳後期：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告33』1991 (財)八尾市文化財調査研究会
33	成法寺第1次	飛鳥：方形住居	同上
34	成法寺第7次	飛鳥～奈良：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告51』1996 (財)八尾市文化財調査研究会
35	成法寺第3次	奈良：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告33』1991 (財)八尾市文化財調査研究会
36	小阪合第26次	古墳中～後期：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告61』1998 (財)八尾市文化財調査研究会
37	小阪合第4次	古墳中期：円筒埴輪棺	『(財)八尾市文化財調査研究会報告15』1988 (財)八尾市文化財調査研究会
38	小阪合第32次	奈良～平安：掘立柱建物	『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1997 (財)八尾市文化財調査研究会
39	小阪合第1次	奈良：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告10』1987 (財)八尾市文化財調査研究会
40	小阪合第3次	古墳前期：方形周溝墓	『(財)八尾市文化財調査研究会報告11』1987 (財)八尾市文化財調査研究会
41	小阪合第19次	古墳前期：竪穴住居、土器棺	『(財)八尾市文化財調査研究会報告41』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
42	小阪合第28次	弥生後期：方形周溝墓、土器棺	『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1995 (財)八尾市文化財調査研究会
43	矢作	古墳後期：掘立柱建物	『八尾市文化財調査報告16』1987 八尾市教育委員会
44	矢作第1次	平安後期～鎌倉末：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告22』1989 (財)八尾市文化財調査研究会
45	矢作	古墳前期(布留式期)：円形周溝墓	『八尾市文化財調査報告19』1989 八尾市教育委員会
46	中田第16次	古墳前～中期：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告43』1994 (財)八尾市文化財調査研究会
47	中田第29次	弥生後期末：方形周溝墓の周溝?	『(財)八尾市文化財調査研究会報告53』1996 (財)八尾市文化財調査研究会
48	中田 (91-293)	弥生後期末：方形周溝墓?	『八尾市文化財調査報告26』1992 八尾市教育委員会
49	中田第15次	弥生後期：方形周溝墓? 古墳中期：円筒埴輪棺	『(財)八尾市文化財調査研究会報告56』1997 (財)八尾市文化財調査研究会
50	中田第24次	平安末：掘立柱建物	『(財)八尾市文化財調査研究会報告49』1995 (財)八尾市文化財調査研究会
51	中田第8次	平安後期～室町：掘立柱建物	同上
52	東弓削	弥生中期：壺棺	『八尾市文化財調査報告15』1987 八尾市教育委員会

との交流が盛んであったことがわかる。

古墳時代前期（庄内式期～布留式期）では当遺跡周辺では集落規模の拡大と分散が顕著にみられる。小阪合遺跡では庄内式期の居住域と布留式期の墓域を確認している¹⁵⁾ (No41)。矢作遺跡では溝から布留式に比定される土器と共伴して銅鏡が出土した¹⁶⁾。中田遺跡では南部で、庄内式期古相の標準資料となっている土坑¹⁷⁾と弥生時代後期の土器集積¹⁸⁾を検出した。これらの遺構から出土した土器の大部分を吉備地方の土器が占めるといふ特異性が注目されている。萱振遺跡では北部でみつかった萱振1号墳 (No7) は前期後半に比定され、日本最大の靫形埴輪などが出土するなど、河内平野における前期古墳の様相や被葬者を知るうえで貴重な資料となっているほか、南部でみつかった後期後葉に比定される萱振2号墳 (No8) は同じ時期につくられた生駒西麓の古墳群と比較するうえで貴重な資料となっている。東郷遺跡では前期には居住域 (No15～18) を中心にして北側 (No13, 14) と南側 (No19) に墓域、生産域を検出している¹⁹⁾。成法寺遺跡では庄内式期の居住域と墓域 (No24・25)、布留式期の居住域、中期では墓域は不明であるが、(財)八尾市文化財調査研究会が行った第5次調査で埴輪円筒棺 (No31) がみついている²⁰⁾。埴輪円筒棺は小阪合遺跡 (No37)、中田遺跡 (No48) から出土している。東弓削遺跡では北部から中田遺跡南部にかけて弥生時代後期から古墳時代前期の居住域を確認している²¹⁾。後期では成法寺遺跡²²⁾ (No30～32) と矢作遺跡で掘立柱建物を検出している。矢作遺跡で検出した掘立柱建物は大型高床式建物でそれを巡る3重の溝も検出しており、物部氏の館跡と推定されるものである (No43)。

飛鳥時代 大和川は飛鳥・藤原・平城の都から遣隋使・遣唐使が派遣され、また大陸や朝鮮半島からの使者が通る道として利用された。またこの大和川流域には多くの寺塔が建てられ、本市域にも渋川廃寺、鞍作廃寺、高麗寺跡などが建てられた。小阪合遺跡では飛鳥時代、成法寺遺跡では飛鳥時代～奈良時代の遺構と遺物²³⁾ (No33・34) を検出している。白鳳時代に創建されたとされる西郡廃寺の南側に位置する萱振遺跡では、古墳時代後期から飛鳥時代の集落を検出していることから、建立氏族である錦織氏に關係する集落であった可能性が指摘されている²⁴⁾。東郷遺跡では東南部で大阪府教育委員会が行った調査において白鳳期の瓦が出土したことから、『東郷廢寺』として認識されるようになった²⁵⁾。

奈良～平安時代 当遺跡周辺では奈良時代の遺構は希薄である。洪水によって削平されてしまった可能性がある。しかし当遺跡を含む地域一帯において条里制施行のための土地整備が行われたようである。小阪合遺跡では旧楠根川^{くすね}の西側で奈良時代の遺構・遺物が多くみつかっており²⁷⁾ (No38・39)、集落は川の西側に広がるものと考えられる。萱振遺跡では奈良時代の集落と平安時代の集落がみついている²⁸⁾。成法寺遺跡では自然河川や井戸などから墨書人面土器や土馬などの祭祀関連遺物が出土している²⁹⁾。中田遺跡では集落を検出している (No50)。東弓削遺跡一帯は『続日本紀』に記されている西ノ京 (由義宮) のほか弓削寺が推定されている地域である³⁰⁾。

中世 小阪合遺跡では平安時代末から連綿と集落が営まれている³¹⁾。萱振遺跡は八尾に通っている中世の6つの主要街道のうち、河内街道と十三嶺道の分岐するところに立地しており、遺跡内の北部でこの街道に沿って成立したと思われる集落を検出している³²⁾ (No4)。東郷遺跡では中央南部で居住域から生産域への移行が確認されている (No23-1)。成法寺遺跡では平安時代後期の居住域、鎌倉時代の居住域 (No23-2・28) を検出している。矢作遺跡では平安時代後期～鎌倉時代末の一般の集落にはみられない特異な池状遺構や井戸がみついている³³⁾ (No44)。中田遺跡では瓦集積遺構などがみつかっており、地区内に現存する善坊寺の旧跡であると推測されている³⁴⁾。東弓削遺跡では中央東部から南部にかけて鎌倉時代以降の生産域を検出している³⁵⁾。

第2節 文献史料からみた小阪合遺跡とその周辺

はじめに 奈良時代以前の正史を記した『日本書紀』によれば、河内地域は狭山池や茨田堤^{まんた}の築造と
いった王権主導の開発行為、茨田屯倉・依羅屯倉^{よさみ}・桜井屯倉といった屯倉の設置などがあり、古くから
王権とは密接な繋がりがあったという。

ここでは、第IV章で詳述するように多量の奈良・平安時代の資料が出土したため、文献史料を中心に
奈良時代の河内国の様子に触れておこうと思う。

位置 小阪合遺跡は律令制下の河内国のほぼ中央、若江郡内に所在する。文献史料における若江郡の
初現は、和銅2年(709)7月25日付けの『弘福寺田畑流記帳』にみえる「河内国若江郡田壺拾貳町陸段
壺百肆拾歩」や、『続日本紀』(以下『続紀』)養老4年(720)6月27日条にある「河内国若江郡人正八位
上河内手人刀子作広麻呂、改賜下村主姓、免雑戸号」である。³⁸⁾

郡域は、東西及び南を旧大和川とその支流玉串川に、北は河内湖といった自然地形で画されていた可
能性が高く、西には渋川郡が、東には河内郡・高安郡・大県郡が、南には志紀郡がそれぞれ接する。
『和名類聚抄』(以下『和名抄』)によると、郡内は川俣郷・新治郷・錦織郷・巨麻郷・刑部郷・弓削
郷・余戸郷に分れ、『大阪府の地名』は東郷村を巨麻郷に、小阪合村を刑部郷に比定する。当遺跡は両
村の中間に位置し、中央を楠根川が北流する。³⁹⁾

隣接する諸郡 『和名抄』によると、若江郡と旧大和川を挟んで西接する渋川郡は5郷(竹瀨郷・邑
智郷・跡部郷・賀美郷・余戸郷)、玉串川を挟んで東接する河内郡は8郷(日下郷・大戸郷・額田郷・
豊浦郷・大宅郷・桜井郷・新居郷・英多郷)、高安郡は4郷(玉祖郷・三宅郷・掃守郷・坂本郷)、大
県郡は6郷(大里郷・津積郷・鳥坂郷・鳥取郷・賀美郷・巨麻郷)からなる。さらに南接する志紀郡は
8郷(邑智郷・田井郷・新家郷・拝志郷・長野郷・志紀郷・土師郷・井於郷)で構成する(図3)。な
お大県郡は、養老4年(720)に堅下郡・堅上郡の2郡を併合したものである(『続紀』養老4年(720)
11月27日条)。

6郡を比較すると、8郷からなる河内郡・志紀郡(中郡)を筆頭に、7郷の若江郡(下郡)が続き、
6郷の大県郡(下郡)、5郷の渋川郡(下郡)、4郷の高安郡(下郡)と、郡を構成する郷数に差異があ
る。この中で河内郡は、面積的に若江郡・渋川郡・志紀郡と大差はなさそうだが、構成する郷数が最も
多く、逆に渋川郡は面積の割には郷数が少ない。

氏族分布 有力豪族物部連は、物部守屋が大和川沿いの阿都・渋川に屋敷を構えていたこと(『日本
書紀』)、守屋の所領が弓削・衣摺など8ヶ所に及んでいた(『聖徳太子伝暦』)ことから、若江・渋川郡
に本拠を置いていたのであろう。その周辺には、弓削連などの同祖伝承をもつ氏族が多い。

『新撰姓氏録』によると、渡来系氏族総数124氏のうち72氏が河内に本貫をもち、後の郡大領として
有力在地首長となったものや、文筆をもって官僚的氏族となったもの、あるいは馬飼関係の氏族が多い。
つまり中央権力が河内を掌握するために、意識的に配置した可能性がある。

なお若江郡は構成する郷名からみて、弓削連のほか刑部造・錦部連・川跨連・大伯連・長田使主など
が居住していたと考えられる。

政治的動向 天智天皇2年(663)の白村江敗戦後、九州・瀬戸内海沿岸・畿内各所に朝鮮式山城を
構築し、防御体制を固めた。河内には生駒山地南端の標高488mの高安山頂に高安城を築城する。この
山城は、『続紀』文武天皇2年(698)6月20日条や、翌年9月15日条に修理記事があるが、大宝元年

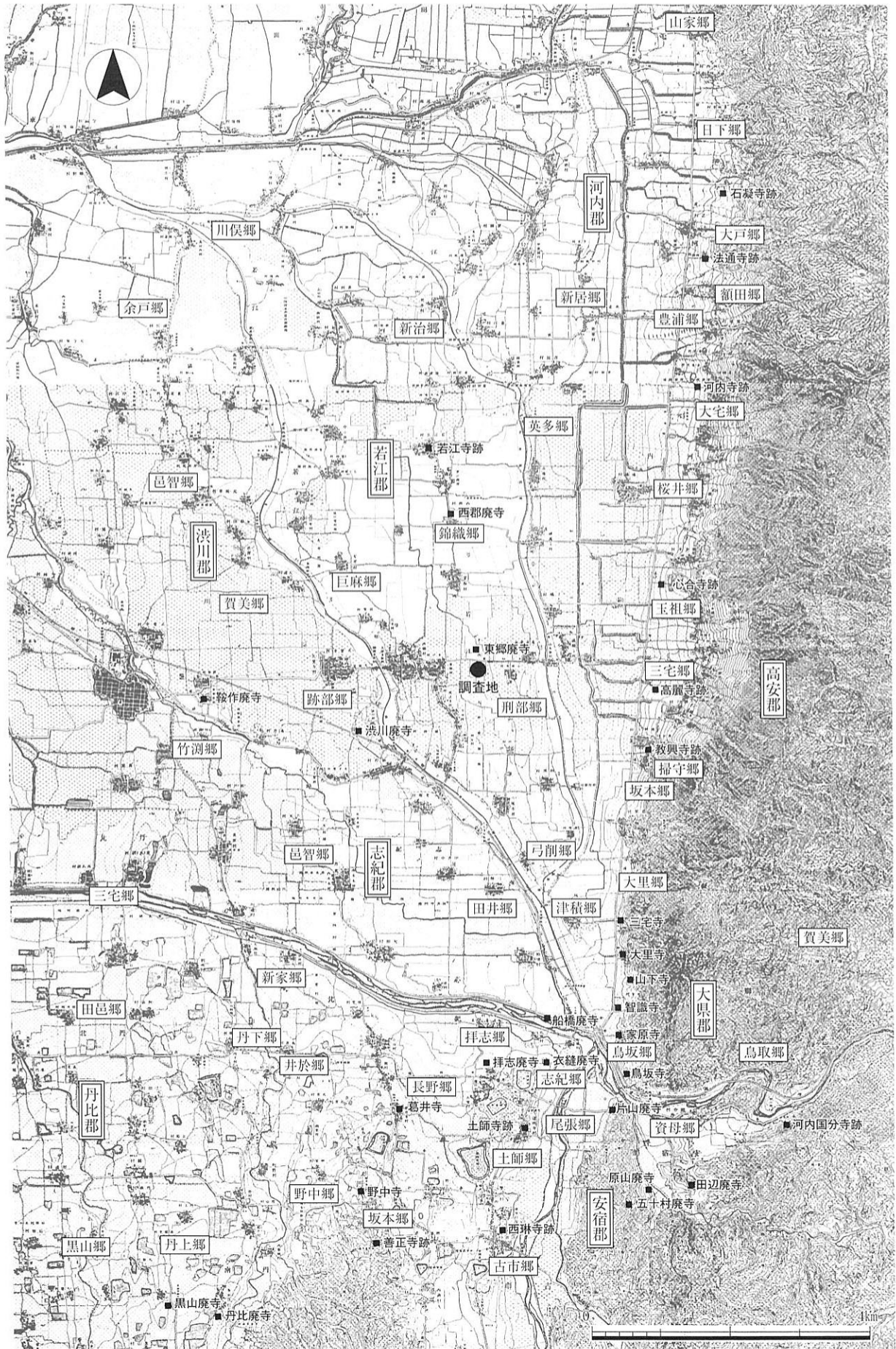


図3 中河内地域の旧郡郷域

(701) 8月25日条には「廢高安城、其舍屋雜儲物、移貯于大倭河内二国」と廢城を伝える。しかし同城にあった高安烽は和銅5年(712)まで存続し(『続紀』和銅5年正月23日条)、同年8月には廢城後にもかかわらず元明天皇の行幸があった(同年8月23日条)。なおこの高安城は、1978年に倉庫跡と思われる礎石群が発見されている⁴⁰⁾。

中河内地域は奈良時代平城京と難波を結ぶ交通の要衝にあり、『続紀』では歴代天皇の行幸記事がたびたび登場する。また若江郡弓削出身の道鏡との関連記事も多い。前者には、河内郡の桜井頓宮(天平16年閏正月11日条)、大県郡の竹原井頓宮・茨田宿禰弓束女宅行宮・智識寺南行宮・智識寺行宮、若江郡の弓削行宮がある。

大県郡竹原井頓宮の初現は、『続紀』養老元年(717)2月19日条にある元正天皇の「車駕還、至竹原井頓宮」で、それ以降『続紀』は天平6年(734)3月17日条(聖武天皇)・同16年10月11日条、宝亀2年(771)2月21日条(光仁天皇)にわたって登場する。竹原井頓宮は、現在のところ柏原市所在の青谷遺跡に比定する説が有力である一方⁴¹⁾、調査成果と文献史料との非整合性を指摘する説もある⁴²⁾。

他の大県郡例は、天平勝宝元年(749)聖武天皇が大県郡の智識寺に行幸し茨田宿禰弓束女の宅を行宮としたもので、この時智識寺を参詣し盧舎那仏をみて大仏建立を發願したという。天平勝宝8歳(756)2月24日条にみえる智識寺南行宮(孝謙天皇)あるいは同年4月15日条の智識寺行宮(同天皇)とは、弓束女宅を整備したものかもしれない。なお2月の智識寺南行宮行幸の際には、河内六寺と称される三宅・大里・山下・智識・家原・鳥坂寺に参詣している。

若江郡の事例は、天平神護元年(765)10月の称徳天皇の紀伊国行幸に際して同月27日新治行宮、同月29日弓削行宮に幸し、弓削寺を参詣したというものである。その直後弓削寺は食封200戸を与えられ、道鏡は太政大臣禪師となる。今回を含め称徳天皇の弓削行幸記事は、崩御する宝亀元年8月までに2回ある(神護景雲3年10月17日条)。

若江郡弓削郷出身の道鏡関連記事は、天平宝字7年9月4日道鏡少僧都任命以後、失脚し死去する宝亀3年までの9年間頻繁に『続紀』に登場する。その後弓削行宮は由義宮と称される。神護景雲3年(769)10月30日条によると由義宮を西京と改め、河内国を河内職とし、河内国の大県・若江2郡の田租、安宿・志紀2郡の田租の半ばを免除し、従四位上藤原朝臣雄田麿を河内大夫に任じた。さらに宝亀元年(770)正月12日条では、大県・若江・高安等の百姓宅のうち由義宮域に入る者に宅地の佃を酬ったという。称徳天皇は、同年2月27日から4月6日まで由義宮に行幸し、4月1日には内蔵忌寸若人を造由義大宮司次官に任命、4月5日由義寺の塔造営関係者に位階を加えた。同年7月22日条の志紀・茨田等の堤の修理記事は、由義宮を水害から守るための修理の可能性がある。

由義宮の造営とともに道鏡は一族を優遇する。神護景雲3年10月30日条は、道鏡の弟正三位弓削御浄朝臣清人を従二位、爵一級、清人の息子従五位上弓削朝臣広方を正五位下、同じく息子の无位弓削御浄朝臣広津を従五位下など弓削一族の昇級を記述する。さらに宝亀元年4月11日条「従五位上弓削宿禰牛養等九人賜姓弓削朝臣。外従五位下弓削連耳高等卅八人宿禰。外従五位下美努連財刀及正八位上矢作造辛国賜姓宿禰。未經歲月、皆復本姓。」と、道鏡と関係の深かった氏族まで改姓したことがわかる。

しかし由義宮行幸から帰還した称徳天皇はまもなく病に臥し、8月4日崩御する。主を失った道鏡は、8月21日白壁王(光仁天皇)の令旨により即日造下野国薬師寺別当に追放され、翌日道鏡の弟弓削浄人、浄人の子広方・広田・広津は土佐国へ配流される。さらに宝亀元年8月26日には、西京廢止に伴う処置として河内職を河内国に復したという。道鏡は宝亀3年4月6日死去し、弓削浄人・広方・広田・広津

等は、天応元年（781）6月18日土佐国配流を解かれ本貫地に帰還したが、入京は許されなかった。

自然災害 河内地域は他地域に比べ自然災害記事が多い。『統紀』にみえる河内国の飢饉記事は、慶雲3年（706）2月16日条以下宝亀5年（774）5月4日条にいたるまで7件あり、同書に記載された淀川・大和川水系の堤防決壊記事は、天平勝宝2年（750）5月19日条以降延暦4年（785）10月27日条にいたるまで4件を数える。

その他 奈良時代中河内地域には、法隆寺領（志紀郡・洪川郡・讃良郡など）、四天王寺領（洪川郡・若江郡など）といった荘園が設置されていた。

このように中河内地域は、難波津と平城京を結ぶ主要交通路上に位置したこと、道鏡・由義宮との関係から、他国に比べ頻繁に『統紀』に登場する。しかし道鏡失脚以降は、長岡京・平安京遷都の影響で交通の要衝としての地位を失い、『日本後紀』以降の正史にはほとんど姿をみせなくなる。

註

- 1 梶山彦太郎・市原実「大阪平野の発達史—C年代データからみた—」『地質学論集第7号』1972
- 2 『(財)八尾市文化財調査研究会報告28』1990 (財)八尾市文化財調査研究会
- 3 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度』1989 (財)八尾市文化財調査研究会
『八尾市文化財調査研究会報告54』1996 (財)八尾市文化財調査研究会
- 4 「(財)八尾市文化財調査研究会報告49」『中田遺跡』1995 (財)八尾市文化財調査研究会
- 5 「平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告35』1992
(財)八尾市文化財調査研究会
- 6 「八尾市文化財調査研究会報告39」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
- 7 註2に同じ
- 8 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
- 9 「(財)八尾市文化財調査研究会報告52」『萱振遺跡』1996 (財)八尾市文化財調査研究会
- 10 広瀬雅信「萱振遺跡を調査して」『(財)八尾市文化財調査研究会報告21』1989 (財)八尾市文化財調査研究会
- 11 『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要Ⅸ』1997 大阪府教育委員会
- 12 『成法寺遺跡発掘調査概要Ⅴ』1990 大阪府教育委員会
- 13 「成法寺遺跡—八尾市光町1丁目29番地の調査—」1983 八尾市教育委員会
「平成4年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告書35』1992
(財)八尾市文化財調査研究会
「八尾市文化財調査研究会報告39」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
- 14 「八尾市文化財調査報告17」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』1988 八尾市教育委員会
- 15 註6に同じ
- 16 「八尾市文化財調査報告15」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』1987 八尾市教育委員会
- 17 『八尾市文化財調査報告7』1981 八尾市教育委員会
- 18 『(財)八尾市文化財調査研究会報告43』1994 (財)八尾市文化財調査研究会
- 19 『八尾市埋蔵文化財調査概要—1980・1981年度—』1983 八尾市教育委員会
「昭和60年度事業概要報告」『(財)八尾市文化財調査研究会報告8』1986 (財)八尾市文化財調査研究会
- 20 「(財)八尾市文化財調査研究会報告51」『成法寺遺跡』1996 (財)八尾市文化財調査研究会

- 21 「(財)八尾市文化財調査研究会報告22」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』1989 (財)八尾市文化財調査研究会
- 22 註20に同じ
- 23 『(財)八尾市文化財調査研究会報告26』1990 (財)八尾市文化財調査研究会
- 24 註20に同じ
- 25 註9に同じ
- 26 『八尾市文化財紀要7』1995 八尾市教育委員会文化財課
- 27 註6に同じ
- 28 註9に同じ
- 29 註20に同じ
- 30 「(財)八尾市文化財調査研究会報告61」『小阪合遺跡』1998 (財)八尾市文化財調査研究会
- 31 註6に同じ
- 32 註9に同じ
- 33 「(財)八尾市文化財調査研究会報告48」『東郷遺跡』1995 (財)八尾市文化財調査研究会
- 34 『成法寺遺跡発掘調査概要・VI』1992 大阪府教育委員会 註20に同じ
- 35 註21に同じ
- 36 「(財)八尾市文化財調査研究会報告61」『中田遺跡』1998 (財)八尾市文化財調査研究会
- 37 註14に同じ
- 38 『続日本紀』1～5 新古典文学大系 1989・1990・1992・1995・1998 岩波書店
- 39 『大阪府の地名』日本歴史地名大系28 1986 平凡社 なお、余戸郷は比定地不明のため、図3には記入していない
- 40 『夢ふくらむ幻の高安城(第3集)』1978 高安城を語る会
- 41 「青谷廃寺」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1984年度』1985 柏原市教育委員会
- 42 安村俊史「竹原井頓宮と青谷遺跡」『ヒストリア』148 1995 大阪歴史学会

第Ⅲ章 調査・整理の方法

第1節 調査の方法

調査区の位置 小阪合遺跡は、大阪府八尾市若草町・小阪合町・南小阪合町・青山町・山本町南にまたがる。今回報告する小阪合遺跡98-1～7区は、八尾市若草町に位置する。

調査区の呼称 掘削残土の場内仮置き及び遺構面レッカー撮影の関係上、調査区を東側から機械的に7分割し、それぞれを「小阪合遺跡98-○区」と称した。なお98-5区では、多量の和同開珎が出土したため、協議を重ねて5区南側を可能な限り拡張し調査を実施した。この部分を98-5区拡張部とする。

地区割り 本書では、当センターの前身の一つである（財）大阪文化財センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」に則り、国土座標第Ⅵ系を基準として使用する。まず第Ⅰ区画として1/10000地形図で府下全域を縦6km・横8kmを1区画として分割する。その際南西端を基点として、縦軸A～O・横軸0～8で表示する。第Ⅱ区画は、大阪府が発行する1/2500地形図を利用し、第Ⅰ区画を縦1.5km・横2.0kmに16分割する。南西端を1、北東端を16と表示する。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15・横20に区分し、北東端を基点に縦a～j・横1～10となる（図4）。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を5m単位に4分割したもので、北東側をⅠ・北西側をⅡ・南東側をⅢ・南西側をⅣと表示する。第Ⅴ区画は、遺物を取り上げる際の基準となる。

方位 地区割同様に国土座標に則り、座標北を採用した。磁気の偏角は時につれて変化するが、調査時点で調査区の座標北は、磁北より東へ6°40′、真北より西へ13°14′振れていた。

高さ 東京湾平均海面（T.P.）を適用した。

面と層の呼称法 機械掘削完了後、人力によって調査される最初の面を第Ⅰ面と呼び、以下順に面の番号を付す。層名は第Ⅰ面と第Ⅱ面との間の層を第Ⅰ層とし、面と同様順に番号を与える。ただし今回の調査では、機械掘削停止面から第Ⅰ面までの層を人力掘削したので、これを第0層と称する。なお本書での「第○層」とは、あくまでも掘削と遺物取上げの単位であり、それが土層観察結果「○層」に細分されることもある。

遺構番号 当センターのもう一つの前身である（財）大阪府埋蔵文化財協会の「発掘調査規程」に一部則り、遺構番号は遺構の種類に関わらず発見順に1から連番とした。現場で検出した遺構は953基である。「規程」と異なる点は、遺構番号の後に独自の記号を用いて各種遺構を表記したのに対し、今回は遺構を漢字で表現し続けて遺構番号を付したことである。調査は、おおよそ98-1区・5区・2区・5区拡張部・4区・6区・3区・7区の順に行ったので、遺構番号もそれにしたがって付与した。

遺物の取上げ 遺構出土遺物は検出遺構ごとに、包含層出土遺物は「第○層」ごとに、地区割りで設定した5×5m単位で取り上げたが、必要に応じて出土位置を3次元で記録した。遺物登録番号は取上げ単位ごとにつけた。

図面作成 面ごとの調査区全体図は、主として航空測量で、必要に応じて平板測量で、縮尺1/20～1/200で作成した。土層断面図は1/20で作成し、単独の遺構平・断面、遺物出土状況などは任意に図化した。

各種分析 花粉分析、プラント・オパール分析、放射性炭素年代測定について委託し、土器に付着した布目痕、動物遺体、植物遺体については原稿を依頼した。

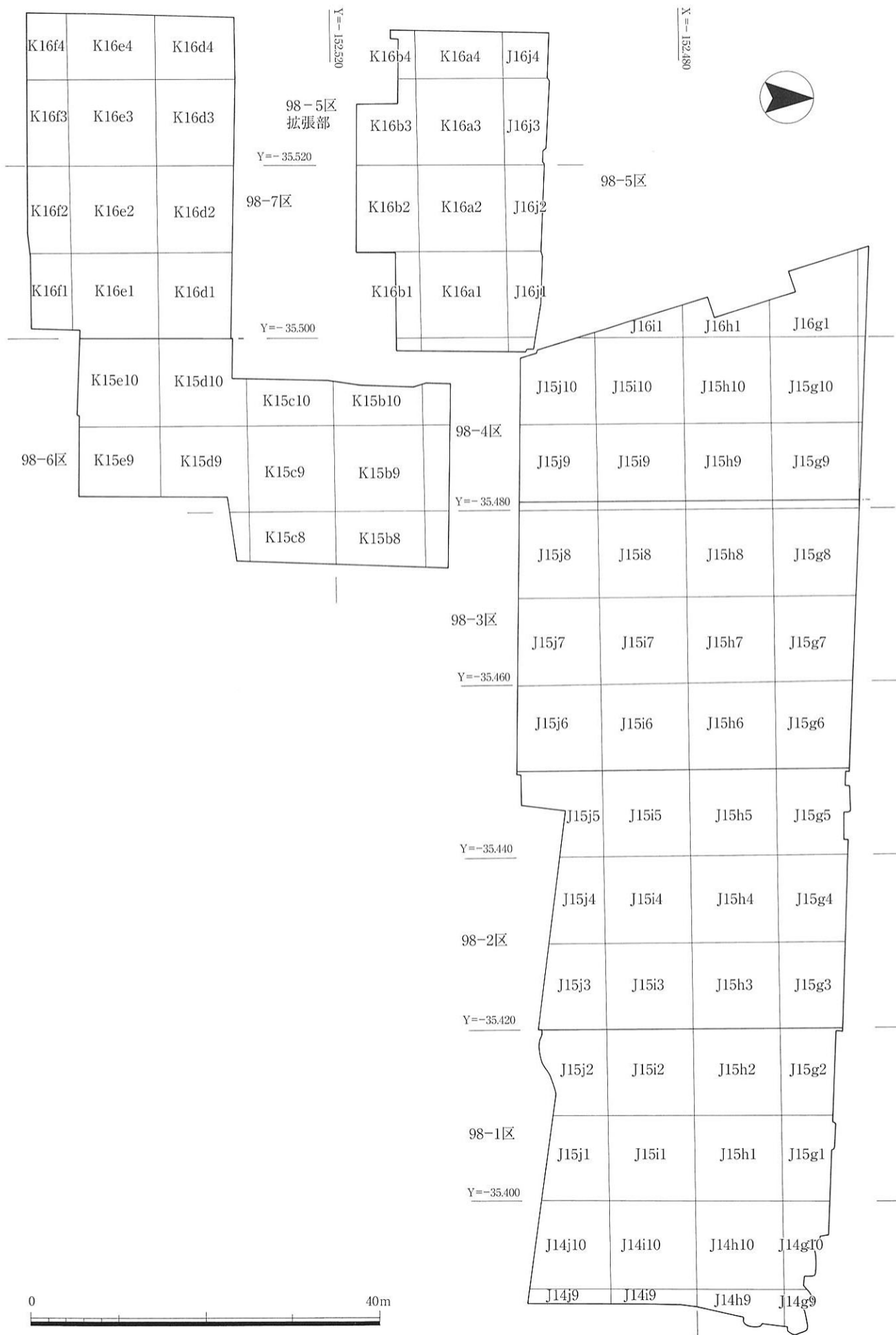


図4 調査地区割り図

第2節 整理の方法

整理作業は現場作業を終了後ただちに開始した。洗滌・注記を終えた出土遺物については、登録番号ごとに器種分類を行い破片数を数え、必要と判断した遺物については復元ののち実測を行った。実測対象遺物は、原則的に口縁部（あるいは底部）1/6以上残存するものとしたが、特に重要と認めたものについてはそれ以下の遺物も実測した。

層序・遺構全般は本間が、第Ⅲ面川200・719出土奈良～平安時代土器は松田が、第Ⅲ面落込み416出土遺物は陣内が、その他の遺物は駒井がそれぞれ整理を担当し、調査補佐員・同補助員がこれを助けた。本来ならば最初に各種土器の分類基準を明示し記述を進めるべきところであるが、各担当者の意向を尊重したため、記述方法に些か不統一が生じたものの、敢えて統一は図らなかった。なお主要遺物の編年観（あるいは年代観）は以下の文献によった。

- | | |
|------------|---|
| 庄内式～布留式土器 | 原田昌則「Ⅱ 久宝寺遺跡（第1次調査）」
『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』1993 (財)八尾市文化財調査研究会 |
| 古墳時代中～後期土器 | 辻 美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」
『国家形成期の考古学』1999 大阪大学文学部考古学研究室 |
| 須恵器 | 中村 浩『陶邑Ⅲ』1978 大阪府教育委員会
田辺昭三『須恵器大成』1981 角川書店 |
| 奈良時代土器 | 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976 奈良国立文化財研究所 |
| 平安時代土器 | 佐藤 隆「平安時代における長原遺跡の動向」
『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ』1992 (財)大阪市文化財協会 |
| 施釉陶器 | 『平安京右京三条三坊』1990 (財)京都市埋蔵文化財研究所 |
| 瓦器埴 | 尾上 実「南河内の瓦器埴」
『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』1983 同刊行会 |

第Ⅳ章 調査成果

第1節 層序

第Ⅰ章でも触れたように、今回の小阪合遺跡の調査は、老朽化した公団住宅の建替えに伴うものである。既設の住宅の地盤高は、都市基盤整備公団から提供された図面によると、調査範囲の東部でT.P.+7.9～8.2m、西部ではT.P.+8.1～8.3mであった。

発掘調査着手以前に、基盤整備事業として、既設の住宅を撤去しその基礎や埋管などの攪乱を重機で除去した。その掘削深度は行政判断によりT.P.+7.3mまでとされた。

発掘調査として、現場担当者に指示された深度は、このT.P.+7.3mから下15cmを機械掘削、その下層85cmを人力による調査で、一応T.P.+6.3mまでであった。実際には、基盤整備事業ですでに遺物包含層の露出している部分については即人力による調査にかかった。また小阪合遺跡は沖積地に立地するため、いわゆる地山まで調査するならばなお数mの掘削が必要となるので、調査の期間と費用を勘案しながら、T.P.+6.3mより下層についても極力掘り下げを行った。

小阪合遺跡は、大和川の支流で大阪府柏原市役所付近からおおむね北北西に流れる楠根川流域に位置する。周辺の発掘調査成果から今回の調査範囲にも楠根川旧河道の埋没が予想されたので、調査範囲が南北に比べ東西幅が広いことと旧河道にほぼ直交することから、調査範囲全域の断面を東西方向に設定した。

調査範囲西部の98-5・7区の一部では、発掘調査に着手したT.P.+7.3mで平安時代の遺構面（第Ⅰ面）が露出していた。一応の調査限界深度のT.P.+6.3mまでに、98-7区では弥生時代にまで遡る遺構面を6面調査し、さらに井戸の調査に伴って掘り下げた部分ではT.P.+3.5mの黒色土壌化層までを認めた。98-5区西半部でも98-7区と同一面を上層から4面調査し、その下層でもトレンチ調査により98-7区と同様の堆積状況を確認した。

一方、調査範囲中央～東部にあたる98-5区東半部および98-6区以東では、機械掘削の後さらに0～50cm程を人力で掘り下げ、まず古墳時代から平安時代までの遺構面（第Ⅲ面）を検出した。この面はT.P.+6.7～7.2mをはかるが、旧公団住宅の建っていた現地盤と同様に東に低く西に高くなっていた。第Ⅲ面の下層には最厚40cm程度の包含層が存在する。その下層は基本的に楠根川旧河道と考えられる砂層で、予定より深く掘り下げた98-2区ではおよそT.P.+2.7mで川底を検出した。その砂層は確認できた範囲内で最厚4.4mに及ぶ。

今回の調査面積は約6135㎡。この範囲内に掘り上げた土を仮置き、また重機や測量用の大形クレーン車の通路を確保する必要から、調査区を7分割した。工程上の都合により調査範囲の東端の98-1区と西端の98-5区から調査に着手したが、検出順に遺構面の番号を与えたために、結果的に98-1・2・3・4・6区と98-5・7区とでは同一面に異なる番号がついてしまった。

そこで本報告にあたって、表20・21に示すように遺構面をローマ数字の第Ⅰ～Ⅷ面に整理しなおし、包含層についても同様に第0～Ⅶ層と呼ぶ。したがって、ローマ数字の各層はあくまでも遺構面と遺構面の間の調査時の掘削作業の単位である。土層観察の結果細分された堆積層は○付き数字（①～⑫層）で表し、同一層でも調査地点により層相が微妙に異なる場合には○付き数字の後にカタカナを付けて細分した。また、この断面で観察できた遺構の埋土はアルファベットで表示する（A～M層・ただしI



図5 土層断面模式図

(7イ) は I (イ) と紛らわしいので欠番とする)。

なお、第V層の砂層を中心として、松田順一郎氏に詳細な観察をしていただいたので、その成果を第VII章第1節に掲載する。

第0層 基盤整備事業で水平に削られたT.P.+7.3mから第I面までの層。掲示した断面図には現れないが、調査範囲の西部98-5区の大部分と98-7区北西部で人力掘削した。

98-5区北西部では10YR5/3にぶい黄褐色、同南西部から98-7区では2.5Y5/2暗灰黄色を呈する細砂まじりシルトである。

第I層 (①層) 第I面と第II面との間の層。第0層と同様の分布範囲をもつ。調査できた層厚は10cm程度。

98-5区北部では10YR4/1褐灰色細砂まじりシルト、同南部では7.5YR4/1褐灰色シルト。98-7区では10YR4/2灰黄褐色シルト。

土色帖に照らすとそうでもないが、当遺跡の土層のなかではかなり黒味が強い。

第II層 (②~④層) 98-1・2・3・4・6区では機械掘削停止面から最初に検出した第III面までの層、98-5・7区では第II面と第III面との間の層で、調査区ほぼ全域に分布する。層厚は20~30cmの部分が広いが、98-1区東部では50cmに及ぶ。

98-7区のA層は、第I面または第II面から掘り込まれた土坑の埋土と考えられる。2.5Y3/2黒褐色シルト。B層は、側溝にかかったため平面的には検出していないが、第II面の土坑埋土である。2.5Y4/1黄灰色シルトで、完形の瓦器塚が出土した。C層は第II面溝569埋土で、2.5Y6/4にぶい黄色シルト~粗砂。98-3区のD層は、第II面より上層から掘り込まれた遺構の断面で、検出径約60cm、深さ33cmをはかる。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト。

98-1区では上層(②層)は2.5Y5/1黄灰色粘土、下層(④イ層)は10YR5/4にぶい黄褐色シルトにマンガンの沈着がみられる。98-2区西部から98-3区東部にかけては、10YR4/3にぶい黄褐色シルト(④ロ層)。98-4区では上部の一部に5Y5/1灰色シルト(③層)がみられるが、98-3区西部から98-4区にかけては基本的に10YR5/3にぶい黄褐色シルト(④ハ層)である。98-5区北部では10YR4/2灰黄褐色、同南部では10YR5/2灰黄褐色。98-6区では10YR3/4暗褐色(④ニ層)で、98-7区北部では10YR5/3にぶい黄褐色、同南部では10YR4/3にぶい黄褐色(④ホ層)。④層は、範囲が広いために色調は微妙に異なるものの、ほぼ同系色のシルト層である。

第III層 (⑤層) 第III面と第IV面との間の層。第II層同様、ほぼ全域に分布する。層厚は20~40cmの部分が広いが、98-6区の一部では70cmに及ぶ。

98-3区のE層は、第III面落込み416の埋土である。10YR4/2灰黄褐色シルトで、土師器と須恵器が大量に出土した。その下層のF層は、調査時には第III層として掘削したが、断面などを検討した結果、落込み416と一連のものと認識した。ただし、E層とは異なり遺物の大多数は土師器に限られる。Fイ層は2.5Y5/4黄褐色シルト、Fロ層は2.5Y6/2灰黄色細砂、Fハ層は5Y5/2灰オリーブ色細砂。98-4区のG層は、第III面のピットと考えられる。2.5Y6/1黄灰色シルトである。H層は第III面落込み341埋土で、2.5Y5/1黄灰色粘土。98-7区J層は、第III面川719の埋土である。N4/0灰色細砂~シルトでラミナがみられた。

98-1区の東部では7.5YR6/8橙色細砂まじりシルトで、鉄分の沈着がみられ、下に行くほど砂質となる(⑤イ層)。同西部では10Y6/3にぶい黄橙色細砂まじりシルト(⑤ロ層)。98-2区では10YR5/3

にぶい黄褐色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトの小斑がまじる (⑤ハ層)。98-3区では、第Ⅲ面落込み416の東側が10Y6/4にぶい黄橙色シルト (⑤ニ層)、西側が10Y5/4にぶい黄褐色シルト (⑤ホ層)。98-4区では、中央部が10YR6/4にぶい黄橙色シルト～細砂 (⑤ヘ層)、第Ⅲ面落込み341の周辺では10YR6/3にぶい黄橙色粘土～シルト (⑤ト層)。98-6区では10YR4/3にぶい黄褐色シルトだが、層の厚い部分ではそれに10YR3/1黒褐色シルトのブロックがまじる (⑤チ層)。98-7区では10YR3/3暗褐色粗砂まじりシルト (⑤リ層)。

第Ⅲ層 (⑤層) は、第Ⅱ層の④層に比べると土質・土色ともに場所による変異が大きい。

第Ⅳ層 (⑥～⑦層) 第Ⅳ面と第Ⅴ面との間の層。調査範囲東部、すなわち98-1区の全域、98-2区の南西部を除く大部分、98-3区の北東部のごく一部でのみ分層した。層厚30～40cmだが、98-2区の一部では60cmに達し2層に細分できる。

基本的に2.5Y5/1黄灰色シルトで、98-1区では一部に粗砂がまじり (⑦イ層)、同区西部から98-2区にかけては水平方向のラミナが観察できた (⑦ロ層)。層の厚い部分では上半が10YR6/6明黄褐色粘土～シルト (⑥層) となる。また98-2区では、下層からの噴砂に⑦層が切られている部分や、下層になるにつれて2.5GY4/1暗オリーブ灰色に変化し西下がりのラミナが下層に入り込んでいる部分 (⑦ハ層) もみられる。

この第Ⅳ層は、下層の第Ⅴ層と同様に旧楠根川の河川堆積に由来すると考えられる。

第Ⅴ層 (⑧～⑨層) 第Ⅴ面と第Ⅵ面との間の層。98-6・7区の境から98-5区の中央部に向けて北北西にはしる旧河道西岸から東に堆積し、楠根川旧河道に相当すると考えられる。基本的に砂層だが、色調やラミナの方向は部分により大きく異なる。

川底を確認できた98-2区での層厚は4.4mに及ぶ。98-1・2・3・4区の全域と98-6区の大部分ではこの層までの調査に止まった。

98-3区のK層は、第Ⅴ面溝549の埋土で、10YR4/2灰黄褐色シルト。

第Ⅴ面の川、98-5区川200の東部と98-4区川410と98-6区川415とは、調査区が複数に分かれたため別番号を与えたが、同一の古墳時代の川である。したがって、98-4区L層と98-6区M層とは、断面図を記録した位置が南北に約70mも離れているために堆積土の状態は若干異なるが本来は同じ川の埋土である。98-4区川410の埋土 (L層) は3層に分かれた。Lイ層は10YR4/6褐色粗砂まじりシルト、Lロ層は5Y4/1灰色粗砂まじりシルト、Lハ層は西下がりのラミナがみられる2.5Y7/2灰黄色細砂。一方98-6区川415の埋土 (M層) は2層に分かれる。Mイ層は10YR3/1黒褐色シルト、Mロ層は7.5YR5/4にぶい褐色細砂。

98-4区第Ⅴ面川410埋土 (L層) のすぐ下層には、2.5Y6/3にぶい黄色細砂が堆積し、西下がりのラミナがみられる (⑧イ層)。他方、98-6区第Ⅴ面川415埋土 (M層) のすぐ下層には、10YR6/2灰黄褐色細砂に、⑧イ層と同様に西下がりのラミナがみられる (⑧ロ層)。

98-1区から98-2区東部にかけては2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂 (⑨イ層) を基本とするが、2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～細砂・2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂・N4/0灰色シルト～細砂などの東下がりラミナ (⑨ロ層) や、2.5Y6/2灰黄色細砂～粗砂・N4/0灰色シルト～細砂などの西下がりラミナ (⑨ハ層) が、明瞭に観察できる部分もある。98-2区西半では、ラミナは不明瞭ながらほぼ水平の2.5Y5/3黄褐色粗砂 (⑨ニ層) を基本とし、上部には10YR5/4にぶい黄褐色や2.5Y5/4黄褐色を呈する東下がりの細砂によるラミナ (⑨ホ層) がみられる。98-3区東半では10YR5/4にぶい黄褐色細砂～粗

砂・10YR6/2灰黄褐色シルト～細砂・10YR5/6黄褐色粗砂（⑨へ層）が、西半では10YR6/6明黄褐色細砂・10YR5/3にぶい黄褐色細砂～粗砂・10YR6/1褐灰色粗砂（⑨ト層）が、それぞれほぼ水平のラミナをなす。98-4区東半では、10YR5/4にぶい黄褐色細砂～粗砂を基本とし、ラミナが認められる（⑨チ層）。98-6区⑧口層の下層では、10YR6/3にぶい黄橙色細砂～粗砂からなるラミナだが、下層に向かって粒径が大きくなり最下部には礫もまじる（⑨リ層）。

第VI層（⑩層） 第V層により埋没した旧河道の西岸陸地部分にあたる。したがって、98-5区西半部・98-6区南西隅・98-7区全域でのみ調査した。層厚は98-7区で約20cm。

98-5区北西部ではグライ化の影響か5G4/1暗緑灰色粘土、同南西部では10YR5/4にぶい黄褐色シルト。98-7区では10YR4/4褐色シルト（⑩層）。

第VII層（⑪層） 98-7区でのみ調査した。厚さは3～12cm程しかないが、5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～細砂のいわゆる黒色土壌化層。上面のT.P.+6.5～6.7mで水田を検出した。

第VIII層（⑫層） 98-7区の側溝で観察した。5G4/1暗緑灰色シルト～細砂。T.P.+5.9mまでは断面記録したが、さらにその下層に及ぶ。

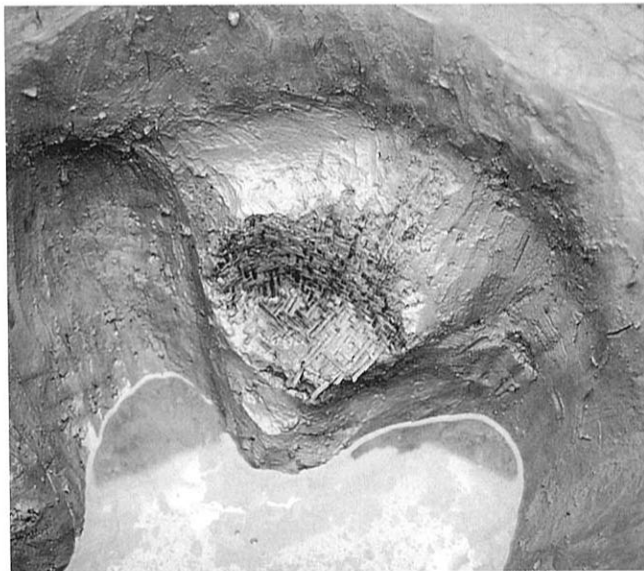


写真1
第II面 98-7区 土坑568網代出土状況



写真2 第VII面 98-7区 水田跡（北から）

第2節 遺構

今回の小阪合遺跡の発掘調査では、8つの遺構面を調査した。第Ⅲ面と第Ⅴ面では全域を調査したが、その他の面では部分的な調査に止まった。検出遺構総数は953。遺構の内訳は、溝179条、竪穴住居2軒、井戸31基、土坑86基、ピット621個、掘立柱建物4棟、水田18枚、川4条、落込み8ヶ所で、各面の遺構の記述もこの種類順に行う。

第Ⅲ章第1節で述べたように、遺構には遺構の種類にかかわらず通し番号を付し、かつ調査区・遺構面ごとに機械的に割り振った。したがって、現場で付けた1～934の遺構番号は単に検出順を示すにすぎない。掘立柱建物については、調査段階で認識したものが2棟、ピットなどを検討し整理の過程で復原したものが2棟、計4棟あり遺構番号935～938を与えた。第Ⅶ面検出の水田には遺構番号939～956を付した。903・916・918は欠番である。以上の遺構面や遺構番号は、表20にまとめた。

遺構の種類については一般的な用例に従うが、若干補足する。

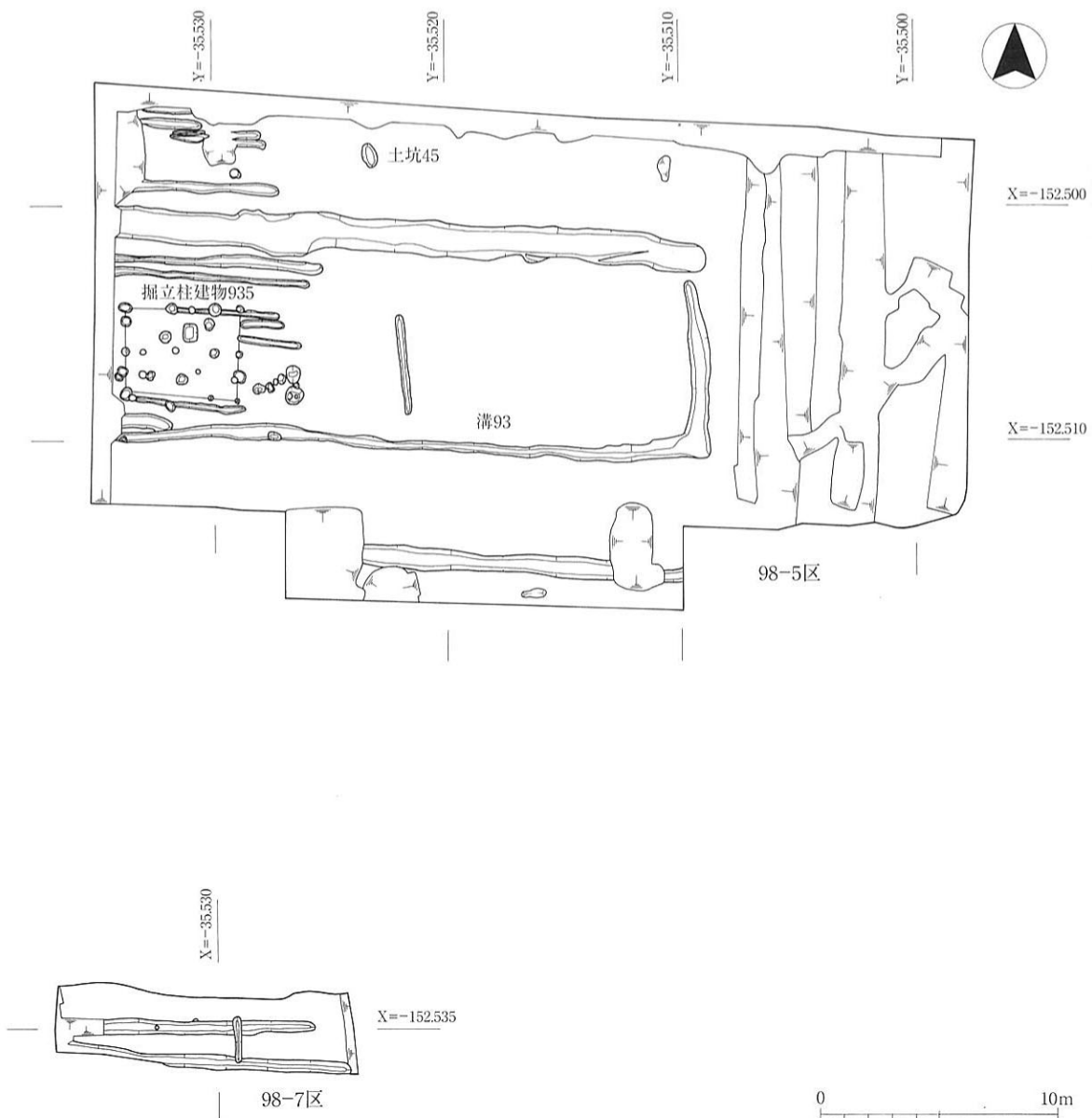


図6 第I面 遺構配置図

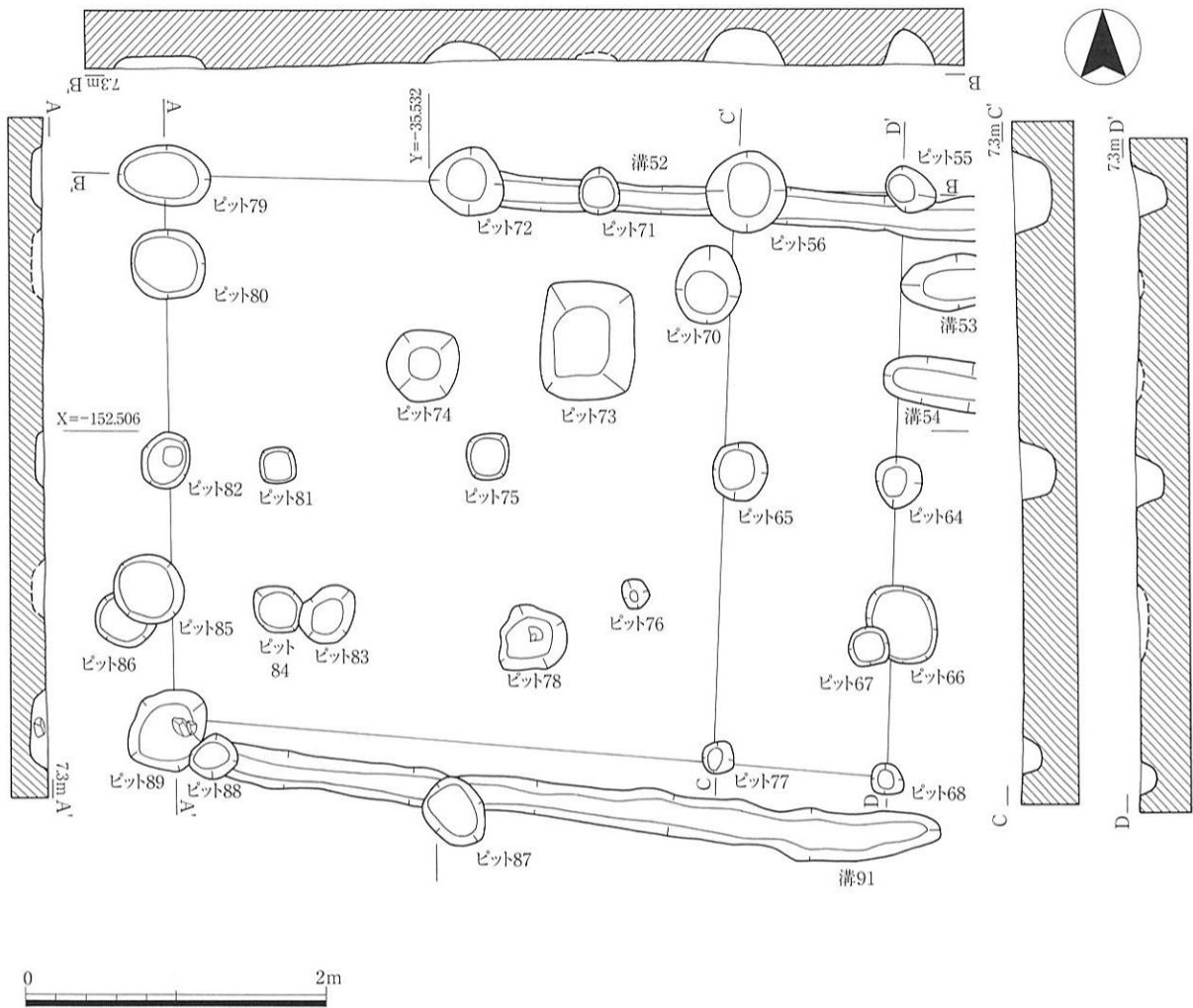


図7 第I面 98-5区 掘立柱建物935

土坑とピットについて、今回の調査では、柱穴として掘立柱建物を構成する可能性のあるもの及びそれに類する比較的小規模（径数10cm程度）の穴をピットとした。土坑には、ピットに比べて規模の大きいもの（径1mを越える程度）や比較的小規模でも不整形で柱穴とは考えにくいものを含めた。基準が明確ではないので両者の弁別に迷う遺構も存在するが、現場での判断のまま報告する。

また、溝・土坑・ピットについては、個々の寸法や埋土などを一覧表（表22～24）にまとめた場合が多い。その際、平面円形としたものは短径が長径の8割程度以上あるもので、かつ比較的整った形状のものを指す。遺構の主軸方位は南からみてどの方位にのびるかを16方位で表す。

第I面遺構

平安時代

98-5区全域と98-7区の北西部で調査した（図6・付図1）。検出遺構は、溝19条、土坑1基、ピット39個、掘立柱建物1棟、計60ヶ所。98-5区西部に土坑やピットが集中し、溝は方位に則る。面の高さは98-5区ではT.P.+7.0～7.3m、98-7区では基盤整備による削平がなかったためやや高くT.P.+7.5～7.6m。

溝19条のうち、16条は東西方向に、2条は南北方向にのび、溝93はL字形に曲がる。個々の溝の規模、埋土、出土遺物を表22に掲げる。

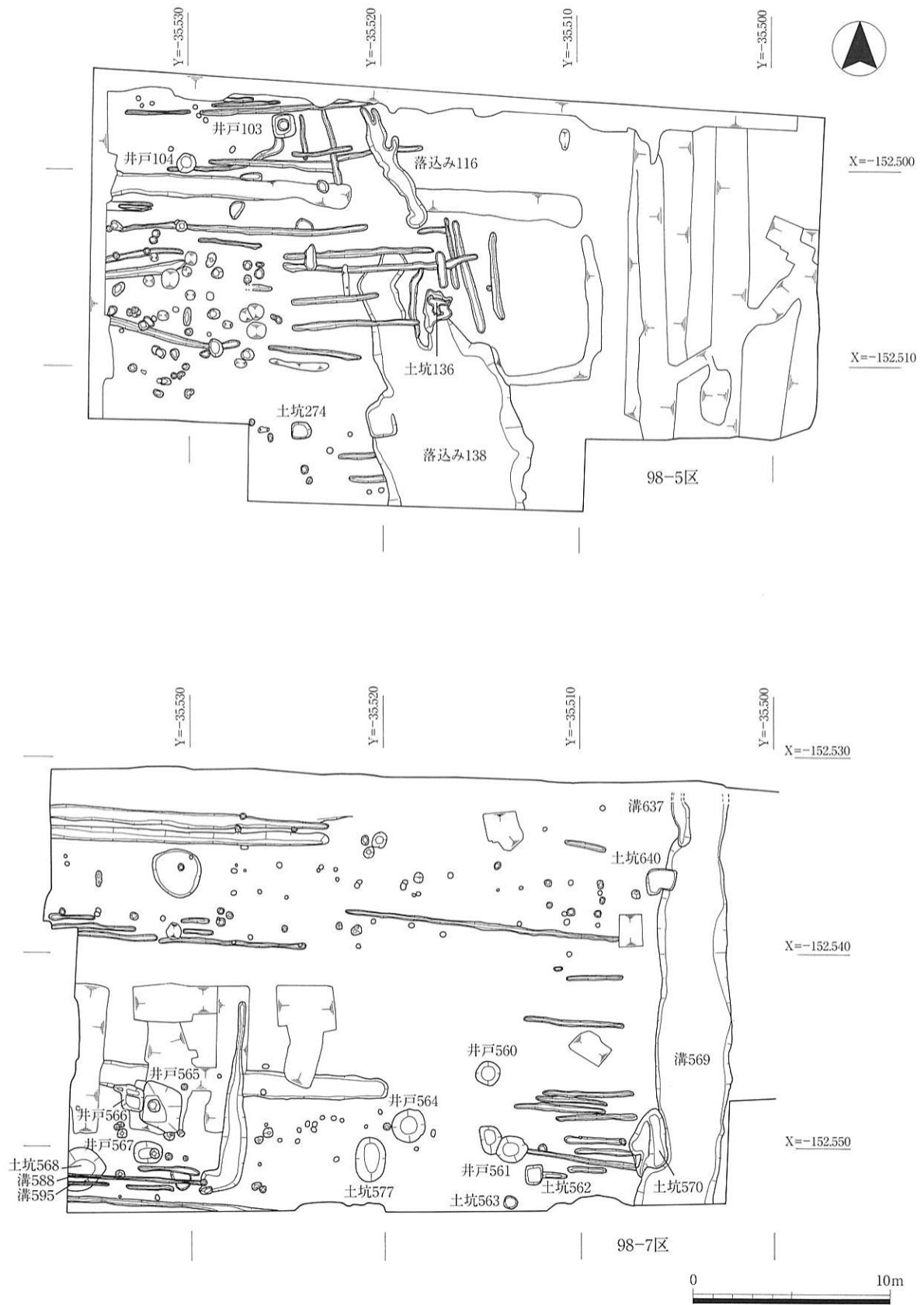


図8 第II面 遺構配置図

土坑は、98-5区北部の土坑45のみ。北北西-南南東に長い楕円形で、長径105cm、短径62cm、深さ20cm。埋土は10YR3/2黒褐色シルト。黒色土器A類3片、須恵器6片（うち古墳時代中期が1片）、土師器42片が出土した。

ピットは39個調査したが、うち37個が98-5区西部に集中する。個々のピットについては表24にまと

めた。

この周辺の溝が全て方位に則することを参考にしながら、ピットの配列をみると、掘立柱建物935(図7)が復原できる。建物の西側がどこまでのびるかは不明だが現状では、ピット79を北西隅の柱穴とし時計回りにピット72・56・65・77・87?・89・82で構成される梁行2間×桁行2間の母屋と、東側に北からピット55・64・68からなる底部からなる。母屋の柱間はおよそ1.9mで、面積は約14.5㎡となる。柱穴となる各ピットは検出面では径22～62cmの円形を呈し、深さは北東部のピット56とピット65が26cmあるもののその他は5～15cmしかなく、上部は削平されていると考えられる。南面中央の柱穴は検出できなかったが、やや南に偏するピット87がそれに該当する可能性がある。建物中央のピット75は、その位置と規模から東柱の可能性はある。底部の奥行きは1.0～1.1mで、母屋の柱間の約半分である。各ピットの埋土は単層であり、南西隅のピット89から石が2点出土した以外には柱痕や根石は検出していない。建物を構成する全ピット(ピット55・56・64・65・68・72・75・77・79・82・87・89)から土器類が出土した。土師器や須恵器などが多いが、ピット55・56・64・65・68・72・82から黒色土器A類が出土することから平安時代前期の建物と考えられる。

第Ⅱ面遺構 平安時代

98-5区と98-7区で調査した(図8・付図2)。検出遺構は、溝62条、井戸8基、土坑22基、ピット168個、落込み2ヶ所、計262ヶ所。面の高さはT.P.+6.9～7.3mである。

溝は62条。厳密には方位に則らないものもみられるが、東西方向を指向するものが比較的多い。表22にまとめた。

溝569は、98-7区東部をほぼ南北に流れる。98-5区の第Ⅰ面ではこの溝の延長線上に攪乱が存在し、98-7区では機械掘削停止時にすでに第Ⅱ面が露出していたので溝569もこの面で調査した。出土遺物は青磁1片、緑釉陶器3片、灰釉陶器3片、中世陶器3片、瓦12片、瓦質土器7片、瓦器49片(うち12世紀代8片)、黒色土器A類11片、須恵器160片(うち奈良時代7片、古墳時代後期4片、同中期23片)、土師器519片(うち平安時代73片、奈良時代1片)、弥生土器4片(うち後期3片)、製塩土器6片(うち奈良時代5片、古墳時代1片)、サスカイト剥片2点、計780片。出土遺物には、中世の陶器や瓦器なども含まれる。一方、調査時には、平安時代前期の土器を出土した土坑640・溝637に切られていると認識していたが、出土遺物の構成から平安時代後期の溝と考えられる。

井戸を98-5区で2基、98-7区で6基、計8基検出した。

井戸103(図9)は98-5区北西部に位置する。素掘り井戸で、検出面では東西・南北とも120cmの隅丸方形だが、下部は径約60cmの円形に掘られている。深さは113cm。灰釉陶器?4片、瓦1片、瓦器6片(うち12世紀代2片)、黒色土器B類1片、須恵器18片(うち奈良時代2片、古墳時代中期2片)、土師器47片(うち平安時代1片)、奈良時代の製塩土器1片、計78片が出土し、平安時代後期と考えられる。

井戸104(図9)は井戸103の西約5mに位置する。素掘り井戸で、径95～102cm、深さ53cm。黒色土器A類1片、須恵器17片(うち飛鳥時代1片、古墳時代中期1片)、土師器58片(うち平安時代2片、奈良時代1片)、計76片が出土し、平安時代前期に位置づけられる。

以下の6基の井戸は、いずれも98-7区の南部に分布する。

井戸560(図9)は素掘り井戸。平面は径121～129cmの円形、深さ89cm。出土遺物は白磁1片、瓦器

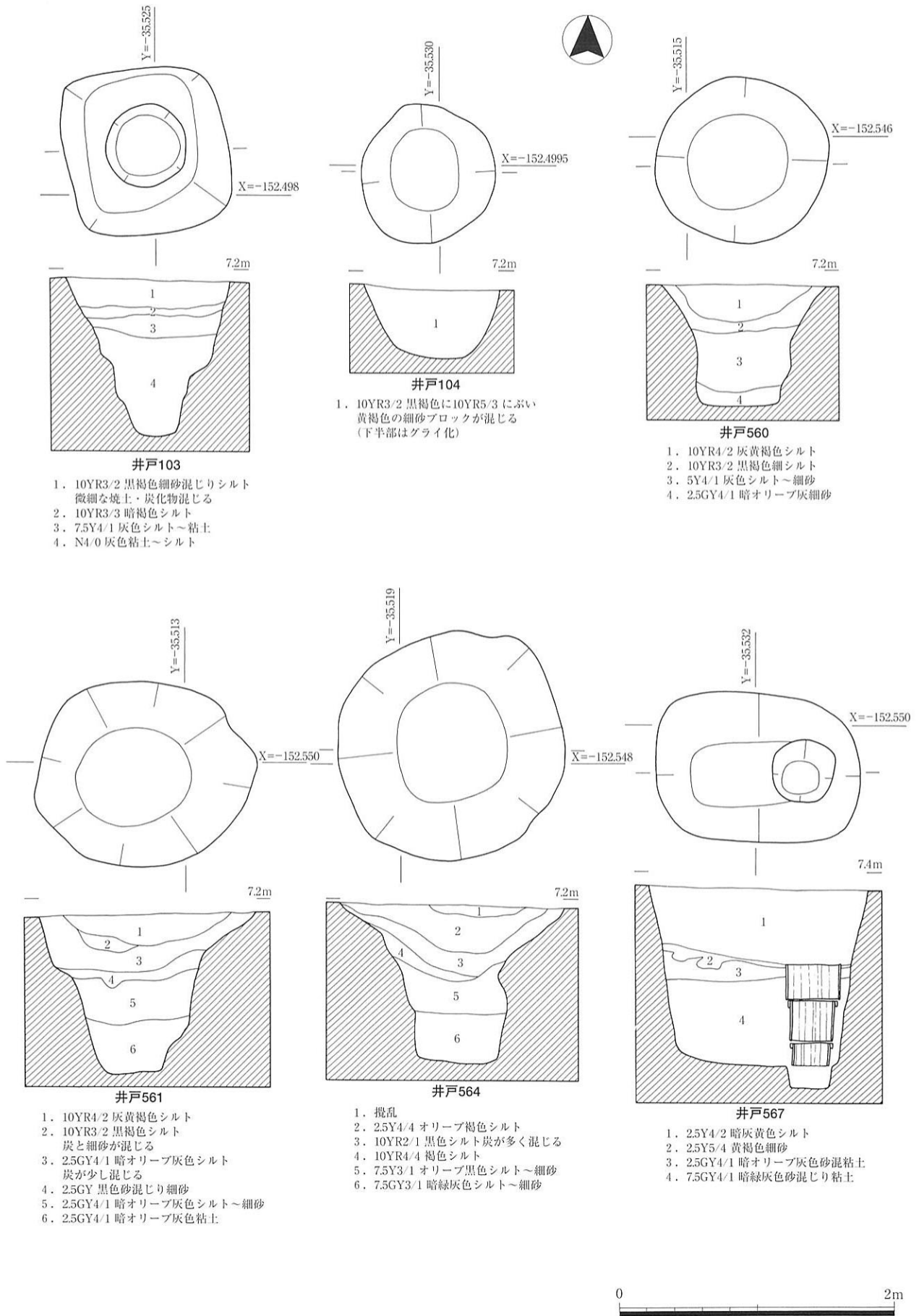


図9 第II面 98-5区 井戸103・104, 98-7区 井戸560・561・564・567

22片（うち12世紀代4片）、黒色土器A類1片、須恵器6片（うち平安時代前期1片）、土師器81片（うち平安時代32片）、計111片が出土し、平安時代後期と考えられる。

井戸561（図9）も素掘り井戸。やや東西に長い楕円形で、長径161cm、短径134cm、深さ120cm。出土遺物は瓦器29片（うち11世紀代6片）、須恵器2片、土師器71片（うち平安時代41片）、奈良時代の製塩土器2片、計104片が出土し、平安時代後期の井戸と考えられる。

井戸564（図9）も素掘り井戸。径162～180cmの不整形円形、深さ115cm。出土遺物は陶器1片、瓦器21片（うち11世紀代4片）、黒色土器A類1片、須恵器4片（うち奈良時代1片）、土師器91片（うち平安時代49片）、2次加工のあるサヌカイト片2片、計120片が出土し、平安時代後期と考えられる。

井戸565（図10）は曲物井戸。検出面では、南北230cm、東西215cmの歪んだ平行四辺形状を呈する。70cmほど掘り下げると円形に井戸側の輪郭がみえ、さらに約30cm下層で曲物の上部を検出した。曲物は2段に積み上げられている。土圧による歪みがあるが、下の曲物は二重になっていて、外側は径約52cm、高さ45cm、内側のものは径約45cm、高さ46cmで、外面3ヶ所に帯がはまっている。上は径約60cm、高さ39cm。出土遺物は緑釉陶器6片、灰釉陶器7片、陶器2片、瓦2片、瓦器1片、黒色土器A類56片、須恵器76片（うち平安時代前期3片、奈良時代2片、古墳時代中期8片）、土師器333片（うち平安時代115片、奈良時代1片）、弥生土器2片（うち後期1片）、奈良時代の製塩土器9片、土錘2片、計496片が出土し、平安時代前期と考えられる。なお、断面図に示すように、井戸側の検出レベルに炭層が広がり、その上層は井戸側を完全に覆って水平堆積しているため、意図的に埋められたと考えられる。この井戸565は次の井戸566と切り合っており、井戸566の方が新しい。

井戸566（図10）は素掘り井戸。歪な隅丸方形で、南北130cm、東西110cm、深さ138cm。出土遺物は緑釉陶器1片、瓦2片、黒色土器B類1片・A類36片、須恵器21片、土師器402片（うち平安時代229片）、弥生土器1片（後期）、奈良時代の製塩土器2片、計466片が出土し、平安時代前期と考えられる。

井戸567（図9）は曲物井戸。平面は東西に長い小判形で、長径149cm、短径108cm、掘形の深さ130cm。曲物は、掘形の東寄りに3段に積み上げられている。下は径27cm、高さ33cm、中は径32cm、高さ29cm、上は径40cm、高さ25cm、と下の曲物ほど径が小さく、それぞれの曲物も下がすぼまる。中段と下段の曲物の上端外側に帯が巡り、ちょうどその上の曲物を受けるようになっている。下段の曲物は、その径に合わせて掘形底面からさらに15cmほど掘り下げられた穴に据えられている。出土遺物は瓦器3片（うち11世紀代1片）、須恵器7片、土師器74片（うち平安時代7片）、弥生土器1片、奈良時代の製塩土器1片、計86片が出土し、平安時代後期と考えられる。

土坑を22基調査した。98-5区で9基、98-5区拡張部で2基、98-7区で11基検出した。

土坑136（図10）は98-5区の中央部に位置する。不整形で埋土に多量の炭や焼土らしきものが混じり他の遺構とは様相が異なっていた。黒色土器A類1片、土師器10片（うち平安時代5片）とともに、土坑南側よりほぼ完形の緑釉陶器が出土した。平安時代前期の所産であろう。

土坑274（図10）は98-5区拡張部で検出。埋土が2層に分かれる。出土遺物は須恵器7片（うち古墳時代中期1片）、土師器25片（うち奈良時代1片）、奈良時代の製塩土器1片、焼土1片、計34片で、奈良時代と考えられる。

土坑562（図10）は98-7区南東部に位置する。平面は隅丸方形。溝575より新しい。須恵器1片、土師器4片（うち平安時代1片）、計5片が出土し、平安時代の土坑と考えられる。

土坑563（図10）は、土坑562の南西約1mにある。平面円形で、埋土が3層に分かれる。須恵器3

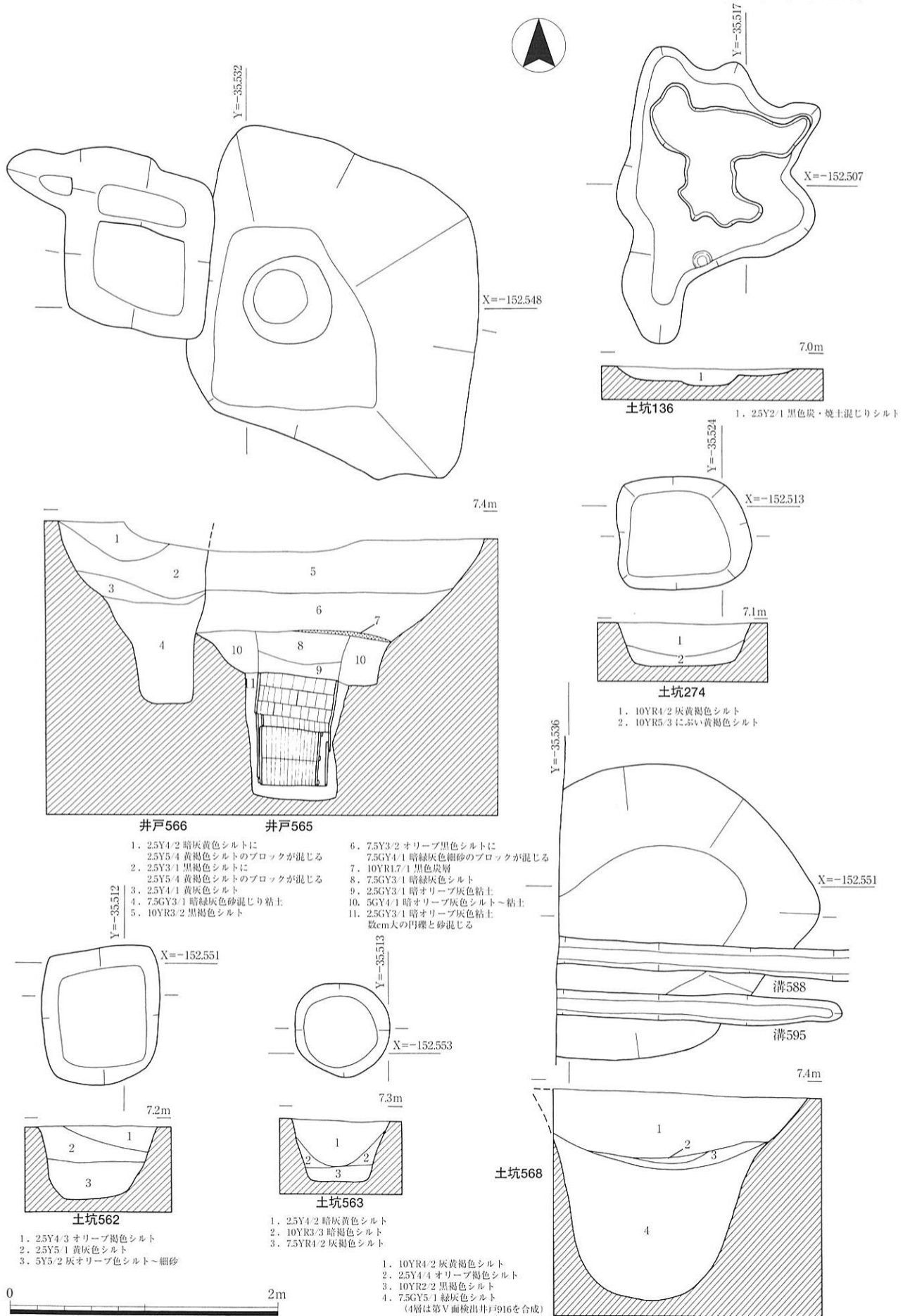


図10 第II面 98-7区 井戸565・566, 98-5区 土坑136・274, 98-7区 土坑562・563・568

片（うち奈良時代1片）、土師器2片、計5片が出土し、奈良時代に位置づけられる。

土坑568（図10）は98-7区南西隅に位置する。切り合いから溝588・595より古い。埋土最下層に炭化物が多くまじる。出土遺物は緑釉陶器1片、灰釉陶器1片、瓦器24片（うち12世紀代4片）、黒色土器A類2片、須恵器15片（うち東播系2片、奈良時代1片）、土師器87片（うち平安時代13片）、奈良時代の製塩土器1片、計131片。

この下層、第V面で井戸916として検出した遺構は、その位置と出土遺物から土坑568の掘り残しと判断した。井戸916とした埋土は7.5GY5/1緑灰色シルト。底面の約20cm上方から、網代（写真1）が出土したが脆弱で取り上げはできなかった。井戸916の出土遺物は瓦1片、瓦器2片、須恵器5片、土師器20片、弥生土器2片、奈良時代の製塩土器1片、網代1枚を加え計32片である。

したがってこの遺構は、本来平面円形で、径228cm程度、深さ約160cm。出土遺物は、緑釉陶器1片、灰釉陶器1片、瓦1片、瓦器26片、黒色土器A類2片、須恵器20片、土師器107片、奈良時代の製塩土器2片、弥生土器2片、網代1枚、計163片となり、平安時代後期の井戸と考えられる。

土坑577は98-7区南部に位置する。須恵器4片（うち5世紀代2片）、土師器199片、韓式系土器15片（接合の結果2個体）、計218片が出土し、古墳時代の5世紀代の遺構と考えられる。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色シルト。

この下層、第VII面で土坑918として調査した遺構は、埋土は2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～細砂。出土遺物は須恵器1片、土師器21片、弥生土器11片、計33片で、土坑577と同時期と考えて矛盾ない。したがって、本来の土坑577は、平面楕円形で、長径225cm、短径154cm、深さ79cmの古墳時代の土坑と考えられる。

その他、埋土が単層で形状の単純な土坑および寸法などについては表23にまとめる。

ピットを168個検出した。個々のデータは表24に掲げる。98-7区の北半に特に顕著なように、整然とピットが並ぶ個所はみられるが、掘立柱建物などの復元はできなかった。

落込みは98-5区で2ヶ所検出した。

落込み116は北北西-南南東に主軸をとり溝状にのびる。長径6.7m、幅55～160cm、深さ17cm。埋土は10YR2/2黒褐色炭まじりシルト。出土遺物は灰釉陶器？1片、瓦4片、黒色土器A類8片、須恵器18片（うち奈良時代2片、飛鳥時代1片、古墳時代中期2片）、土師器139片（うち平安時代9片）、奈良時代の製塩土器1片、土錘1片、計172片で、平安時代前期と考えられる。

落込み138は、98-5区南部に広がる。南北13m以上、東西8.2m、深さ30～40cmをはかる。埋土は10YR3/2ないし2/2黒褐色炭化物まじりシルト。緑釉陶器5片、灰釉陶器1片、瓦40片、黒色土器B類1片・A類30片、須恵器86片（うち平安時代前期2片、奈良時代5片、古墳時代後期2片）、土師器495片（うち平安時代48片）、奈良時代の製塩土器7片、焼土2片、計667片が出土し、平安時代前期に位置づけられる。

第Ⅲ面遺構 古墳時代～平安時代

第I・II面は98-5・7区でのみ調査したが、この第Ⅲ面は今回の対象範囲全域で調査した（図11・13・18・25・付図3）。そのため第Ⅲ面が初の調査面となる98-1・2・3・4・6区では上層遺構の掘り込みも若干検出した。それらを含めて検出遺構は459ヶ所である。面の高さはT.P.+6.7～7.3mで、東に低く西に高い傾向がある。

川を2条としたが、調査区別に遺構番号を付けたため、98-5区川200と98-7区川719とは一連の流れである。ただし、川200は調査の進展とともに、奈良時代を主体とし一部平安時代に及ぶ比較的小さな流れ（第Ⅲ面）と古墳時代の大規模な砂層（第Ⅴ面）とに分離できたので、第Ⅲ面では前者を報告する。

溝を76条調査した。主軸方位によっていくつかのまとまりがみられる。

竪穴住居を98-7区で2軒検出した。両者とも庄内期後半の所産である。今回の調査では他に竪穴住居はない。

井戸を18基調査した。特に98-7区では8基の井戸を検出した。

土坑を39基調査した。特に98-3区に18基と多い。

ピットを第Ⅲ面全体で315個調査した。98-7区には128個、98-3区にも90個と多くみられる。

落込みを5ヶ所で検出。

この面では、出土遺物を検討した結果、個々の遺構の時期の判明したものが多いため、以下、中世以降、平安時代、奈良時代、古墳時代、その他不詳、の各時期に分けて報告する。なお、個々の溝・土坑・ピットの寸法・埋土・出土遺物は、表22～24にまとめて掲げる。

1) 中世以降(図11) 中世以降の遺構は、本来は第Ⅲ面より上層のものである。近世の遺構としては、井戸を4基調査した。

井戸195(図12)は98-1区北部に位置する。木組井戸。掘形は不明だが、径68～70cmの平面円形に組んだ18枚の縦板を検出した。個々の板は幅9～24cm、厚さ約2cm、長さは80cm以上。板材を保持する籬などはみあたらなかった。須恵器1片と土師器1片が出土した。

調査時には第Ⅴ面で検出したが、出土遺物からは時期の特定ができず、その構造から中近世の井戸と判断し第Ⅲ面に掲載する。

井戸538(図12)は98-3区北東隅にある。木組井戸。掘形はほぼ円形で、径262～308cm。1mほど掘り下げると湧水が激しくなったが、検出面から1.2m下層で北側に寄った位置に径約1mの井戸側の上面を検出した。近世磁器6片、陶器4片、井戸椀瓦12片、瓦質土器3片、瓦器9片、黒色土器A類1片、須恵器21片(うち東播系1片、古墳時代中期8片)、土師器71片、弥生土器2片(うち後期1片)、サヌカイト剥片1片、計130片出土した。

この井戸も第Ⅴ面で検出したが、出土遺物と構造から近世の所産と考え、第Ⅲ面の井戸として取り扱う。

井戸352(図12)は98-4区南部に位置する。桶を積み上げた井戸。掘形は平面台形状で、東西2.9m、南北2.5m。検出面ですでに井戸側が露出していた。底を抜いた桶を逆さにして3段に積み上げている。桶は下段のものが下面径83cm、上面径72cm、高さ89cm、下から2段目は下面径80cm、上面径70cm、高さ81cm、下から3段目は下面径76cm。井戸上部はかなり削平されている。桶内より29片以上の井戸瓦が出土しているので、桶積みの上部には瓦組が存在した可能性が高い。計測可能な21枚の井戸瓦は、上端幅245～272mm(平均265mm)、下端幅254～272mm(平均266mm)、上下長265～306mm(平均291mm)、厚さ22～34mm(平均29mm)、重さ3.27～4.29kg(平均3.68kg)をはかる。井戸瓦の他に平瓦6片、丸瓦1片、棧瓦1片も出土した。他に近世陶磁器3片、瓦質土器2片、須恵器4片(うち東播系1片、古墳時代中期1片)、土師器9片が出土した。

井戸354(図12)は98-6区の北辺側溝で検出した。井桁部分は全く残っていない。井戸側は径75cm

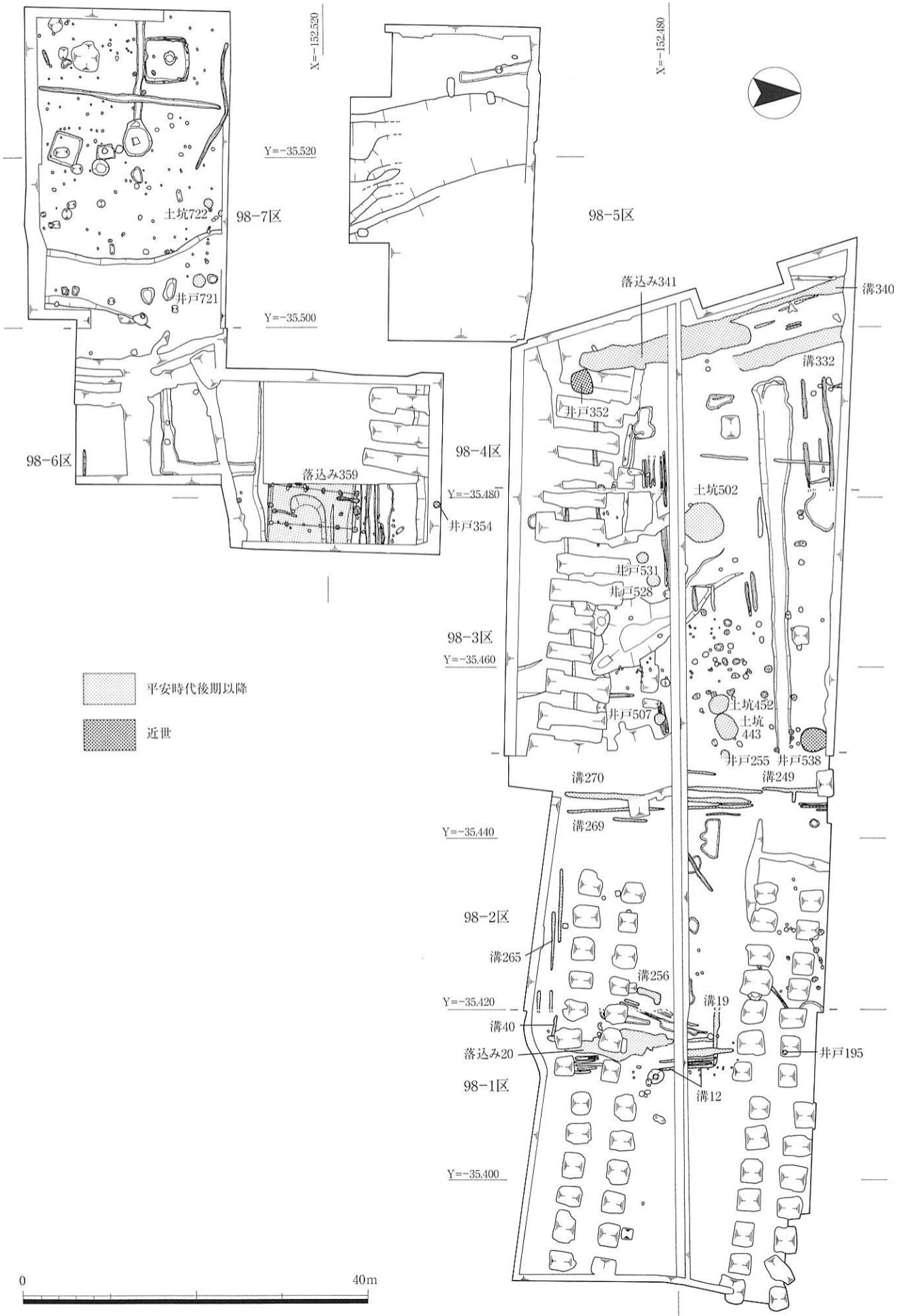


图11 第三面 遺構配置図 (平安時代後期以降)

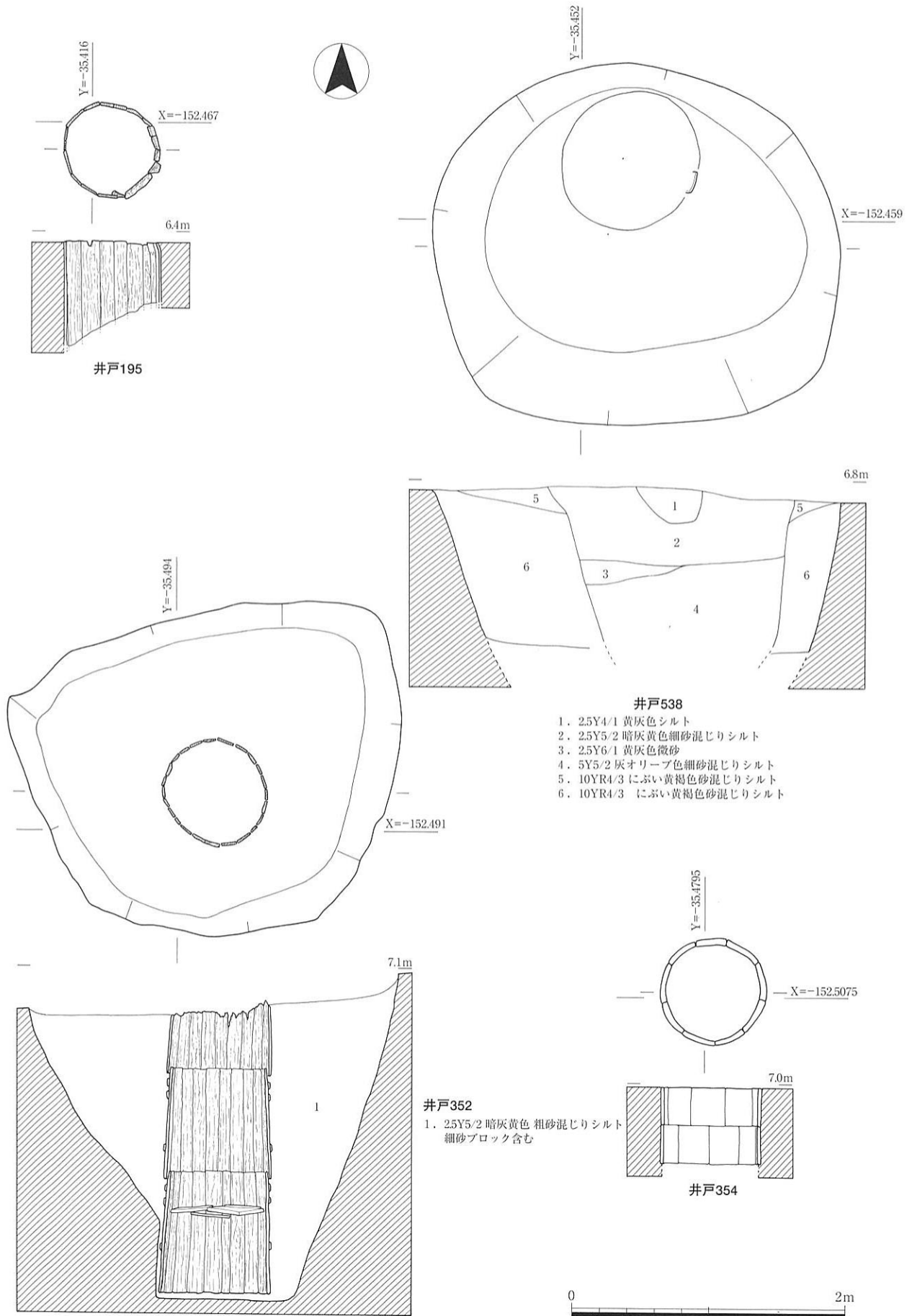


図12 第三面 98-1区 井戸195, 98-3区 井戸538, 98-4区 井戸352, 98-6区 井戸354

で、井戸瓦が9枚ずつ2段に組み上げられている。その下にも木枠が存在するが側溝法面外のため調査していない。計18枚使われた瓦は、上端幅245～256mm（平均253mm）、下端幅248～260mm（平均256mm）、上下長272～281mm（平均276mm）、厚さ26～31mm（平均29mm）、重さ3.00～3.89kg（平均3.42kg）。他に出土遺物はない。

中近世の土師器や瓦器などが出土した溝は、98-1区西部の溝12・13・14・16・19・40、98-2区東部の溝256・257・258、同区西部の溝246・247・248・249・250・251・252・253・254・269・270、同区南部の溝264・265である。これらのほとんどの溝は東西あるいは南北を指向し、条里制に規制されていると考えられる。

落込み20は、98-1区西部の遺構集中部分にある。南北約19mと長い溝状を呈するが、その中部以南では輪郭があいまいになる。埋土は、10YR6/2灰黄褐色シルトに10YR5/3にぶい黄褐色シルトのブロックがまじる。出土遺物は瓦質土器1片、瓦器9片、須恵器37片、土師器292片（うち奈良時代1片）、奈良時代の製塩土器1片、計340片で、古代末～中世と考えられる。溝の主軸方位が、落込み20の東側では南北、西側では北北東-南南西と異なる。

2) 平安時代(図11・13) 数的に、第Ⅲ面の遺構の主体をなす時代である。多くの溝、井戸9基、土坑4基、掘立柱建物1棟、落込み2ヶ所などが平安時代に位置づけられる。

平安時代の溝群は、調査範囲のほぼ全域にみられるが、分布範囲と主軸方位によりいくつかのまとまりがみられる。

北北東-南南西を指向するのは、98-1区西部の溝21・22・23・38と98-2区東部の溝256・257・258である。方位のみならず埋土もほぼ共通するが、溝21・22・23・38からは平安時代の土器が出土し、溝256・257・258には先述したようにそれらより新しい時代の土器が含まれる。

北北西-南南東にのびる溝群は、98-4区西部を中心に分布する。幅188～247cmと比較的広い溝332をはじめ、溝335・336・337・338・340および落込み341の一群と、やや東に離れた溝323、西に離れた98-5区溝203である。出土遺物にはわずかながら13世紀代の瓦器や中世陶器も含まれるが、平安時代のものを主体とする。

東西方向の溝は2細分できる。上記の溝332などと直交するように東北東-西南西の主軸をもつ98-2区溝505・506、98-4区溝322・324・326などと、厳密に東西を指向する98-6区溝355・356・357などである。

南北を指向するのは、98-1区の溝30・32・33・34・35、98-3区溝519、98-4区溝325である。

井戸255(図14)は98-2・3区間で検出した。曲物井戸。側溝で東半分を掘り飛ばしてしまったが、掘形は径約1mの円形。35cmほど掘り下げると曲物の痕跡を検出し、さらに20cm下層に曲物が現存した。曲物は径約45cm、高さ15cm。掘形から瓦器14片（うち12世紀代3片）、須恵器2片（うち古墳時代後期1片）、土師器13片（うち平安時代3片）が、井戸側内部からは瓦器3片、須恵器3片、土師器16片、合計51片の土器が出土し平安時代後期に位置づけられる。

98-3区では3基、東から井戸507・528・531がある。

井戸507(図14)は素掘り井戸。平面円形で、径120～129cm、深さ58cm。底面中央に石が据えられていた。出土遺物は瓦22片、瓦器22片（うち12世紀代5片）、黒色土器B類1片、須恵器48片（うち東播系27片、奈良時代1片、飛鳥時代1片、古墳時代中期4片）、土師器118片（うち平安時代24片）、弥生時代後期の土器1片、焼石2片、計214片出土し、平安時代後期と考えられる。

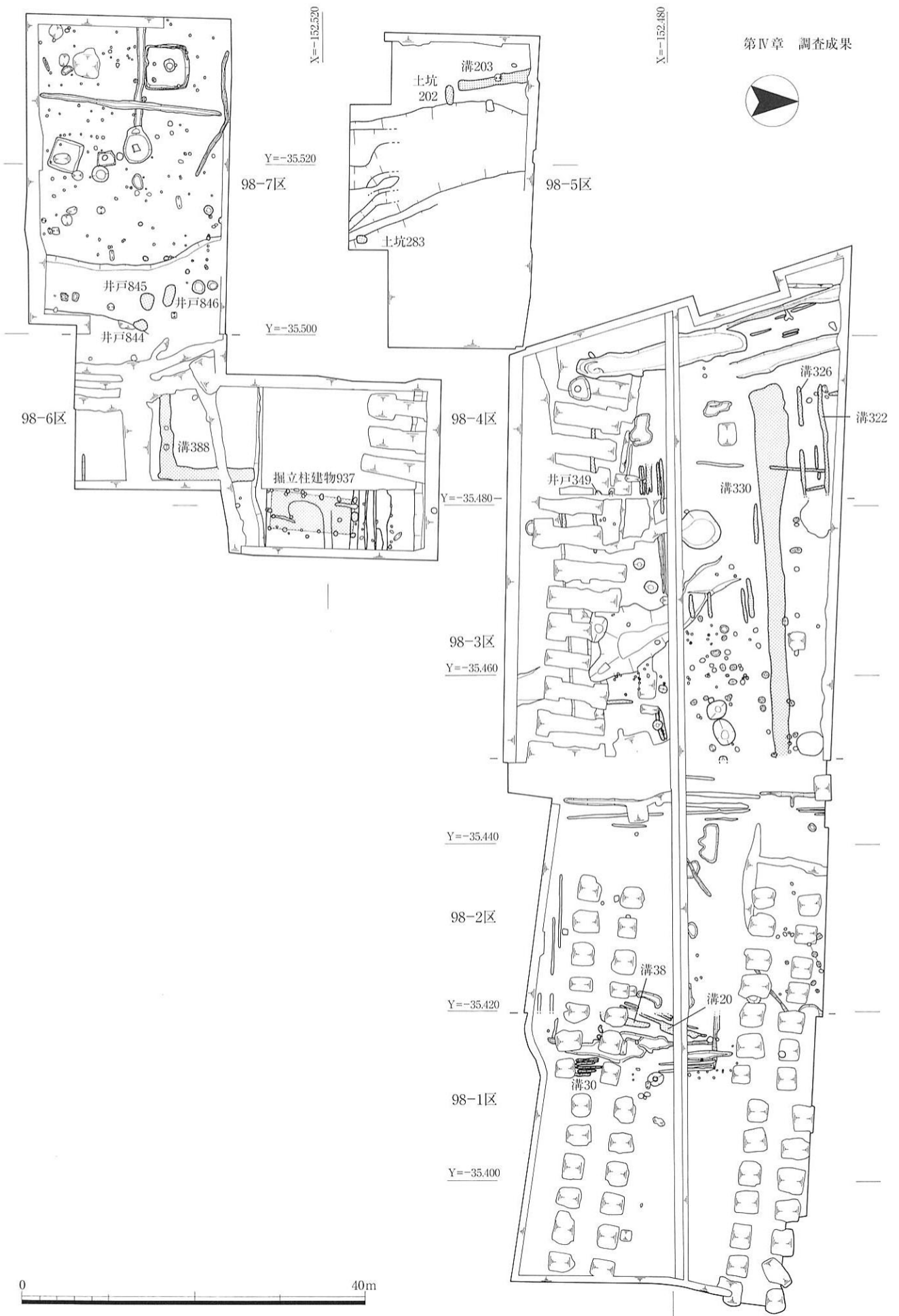


図13 第三面 遺構配置図 (平安時代前期)

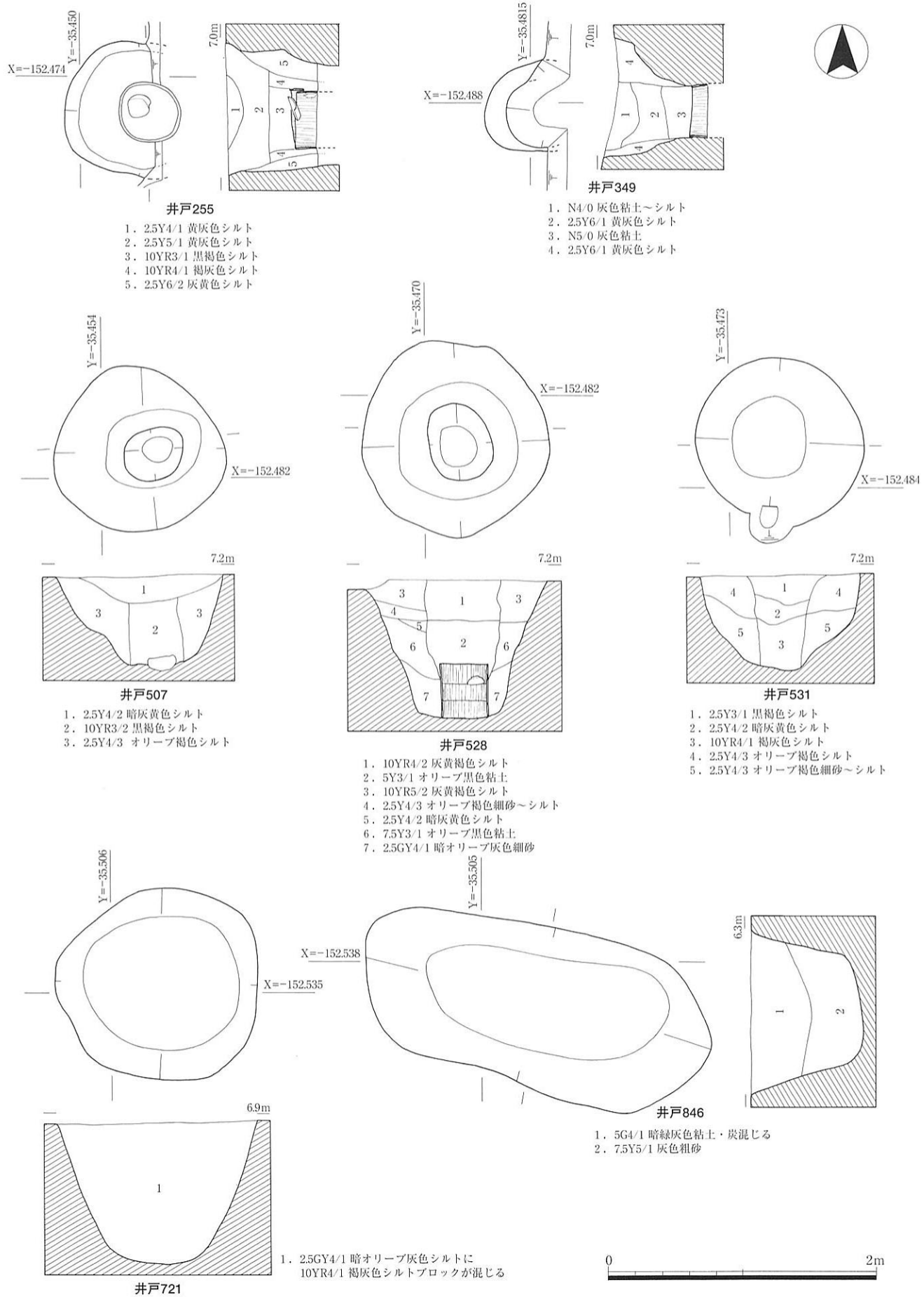


図14 第三面 98-2区 井戸255, 98-3区 井戸507・528・531, 98-4区 井戸349, 98-7区 井戸721・846

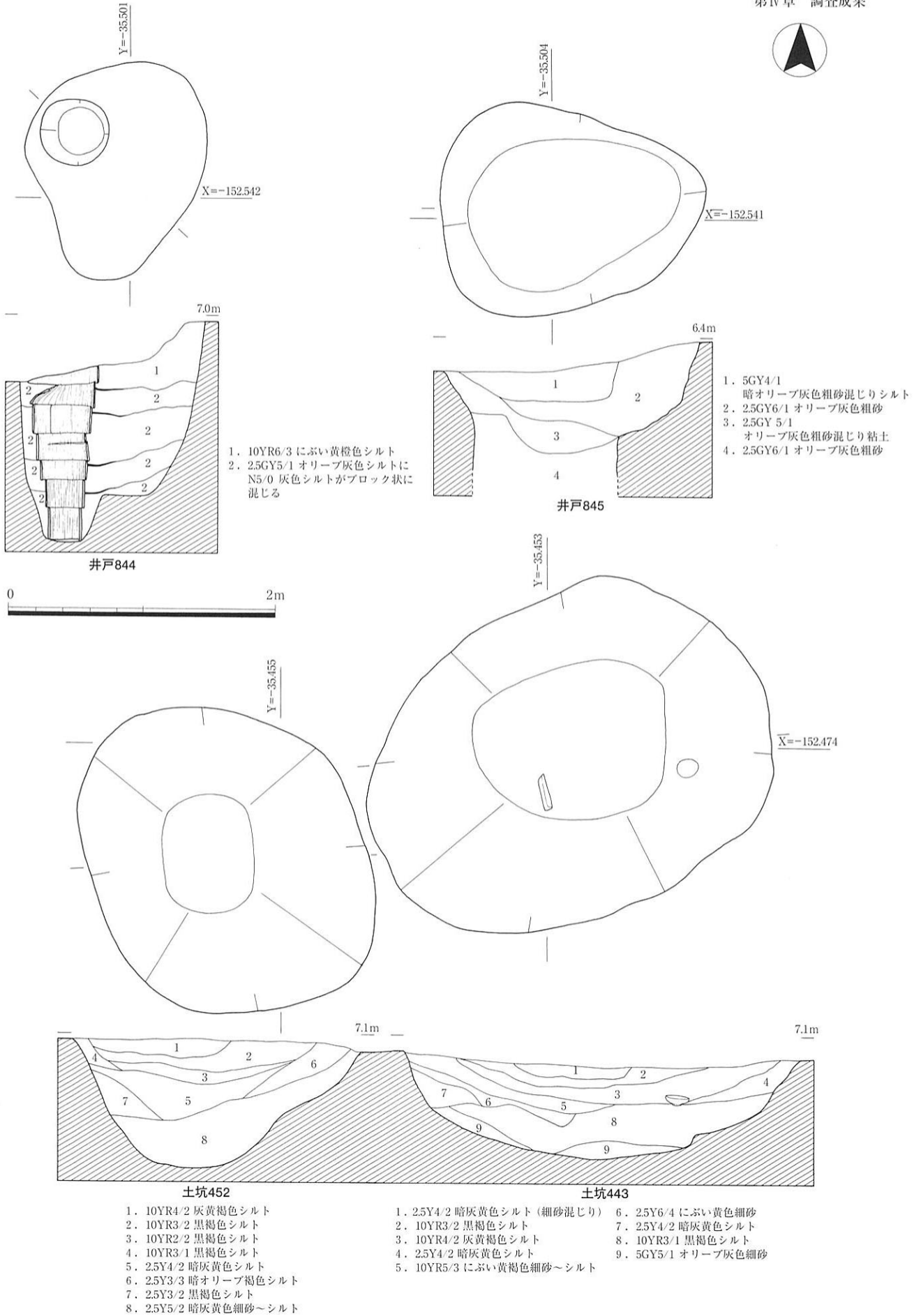


図15 第三面 98-7区 井戸844・845, 98-3区 土坑443・452

井戸528 (図14) は曲物井戸。掘形はほぼ円形で径137～151cm、深さ105cm。底に径約35cm、高さ約40cmの曲物が据えられており、その内部から瓦器碗などが出土した。瓦器38片 (うち12世紀代1片、11世紀代4片)、須恵器21片 (古墳時代中期3片)、土師器82片 (うち平安時代41片)、土錘1点、計142点出土し、平安時代後期と考えられる。

井戸531 (図14) は素掘り井戸。平面円形で、径120～126cm、深さ72cm。出土遺物は瓦1片、瓦器5片 (うち12世紀代1片、11世紀代1片)、須恵器7片、土師器21片 (うち平安時代3片)、焼土1片、計35片で、平安時代後期と考えられる。

井戸349 (図14) は98-4区東側の側溝により大部分を失ったが、掘形は円形と考えられる。深さは75cm以上あるが、調査深度の制約により最下部には至らなかった。曲物を1段だけ検出した。土層断面から判断すると検出面までは曲物が存在した可能性がある。曲物外の埋土から須恵器2片 (うち古墳時代中期1片)、土師器5片 (うち平安時代2片)、曲物内から瓦1片、須恵器6片、土師器3片 (うち平安時代1片)、奈良時代の製塩土器1片、合計18片が出土し、平安時代と考えられる。

98-7区では、以下の4基の平安時代の井戸を調査した。

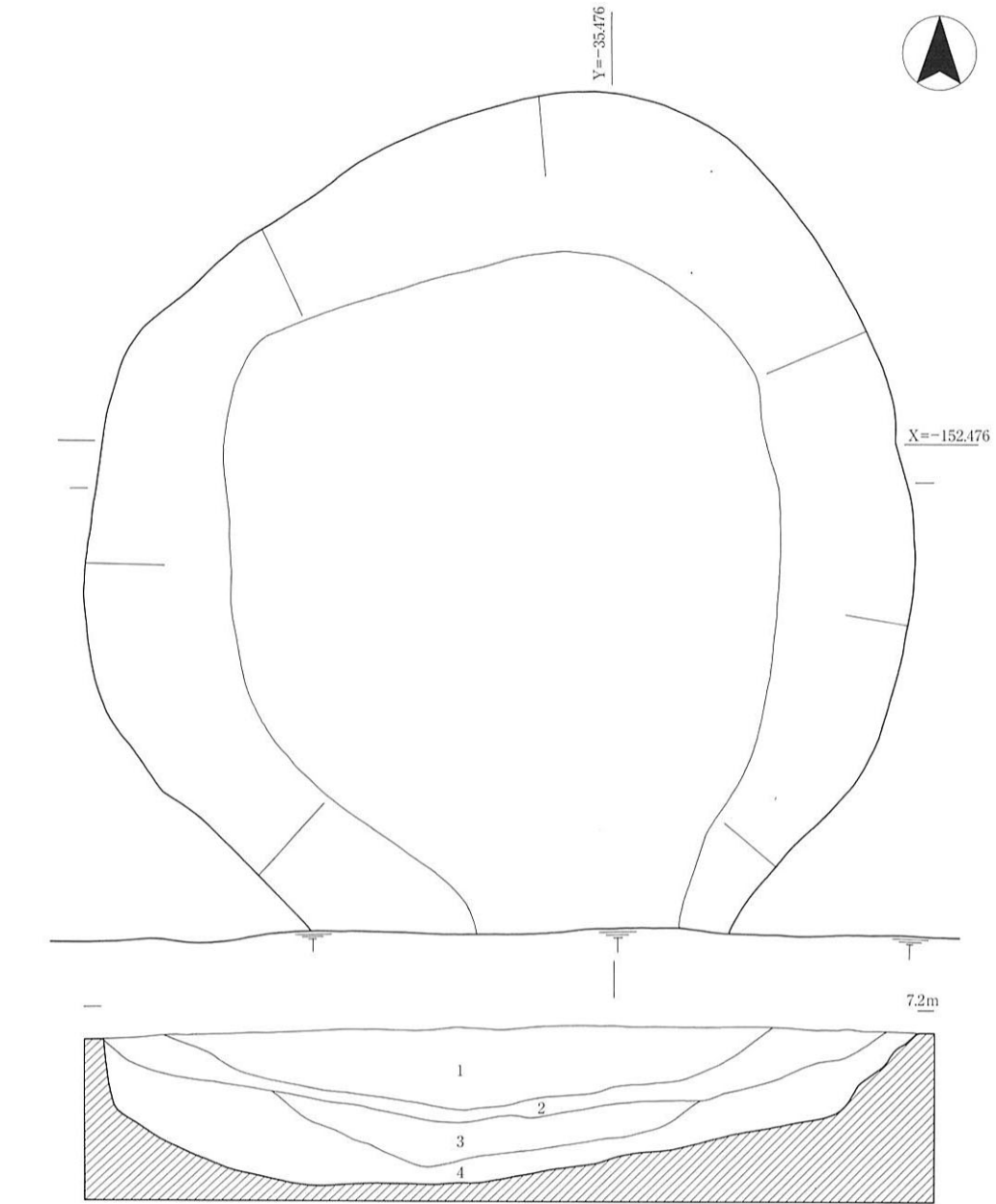
井戸721 (図14) は素掘り井戸。不整円形を呈し、径144～154cm、深さ約110cm。埋土は、2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトに10YR4/1褐灰色シルトのブロックがまじる。出土遺物は青磁1片、瓦1片、瓦器1片、黒色土器B類1片・A類1片、須恵器124片 (うち奈良時代9片、飛鳥時代2片、古墳時代後期1片、同中期19片)、土師器197片 (うち平安時代3片、奈良時代2片)、弥生時代後期の土器7片、奈良時代の製塩土器1片、石1点、計335片で、平安時代後期と考えられる。

井戸844 (図15) は曲物井戸。曲物が7段は確認できた。掘形は南北160cm、東西137cmのほぼ円形で、曲物はその北西寄りに据えられている。曲物外面の鏝状の薄板は南東側に傾斜している。本来は水平であったものが、掘形の土量の多い南東側でその土圧により沈下したと考えられる。最下段の曲物は径25cm、高さ24cm、下から2段目は径31cm、高さ21cm、3段目は径35cm、高さ14cm、4段目は径39cm、高さ20cm、5段目は径43cm、高さ22cm、6段目は径約50cm、高さ22cmをそれぞれはかり、7段目は不詳である。遺物として、曲物外から黒色土器A類1片、須恵器3片、土師器14片 (うち平安時代1片)、埴輪? 1片、弥生土器1片、奈良時代の製塩土器3片、曲物内から瓦1片、黒色土器B類3片・A類5片、須恵器16片 (古墳時代中期3片)、土師器111片 (うち平安時代33片、奈良時代1片)、弥生時代後期の土器1片、奈良時代の製塩土器6片、計166片が出土し、平安時代前期に位置づけられる。

井戸845 (図15) は素掘り井戸。平面楕円形で、東西198cm、南北161cm、検出面からの深さ97cm。出土遺物は中世陶器? 1片、瓦4片、黒色土器A類1片、須恵器32片 (うち奈良時代1片、古墳時代中期5片)、土師器55片 (うち平安時代2片、奈良時代1片)、弥生時代後期の土器1片、奈良時代の製塩土器1片、計95片で、平安時代前期と考えられる。

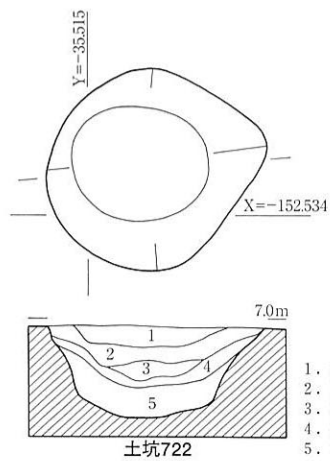
井戸846 (図14) も素掘り井戸。東西に長い不整円形で、東西265cm、南北126cm、深さ88cm。瓦1片、須恵器37片 (うち奈良時代2片、古墳時代後期1片、同中期6片)、土師器68片 (うち平安時代6片、奈良時代1片)、弥生時代後期の土器3片、奈良時代の製塩土器3片、計112片出土し、平安時代と考えられる。

土坑443 (図15) は98-3区東部にある。完形の瓦器碗をはじめ瓦器59点、須恵器17片 (うち古墳時代後期1片、同中期6片)、土師器40片 (うち平安時代24片)、砥石1片、計117点出土し、平安時代後期と考えられる。



土坑502

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
2. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
3. 2.5Y3/2 黒褐色粘土～シルト
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト



土坑722

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
3. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
4. 2.5Y4/1 黄灰色細砂
5. 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂



図16 第三面 98-3区 土坑502, 98-7区 土坑722

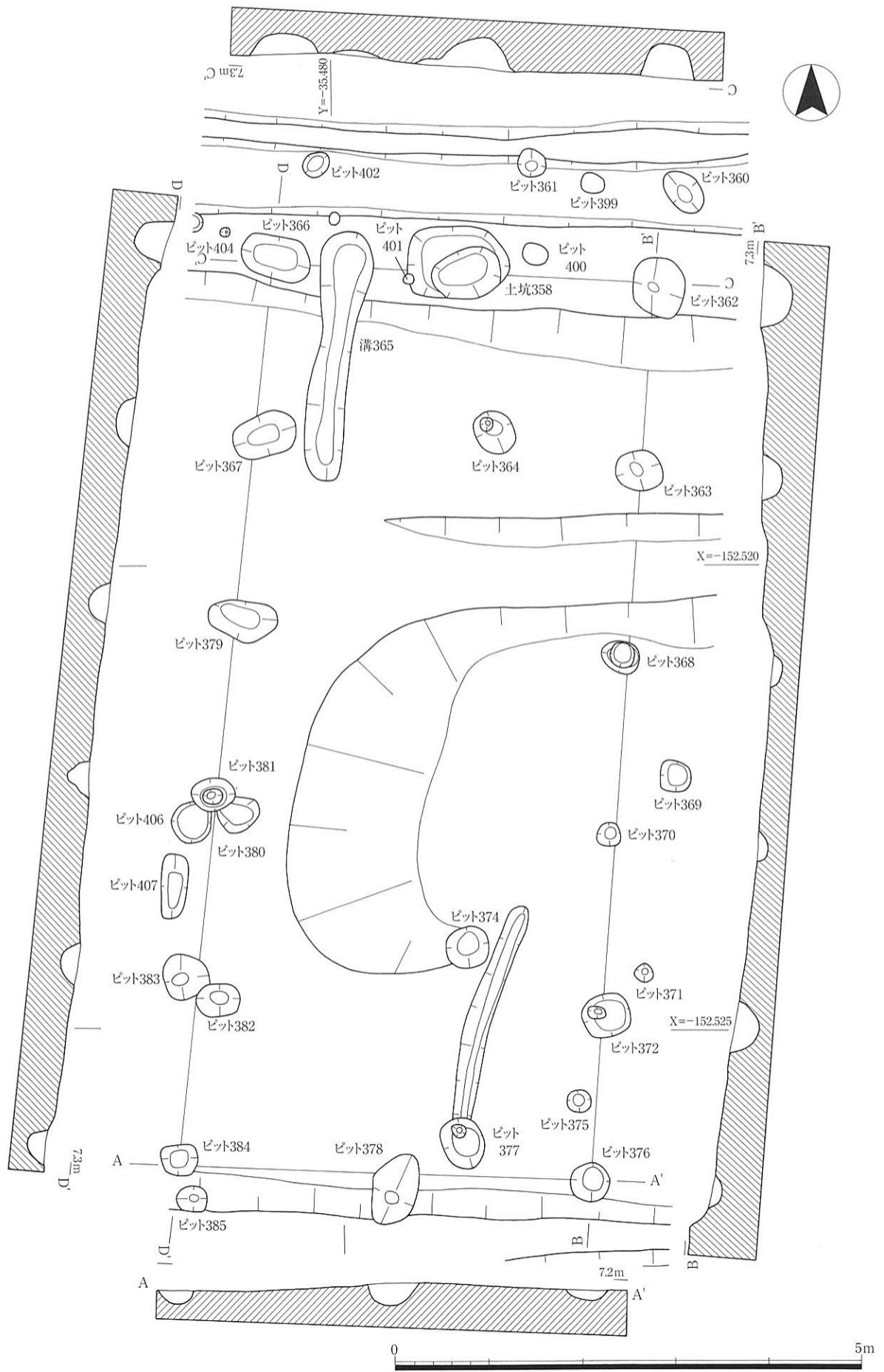


図17 第三面 98-6区 掘立柱建物937

土坑452 (図15) は土坑443の西に隣接する。出土遺物は瓦器14片 (うち12世紀代2片)、黒色土器B類1片・A類2片、須恵器26片 (うち奈良時代1片、古墳時代中期5片)、土師器67片 (うち平安時代10片)、弥生時代後期の土器2片、計112片で、平安時代後期に位置づけられる。

土坑502 (図16) は98-3区西部に位置する。長径4.9m、短径でも4.5mあり、今回の調査では最大の土坑である。白磁1片、瓦6片、瓦器77片 (うち12世紀代12片、11世紀代2片)、黒色土器B類4片・A類2片、須恵器126片 (うち東播系20片、平安時代前期2片、奈良時代2片、古墳時代中期17片)、土師器194片 (うち平安時代60片)、計410片出土し、平安時代後期と考えられる。

土坑722 (図16) は98-7区北部に位置する。埋土が5層に分かれる。12世紀代の瓦器1点、黒色土器A類2片、須恵器2片、土師器6片 (うち平安時代2片)、計11片で、平安時代後期と考えられる。

掘立柱建物937 (図17) は98-6区北東部に位置する。主軸は北からわずかに東に偏する。現状での建物西面のピット366からピット384までの底面レベル (T.P.+6.74~6.88m) と各ピットの西側の攪乱除去部分のレベルを比較すると、ピット382・383以外はいずれもピットの底の方が低い。また、建物東側でも現状の南東隅のピット376から1間分東側ではピットが検出されず、調査区東辺の側溝断面にもピットはかからない。以上の2点から、梁行2間×桁行5間の掘立柱建物と考えられる。柱間は最小1.8m、最大2.3mだが、1.9~2.0mが多い。梁行4.3m (北辺4.1m、南辺4.4m強)、桁行9.7m (東辺9.6m、西辺9.8m) で、面積約41.7²m。北面中央の柱穴は特に大きく、土坑358とした。建物北側のピット360・361・402が、位置と母屋の柱穴に比べて小振りなことから北面庇を構成する可能性がある。各ピットの埋土は単層、柱痕や根石もない。建物を構成する各ピットから須恵器や土師器が出土し、10世紀前後の平安時代前期の所産である。

落込み341 は98-4区西部にある。周辺の溝群と同様に北北西-南南東にのびる。長さ20.3m、幅2.5~3.8m、深さ約90cm。埋土は断面図 (図5) のG層。出土遺物は中世陶器? 2片、緑釉陶器2片、灰釉陶器1片、瓦21片、瓦器169片 (うち13世紀代3片、12世紀代53片)、黒色土器B類20片・A類26片、須恵器201片 (うち東播系1片、奈良時代6片、古墳時代中期78片)、土師器518片 (うち平安時代101片)、奈良時代の製塩土器2片、須恵質土管2片、萬年通寶1枚、土製円板1片、鞆羽口1片、サヌカイト剥片1片、計968片で、平安時代後期と考えられる。

落込み359 は98-6区東部に位置する。第Ⅱ層を掘削した結果、南北幅9.7~10.1m、最深部で44cmの落込みとなった。周辺の溝群との関係から、東西方向に主軸をもつ幅広い形状と推定する。灰釉陶器1片、瓦5片、瓦器13片、黒色土器A類3片、須恵器201片 (うち東播系1片、奈良時代5片、飛鳥時代1片、古墳時代後期2片、同中期12片)、土師器384片 (うち平安時代14片)、軟質系土器1片、弥生時代後期の土器1片、奈良時代の製塩土器7片、焼土2片、計618片出土し、平安時代後期と考えられる。

3) **奈良時代** (図18) 奈良時代と考えられる遺構には、川2条、井戸3基、土坑 (井戸) 1基がある。

川が98-7区と98-5に流れる。旧楠根川との関係から川の上流は南であろう。川719は98-7区南辺 (図5のJ層) で幅6.5m、深さ60cm。西岸は北北西にのび、98-5区川200の西岸につながる。東岸は北北東に開くが、周辺調査区の状況から、やはり川200の奈良~平安時代部分の東岸につながると考えられる。

川200では特に施設などは認められないが、川719では川中央部に南北に木杭や石による護岸的な施設 (図19) が存在した。それらは、川719~川200の主軸が北北西-南南東なのに対し、南北方向に並ぶこ

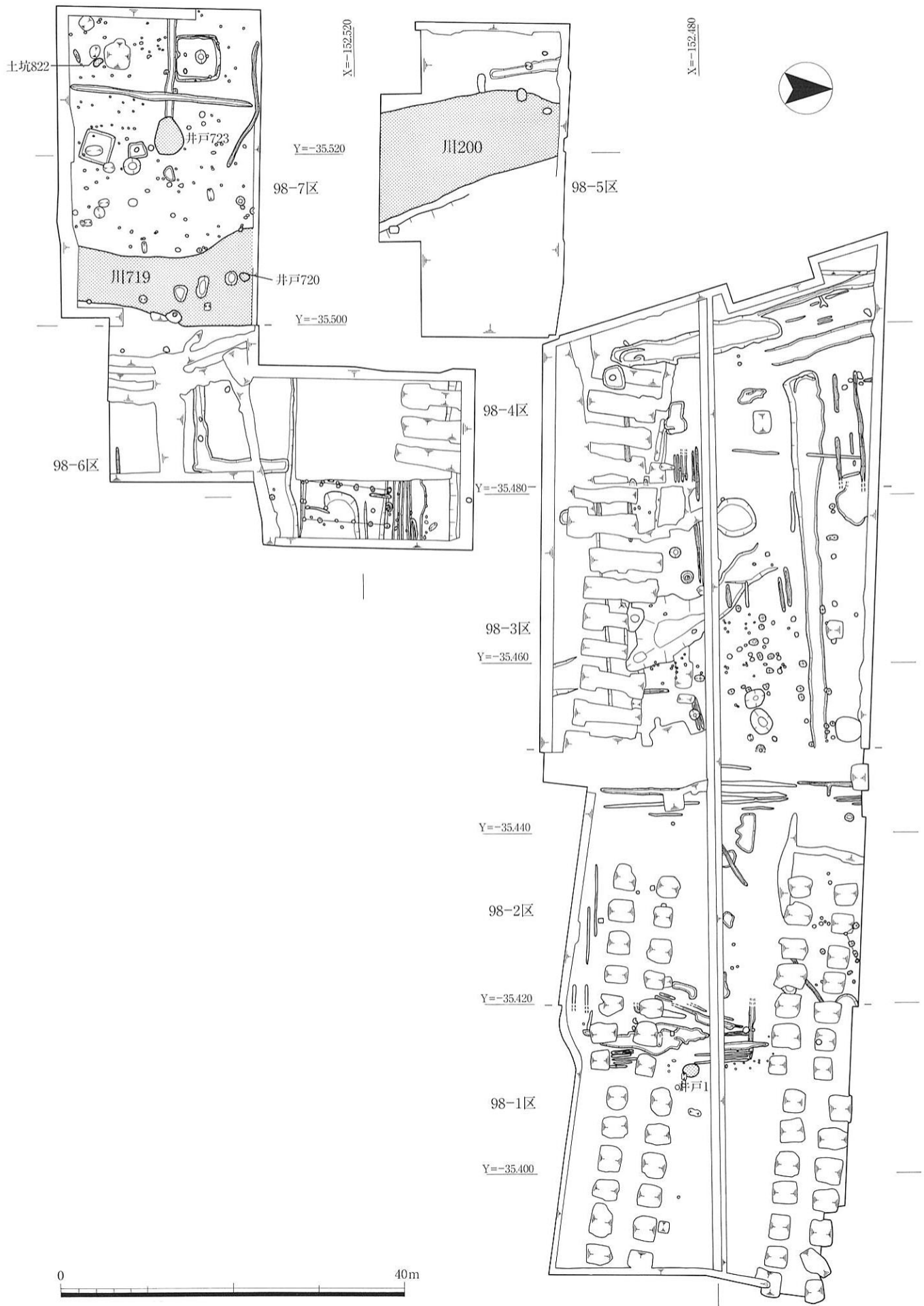


図18 第三面 遺構配置図 (奈良時代)

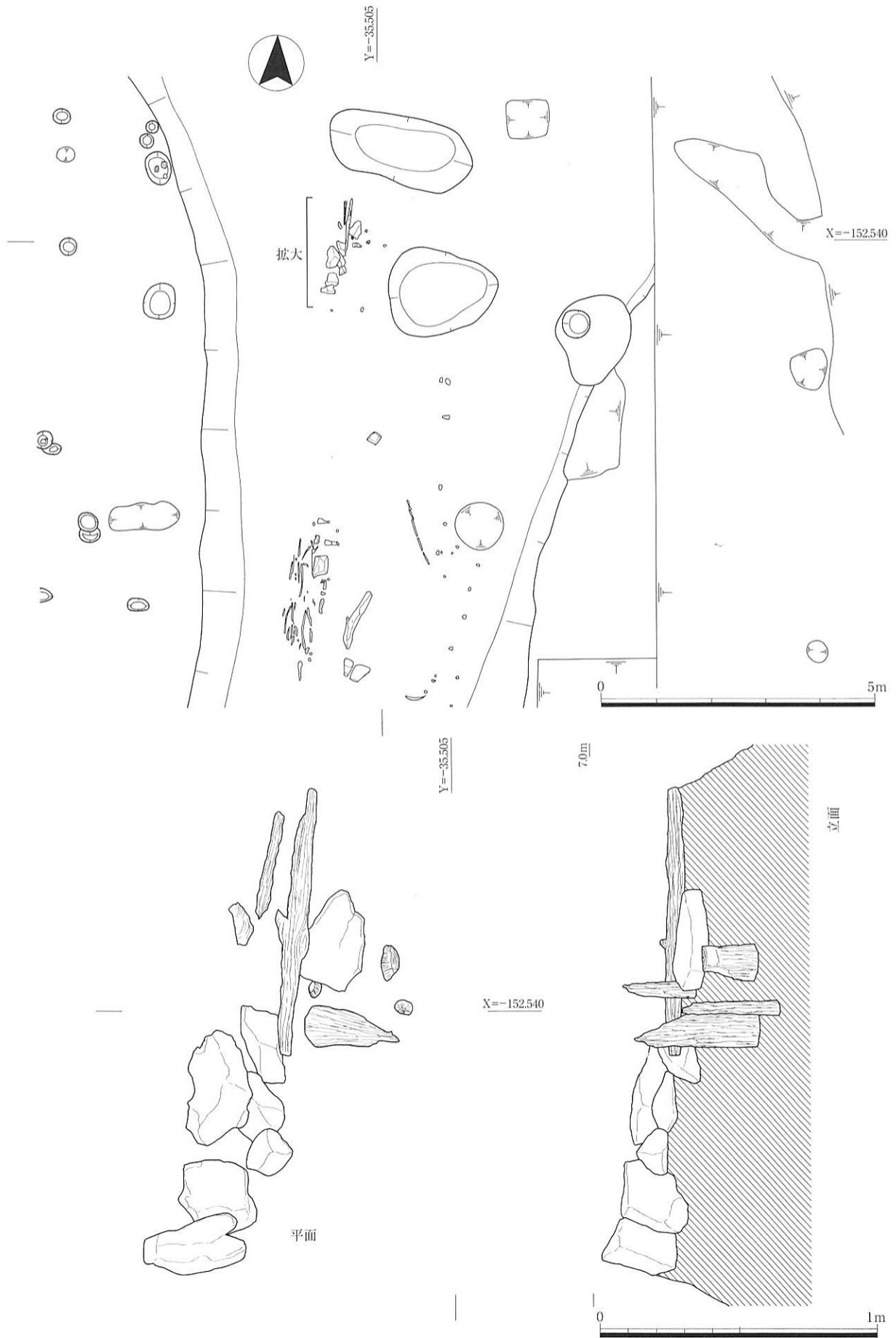


図19 第三面 川719 護岸施設

とから、第Ⅱ面溝569に伴う構造物である可能性もある。出土遺物は極めて多く、川200から73コンテナ、川719からも23コンテナに達する。その内訳は、陶磁器31片、緑釉陶器27片、灰釉陶器14片、瓦262片、瓦質土器4片、瓦器58片（うち13世紀代1片、12世紀代22片）、黒色土器B類5片・A類153片、須恵器8836片（うち東播系2片、平安時代10片、奈良時代742片、飛鳥時代39片、古墳時代後期112片、同中期846片）、土師器22057片（うち平安時代459片、奈良時代1734片、古墳時代4片、古式土師器590片）、弥生土器1266片（うち後期545片、中期20片、前期3片）、製塩土器1292片（うち奈良時代1283片、古墳時代9片）、埴輪123片、土製品10点、金属器71点、サヌカイト20点、石製品25点、その他2点、計34256点である。

この川200と川719からは、皇朝十二銭を計69枚検出した。

98-5区川200からは、58枚の和同開珎がA・Bの2群に分かれて出土した。

A群（図21・170～171-1850～1877）は28枚で、流れの中央部、国土座標第Ⅵ系で示せば $X = -152.51000$ 、 $Y = -35.52035$ を中心とするおよそ南北約1m東西50cmの範囲に散在していた。和同開珎の出土レベルはT.P.+6.1m台で、この付近の川底からおよそ10cm上方にあたる。

B群（図21・172～174-1878～1907）の30枚は、A群の南南東約2.5m、平面的には $X = -152.5123$ 、 $Y = -35.51906$ を中心とする南北9.5cm東西6.5cm、レベルはT.P.+6.305～6.340mの範囲から出土（図22）。折り重なる状態から、孔に紐を通し縶とされたことが推定される。

98-7区川719からは、図21に示すように和同開珎3枚、隆平永寶1枚、富壽神寶2枚、承和昌寶1

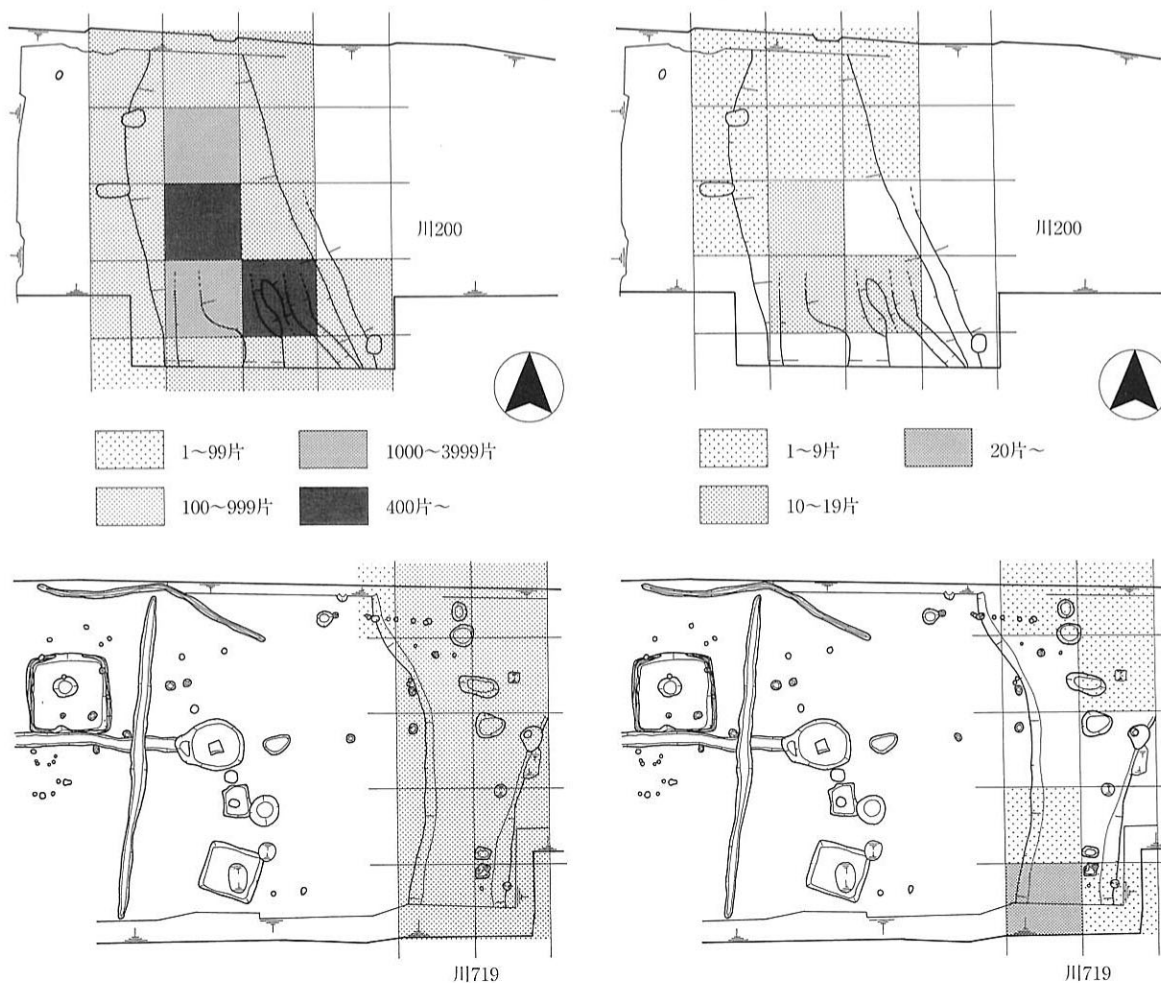


図20 第Ⅲ面 川200・719 遺物出土分布図（左/土器・右/獣骨）



図21 第三面 川200・719 出土皇朝銭分布図

枚、長年大寶1枚、饒益神寶2枚を検出した。(図174-1910)の和同開珎を除く9枚が川の南部に分布し、T.P.+6.31~6.45mに集中している。この付近の川底には土坑状の穴が2ヶ所存在し、銭との関係が考えられるが、今となっては検証できない。なお、上層の第Ⅱ面溝569の底から出土した隆平永寶(図174-1912)はT.P.+6.84mと高いが、銭の種類や平面的な出土位置からすると、第Ⅲ面川719に伴う可能性が大である。

井戸1(図24)は98-1区中央やや西に位置する。木組井戸。4枚の板を井籠組にしてある。出土遺物には、8世紀末の人面墨書土器の完形品をはじめ、瓦1片、須恵器16片(うち奈良時代1片、古墳時代中期3片)、土師器48点(うち奈良時代5点)、奈良時代の製塩土器6片、計71点出土した。

井戸720(図24)は98-7区北東部に位置する。素掘り井戸。平面ほぼ円形で、南北120cm、東西103cm、検出面からの深さ約80cm。埋土は、2.5Y4/1黄灰色シルトに10YR4/1褐灰色シルトのブロックがまじる。出土遺物は須恵器31片(うち奈良時代1片、古墳時代後期3片、同中期6片)、土師器47片(うち奈良時代1片)、奈良時代の製塩土器1片、計79片で、奈良時代の井戸と考えられる。

井戸723(図23)は98-7区中央部に位置する。今回の調査では最大規模の木組井戸。掘形の平面は東西436cm、南北329cmをはかる。井戸側を中心とする径約3.3mの円形の掘形の西にテラス状の浅い部分が付く。各段の井戸側は、板材を横板として用いている。板どうしの組み合わせは、一方の小口を他方の板に当てるだけで、板を保持するための顕著な構造や柄穴はない。ただし、部分的には板材を縦方向に添え、井戸側下部では横板の内側に縦板を並べている。土圧で歪んでいるが、井戸側内部には方65cm程度の空間が確保される。水溜には径約30cm、高さ26cmの曲物が据えられている。曲物の下層には、掘形の底までの45cmの間に2cm大の円礫を逆円錐状に詰めてある。検出面からの深さは3.3mに及ぶ。出土遺物は、井戸側外から瓦1片、須恵器20片(うち古墳時代後期3片)、土師器96片(うち奈良時代

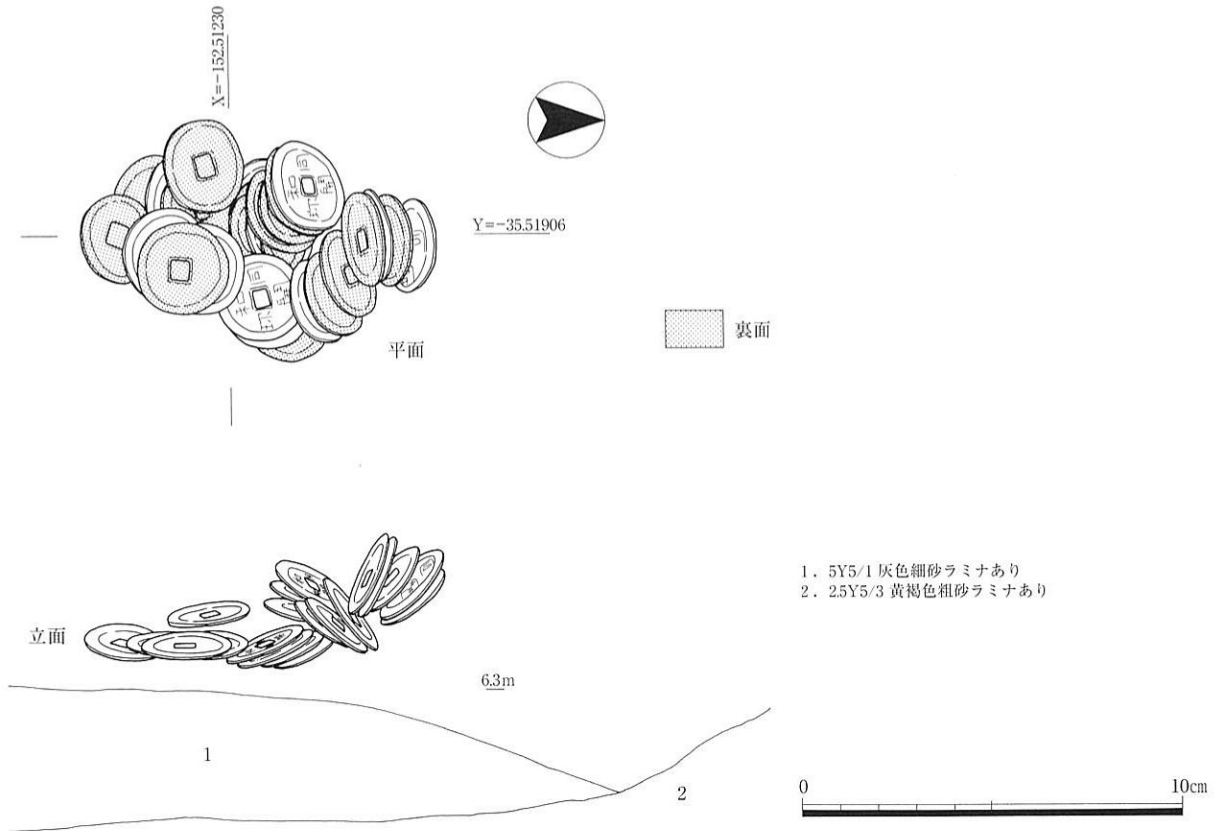


図22 和同開珎出土状況 (B群)

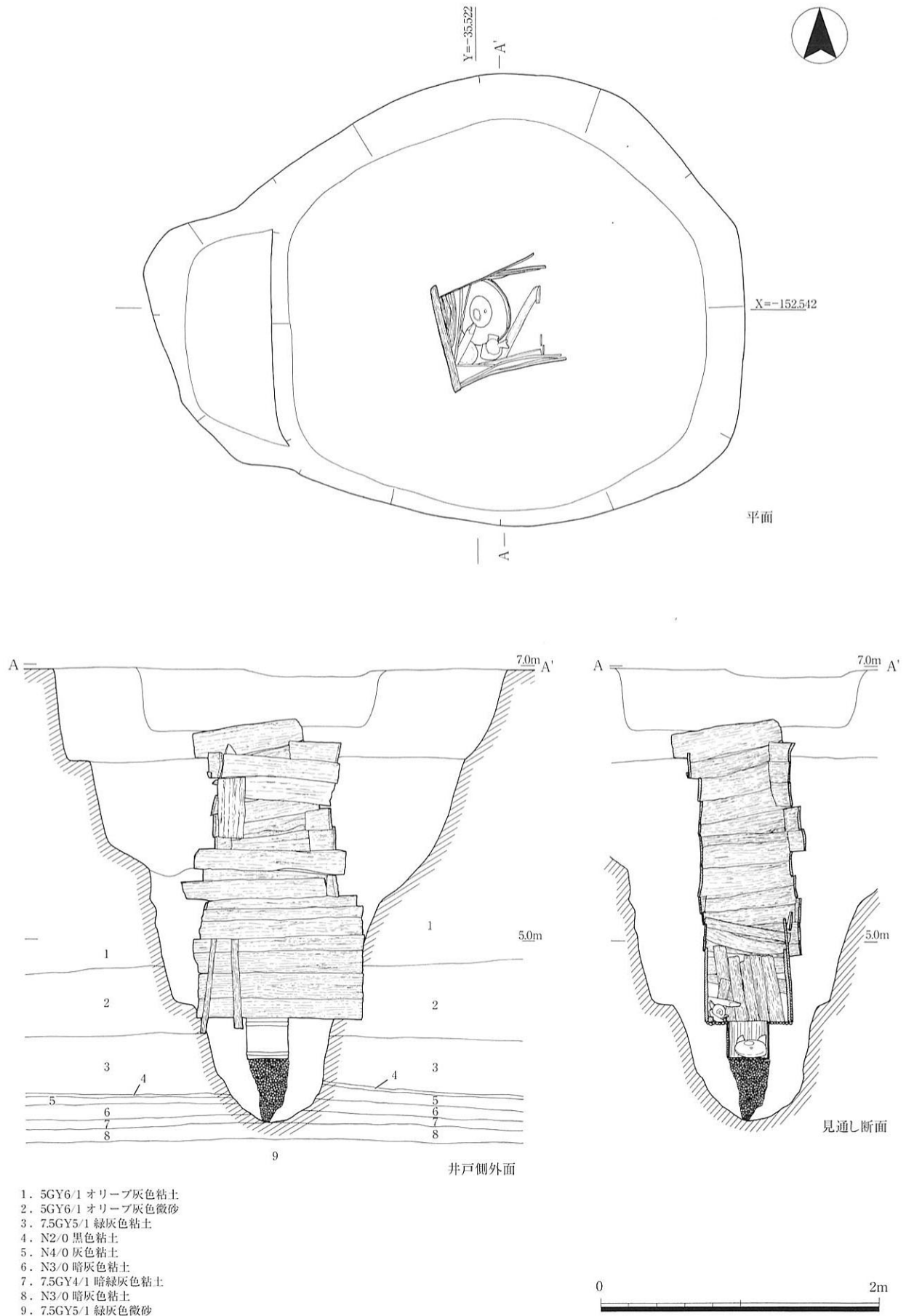


図23 第三面 98-7区 井戸723

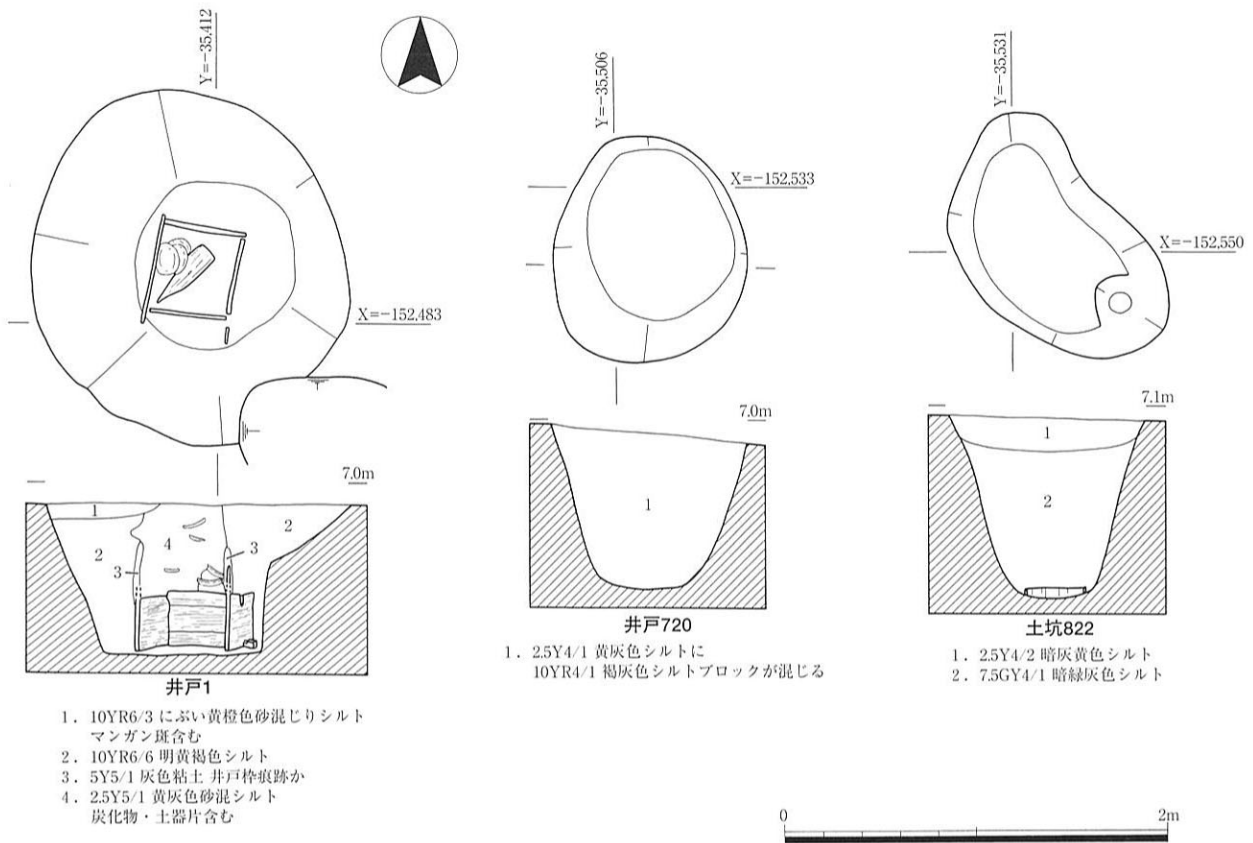


図24 第三面 98-1区 井戸1, 98-7区 井戸720, 土坑822

2片)、弥生土器1片、井戸側内からは須恵器5片(うち奈良時代3片)、土師器19片(うち奈良時代1片)、合計142片が出土し、奈良時代中期の井戸と考えられる。

土坑822(図24)は98-7区南西部に位置する。平面不整形で、第三面からの深さは25cmであった。出土遺物は5世紀代の須恵器1片、土師器10片、弥生時代後期の土器1片、奈良時代の製塩土器2片で、奈良時代の土坑と考えた。

ところが、下層の第V面で検出した井戸903から、須恵器4片(うち奈良時代3片)、土師器18片、弥生土器2片が出土したため再検討した結果、土坑822の掘り残しの可能性が高いと判断した。その底部には曲物が痕跡的に残っていた。したがって、第三面土坑822は検出面からの深さ95cmの曲物井戸であったことが判明した。

4) 古墳時代(図25) 竪穴住居2軒、溝2条、土坑4基、ピット18個、掘立柱建物1棟、落込み2ヶ所などが、古墳時代の遺構である。

竪穴住居を98-7区で2軒検出した。周堤・壁溝・ベット状の高まり・間仕切り溝・貼り床・火処・柱穴などの存在を前提として、最小限のサブトレンチを設定し床面を検証しつつ、慎重に調査を進めた。

住居857(図26)は98-7区南部に位置する。方位に対して約20°振れている。方形の竪穴住居で東西3.6m、南北3.2mをはかる。この範囲の外周も精査したが、周堤は確認できなかった。壁溝も平面および断面観察によっても見いだせなかった。ベット状の高まりについては、サブトレンチで認めた断面図の2層に一応可能性を考え上層から慎重に掘り下げたが、特に締まっているということもなく、分布範囲も有意ではなかったため否定的に考える。間仕切り溝、貼り床と考えられる層、柱穴も検出できなかった。しかし、厚さ3~12cmの炭を多く含む層が竪穴中央部に広がることから、炉の存在はうかがえ

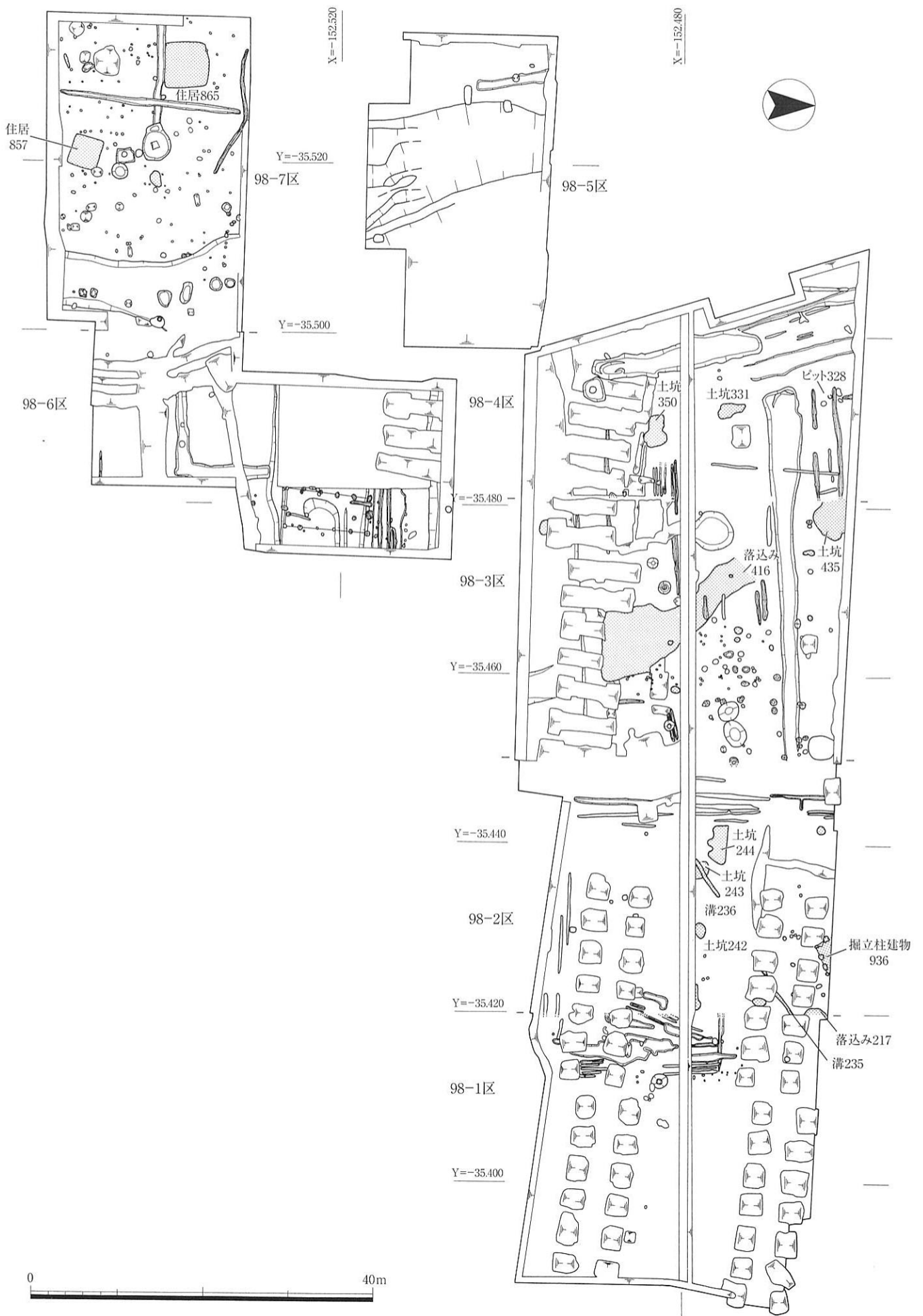


図25 第三面 遺構配置図 (古墳時代)

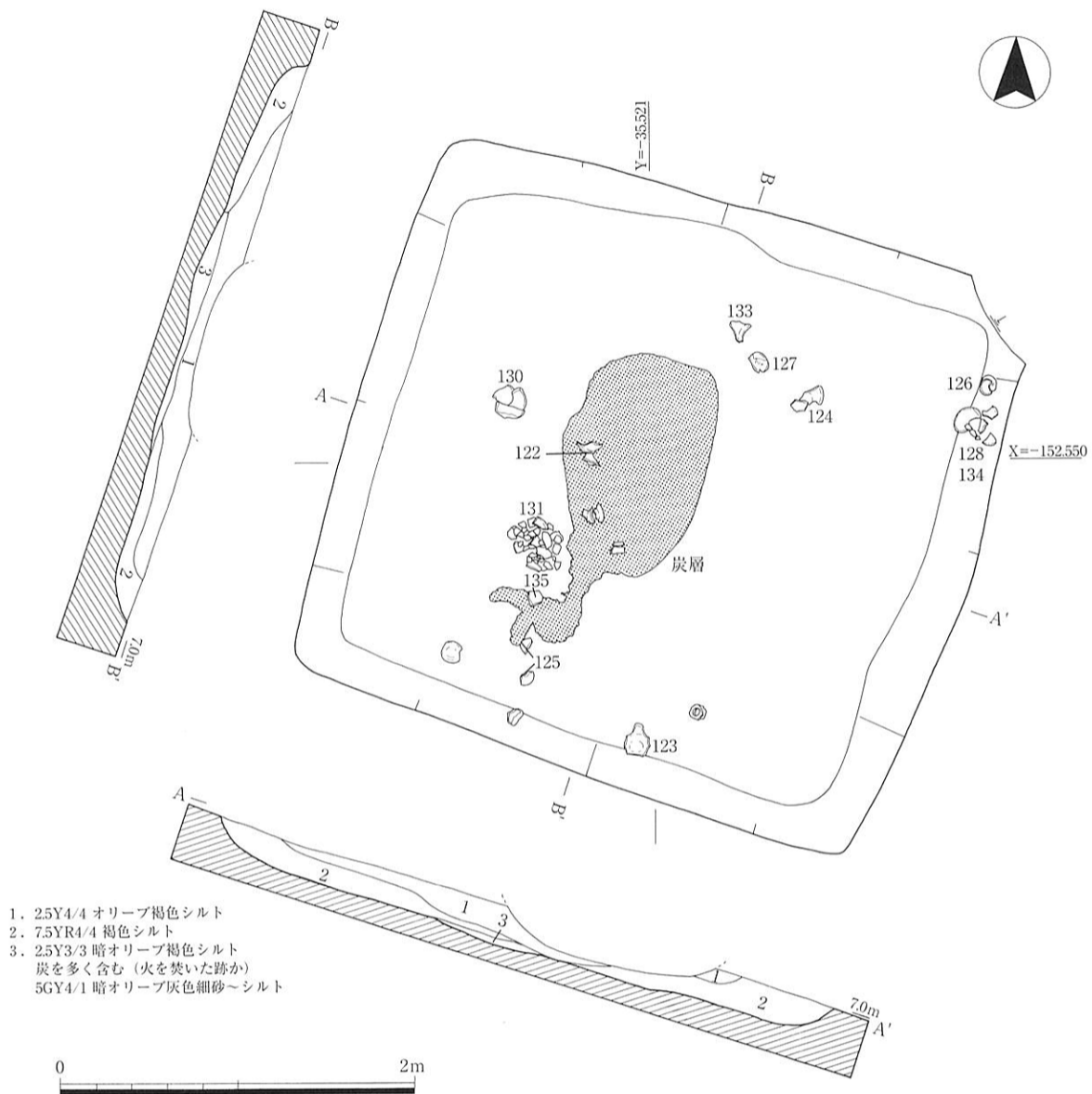


図26 第三面 98-7区 住居857

る。出土遺物は、原位置のものは図化した。床面に接して図48-123・図48-125が、炭層に接して図48-122・図48-135が出土した。その他も、床面から17cm上方の図48-130を除いては、床面からの距離は1～3cmであった。ほかに竪穴埋土からも庄内式土器が出土している。したがって、この住居857は庄内期に位置づけられる。

なお、住居の深さについて付言する。住居857はこの第三面で検出し、検出面からの深さは断面図に示すように20cm程度しかない。第三面直上の第二層はこの付近では20数cmの厚さがあるが、そこに包含されている遺物の平面分布を検討すると、住居857の上部に相当する範囲(K16f3-Iグリッド)では、体部外面にタタキの施された土器等37片と庄内式を含む土師器21片とが伴うのに対し、住居857の周辺部の第二層、例えばK16f2-IIグリッドではタタキのある土器等390片に対し土師器1片のみ、という出土状況である。したがって、住居857の立ち上がりは、本来は40～50cmないしそれ以上の高さがあったと推定できる。

住居865(図27)は98-7区北西部に位置する。ほぼ方位に沿う。方形だが、北辺だけがやや外方に

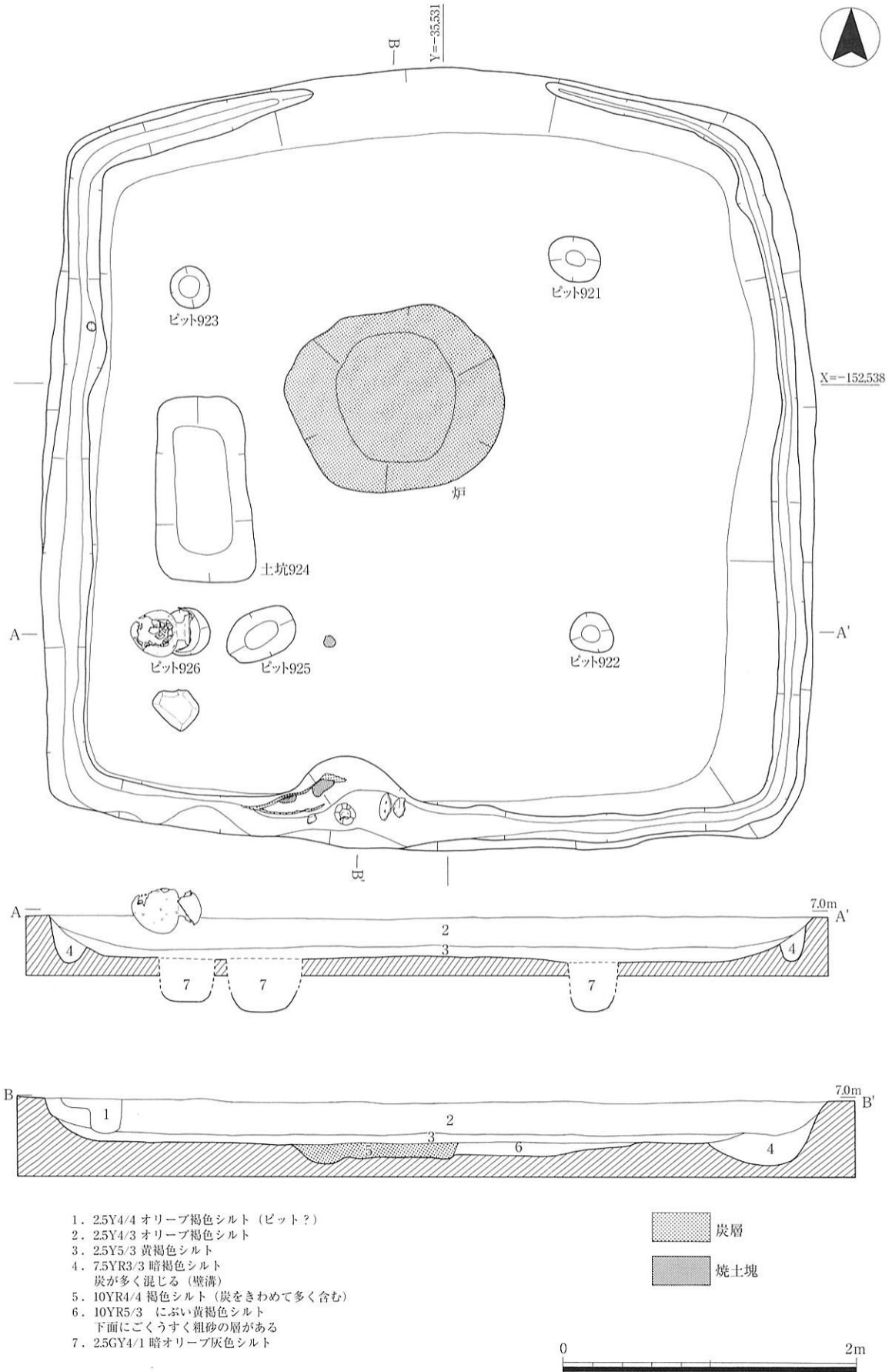


図27 第三面 98-7区 住居865

張り出す。東西、南北とも5.3mをはかる。外周に周堤は確認できなかった。壁溝は、北辺中央で1.6m途切れるがその他の部分では壁面に沿って巡り、埋土に炭が多くまじる。ベット状の高まりや間仕切り溝はみられない。床面については、断面図の3層は広く分布するが壁溝埋土の4層を覆っていることから、貼り床とは考えない。6層が火処である5層との関係から貼り床の可能性はあるが、平面的に分布範囲を明らかにできなかった。

火処は2ヶ所ある。ひとつは竪穴床面中央部の東西1.5m、南北1.3mの不整円形に広がる炭を多く含む層（5層）で、炉と考えられる。もうひとつは南辺中央部の竈状の施設である。壁溝が他に比べ広く、かつ15cmほど深くなり、焼土や炭が特に多い。その東側には、炭を含む層が住居内側に向かって折れる部分が壁溝検出レベルで認められ、竈の袖の可能性もある。一方、西側では炭を含む層が焼土とともに住居の内側に弧状に張り出している。壁溝の切れる部分と対辺にあること、高坏（図49-138）が壁溝底に接して逆位に据えられていることも加え、竈に類する施設と考える。

入口は、北辺が張り出し、壁溝が途切れ、竈状の施設と対辺になることから北と考える。

柱穴については問題がある。住居865の床面検出時には、サブトレンチを設定しこの第Ⅲ面のベース面を認識しつつ、柱穴の存在を想定しながら、結果的に第Ⅶ面（98-7区では第5面）よりも低いレベルまで掘り下げている（98-7区では第Ⅳ面・第Ⅵ面は広がっていない）。それでもなお、柱穴は確認できなかった。次に調査した第Ⅷ面では、住居865の範囲内からピット921・922・923・925・926と土坑924を検出した。これらの遺構と第Ⅲ面住居865との関係の有無を検討する。

まず肯定的な点。イ：ピット921・922・923・926の平面位置が第Ⅲ面竪穴住居865の4本の主柱穴にぴったりする。ロ：ピット922・923から、細片ながら古式土師器が各1片出土している。

次に否定的な点。ハ：住居865の床面とピットを検出した第Ⅷ面とのレベル差が小さい所で17cm、大きい所では25cmもある（図27の東西断面参照）。ニ：第Ⅷ面検出の掘立柱建物938（図39）〔ピット928（外面にタタキの施された後期と考えられる弥生土器片が出土している）・929・931・933または932で構成される〕と規模・方位ともに一致する。

以上イ～ニの点からいずれとも断定しがたいが、炭がまじり埋土を比較的容易に判別できそうな住居865の壁溝でさえ検出に困難が伴ったことと考え合わせると、第Ⅷ面検出のピットなどは住居865に伴う可能性の方が高いと判断する。とすれば、第Ⅷ面の土坑924も住居865に伴う可能性があり、貯蔵穴や作業穴といった用途が想定される。以上の検討を経て、図27には第Ⅷ面検出の遺構をも合わせた状態の住居865を掲載した。これら第Ⅷ面検出のピットと土坑については、第Ⅷ面でも記述する。

出土土器から、この住居865は庄内期に位置づけられる。

なお、この住居865などを調査した第Ⅲ面直上の第Ⅱ層掘削中に、完形ながら体下部に穿孔のある壺がほぼ水平に寝かせられ別個体の破片でその口縁部が覆われた状態で出土した。図27にはこの土器の出土状態を合成して掲げた。土器は床面より17cm浮いていて、さらに住居865の南西柱穴と覚しきピット926の真上にあたるので、居住中の住居と同時存在ではない。しかし、住居865出土土器とこの土器がともに庄内式に属することと、先に住居857で検討したように住居本来の掘り込みはさらに深かった可能性の大きいことから、住居廃絶後それほど時間の経たないうちに住居跡の窪みに据えられた土器棺の可能性はある。土器の内容はX線透視の後水洗選別したが、何も検出できなかった。

溝235・236は98-2区に位置し、北東-南西にのびる。出土した須恵器や土師器から古墳時代後期に位置づけられる。

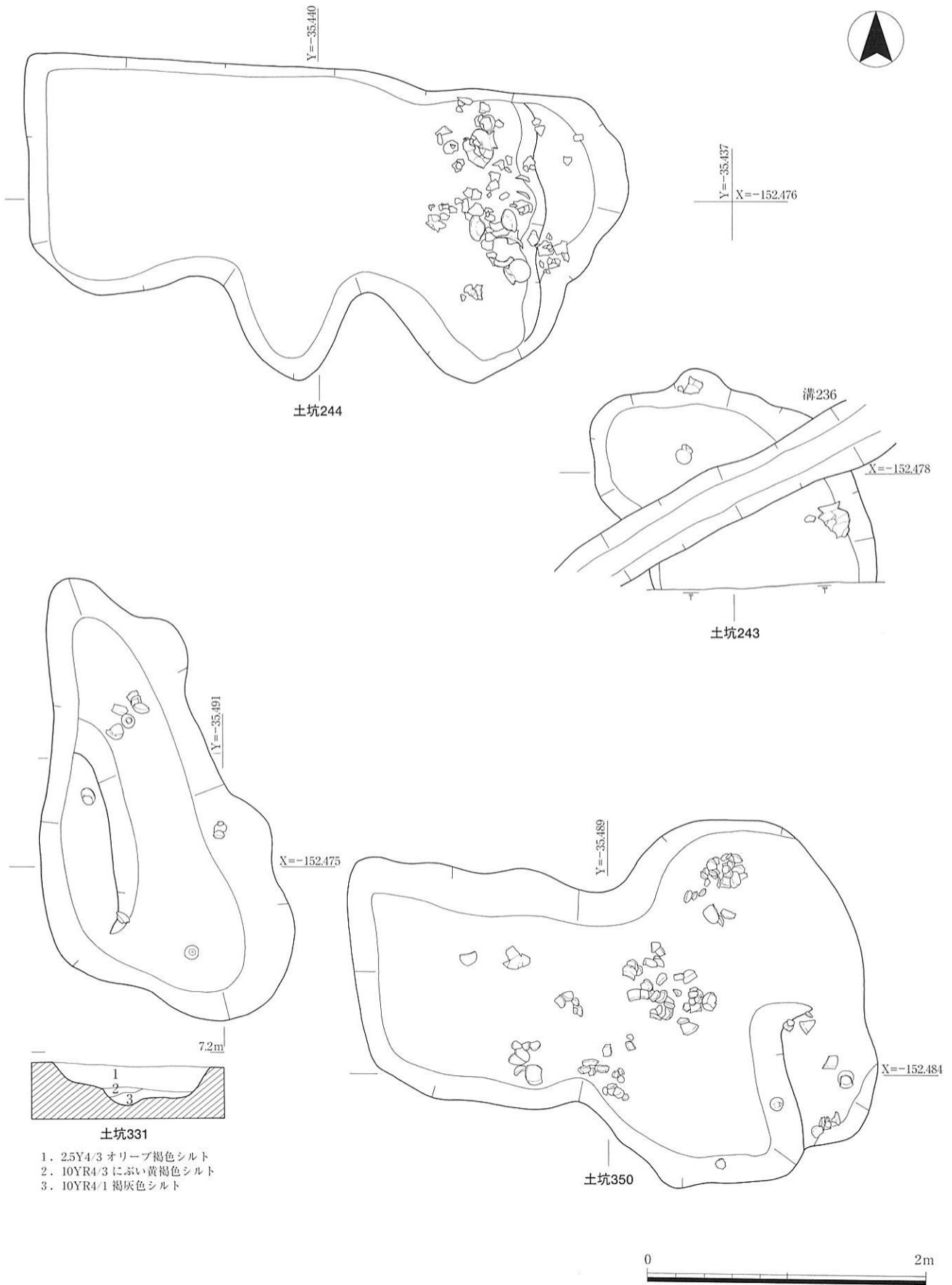


図28 第三面 98-2区 土坑243・244, 98-4区 土坑331・350 遺物出土状況

土坑243 (図28) は98-2区中央部に位置する。古墳時代後期の溝236に切られている。土師器43片と土師質埴輪? 1片が出土し、古墳時代前期に位置づけられる。

土坑244 (図28) は土坑243の北西に隣接する。北辺と西辺は直線的だが、他の2辺は不規則な曲線を描く。出土遺物には、須恵器17片、うち古墳時代中期8片も含まれるが、主に古墳時代前期の土師器356片出土し、該期と考えられる。

土坑435は98-3区北西隅に位置する。径4.3mに及ぶ。出土遺物は須恵器994片 (うち奈良時代1片、古墳時代中期852片)、土師器555片、古墳時代の製塩土器3片、焼土2片、計1558片で、古墳時代中期の土坑である。他に混入したと考えられる、瓦2片、瓦器1片、黒色土器A類1片が出土した。

土坑331 (図28) は98-4区中央部に位置する。須恵器62片 (うち古墳時代中期34片)、土師器125片、古墳時代の製塩土器11片、計198片出土し、古墳時代中期の土坑である。

土坑350 (図28) は、土坑331の南約7mにある。西半は方形、東半が円形の複雑な平面形を呈するが、遺物の時期やその分布をみても1つの遺構として矛盾はない。出土遺物は、須恵器141片 (うち古墳時代中期97片)、土師器257片、軟質系土器7片、古墳時代の製塩土器20片、計425片で、古墳時代中期と考えられる。

古墳時代と考えられるピットは18個である (表24)

ピット328 (図29) は98-4区北部にある。第Ⅲ面のピットの中で唯一埋土が上下の2層に分かれる。須恵器2片 (うち古墳時代中期1片) と土師器1片が出土し、古墳時代中期のピットである。

ピット群の並びをはじめ、埋土や深さをも勘案すると、次の掘立柱建物936が復原できる。

掘立柱建物936 (図29) は98-2区北東部に位置する。ピット223を南隅とし、そこから東北東に並

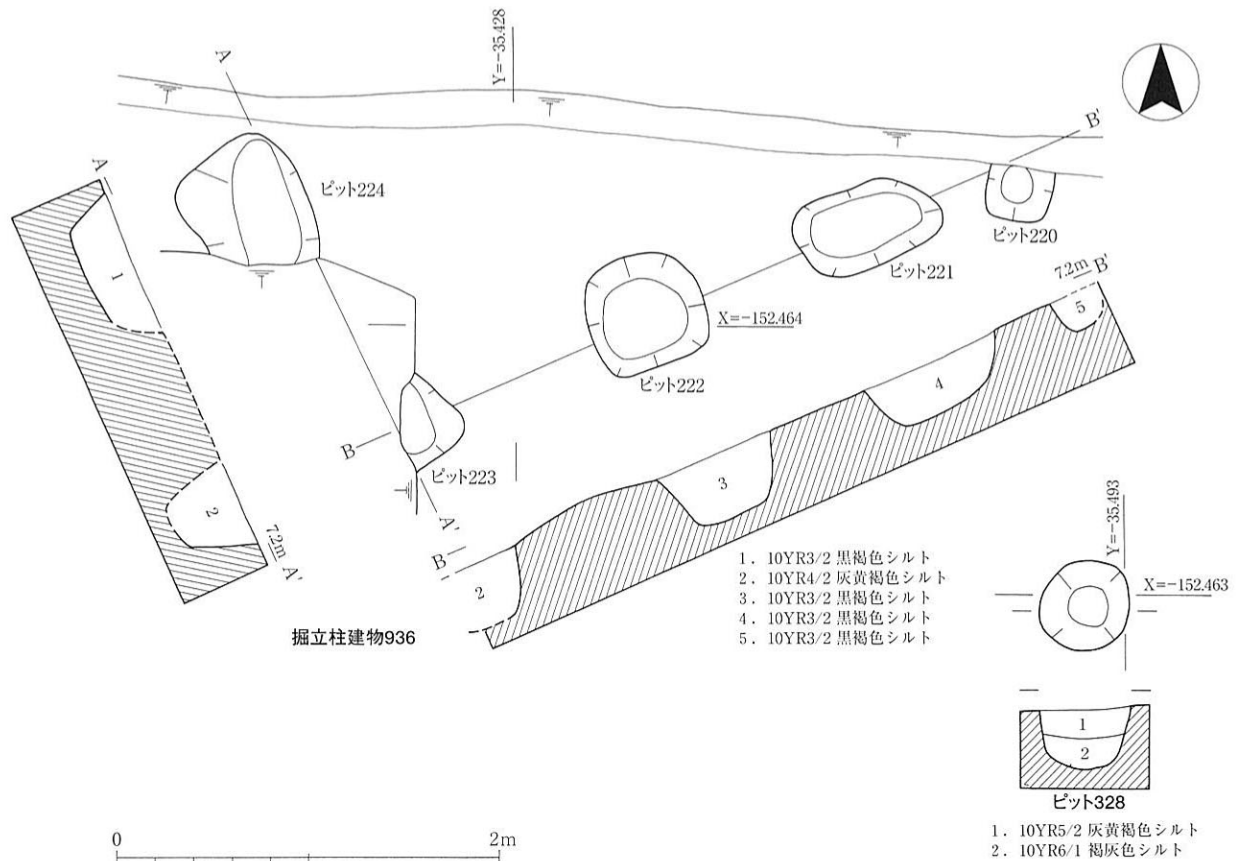
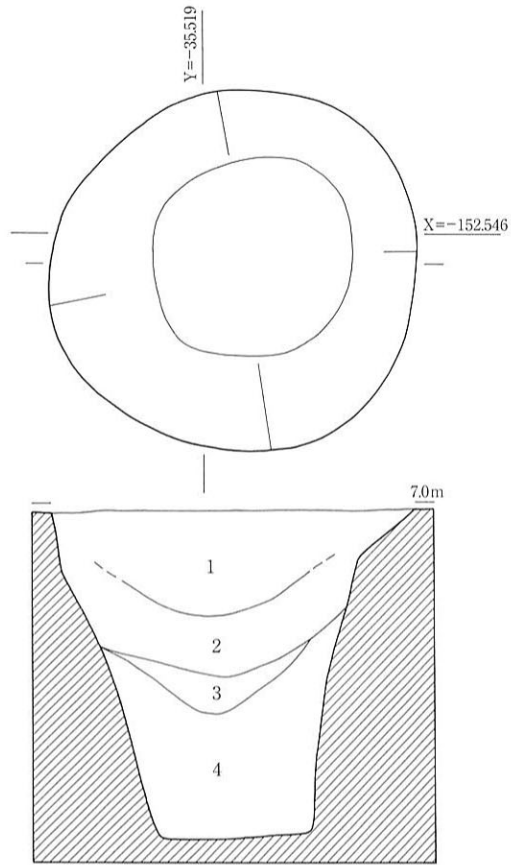
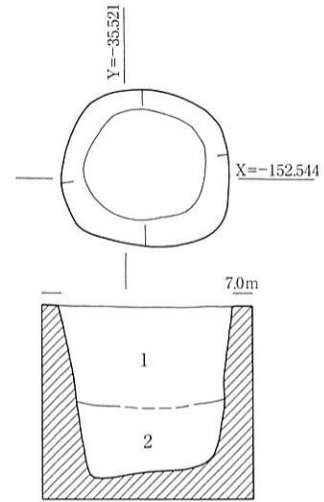


図29 第Ⅲ面 98-2区 掘立柱建物936, 98-4区 ピット328



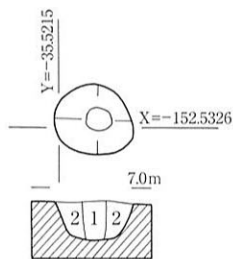
井戸788

1. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト
2. 5GY3/1 暗オリーブ灰色細砂～シルト炭混じる
3. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト～微砂
4. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色細砂～シルト



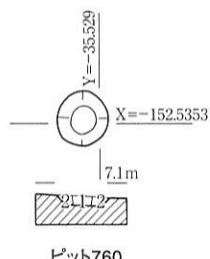
井戸850

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトに
2.5Y4/1 黄灰色シルトのブロック混じる
2. グライ化によって青灰色を呈する



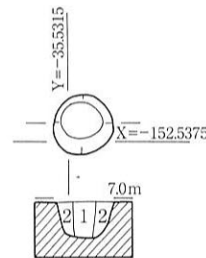
ビット752

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト



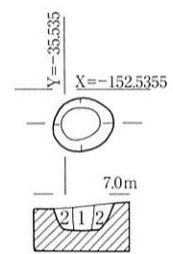
ビット760

1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
2. 2.5Y5/1 黄灰色シルト



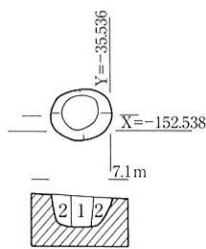
ビット767

1. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト



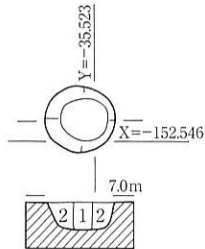
ビット769

1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト



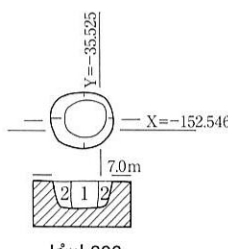
ビット770

1. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト



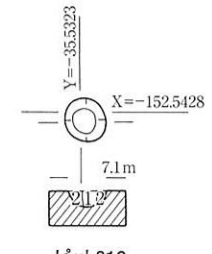
ビット799

1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト



ビット802

1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト



ビット810

1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト

図30 第三面 98-7区 井戸788・850, ビット752・760・767・769・770・799・802・810

ぶピット222・221・220と、北北西に並ぶピット224とで構成される。現状では3間×1間だが、北側が調査範囲外にのびるので全体の規模は不明。柱間は1.3m程度。主軸方位は東北東-西南西。各ピットの深さは21~36cmをはかる。南隅のピット223とその東隣のピット222が建物主軸に沿った隅丸方形を呈し、ピット221も主軸方向に長い。各ピットの埋土は単層で、柱痕や根石は検出していない。建物を構成する全ピットから須恵器や土師器が出土し、それらから古墳時代中期と考えられる。

落込み217は98-2区北東隅に位置する。埋土は10YR3/1黒褐色シルト。須恵器37片（うち古墳時代中期32片）、土師器148片、弥生時代後期の土器1片、古墳時代の製塩土器3片、計189片出土した。この埋土と出土遺物組成は、98-1区北西部で第Ⅱ層とした包含層の状況と同じで、落込み217はさらに東側の98-1区に広がっていたと考えられる。

落込み416は98-3区中央部に広がる。北西-南東を主軸としその長さ約21m、東西幅約8m。北部はなだらかだが、南部ではかなりの傾斜で深さ約80cmまで落ち込む。埋土は断面図（図5）に示す通り。出土遺物は、上層（E層）では古墳時代中期の須恵器と土師器、下層（F層）では古墳時代前期の土師器がほとんどで、時期差がある。

5) **時期不詳** 上述以外にも須恵器や土師器などを出土する遺構も多いが、細片がほとんどで時期を特定するには至らない。

以下に、時期不詳の中でも図示すべき遺構として、井戸2基とピット8個を取り上げる。その他の溝、土坑、ピットについては一覧表（表22~24）を参照されたい。

井戸788（図30）は98-7区中央部に位置する。素掘り井戸。平面円形で、径191~198cm、深さ174cm。出土遺物なし。

井戸850（図30）は井戸788の北西側にある。素掘り井戸。やはり円形で、径83~90cm、深さ91cm。出土遺物は須恵器1片、土師器2片しかなく、時期不詳。

ピット752・760・767・769・770・799・802・810（図30）は、いずれも98-7区のピットである。検出時に埋土が中央部と周辺部とで微妙に異なっていた。中央部をいわゆる柱痕と判断する。他のピットは少量ながらも土師器片などを出土するものが多いのに対し、これら柱痕のみられるピットからは遺物を検出できなかった。

第Ⅳ面遺構 古墳時代

98-1区と98-2区で調査した（図31・付図4）。検出遺構は、溝6条、土坑12基、ピット28個、落込み1ヶ所、計47ヶ所である。さらに地震に伴う噴砂の痕跡も確認した。面の高さは、98-1区東部でおよそT.P.+6.4m、98-2区西部ではT.P.+6.8~7.1mと、南西に向かって高まる傾向にある。

溝6条のうち、98-1区の**溝98**は南北、その他の98-2区の5条は東西方向にのびる。個々の溝については表22を参照にまとめた。

土坑は、98-1区南西部で3基、98-2区北部で6基、同南東部で3基、計12基検出した。

土坑100（図32）は98-1区南西部に位置する。平面不整形で、いわゆる二段掘りになる。土師器29片出土。

土坑288（図32）は98-2区北部に位置する。平面楕円形で、埋土が2層に分かれる。出土遺物は、須恵器18片（うち古墳時代中期3片）、土師器81片、古墳時代の製塩土器5片、計104片で、古墳時代中期に位置づけられる。

その他の土坑および寸法などについては表23に掲げる。

ピット28個の概略は、表24に示す通り。98-1区北部のピット94・95・96は、心々距離それぞれ2.9mと2.0mでほぼ南北にならぶ。98-2区の北部、溝309の北側には土坑とともにピットが多く分布し、直線的に並ぶものもあるが、掘立柱建物などは見いだせなかった。

落込み310 (図32) は98-2区北西部に位置する。主軸を北西-南西にもち、長径7.5m、ほぼ中央で北東に突出している部分の幅2.5mをはかる。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト。図136・137のような古墳時代前期の土師器が893片出土した。

噴砂を98-2区で検出した。数~10数cmの幅で、第IV面を北北西-南南東に引き裂いている。この状況は断面 (図5) でもみられたが、砂が噴出した面自体は確認できなかった。

第V面遺構 ————— 古墳時代

全調査区で調査した (図33・付図5)。検出遺構は、溝15条、井戸5基、土坑10基、ピット59個、川2条、計91ヶ所である。

この第V面は、大局的にみると2つの部分に分けられる。ひとつは98-5区の西部と98-7区の大部分を占める安定した地表面で、遺構はこの範囲に集中する。面の高さは、98-7区全域と98-5区南西部でT.P.+6.7~6.8mとほぼ平坦だが、98-5区北西部ではT.P.+6.5mまで下がる。

もうひとつは、98-6・7区の境から98-5区中央部へと北北西に検出された旧楠根川の西岸以東で、楠根川旧河道を埋めた砂層の上面である。98-2区で顕著のように、砂層上面に現れた土質の違いや馬背状の高まりの方向も岸にはほぼ平行している。旧河道の砂層上面なので相当の起伏がある。T.P.+6.5~6.9m程度の部分が広いが、98-1区東部がおよそT.P.+5.9mと低く、98-2区南西部と98-4区北西部

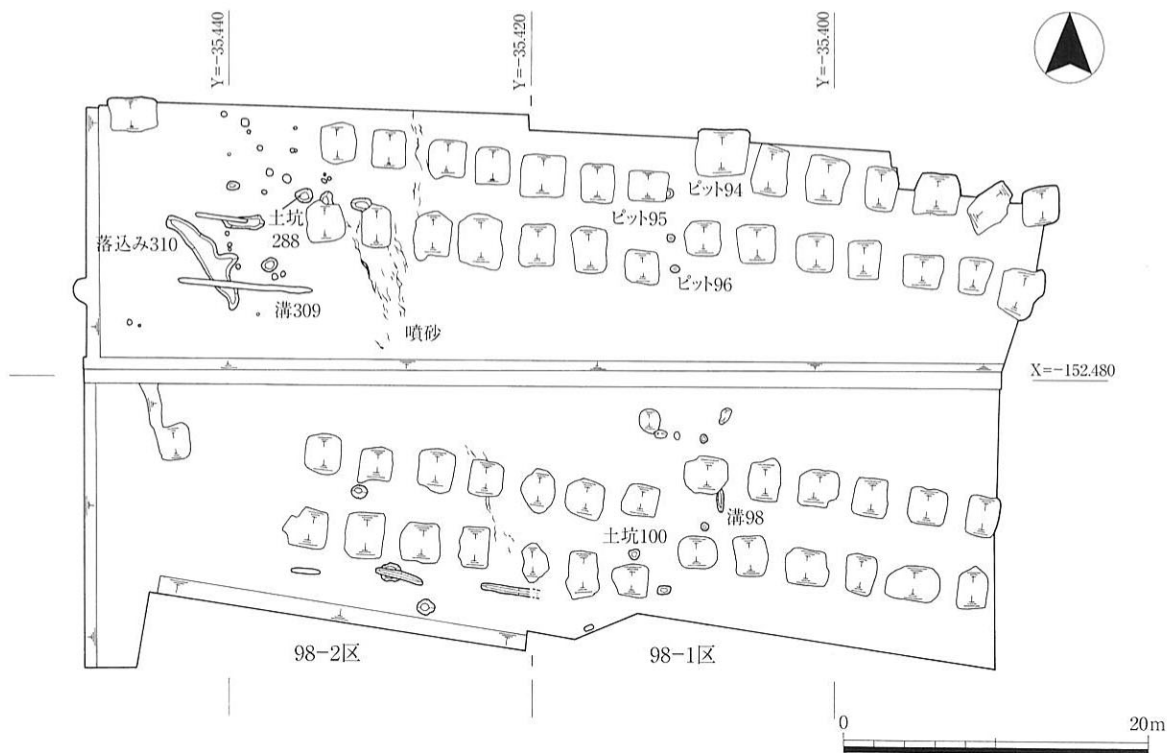
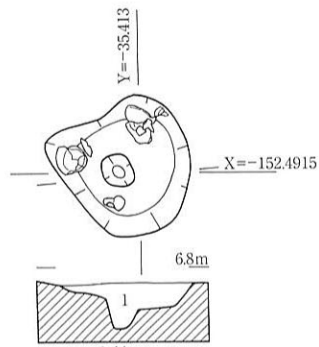
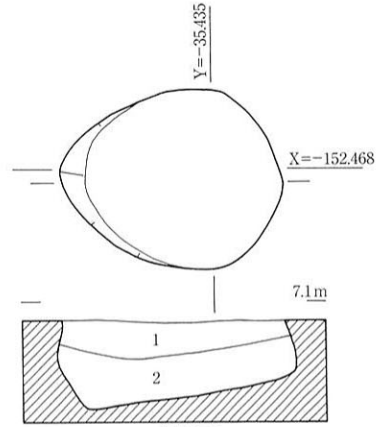


図31 第IV面 遺構配置図



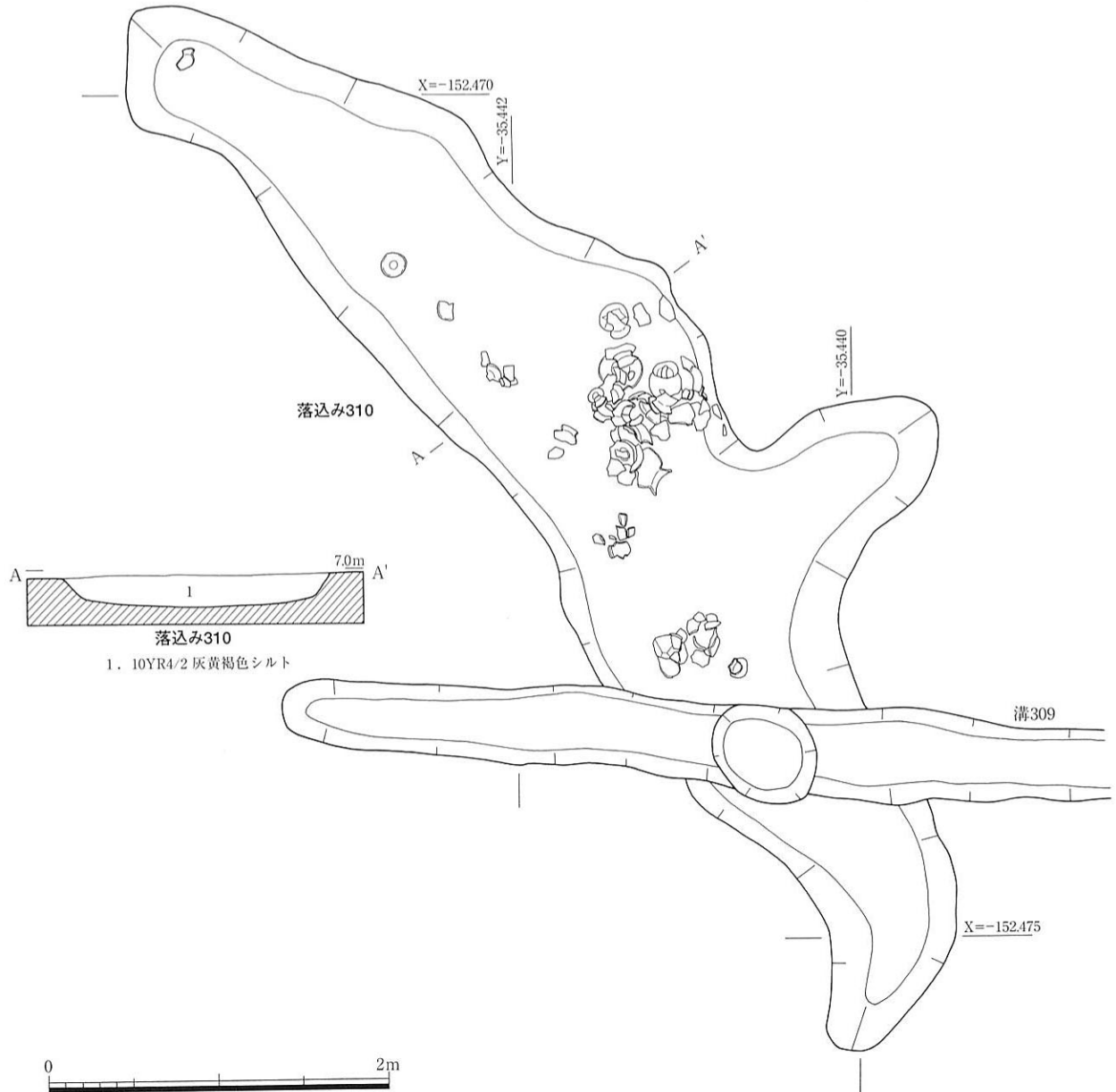
土坑100

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト



土坑288

1. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～シルト
2. 10YR4/2 暗黄褐色シルト



落込み310

1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト

溝309

X=-152.475

図32 第IV面 98-1区 土坑100, 98-2区 土坑288, 落込み310

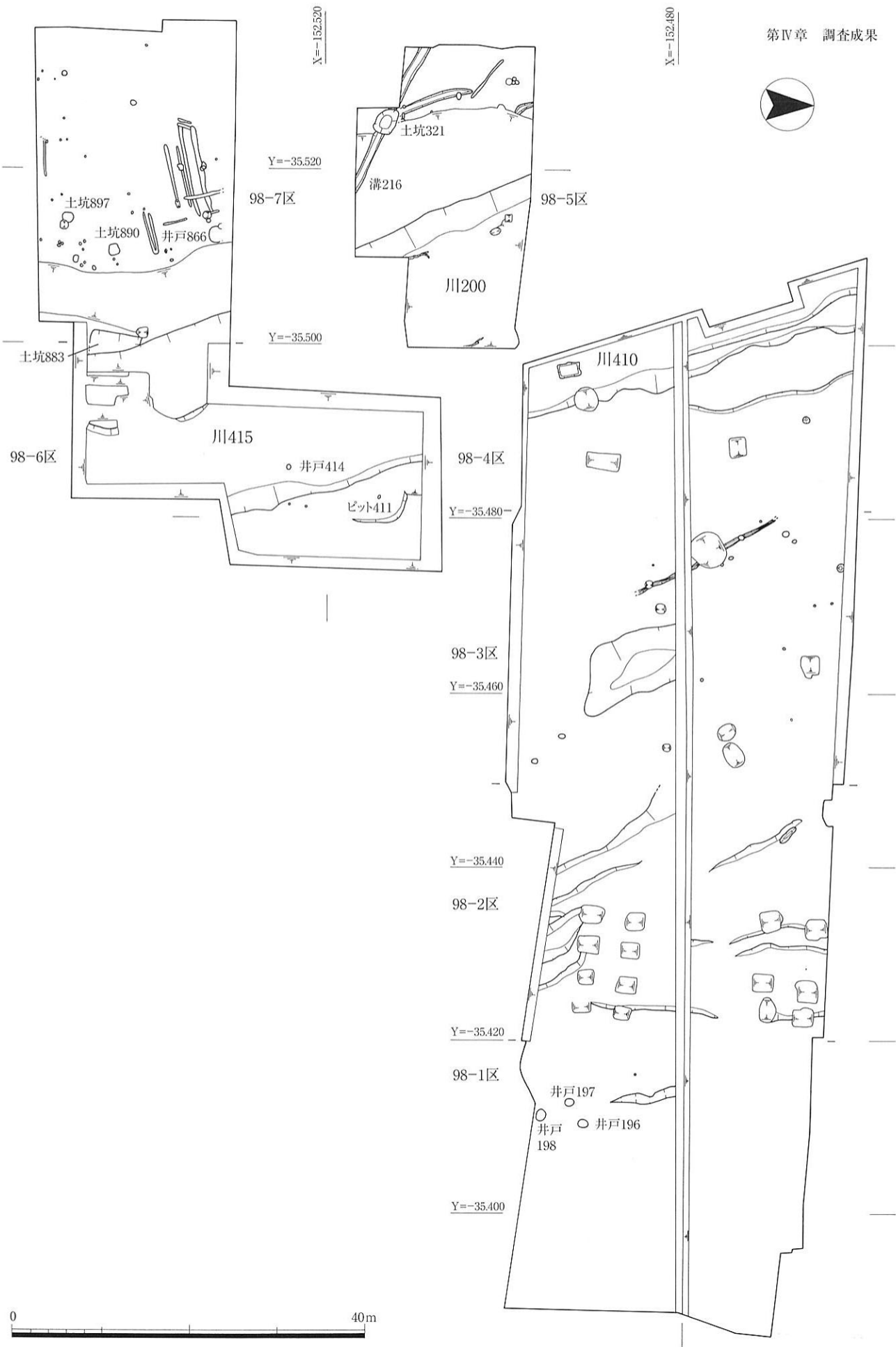


図33 第V面 遺構配置図

ではT.P.+7.1~7.2mと高い。

溝を15条検出したが、旧河道部では1条のみで、川岸部の98-5区西部に4条、98-7区に10条みられる。その方位は、98-5区では北西方向にのびる溝が3条みられるが、旧河岸に平行あるいは直交するものが多い。

溝216は当初、第V面ではその輪郭ははっきりせず、98-5区の西辺側溝でも溝の断面を確認できなかった。しかし、第V面直上の第IV層掘削時にこのグリッドでは土器が多く、たとえば溝216の検出レベルがおよそT.P.+6.6mの部分では、土器の上部はT.P.+6.83ないし7.00mと数10cmも高いレベルから土器が多く出土していた(図34)。第V面を精査していく過程で溝部分が周辺に比べごくわずかながら砂質が強くなり、溝底に至るにつれて周辺との土質の差が明瞭となった。したがって、溝216の本来の掘り込み面は検出した第V面より相当高かったと考えられる。出土遺物は計334片。須恵器5片、土師器6片、土師器質埴輪1片もあるが、弥生土器321片(うち後期274片)と弥生時代の製塩土器?1片から弥生時代後期の溝と考える。

その他の溝については表22にまとめた。

井戸は楠根川旧河道の砂層上面で4基、それ以外では98-7区で1基調査した。

井戸196・197・198は98-1区南部に位置する。

井戸196(図35)は、径115~120cmの平面不整円形を呈し、検出面からの深さは25cm。柄穴のある部材などとともに古式土師器4片が出土し、古墳時代前期に位置づけられる。

井戸197(図35)は木組井戸。掘形は径84~99cmの不整円形。井戸側は板材を縦に並べてあるが、漏斗状に開いた状態で検出した。古式土師器1片が弥生土器3片(うち後期1片)出土。古墳時代前期の井戸か。

井戸198(図35)も木組井戸。掘形は径110~158cmの不整形を呈する。くり抜いた木を井戸側としている。井戸側内より完形品など古式土師器221片と弥生土器6片、計227片が出土し、古墳時代初頭と考えられる。

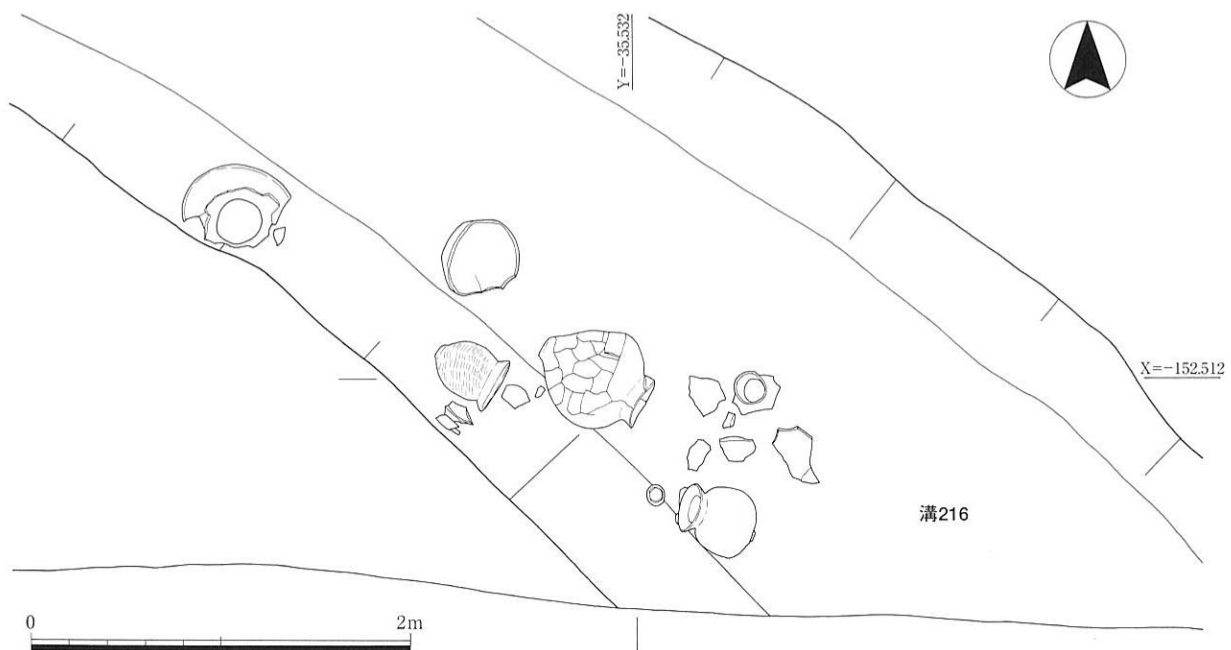


図34 第V面 98-5区 溝216 遺物出土状況

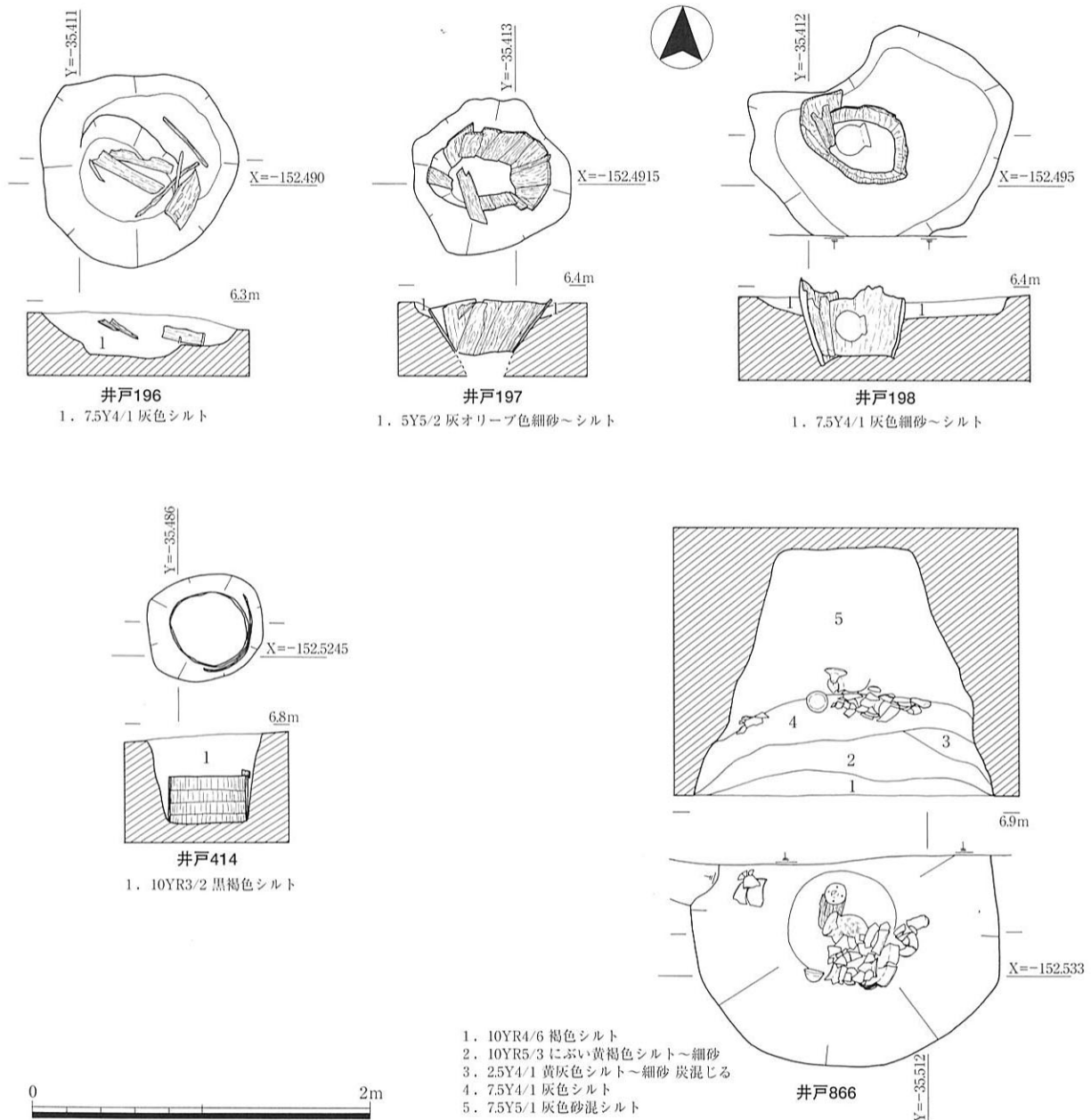


図35 第V面 98-1区 井戸196・197・198, 98-6区 井戸414, 98-7区 井戸866

井戸414 (図35) は曲物井戸。98-6区ほぼ中央に位置する。径64～70cmの平面円形の掘形の底に径45cmほどの曲物が据えてあった。砂層中ということもあり、井戸最下部の水溜と考えられる。緑釉陶器1片、黒色土器A類3片、須恵器1片、土師器3片(うち平安時代1片)、計8片出土し、平安時代前期と考えられる。

98-7区では、旧楠根川の西岸部に井戸866が位置する。

井戸866 (図35) は素掘り井戸。北部を側溝に切られているが、掘形は平面円形で、径約1.8m、深さ1.5m。中層の7.5Y4/1灰色シルトから、古墳時代初頭(原田編年布留I期)の土師器167片が出土した。

なお、調査時には以下の4基の井戸も第V面で検出したが、下記の理由によりそれぞれ所属遺構面を変更した。遺構の内容は、変更先の各遺構面に記述済。

98-1区井戸195と98-3区井戸538については、その構造と出土遺物から中近世の所産と判断し、

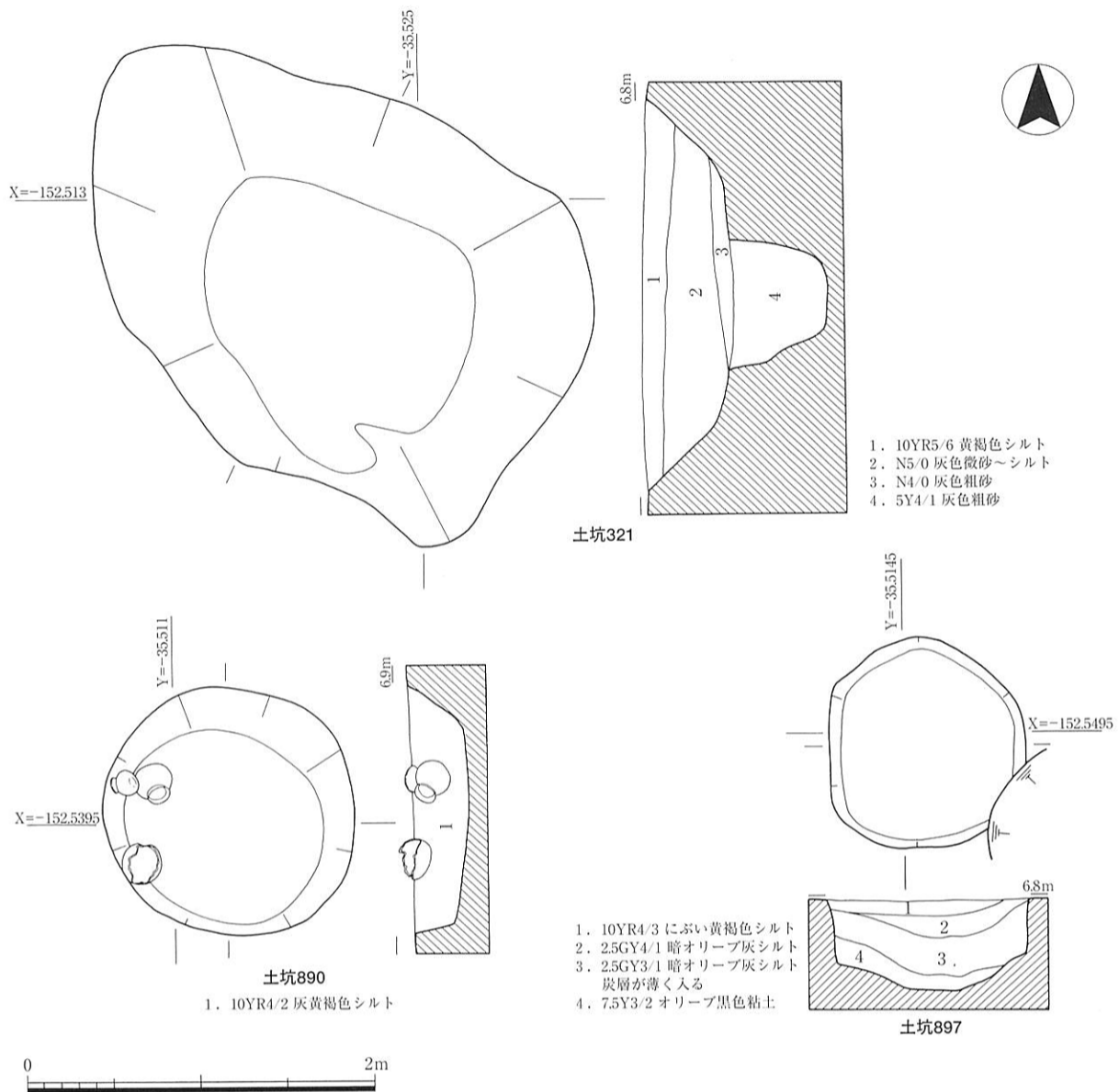


図36 第V面 98-5区 土坑321, 98-7区 土坑890・897

第三面の遺構として記述済。

98-7区井戸903は平面径50～55cmの円形で、深さ28cm。曲物が底部に痕跡的に残っていた。しかし、調査後再検討した結果、その位置と出土した奈良時代の土器から第三面土坑822の掘り残しと判断した。

98-7区井戸916は、この面では北東-南西に長い楕円形で、長径132cm、短径100cm、深さ96cmの素掘り井戸として検出した。しかし、存在位置と出土遺物に平安時代の土器類が存在することから、第二面土坑568の掘り残しの可能性が大きいと判断した。

土坑は楠根川旧河道の砂層上面で4基、川岸部では98-5区で2基、98-7区で4基、計10基検出した。

土坑321(図36)は98-5区拡張部で検出した。須恵器31片(うち飛鳥時代1片、古墳時代中期4片)、土師器51片(うち奈良時代3片)、計82片出土し、奈良時代に位置づけられる。

土坑883は98-7区東端で検出したが、98-6区では見いだせなかった。角部を2ヶ所もち、平面規模も大きい、ごく浅く、他の遺構とは様相を異にする。出土遺物は土師器5片のみ。時期は不詳。

土坑890(図36)からは、底面よりやや浮いた状態で3個体の土器がまとまって出土した。合わせて土師器20片、弥生土器4片、土弾1点が出土し、古墳時代前期と考えられる。

土坑997(図36)では、他の土坑が比較的単純な堆積状況を示すのに対し、埋土は4層に分けられる。須恵器2片、土師器45片、土錘24点、計71点出土。多量の土錘が注目される。出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

その他の土坑は表23に掲げる。

ピットは59個調査した。大半は平面円形ないし楕円形で、断面は碗形または皿形を呈する。表24に寸法などをまとめた。

川とした部分は、楠根川旧河道を埋めた砂層のうち最終埋没に近い一群の砂層を指す。本来一連の河川堆積ではあるが、調査の関係上、98-4区では川410、98-6区では川415、98-5区では川200(川200はすでに第Ⅲ面で検出していたが、最初に調査に着手した98-5区では、奈良～平安時代の川と古墳時代の川とを分離できなかった。第Ⅴ面に関係するのは後者)と呼ぶ。第Ⅴ面での川幅は23～26m、深さは1.0m程度である。出土遺物は、陶磁器1片、緑釉陶器4片、灰釉陶器3片、瓦26片、瓦器11片(うち12世紀代5片、11世紀代1片)、黒色土器A類21片、須恵器320片(うち平安時代2片、奈良時代12片、古墳時代後期1片、同中期85片)、土師器2279片(うち平安時代100片、奈良時代1片、古式土師器3片)、韓式系土器2片、弥生土器192片(うち後期41片、中期1片、前期1片)、製塩土器6片(うち奈良時代3片、古墳時代2片、弥生時代1片)、土製品1点、サヌカイト4点、石製品2点、その他1点、計2873点出土。

ただし、断面(図5)に示すように旧楠根川の砂層を完掘したのではない。部分的にしる完掘したのは、次の第Ⅵ面である。

第Ⅵ面 弥生～古墳時代

98-2区中央部と98-6区南半で、旧楠根川の川底を検出した(図37・付図6)。

98-2区では、最厚4.4mにおよぶ第Ⅴ層の砂層を掘削し、シルトの川底に到達した。川底のうち北東部の浅い部分はT.P.+3.9～4.2mだが、その上に南東から北西にのびる高まりがあり、その上面はT.P.+4.4～4.5mである。南西部の川底はより深く、T.P.+2.6～2.9mとなる。おおむね平坦であるが、直径70～80cmほどの半球状の高まりが2ヶ所存在した。浅い部分と深い部分とでは、北北東から南南西に向けて、45°よりきつい傾斜で100～115cmもの段差がついている。

98-6区南半では、第Ⅴ面川415の底から砂層を厚い部分ではさらに1.2mほど掘り下げ旧楠根川の川底を検出した。川底のレベルは川415の西岸際でT.P.+5.1m、北東隅ではT.P.+4.65mと最も深くなる。また、北部に径約3.4m、深さ80cmの土坑状のくぼみが存在するが性格は不明。

その両区の間98-3区と98-4区では、第Ⅴ層をおよそT.P.+4.4mまで掘り下げたが川底には至らなかった。

以上のように、旧楠根川の川底は98-2区では南西に向かって、98-6区では北東に向かって深くなっている。調査した範囲内での最深地点は98-2区南西隅で、そのレベルはT.P.+2.6mであった。

第Ⅶ面遺構 弥生時代

98-7区のみ調査した(図38)。東部は第Ⅲ面川719により削り取られている。検出遺構は、水田18枚である。面の高さはT.P.+6.5～6.7mで、東側が高い。

調査時に土坑918とした遺構は、主軸を北からわずかに東にとり、長径150cm、短径72cm、深さ11cm。

埋土は2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～細砂。須恵器1片、土師器21片、弥生土器11片、計33片が出土。切り合いからみると水田畔畦より新しく、須恵器・土師器の存在とその位置からすると、第Ⅱ面土坑577下層埋土の掘り残しと考えられる。

水田（写真2）は調査範囲の北側で7枚、南側で11枚、計18枚検出した。その両部分とも東部でT.P.+6.6m台の半ば、西部でT.P.+6.4m台の後半と、東から西に向かって10数cm低くなる。畔畦の検出されない部分は、周辺の水田面より東西方向に馬背状に5～10cm程度高まっている。畔畦は方位に対して約45°振れているので、地形的な高まりには沿わない。畔畦は下底幅20～40cm、上面幅10～25cm、検出高2～5cm程度で、水口あるいは補強材などはみられなかった。面積は水田949が約31.5m²、水田953が約42.2m²、その他も20m²台後半から40m²程度であろう。また、大畔畦や水路は確認できていないが、面の高さ分布と畔畦の方向からすると馬背状の高まり部分にそれらを想定することは難しい。

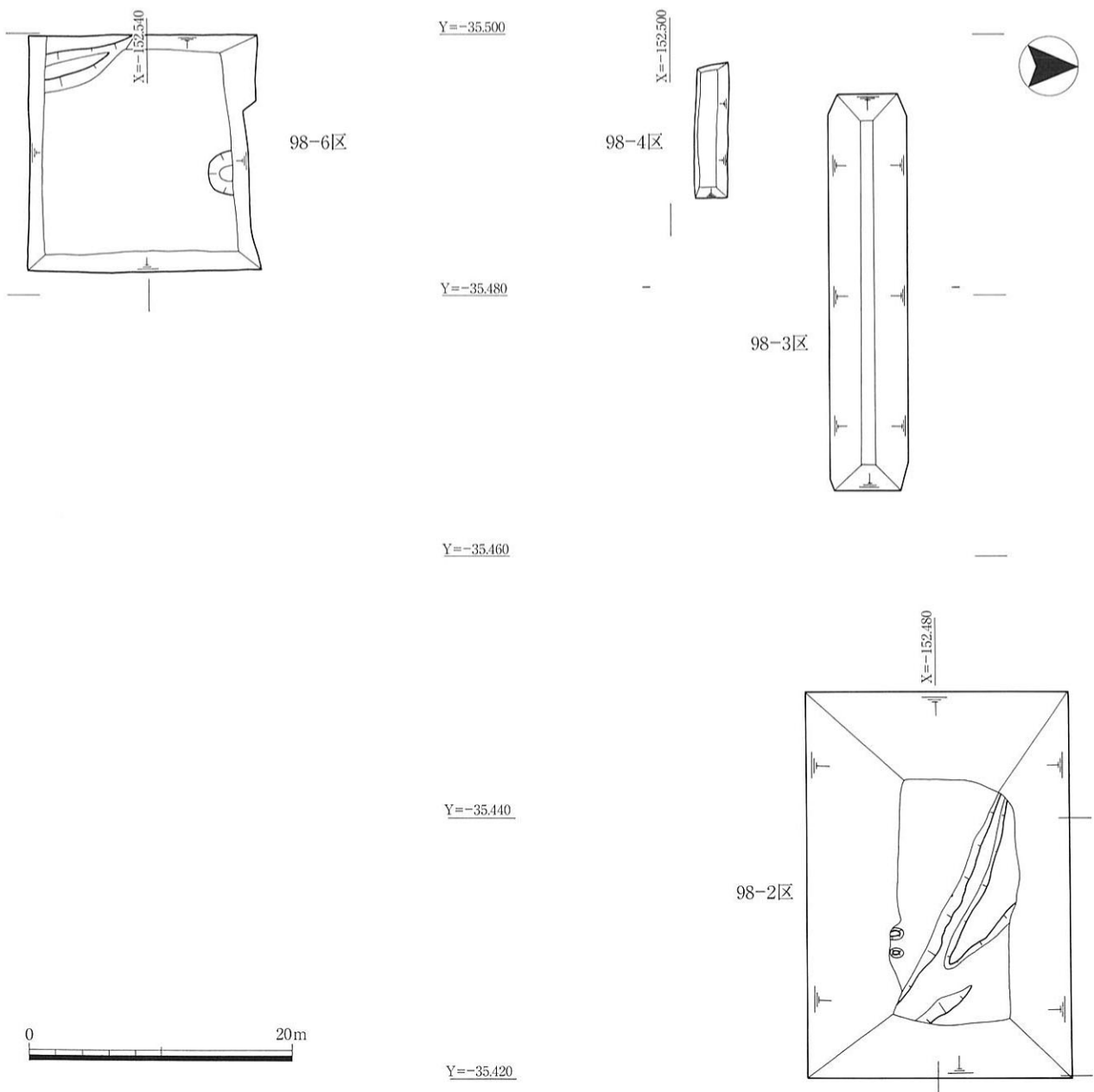


図37 第Ⅵ面 遺構配置図

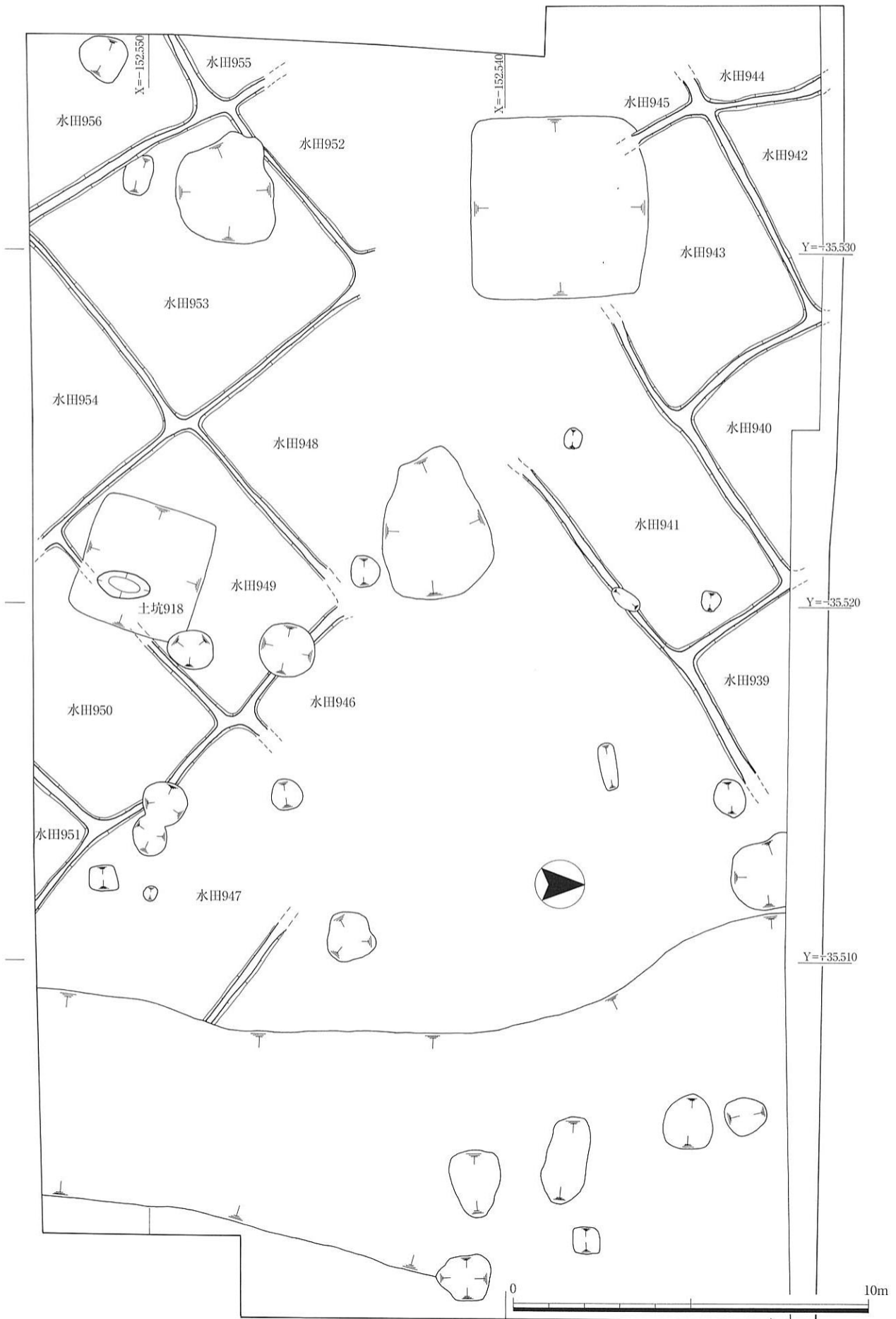


图38 第七面 水田跡

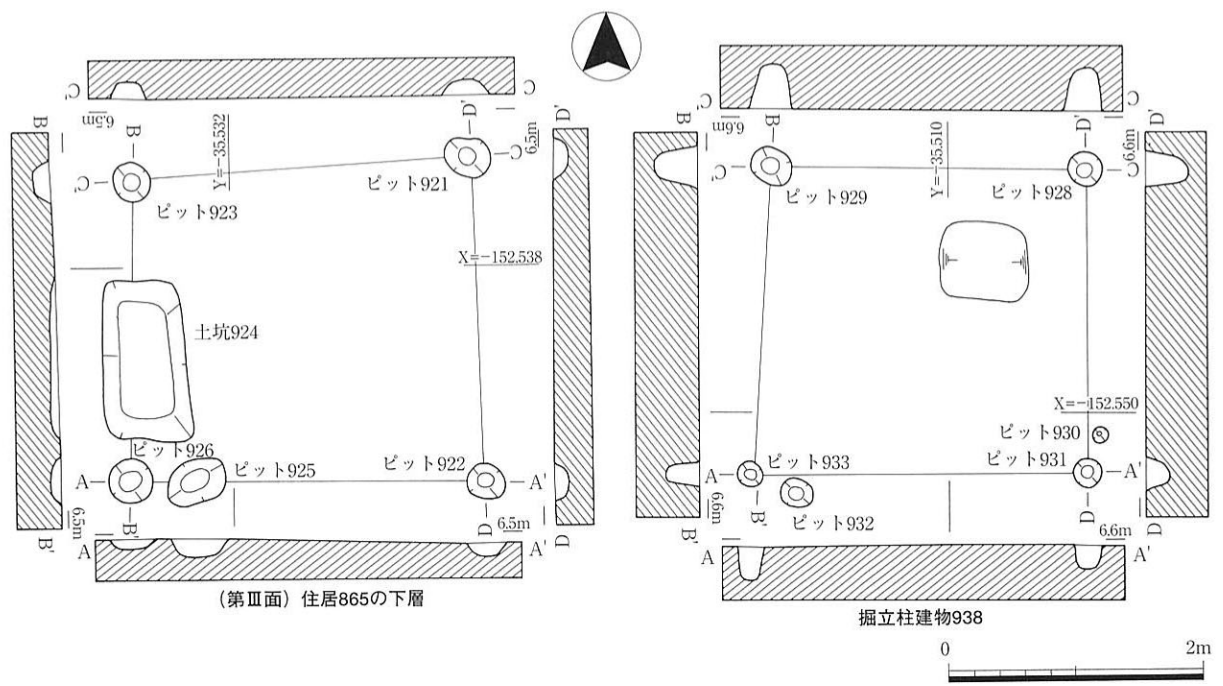
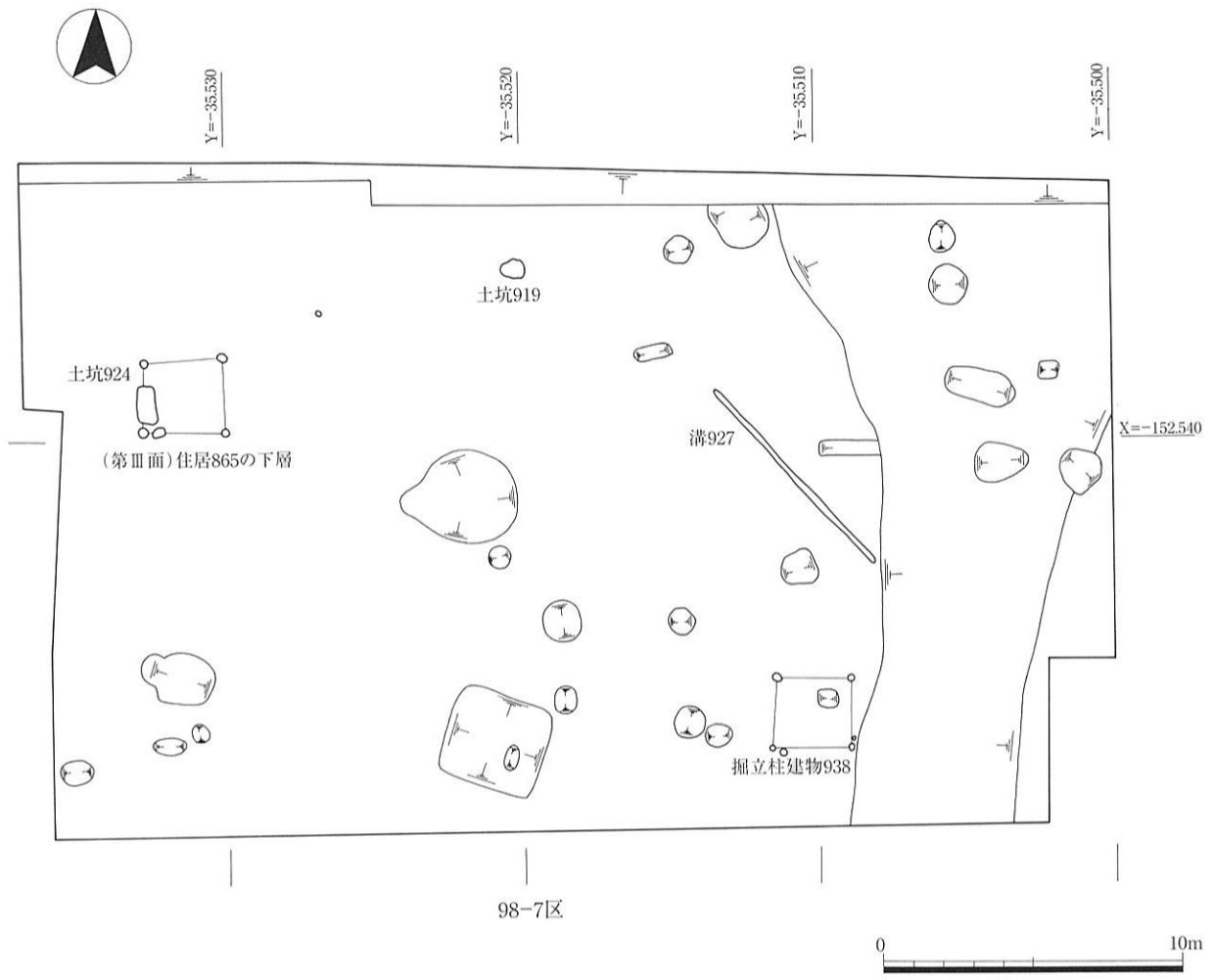


図39 第八面 遺構配置図 (上) (第三面) 住居865の下層 掘立柱建物938 (下)

第Ⅷ面遺構 ————— 弥生時代

98-7区のみ調査した(図39)。第Ⅷ面同様、東部は第Ⅲ面川719により削り取られている。検出遺構は、溝1条、土坑2基、ピット12個、掘立柱建物1棟、計16ヶ所。面の高さはT.P.+6.4~6.6mで、第Ⅷ面同様東側が高い。

溝927は、南東から北西にのびる。長さ約8m、幅23~32cm、深さは3cmほどしかない。埋土は10YR4/6褐色シルト。出土遺物なし。

土坑を2基検出。

土坑919は東西78cm、南北57cmの不整楕円形で、深さ13cm。埋土は10YR4/4褐色シルト。弥生土器2片出土。

土坑924は隅丸長方形で、南北133cm、東西66cm。7cmと浅く、埋土もベース面とあまり変化ない。出土遺物なし。なお先述のように、この遺構は第Ⅲ面竪穴住居865に伴う可能性がある。

ピットは12個あり、北西部で6個、南西部で6個検出した。ピット個々のデータは表24に譲る。

南西部のピット群は、全て同じ埋土で規模も**ピット930**を除いてほぼ類似する。

ピット928・929・931・933(または**932**)が、**掘立柱建物938**(図39)を構成する。建物の東側は上層の川で削られているのでさらに東側にのびる可能性はあるが、現状では1間×1間、柱間約2.5mで面積約6.3m²。ほぼ方位に則る。掘立柱建物938関連の遺物としては、ピット928から外面にタタキの施された後期と考えられる弥生土器片が1点だけ出土しているため、該期と考えられる。

北東部の**ピット921・922・923・926**と**土坑924**(以下「ピット921等」とする)については、第Ⅲ面の住居865の項で述べたように、本来は第Ⅲ面の遺構であったと考える。ただし、ピット921・922・923・926を第Ⅷ面の掘立柱建物としてみた場合、1間×1間、柱間2.4~2.8mで面積約6.9m²、ほぼ正方位と、掘立柱建物938によく似ている。このことから、以下の3つの場合が考えられる。

イ：出土遺物を最重視し、掘立柱建物938は弥生時代の第Ⅷ面の遺構、ピット921等は庄内式期後半の第Ⅲ面住居865の柱穴とする。

ロ：第Ⅲ面での遺構の検出が困難だったことを最重視し、ピット921等のみならず、それらとの類似性から掘立柱建物938も第Ⅲ面に帰属させる。

ハ：現場での検出状況を最重視し、掘立柱建物938・ピット921等とも第Ⅷ面の遺構とし、ピット921等と第Ⅲ面住居865との重複は偶然と考える。

本報告では、上述のようにイの立場をとる。ただし、ロについても可能性は否定できない。とすれば、98-7区第Ⅲ面では竪穴住居2軒と掘立柱建物1棟が検出されることになり、集落構成上興味深い事例になる。

第3節 遺構出土遺物

今回の調査では931基（現場で検出した遺構数、欠番を除く）の遺構から総数60287片の遺物が出土したが、それは出土総数124034片の約50%を占める。この60287片の内訳は土師器が40001片と最も多いが、それには便宜上庄内式土器を含ませている。以下須恵器13942片、弥生土器1791片、製塩土器1753片（うち古墳時代製塩土器59片）、瓦器852片、黒色土器716片（うちA類664片、B類52片）と続き、韓式系土器40片、瓦質土器は30片を数えるにすぎない。弥生土器に分類したものには、庄内式前半に多くみられるV様式系土器を含む可能性がある。瓦質土器が極端に少ないのは、①本来的に当該期の遺構が少ない、②公団住宅建設時に当該期の遺構面を削平した、の二者が考えられる。

次に遺構面別の出土状況を概観すると、第Ⅰ面は土師器2307片、須恵器378片、黒色土器133片（うちA類131片、B類2片）、製塩土器（奈良時代）107片、瓦器67片、瓦21片を数える。続く第Ⅱ面は土師器4976片、須恵器995片、黒色土器288片（うちA類277片、B類11片）、瓦器207片、製塩土器224片（うち奈良時代223片、古墳時代1片）、瓦119片出土した。第Ⅰ・Ⅱ面を検出したのが98-5・7区に限定できるとはいえ、この両地区から黒色土器・製塩土器が一定量出土したこと、瓦は第Ⅰ・Ⅱ面出土総数140片中114片が98-5区で出土したことは注目に値する。

第Ⅲ面は調査区全域で確認できた面である。主な種類別出土点数は土師器28423片、須恵器12160片、製塩土器1410片（うち奈良時代1359片、古墳時代51片）、瓦器560片、黒色土器273片（うちA類234片、B類39片）、瓦445片となる。この面に至って瓦器と黒色土器の比率が逆転する。瓦器は98-3・4区に集中して分布するが（3区240片、4区191片）、黒色土器は98-5区（131片）にある。瓦については262片が98-5・7区で出土した。

第Ⅳ面以下になると、土師器あるいは弥生土器が主体となる。ただ第Ⅴ面では須恵器などのやや新しい時期の遺物が川410・415からみつかった。複数時期の川を分離できなかった可能性がある。

以下の遺構出土遺物については、本章第2節冒頭に記した遺構記載順に図化可能な資料を掲載した。

第Ⅰ面遺構出土遺物

ピット55出土遺物（1・2）（1）は内面に比較的細かいヘラミガキを密に施す黒色土器B類碗であるが、外面のそれは疎らで、成形時の指頭痕が残る。（2）は高台をもつ土師器碗Bと考えられる体部片で、口縁部にやや強めのヨコナデを施す。佐藤編年Ⅱ期新～同Ⅲ期古（10世紀中葉～11世紀初頭）。

ピット59出土遺物（3）土師器碗Bで、形骸化した高台を付す。佐藤編年Ⅱ期新～同Ⅲ期古の所産か。後述する第Ⅲ面井戸844出土遺物と同時期か。

ピット79出土遺物（4）佐藤編年Ⅱ期新の高台のない土師器碗A。

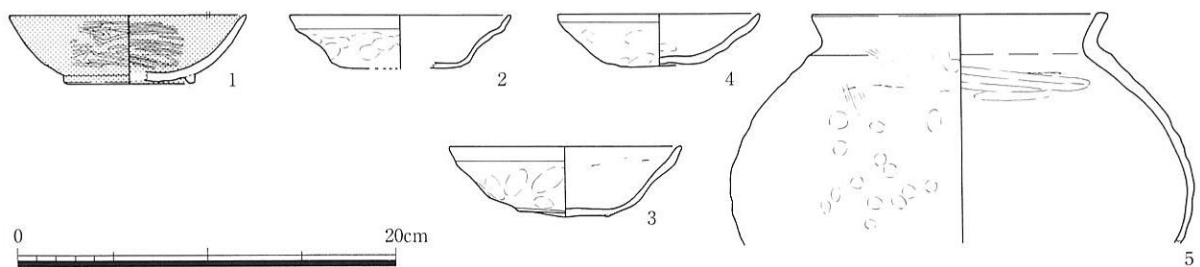


図40 第Ⅰ面 ピット55・59・79・89 出土遺物

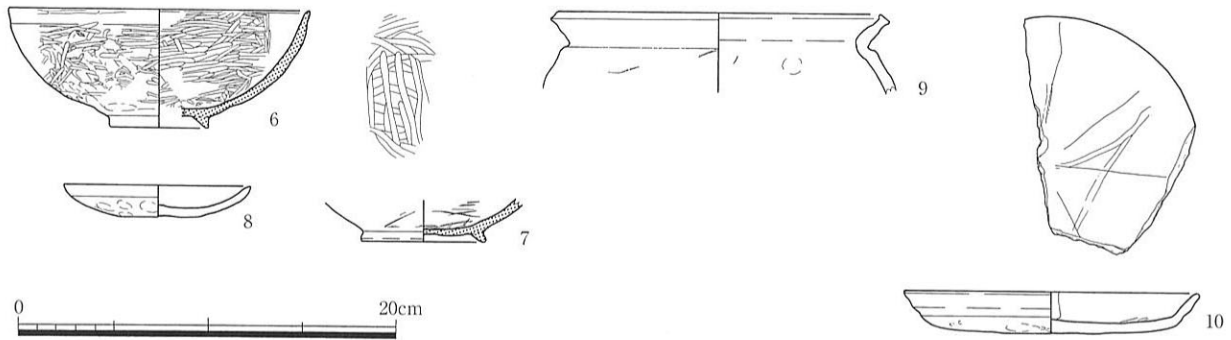


図41 第Ⅱ面 溝569・122 出土遺物

ピット89出土遺物 (5) 短く外反する口縁部と、丸く球形を呈する体部からなる甕。体部上半にはハケメがわずかに残り、指頭痕が顕著である。

第Ⅱ面遺構出土遺物

溝569出土遺物 (6～9) 和泉型瓦器碗 (6、以下特にことわらない限り和泉型瓦器碗) は内面に密なヘラミガキを施す。外面のヘラミガキは体部下半にまで及ぶが、内面に比べ疎らである。尾上編年Ⅱ-1～2期 (12世紀前半～中葉) の所産。底部片の (7) も同時期であろう。土師器は小皿 (8) のほか、口縁部が強く外反する甕 (9) が出土した。

溝122出土遺物 (10) 土師器皿の口縁部はヨコナデ、底部は不調整のため指頭痕が顕著に残る。底部内面には太い連弧状暗文を施し、さらに焼成後に線刻を加える。佐藤編年Ⅱ期古 (9世紀前半)。

井戸560出土遺物 (11～16) 瓦器碗は (11～13) の3点を図示した。(11) は内面に密なヘラミガキと、底部に格子状暗文を施す。外面は不調整の器壁に疎らで分割性を失ったヘラミガキを加える。著しく内傾する口縁端部が特徴的である。尾上編年Ⅱ-1期 (12世紀前半) か。(12) もほぼ同様の特徴を有するが、口縁端部はヨコナデにて丸くおさめる。尾上編年Ⅰ-3期 (11世紀末～12世紀初頭) か。(13) は底部片で、外面には粘土の接合痕が顕著に残る。(14・15) は土師器皿で、ともに口縁部にヨコナデを加え、体部以下は不調整。(14) の体部には竹管文のような痕跡がある。(16) は白磁碗底部片。

井戸561出土遺物 (17～31) 瓦器碗は5点図化した。(17) は尾上編年Ⅰ-2期 (11世紀後半) に属するもので、体部外面は5分割した丁寧なヘラミガキを施し、焼成後下半に「×」印を施文する。また底部外面にも焼成後「+」印を付す。(18) は外面に4分割?のヘラミガキを、内面にも密なヘラミガキを施すが (17) ほどではない。底部外面に不規則な焼成後の線刻あり。(19・20) は内外面とも丁寧なヘラミガキを施すが、口縁端部の形態に差異がある。(21) は底部片で平行状暗文が残る。(22) は瓦器小皿で、強いヨコナデを施した体部中位を除く全面にヘラミガキが認められる。土師器皿は (23～27) の小皿と、(28) の皿の2種類ある。このうち (23) の内面には煤が付着しており、あるいは灯明皿として利用されていたものかも知れない。(25・27) は口縁端部をヨコナデにて上方へつまみ上げる。土師器羽釜は3点図化した。(29) は被熱のため外面が赤変する。

井戸564出土遺物 (32～37) ほぼ完形に近い瓦器碗 (32) は、外面に5分割のヘラミガキを、その他破片資料も外面に分割ヘラミガキを施す。瓦器碗はいずれも尾上編年Ⅰ-2期の特徴を兼ね備える。図示した土師器小皿は (35～37) の3点。いずれも口縁端部をわずか上方へつまみ上げたものである。

井戸567出土遺物 (38～44) このうち当遺構の埋没年代を示す資料は (38) の瓦器碗であろう。破片資料のため、内外面のヘラミガキの全容を知ることはできないが、口縁端部～底部に至るまで密に施

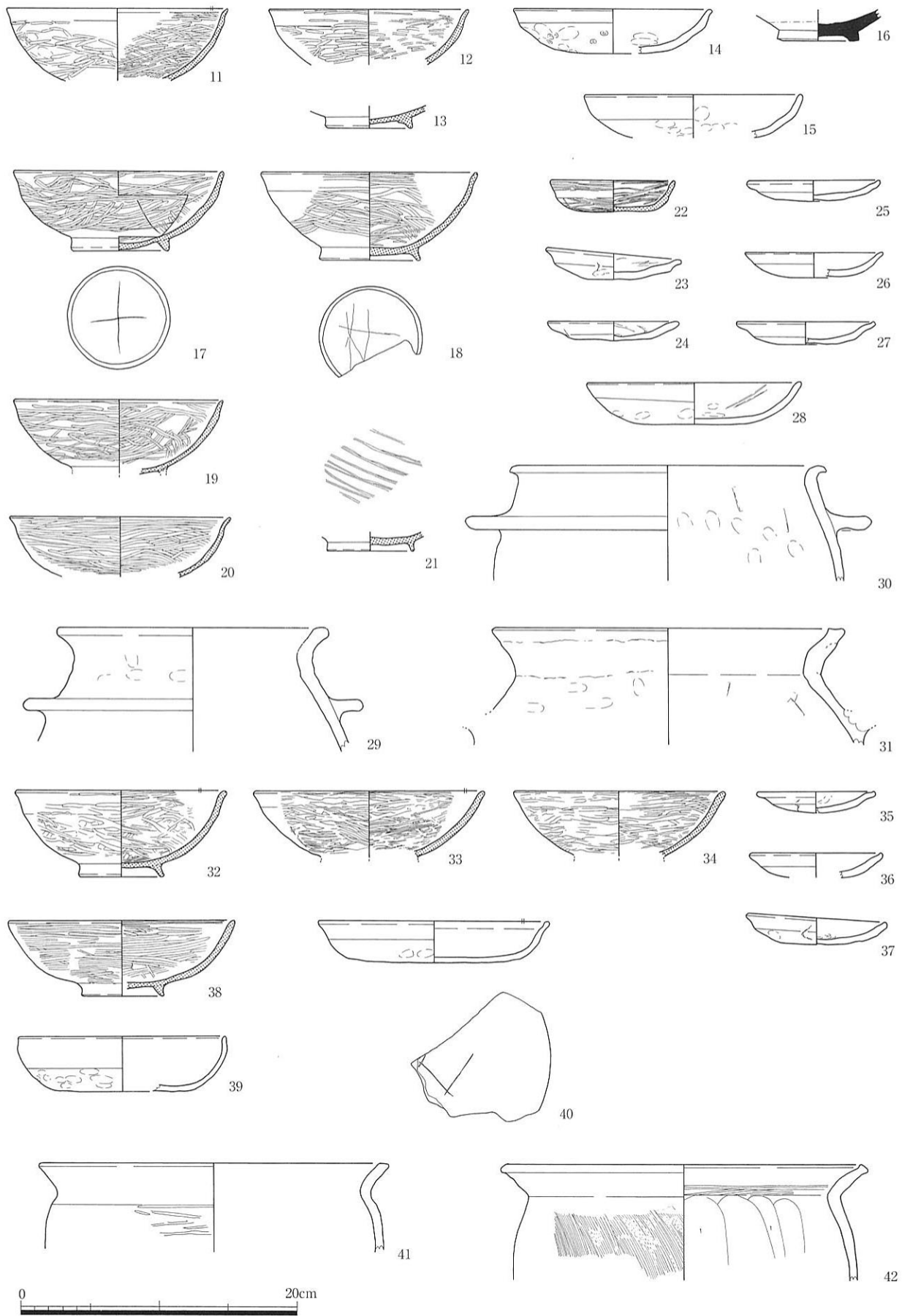


图42 第Ⅱ面 井戸560・561・564・567 出土遺物

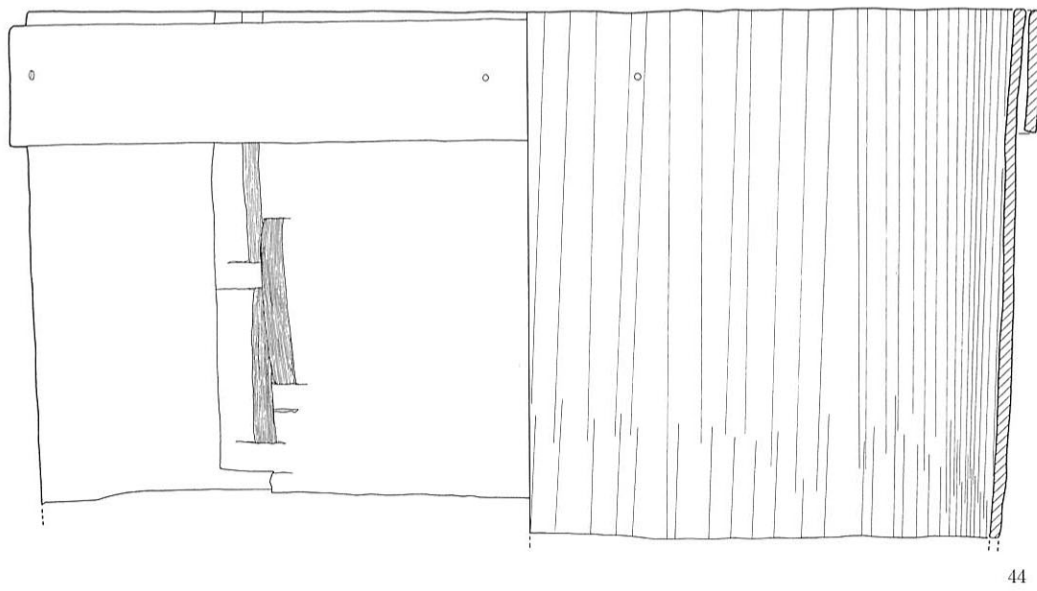
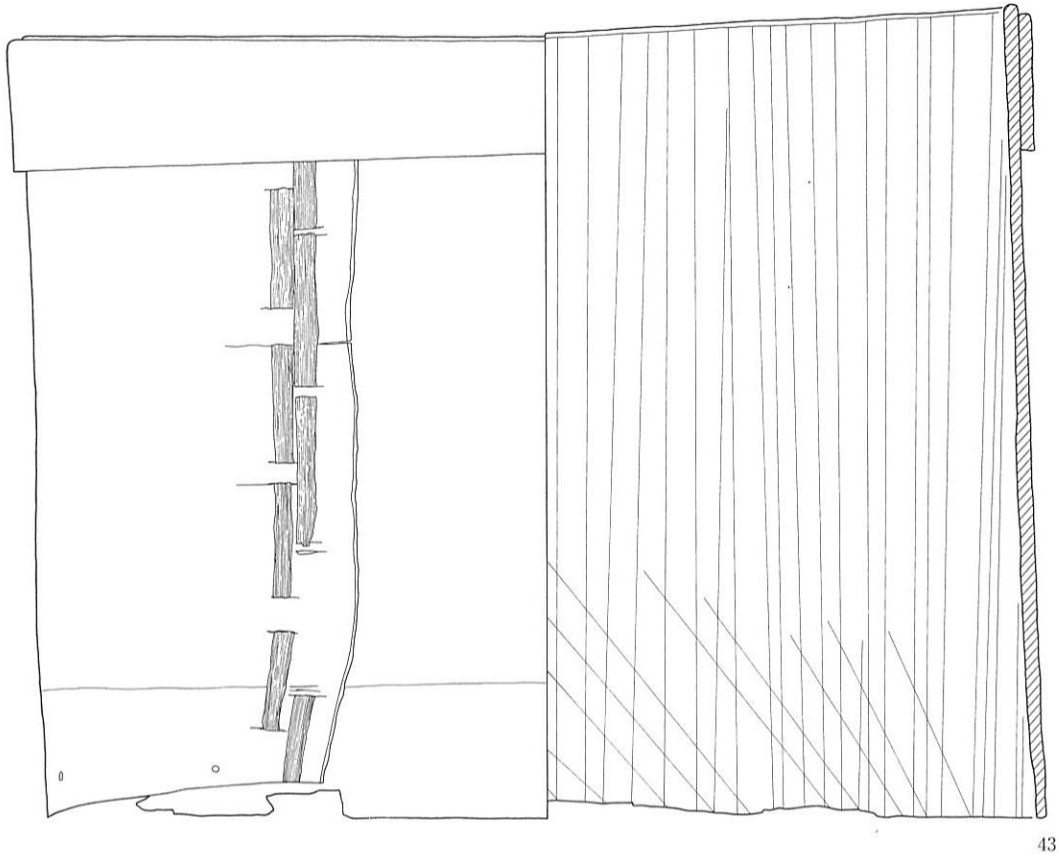


図43 第Ⅱ面 井戸567井戸枠

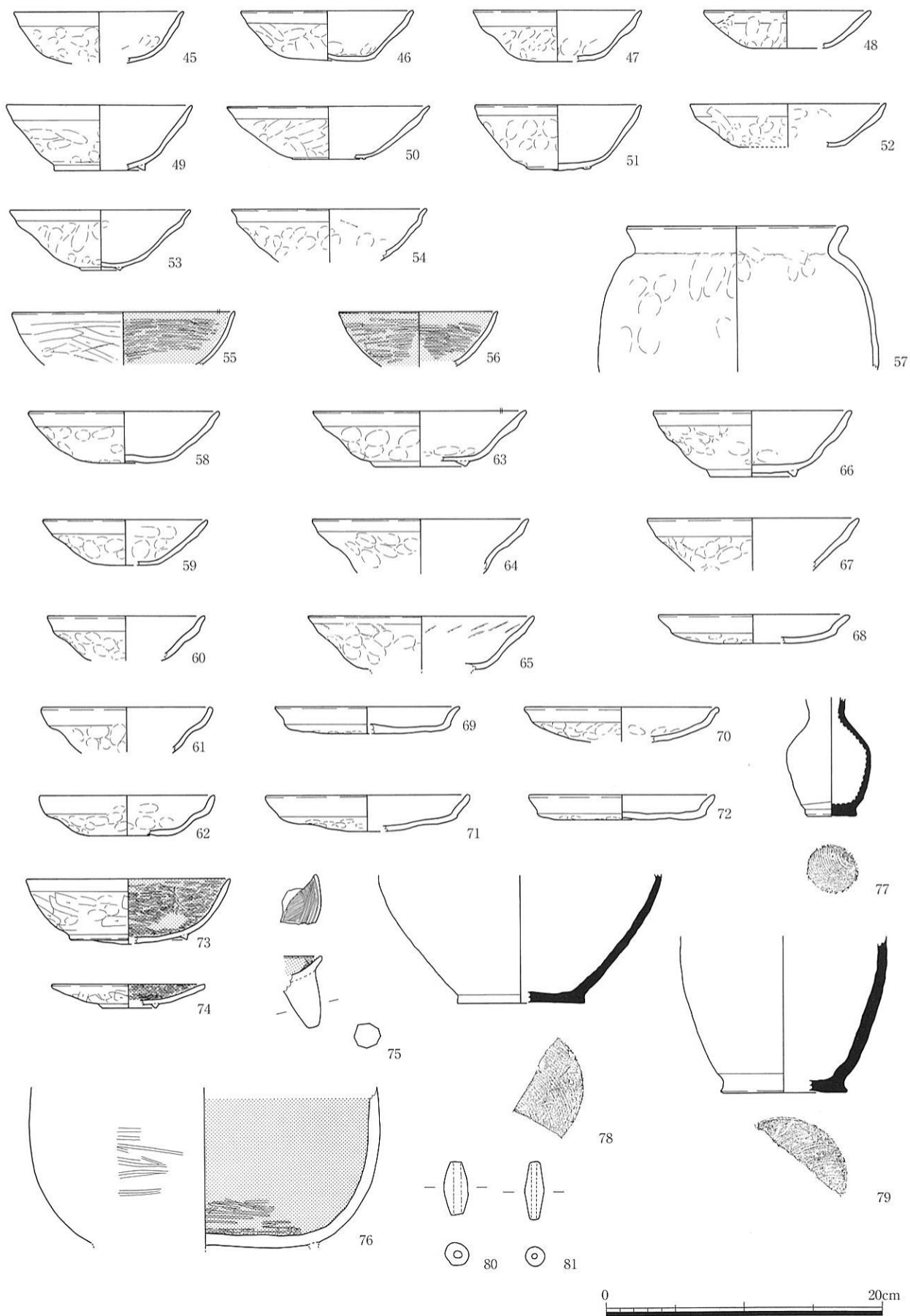


图44 第Ⅱ面 井戸566・565 出土遺物

されており、ほぼ尾上編年Ⅰ－Ⅱ期に該当するだろう。土師器皿(39)は、口縁端部をわずかに肥厚させ、体部外面までヨコナデ、それ以下は指頭痕を顕著に残す。胎土は精良で、瓦器碗(38)と同時期か。(40)は口縁端部を肥厚させ、底部外面不調整のままヘラミガキを全く施さない(e0手法)土師器皿で、底部外面に焼成後線刻をとどめる。平安時代以降の所産。土師器甕(41)は、外面口縁端部と頸部にヨコナデを加え、口縁端部上面に幅広の平坦部を作る。体部は口縁部径より張り出さず、部分的に粗雑なヘラミガキを施すものの不調整である。(42)は広口の口縁部と長胴の体部からなる奈良時代の土師器甕Bで、口縁部内面はハケメ調整のちヨコナデを加える。体部外面は右下がりのハケメ調整、同内面はヘラケズリ。

(43・44)は井戸567の井戸枠に使用した曲物である。2段目井筒の(43)は下端部分がやや腐食していたもののほぼ完形品で、側板に2枚の帯を巻く。打合せ部分は樺で縫い止め、縫い始めは返し縫いする。最下段の井筒に使用した(44)は下半部が腐蝕していた。

井戸566出土遺物(45～57) 図化資料の大半は(45～54)に示した土師器碗である。碗A(45～48)はいずれも口縁部をヨコナデし、体部外面以下は不調整のため、指頭痕が顕著に残る。(48)は口縁部のヨコナデが顕著でなく、不調整部分との境界が明瞭でない。口縁部径はいずれも12cm台である。(49～54)は碗Bである。高台の形状は、比較的しっかりとした(49)や痕跡程度の(50)などがあり、高台径も7cm近いものから3cm程度のものまでである。径は13～14cmをはかるが、(51)のように12cm台のものもある。底部を欠損する(52・54)は、復原口径から碗Bと判断した。なお大半の碗A・Bは橙色であるが、(49)は白色を呈する。(55)は黒色土器A類碗である。内面には細かく丁寧なヘラミガキを施し、外面はヘラケズリで器面調整する。佐藤編年Ⅱ期古～Ⅱ期中(9世紀後半)の所産であろう。底部外面に線刻を施した黒色土器A類碗(図163-1812)は第6節墨書・刻書土器で紹介する。(56)は内外面に丁寧なヘラミガキを施した黒色土器B類碗である。混入資料かと思われる。土師器甕(57)は、口縁部～頸部にかけてヨコナデを施すが、不調整のため指頭痕が顕著に残る体部との境界は不明瞭である。

井戸565出土遺物(58～81) やはり出土土器の多くは(58～67)に図示した土師器碗である。碗A(58～62)は、口径(復原口径)12～13cmをはかる。(58)のように体部の指頭痕がそれほど顕著でないものもあるが、一般的には指頭痕による体部の凹凸は激しい。(62)は器高が他の碗に比べ低いうえに、口縁部ヨコナデ部分と体部がほぼ1:1である。碗Bは(63～67)の5点を図化した。口径は主に15～16cmをはかる。底部を欠損する(64・65・67)については、井戸566出土例と同様、復原口径より碗Bと判断した。(63・66)の高台は、いずれも断面三角形のしっかりしたものである。土師器皿(68～72)はともに口径13～14cmで、口縁部を強くヨコナデし、不調整の底部と著しい段差を生じる。黒色土器はA類の碗(73)と皿(74)、鉢(76)、同B類の風字硯の脚(75)がある。碗は底部外面に墨書のある(図163-1799)と同様、内面には細かく密なヘラミガキを、外面にはヘラケズリを施す。底部には大きく低い高台を付す。皿も碗(73)と同様の調整を施すが、内面のヘラミガキは碗ほど細かくはない。風字硯の脚(75)は全面を黒色処理し、ヘラケズリにて八角形に面取りする。内面は直線的に細かなヘラミガキを施し、端部に1条の沈線を加える。台付鉢(76)は、内面底部付近と外面に粗いヘラミガキを施す。また底部外面には黒斑がある。出土した須恵器はすべて壺で、底部には糸切り痕が残る。14点の墨書・刻書土器が出土した。第6節で紹介する。このほか小形の土錘(80・81)が出土した。

土坑570出土遺物(82～86) (82)は復原口径16cmをはかる土師器碗Bで、内面上半に連弧状暗文を、

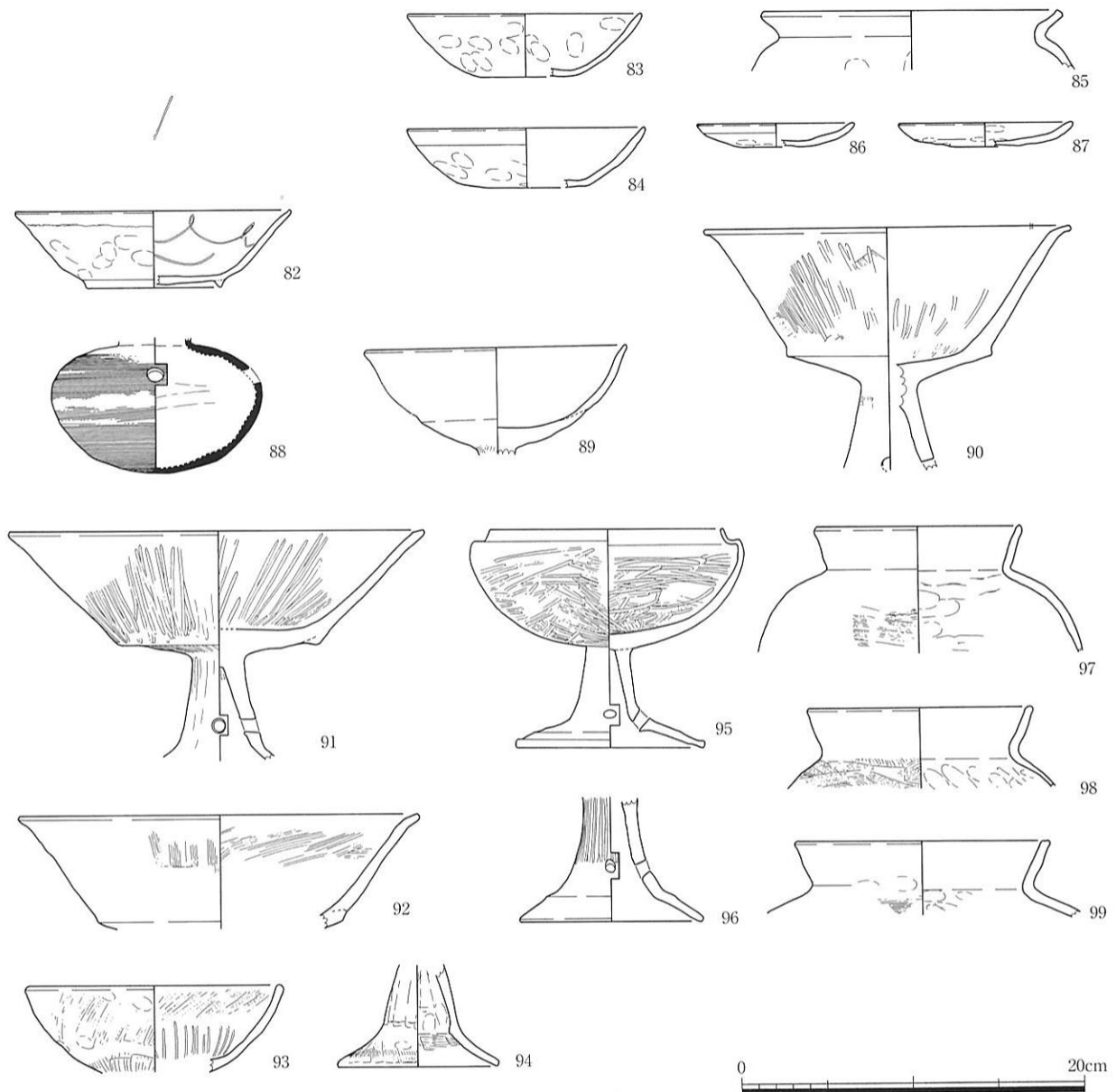


図45 第Ⅱ面 土坑570・568・608・577 出土遺物

下半や底部にも暗文を施す。外面は口縁部をヨコナデし、体部は不調整であるが、指頭痕はそれほど顕著ではない。口縁端部に粘土の接合痕が残る。佐藤編年Ⅱ期古（9世紀前半～中頃）。土師器碗（83・84）は、いずれも体部外面に指頭痕を残すが、（82）同様それほど顕著ではない。土師器甕（85）は口縁部が強く短く外反し、端部はわずかに上方に立ち上がる。頸部にヨコナデを施すが、体部は指頭痕が残る。（86）は土師器小皿。

土坑568出土遺物（87） 土師器皿。

土坑608出土遺物（88～90） 須恵器甕（88）はやや扁平な体部のみが残存し、ほぼ全面にカキメを施す。中村編年Ⅰ型式第3段階（以下「中村編年Ⅰ-3」と省略）・田辺編年TK208頃か。（89）は土師器碗形高坏片で、口縁端部はわずかに外反し、外面下半には緩やかな段を有する。有段高坏（90）は内面をヨコナデのち縦方向のヘラミガキを、外面はハケメ調整の大半をナデ消したのち縦方向にヘラミガキを施す。脚部内面はヘラケズリを加え、外面は面取り風に仕上げる。透かし穴は4方向。径口指数は35で、古墳時代中・後期の土師器を編年した辻編年によれば4段階（TK208～47、以下辻編年4段階

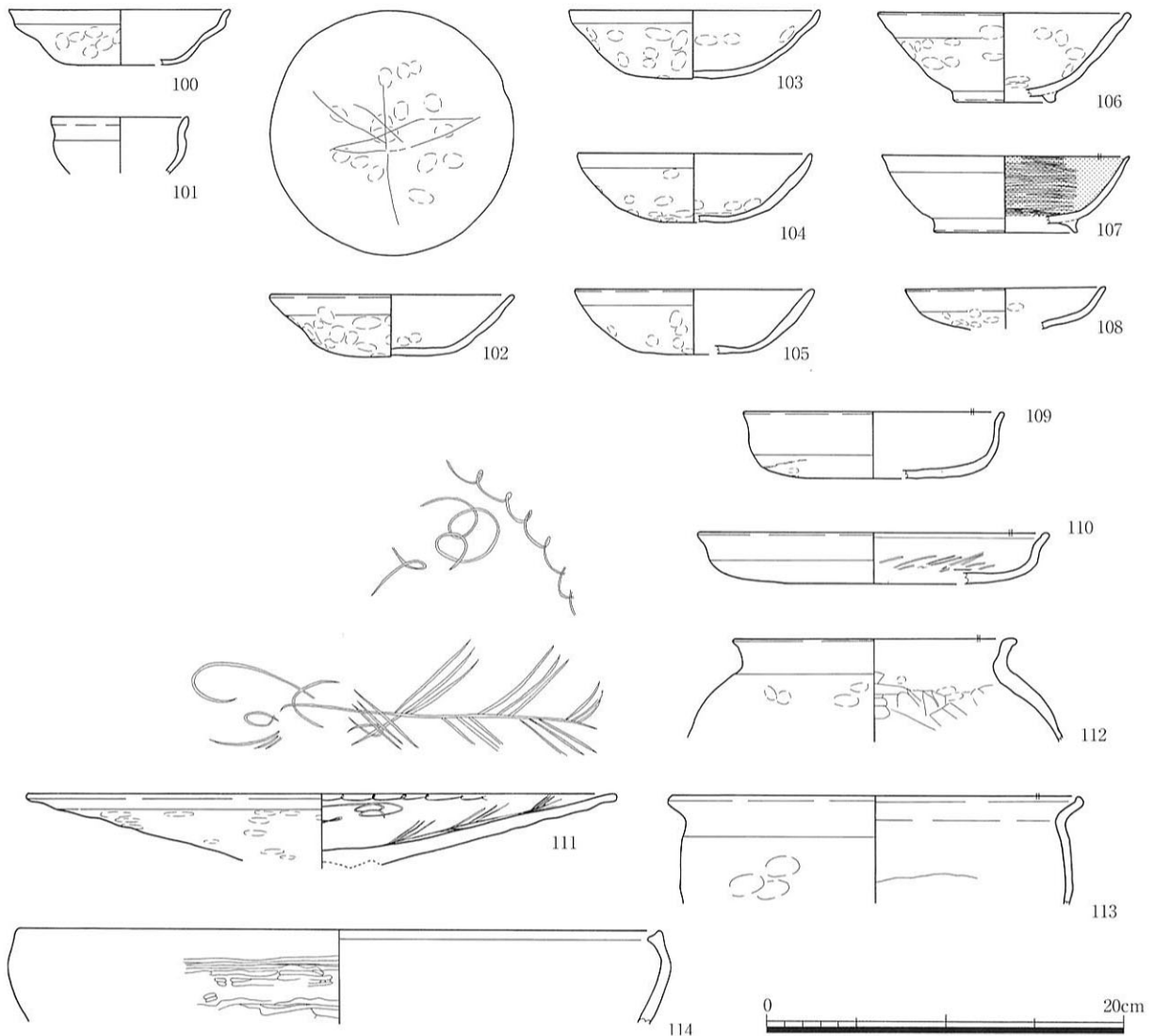


図46 第Ⅱ面 ピット177, 落込み138 出土遺物

と記述)に該当する。

土坑577出土遺物 (91~99) 有段高坏 (91) は、わずかに外反し内傾する平坦面をもつ口縁端部に、内面はナデのち縦方向のヘラミガキを、外面にはヨコナデのち縦方向のヘラミガキを施す。脚部内面はヘラケズリ、外面はヘラナデにて面取り風に仕上げる。径口指数は29で、土坑608出土高坏よりやや遡る資料と思われ、辻編年3段階 (TK73~216) に該当するだろう。有段高坏 (92) は坏部のみの破片で、内外面に方向を違えるハケメ調整を加える。碗形高坏 (93) は、内面に粗いハケメ調整、ナデ調整を加え、ヘラミガキを施す。その他高坏脚部片 (94) を図化した。(95) は全面黒色を呈し、受部をもつ坏部内外面に不定方向のヘラミガキを施す有蓋高坏。脚部は回転力を利用して成形し、外面裾部には須恵器高坏によくみられる凸線が巡る。透かし穴は4方向か。(96) は (95) 同様回転力を用いて成形し、脚裾部には凸線1条が巡る。脚柱部に縦方向のヘラミガキを施し、透かし穴は3方か。全面黒色を呈する。(95・96) はともに韓式系土器であろう。土師器甕は3点図化した。口縁部及び頸部をヨコナデするが、口縁端部の形状は、わずかに肥厚し平坦面をもつ (98・99) と肥厚しない (97) に分れる。体部外面には横方向にハケメを加える (97・99) と、断続的な横~右下がり気味のハケメを施す (98) の二

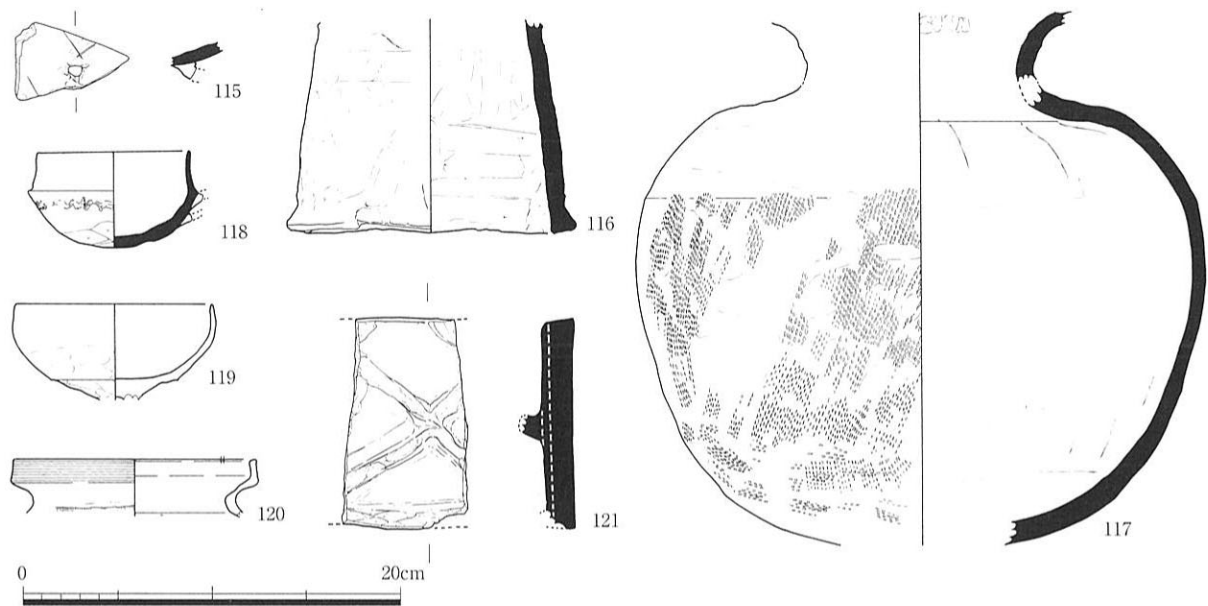


図47 第三面 溝330・332・235・793・326 出土遺物

者に分れる。

ピット177出土遺物(100・101)土師器碗(100)は不調整の体部が著しく屈曲する。(101)は甕C・Dを小形化した形状であるが、碗に分類されることもある。体部外面に指頭痕はみられない。

落込み138出土遺物(102~114) (102~105)は土師器碗A。いずれも体部外面は不調整であるが、(103~105)の指頭痕による凹凸は目立たず、体部はやや内弯気味に立ち上がる。(102)の底部内面には焼成後に線刻を施す。口縁部径は13~14cmをはかる。図化した土師器碗Bは(106)のみ。器面調整は碗Aに準じる。これらは佐藤編年Ⅱ期古の所産と考える。(107)は黒色土器A類碗。口縁端部はわずかに外反し、内面に細かいヘラミガキ、外面にナデ調整を加える。(108)はe手法による土師器皿A。(109・110)は奈良時代の土師器である。前者は平城宮Ⅳ以降の土師器坏Aで、外面はa手法。後者は平城宮Ⅲ頃の皿Aで、口縁端部内面は沈線で巻込みを表現し、放射状暗文を施す。底部外面をヘラケズリするが、ヘラミガキは全く施さない(b0手法)。(111)は高坏の坏部片。復原直径33cmをはかる。内面は口縁部にヨコナデを施す以外は全面ナデ調整で、不規則な暗文を施文する。外面はヨコナデ調整の口縁部以外は不調整で、指頭痕が残る。これらの器面調整や胎土・焼成は、平安時代の土師器碗に共通する特徴である。土師器甕は体部が球形に張る(112)と、体部径が口縁部径以下の(113)を図化した。ともに9世紀以降に位置づけられよう。(114)は土師器鉢片で、外面には粗雑なヘラミガキを施す。

第三面遺構出土遺物

溝330出土遺物(115~117) (115)は須恵器把手付無蓋高坏片で、破損した把手付近に焼成前に施したヘラ記号「×」がある。また底部には、脚部の透かし穴を切り取る際についたヘラの跡もある。内面には自然釉付着。(116)は須恵質に焼成された土管端部片。外面はナデもしくは不調整、内面はタテナデのち端部付近は横方向のヘラケズリを施す。脚端部外面は、乾燥時自重によって膨らんだのか。赤褐色を呈する須恵器甕(117)は、溝330出土遺物として取り上げたが、同一破片は溝332をはじめ第Ⅱ層中からも出土した。頸部内外面は回転ナデ。肩の張った体部上半は外面回転ナデ、同中位には縦方向の、底部は横方向の縄蓆文タタキを施す。なお体部下半は粘土紐の凹凸が顕著である。内面は不定方

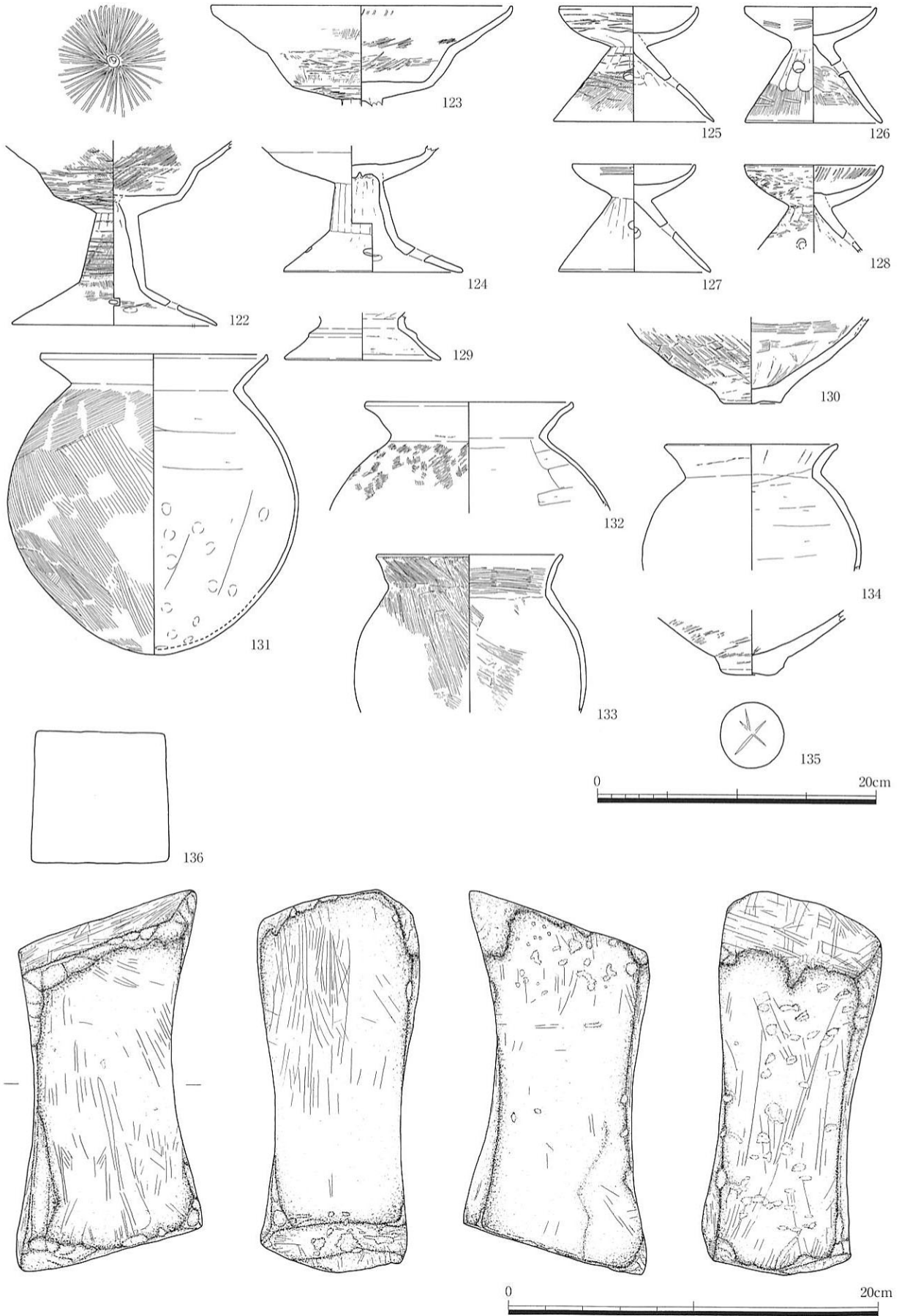


图48 第三面 住居857 出土遺物

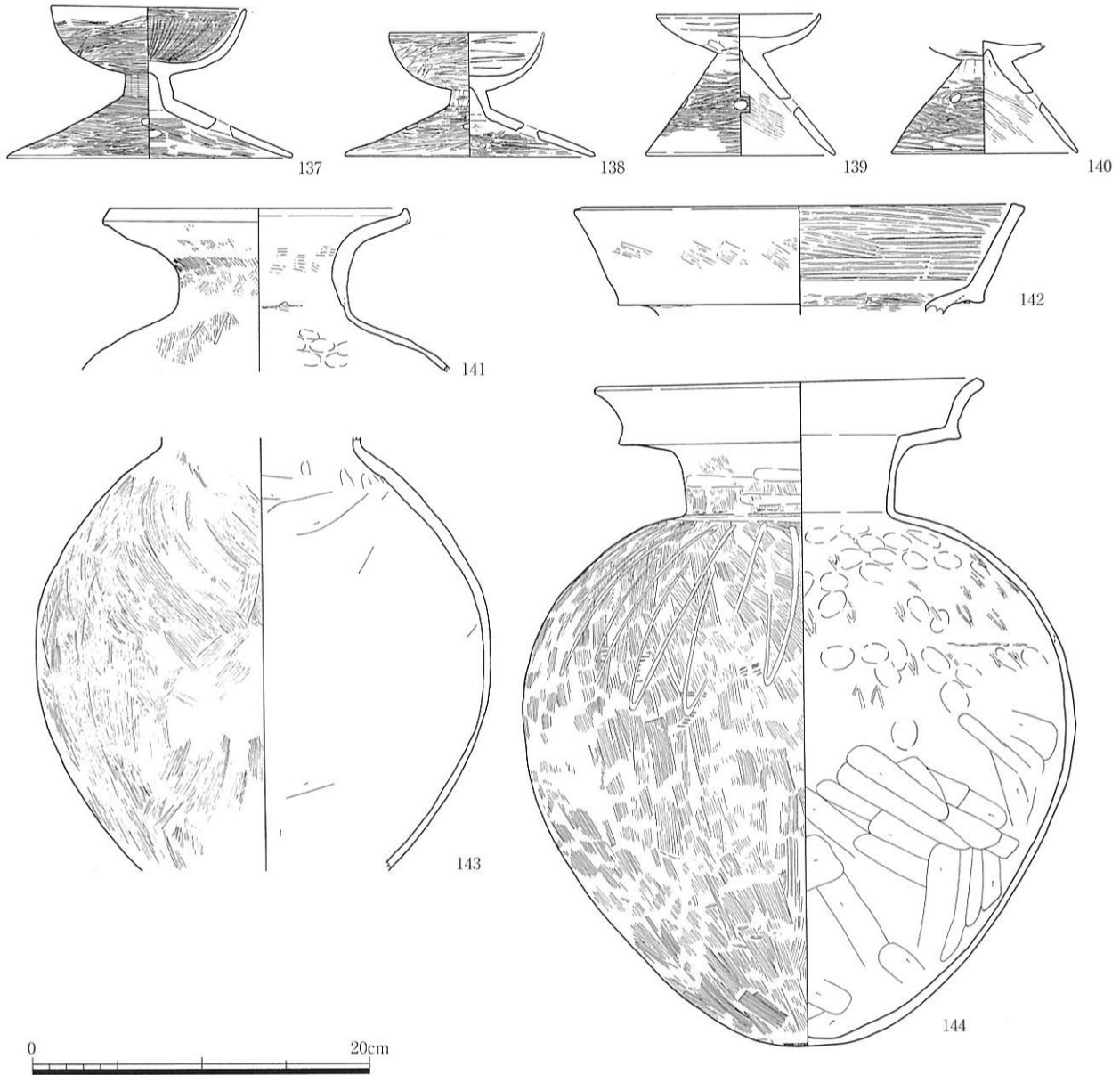


図49 第三面 住居865, 住居865上層 出土遺物

向のナデを加える。5世紀前半の所産。

溝332出土遺物 (118) 坏を意識したような形態の把手付碗で、口縁部は回転ナデ、体部上半には雑な波状文を施文し、底部は手持ちヘラケズリのちナデを施す。内面は体部下半～底部にかけて自然釉が付着する。中村編年I-2~3(田辺編年TK216~208)頃。

溝235出土遺物 (119) 土師器碗形高杯片で、坏底部付近に稜が巡る。内外面とも摩耗し、調整は不明瞭である。内面底部には黒色の付着物がある。

溝793出土遺物 (120) 下田所~才の元併行の吉備系甕片。口縁部に7条の櫛描横線文を施文。

溝326出土遺物 (121) 須恵質凸帯付埴状土製品で、後述する包含層出土資料(図151-1645)同様、一側縁に突起をもつが、当資料は中央に交わる突起をもつ。裏面はナデ。

住居857出土遺物 (122~136) は住居857出土遺物である。この他にもV様式系甕2個体(図149-1608・1609)が出土したが、①出土位置が住居内か否か微妙であること、②時期的に住居内出土遺物と整合しにくいことから、ここでは除外して第4節包含層出土遺物で紹介することにした。有段高坏

(122) は、坏部内面に横方向のヘラミガキをしたのち、中心部から口縁部端に向かってヘラミガキを施す。同外面のうち口縁部には疎らな、体部には密なヘラミガキを加えるが、口縁部には調整時のハケメが残る。脚柱部外面はハケメ調整後ヘラナデを加え、最終的にヘラミガキを施す。同内面はヘラケズリのちナデ、あるいはナデのみ。なお、高坏脚部成形のため差込んだ木芯の先端部分－坏中心部分が剥離して円孔となる。脚端部の透かし孔は3方向、口縁部・脚裾部に黒斑あり。有段高坏(123)も坏部内面に横方向の細かいヘラミガキのち縦方向のミガキを施すが、(122)のように底部内面には施さない。外面はハケメ調整のち細かいヘラミガキを施す。脚破損部分には木芯を差込んだ部分に2mm程度の穴が残る。(124)も有段高坏片であるが全体的に摩耗著しい。脚柱部はヘラナデによる面取り風仕上げで、やや大きめの円孔が4方向に穿孔される。脚付け根には成形時木芯を差込んだ痕跡あり。図化した小形器台は(125～128)の4個体。(125)は剥離状況から円錐形に成形した脚部に受部を付加したことがわかる。頸部からそれぞれ受部・脚部に向かってヘラナデを加え、最後に細かいヘラミガキを施す。透かしは4方向で、穿孔時内面に盛り上がった粘土はある程度乾燥した段階で除去する。(126)の場合、やや粗いヘラミガキを施す点、脚内面にハケメ調整を加える点、3ヶ所の穿孔に伴う粘土の盛り上がりをもそのまま放置する点で(125)と異なる。(128)の胎土は他の小形器台に比べ橙色あるいは褐色系に発色。受部内面にはヘラミガキが残る。外面は頸部から口縁部へのヘラナデのほか、不定方向のヘラケズリを施す。(129)は復原底径11cm余の鼓形器台片。山陰地方の土器に似た浅黄橙色を呈し、1～2mmの砂粒を多く含む。筒部内面にわずかながらも面をもつ点、外面の凸帯も退化しつつも残る点から、山陰地方では庄内併行期に位置づけられる。(130)はV様式系壺で、外面はタタキ・ハケメ調整後に縦方向のヘラミガキを施す。甕は5個体図化した。生駒西麓の胎土による庄内式甕(131)は、頸部内面の屈曲にややあまさがみられ、体部最大径が幾分下方に下っている点は布留的要素であるが、一方で口縁端部のつまみ上げが内傾気味でなく、やや尖底気味の底部を有するという古い要素ももつ。原田編年庄内Ⅲ期に位置づけられる資料か。庄内式甕(132)には、布留式甕の特徴である口縁端部・頸部のヨコナデ調整が認められ、頸部内面の屈曲も(131)同様粗雑化する。胎土は生駒西麓産。やや特異な形状を呈する甕(133)は、外面調整に際し体部・口縁部の順にハケメを施す。内面は口縁部・体部ともハケメ調整であるが、部分的に体部内面にヘラケズリを施す。布留式祖形甕(134)は、口縁部形態がV様式系でありながら、口縁端部・頸部を雑ながらヨコナデする点、体部内面をヘラケズりする点など、布留式土器の影響を受ける。口縁部外面には粘土の接合痕あり。(135)はV様式系甕の底部破片。内外面の調整は弥生土器のそれと差異はない。底部外面に焼成前の線刻「×」がある。このほか砥石(136)が出土。直方体を構成する6面すべてに使用痕が残る。以上のことから当住居は原田編年庄内Ⅲ期と考える。

住居865出土遺物(137～142) 塊形高坏は2点出土した。(137)は口縁端部を除く坏部内外面及び脚部外面に、丁寧な横方向のヘラミガキを施し、坏部内面には縦方向のミガキを加える。脚柱部はヘラナデのちヘラミガキ。このヘラミガキのうち脚柱部に近い側には回転力を利用して施文する。脚裾部内面はハケメ調整のみ。4ヶ所の円孔部内面は粘土の盛り上がり除去する。(138)もほぼ同様の調整を加えるが、脚柱部はヘラナデのみで、脚裾部のヘラミガキ密度が低く、隙間からハケメがみえる。坏部内面は横方向のヘラミガキ。小形器台は2点図化。(139)は摩耗著しいが、頸部から受部・脚部に向かってヘラナデ、受部・脚部にヘラミガキを施し、脚内面はハケメ調整を加え、透かし孔穿孔時に生じる内側の粘土の盛り上がりは除去する。これに対し(140)の受部内面にはヘラミガキが残る。(141)は

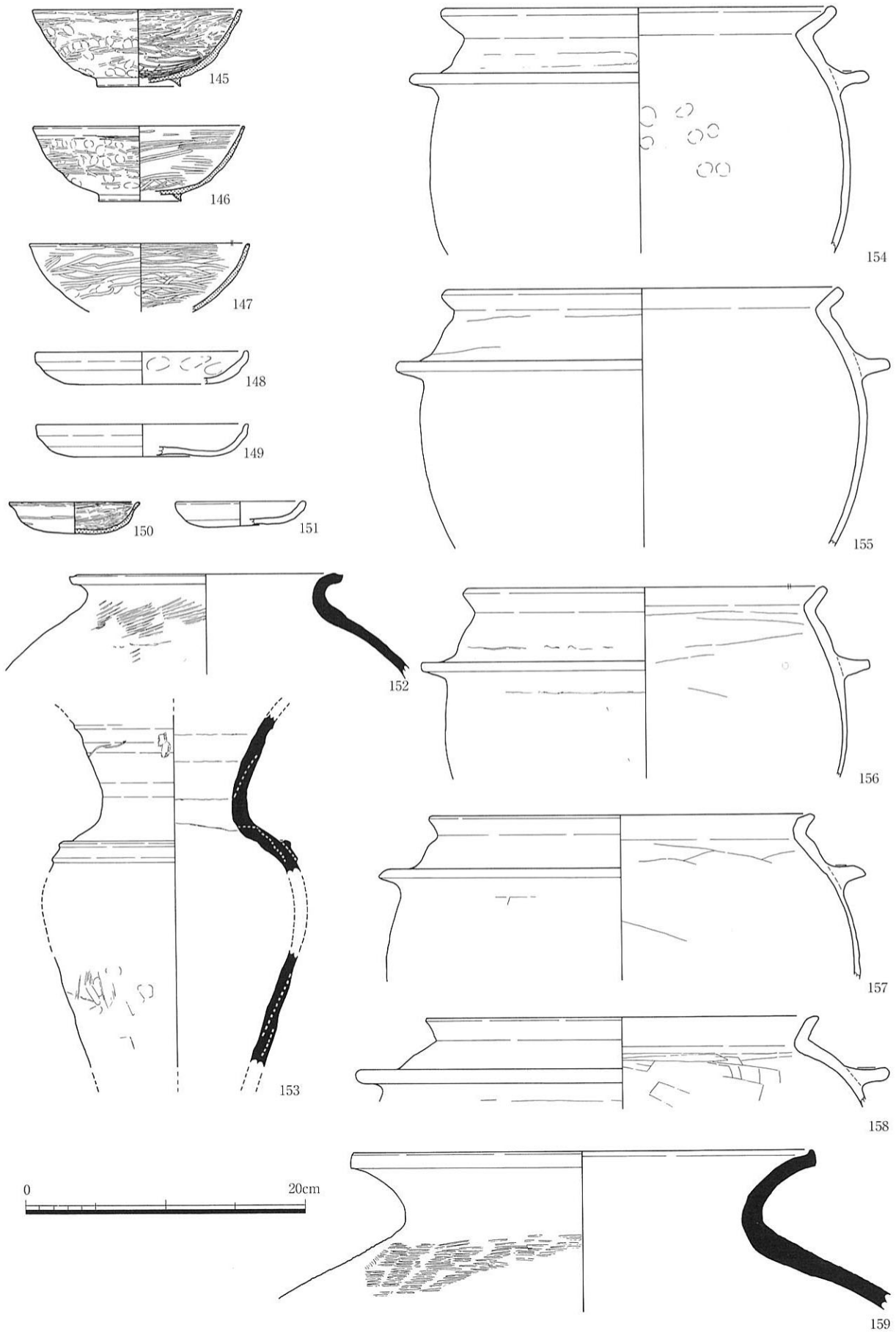


图50 第三面 井戸507 出土遺物

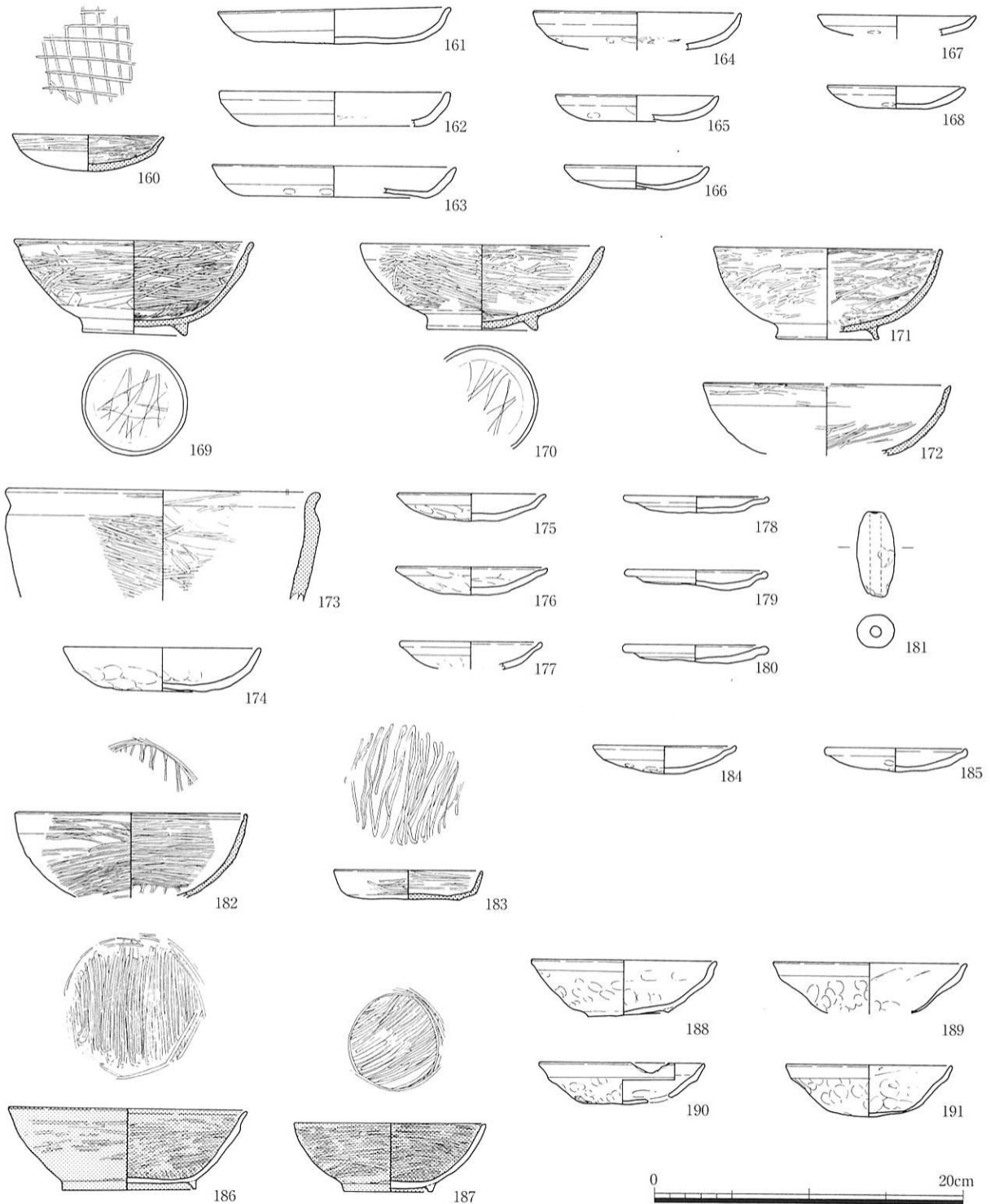


図51 第三面 井戸255・528・531・844 出土遺物

V様式系壺。口縁部～頸部に比べ体部は極端に薄く、頸部内面は接合痕が顕著に残る。さらに胎土には7～8mm大の砂粒が比較的多く含まれ、全体的に粗雑な作りである。口縁部内外面はハケメ調整のちヨコナデ。体部外面はハケメのち疎らなヘラミガキ。(142)は大形複合口縁壺片で、口縁部外面は細かいハケメ調整のちヨコナデ、内面は太目のハケメが残る。何か塗布したためか、全体的に黒光りする。

住居865上層出土遺物(143・144) 住居跡埋土上層で検出した土器棺及び蓋に転用された壺片である。(143)は庄内式後半の直口壺の体部片で、外面はハケメを、内面はヘラケズリを施す。(144)は形

態や胎土に結晶片岩が混じることから、阿波系の複合口縁壺であろう。(142) 同様口縁部内面は、黒色塗料?を塗布したかのごとく黒光りする。体部外面は部分的にタタキが残り、その上に縦方向の細かいハケメを施す。さらに体部上半には、大きく波状をなすヘラミガキを加える。内面は下半ヘラケズリ、上半には「V」字状の当て具痕や指頭痕が残る。以上のことから当住居は原田編年庄内Ⅲ期と考える。

井戸507出土遺物(145~159) 図化した瓦器碗は3個体。(145)は外面に連続した指頭痕が2~3段ならび、その間に疎らなヘラミガキを施す。内面は比較的密なヘラミガキと底面に格子状暗文を施す。(146)も外面に指頭痕が顕著に残るが、疎らなヘラミガキを底部付近まで施す。黒色化せず。(145~147)は尾上編年Ⅱ-2期(12世紀前半)に属する。土師器皿(148・149)は、口縁部外面を2段ナデし、底部不調整。口縁部内面ヨコナデ、底部ナデ。瓦器小皿(150)は口縁部外面を2段ナデし、その境界及び口縁端部にヘラミガキする。これに対し内面は全体的に密なヘラミガキを施す。土師器小皿は1点(151)のみ図化。須恵器甕は短い口縁部の(152)と、大きく外反する口縁部の(159)の2個体図化。ともに外面は平行タタキが残るが、(152)はナデ消し、(159)はそのまま残る。内面はともに回転ナデを施す。(153)は東播系須恵器壺と考えられる破片で、口縁部や底部を欠損するため全貌は不明。体部上半に埴輪のタガのような凸帯が1条巡る。この破片は被熱のため著しく赤変する。豊中市上津島南遺跡土壙墓出土遺物に類例がある。羽釜(154~158)は口縁部を「く」字状に折り曲げ、端部を丸く肥厚させる(154)や、口縁部付近を著しく内傾させる(158)など様々ある。その他平瓦(図167-1834~1836)が出土した。

井戸255出土遺物(160~168) 瓦器小皿(160)は内面に密なヘラミガキを、底部に格子状暗文を、さらに口縁部外面にヘラミガキを施す。土師器皿は口縁部外面をヨコナデする(161・163)と、2段ナデする(162・164)の2種類ある。(165~168)は土師器小皿である。

井戸528出土遺物(169~181) 瓦器碗は4個体図化。(169)は内面に密なヘラミガキ、外面はヘラケズリ後5分割のヘラミガキを施す。底部外面には焼成後の線刻あり。尾上編年Ⅰ-2期に該当。(170)も内外面に密なヘラミガキを施し、(169)同様底部外面に焼成後線刻を加える。これらの線刻は、鋭利な刃先で光沢のある器壁のごく表面に施文したもので、その部分のみ光沢のない黒色になるため、一見見分けにくい。(172)は内外面の剥離著しく、調整は不明瞭。(173)は瓦器鉢。外面は体部に丁寧なヘラミガキを加えるが、内面はヨコナデのち粗略なヘラミガキを施す。土師器小皿は比較的深みのある(175~177)と、扁平で口縁端部が肥厚する(178~180)の2種類が出土した。土鍾(181)が1点出土した。

井戸531出土遺物(182~185) (182)は今回の調査で唯一遺構から出土した楠葉型瓦器碗。口縁端部内面に1条の沈線が巡り、内外面とも細く密なヘラミガキを施す。

井戸844出土遺物(186~191) (186・187)は内外面を黒色処理した黒色土器B類で、(186)は内面に密なヘラミガキを施し平滑に仕上げるが、外面は器壁の凹凸著しい。高台径は8.5cmと大きく低い。これに対し(187)は内面に密なヘラミガキを施し、外面に4分割のヘラミガキ、高台内側にもミガキを加える。土師器碗は高台のある(188)と高台のない(190・191)がある。この土師器碗から佐藤編年Ⅱ期新の所産と考えられる。なおこれ以外に墨書のある資料があり、第6節にて記述する。

井戸1出土遺物(192~201・210~213) 土師器碗Aは3個体出土した。(192)は内面ヨコナデ調整ののち、口縁部内側にやや乱れた連弧状暗文を施す。口縁部外面はヨコナデ、体部はヘラミガキ、底部はヘラケズリをそれぞれ加える。平城宮Ⅵ頃の所産か。(193)も口縁部内側に連弧状暗文を施す。口

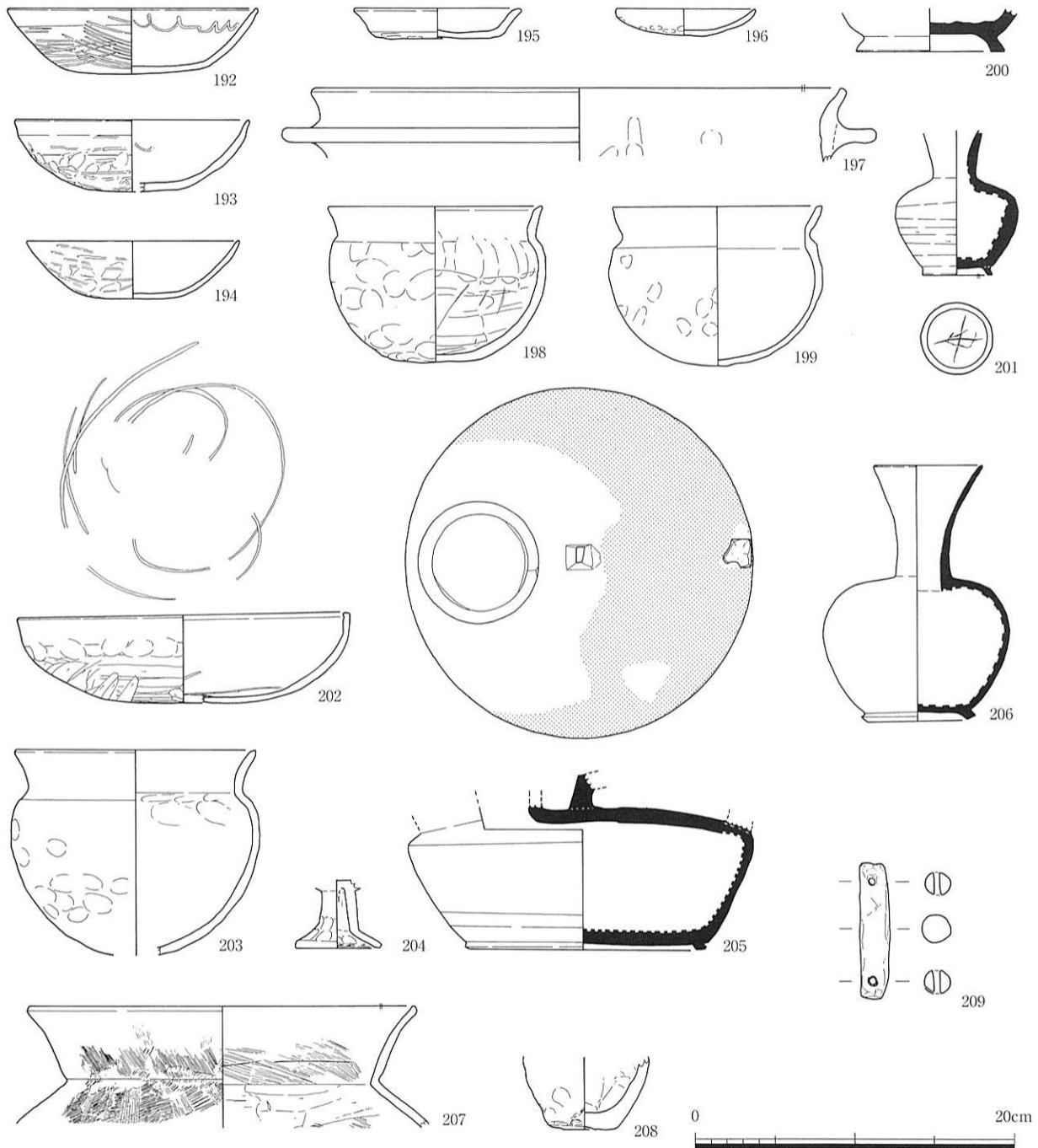


図52 第三面 井戸1・723・788 出土遺物

縁部外面は2段にわたってヨコナデするが、端部の方が強い。体部外面は不調整で指頭痕が残り、その上にヘラミガキを施す。(194)は内面に暗文はなく、口縁端部外面にのみヨコナデ調整し、体部は(193)同様不調整で疎らなヘラミガキが残る。(195・196)は完形品の土師器皿であるが、いずれも特徴的である。(195)は体部をヨコナデし、口縁端部をやや外反気味に作り、平らな底部外面は不調整という9世紀代に一般的な皿の形態であるが、口径約11cmと小形である。(196)は口縁端部内外面に煤が付着しており、灯明皿として利用されていたものかもしれない。この皿は、一見平安時代後期以降にみられる小皿に類似するが、平滑な内面にはナデ調整した明瞭な痕跡はなく、外面は不調整で指頭痕が顕著に残る。半球状の型に粘土を押し当てて成形したのではないか。羽釜(197)は口縁部片のみ出土。(198・199)は、体部外面が不調整で指頭痕の残る完形品の土師器甕Cである。なお人面を墨書した同

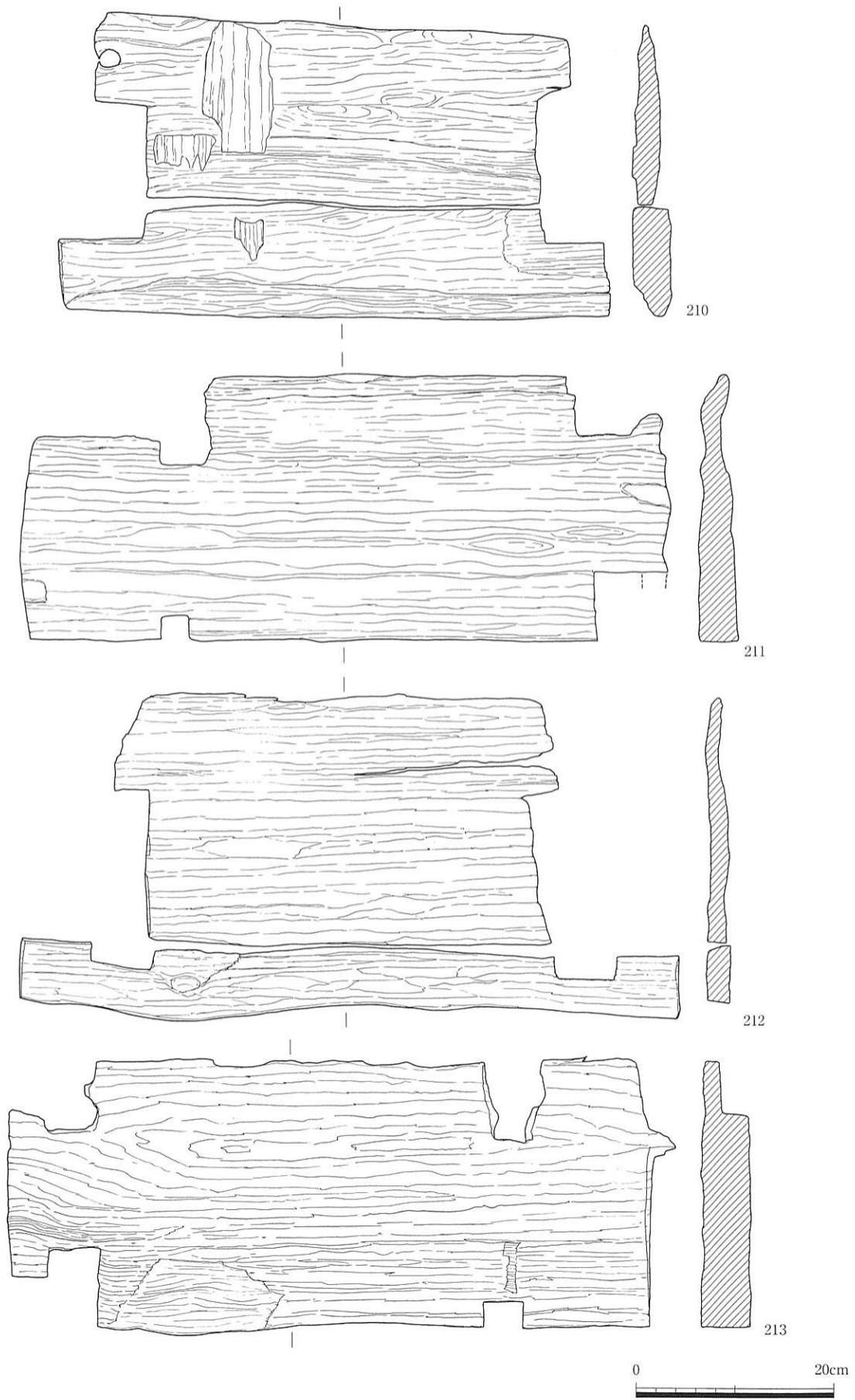


图53 第三面 井戸1井戸枠

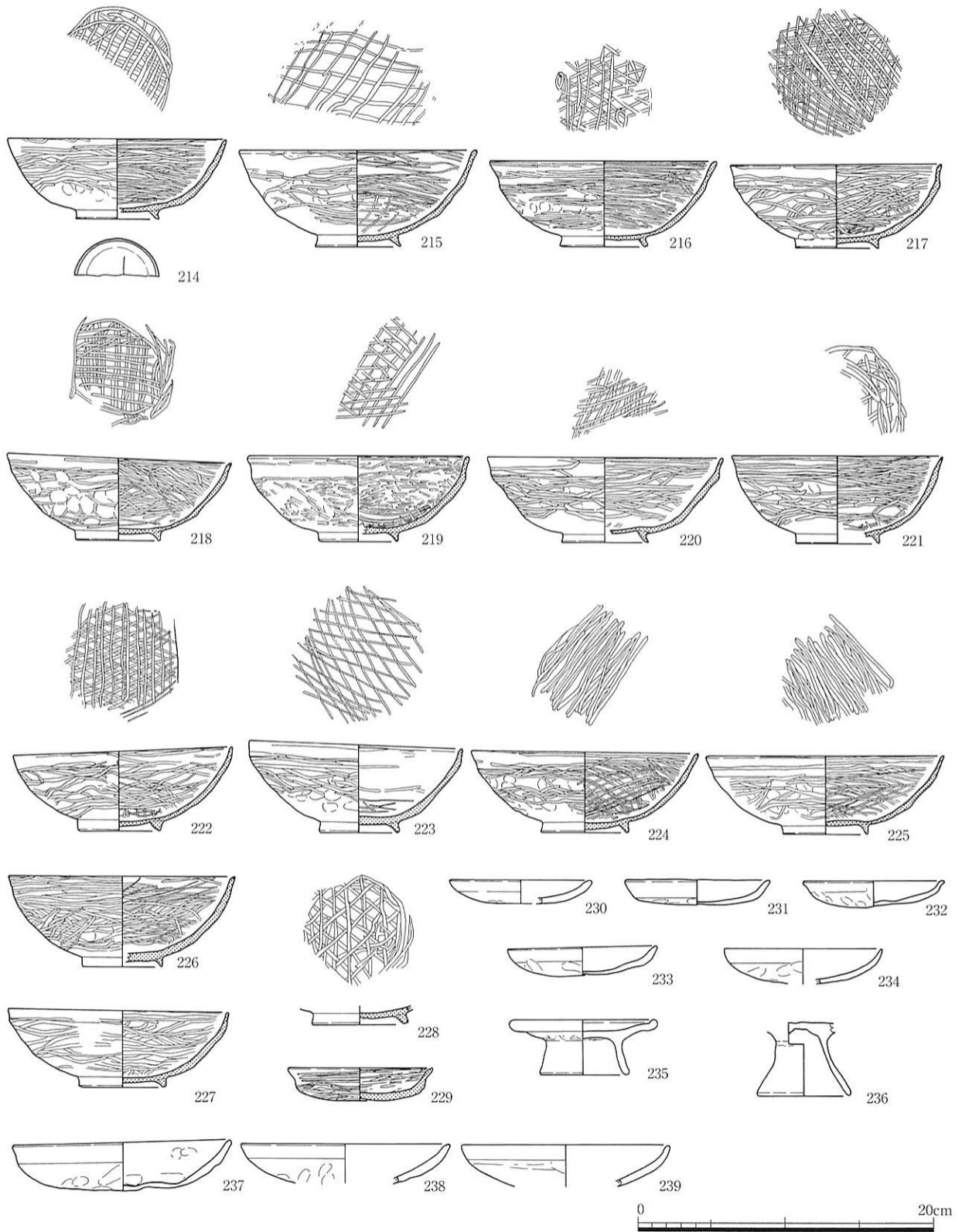


図54 第Ⅲ面 土坑443 出土遺物

形態の甕は第6節で記述する。この2個体とも体部外面全体に著しく煤が付着し、内面にも黒色の付着物がある。口縁部・体部との境界は(199)の方が明瞭な段をもつ。(200)は須恵器壺の底部片を利用した転用硯で、底部外面に墨が付着する。壺M(201)は口縁部を欠損する。口縁部～体部上半にかけて自然釉が付着。体部下半は回転ヘラケズリ。底部外面に焼成前のヘラ記号がある。

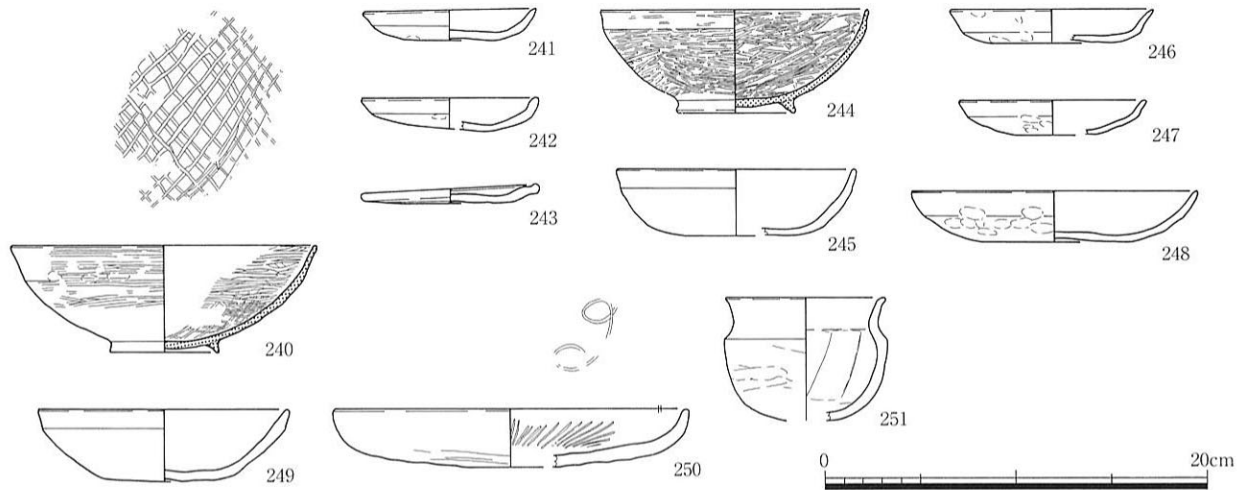


図55 第三面 土坑502・722・452・202・201 出土遺物

(210～213)は井戸1最下段の井戸枠材で、いずれも外面側を図化した。井戸枠は両端に抉りを入れて、お互いを固定させる。(210)には、井戸枠を外面側から支えた板材が腐蝕をかくらうじて免れ遺存していた。なお取り上げ時すでに(210・212)は、木目に沿った腐蝕のため二分していた。

井戸723出土遺物(202～206) 土師器坏C(202)は、体部が内弯気味に、口縁部が上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部内面に暗文はなく、底面のみラセン状暗文を施す。外面は口縁部をヨコナデ、体底部をヘラケズリする。平城宮Ⅲ頃の所産であろう。(203)は土師器甕C。井戸1出土甕C同様、外面には煤が付着する。(204)は土師器ミニチュア高坏の脚部片である。棒に粘土を巻き付けて脚柱部を成形し、脚裾部を付加する。成形後棒を引き抜いて完成するが、その際引き出された粘土がそのまま残る。(205)は須恵器平瓶で、口縁部及び把手を欠損する。図中のスクリーントーン部分は、まるで研磨したかのごとく滑らかである。(206)は須恵器壺L。意図的か否か不明であるが、口縁部を一部欠損する。

井戸788出土遺物(207～209) (207)は庄内式甕の口縁部片。口縁端部に内傾する面をもつこと、口縁端部外面・頸部外面をヨコナデすること、頸部内面は成形がやや雑なことは、新しい要素といえる。しかし体部外面はタタキのちハケメ調整という庄内式土器独自の技法も残る。時期的には原田編年庄内Ⅲ期～布留Ⅰ期と考える。生駒西麓産の胎土である。(208)は壺の底部片か。底部外面に焼成前に施されたヘラ記号がある。(209)は棒状土錘。両端に穿孔がある。

土坑443出土遺物(214～239) (214～228)は瓦器碗。(214)は体部内面に密なヘラミガキ、底部に格子状暗文を施す。体部外面にはヘラミガキを加えるが、分割性はなさそうだ。底部外面には焼成後に施文された線刻が残る。なお体部外面下半は炭素が吸着せず、灰色を呈する。尾上編年Ⅱ-2期に該当する。(215)は体部内面に疎らなヘラミガキ、体部下半～底部にかけて格子状暗文を施す。外面は体部下半まで疎らなヘラミガキを施すが、指頭痕が顕著に残る。外面は口縁部以外炭素吸着せず。尾上編年Ⅱ-2期。(216・217)は内面に密なヘラミガキ、底部に格子状暗文を施す。外面は(216)が分割性をとどめつつ疎らなヘラミガキを施すのに対し、(217)の場合不明瞭ながら比較的密なヘラミガキを施す。(216)の外面指頭痕顕著。ともに尾上編年Ⅱ-1期か。(218)は内面に密なヘラミガキ、底部に格子状暗文を施す。外面は体部下半まで分割性のない疎らなヘラミガキ。指頭痕顕著である。尾上編年Ⅱ-2期。(219)は内面上半に密なヘラミガキ、下半～底部にかけて格子状暗文を施文。口縁部外面に

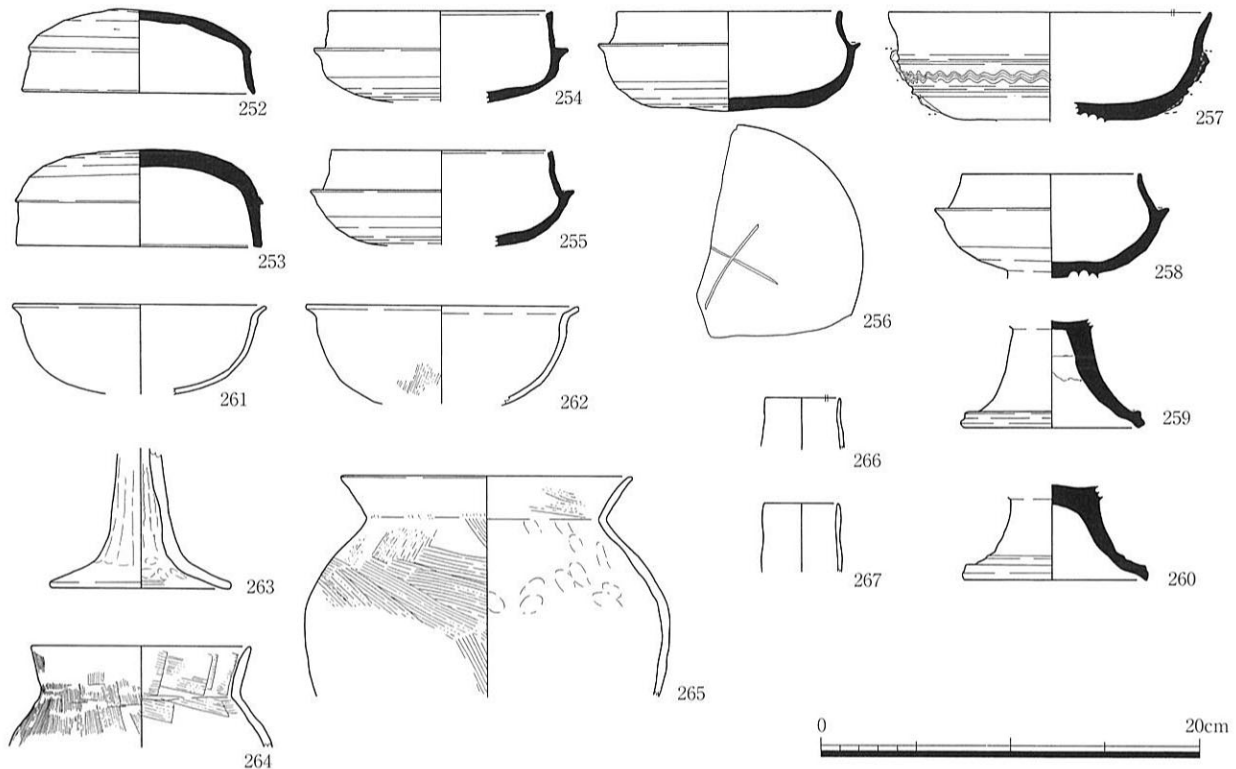


図56 第Ⅲ面 土坑537・331 出土遺物

強いヨコナデを加え、体部下半まで分割性のない疎らなヘラミガキを施す。指頭痕顕著。尾上編年Ⅱ-2期。(220)は外面の指頭痕による凹凸が顕著であるが、疎らながらもヘラミガキの分割性はかろうじて残っているようだ。尾上編年のⅡ-1~2期か。(221・222)は、内面に密なヘラミガキ、外面には疎らなヘラミガキを施し指頭痕が残る。(221)は口縁部外面以外炭素吸着せず、白色を呈する。ともに尾上編年Ⅱ-2期。(223)は内外面の付着物著しく調整は不明瞭な部分多い。上方に立ち上がる口縁端部が特徴的である。(224)は内面のヘラミガキ調整最終段階で、左から右へ向かって円弧状のヘラミガキを施す。外面は指頭痕が顕著であるが、体部下半まで分割性のあるヘラミガキを加える。尾上編年Ⅱ-1期か。(225)は内面上半に密な、下半にやや疎らなヘラミガキを施す。底部内面には(224)同様ヘラミガキ。外面のミガキに分割性はない。尾上編年Ⅱ-2期。(226)は内外面とも密なヘラミガキを加え、外面のそれは分割性がある。尾上編年Ⅱ-1期。(227)は内面全体にヘラミガキを加え、外面体部下半まで比較的密で分割性のあるヘラミガキを施す。尾上編年Ⅰ-3期か。瓦器皿(229)は、内面に比べ外面のヘラミガキにやや隙間が認められる。土師器皿は、(230~234)の小皿、(235・236)の台付皿、(237~239)の皿の3種類が出土した。小皿は体部が緩やかに立ち上がる(230)、体部が屈曲気味に立ち上がる(231~233)、内弯気味に立ち上がる(234)に分れる。(235)は、扁平で口縁端部を丸くおさめる小皿に脚をつけたものである。

土坑502出土遺物(240~242) 瓦器碗(240)は、内面底部付近まで密なヘラミガキを、さらに底部~体部下半にかけて格子状暗文を施す。外面は指頭痕が目立つが、体部上半にはやや密なヘラミガキを加える。体部外面は黒色化せず。尾上編年Ⅱ-2期。図化した土師器小皿(241・242)は、いずれも体部が内弯気味に立ち上がる。

土坑722出土遺物(243) 土師器小皿。扁平な器形で、口縁端部を丸くおさめる。

土坑452出土遺物(244~248) 瓦器碗(244)は、ヨコナデする口縁部外面を除き内外面とも密な

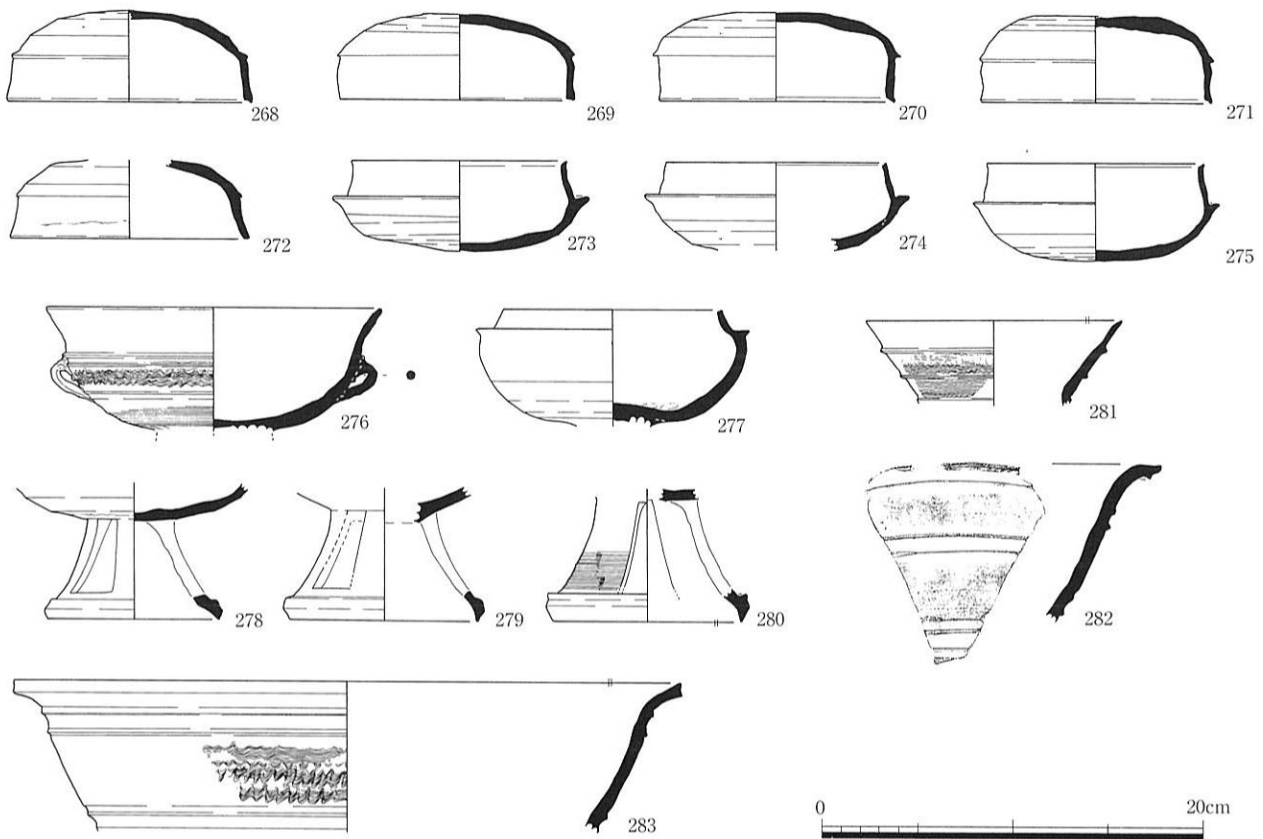


図57 第三面 土坑350 出土遺物(1)

ヘラミガキを施すが、外面に比べ内面の方がむしろ雑な感じさえする。外面は分割ヘラミガキ。尾上編年Ⅰ～Ⅲ期。土師器埴(245)は、口縁部外面をヨコナデ、体部以下は不調整。混入品か。11世紀以降の土師器皿(246～248)が出土。

土坑202出土遺物(249) 土師器埴Aの体部外面は不調整ながら、ほとんど指頭痕残らず。内面は煤が付着したかのようにやや黒ずむ。佐藤編年Ⅱ期古の所産。

土坑201出土遺物(250・251) (250)はb0手法で成形された土師器皿A。体部内面には放射状暗文、底部にはラセン状暗文施す。平城宮Ⅲ。(251)は土師器甕C。口縁部外面に強いヨコナデを加え、接合痕の残る不調整の体部との境は鋭い段をなす。

土坑537出土遺物(252) 胎土に砂粒が目立つ。口縁端部は内傾する平面をもち、内面天井部には同心円状の当て具痕がわずかに残る。中村編年Ⅱ-1(田辺編年MT15)。

土坑331出土遺物(253～267) 図化した須恵器坏蓋は(253)の1点のみ。口縁端部は緩やかに内傾する段をもち、内面天井部には不定方向のナデを施す。全体に厚手の感あり。(254～256)は須恵器坏。(254)の口縁端部は内傾する平面をもち、受部は水平にのびる。立ち上がりが高く、底面は比較的扁平である。中村編年Ⅰ～Ⅲ期(田辺編年TK208)。(255)の口縁端部は微妙に内傾する段をなし、受部は外上方にのびる。底面は扁平気味。(256)の口縁端部は丸くおさめ、受部は外上方へのびる。底面は扁平で、焼成前のヘラ記号が残る。内面は、底面を中心に自然釉が付着する。(257～260)は須恵器高坏。(257)は把手付無蓋高坏で、脚部を欠損する。口縁端部内面に沈線状の窪みが巡るが、内面底部を中心に付着した自然釉のため詳細は不明。脚部接合に際し、坏側に鋸歯状の刻み目を入れる。透かし孔は3もしくは4方。有蓋高坏(258)は、口縁端部を丸くおさめ、受部は外上方にのびる。受部先端

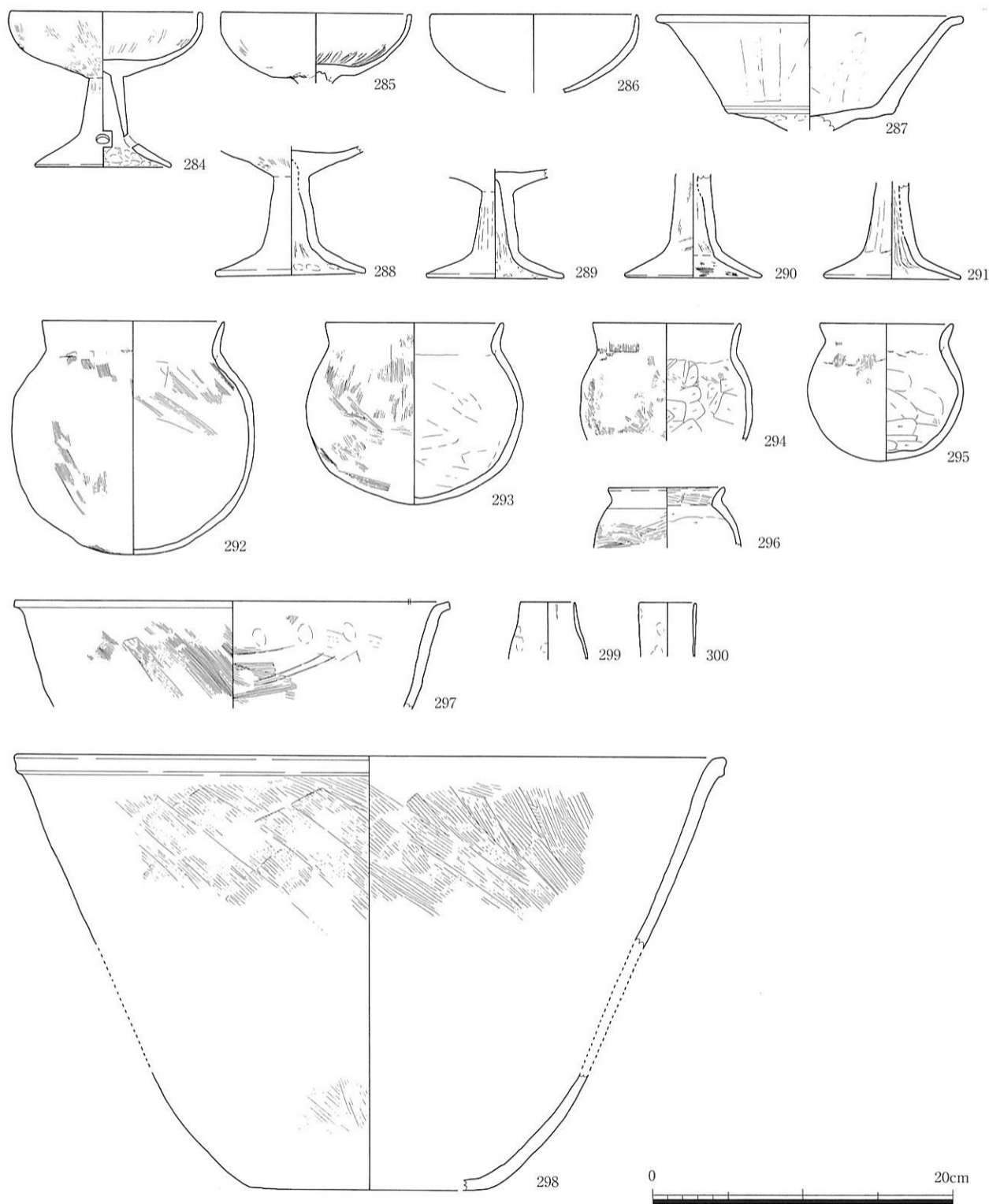


図58 第三面 土坑350 出土遺物 (2)

には、蓋を被せて焼成した際に付着した自然釉あり。脚部は欠損するが、透かし孔は3方。底部内面はわずかに不定方向のナデ。(259・260)は須恵器高坏脚部片で、ともに透かし孔はない。(259)は胎土に細かい砂粒を含む。(260)脚柱部内面に接合痕が残る。(261・262)は土師器碗。いずれも口縁端部は著しく外反し、(262)は体部外面下半にハケメのちヘラケズリを施す。土師器高坏脚部片(263)は、脚柱部外面を面取り風にヘラナデ、内面には絞り目が残る。全体的に器表面剥離著しい。(264・265)

は土師器甕。(264)は内外面ともハケメが残り、口縁部外面はヨコナデを加える。内面は全体的に煤け、外面は被熱のため一部赤変する。(265)は口縁端部及び頸部をヨコナデし、口縁端部は外反気味に仕上げ。体部内面は全体的に指頭痕が顕著に残り、体部外面は右下がりの粗いハケメを施す。(266・267)は丸底Ⅰ式の製塩土器片。

土坑350出土遺物(268～298) 須恵器坏蓋。(268)は口縁端部が内傾する凹面をもち、稜の突出はわずかで、天井部は(270・271)に比べ丸味をもつ。(269)の口縁端部はやや内傾する平面。(270)は口縁端部が内傾する平面で、稜は鋭く突出する。(272)の口縁端部は完全に接地し、稜は突出せず。口縁部外面に粘土接合痕あり。(273～275)は須恵器坏。(273)は口縁端部が内傾する平面で、端部が尖る。受部はわずかに外上方にのびる。蓋と組合せて焼成したので、受部端部に自然釉付着する。(274)は口縁部が内傾する凹面で、受部は水平にのびる。(275)は他の2点に比べ、立ち上がりが高い。中村編年Ⅰ-3(田辺編年TK208)。(276～280)は須恵器高坏。(276)は無蓋高坏の坏部片で、内面に自然釉の付着著しく、一部は剥離する。口縁端部に1条の沈線が巡るが、自然釉のため不明瞭である。脚は4方透かしで、坏部外面底部に穿孔の目印か、あるいは穿孔時についた工具痕が残る。(277)は有蓋高坏片。短く内傾する立ち上がりと、深い体部からなる。受部は水平にのびる。(278～280)は脚部片で、いずれも3方透かし。(280)は、脚下半部にカキメ調整を加える。自然釉が脚端部に内外面に著しく付着しており、天地逆にして焼成したものかもしれない。(281)は壺あるいは甗の口縁部片。白色を呈し、焼成は不良。凸帯間に波状文を施すが、上段のそれは一部ナデ消す。(282・283)は高坏形器台の坏部片。(282)の凸帯間は無文、(283)は波状文を施す。(284～286)は土師器碗形高坏。(284)は内外面とも剥離が著しいが、内面にはかろうじて縦方向のヘラミガキが残る。脚柱部外面は丸く仕上げ、同内面には指頭痕とともに布目[?]が付着する。透かし孔は1個。坏部片(285)は口縁端部がわずかに肥厚し面をもつ。内面にはヘラミガキを施す。同外面底部には段があり、わずかに平底状を呈する。脚柱部付近にのみハケメが残る。(286)は碗かもしれない。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。胎土は砂粒を含むものの、他に比べ精良である。大形有段高坏は(287)のみ図化した。底部外面に1条の沈線が巡る。(288～291)は高坏脚部片。(288)は摩耗が著しいが、坏底部外面にハケメが残り、脚柱部内面には絞り目と指頭痕が顕著。(289)は脚柱部外面をヘラナデ、同内面には絞り目と指頭痕が顕著に残る。(291)は(289)に比べ、脚柱部外面のヘラナデの幅が広い。(292～296)は土師器甕。(292～295)は、いずれも頸部の屈曲が弱く、口縁部は短く外上方へ立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。(292・293)の外面は縦方向のハケメが残り、内面下半にはヘラケズリを施す。(294～296)は小形甕。(294)は口縁部外面にハケメが残り、内面は雑なヘラケズリのため、ハケメが部分的に残る。(295)は頸部内面に接合痕が残る。(296)は他の甕に比べ、頸部の屈曲が強く、口縁部は太く短い。(297)は甗片で、口縁端部を強く外反させ、面をもつ。内外面は右下がりのハケメを施し、口縁部付近はヨコナデする。(298)は軟質系土器の鉢か。復原口径47cm、復原器高29cmをはかる大形品である。胎土は粗く、内外面とも右下がりのハケメを施す。府下の類例として茨木市溝昨遺跡²⁾例や、堺市大庭寺遺跡³⁾がある。(299・300)は丸底Ⅰ式の製塩土器。いずれも硬質焼成であるが、(300)の方がやや軟質である。

土坑435出土遺物(301～408) 須恵器坏蓋であるが、形態差が著しい。(301)は、口縁部に強い回転ナデを加え、同端部は鋭く内傾する凹面をなす。稜は鋭い。(302)の口縁端部は(301)に比べやや丸味をもつ。(303)は口縁端部に強い回転ナデを加えた結果、端部が著しく外反し、内傾する平面をもつ。(305)は口縁端部に内傾する凹面をもつ。他の坏蓋の天井部内面が不定方向のナデを加えるのに対

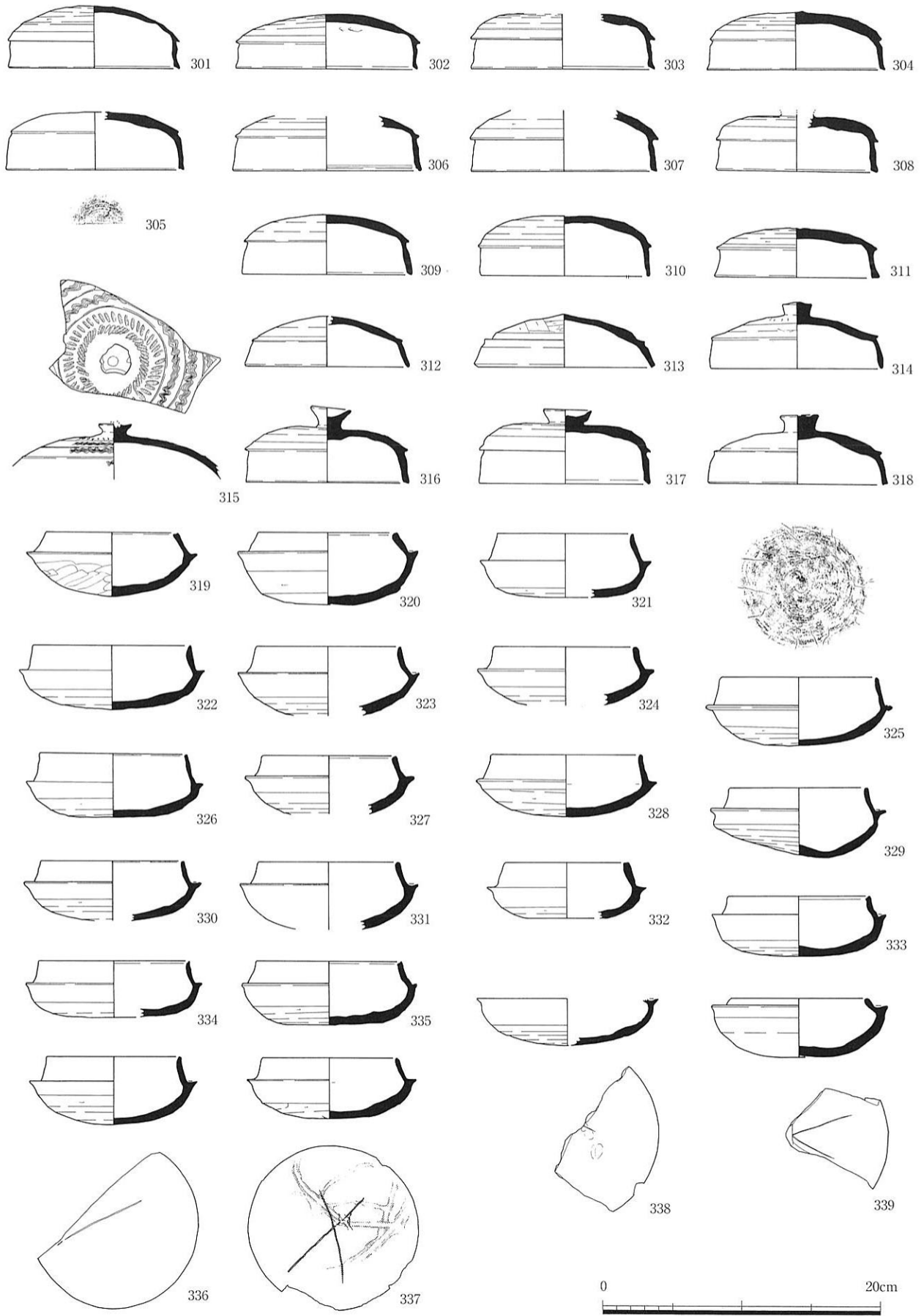


图59 第三面 土坑435 出土遺物 (1)

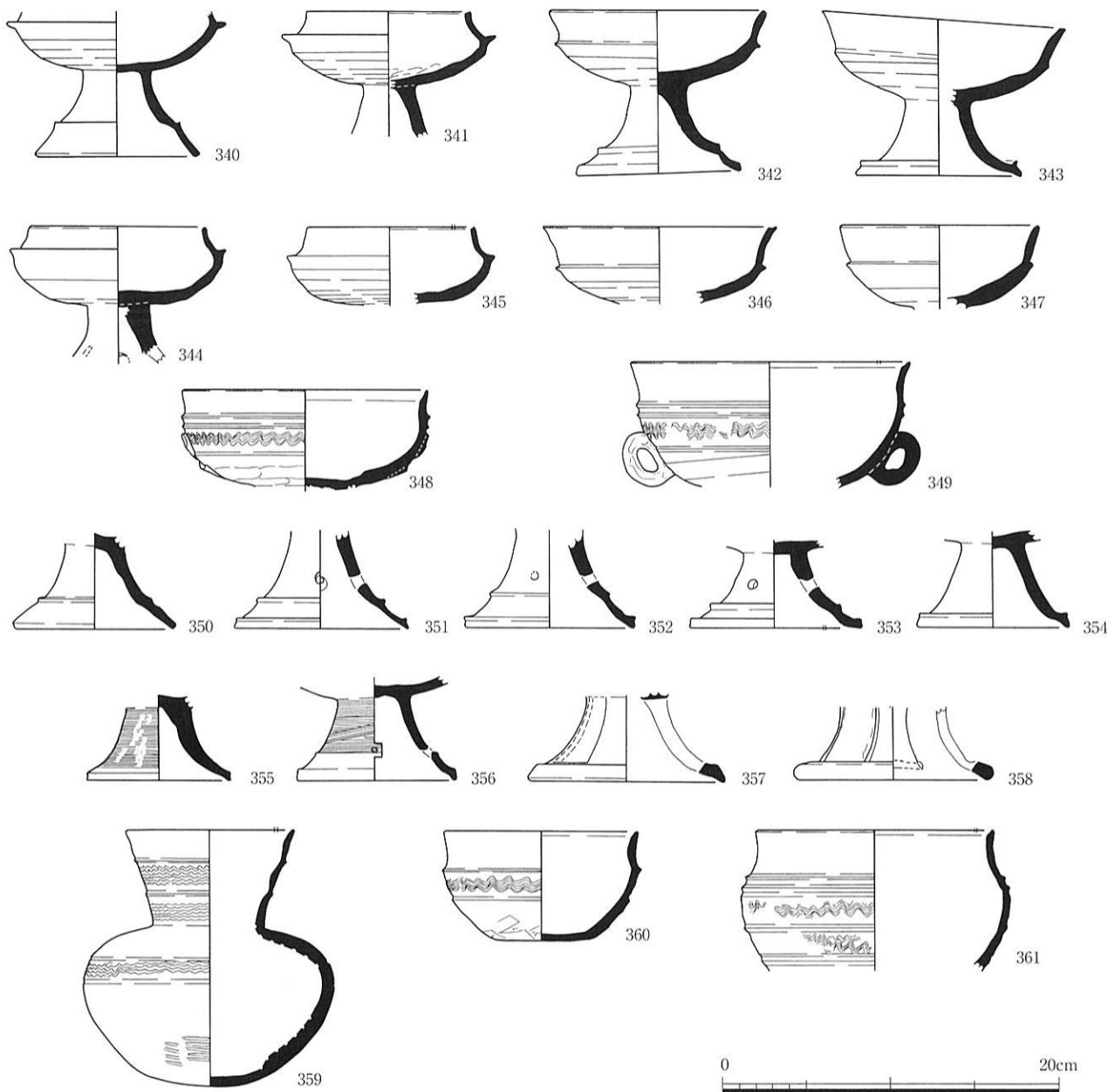


図60 第三面 土坑435 出土遺物 (2)

し、当資料には細かい同心円の当て具痕が残る。(306)の口縁端部内面に沈線が1条巡る。天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデを加える。(307)の口縁部は緩やかに外方に踏ん張り、同端部は内傾する平面をもつ。稜は水平にのびる。(308)は口径こそ小さいが、極めて厚手で、天井部内面はヘラナデを施す。(309)の口縁部は内弯気味、端部は丸くわずかに内傾する段を有する。天井部外面は、回転ヘラケズリのち回転ナデを施す。(310)の口縁端部は、内側へやや肥厚気味に丸くおさめる。(311)は、口縁端部が著しく外反し、端部は肥厚して面をもつ。稜は水平方向につまみ出す。天井部外面は回転ヘラケズリのち回転ナデを加える。「ハ」字形に外反する口縁部をもつ(312)は、同端部を丸くおさめる。(313)は器形・調整とも他にない特徴的なものである。頂部を除く天井部外面をヘラケズリし、さらに口縁部は「ハ」字形に外反し、稜も外方へ踏ん張る。(314~318)は有蓋高坏蓋である。(314)は、口縁部がわずかに膨らみ、端部を丸くおさめる。天井部頂部外面は、回転ヘラケズリ後回転ナデを施し、部分的に刺突状圧痕を施す。有蓋高坏蓋の中で最も大きい(315)は、天井部外面に2重の刺突文と、

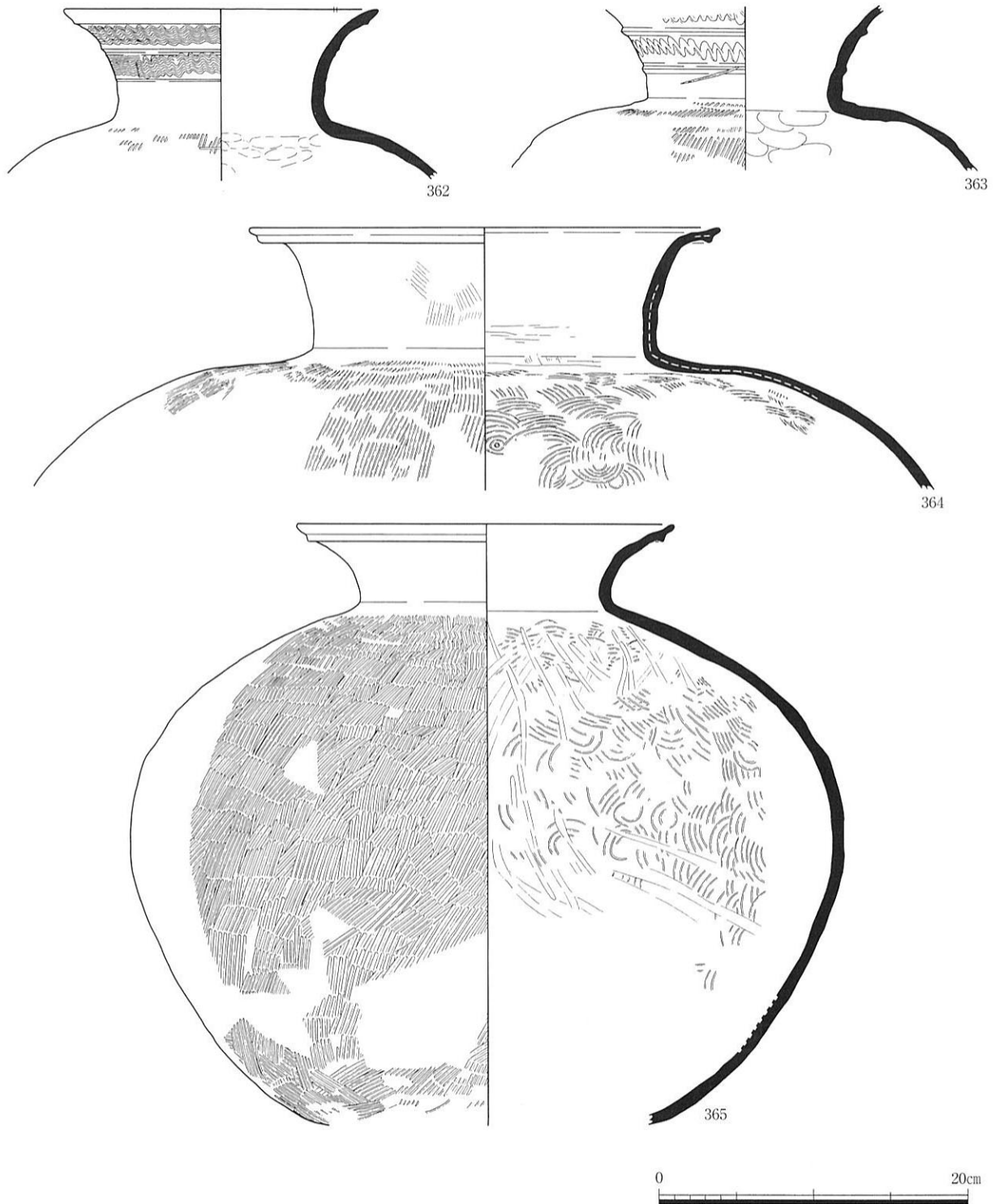


図61 第三面 土坑435 出土遺物 (3)

凸帯で挟まれた波状文帯が少なくとも3重に巡る。一部欠損するつまみは、逆に同器種中で最小である。(316)の内面は、つまみを取り付けたため窪む。(317)は高い口縁部と扁平な天井部が特徴的である。(318)の口縁端部は外反気味で、全体的に厚手である。天井部外面は回転ヘラケズリ後回転ナデ。(319～339)は須恵器坏。蓋同様形態差が著しい。(319)は、立ち上がりが太く短く、著しく内傾する。体～底部外面は手持ちヘラケズリ。(320)は立ち上がりが太く短く、著しく内傾する。受部はわずかに外上方にのびる。体部外面は回転ヘラケズリで、底部はナデ調整。(321)は口縁端部が尖る。器高に占める立ち上がりと体底部の比は1:1。(322)の立ち上がりは内傾気味で、端部は尖る。受部は水平にの

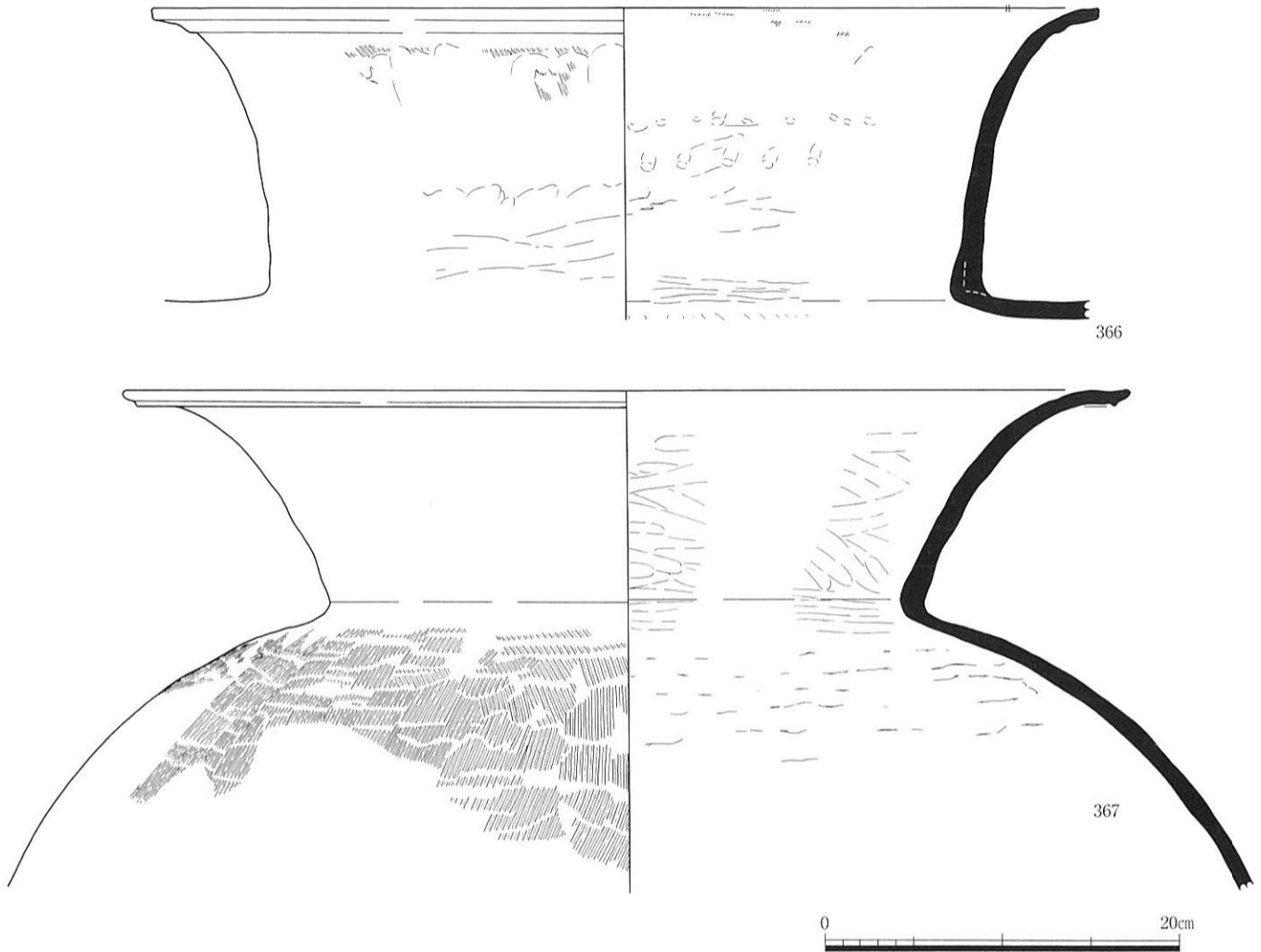


図62 第三面 土坑435 出土遺物 (4)

び、先端が尖る。底部内面は回転ナデを施す。(323)は立ち上がり先端を丸くおさめ、受部は外上方にのびる。(324)は立ち上がりやや先太り気味で、端部は断面方形を呈する。(325)は立ち上がり端部を丸くおさめる。受部は水平にのび、先端は丸くおさめる。底部内面には同心円の当て具痕が残る。(326)の立ち上がり先端は方形を呈し、受部は水平にのびる。底部外面は回転ヘラケズリのち、中心部のみナデ調整。火襷あり。(327)は立ち上がりやや内傾気味で、端部は断面方形を呈する。受部は水平にのび、先端を丸くおさめる。(328)は立ち上がりの先端を丸くおさめ、受部は水平方向にのびる。底部の歪む(329)は、立ち上がり端部を丸くおさめ、受部は水平方向に突出する。(331)は全体を回転ナデで仕上げる。他の資料に比べ、細かい白色砂粒の混入著しく、ザラザラとした手触りである。立ち上がり端部は丸くおさめる。(332)の太い立ち上がりの先端は、断面方形を呈する。受部は水平にのび、先端尖る。(333)は立ち上がり端部が内傾する平面をもち、受部は外上方へのびる。底部内面は回転ナデ。(334)は立ち上がり端部が内傾する凹面をもち、受部は水平にのびる。底部中心部を欠損するが、高坏の可能性がある。(335)は内傾気味の立ち上がり端部に内傾する段をもつ。受部は短く、先端は丸味をもつ。(336)は立ち上がり端部が方形を呈し、受部水平にのび、先端は尖る。底部内面はかなり広範囲にナデ調整。底部外面に焼成前のヘラ記号あり。(337)の立ち上がりは丸くおさめ、受部は水平にのびる。底部外面に焼成前のヘラ記号と火襷あり。(338)の底部外面にもヘラ記号。(339)は立ち上がり極端に短く、著しく内傾する。受部は外上方にのび、先端尖り気味。底部内面に絹と思われる布

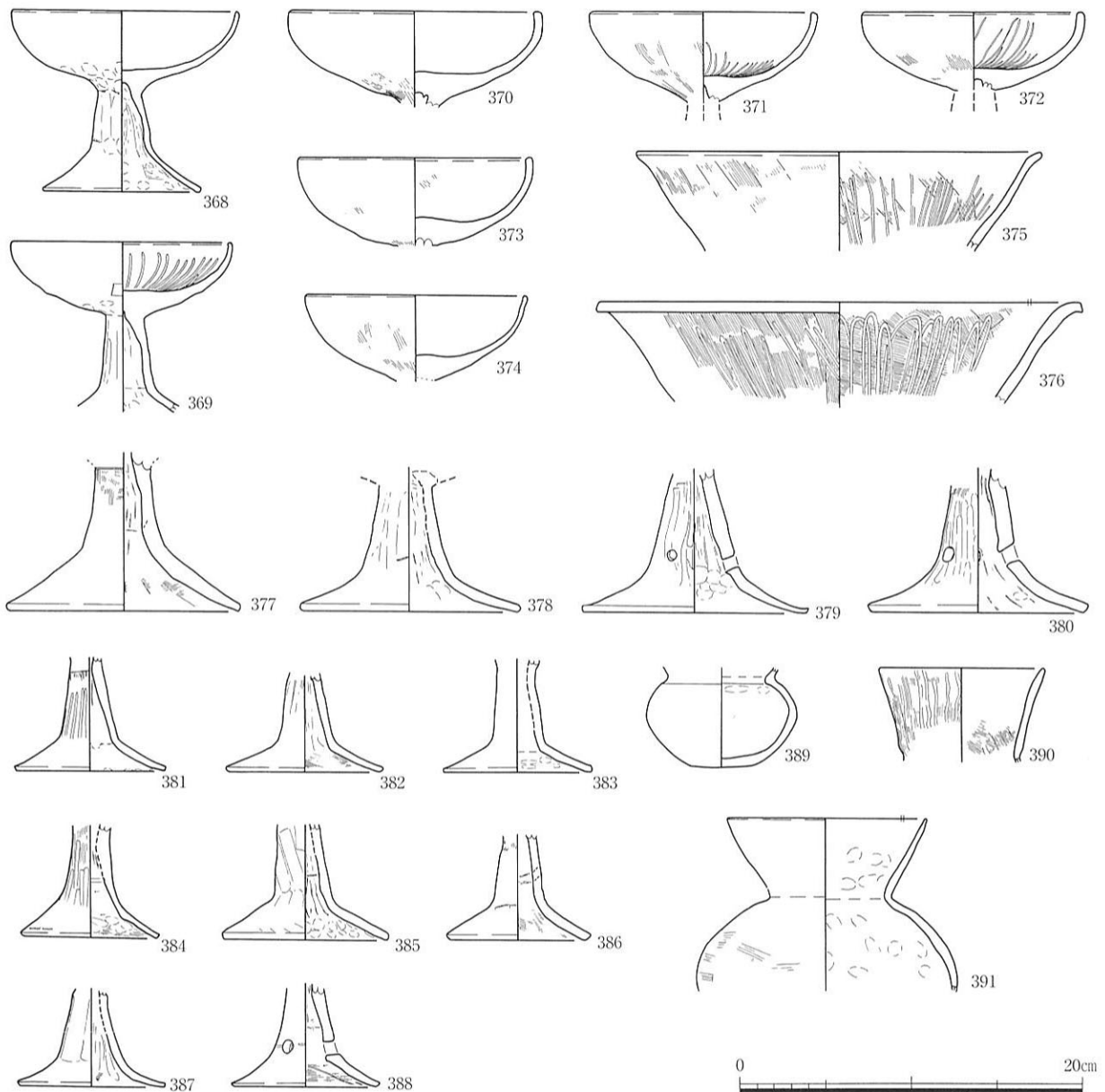


図63 第三面 土坑435 出土遺物 (5)

目圧痕あり。同様にヘラ記号のある底部外面にも布目が付着する。(340～358)は須恵器高坏。有蓋高坏として図化したものは(340・341・344・345)の4点。立ち上がりを欠損する(340)は、受部が水平にのび、脚柱部に1条の凸帯、穿孔はない。脚端部を欠損する(341)は、立ち上がり端部がやや外反気味で、内傾する平面をもつ。同じく脚端部を欠損する(344)は、立ち上がり端部を丸くおさめる。受部は短く水平にのびる。脚柱部には4方向の円形の穿孔あり。(345)は底部外面に脚部の剥離痕が残る。(344)に比べ、受部先端が尖り気味である。無蓋高坏は(342・343・346～349)の6点を図化した。(342・343)は口縁端部を緩やかに外反させ、体部に凸帯を1条巡らせる。(342)は脚端部に1条の凸帯をもつものに対し、(343)は脚端部を上方につまみ上げる。(346)は前二者に比べ、口縁端部は強く外反し、著しく内傾する凹面をもつ。内面には自然釉付着する。口径の最も小さい(347)は口縁端部に内傾するわずかな凹面をもつ。脚剥離部分には加工痕なし。(348)は体部外面に3条の凸帯と波状文帯が巡るが、把手は剥落している。体部外面下半に回転力を利用しないナデを施す。脚部接合に際して、不規則な刻み目を入れる。4方透かし。内面には自然釉が付着。(349)も内面に自然釉付着する。体部

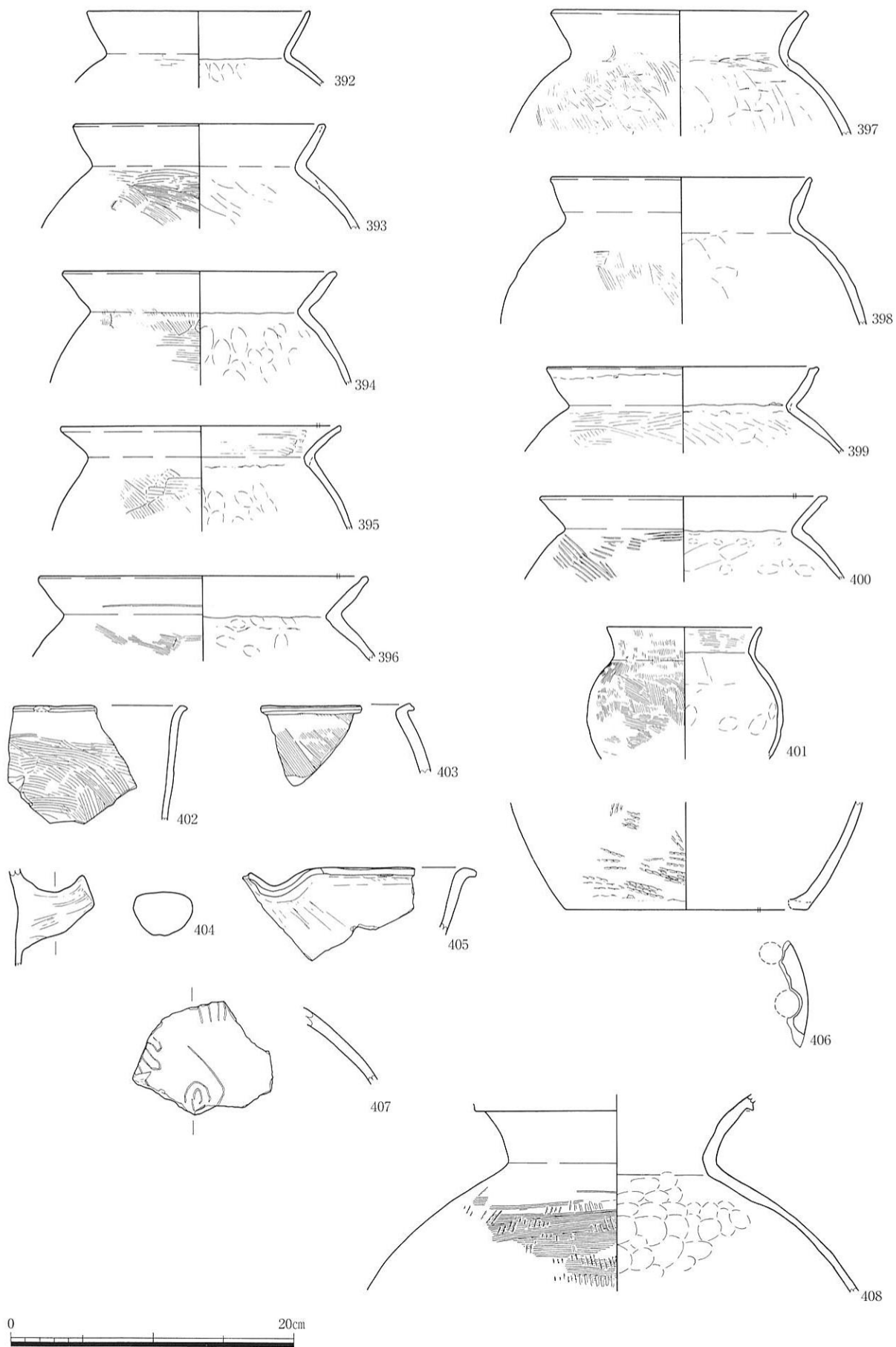
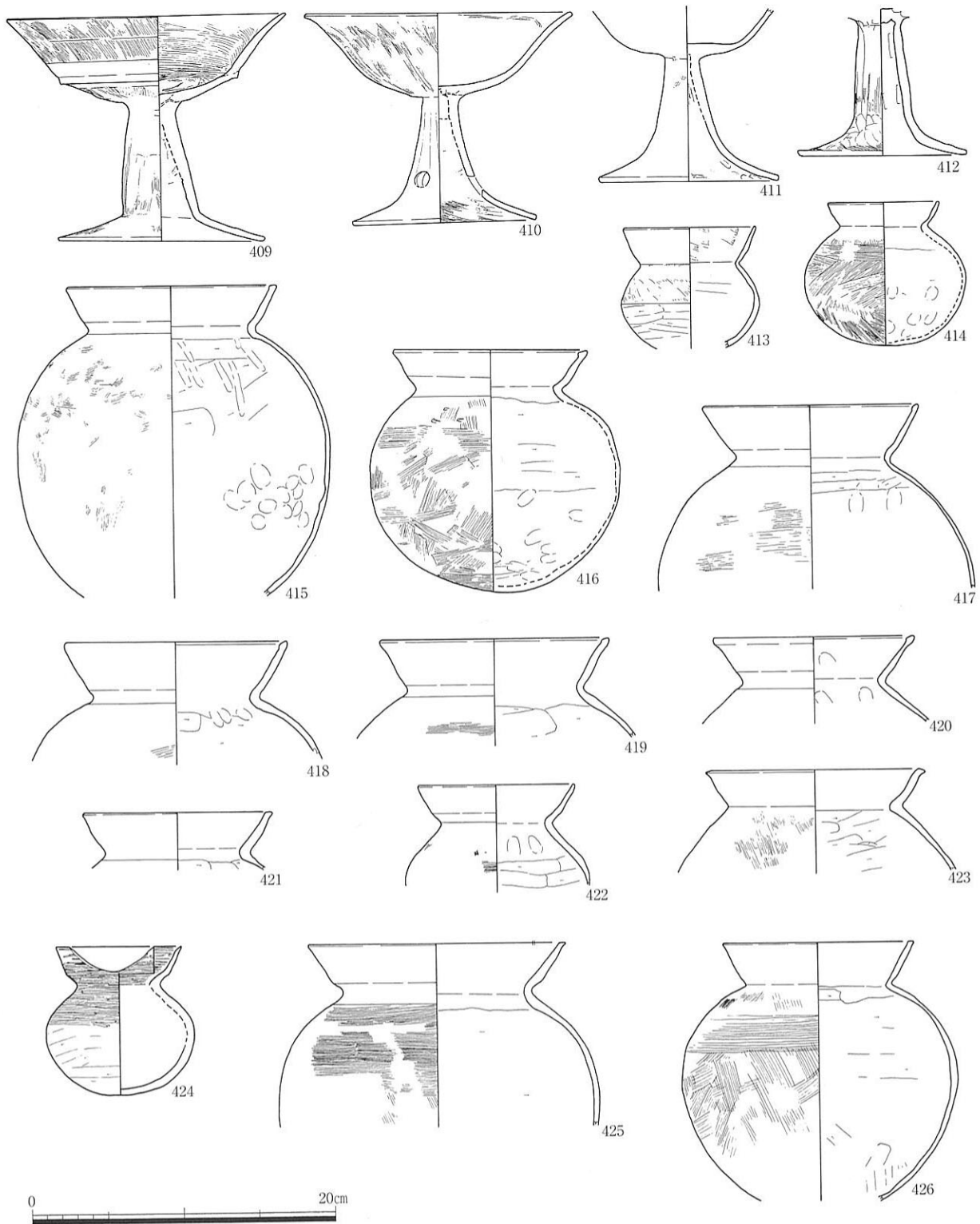


图64 第三面 土坑435 出土遗物 (6)

中位に径8mm程度の環状把手を付ける。わずかに脚部接合痕が残る。(350~358)は高坏脚部片。(350~353)は脚端部付近に1条の凸帯が巡り、(351)は4方の、(352・353)は3方の円形透かし孔を穿孔する。この透かし孔は、穿孔後内側にはみ出した粘土を、焼成後に割り取ったようだ。(354)は脚端部を上方にもつまみ上げる。穿孔はない。(355)は脚部外面にカキメを施す。(356)は凸帯より上方にカキメを施し、2ヶ所に円形の穿孔を加え、先の3例同様はみ出した粘土を処理する。(357・358)は長方形の透かしを、それぞれ3方、4方に入れる。(359)は須恵器壺。口縁部には2条の凸帯と波状文帯が巡り、凸帯と対応するかのように入面は窪む。おそらく凸帯間ごとに成形したために、このような痕跡が残ったのだろう。体部中位にも2条の凹線に挟まれた波状文帯あり、底部付近には平行タタキをナデ消した痕跡がある。(360・361)は須恵器碗。(360)の口縁部内側には沈線状の窪みが巡る。外面下半は回転ナデや手持ちヘラケズリを施し、底部は不調整。(361)の口縁端部は内傾する凹面をもつ。体部外面に凸帯が4条、波状文帯が2ヶ所巡る。(362~367)は須恵器甕。(362)は口縁部に1条の凸帯、口頸部に2条の凸帯と波状文帯が巡る。体部外面は平行タタキを施すが、自然釉の付着著しくその跡は不明瞭。頸部内面には、体部と口頸部との接合痕が残り、体部内面は無文当て具による窪み著しい。(363)の口頸部には、板状の小口で施文した波状文帯が巡る。またこの文様帯下端にはヘラ記号がある。体部外面は平行タタキ、同内面は無文当て具痕残る。(364)の口頸部には施文なく、ハケメ調整ののち回転ヨコナデを施す。体部内面の同心円当て具の彫り込みは極めて浅く、不明瞭な痕跡しか残らない。(365)は端部に1条の凸帯の巡る短い口縁部と、体部上半に最大径をもつ甕。体部外面は平行タタキ、内面は彫りの浅い同心円当て具痕が残り、その後指先あるいはそれに類する工具にて、非常に疎らに頸部~体部上半を波状にナデる。(366)は須恵器大形甕の口縁部片。外面は縦方向にハケメ調整ののち縦方向にナデを加える。(367)は口縁端部が大きく外反し、1条の凸帯が巡る。体部外面は平行タタキ、内面には粘土の接合痕残る。これらの須恵器は5世紀前半(中村編年I-2、田辺編年TK216)に属する。(368~388)は土師器高坏。(368~374)は碗形高坏。(368)は口縁端部を丸くおさめ、坏底部外面には脚接合時の指頭痕が顕著に残る。(369)は口縁端部を内側にやや肥厚させ、内面にヘラミガキを施す。脚柱部は幅の狭いヘラナデを施す。(370)の口縁端部がやや内弯し、丸くおさめる。内面にはミガキなし。他の資料に比べ胎土はやや白っぽい。口縁端部が外傾する面をもつ(371)の内面には、粗雑なヘラミガキを施文。外面に黒斑あり。(372)は口縁部が上方へ立ち上がり、端部に面をもつ。内面には細かいヘラミガキを施す。(373)は底部外面付近に、緩やかな段をもつ。(374)は(368)同様口縁端部を丸くおさめる。大形有段高坏は(375・376)の2点を図化した。(375)は内面にやや雑なヘラミガキを施文する。(376)の場合内外面にヘラミガキを施すが、特に内面はそれぞれが途切れずに連続する。(375)の口縁端部を丸くおさめるのに対し、(376)は断面方形を呈する。(377~388)は土師器高坏脚部片。大形の(377~380)は大形有段高坏の脚部片、小形の(381~388)は碗形高坏の脚部片。大形有段高坏脚(377・378・380)には脚裾部に黒斑あり(378は脚裾内面)。(379)は、他に比べ胎土が精良で、脚内面の屈曲部に指頭痕顕著に残る。また(379・380)は3方の円形透かし孔あり。碗形高坏脚(381・384・387)の脚柱部外面はヘラナデを施すが、中でも(387)は幅が広い。(383・384)の脚柱部内面は、横方向のヘラケズリを施す。(388)は円形透かし孔を3方穿孔する。脚裾部内面には焼成前のヘラ記号がある。精良な胎土の(381・384)や砂粒の顕著な(388)など差異がある。図化した壺は(389~391)の3点。(389)は壺体部片で、底部はやや平底気味である。内外面ともナデ調整。(390・391)は直口壺で、(390)は口縁部外面に縦方向のヘラミガキを施す。(391)は内外面とも剥離



第65 第三面 土坑244・243 出土遺物

著しく、調整は不明瞭であるが、他の資料に比べ橙色が強い。(392~401)は土師器甕。いずれも口縁部~体部上半にかけての破片資料である。(392~400)は、ともに口縁端部及び頸部外面をヨコナデする。しかし体部外面は、かろうじて横方向にハケメを施す例が(394・395・396・399・400)にみられるが、右下がりのハケメのみの資料も多い。体部内面は指ナデあるいは指押えのみで、ヘラケズリを施すものはない。口縁端部に明らかな面をもつものは(399・400)の2例のみである。土師器甕(401)は、口縁部外面~体部にかけてハケメ調整を施したのち、口縁部をヨコナデする。頸部の屈曲は弱い。

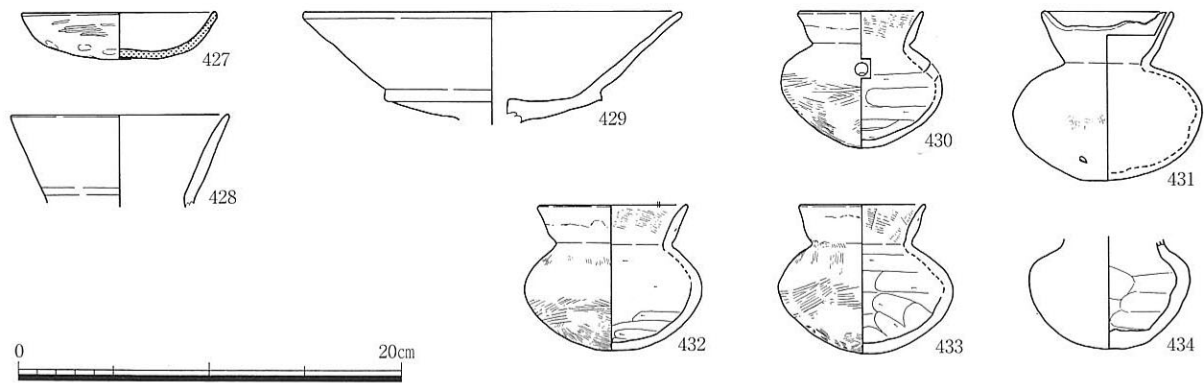


図66 第Ⅲ面 ピット740・796・527 出土遺物

内面体部上半はヘラケズリ。(402・403)は甑の口縁部片。端部を外方に折り曲げる。(404)は甑の把手。(405)は片口鉢。(406)は軟質系土器の甑底部片。外面には縄蓆文タタキが残る。(407)は土師器壺体部片。ナデ調整した器表に意味不明の線刻を施す。(408)は須恵器甕を模倣した土師器甕。体部外面は平行タタキののちカキメを加え、内面には無文当て具痕が残る。口縁端部を欠損するが、意図的に打ち欠いたものかもしれない。

土坑244出土遺物 (409～423) (409～412)は土師器高坏。有陵外反高坏(409)は坏部外面に右下がりのハケメを施し、体部下半にある稜付近はヨコナデを加える。内面もやはり右下がりのハケメ調整をする。脚柱部～裾部外面はハケメを施し、その後脚柱部にはヘラナデによって面取り風に仕上げる。脚柱部内面は横方向にヘラケズリ、その他の部位はナデ調整。口縁部外面及び脚裾の一部に黒斑あり。無稜外反高坏(410)は、坏部外面に右下がりのハケメ、内面にもハケメ調整を施すが、両面とも剥離著しい。脚柱部外面はヘラナデ、同内面は横方向のヘラケズリで、3方向に円孔を穿孔する。坏部・脚部に黒斑あり。無稜外反高坏と思われる(411)は、脚部内面に絞り目が残り、坏部との境に棒状工具の圧痕あり。脚部片(412)は、脚柱部外面をタテハケのちヨコナデ、同内面を横方向のヘラケズリを加える。小形壺(413)は、口縁端部と頸部にヨコナデを施す。胴部最大径に弱い稜をもち、胴部下半には黒斑あり。小形壺(414)も口縁端部と頸部にヨコナデを、体部上半にはヨコハケを施す。内面は頸部下方よりヘラケズリ、底部付近は指頭痕が残る。原田編年布留I期の所産か。(415～422)は布留式甕。(415)は比較的球形に近い器形を呈し、以下に記す他の甕同様口縁端部及び頸部をヨコナデする。体部外面は磨耗のため、器表に施されたハケメの様子は不明瞭である。下半には煤付着。同内面上半はヘラケズリ、下半は部分的にヘラケズリを施すが、指頭痕が顕著に残る。(416)はほぼ完形の布留式甕である。口縁端部は内傾する面をもち、体部外面はハケメ調整を加えるが、上半のそれは横方向に施す。内面上半は横方向のヘラケズリ、下半は指頭痕が残る。(417)は体部外面上半に横方向のハケメを施す。煤が付着する。体部内面は頸部直下をヘラケズリ、それ以下はナデ調整。(418・419)はともに口縁端部が内側に肥厚する。(419)は体部外面に横方向のハケメ調整、同内面頸部以下にヘラケズリを施す。(420)の口縁端部は両側に肥厚。小形甕(422)は口縁部内面に黒斑あり。体部外面中位に横方向の細かいハケメが残る。これらは、おおよそ原田編年布留IV期の所産であろう。これに対し(423)は布留式土器の影響を受けた庄内甕で、口縁端部のヨコナデによって外傾する面をもつ。体部外面は右下がりのハケメ調整、同内面はヘラケズリを施し、頸部は鋭利な角をもつが、やや粗雑さをみせる。黒斑あり。時期的には原田編年庄内Ⅲ期～布留I期の所産で、混入品と考えるべきだろう。

土坑243出土遺物 (424～426) 小形壺(424)は、口縁部内外面及び体部外面上半にかけて回転利

用の細かいヘラミガキを施す。体部下半はヘラケズリ、体部内面はナデ調整。口縁部を意図的に打ち欠く。原田編年布留Ⅱ期。(425・426)は布留式甕。ともに口縁部・頸部を強くヨコナデし、口縁端部は内側に肥厚し水平方向の平坦面をもつ。また体部外面上半に横方向のハケメを施すなど、原田編年布留Ⅱ期の特徴を兼ね備える。(426)の体部下半には煤付着。

ピット740出土遺物(427) 図化資料は瓦器皿で、内外面とも磨耗著しく、外面にわずかヘラミガキが残る程度。底部外面不調整。

ピット796出土遺物(428) 土師器直口壺の口縁部片。外面はハケメのちヨコナデ。

ピット527出土遺物(429~434) 有稜外反高坏(429)は、成形時の凹凸が著しく、全体的に調整が粗雑である。坏部底面に穴あり?布留式前半。(430~434)は小形壺で、布留式甕に通有の口縁部・頸部に強いヨコナデを施す。(430・432・433)はいずれも口縁部外面に接合痕残る。口縁部内面はハケメ後ナデ。体部上半はヨコナデ、同最大径以下は不定方向のハケメ調整を施す。なお(430)は体部上半に焼成前の穿孔あり。(433)の体部最大径付近はやや尖り気味。いずれも布留式前半。(431)は体部中位にわずかハケメが残るが、全体をナデ調整で仕上げる。口縁部は意図的に打ち欠かれたらしく、体部下半にも外面から打撃を加えてできた穿孔あり。(434)は口縁部を欠損するが、体部器壁が厚く、大きさの割には重い。内外面とも粗雑なナデ仕上げ。

川200・719出土遺物(435~1087) 河川からは弥生時代前期から平安時代にわたる遺物が出土している。出土した土器は表面の剥離が著しいものが若干あるが、大半のものは摩耗や剥離がないことや出土傾向から、上流から流されてきたものではなく左岸から投げ込まれたものといえる。そのうち奈良~平安時代前期の土器類(土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、瓦など)が圧倒的に多く、土製品、石製品、皇朝銭、獣骨も出土している。このうち個体数にして735点を図化し得た。その中で奈良時代の土師器と須恵器の坏・皿類について器種名および調整技法は、『平城宮発掘調査報告Ⅶ, XI』を参考にして以下のように分類し、「a0手法」のような表記方法を用いた。土師器煮炊具については全形のわかるものがほとんどないので、外面の調整方法と胴部から口縁部にかけての形態により分類した。

a手法：底部外面を削ることなく、成形時の凹凸をそのまま残すもの

b手法：底部外面をヘラケズリして平らにするもの

c手法：底部外面から口縁部までヘラケズリするもの

e手法：口縁部外面をヨコナデし、それ以下は不調整のもの

0手法：ヘラミガキを全く施さないもの

1手法：口縁部外面をヘラミガキするもの

2手法：底部外面をヘラミガキするもの

3手法：口縁部・底部外面の全面をヘラミガキするもの

土師器坏A(435~473) 広く平らな、あるいは丸みのある底部から口縁部が斜めに開いて立ち上がる形態である。このうち(435~450)は器高が高めのもので、底部と体部の境を削って丸くしている。(435~449)は口縁部内面に2段の放射状暗文、底部内面にラセン状暗文を施すものである。放射状暗文の間隔は細かい。平城宮Ⅰの時期に比定できるものである。外面調整は(448)がa1手法、(437・445・447)がb1手法、(442)がb3手法、(435・436・438・439・446・450)は底部から口縁部の半ばまでヘラケズリするもので(446)が1手法、(435・436・438・439・450)が3手法である。また(450)

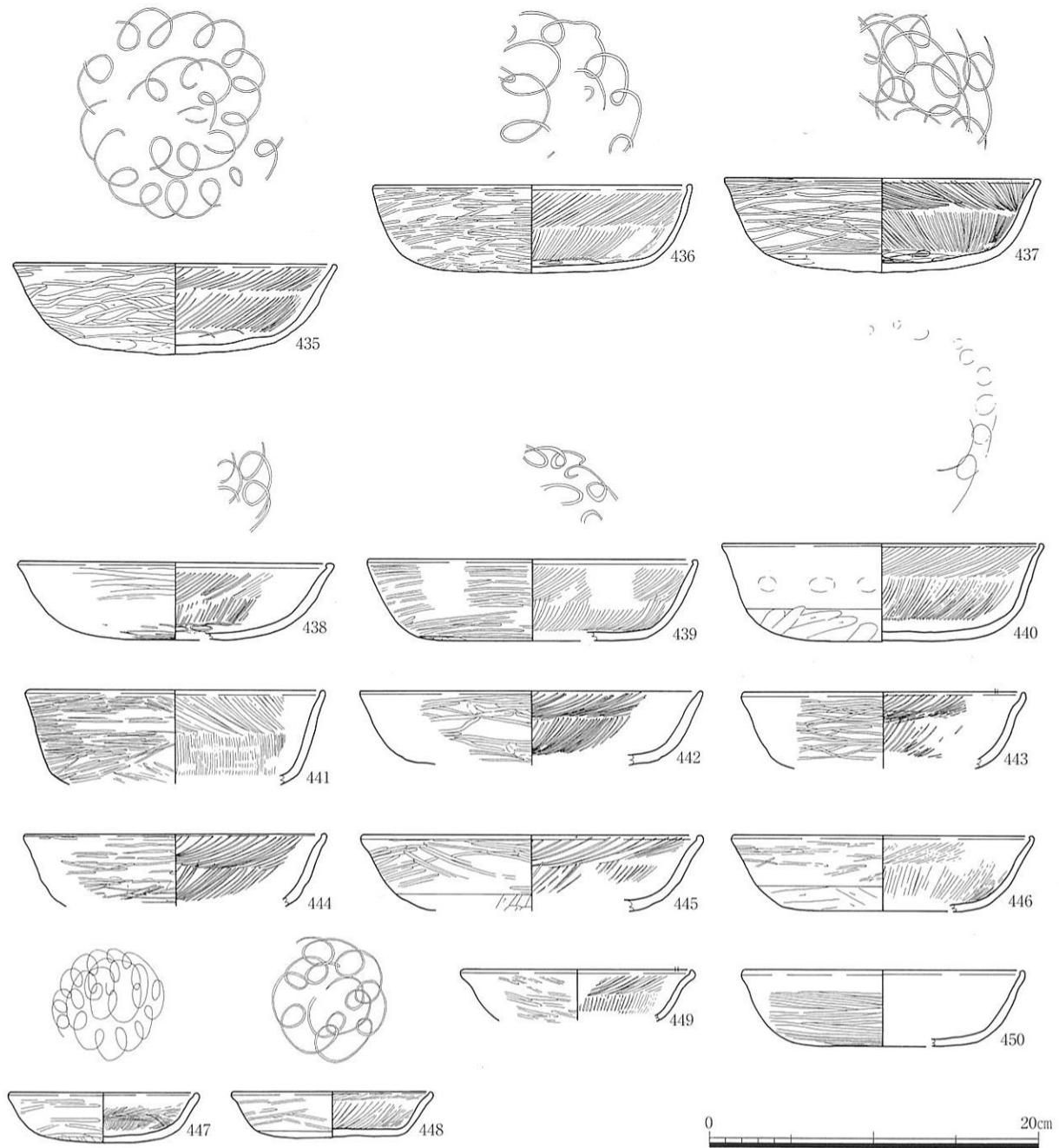


図67 第三面 川200・719 出土遺物 (1)

は他の土器とは外面調整が異なる様相をもつ。口縁部が強いヨコナデ、それより下は幅広のヘラミガキを密に施しているのに対して、内面は水流の中で石粒が当たったかのように所々剥離しているが、ナデ調整で暗文はみられない。外面はにぶい赤褐色を呈しており、顔料が塗られているかもしれない。今までのところ近隣地域にはこのような例は知られていない。(438) は内面の一部、(443) は内面および外面、(449) は内面が燻されたような黒色をしていて一見すると黒色土器のように思われるが、器形と調整はほかの土師器と同じである。(445) は底部外面に黒斑がある。

(451~460・465) は口縁部内面に1段の放射状暗文、底部内面にラセン状暗文を施すものである。前述のものにくらべて器高が低い。平城宮Ⅲの時期に比定できる。(467) は内外面ともに表面の剥離が著しいが口縁部内面に連弧状暗文と放射状暗文、底部内面にラセン状暗文が部分的に残る。平城宮Ⅱの時期に比定できる。外面調整は(465) がa0手法、(453) がb1手法、(451・452・454~460) がb0手

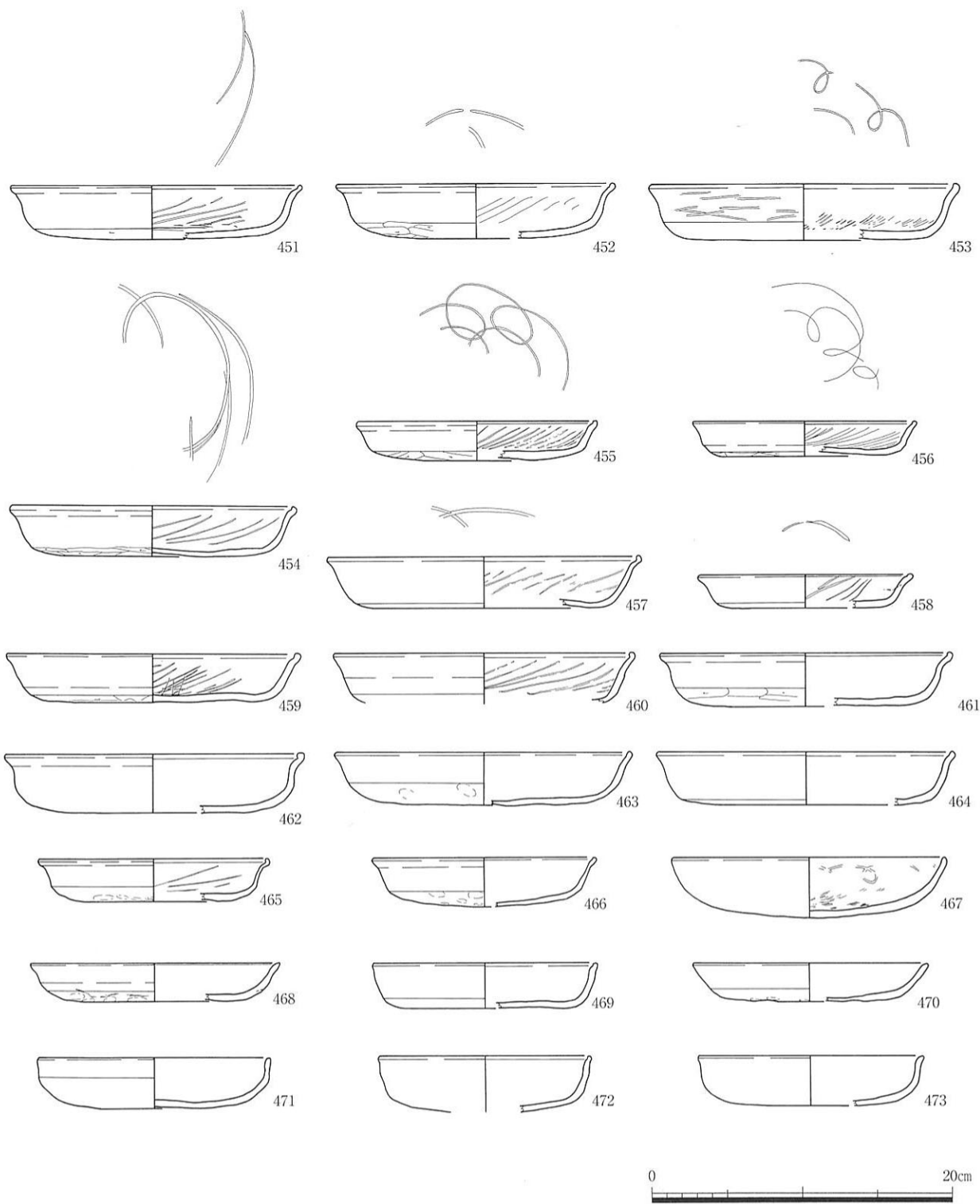


図68 第Ⅲ面 川200・719 出土遺物 (2)

法である。口縁部形態からおおむね3つに分類できる。口縁部外面を強くヨコナデするために口縁部が屈曲するもの(451・452・454・455・465・466)、口縁部外面をヨコナデするために口縁部が外反するが前者のように強く屈曲しないもの(453・456・457~460・468)、口縁部が外反せずに丸く立ち上がるもの(467)である。

(459)は内面から口縁部外面にかけて光沢のある黒色物が付着している。また割れた断面の一部に煤が付着している部分があり、火に入れられた可能性がある。また内面の底部から口縁部が立ち上がる

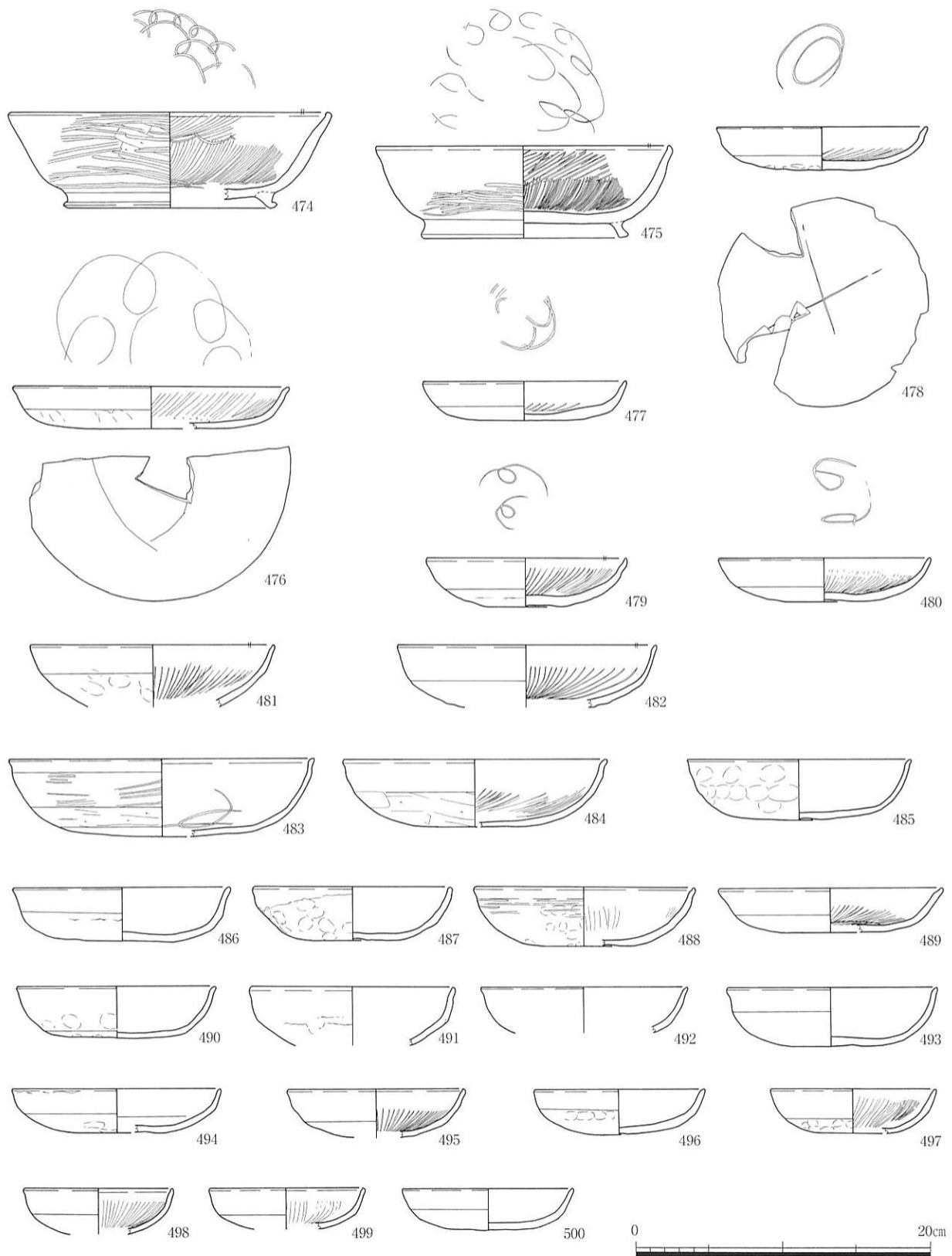


図69 第Ⅲ面 川200・719 出土遺物 (3)

部分には焼成後の線刻がある。(467) は底部内面から口縁部外面の一部が燻したような黒色を呈する。

(461~464・466・468~473) は内面に暗文を施さないものである。8世紀中頃の所産であろう。外面調整は(461)が底部から口縁部の半ばまでヘラケズリするもので0手法、(463・466・468~470・

472) がa0手法、(461) はb0手法、(462・464・471・473) は表面が著しく剥離しているため調整は不明である。口縁部形態からおおむね4つに分類できる。口縁部外面を強くヨコナデするために口縁部が屈曲するもの(461・462・466)、口縁部外面をヨコナデするために口縁部が外反するが前者のように強く屈曲しないもの(463・464・468)、口縁部が外反せずに斜め上方に立ち上がるもの(470)、丸みのある底部から口縁部が直立気味に立ち上がるもの(469・471~473)である。

また(461・464)のように、内面や外面が燻したような黒色をしているものが数点ある。(461)は外面の底部から口縁部にかけて光沢のある黒色物が付着し、内面は燻したような黒色を呈する。(464)は内面全体が燻したような黒色を呈し、炭化物が付着する。(471)は器高が高めで口縁部の上半部が垂直に立ち上がる形態をしており、埴Aに分類できるものかもしれない。(473)は底部外面に黒斑がある。(469・472・473)は口縁端部外面が強いヨコナデのため凹線状にへこみ、(472)は口縁部内面端部に沈線を巡らせる。

土師器坏B (474・475) 坏Aに高台をつけたものである。両方とも口縁部内面に2段の放射状暗文、底部内面にラセン状暗文を施すものである。放射状暗文の間隔は細かい。(474)は口縁部内面に2段の放射状暗文の後に連弧状暗文を施す。平城宮Iの時期に比定できる。

土師器坏C (476~500) 平底ないし丸底から口縁部が斜め上に開く形態のものである。口縁部端面が内傾するものを特徴として分類しているが、内傾しないものも若干含まれる。8世紀中頃の時期におさまるものと思われる。(476~484・488・489・495・497~499)は内面に暗文があるものである。口縁部内面の放射状暗文は1段で、間隔は粗く雑である。底部内面のラセン状暗文も雑で、確認できるのは(476~480・483)である。(483)は放射状暗文がなく、内面に雑なラセン状暗文を施すのみである。外面の調整は(476~482・489・495・497~499)がa0手法、(488)はa1手法、(483)がb1手法、(484)は底部から口縁部の半ばまでヘラケズリするもので0手法である。(476)は底部外面に焼成後の線刻、(478)は底部外面に焼成前の線刻「×」がある。(481・488)は内面が燻したような黒色をしている。(499)は口縁部外面に黒斑がある。

(485~487・490~494・496・500)は内面に暗文を施さないものである。外面調整は(485~487・490・494・496・500)はa0手法、(493)はb0手法である。(485)は二次焼成を受けているもので、底部付近がにぶい橙色を呈し、断面に煤が付着している。(487)は内面に煤が付着し、一方の口縁端部外面が黒色をしているため、灯明皿として使用された可能性がある。(492)は外面底部付近から口縁部にかけて光沢のある黒色物が付着している。(496)は外面に黒斑がある。

土師器皿A (501~541) 広く平らな底部から斜め上に短い口縁部が立ち上がる形態である。(501~523)は口縁部内面に放射状暗文1段、底部内面にラセン状暗文を施すものである。平城宮IIIの時期に比定できる。放射状暗文の間隔が1cm程度の粗いもの(504~506・509・511・521・522)がある。外面調整は(502・513~518・520)がa0手法で、そのうち(502・520)には底部外面に木葉痕が残る。(501・503~512・519・521~523)がb0手法、(519)は底部から口縁部の半ばまでヘラケズリするもので0手法である。(515)は底部外面に焼成前の線刻が、(501)は底部外面に、(522)は底部内面にそれぞれ焼成後の線刻がある。また内面や外面が燻したような黒色を呈するものが数点ある。(502・506)は底部内面の一部、(514)は底部内面から口縁端にかけて、(513)は口縁部外面の一部の土器表面に光沢のある黒色物が付着している。(522)は口縁端部内面に沈線を施す。(523)は底部外面に黒斑がある。

(524~541)は内面に暗文がないものである。口縁部形態により4つに分類できる。①口縁部と底部

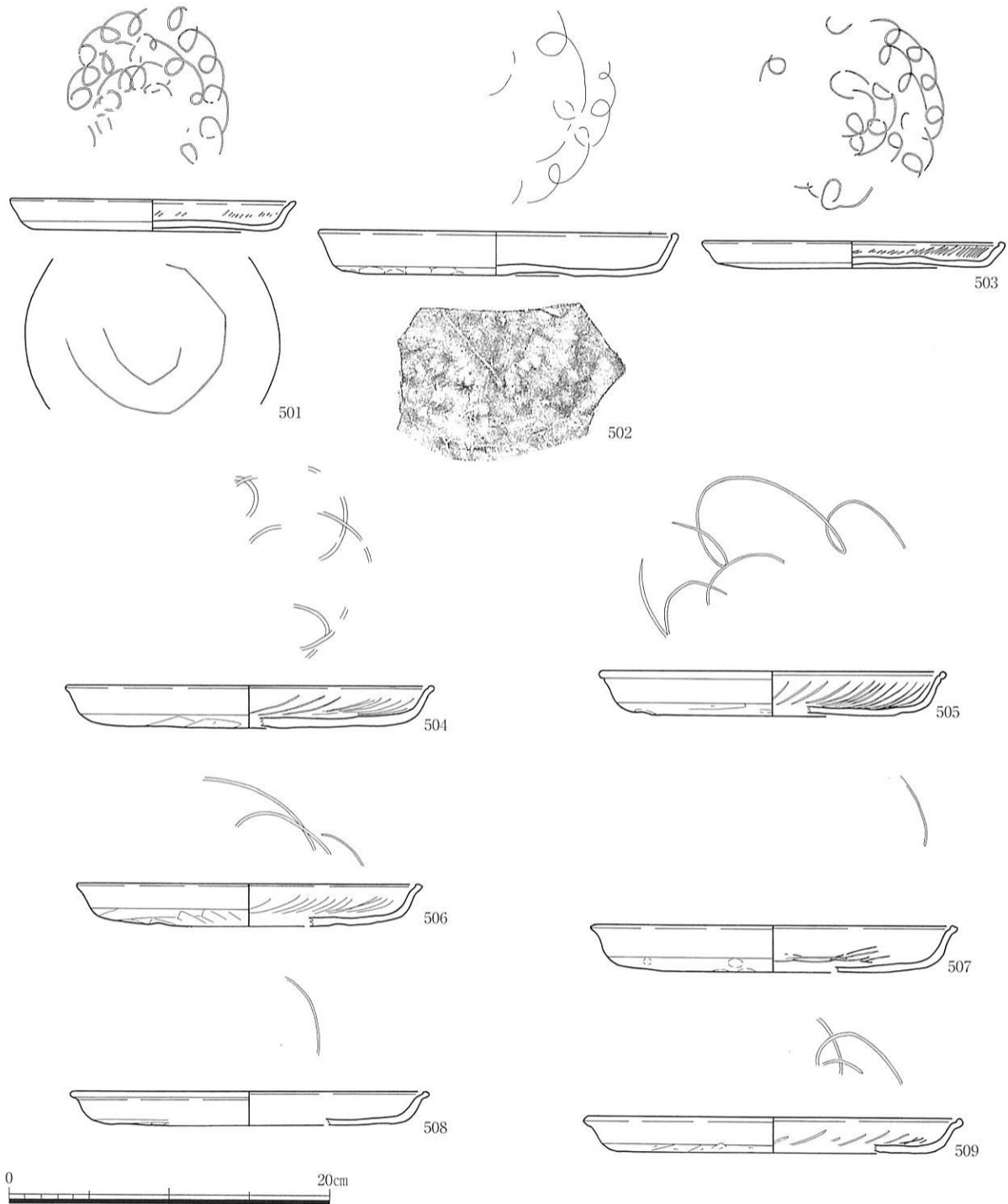


図70 第三面 川200・719 出土遺物 (4)

の境付近を強くヨコナデし、口縁部が外反して立ち上がるもの (534~541)、②底部から内弯して口縁部が立ち上がり、上端をヨコナデするもの (531~533)、③底部から口縁部が内弯して立ち上がり、口縁端部を内側に折り込んで肥厚させるもの (524・526)、④底部から口縁部が斜め上方に立ち上がるもの (527~530) である。これらのうち (530~533) は口縁端部内面に沈線を施すものである。

外面調整は (525・529・530) がa0手法である。そのうち (529) は底部外面に木葉痕が残る。(524・527・532) がb0手法、(531・533~541) がe0手法である。(525) は内面全体が燻したような黒色を呈し、炭化物が付着する。(524~530) は8世紀後半、(531~541) は9世紀代の時期におさまるも

のと思われる。

土師器皿 B (545) 皿 A に高台をつけたもので蓋と対になるものである。口縁部内面に 2 段の放射状暗文、底部内面にラセン暗文を施すものである。外面も丁寧にヘラミガキを施す。平城宮 I の時期に比定できるものである。

土師器皿 C (542~544) 「て」字状の口縁部形態を有する手捏ね成形の小皿である。器壁の厚さは (542・543) が 1.5~2 mm、(544) が 1~1.5mm と非常に薄い。また (543) は底部内面にハケによる調整痕が残る。この 3 点は川 200 埋没後に残った窪地に堆積したと思われる土層から出土したものである。10 世紀後半から 11 世紀初め頃の所産である。

土師器蓋・その他 (546~558) (546・547) は坏の口縁部片で平城宮 II の時期に比定できるものである。(548) は鉢の口縁部片である。口縁部内面に放射状暗文とその上端に連弧状暗文を施すもので、外面を丁寧にヘラミガキする。(549~552) は坏あるいは皿の底部片である。(549) は底部外面に焼成前の線刻、(550) は底部内面に焼成後の線刻がある。(551・552) は底部外面に木葉痕が残る。(553) は蓋の口縁部片で、内面に放射状暗文とラセン状暗文が残り、外面に丁寧なヘラミガキを施す。(554~558) は坏 B もしくは皿 B 蓋のつまみ片で、いずれも断面形がボタン状を呈する。(554・555) は平らな紐頂部にラセン状暗文を施し、(554・556) は蓋頂部外面に丁寧なヘラミガキが残る。

土師器碗 (559~580) 平底の底部から斜め上方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外面を強くヨコナデするために口縁部上方がやや内側に屈曲する形態のものである。高台がつかない碗 A (559~566) と高台を貼り付けた碗 B (567~570) がある。

外面調整が指押さえによる指頭痕をナデ消しているもの (561~566・568・577・579) と指頭痕が顕著に残るもの (560・567・569・570・572~574・576・580) が多くを占め、前者は 9 世紀初頭、後者は 9 世紀中葉から後葉の時期が当てられる。このうち (567・568) は (569・570) に比べて高台が低く粗雑な作りであるため 10 世紀前半頃に下る可能性がある。また (559・571・575・578) は前述のものに比べて古い様相を呈するもので 8 世紀末から 9 世紀初頭に遡るものと思われる。(559) は体部半ばまでヘラケズリを施したあとヘラミガキを施し、(571・575・578) は指押さえで成形したのち口縁端部をヨコナデし、ヘラミガキを施す。(576・579) は口縁部外面に 2 段のナデを施す。(575・578) は内面に暗文を施す。また (578) は内面が燻したような黒色を呈する。(560) は底部内面全体に墨が付着する。擦った痕跡はなくパレットのように使用したと思われる。

土師器盤 (581~583) 低い底部から口縁部が斜めに大きく開く形態である。8 世紀代の所産であろう。(581・582) は盤 B で断面が台形のしっかりと高台を貼り付け、外面調整は口縁部をヨコナデし、以下をヘラケズリするものである。(581) は底部内面から口縁部にかけてラセン状暗文がある。

(583) は口縁端部を内側に巻き込まずにそのまま丸く終わらせるものである。口縁端部から下がった位置に 1 条の沈線が巡る。口縁部内面に連弧状暗文がある。外面調整は口縁部をヨコナデし、以下は不調整で指頭痕が残る。外面は燻したように黒色になっている。

黒色土器坏・碗 (584~588) すべて内面が黒色の A 類である。平安京 II 期 (9 世紀後半) の時期に相当するものと思われる。(584) は坏である。内面に暗文がわずかに残る。器壁が 3 mm と非常に薄くて丁寧に作りである。(585~588) は碗で (585・586・588) は断面台形のしっかりと高台がつく。

(585・586) は内面を丁寧にヘラミガキし、外面調整はヘラケズリである。(585) は口縁部内面に連弧状暗文がある。(587) は外面をヘラケズリしたあとヘラミガキを施す。

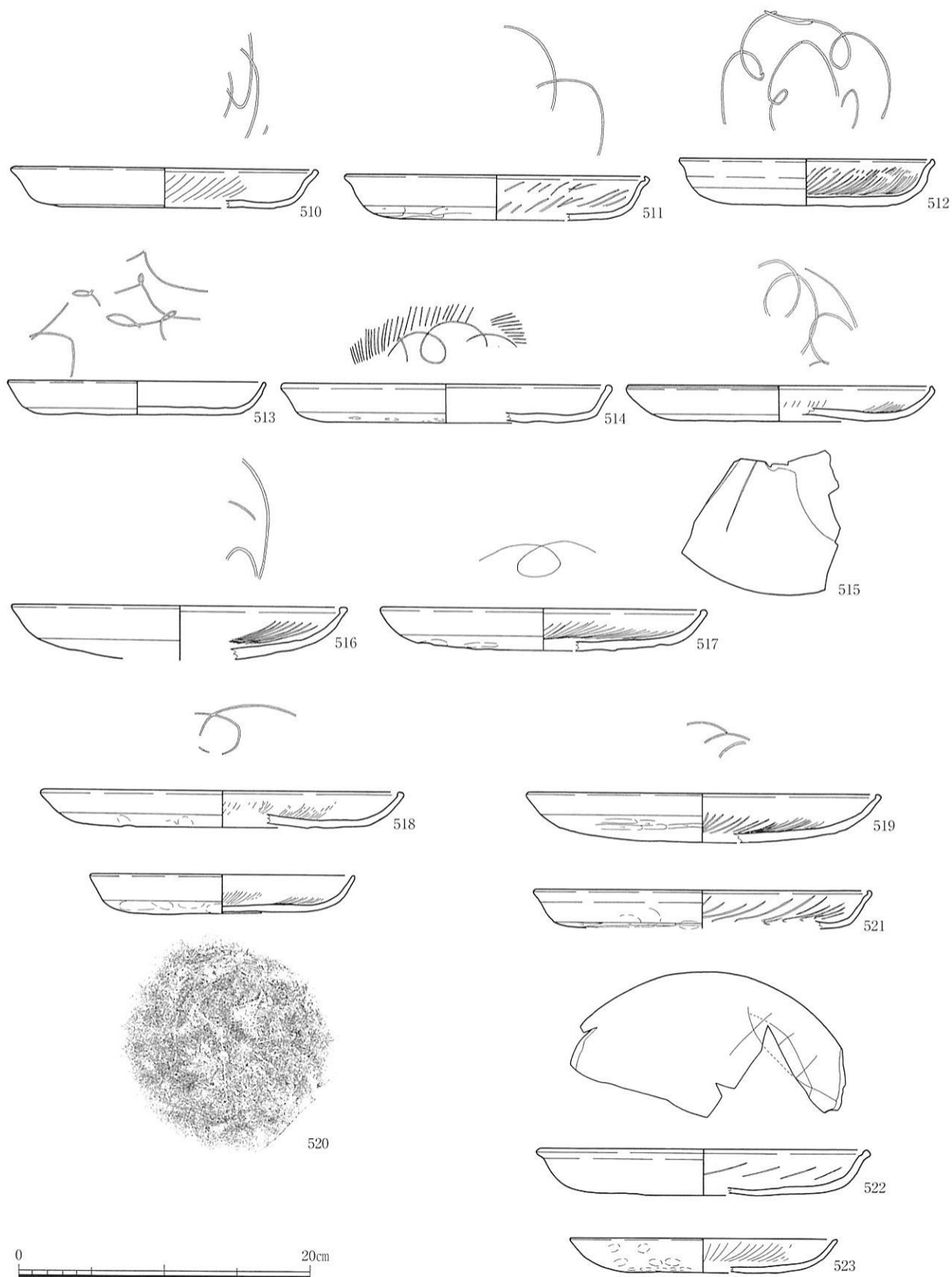


図71 第Ⅲ面 川200・719 出土遺物 (5)

土師器高坏 (589~597) ラップ状に開く裾部とヘラで多面体に面取りした脚部に、大きく外方に開く浅い坏部がつく形態のものである。平城宮Ⅱ~Ⅲの時期に比定できるものであろう。(589~593)は坏部片である。(593)は坏部内面に2段の放射状暗文、1段目と2段目の放射状暗文の間に連弧状暗

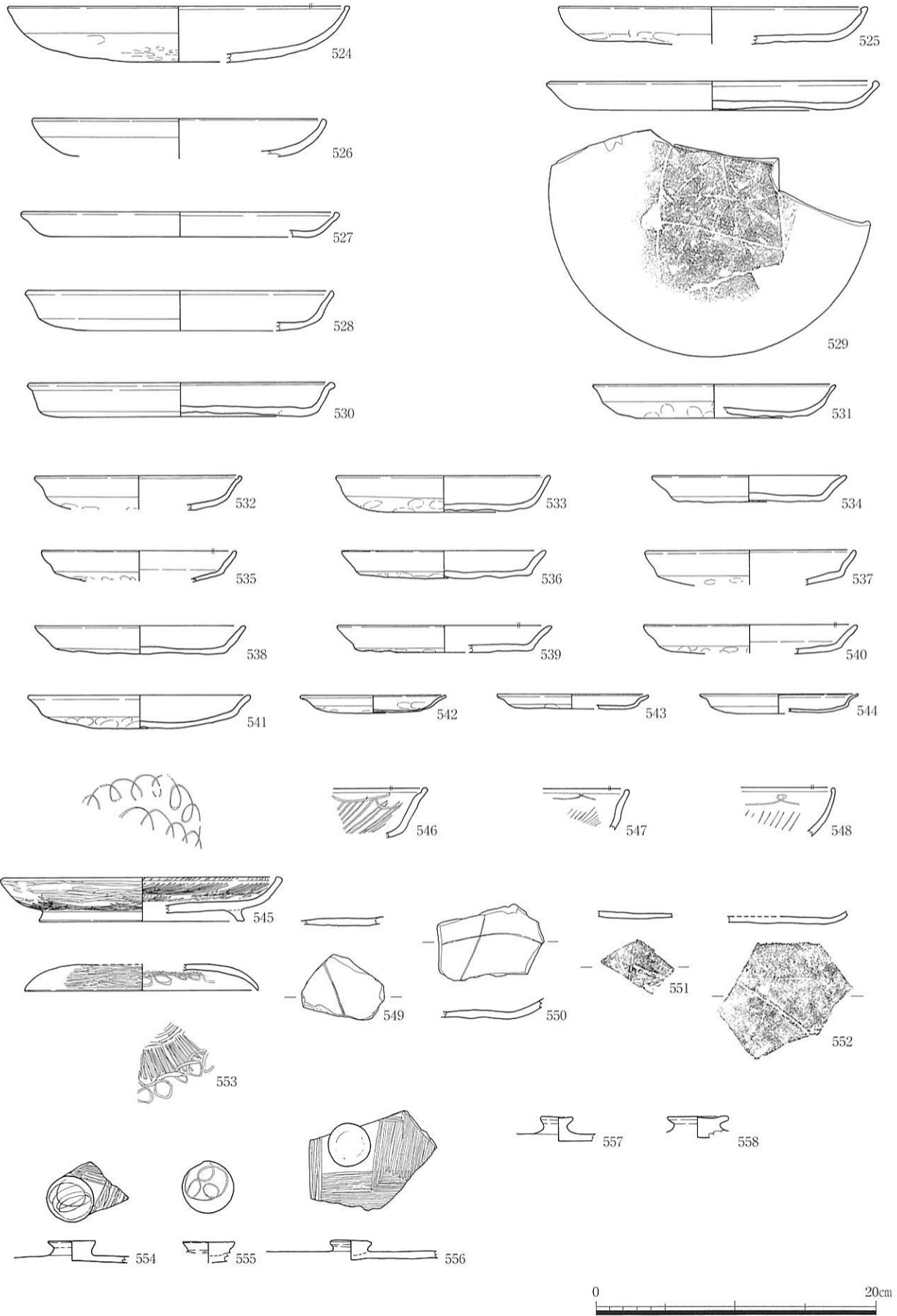


图72 第三面 川200·719 出土遗物 (6)

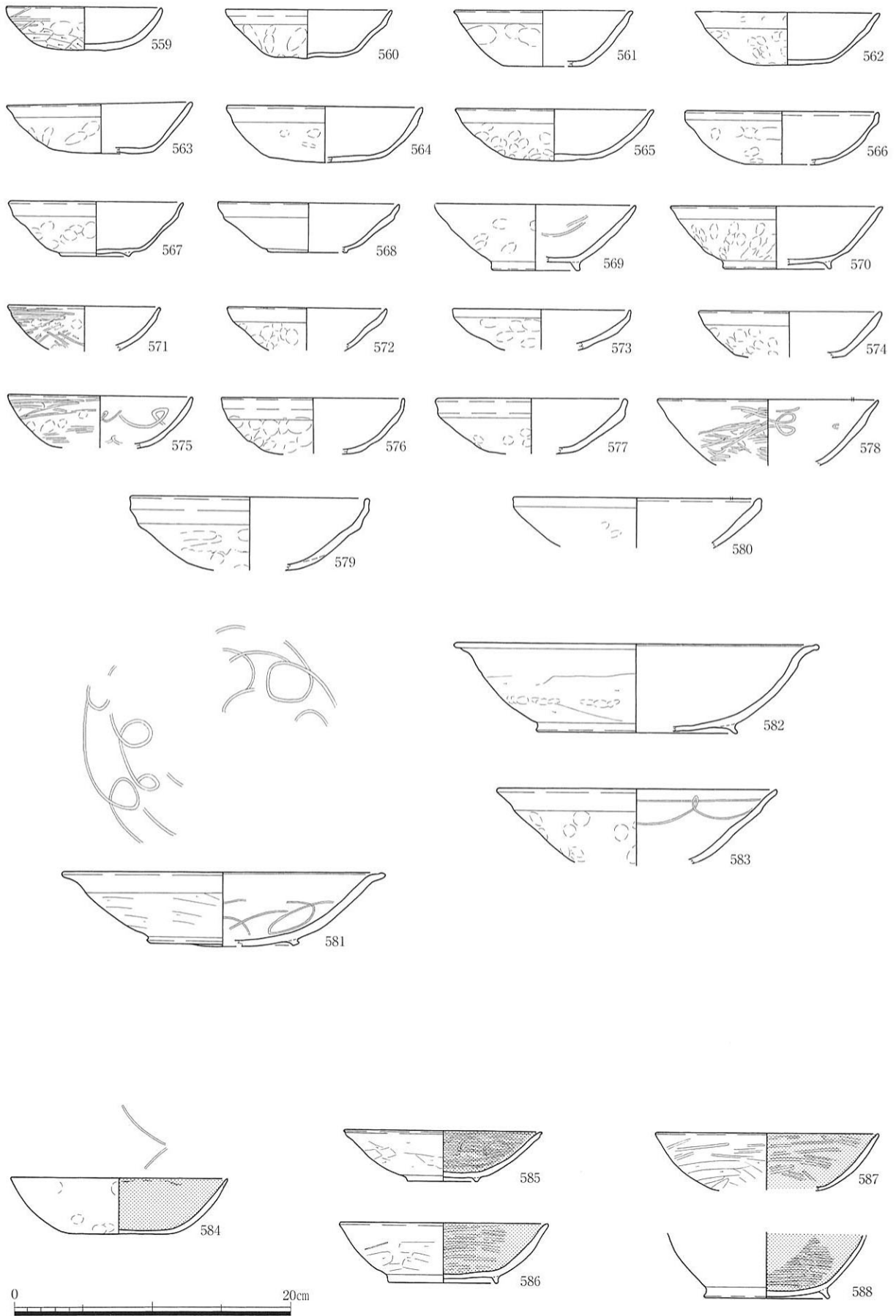


图73 第三面 川200・719 出土遺物 (7)

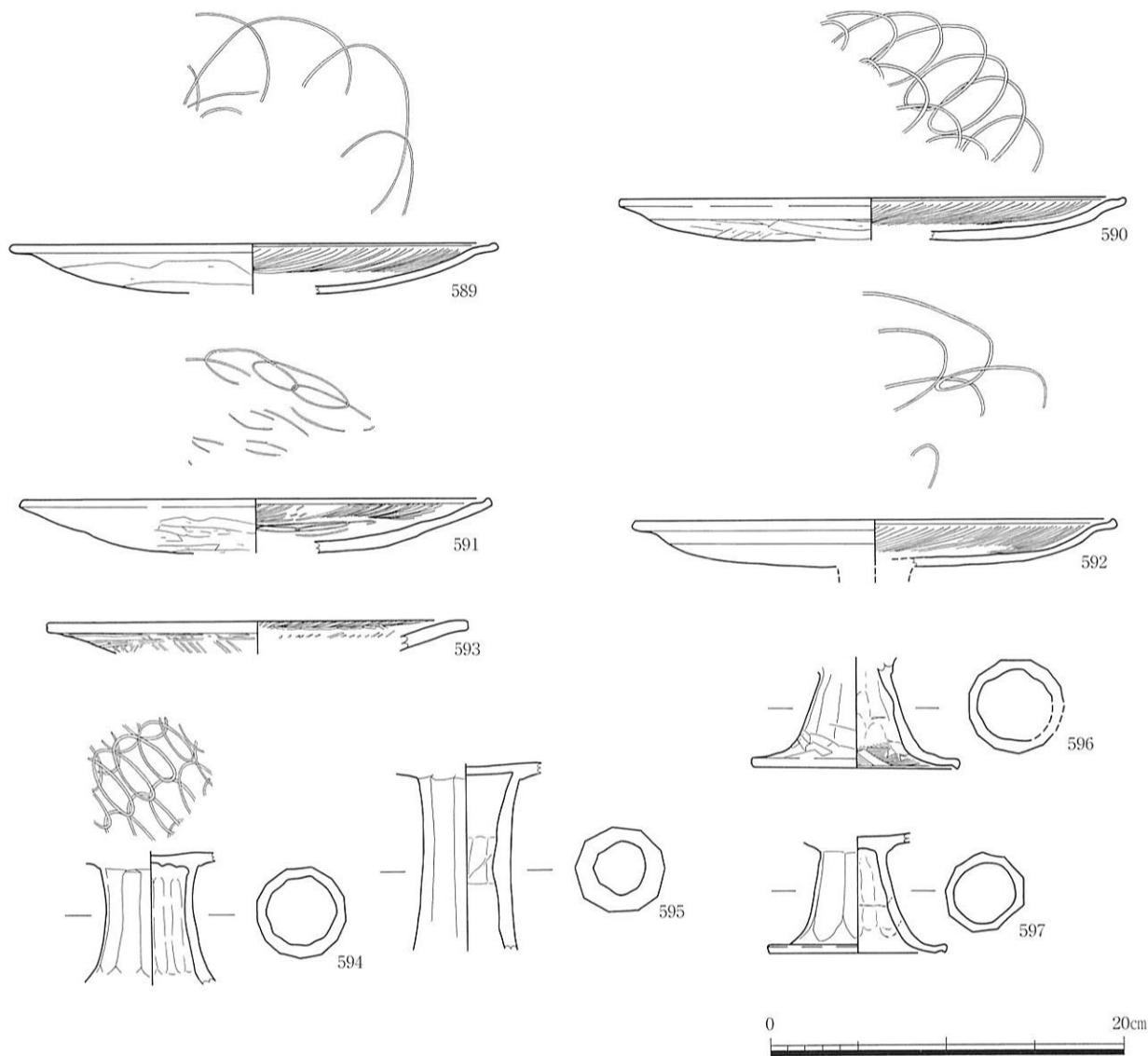


図74 第三面 川200・719 出土遺物 (8)

文を配し、外面はヘラケズリしたのちヘラミガキを施す。(591)は坏部内面に1段の放射状暗文、その上段に連弧状暗文、底部内面にラセン状暗文を施す。(589・590・592)は坏部内面に1段の放射状暗文、底部内面にラセン状暗文を施す。(589~592)の外面調整は口縁部をヨコナデし、以下をヘラケズリするもので0手法である。(594~597)は脚部片である。いずれも粘土紐巻き上げないしは輪積み(円筒)により成形する。脚柱は(594)は13面、(595)は10面、(596)は12ないし13面、(597)は9面に面取りする。(594)は坏部の底部内面にラセン状暗文がみられる。(596)は裾部内面にハケ調整の痕跡が残る。

土師器甕A (598~611) 広口の口縁部と球形に近い体部からなる。体部外面を縦方向にハケで調整する。体部の最大径が口径より大きいものである。

口縁部の形態により3つに分類できる。端部をわずかに上方につまみ上げるもの(598~603・605・606・608~611)、端部を内側に巻き込むもの(604)、端部を外側下方につまみ出すもの(607)である。これらは体部内面を縦方向に削り、口縁部内面を横方向のハケで調整後ヨコナデを施す。ハケが部分的に残るものがほとんどであるが、ナデ消されて痕跡がわずかに残るものもある。(609~611)は体部の

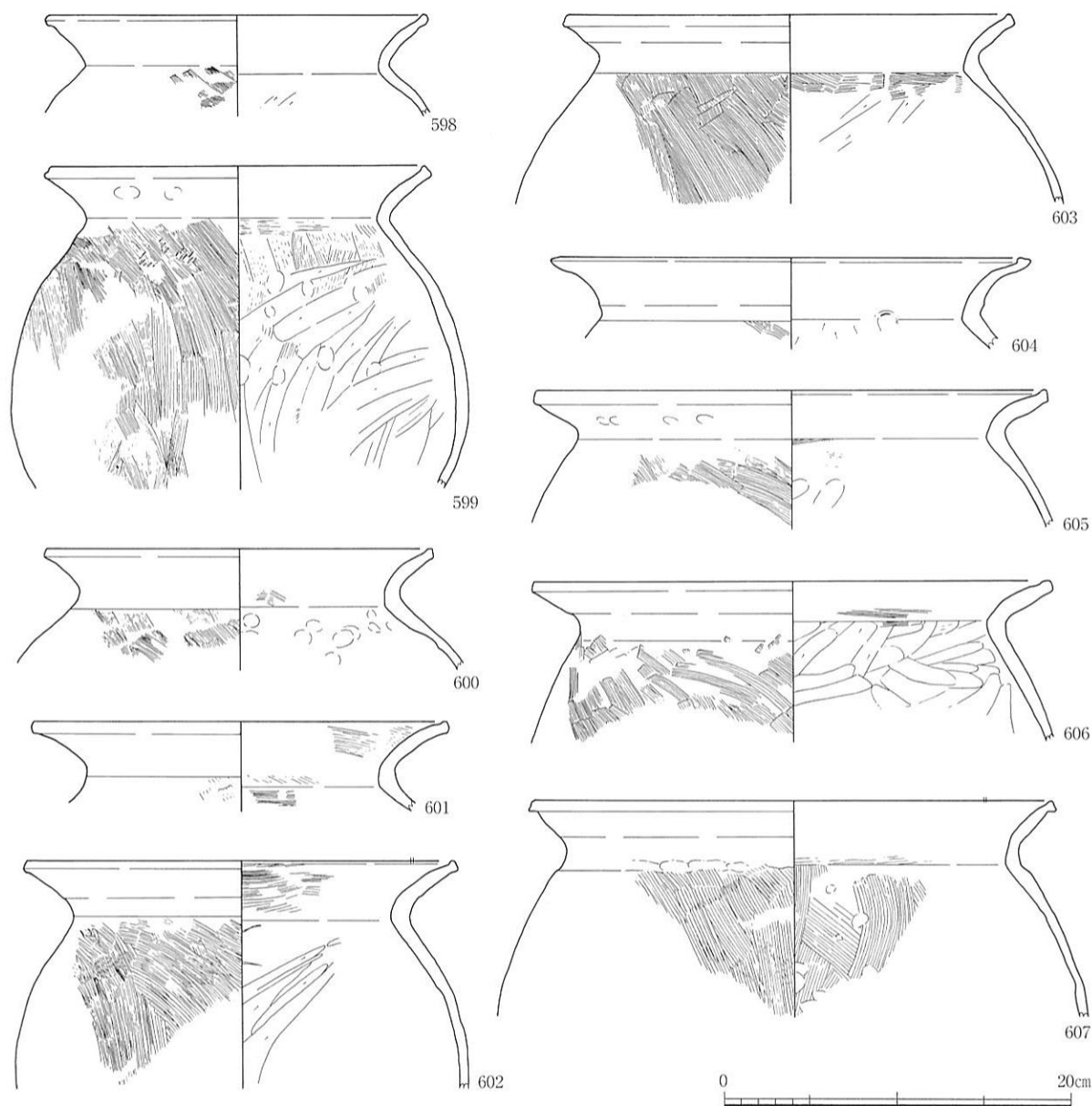


図75 第三面 川200・719 出土遺物 (9)

最大径付近に把手が残る。(611)は体部外面に黒斑がある。これらの土器はおよそ8世紀代の所産と思われるが、(609～611)のように7世紀代に遡る可能性があるものもある。

土師器甕B (612～621) 広口の口縁部と甕Aに比べて長胴の体部からなると思われる。体部外面を縦方向にハケで調整する。体部の最大径が口径より小さいものである。およそ8世紀代の時期におさまるものと思われる。

口縁部形態により3つに分類できる。端部をわずかに上方につまみ上げるもの(612～614・617～621)、端部を内側に巻き込むもの(616)、端面に沈線状の凹線が巡るもの(615)である。体部内面の調整は縦方向に削るものがほとんどであるが、(615)はナデ調整で指頭痕が残る。口縁部外面に2段のナデを施し、ほかのものに比べて肩が張らない。口縁部から体部にかけて外面に煤が付着している。10世紀前半頃の所産のものと思われる。

土師器甕C (622～645) 明瞭ではないが指頭痕の残るものである。外反する口縁部と球形に近い体部からなる。

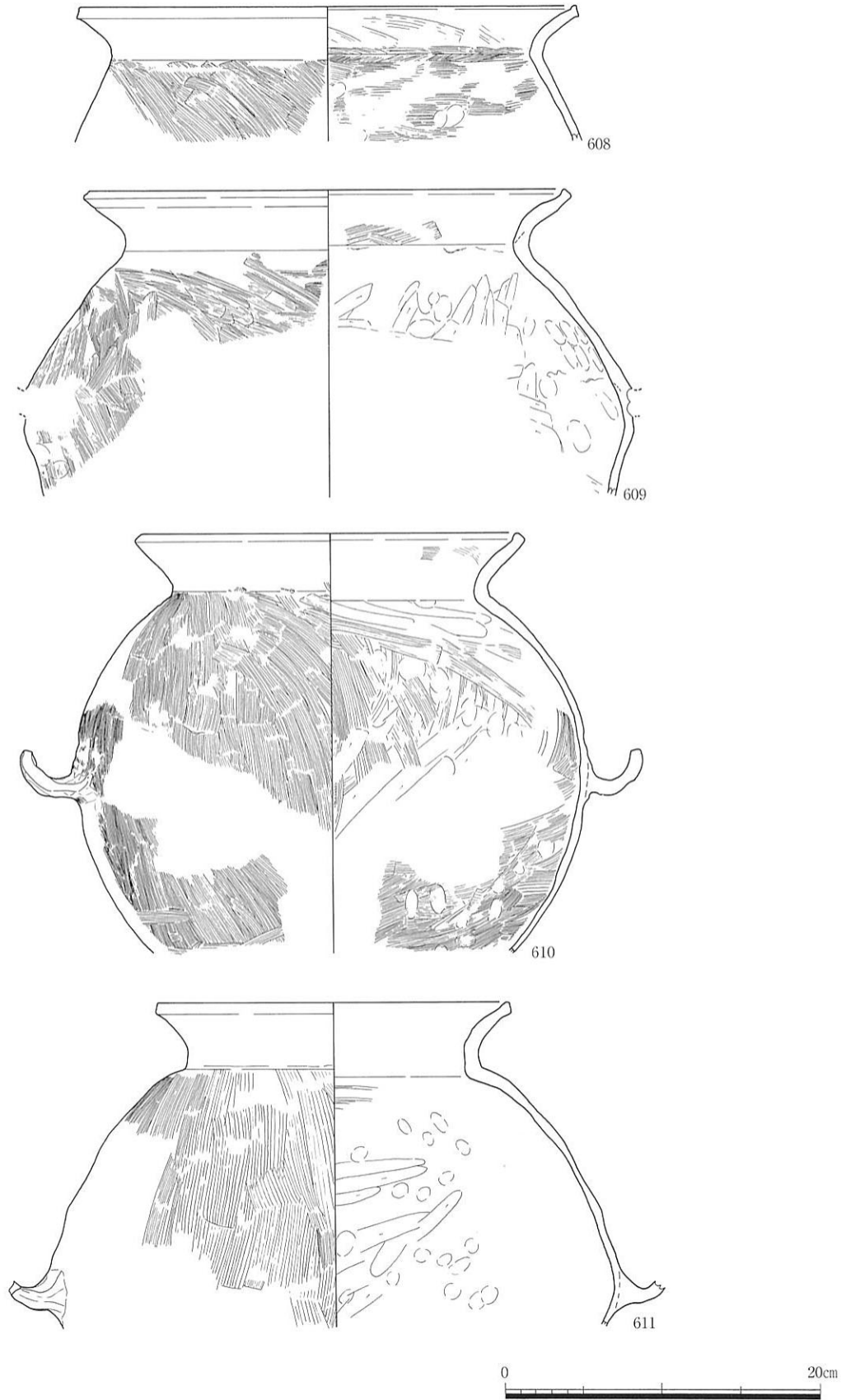


図76 第三面 川200・719 出土遺物 (10)

口縁部外面を強くヨコナデするため、口縁部と体部の境に段をもつものが大半である。内面調整は口縁部をヨコナデ、体部を板状の工具でナデ調整する。8世紀末～9世紀前半頃の所産である。

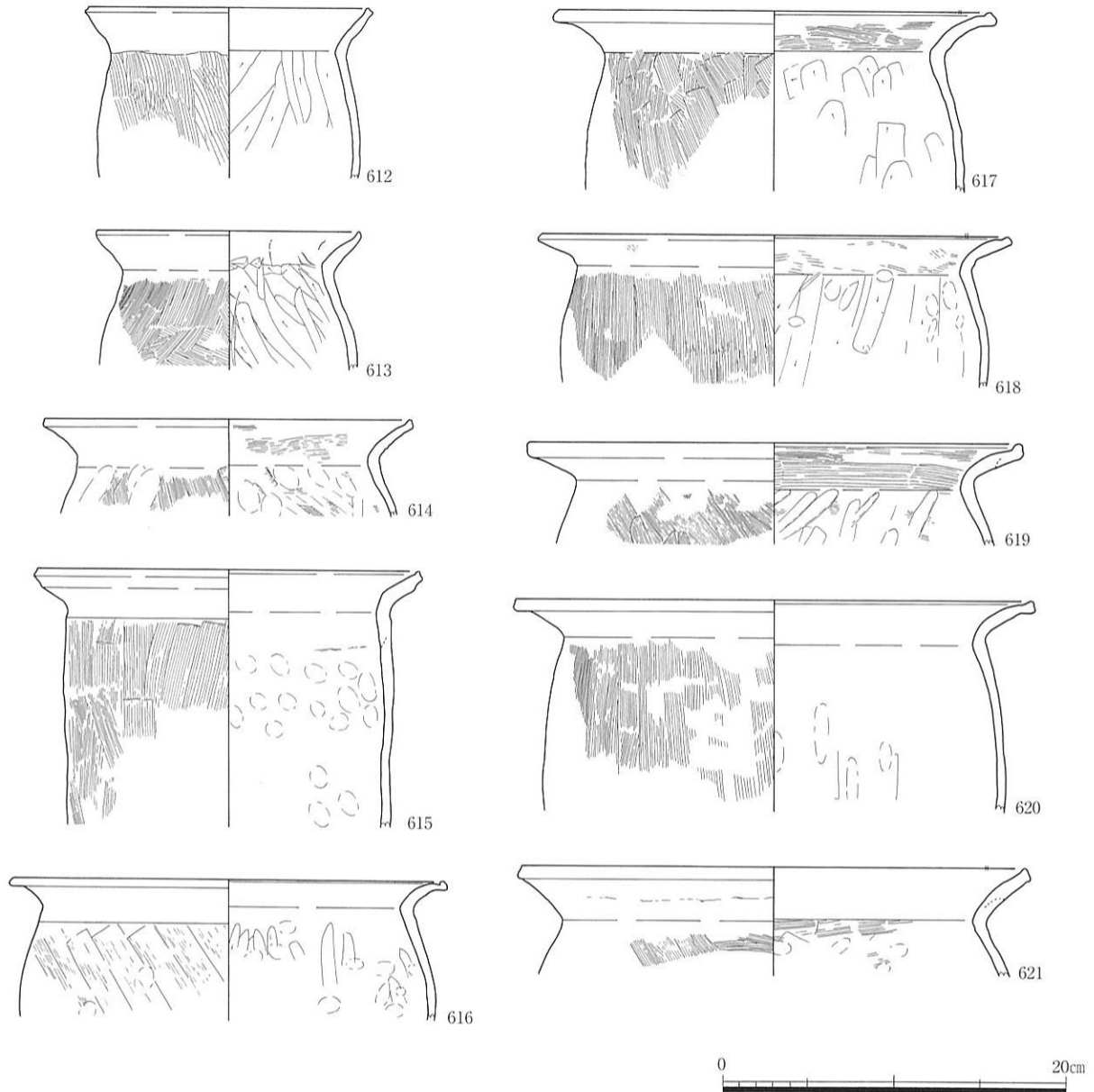


図77 第三面 川200・719 出土遺物 (11)

口径が10cm前後の小形のもの、11～14cmの中形のもの、16cm以上の大形のものがあり、16～17cm代のものが多くを占める。大形のものには外面や内面に煤が付着しているものが多い。中形のものには後述する墨で人面が描かれているものがある。口縁部形態により端部上部に内傾あるいは水平な面をもつもの(622・624・625・627・629・630・632・635～637・640～644)、端部を丸く終わらせるもの(623・626・628・631・633・634・638・639・645)の2つに分類できる。(623)は口縁部外面に黒斑がある。

土師器甕D (646～648) 外反する口縁部と球形に近い体部からなる。口縁部が甕Cに比べて短いものである。体部外面が不調整で、あまり明瞭ではないが指頭痕が残るもの。(646)は口縁部と体部の境に明瞭な段をもたない。口縁端部をわずかに上方につまみ上げる形態である。体部内面を板状の工具でナデ調整する。(648)は外面に煤が付着している。

土師器甕X (649) 直立する短い口縁部、球形の体部と丸底からなるものである。外面と内面をヘラズリしたあと、ナデ調整することにより体部を球形に成形し、上端に粘土紐を貼り付けて短い口縁部をつくる。体部外面に黒斑がある。

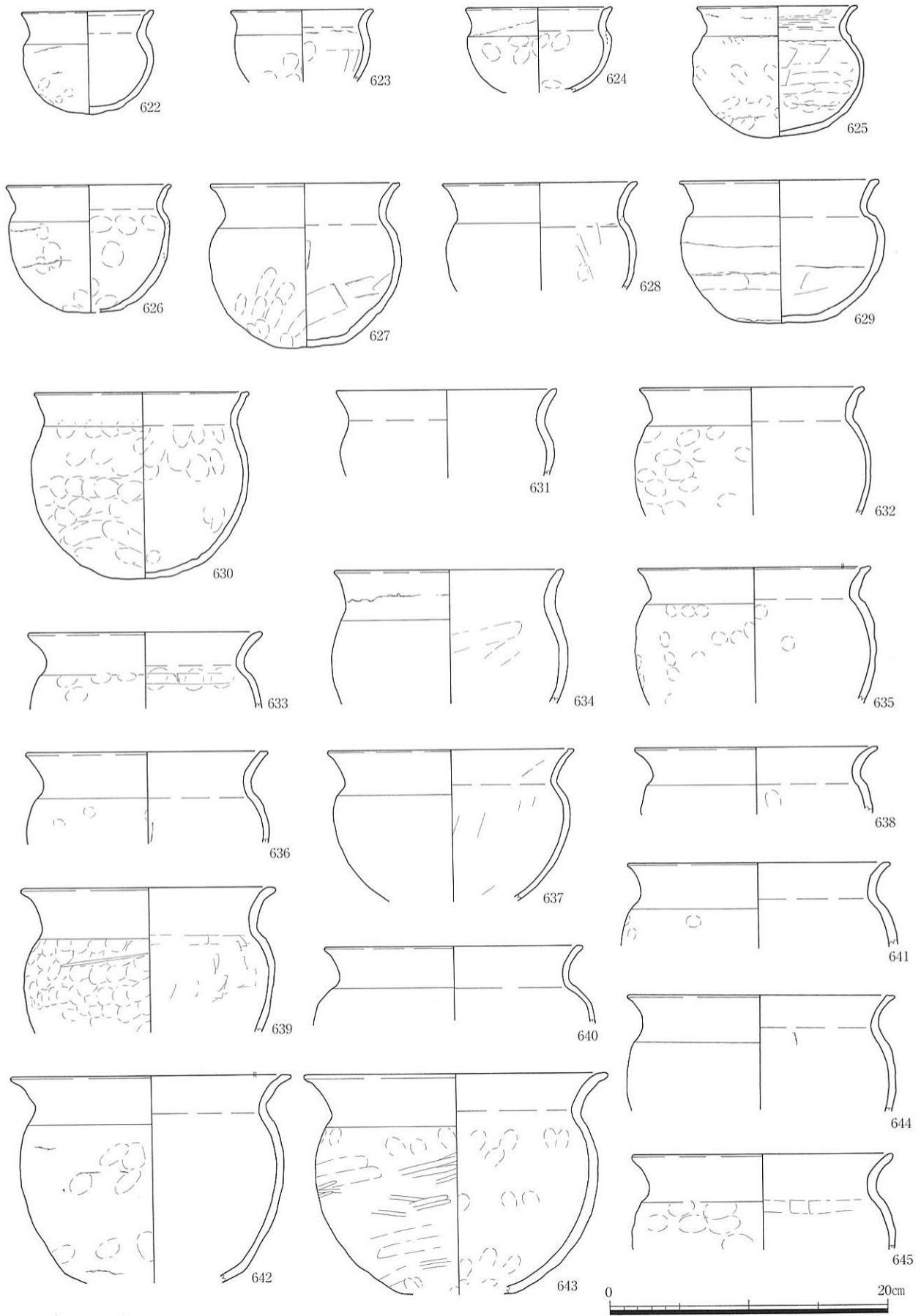


图78 第三面 川200·719 出土遺物 (12)

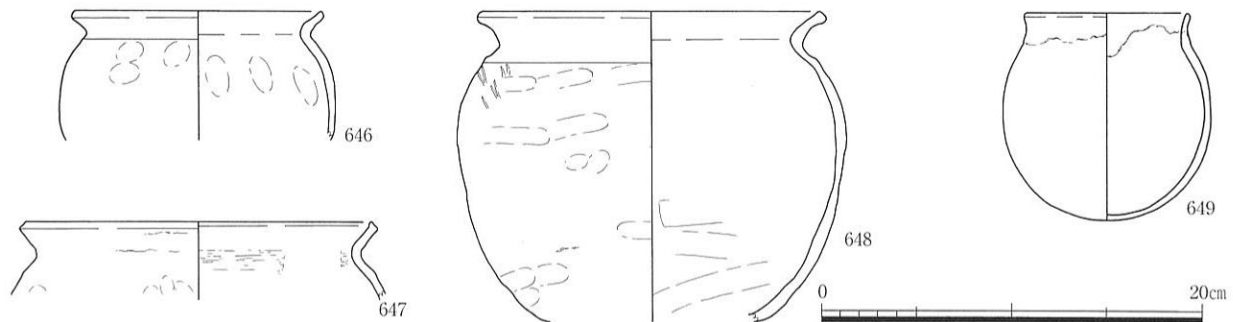


図79 第三面 川200・719 出土遺物 (13)

土師器羽釜 (650～679) 口縁部が「く」の字形に外反し、肩部に水平な鐙を巡らすものである。全形のわかるものはないが口縁部から肩部にかけての形態から、菅原正明氏の分類の河内A型にあたる⁵⁾。

体部外面を縦方向のハケ、内面をナデ調整する。口縁部外面の調整はヨコナデで、内面を横方向のハケで調整したあとナデ調整する。ほとんどのものが生駒西麓産の胎土をもつ。8世紀～9世紀前半の所産とみて大過なからう。

(650) は口径が18.0cmをはかる小形のものである。口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。(652) は砲弾形の体部をもつ。体部外面の調整はナデで、指頭痕が残る。内面の調整はナデである。鐙を比較的高い位置に貼り付け、鐙の端部に面をもつ。色調は灰黄褐色～にぶい赤褐色を呈し、胎土に角閃石を確認できず、ほかの羽釜とは胎土が異なるものである。柏原市に所在する高井田遺跡の井戸-1から出土した7世紀後半の羽釜⁶⁾と①体部の形態が類似すること、②体部外面の調整が同じであること、③胎土が通常茶褐色を呈する生駒西麓産のものと異なることの3つに類似点がみられる。このことからほかの土器と時期が前後する可能性がある。(652・670・677) は鐙以下、(653) は内面と鐙以下に炭化物が付着している。

土師器鍋A (680・681) 底部は残っていないが、半球形に近い体部に外傾する口縁部のつく形態のものである。あまり肩が張らない。口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。体部外面をハケで調整し、口縁部内面をヨコナデする。(680) は体部内面を板状の工具でナデ調整する。(681) は体部内面に炭化物が付着する。

土師器鍋B (682～686) 鍋Aとほぼ同じ形態であるが、体部外面をハケで調整しないものである。指押さえのあとヘラケズリし、ヘラミガキを施すもの(683・685・686)、指押さえのあと板状の工具でナデ調整するもの(684)がある。これらは口縁部内外面をヨコナデし、体部内面をナデ調整する。口縁端部の形態は外傾する面をもち、下方につまみ出すもの(682・684～686)と端部を外反させて丸く終わらせるもの(683)がある。(682・686) は体部内面に炭化物が付着する。

土師器鍋C (687～696) 鍋Aおよび鍋Bに対して深い形態のもので肩が張る。体部外面をハケで調整しないものである。体部外面を指押さえのあとナデ調整するもの(687・690～694・696)と、ヘラケズリするかもしれないとそのあとヘラミガキを施すもの(688・689・695)がある。口縁部の調整は内外面ともヨコナデであるが、体部内面はナデ調整をするものが多く、そのほかにハケメが残るもの(694)、ナデ調整後ヘラミガキをするもの(688・695)がある。

口縁部形態により3つに分類できる。端部を内と外側にわずかに肥厚させるもの(689・691・692)、外傾する面をもち端部を外側につまみ出すもの(687・688・690・694・695)、外傾する端部上面に沈線状の凹みが残るもの(693・696)である。(695・696) は肩部からやや下がった位置に把手がつく。

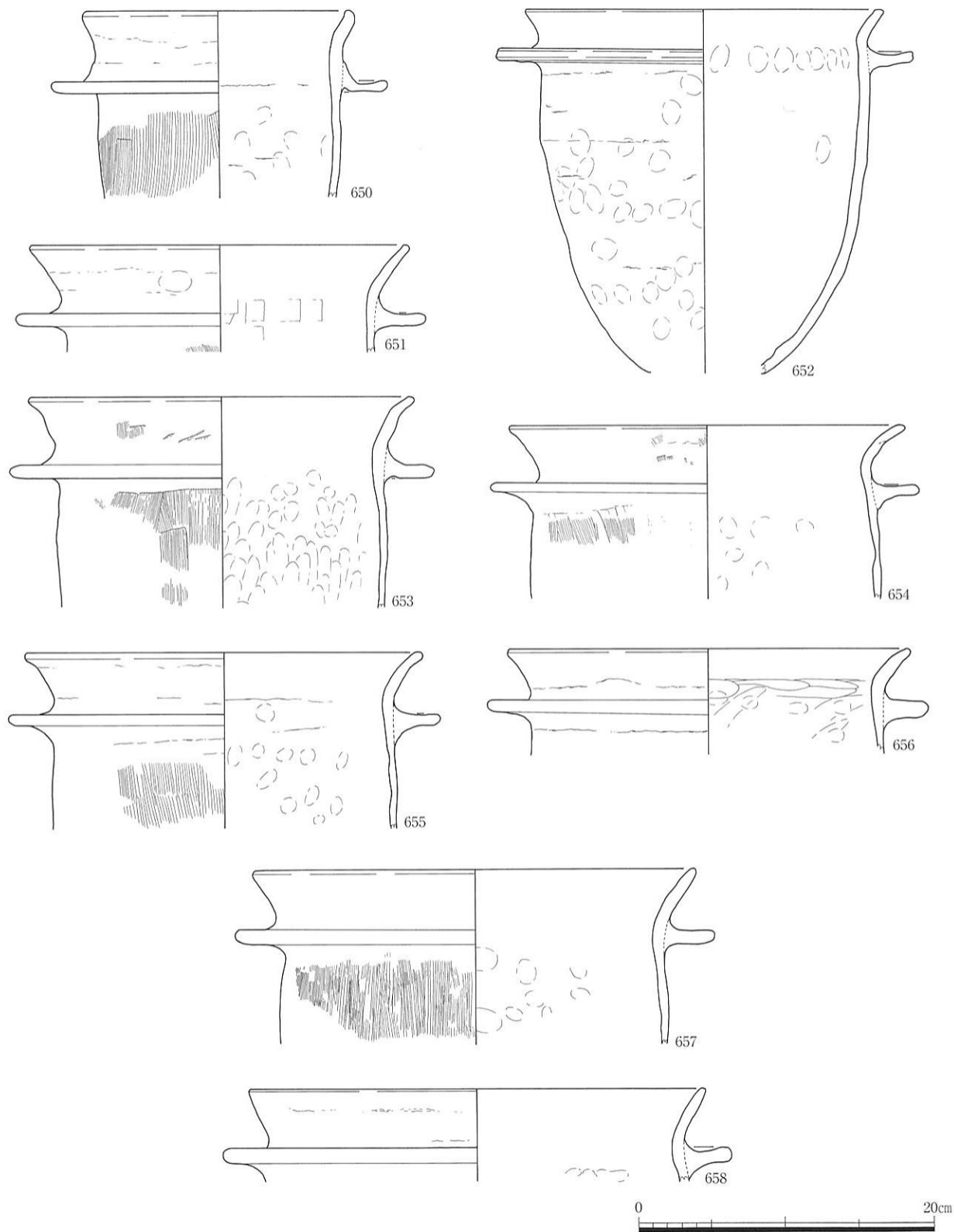


図80 第三面 川200・719 出土遺物 (14)

(691・692) は内面に炭化物が付着する。

土師器鉢 (697~705) 全形のわかるものはほとんどないが、内弯気味に体部が立ち上がり口縁部が端部近くで内傾する形態のものである。

(698) は平底に近い底部から体部が内弯して立ち上がり口縁部が端部近くで内傾する形態で、『平城

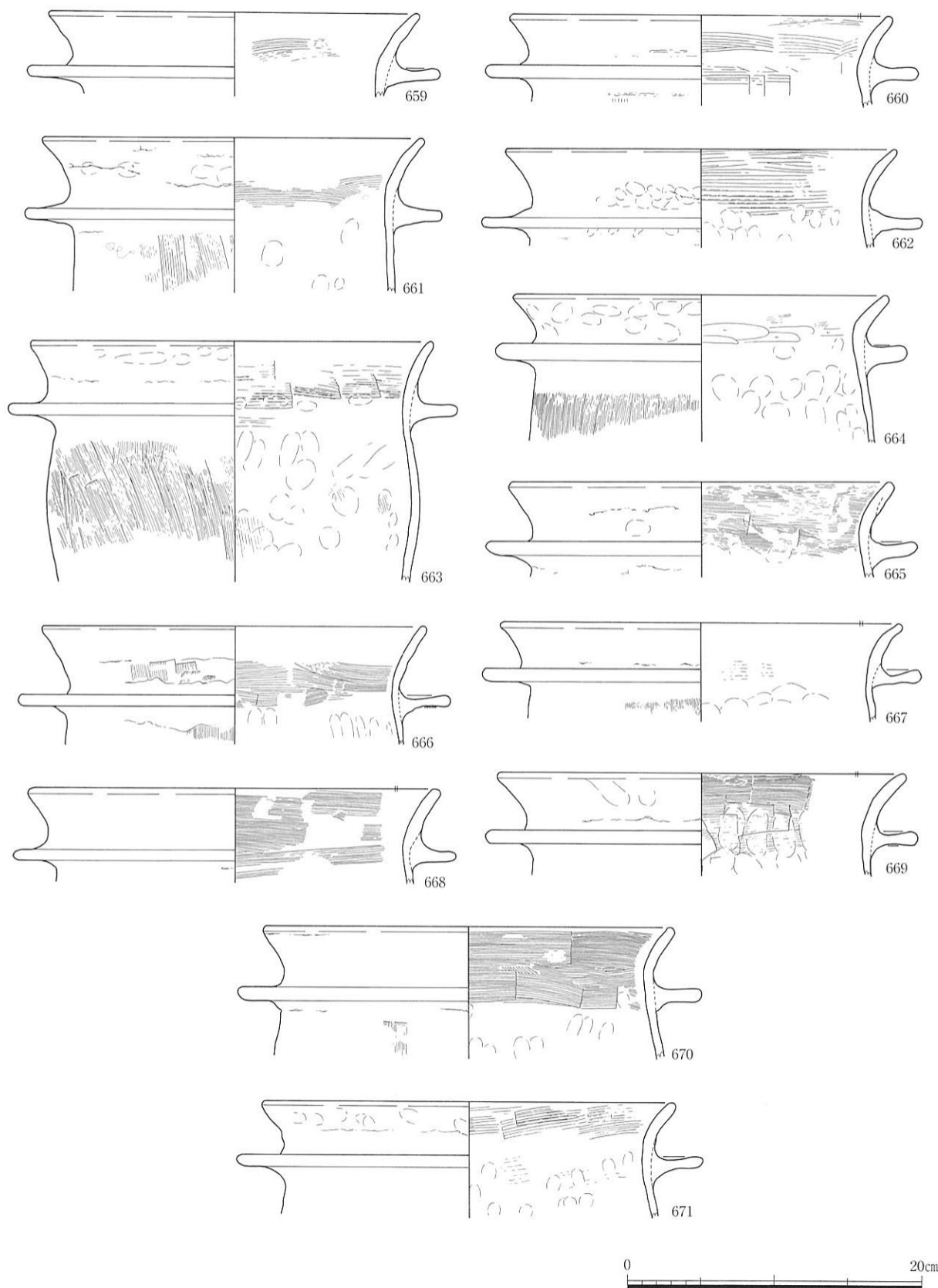


図81 第三面 川200・719 出土遺物 (15)

宮発掘調査報告XI』の分類による鉢Bにあたる。(697)は口縁端部外面が強いヨコナデのために内側に屈曲する。(705)は内弯して立ち上がる体部とほぼ水平に外側へ引き出す口縁部の破片が残る。体部外面と内面を埴輪の調整に用いられるような粗いハケで調整している。胎土は精良で甕Aのものに類似す

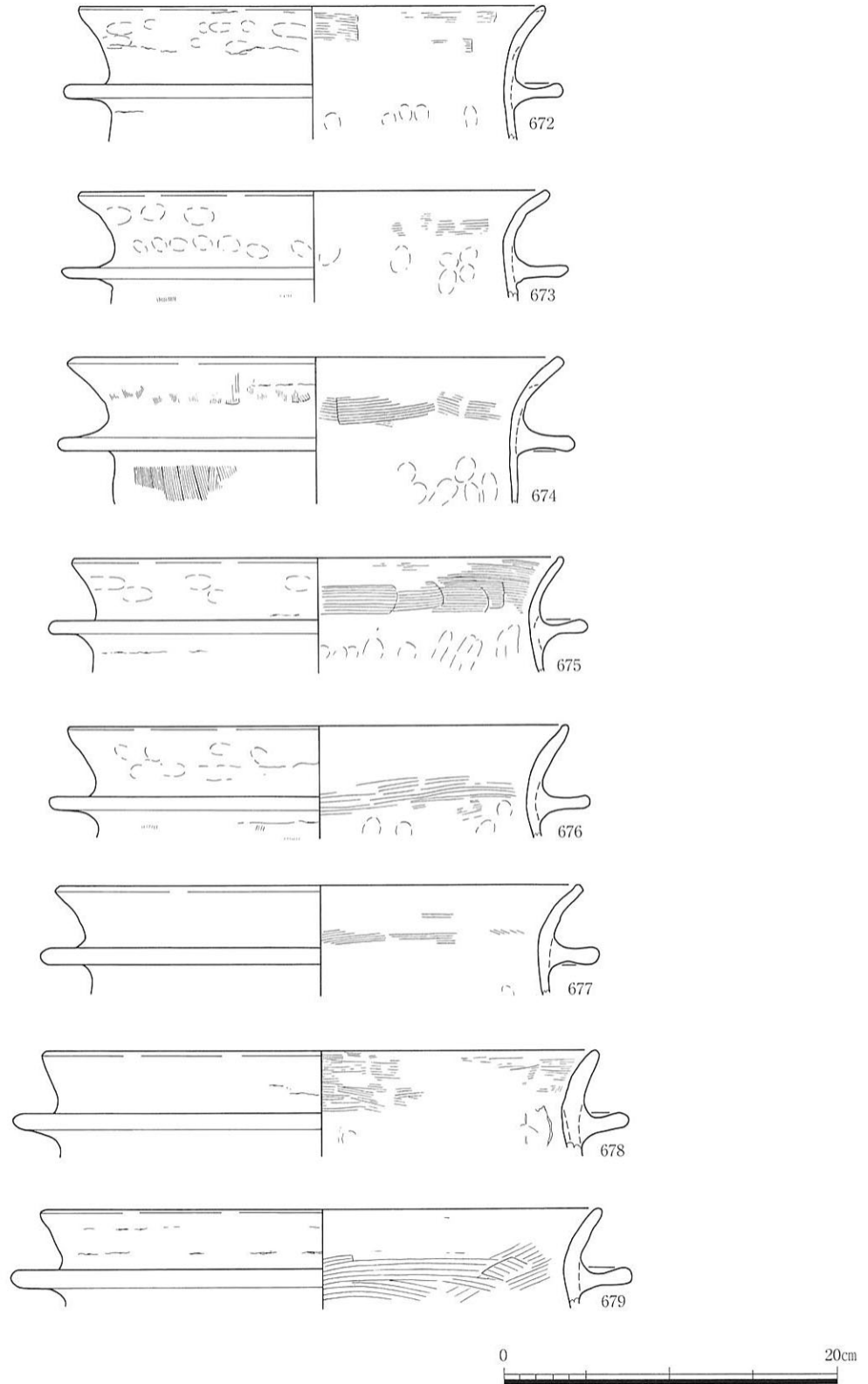


図82 第三面 川200・719 出土遺物 (16)

る。ほかの土器と著しく異なる様相をもつが、体部の形状から鉢に分類したものである。(698・699・702～704)は注口が残るものである。

(698～702)は口縁部内・外面をヨコナデ、体部外面をヘラケズリ、内面をナデ調整する。(697・703・704)は体部外面をヘラミガキするもので、そのうち(697・704)は内面にまばらなヘラミガキを

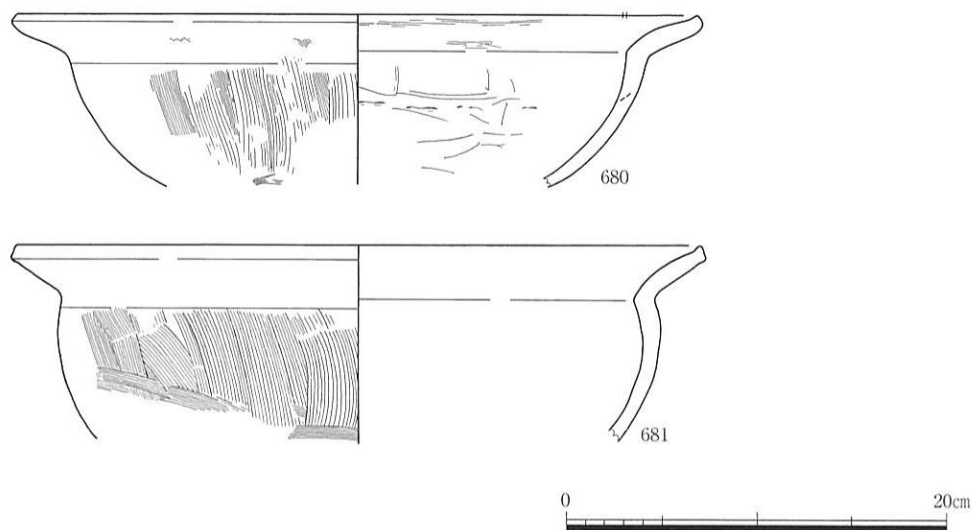


図83 第三面 川200・719 出土遺物 (17)

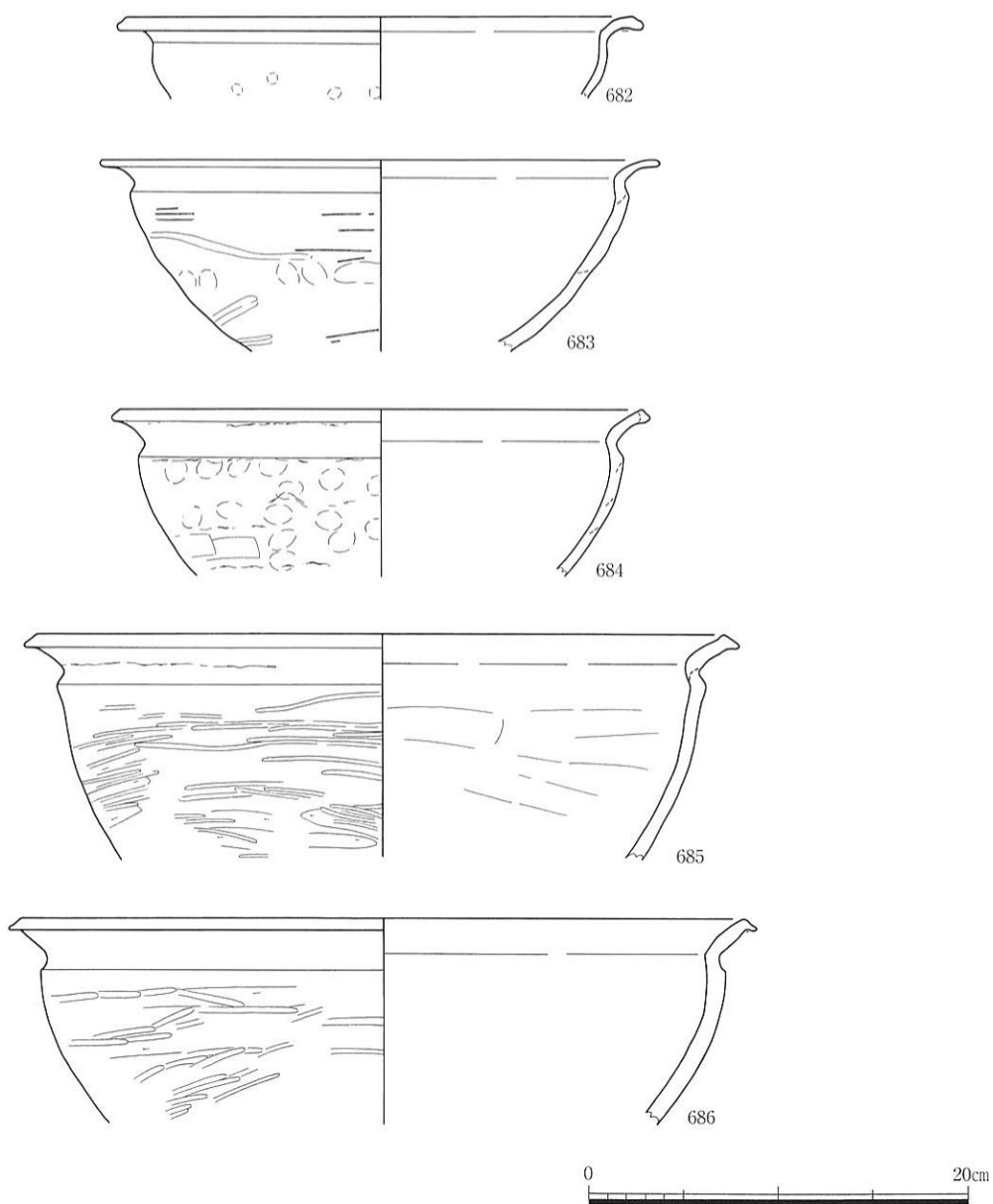


図84 第三面 川200・719 出土遺物 (18)

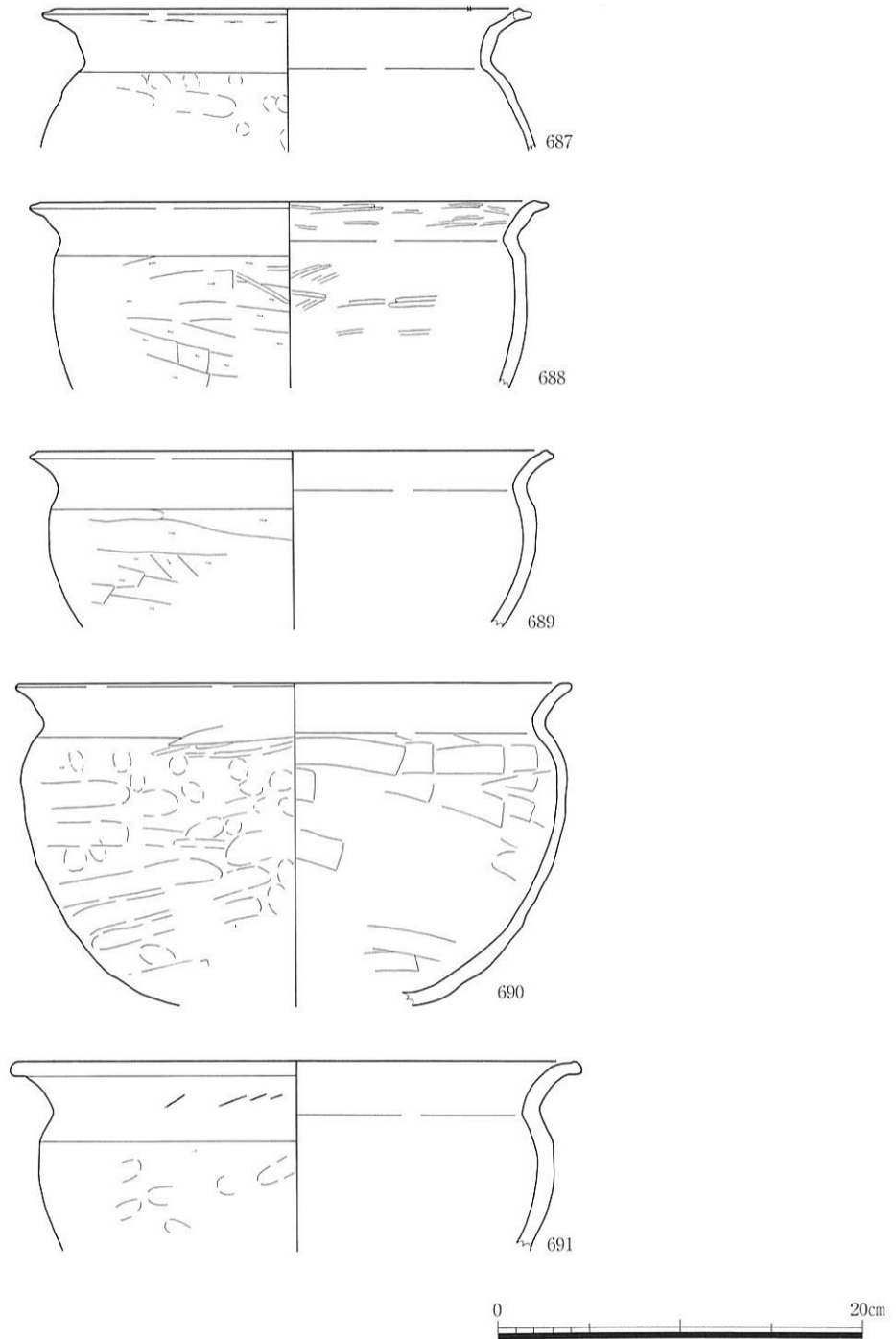


図85 第三面 川200・719 出土遺物 (19)

施す。(702) は口縁部外面に黒斑がある。使用のため煤が付着するものが多いが、(700) は内・外面とも、(704) は内面に炭化物が付着する。(703・704) は断面の一部に煤が付着しており廃棄時に火に入れられたものと考えられる。

須恵器坏A (706~728) 平らなあるいは丸みを帯びた底部から口縁部が斜め上方にまっすぐ立ち上がり、端部を丸くおさめる形態のものである。底部外面の調整はヘラ切り後にナデ調整をするものが大半で、不調整のもの (712・719) とヘラケズリ後ナデ調整をするもの (721) もわずかにみられる。胎土に3~5mm、1cm大の礫や1mm以下の砂粒を含むものが多く、ほとんど含まないものもある。また (722) は胎土に含まれる黒色粒が削りによって墨を流したようにのびる。



図86 第Ⅲ面 川200・719 出土遺物 (20)

(707) は口径が9.35cmをはかる小形のものである。口縁部の内・外面に煤が付着しており、灯明皿と思われる。(715) は外面が燻したような黒色を呈する。(714) は体部外面、(717・721) は底部外面に焼成前のヘラ記号がある。(717・719・722・724・726) には内面や外面に火襷状の痕跡がある。これ

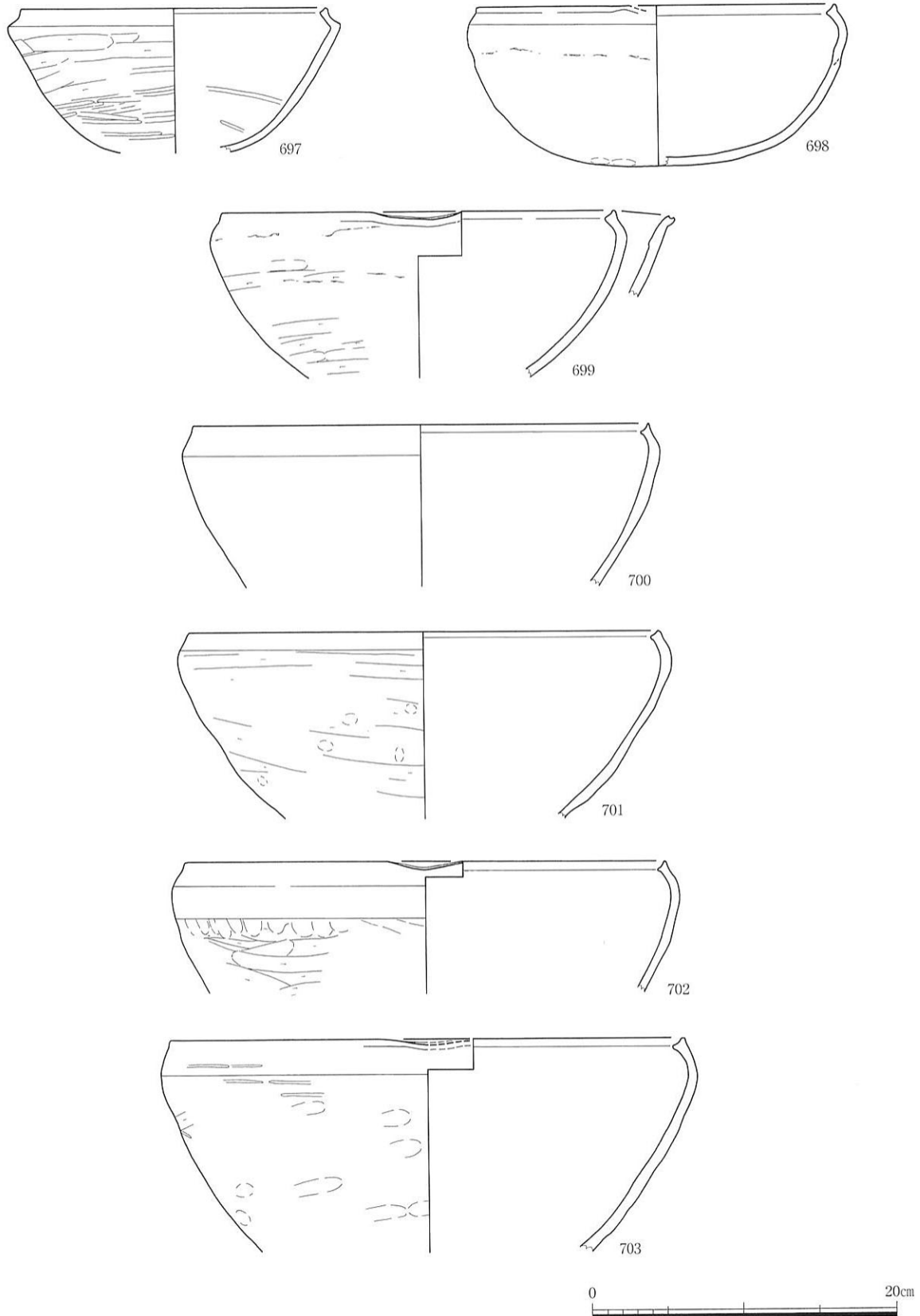


図87 第三面 川200・719 出土遺物 (21)

らの土器は8世紀代の時期におさまるものと思われるが、(706・708・711・728)のように7世紀後半代に遡る可能性があるものもある。

須恵器坏B (729~731・733~780) 坏Aの底部に高台を貼り付けたものである。高台は底部の外

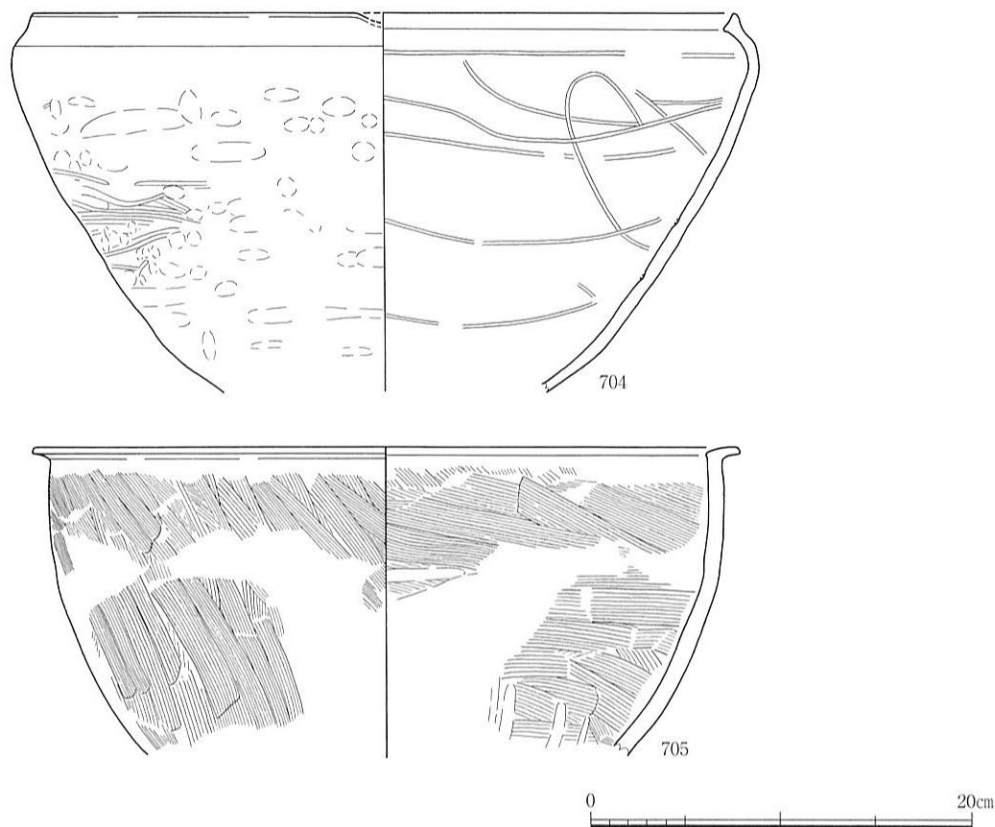


図88 第三面 川200・719 出土遺物 (22)

側に貼り付けるものがほとんどであるが、(749・754・756・778)は内側に貼り付ける。外面調整は回転ナデがほとんどであるが、(742・767・774・777・778)は体部下方を回転ヘラケズリする。底部外面の調整はヘラ切り後ナデ調整するか不調整のものが大半であるが、回転ヘラケズリするもの(757・764・774・777・779)もある。胎土には3～5mm、中には1cm大の礫と1mm以下の砂粒を含むものが多く、砂粒をほとんど含まないものも少量みられる。また(730・735・774)は黒色粒がケズリによって墨を流したようにのびる。

(736)は高台外面から口縁部にかけて灰オリーブ色の自然釉がかかる。胎土に1cm大の礫を含む。(762・763・766)は銅鏡を模倣したものである。口縁部が内弯して立ち上がり、端部が外反する。(763・766)は体部下方に回転ヘラケズリのあと回転ナデを施す。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。(763)は外面に自然釉が付着する。(762)は他の2点に比べて作りが雑で器壁が厚く、胎土に3mm大の砂粒を含む。体部下方に1条の凹線が巡る。(780)は底部片である。底部の端に高台を貼り付ける。底部から体部にかけての外面全体が燻したような黒色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。(767～779)は高台の内側に爪形の痕跡がある。8世紀中頃から後半のものが多くを占めているが、前後する時期のものもある。

須恵器壺B (732) 壺Bをさらに深い形態にしたもので壺Bに比べて口縁部の外傾度が低く、ほぼまっすぐに立ち上がる。胎土は精良で2～3mm大の砂粒をわずかに含む。

須恵器蓋 (781～812) 口縁端部の形態が断面三角形を呈するものが多く、折り曲げるもの(799・804)、かえりがつくもの(786・791・793・798・800)もある。頂部の形態により①頂部が平坦で器高が低く、縁部がわずかに屈曲するもの、②頂部が丸みを有し、縁部との境が明瞭でないもの、③頂部と縁部の境がなく平坦なものとして3つに分類できる。つまみは擬宝珠つまみのものが多く、頂部が平坦もし

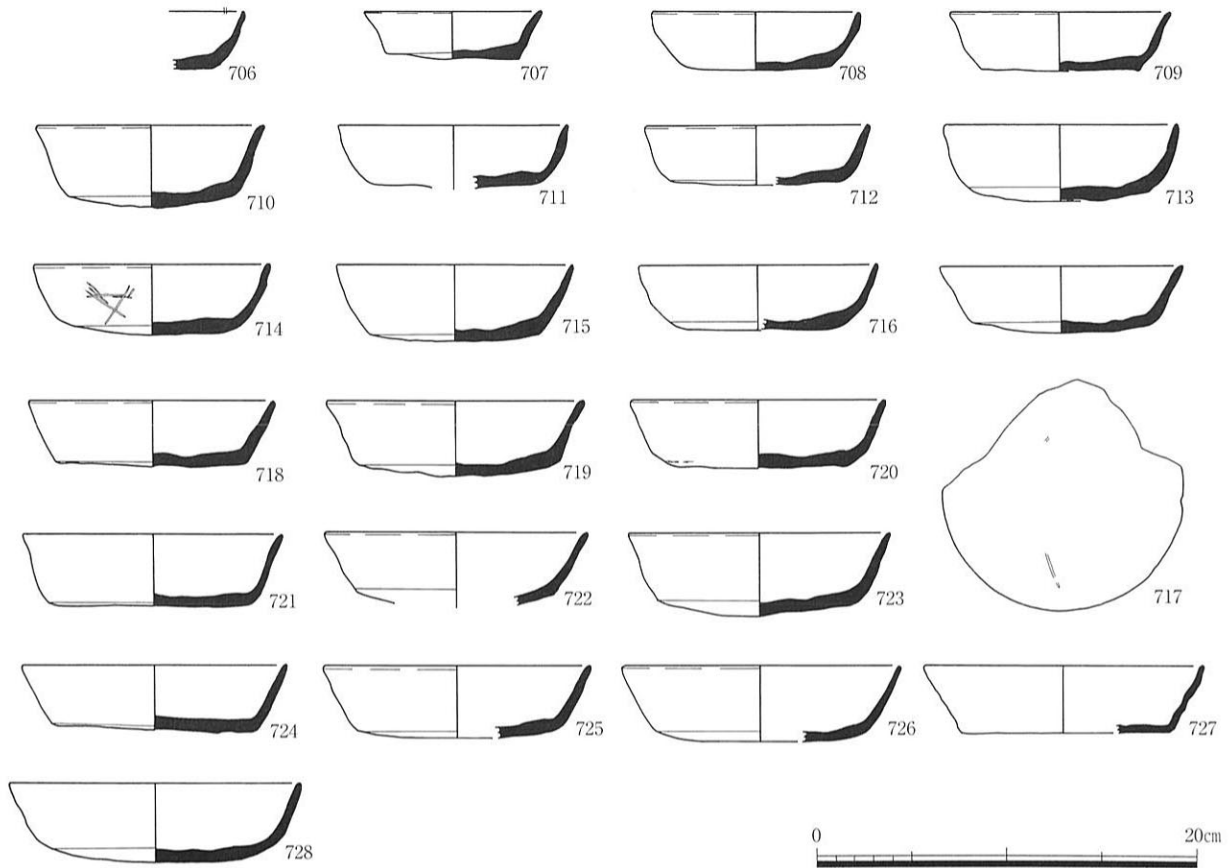


図89 第三面 川200・719 出土遺物 (23)

くはやや窪んでいるもの (781・784・789・803) と宝珠つまみのもの (782) がある。胎土は3～5mm大の礫や砂粒を多く含むものが大半でほとんど含まないものもあるが、つまみの頂部が平坦もしくはやや窪んでいるものはほぼ後者に属する。(786・809) は外面に灰オリーブ色の自然釉が付着する。(785・787・789・795・809・811) は転用硯である。内面に墨の痕跡が残り、表面が平滑になっている。(793) は頂部外面に焼成前のヘラ記号がある。(803) は黒色粒がケズリによって墨を流したようにのびる胎土をもつ。これらの土器は8世紀代の時期におさまるものと思われるが、(782・786・791・793・798・800) は7世紀後半代に遡るものである。

須恵器皿B (813) 扁平な底部から短い口縁部が内湾気味に立ち上がり、四角くふんばった高台がつく。厚さが1cm程度である。8世紀後半代の所産であろう。

須恵器皿C (814・815) 広く平坦な底部から短い口縁部が斜め上方に立ち上がる形態である。(815) は口縁部外面が強いナデのため外反する。(814) は口縁端部が内傾し、(815) は外傾する面をもつ。遺物の時期は8世紀後半とみて大過なからう。

須恵器高坏 (816) 坏部の口縁部片である。端部が小さく外反する。坏の外面調整は口縁部付近は回転ナデ、以下を回転ヘラケズリ、内面調整は口縁端部を回転ナデ調整後内面を板状の工具でナデさらに不定方向のナデを施す。黒色粒がケズリによって墨を流したようにのびる胎土である。

須恵器坏E (817) 平底の底部から内湾して口縁部が立ち上がる銅鏡形の形態である。口縁端部が内傾する。外面を非常に丁寧に磨いており、光沢のある黒っぽい色調を呈している。内面は回転ナデ調整である。8世紀前半の所産であろう。

須恵器鉢A (818) 鉄鉢形の形態で、平底に近い底部から口縁部が内湾して立ち上がる。口縁端部

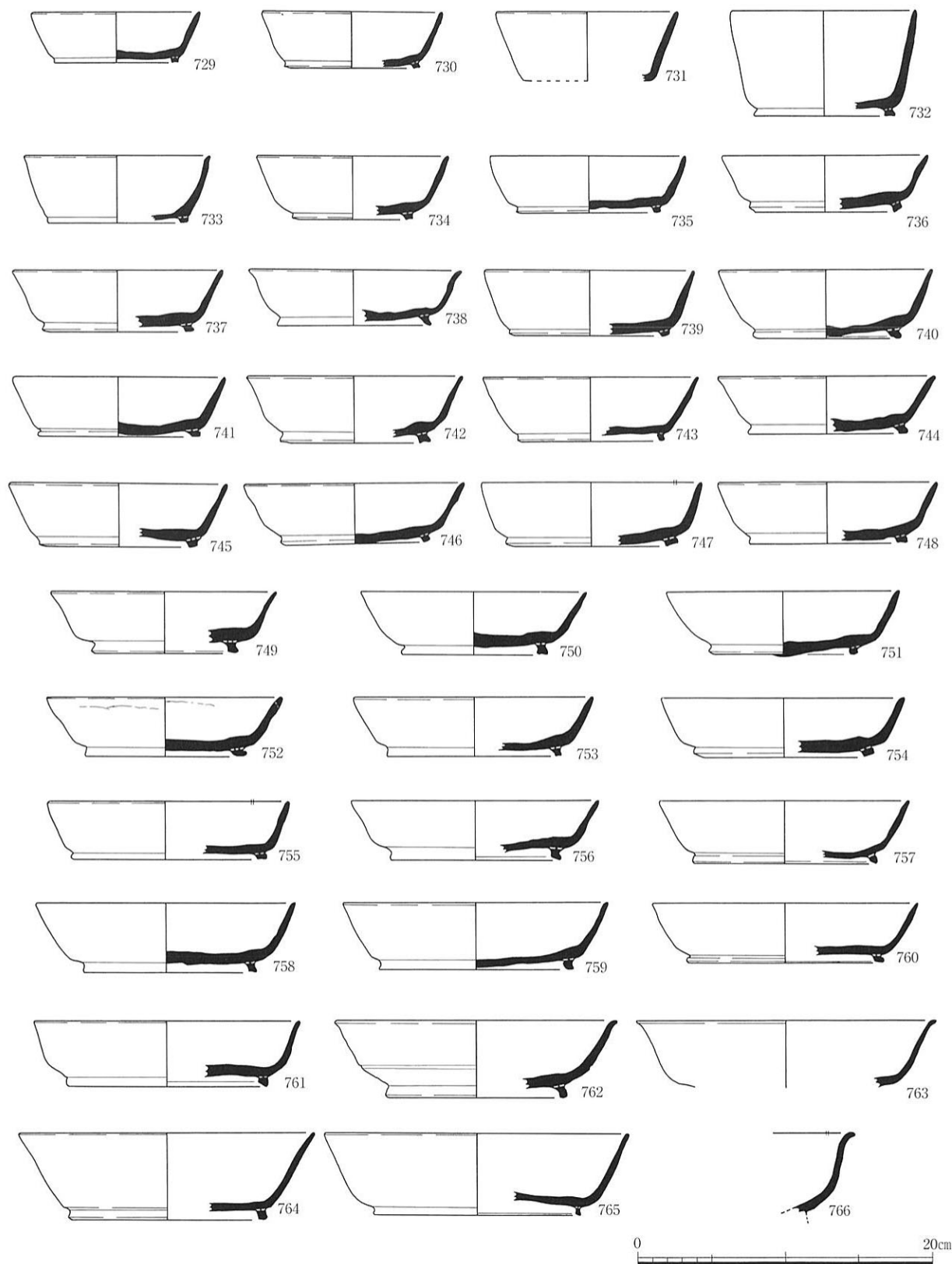


図90 第三面 川200・719 出土遺物 (24)

が内傾する。8世紀前半の所産であろう。

須恵器鉢F (819~824) 円盤状を呈する底部から口縁部が斜め上に立ち上がる形態である。(819・820) は口縁端部が内傾する面をもつ。(819) は口縁部外面に1条の凹線が巡る。内・外面とも

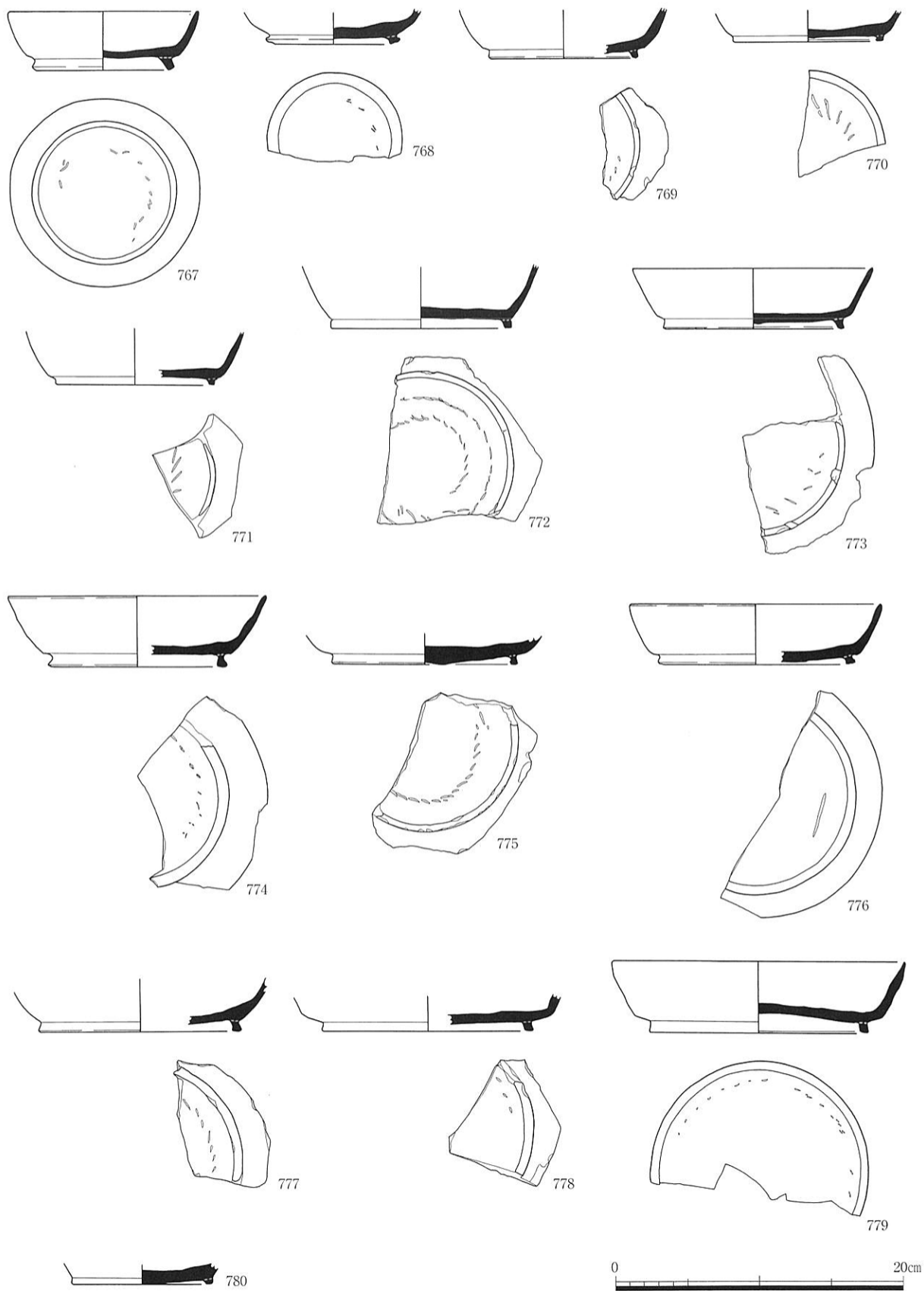


图91 第Ⅲ面 川200·719 出土遺物 (25)

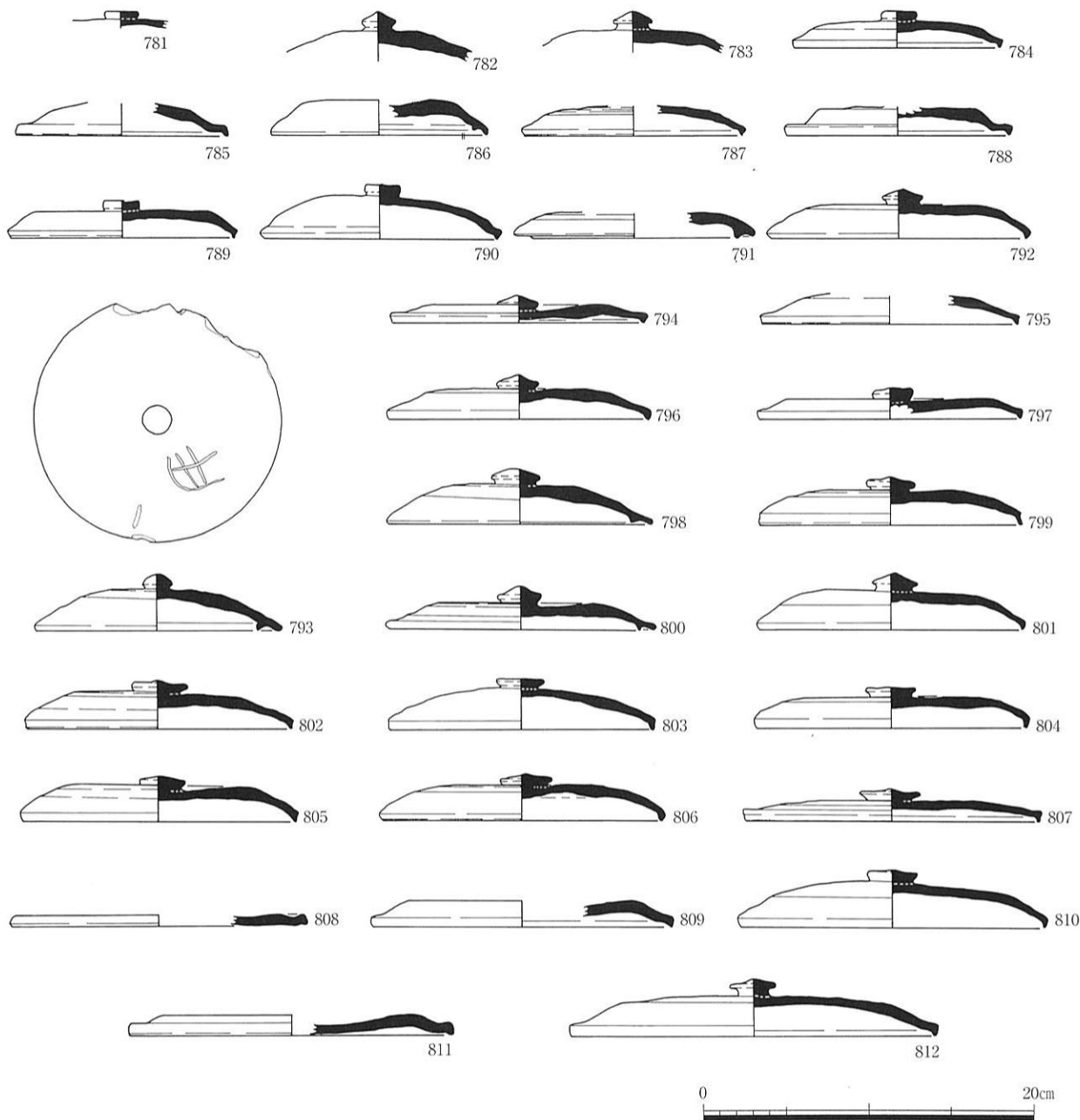


図92 第三面 川200・719 出土遺物 (26)

燻したような黒色を呈する。(822)は底部外面、(824)は底部内面に自然釉が付着する。

須恵器壺A (825・826) 肩の張ったいちじく形の体部に、直立する短い口縁部がつく形態である。(825)は丸底に近い底部をもつ。外面に自然釉が付着する。(825)は体部に1条、(826)は肩部に2条ずつ沈線が巡る。これらは7世紀代に遡る可能性がある。

須恵器壺C (827・828) 肩部が稜をなし、口縁部が短く直立する形態である。(827)は丸底である。底部付近を不定方向にヘラケズリする。外面に自然釉が付着する。(828)は完形品で高台がつく。口縁端部を短く上方へつまみ出す。肩部外面に焼成前のヘラ記号がある。黒色粒がケズリによって墨を流したようにのびる胎土をもつ。(828)は8世紀前半頃、(827)は7世紀代に遡る可能性がある。

須恵器壺E (829) 稜をもつ肩部に短く直立する口縁部がつく。外面に自然釉が付着する。

須恵器壺H (830・831) 肩部が稜角をなす扁平な体部に、短く直立する頸部と大きく外反する広

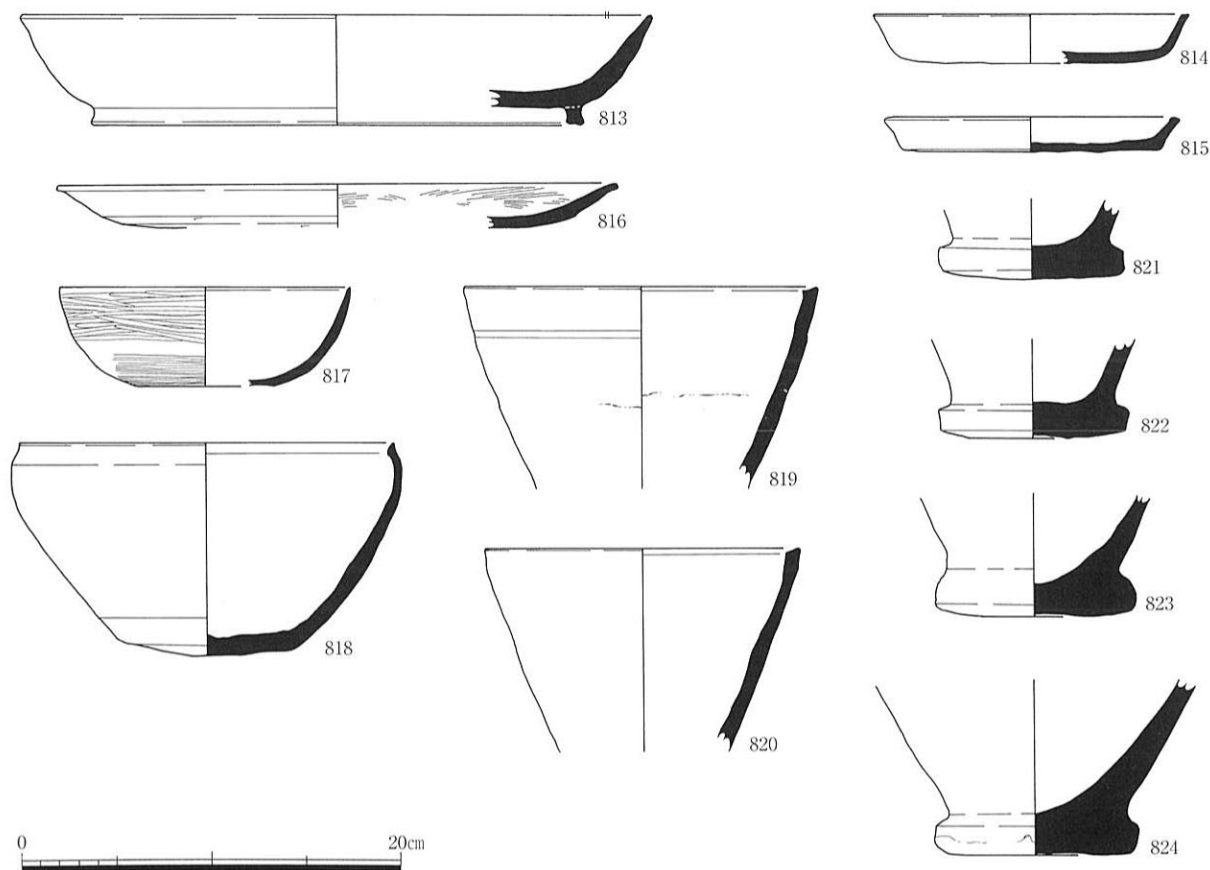


図93 第三面 川200・719 出土遺物 (27)

口の口縁が有するもので小形品である。両者はほぼ同じ法量である。(831)は内面に自然釉が付着する。8世紀代の所産であろう。

須恵器壺K (832・833) 肩部が稜角をなす体部と細長い口縁部をもつもの。両者とも外傾するしっかりとした高台がつく。外面に自然釉が付着する。(833)は体部に沈線が1条巡る。8世紀前半の所産であろう。

須恵器壺L (834・835) 卵形の体部に口縁部が外反して立ち上がる形態のもの。(834)は体底部片で、外面に自然釉が付着する。(835)は口縁部片である。口縁部が外反して立ち上がり端部を屈曲して上方につまみ上げ、外傾する面をつくる。口縁部内側と外面口縁部から肩部にかけて灰オリーブ色の自然釉がかかる。胎土が白っぽい。

須恵器壺M (836~838) 平底のイチジク形の体部に、外反する口縁部がつく形態である。いずれも口縁部を欠損する。(836)は体部最大径付近に1条の凹線が巡る。底部はヘラ切りののちナデ調整を施す。外面に自然釉が付着する。(837・838)は底部外面に回転糸切り痕が残る。

須恵器壺N (839・840) 肩部の相対する位置に耳状の把手がつくものと思われる。外面に自然釉が付着する。(839)は体部に2条の沈線が巡る。

須恵器壺Q (841~844) 幅の狭い肩部に稜をもつ扁平な体部と、大きく外反する広口の口縁部をもつものである。(841・842・844)は高台がつく。いずれも外面と内面に自然釉が付着している。(843)は黒色粒がケズリによって墨を流したようにのびる胎土をもつ。8世紀代の所産であろう。

須恵器壺 (845~856) (846・847)は口縁部片である。外面には(846)は1条、(847)は4条の凹線が巡る。内・外面に自然釉が付着する。(848~854)は底部片である。(848~853)は高台がつくも

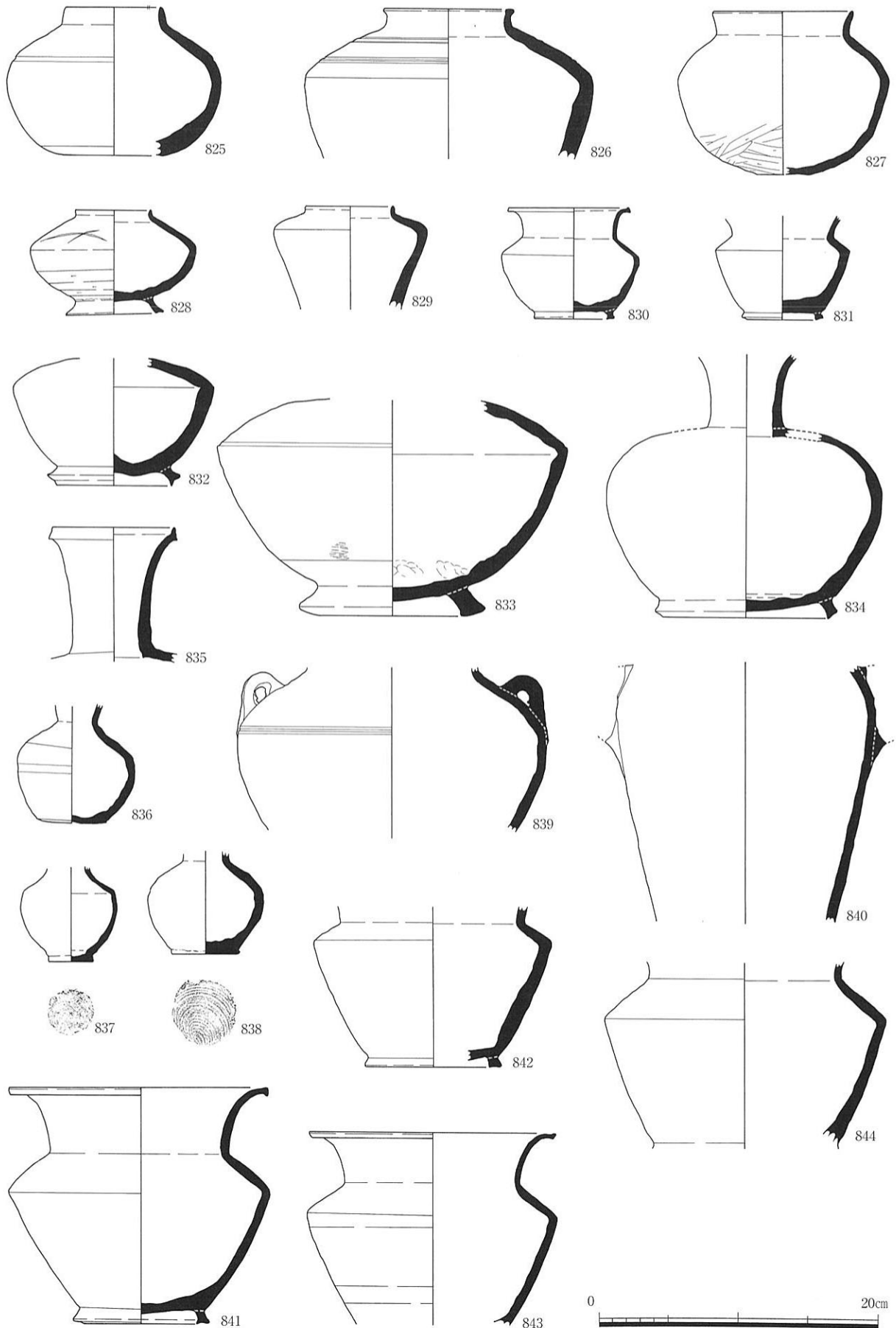


図94 第三面 川200・719 出土遺物 (28)

のである。(848)は高台の内側に爪形の痕跡がある。(851)は転用硯である。体部外面の底部付近に1条の沈線が巡る。伏せて置いたときに底部が水平になるように体部下方を打ち欠いている。高台の内側と断面に墨が付着し、使用痕も認められる。(850・852)は高台付近を意図的に打ち欠いている。高台の内側に墨の付着は認められないが、平滑になっているため転用硯と思われる。(854)は平底で回転糸切り痕が残る。(856)は体部片である。外面に焼成前のヘラ記号がある。

須恵器壺蓋 (857・858) 平坦な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなる。(857)は頂部外面に自然釉が付着する。

須恵器平瓶 (859・861) 平底で扁平な体部の背面に、外傾する広口の口縁部がつくものである。(859)は体部に丸みをもつ。頸部外面と体部の最大径となる位置にそれぞれ凹線が1条巡る。外面に自然釉が付着する。7世紀代に遡る可能性がある。(861)は体部に稜角をもつ。

須恵器甕 (862～864) (864)は口縁部内面から外面にかけて自然釉が付着する。白っぽい胎土をもつ。他地域産のものであろう。

製塩土器 (865～913) 第3節冒頭で記したように、製塩土器は遺構出土総数の80%が川200から出土した。しかしいずれも細片化しており、完全な形に復元できる個体は皆無であった。口縁部を中心とした形状ならびに内外面の調整手法によって、数種類に細分した。

(865～870)は、内湾する口縁部付近に最大径をもち、口縁端部は(866)を除いて先すぼみ、器壁は厚めで、内外面をナデ仕上げする一群である。(868)外面はナデ調整が不十分なため、粘土紐の接合痕が顕著に残る。しかし胎土はいずれも微妙に異なり、特に(867・870)には黒色のスコリアを含む。

(871～877)は口縁部上端に幅広の水平面をもち、口縁部は直線状あるいはやや内湾気味に立ち上がる二者が存在し、内外面ともナデ調整を施す一群である。(877)外面には接合痕が顕著に残る。厚手と薄手が存在する。(876)は、外面に吹き零れのような痕跡が残り、胎土に赤色粒子を若干含む。(878・879)は幅広の水平面をもつ口縁部がやや外反し、内外面はナデ調整を施す。胎土はやや円磨度の進んだ砂礫を多く含む、という特徴を有する。なお(879)の胎土には赤色粒子を若干含む。(880～882)は口縁端部を水平にし、内面は型作りを示す布目が付着し、外面はナデ調整を施す。(880)の内面には細かい布と粗い布の2種類を綴じる。(881)は口縁端部を型に沿わせて内側に曲げ、(882)内面口縁端部には凸帯が巡る。(883～886)は丸く肥厚させた口縁端部が外反し、内外面をナデ調整する一群である。(885)の内外面には接合痕が顕著に残り、内面では粘土紐の凹凸がより顕著である。また(884)は胎土に赤色粒子を多量に含む。(887～890)は口縁部がやや内湾気味で、端部がほとんど面をもたず、器壁厚く、内外面ともナデ仕上げという特徴を有する。(891～896)は口縁部が外反するもの多く、端部は幅狭の水平面をもつ。内外面はナデ調整で仕上げ、胎土は円磨度の進んだ砂礫を含む。(892・893)はともに内面の凹凸が激しい。(897～902)は口縁端部に幅広の外傾面をもち、内面には布目圧痕、外面はナデ調整を加える。このうち(898・899)の布目は粗く、他は細かい。(898)には布の綴じ目がある。他は細かい。(897)外面には煮零れのような痕跡が残る。(899)は赤色粒子含む。(900)の口縁端部内面にはわずかな凸帯が巡り、外面にはヘラ記号「×」もしくは「+」を施文する。(903)は外面に縦ハケを施すもので、内面はナデ調整のみ。口縁端部に平坦面をもつ。胎土に赤色粒子を含む。(904～906)は外面に叩き目を施すもので、(904)は内面をハケメもしくはナデ調整するが、他の2例は剥離のため不明。(図版56-909～913)は細片のため図化しなかったが、表面に煮零れのような痕跡が残る。(909・912)内面には細かい布目痕あり。(907・908)は古墳時代の製塩土器で、内面には貝殻条痕が残

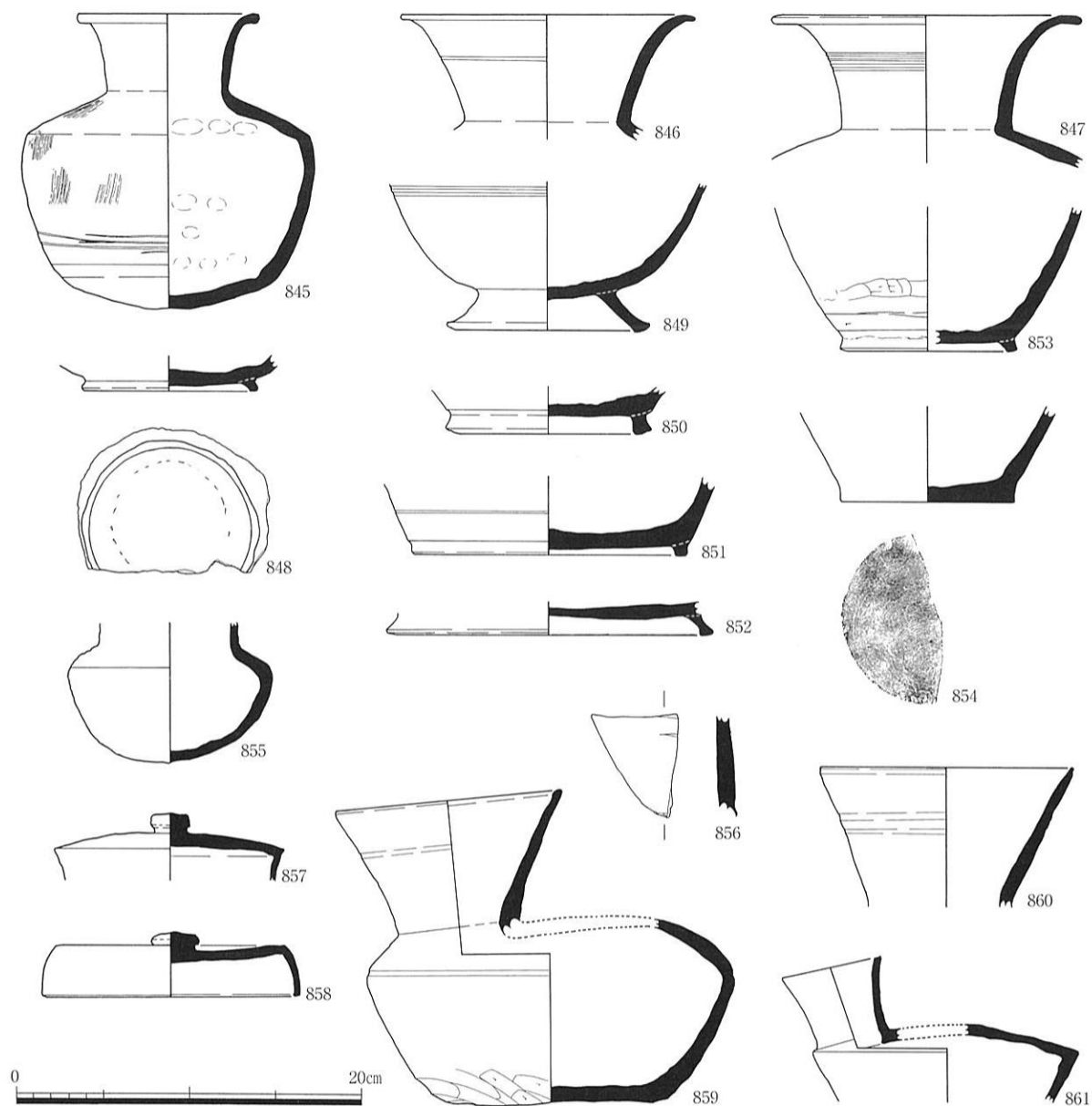


図95 第三面 川200・719 出土遺物 (29)

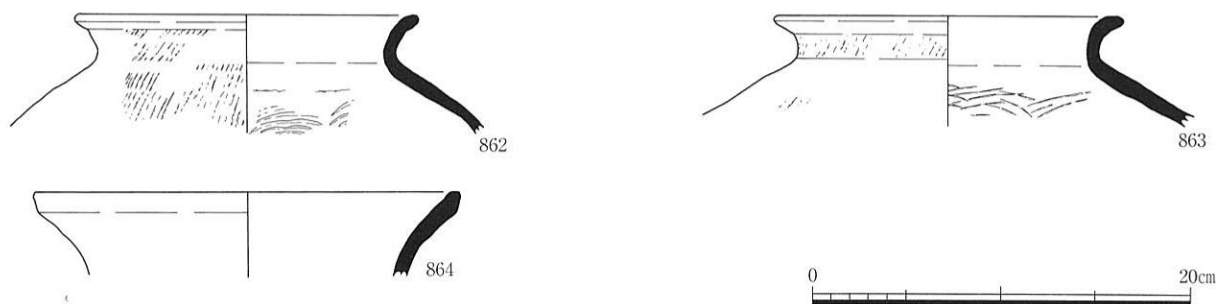


図96 第三面 川200・719 出土遺物 (30)

り、外面はナデ調整を施す。

弥生土器・その他の土師器 (914~970) (914) は弥生時代中期の壺口縁部片で、垂下した口縁端部には2条の凹線が巡り、円形浮文を付加する。頸部には凹線を4条以上施す。全体的に水磨著しい。(915) は弥生時代後期の壺口縁部片で、大きく外反した口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内面に

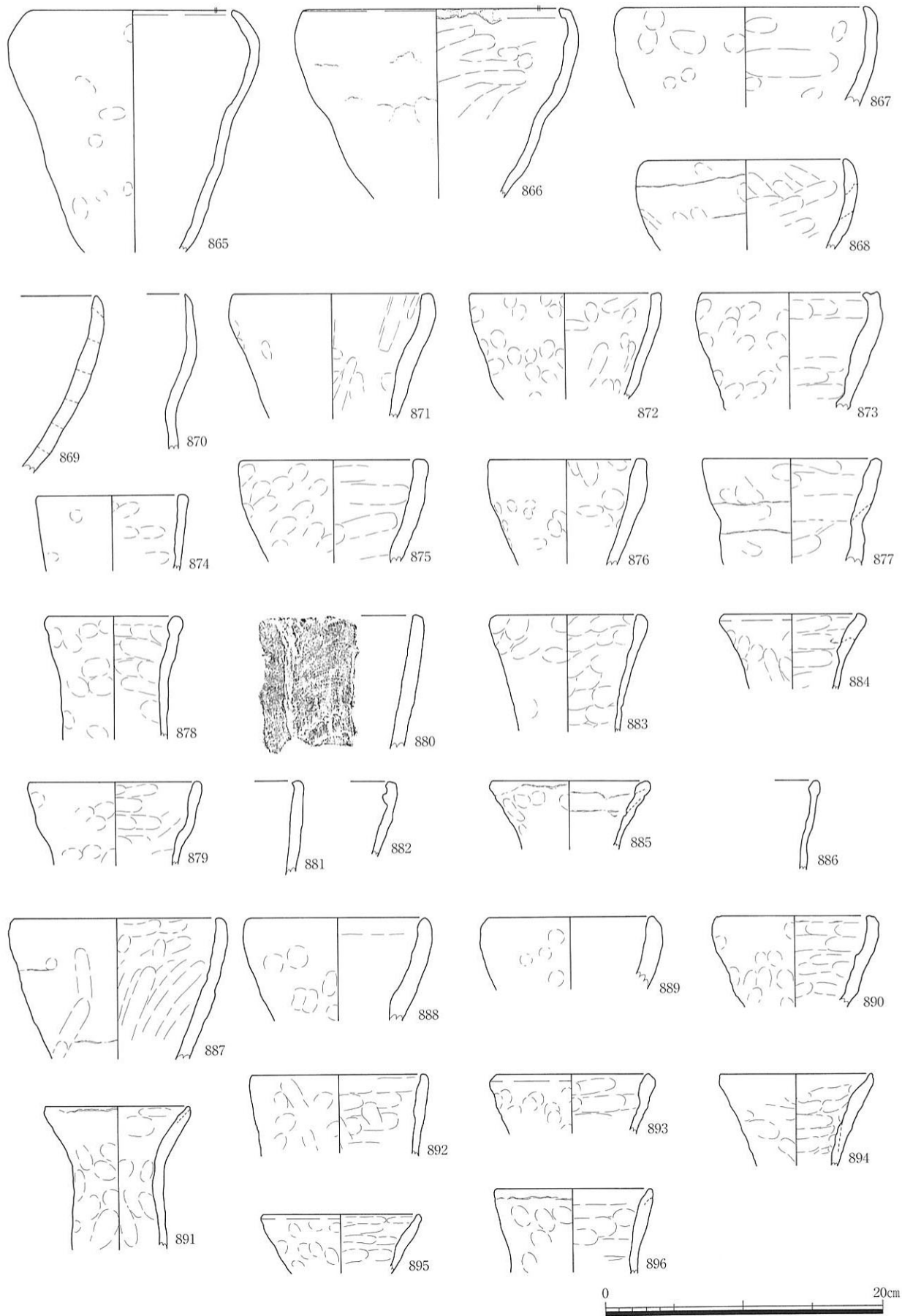


图97 第三面 川200·719 出土遺物 (31)

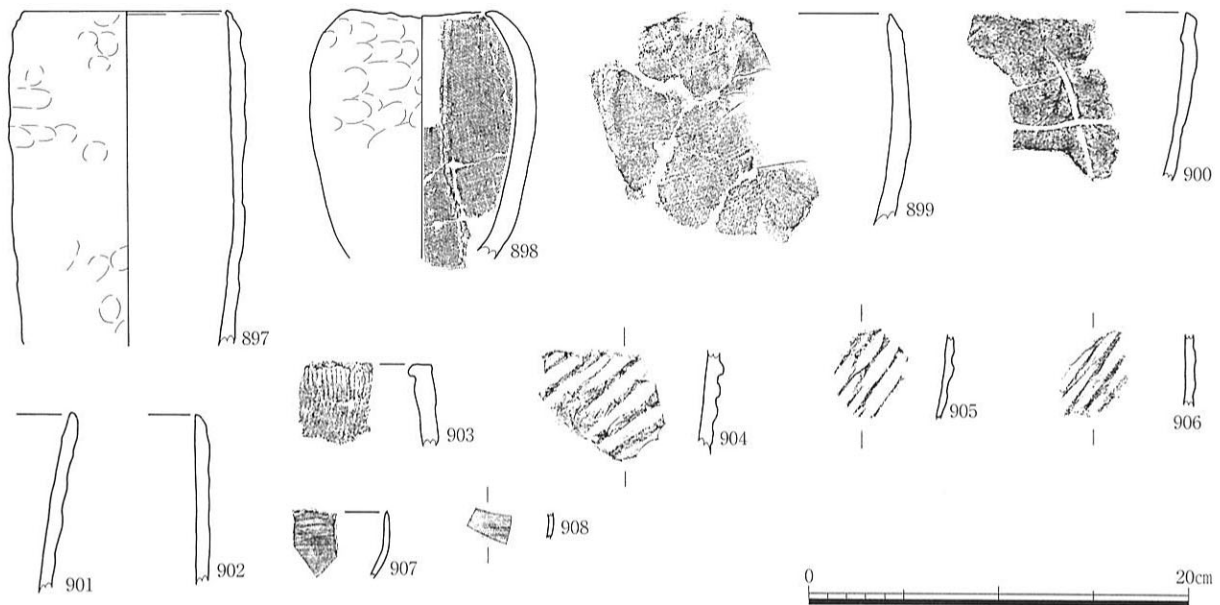


図98 第三面 川200・719 出土遺物 (32)

は黒斑あり。(916)は東海系二重口縁加飾壺の体部片で、廻間2式後半の所産。(917)は胴部が球形を呈する壺形土器片。外面ハケメ調整後、肩部に直線文・波状文を3段にわたって施文し、体部中位以下は縦方向のヘラミガキを施す。内面は体部上半ヨコハケ、それ以下はナデ調整。両者の調整の境界で接合痕が顕著に残る。(918)は土師器直口壺片で、外面肩部はタテハケ後粗いヘラミガキを施す。硬質焼成である。(919～921)は小形丸底土器。(919)は内外面口縁部及び外面体部上半にかけて、回転力を利用した細かいヘラミガキを、外面体部下半は不定方向の細かいヘラミガキを施したのち、口縁部内面に細かいヘラミガキを施文する。(920)は外面体部下半をヘラケズりする。やや大形の(921)は口縁部内面をヨコナデするが、口縁部外面には粘土の接合痕が明瞭に残る。(922・923)は小形壺。(922)は全体をヨコナデもしくはナデにて仕上げる。(923)は非常に厚手の小形壺で、底部は平底である。類例は、近隣の小阪合遺跡包含層⁷⁾や萱振遺跡第1トレンチ南区SE-1⁸⁾などで出土する。(924)は外面及び口縁部内面を縦方向にヘラミガキした平底の壺で、橙色を発色する。(925)はV様式系の小形鉢で、体部外面のタタキは部分的にナデ消す。底部は厚い。土師器鉢(926)は外面底部をヘラケズりする以外、すべて回転力を利用した細かいヘラミガキを施す。(927～937)は高坏片。(928)を除く高坏坏部は主としてヘラミガキを加えるが、(929)の坏部内底面には靱殻圧痕が付着する。やや脚柱径の大きい(931)は弥生土器か？脚柱部外面は、ヘラナデによる面取り風仕上げで、同内面は絞り込み圧痕が残る。また(934)脚裾部内面には布目圧痕が顕著に残る。(938・939)は小形器台で、ともに表面には赤色顔料を塗布する。(940)は弥生時代前期中段階の甕口縁部片。水磨著しい。(941・942)は弥生時代中期甕。(943)は木葉痕のある弥生時代後期壺片。底部外面はヘラケズリ。(944～950)は弥生時代後期甕片。

(945・946)は角閃石を含む生駒西麓の胎土。(951～953・955)は庄内式甕。(951)は、外面口縁端部・頸部を強くヨコナデし、口縁端部はつまみ上げて、外傾する面をもつ。体部外面上半は細かいタタキのちハケメ、下半はハケメのちナデる。内面体部上半はヘラケズリ、下半には指頭痕残り、煤著しく付着する。底部はほとんど丸底。庄内式末期。(952・953・955)も同じく庄内式甕であるが、口縁部形態に微妙な差異がある。胎土は(953)のみ生駒西麓産。(954)は口縁端部が一定せず、全体的に厚手

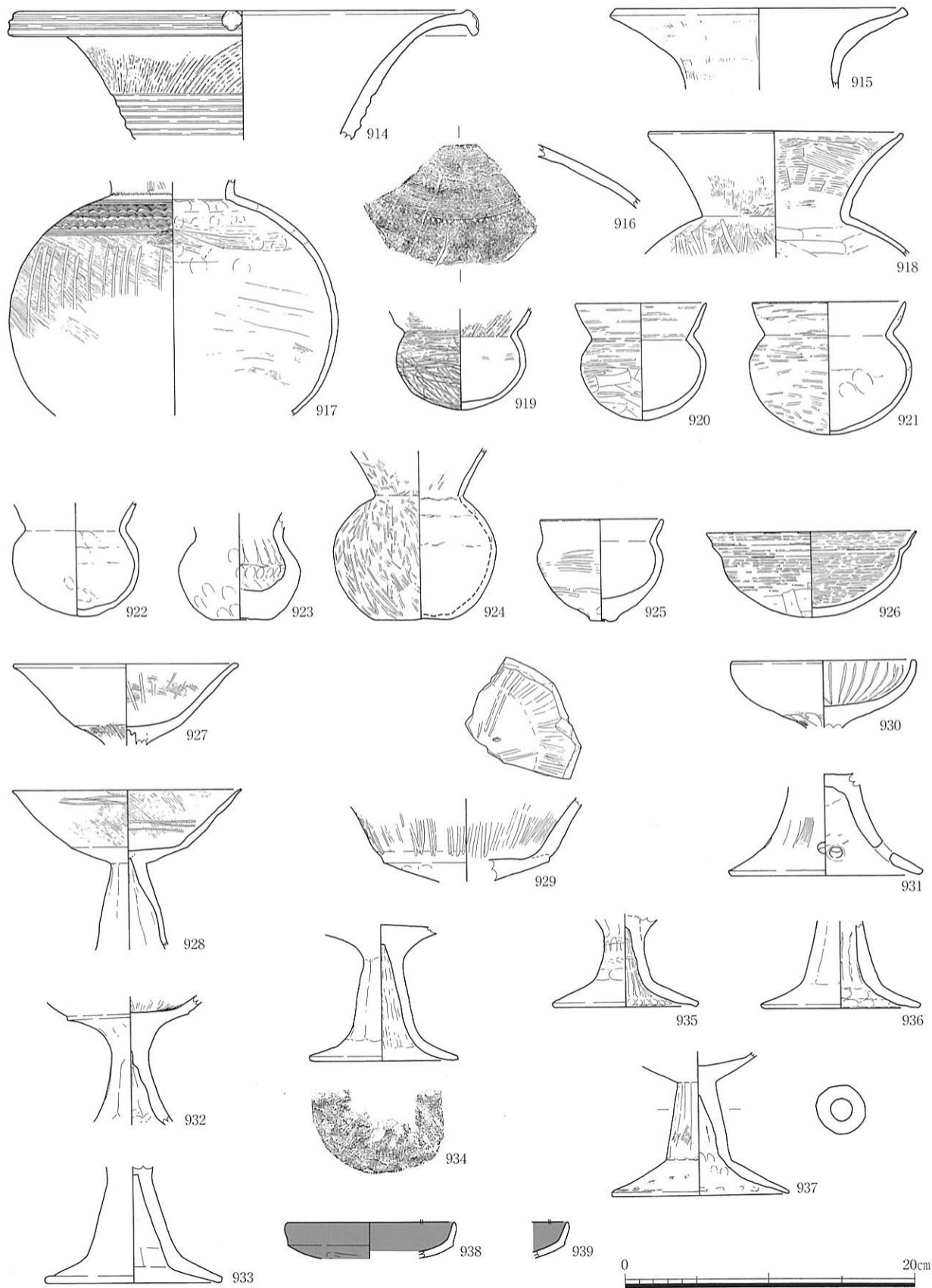


图99 第三面 川200·719 出土遺物 (33)

の甕。(956~959)は布留式甕。(956)は口縁端部の形状や外面口縁端部・頸部を強くヨコナデすること、肩部にヨコハケを施すことなど、布留式甕の特徴を有するが、体部が長胴化し、器壁も厚くなる。これに対し(957~959)は、口縁端部が肥厚しない(958)を含むが、いずれも体部の器壁は薄く、球胴化しており、原田編年布留I期の特徴を備える。複合口縁壺(960)は、意図的な打ち欠きのためか口縁端部の大半が欠損し、体部中位を2ヶ所焼成後穿孔する。器壁の水磨が著しい。口縁部内面は黒色化し、底部外面に黒斑あり。(961~963)はいずれも複合口縁壺の口縁部片。(961)は口縁部外面をタテハケのちヨコナデ、(962)は剥離のため調整不明瞭であるが、内外面とも細かい横方向のヘラミガキを施す。(964)は厚手の甕で、体部内外面に粗いハケメを施す。(965)は時期不明の甕口縁部片であるが、内面に漆が付着する。吉備系甕は(966・967)の2点が出土した。(966)の口縁部外面には擬凹線が4条巡り、外面肩部に刳圧痕あり。オの町I~II式併行。(967)の口縁部には6条の櫛描横線文を巡らせ、外面頸部以下はタテハケのち頸部をヨコナデ、体部には縦方向のヘラミガキを施す。下田所式前半併行。(968)は山陰系高坏。器表は細かな剥離著しいが、坏部内面は縦方向の密なヘラミガキを、同外面はハケメ調整のち横方向のヘラミガキを加え、脚付近から縦方向のミガキを施す。脚内外面はナデ。橙色を発色する。古墳時代前期か。(969)は山陰系甕体部片。(970)は東海系S字口縁甕の脚台片。

ミニチュア土器・土製品(971~991) (971~976)は手捏ね成形のミニチュア高坏。脚内側に心棒を差込んで成形した(971・972)は深い坏部をもつが、成形時に心棒を用いなかった(973)は坏部が浅い。(974)も后者であろう。(976)は脚部が剥落した痕跡を残しており、坏部と脚部が別作りであったことを示す。小形の壺(977)は、平底で体部に欠損した把手をもち、体部外面にかろうじてヘラミガキが残る。体部内面中位に接合痕が明瞭に観察できる。器壁は厚い。ミニチュア直口壺(978)の底部には黒斑がある。(979)はミニチュアの鉢か。円筒埴輪は(980・981)の2点を確認した。いずれも摩耗著しい。(982)は須恵質に焼成された土管片で、凸帯が巡る。内面には煤?付着。(983~987)は土錘。大形の(983)は211.3g、小形の(987)は3.6gをはかる。(988)はイイダコ壺片で、体部に1ヶ所穿孔あり。(989)は不明土製品片。本来は円形を呈していたであろうが、欠損している。軽量。移動式竈は各部位片が出土したが、図示できたのは(990)の口縁部片。同心円圧痕があり、内面には煤付着。(991)も不明土製品片。側縁部から片面全体に著しい煤が付着するが、もう片面には全く煤は付着せず、成形時の叩き目が残る。

その他の須恵器(蓋・坏、992~1032) 須恵器蓋(992~995)は中村編年I-3(田辺編年TK208)の所産である。口縁端部は内傾する凹面をもつ(992)、内傾する段をもつ(993・994)、内傾する平面をもつ(995)と差異がある。また天井部は半球状を呈する(993・994)と扁平な(995)に分かれる。(996)の稜は退化し、わずかに突出する程度である。中村編年II-1(田辺編年MT15)。(997)は厚手で稜は消失し、その部分に凹線が巡る。中村編年II-2~3(田辺編年TK10~MT85)の所産。厚手の(999)もほぼ同時期で、(998)は中村編年II-4(田辺編年TK43)頃か。坏(1000~1004)のうち、(1000)は口縁端部鋭く、受部は水平にのび、底体部外面は手持ちヘラケズリを施す。中村編年I-2(田辺編年TK216)に属する。立ち上がりが高く、端部が内傾する(1001)は中村編年I-3(田辺編年TK208)の所産。(1002)は短く内傾する立ち上がり、扁平な底部をもち、砂粒を多く含む。中村編年II-2(田辺編年TK10)。形態的に(1002)と類似する(1003)も同時期。前二者に比べ立ち上がりの内傾化が進んだ(1004)は中村編年II-2~3(田辺編年TK10~MT85)に属し、底部内面には同心円の当て具痕が残る。底体部外面に自然有付着する。(1005)になると口縁端部は丸くなり、

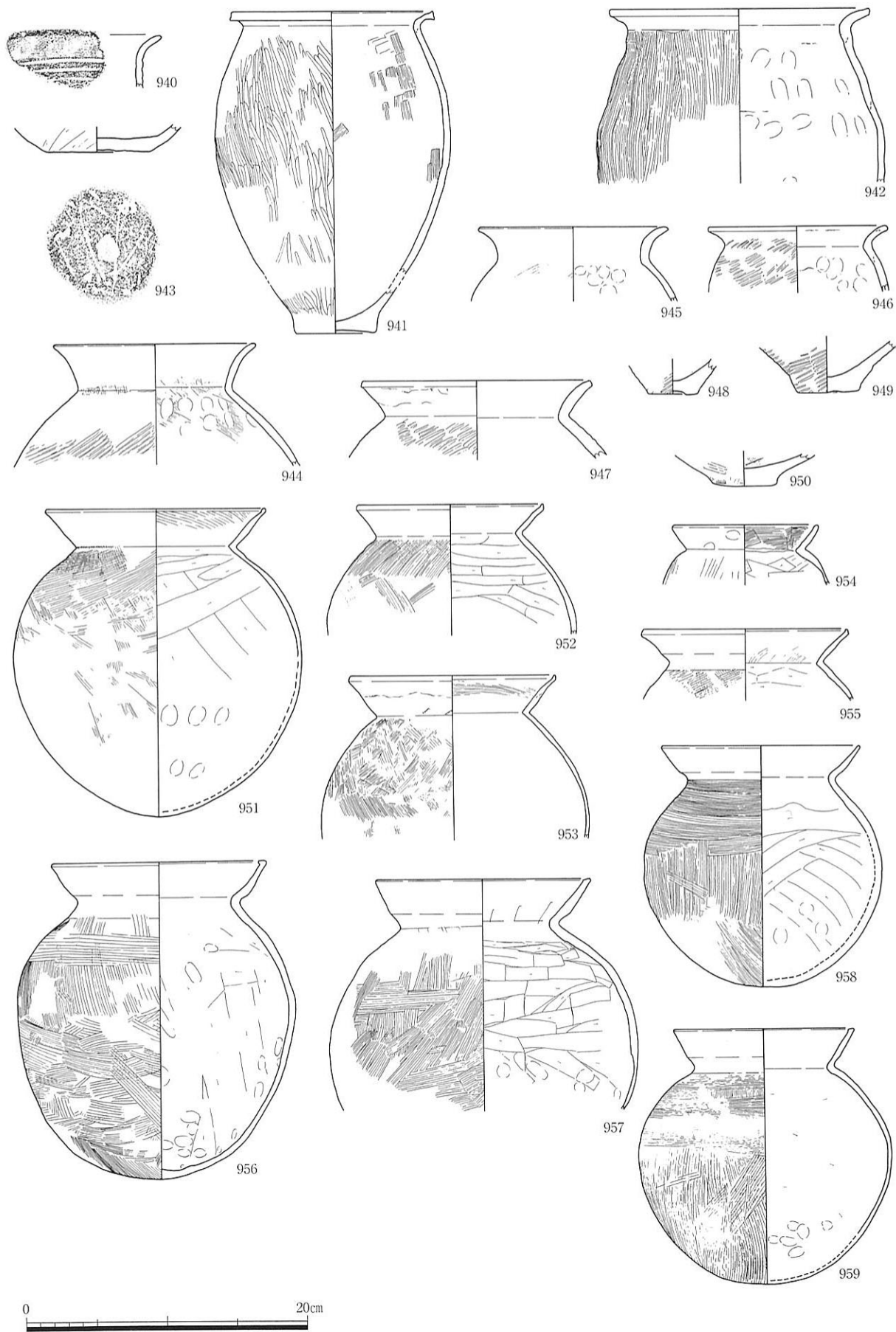


图100 第三面 川200·719 出土遺物 (34)

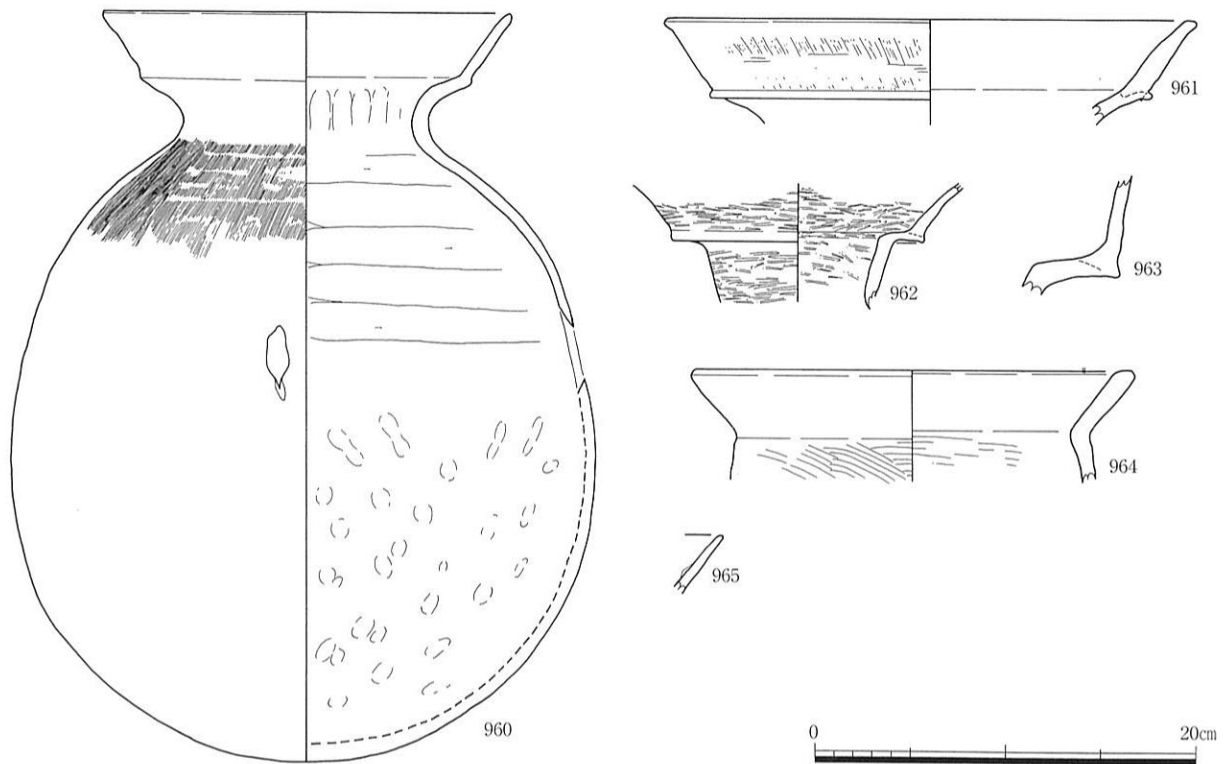


図101 第三面 川200・719 出土遺物 (35)

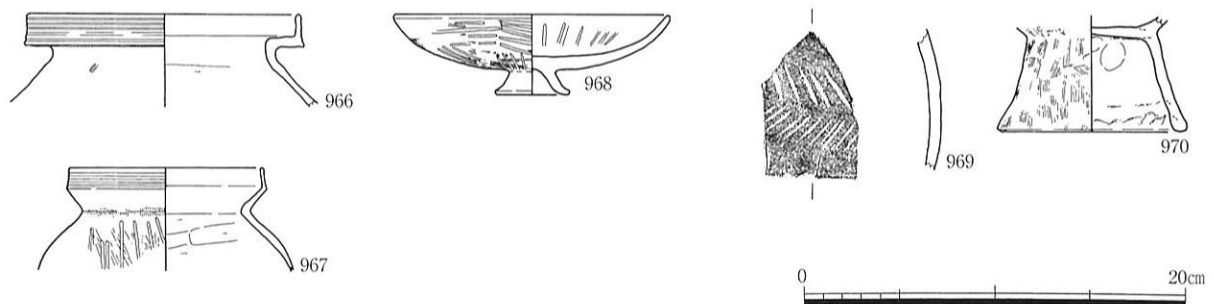


図102 第三面 川200・719 出土遺物 (36)

立ち上がりはさらに内傾化が進み、底部は丸くなる。底体部外面にヘラ記号「×」がある。中村編年Ⅱ-4（田辺編年TK43）の所産。(1006)は中村編年Ⅱ-4（田辺編年TK43）に、立ち上がりが一層短くなる(1007)は中村編年Ⅱ-4~5（田辺編年TK43~TK209）に下る。(1008~1017)は蓋もしくは壊いずれかの破片に記されたヘラ記号である。(1018)には稜の痕跡もなく、天井部から口縁部にかけて緩やかな曲線をなす。中村編年Ⅱ-4（田辺編年TK43）。(1019~1023)は小形化が進み、ヘラケズリも天井部のみとなる。(1019)には天井部付近にヘラ記号がある。中村編年Ⅱ-5（田辺編年TK209）に属する。中村編年Ⅱ-6（田辺編年TK217）の所産である(1024)の天井部はヘラ切り不調整。(1025)は、(1005)同様立ち上がりが短く内傾化し、底部が丸くなる。中村編年Ⅱ-4（田辺編年TK43）に属する。(1026)の立ち上がりは短く内傾化著しく、底部は平底気味で不調整である。底部外面にヘラ記号あり。中村編年Ⅱ-5（田辺編年TK209）。(1027・1028)は、小形化が進み、立ち上がりもほとんどない。底体部外面に自然釉付着する。(1027)底部外面には粘土塊が付着し、(1028)底体部に焼成前の孔が開くように、粗雑化が著しい。(1028)の底部外面にはヘラ記号がある。ともに中村編年Ⅱ-6（田辺編年TK217）。蓋のかえりが口縁端部より下がる(1030)は中村編年Ⅲ-1（田辺編年

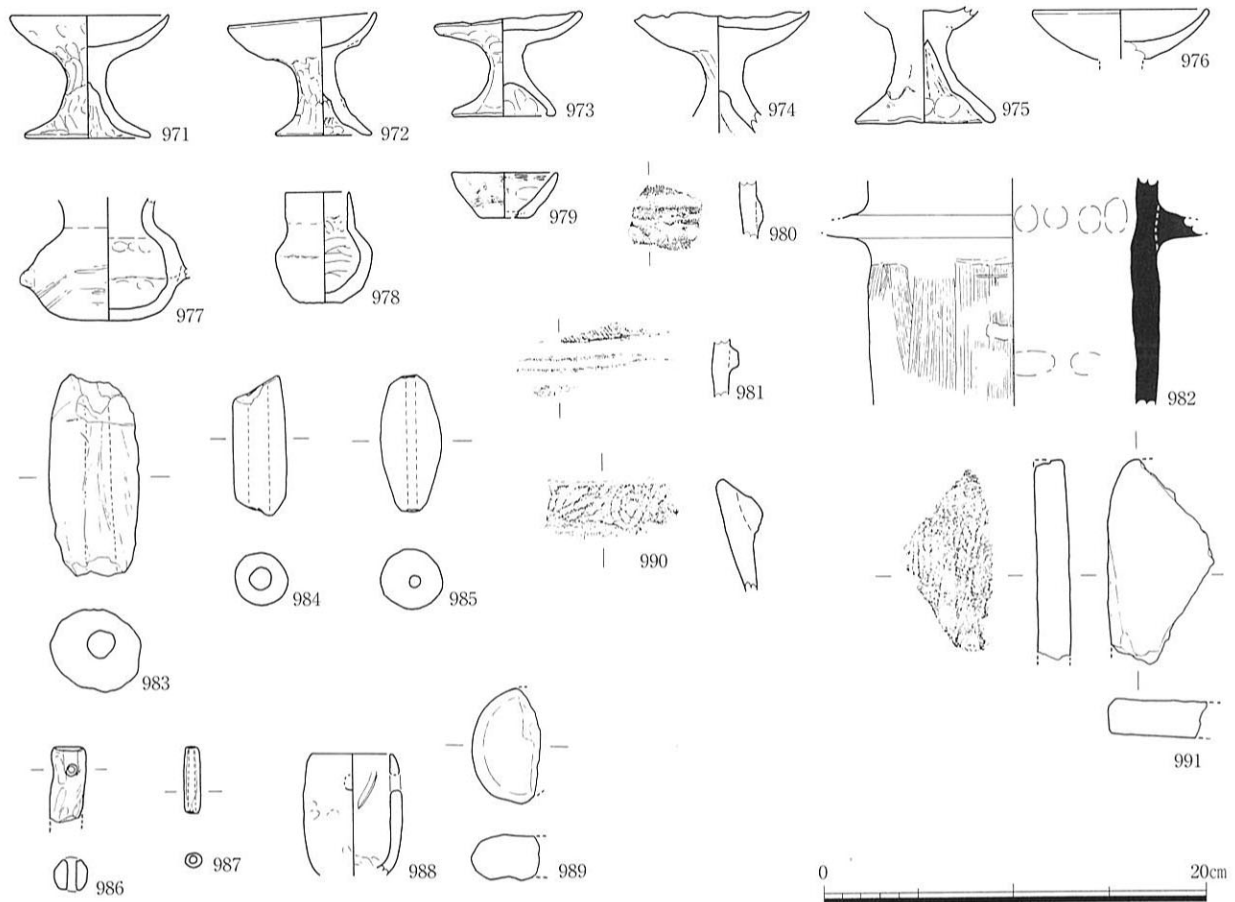


図103 第三面 川200・719 出土遺物 (37)

TK217) に、かえりが退化した (1031) は中村編年Ⅲ-2~3 (田辺編年TK46~TK48) に属するだろう。小形の宝珠つまみをもつ (1029) も前二者に併行する時期の所産といえよう。なお (1031) にはヘラ記号がある。坏G (1032) は7世紀後半、飛鳥Ⅳの所産。今回の調査では、6世紀前半の中村編年Ⅱ-1 (田辺編年MT15) 以降7世紀代にかけての須恵器の出土は極端に少ない。

その他の須恵器 (坏・蓋以外の小形器種、1033~1045) (1033~1036) は高坏片。無蓋高坏 (1033) は、外面中位に1条の凸帯が巡り、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は外反する。底部外面には剥離した長方形透かしの跡が残る。透かしは8方前後か。中村編年Ⅰ-2 (田辺編年TK216) 以前の所産。(1034~1036) は高坏脚部片で、(1034) は脚裾部に5ヶ所の円孔が開き、(1035) には4ヶ所の長方形透かしが、(1036) には3ヶ所の長方形透かしがある。甗は (1037・1038) の樽形甗と、球形の体部をもつ甗 (1039~1042)、さらに鳥形を呈した甗 (1044) が出土した。樽形甗 (1037) の内面には、成形時の指頭痕が顕著に残る。(1039) は体部中位に沈線1条と刺突文帯が巡り、体部下半にハケメ調整を施す。中村編年Ⅰ-4 (田辺編年TK23) 頃か。体部無文の (1040) は頸部付近で変形するが、口縁部は細い基部から外反し、同中位に1条の稜が巡り、口縁端部を丸くおさめる。中村編年Ⅰ-2 (田辺編年TK216)。(1041) も同時期か。これに対し外反する長い口縁部と無文の体部からなる (1042) は、中村編年Ⅱ-2 (田辺編年TK10) 以降の所産。(1043) は把手上面に抉りを入れ、内弯気味の口縁部に2条の沈線が巡る。(1044) は鳥の頭部と体部の大半を欠損するが、鳥の頸部直下に上外方から斜めに穿った孔をもつ。(1045) は提瓶もしくはそれに類する器種の口縁部片で、ヘラ記号あり。外面には自然釉が付着する。

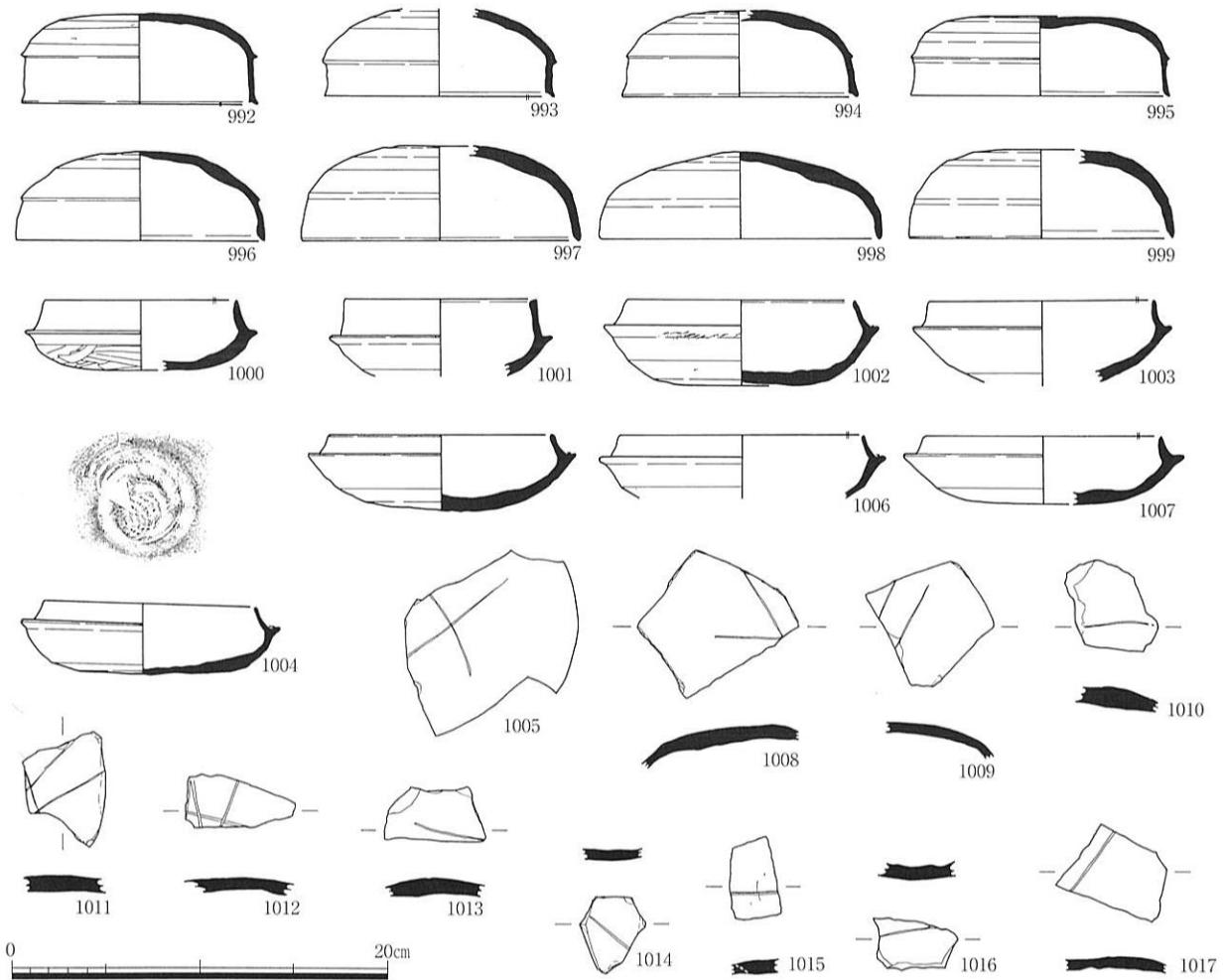


図104 第Ⅲ面 川200・719 出土遺物 (38)

韓式系土器 (1046～1051) 軟質系土器の体部片。(1046～1049) の外面には細かな格子タタキが、(1050・1051) の外面には縄席文タタキを施す。内面はいずれもナデ調整。

その他の須恵器 (甕、1052～1077) (1052～1056) は口縁部が短く直立する甕である。(1052) は口縁端部から頸部にかけて回転ナデ、体部外面にタタキ、同内面に同心円当て具痕が残る。肩部には把手?の残欠あり。(1053) の口縁端部はやや内傾する平坦面をもち、外面に粗いハケメを施した後回転ナデを施す。内外面とも自然釉が付着する。(1054) は口縁部外面中位に凹線が1条巡り、肩部には径1cm程度の円形浮文を巡らせる。自然釉付着。(1055) の口縁端部は回転ナデによってやや凹面を形成する。自然釉付着。(1056) は口縁部径43cm余をはかる最大級の甕片である。口縁端部は、回転ナデによって平坦面を形成した結果やや肥厚する。口縁部外面は粗い櫛状工具で成形したのち回転ナデを施す。体部内外面に残るタタキや当て具痕を、回転ナデにて消そうとする。(1057～1061) は口縁部が外反し、端部を肥厚させない甕。(1057) は尖り気味におさめた口縁端部をもつ甕で、体部外面はカキメが、同内面は回転ナデを施す。5世紀前半頃の所産か。(1058) の口縁部には粘土紐の継ぎ目による凹凸が残り、(1059) の口縁部外面にはヘラ記号あり。厚手で短い口縁部と、ナデを施した張り気味の肩部をもつ(1060) は、体部内面に無文当て具痕が残る。口縁部付近には褐色を呈する自然釉?が付着。5世紀前半の所産。(1061) の口縁端部はわずかに屈曲し、外傾する平坦面をもつ。

(1062～1071) は口縁端部を肥厚もしくは上下に拡張する甕である。(1062) は口縁端部が肥厚し、

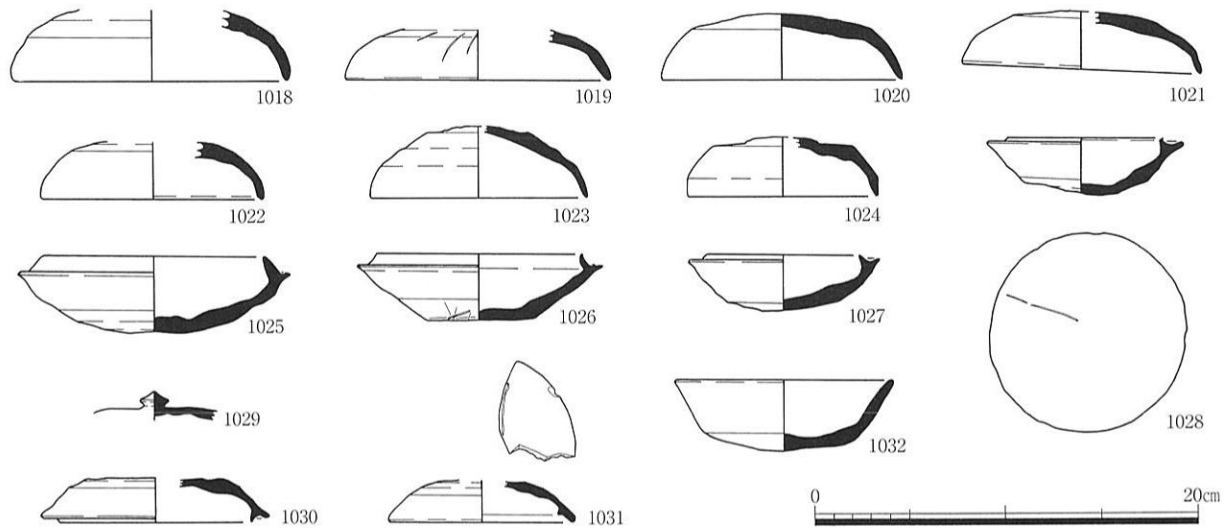


図105 第三面 川200・719 出土遺物 (39)

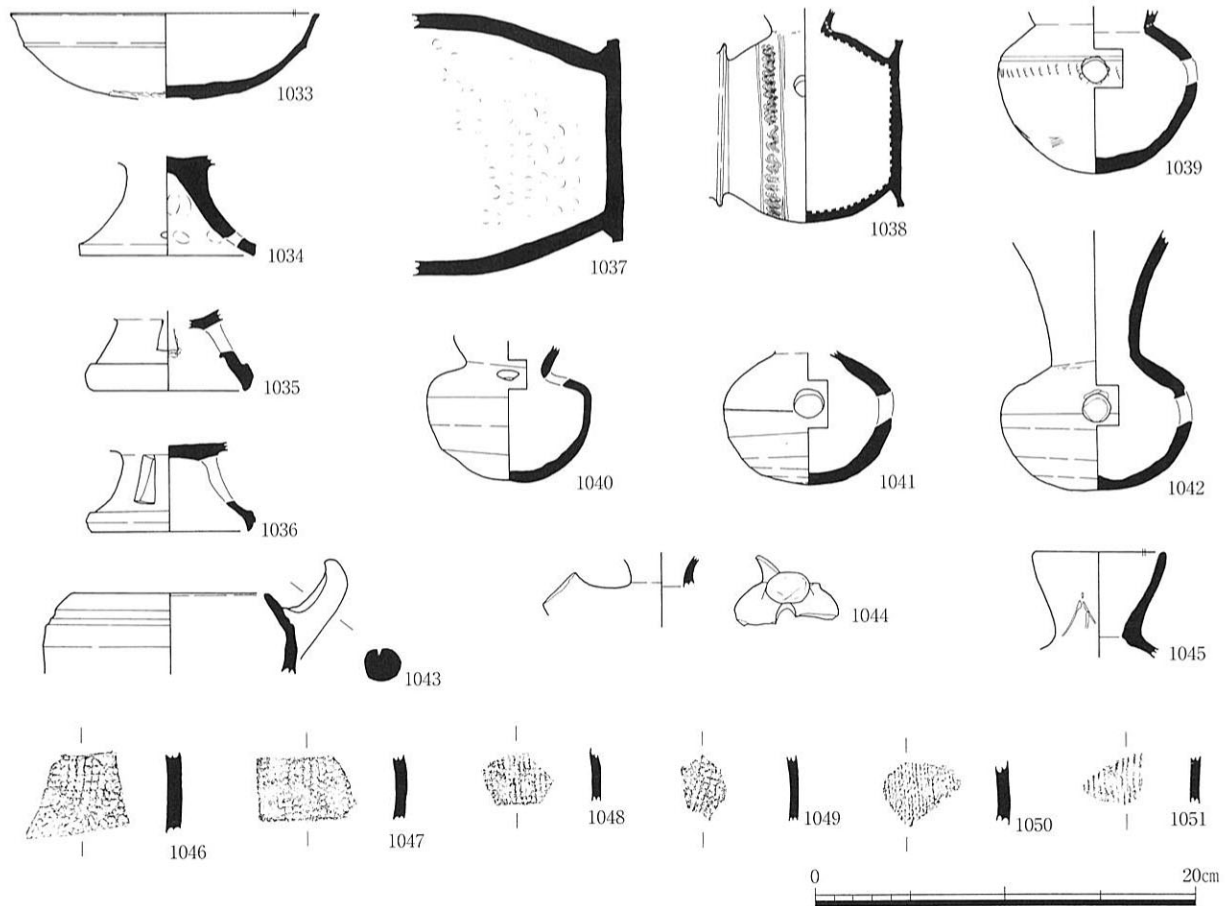


図106 第三面 川200・719 出土遺物 (40)

(1063) は端部を上下に拡張させ口縁部に稜線を挟んで波状文帯を配する。後者は中村編年 I - 3 (田辺編年 TK208) 頃か。(1064) の体部内面には細かい同心円当て具痕が残る。(1065) は口縁端部を外方に屈曲させ、体部外面にはタタキ後カキメを施す。(1067) も似た口縁部形態。(1066) の口縁部はハケメにて成形後回転ナデを施し、口縁端部には凸帯を 1 条巡らせる。体部外面には細かい平行タタキを加える。口縁部に同様の成形痕を残す (1068) は、体部の叩き締めが不十分であったようで、器壁がいたる

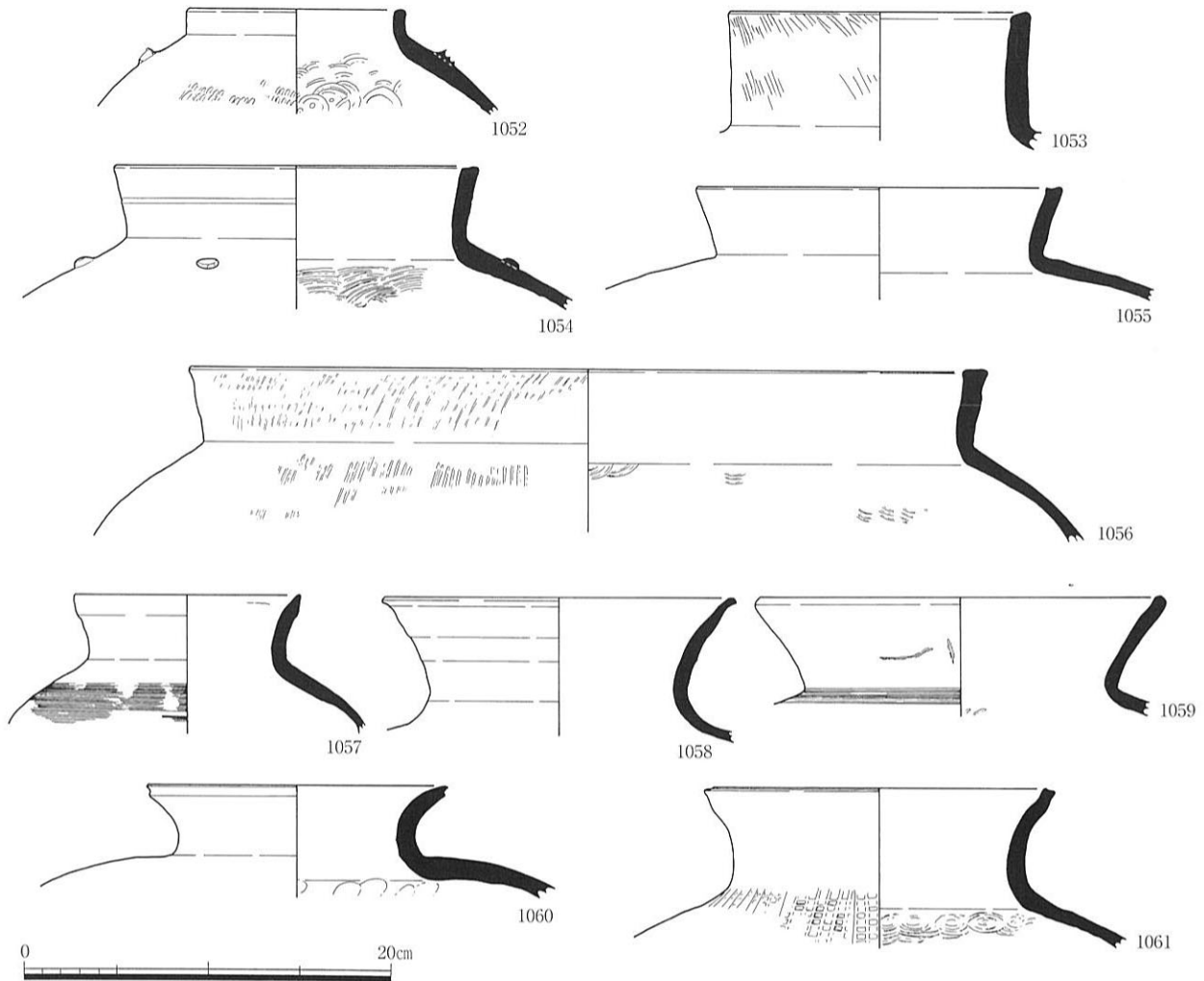


図107 第三面 川200・719 出土遺物 (41)

ところで膨らむ。(1069)は、屈曲した口縁端部が上下に拡張し、凸帯1条と波状文帯が巡る。口縁端部を丸くおさめた(1070)の体部外面は、タタキ後カキメを施す。(1071)は大きく外反した口縁部に1~2条の沈線を巡らせる。(1072)はさらに大きく外反した口縁部をもつ。甕体部片(1073)の外面には、叩き具の木目が明瞭に残る。

(1074~1076)は口縁端部の断面形が長方形を呈するもので、7世紀前後の所産であろう。(1074)の内面には、車輪文の当て具痕が残る。(1075)の口縁部内面にはヘラ記号あり。小破片ではあるが(1076)は、口縁部に数条の沈線と波状文を配する。(1077)は唯一口縁部から甕体底部にかけて復原したもので、口縁端部は一様に欠損する。やや生焼け。廃棄後に火を受けたため、表裏面のみならず断面にも煤が付着する。

砥石(1078~1081) 大小4点実測した。(1078・1079・1081)は、いずれも長側面すべてに擦痕が残るが、4面均等に滑らかな(1079)に対し、(1078・1081)は狭側面の方がより滑らかである。(1081)は自然面の残る端部に煤が付着する。(1080)は図示した面のみ擦痕が残り、他はすべて欠損する。

瓦器(1082~1087) 図示した6点の瓦器塊は、いずれも川719内のK16f1-IIから出土したもので、本来は川埋没後に掘削された井戸に伴う遺物であろう。(1082)は内面に密なヘラミガキと格子状暗文を、外面にやや崩れかけた4分割のミガキを施す。(1083)の外面はヘラミガキの分割性が崩れ、指頭痕が残る。(1084)は内面底部に平行状暗文を施し、外面にはやや雑な3分割のヘラミガキを加える。

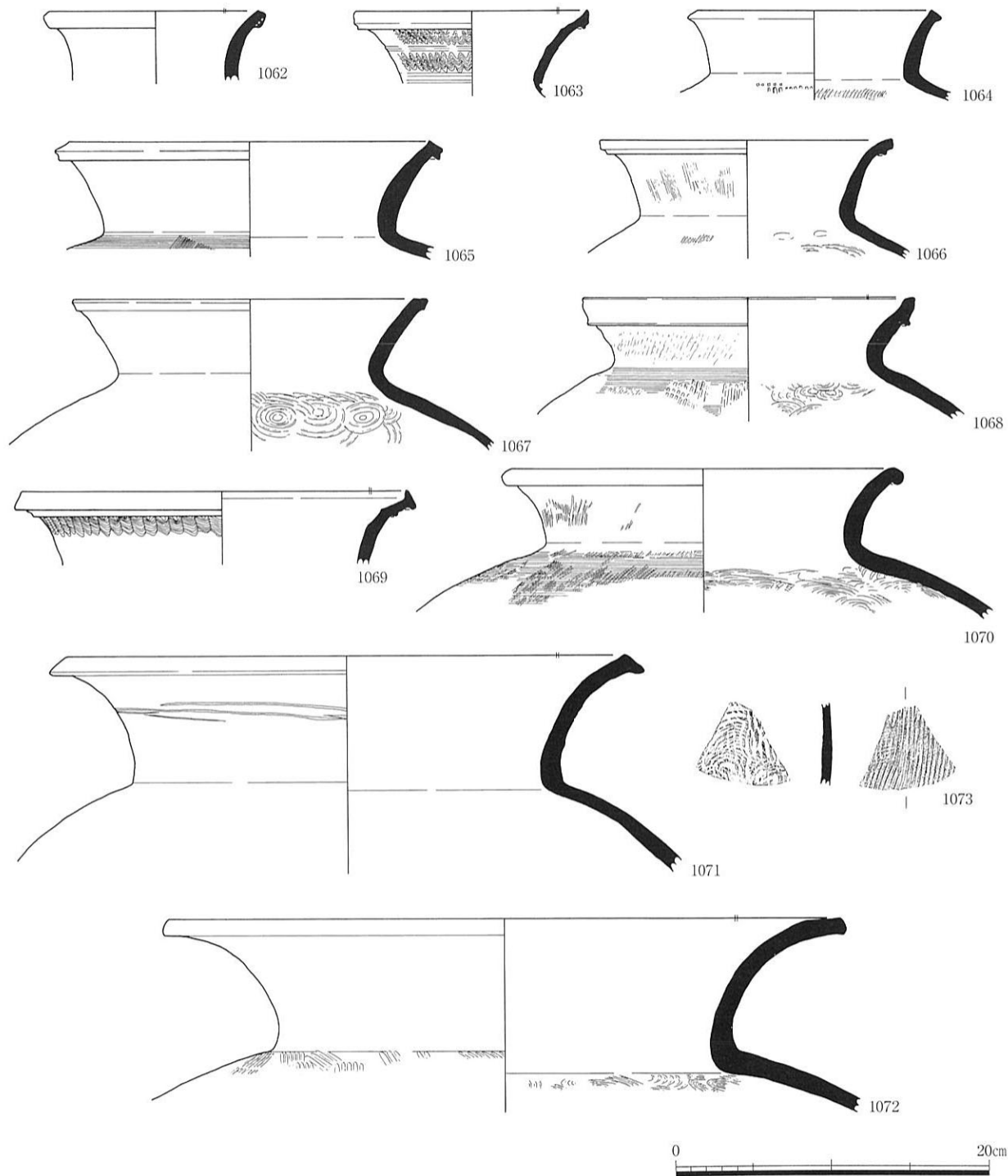


図108 第Ⅲ面 川200・719 出土遺物 (42)

内面底部に格子状暗文をもつ (1085) は、外面に4分割のヘラミガキを施すが、指頭痕が顕著に残る。(1086) は内面全体に横方向のヘラミガキ後放射状のミガキを加え、外面はやや雑ながら5分割のミガキを施す。(1087) は破片資料であるが、内面は全体にヘラミガキを、外面には分割性の崩れたミガキをそれぞれ施す。これらはいずれも尾上編年Ⅰ-3期(11世紀末~12世紀初頭)の所産であろう。

落込み341出土遺物(1088~1110) (1088~1098)は瓦器塚。(1088)は器壁の剥離著しく、内面の格子状暗文やヘラミガキがわずかに残る程度。外面は指頭痕が顕著。口縁部のヨコナデのため、体部との境で弱く屈曲する。尾上編年Ⅱ-3期(12世紀後半)。(1089)は内面のヘラミガキが密で、底部に

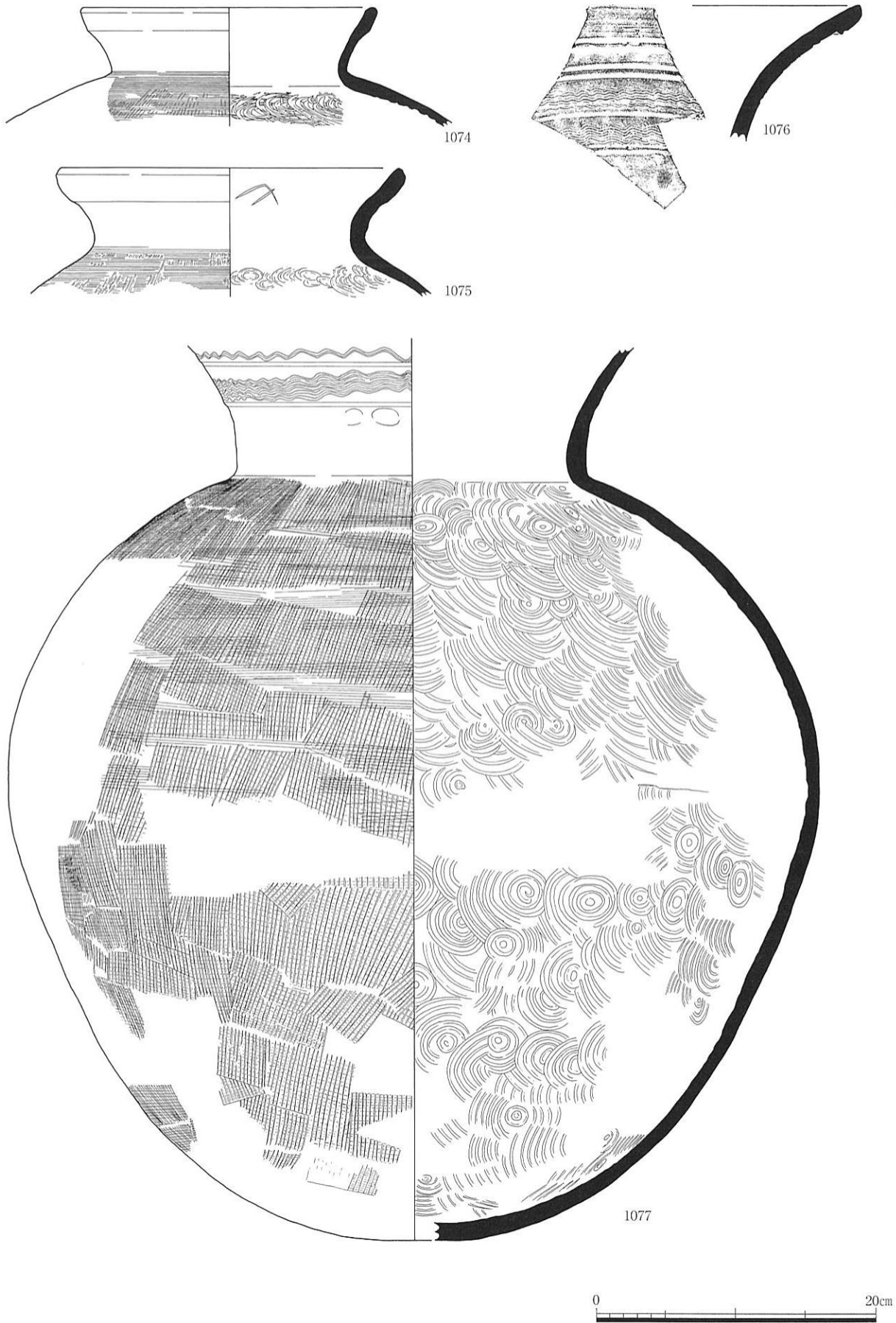
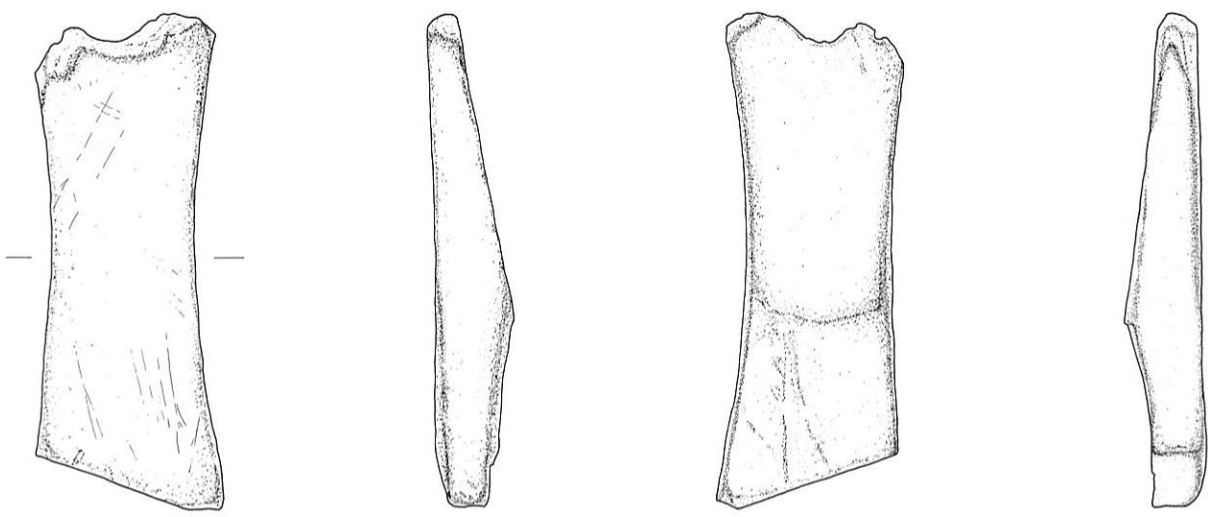
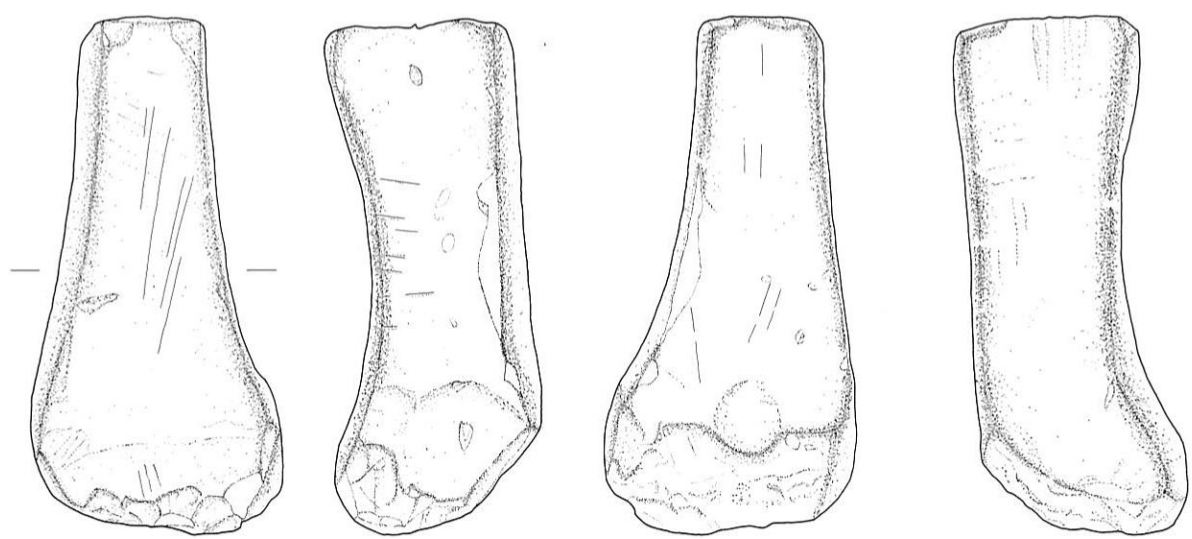


图109 第三面 川200·719 出土遺物 (43)



1078



1079



图110 第三面 川200·719 出土遺物 (44)

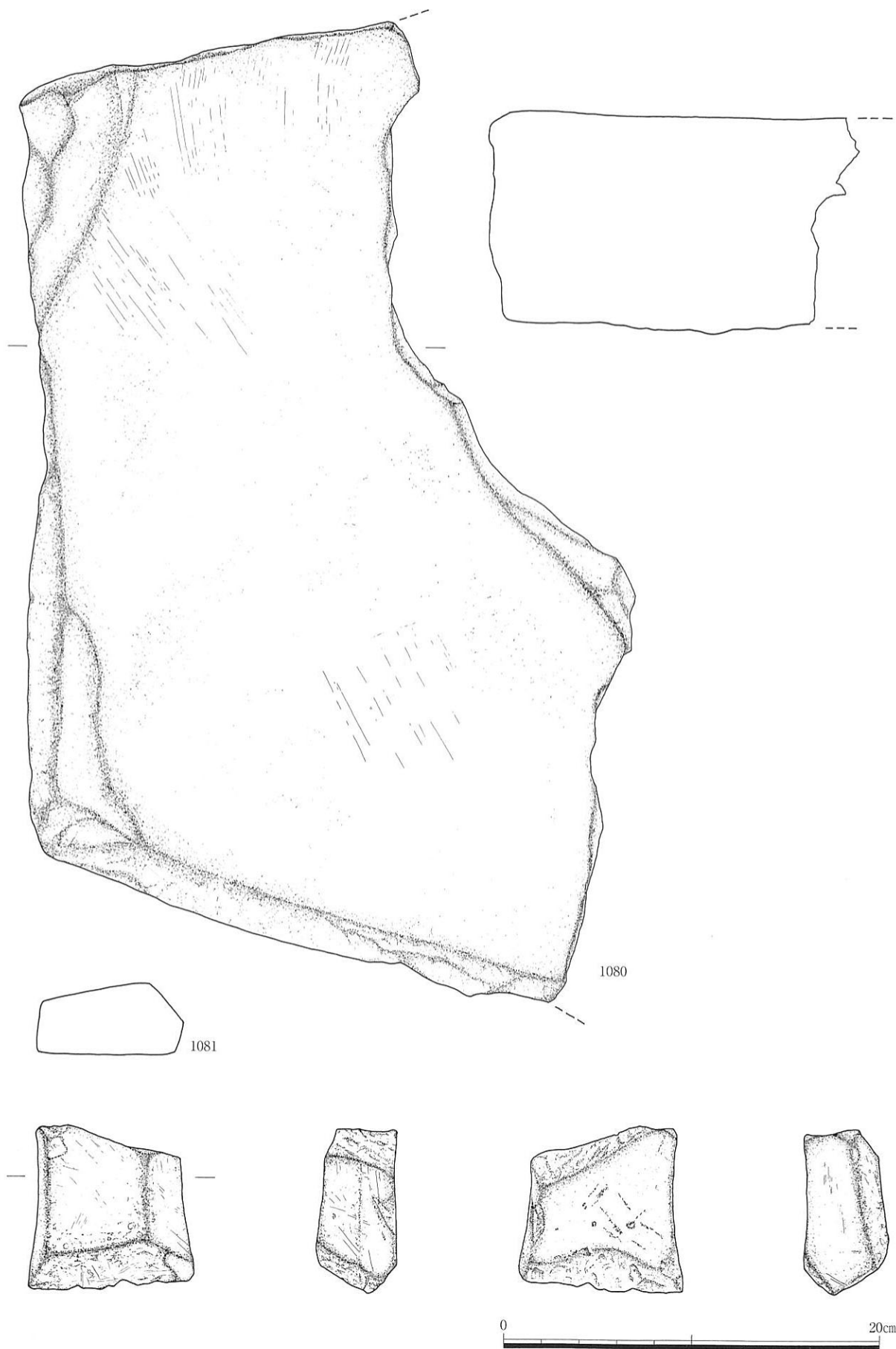


图111 第三面 川200・719 出土遺物 (45)

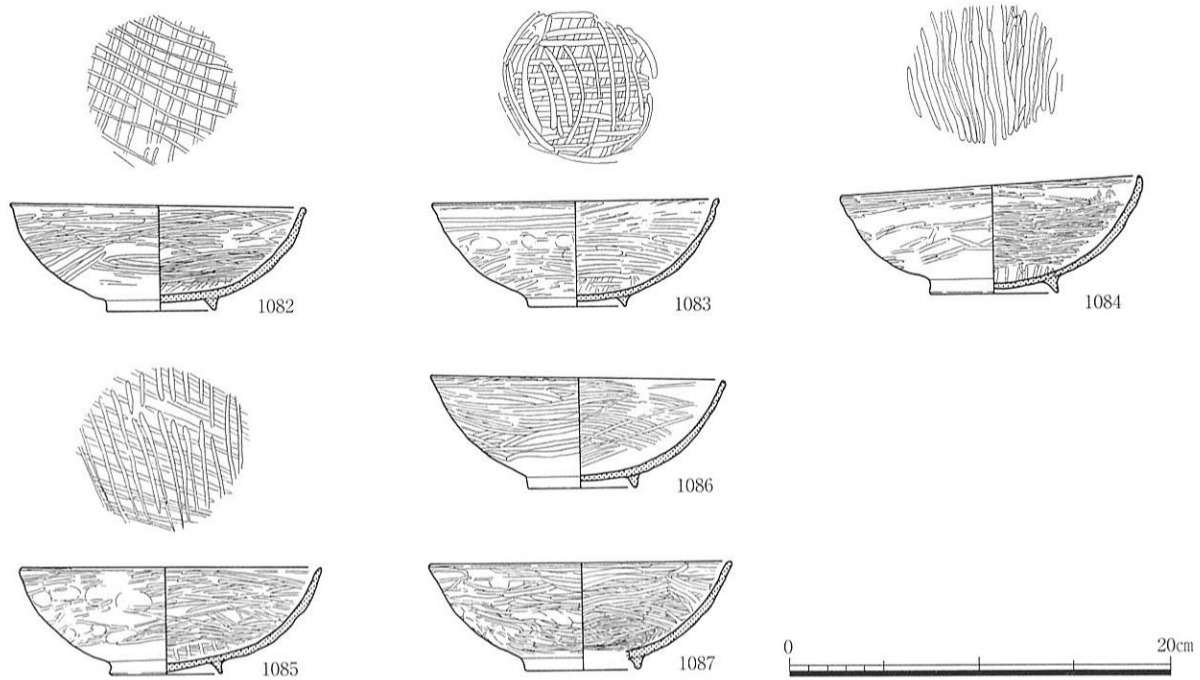


図112 第三面 川200・719 出土遺物(46)

格子状暗文を施す。外面ヘラミガキは指頭痕が目立つ。尾上編年Ⅱ-1期。(1090~1092)はいずれも器壁厚く、しっかりとした高台をもつ。(1090)の外面はヘラケズリ後密なヘラミガキを施す。(1091)は表面風化のため調整不明瞭であるが、外面のヘラミガキには分割性がある。(1092)は、外面に4~5分割のヘラミガキを、内面にも密なヘラミガキを加える。これらは尾上編年Ⅰ-2期の所産。(1093)は内外面とも剥離著しいが、安定した高台からみて、尾上編年Ⅰ-2~3期の所産か。黒色土器B類壺(1094)も剥離著しく調整は一切不明。体部は比較的直線的に立ち上がる。(1095)は内外面に密なヘラミガキを施すが、外面には指頭痕残り、ヘラミガキに分割性はない。尾上編年Ⅱ-1期か。(1096・1097)は、ともに外面にヘラケズリ後ヘラミガキを施す。遺存状態の良好な(1097)の内面には、密なヘラミガキが観察できる。ともに尾上編年Ⅰ-2~3期。(1098)の場合、外面にも密なヘラミガキを施すが指頭痕も残る。尾上編年Ⅰ-3期か。(1099~1102)は土師器壺。いずれも口縁部外面をヨコナデし、体部外面以下不調整で、内面ナデ調整を加える。(1100)は他の資料に比べ体部の凹凸著しい。(1102)は、粗雑ながら比較的しっかりとした高台がつく。佐藤編年Ⅱ期中~Ⅱ期新(10世紀前後)か。(1103)は土師器皿。他の褐色系壺・皿に比べ、胎土は白色を呈し緻密。(1104)は土師器台付鉢?片で、内外面とも風化ひどく調整不明。(1105)は土師器甕。口縁部~頸部はヨコナデ、それ以下は不調整。(1106)は5世紀代の須恵器甕。外面は平行タタキのち回転ナデを加える。内面は当て具痕をきれいにナデ消す。(1107)は須恵質焼成の甑の把手。4mm以下の白色砂粒を多量に含む。(1108)の胎土・焼成は(1107)のそれと極めて類似するが、おそらく土管ではないか。(1109)は鞆羽口片で、胎土にスサ混入。器表に落書にもみえる意味不明の線刻あり。(1110)は中心に2cm弱の円孔をもつ円板状土製品。片面にのみ刻み目を入れる。胎土は生駒西麓産である。

落込み217出土遺物(1111~1127) (1111~1113)は須恵器坏蓋。(1111)の口縁端部はわずかに窪む平面をもち、稜は短く鋭く突出する。天井部外面は自然釉付着。(1112)の口縁端部は内傾する凹面をもち、稜はそれほど突出しない。(1113)は口縁端部がわずかに内傾する平面をもち、稜は短く鋭く突出する。天井部外面は自然釉付着。これらはいずれも中村編年Ⅰ-2(田辺編年TK216)に属する。

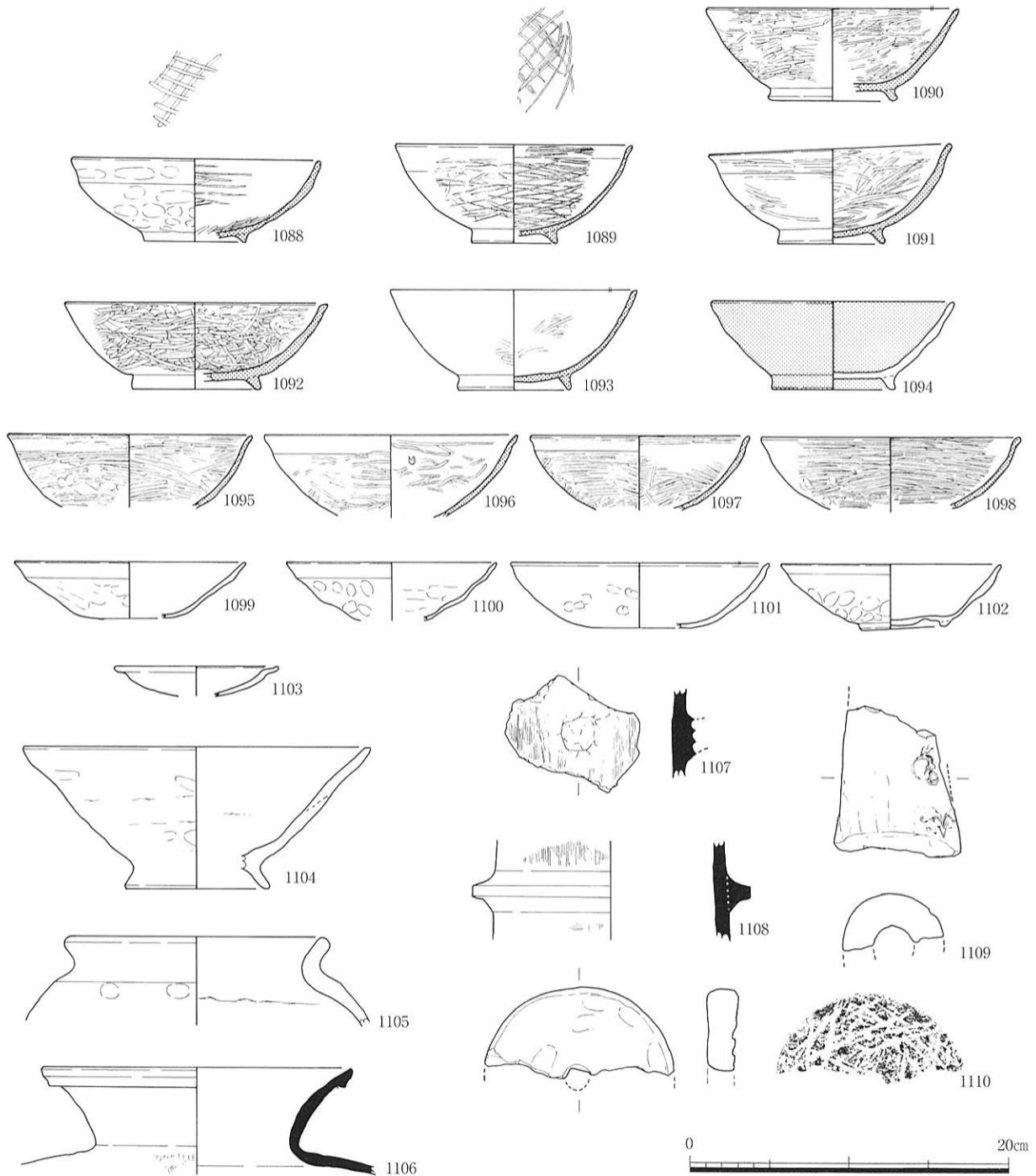


図113 第Ⅲ面 落込み341 出土遺物

坏 (1114) の口縁端部は内傾し、受部は短く上外方へのびる。底部は窪む。坏と考えられる (1115) は、口縁端部を丸くおさめ、受部は水平にのびる。体部は肉厚で、細かい単位でヘラケズリを施す。いずれも中村編年 I - 2 (田辺編年TK216) に属する。有蓋高坏 (1116) は、口縁端部を内傾気味に丸くおさめ、器壁は厚い。脚部はカキメを施し、4方向の円孔を穿孔する。中村編年 I - 2 (田辺編年TK216)。(1117) は須恵質土管片で、全貌は不明。口縁端部は回転ナデにより、やや外傾気味の平坦面をもち、内側に肥厚する。口径がやや広がる部位に、何かが剥離した跡がある。おそらく凸帯が巡っていたのだろう。外面下半は縦方向の粗いハケメで調整し、その後一部回転ナデを施す。内面は粘土接合痕が顕著に残る。(1118) は土師器大形有段高坏片で、口縁端部は外反する。内外面ともハケメ調整ののちヨコ

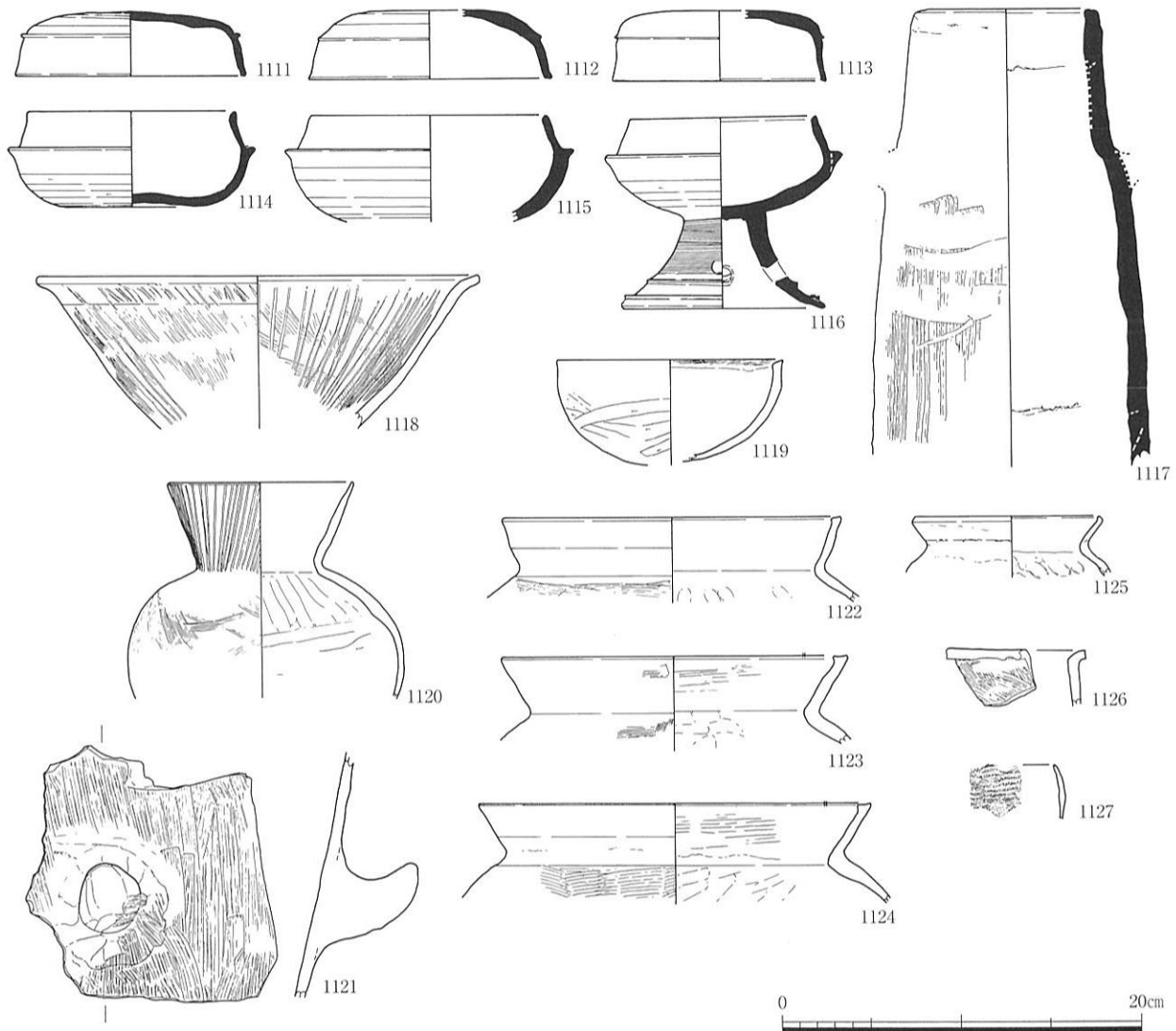


図114 第三面 落込み217 出土遺物

ナデを加えてハケメをほとんど消し、縦方向のヘラミガキを施す。土師器碗（1119）は、外面口縁端部をヨコナデ、体部下半より底部にかけてヘラケズリ、内面はナデ調整を加える。口縁端部は成形の最終段階にナデ調整し、ハケメを施す。内面に煤付着。土師器直口壺（1120）は口縁部内外面をヨコナデしたのち、外面にヘラミガキを施す。体部外面は細かいハケメ調整、体部内面上半は縦方向の指ナデ、下半はヘラケズリ調整する。（1121）は甌把手部分の破片。外面は把手接合後に縦方向のハケメを施す。（1122～1125）は土師器甕片。いずれも口縁端部・頸部をヨコナデし、（1122～1124）は体部外面に横方向のハケメ残る。体部内面はいずれもナデ調整。（1125）の内面には調整時に生じた粘土塊がそのまま付着しており、調整の粗雑さを示す。（1126）は甌口縁部片。内外面ともハケメ調整。（1127）は古墳時代の碗形製塩土器片。内面に貝殻条痕が残る。紀伊産。

落込み416出土遺物（1128～1397） 調査時は包含層（第0層）として掘られた。上層は初期須恵器を含み須恵器、土師器等がコンテナ27箱出土した。下層（第1層）は須恵器を含まず、布留式古相中心の土師器がコンテナ3箱出土した。上層の遺物の中には主に落込みの北端から出土した、7世紀ぐらいの新しい時期のものもある。出土遺物の紹介は、まず下層出土の遺物、上層出土の古墳中期の土師器・須恵器、そして新しい時期の須恵器の順で載せている。

土師器の形態分類は原田昌則氏の分類⁹⁾を参照させていただいて、図115・116のように分類した。

小形丸底土器はa～eに分類した。aは口径が最大腹径より大きく、調整は内外面横方向に細かいヘラミガキが施されている。原田編年布留Ⅱ～Ⅲ期と思われ、原田氏分類の小型壺B_{3or}B₄である。bは口径が最大腹径よりやや大きく、外面調整はハケで、内面調整はヘラケズリやナデである。原田編年布留Ⅳ期と思われ、原田氏分類のB₄である。cは、最大腹径が口径より大きく、口縁部高：体部高が1：2台のものが多く、外面調整はハケが多く、内面調整はヘラケズリ・ナデである。原田編年布留Ⅳ期と思われ、原田氏分類のB₅である。dはcと同じく最大腹径が口径より大きく、口縁部高：体部高は1：3台のものが多く、外面調整はハケとナデで、内面調整はナデが多い。原田編年布留Ⅴ期と思われ、原田氏分類のB₅である。eはやや大形で、口径と最大腹径がほぼ等しく、外面調整はハケ、内面調整もハケである。原田編年布留Ⅴ期と思われ、原田氏分類のB_{1-Ⅱ}である。他にミニチュア小形丸底土器がある。

壺は、小形壺、直口壺、広口壺、複合口縁壺a・bがある。小形壺は小形丸底土器cに分類してもよいと思われたが、口縁部が大きく外反するので小形壺とした。直口壺は球形の体部に上外方に伸びる口縁部をもつ。外面調整はハケ・ナデで、ヘラケズリが少しみられる。内面調整はヘラケズリが多い。原田編年布留Ⅳ期ぐらいと思われ、原田氏分類の直口壺Aの新しいものと判断した。広口壺は頸部が直上に伸びた後、口縁部が外反している。外面調整はハケ、内面調整はヘラケズリである。原田編年布留Ⅳ期ぐらいと思われ、原田氏分類の広口壺Dと判断した。複合口縁壺aは、頸部が外反してのびた後、有段の口縁部をもつ。山陰、北陸地方を中心に分布するとされている。時期は原田編年布留Ⅰ～Ⅳ期に入ると思われるが、(1184)は古相を示していると思われる。原田氏分類の複合口縁壺Dである。複合口縁壺bは、二段に屈曲して上方へ直線的に伸びる口縁部をもつ。外面調整はハケで、内面調整はナデである。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われ、原田氏分類の複合口縁壺E₂と判断した。

高坏はa～h₂に分類した。高坏aは鉢状の坏部に脚部がついたものである。恩智遺跡¹⁰⁾で同じようなものが出土している。原田編年布留Ⅲ～Ⅳ期と思われる。高坏bは庄内期の高坏から連続していると思われるもので坏底部と上外方にのびる口縁部の境に稜が若干残っている。外面調整はハケが一部残り、内面調整はハケ・ナデである。原田編年布留Ⅲ期と思われ、原田氏分類高坏A₅である。高坏cは、高坏bの前段階かもしれないが、脚部の形態が違うことからdとともに別分類とした。高坏cは、坏底部から口縁部が屈曲して直線的にのび、脚は太く大きくハの字に開いている。外面調整はハケ、内面調整は坏部がハケ、脚部がヘラケズリである。時期は原田編年布留Ⅲ期ぐらいに想定した。高坏dも深い坏部をもち、段をもって口縁部が上外方にのびている。外面調整は坏底部にヘラケズリが残るが、ナデで、内面調整はナデである。時期はcと同じ原田編年布留Ⅲ期ぐらいに想定した。高坏eは、高坏bでみられた稜が丸くなったものである。外面調整はハケ・ナデ、内面調整はナデが多い。原田編年布留Ⅳ期と思われ、原田氏分類のA₆である。高坏fは、半球形の坏部をもち、口縁端部が外反するものとしがないものがある。外面調整はナデが多く、内面調整もナデが多い。原田編年布留Ⅳ期と思われ、原田氏分類のA₇ある。高坏gは、坏部が碗形を呈しており、内面に縦方向のヘラミガキを施すg₂と施さないg₁がある。外面調整はハケ・ナデで、内面調整は坏部がナデで、脚部はヘラケズリ・ナデである。原田編年布留Ⅴ期と思われ、原田氏分類のA₈である。高坏hは大形で、坏底部から稜や段をもって口縁部が外反する。高坏gと同じく、縦方向のヘラミガキを施すh₂と施さないh₁がある。外面調整はハケ・ナデで、内面調整は坏部がハケ・ナデで、脚部がヘラケズリ・ハケである。時期は原田編年布留Ⅳ

期で、原田氏分類A₉である。

鉢はa～dに分類した。鉢aは口縁部が2段に屈曲する鉢で、大形である。外面調整はハケで、内面調整はヘラケズリである。原田編年布留Ⅱ～Ⅲ期と思われ、原田氏分類のI₂である。鉢bは口縁部が外反し、脚台が付く。内外面の調整はナデである。原田編年布留Ⅲ期ぐらいに想定した。鉢cは半球形の体部に直口の口縁部がつく小形の鉢である。内外面の調整はナデである。原田編年布留Ⅳ期ぐらいと思われ、原田氏分類のE₁である。鉢dは大形で口縁部が短く、外反する。外面調整はハケで、内面調整はハケ・ヘラケズリである。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と想定した。

鍋は口縁部が外反し、牛角状の把手をもつ。外面調整はナデで部分的にヘラケズリ、内面調整は板ナデである。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われる。

甌はa～cに分類した。甌aは平底で直口の口縁で、先端が面をもつ把手をもつ。外面調整はハケ、内面調整はナデである。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われる。甌bは丸底で口縁部はゆるやかに外反し、牛角状の把手をもつ。外面調整はハケ、内面調整はヘラケズリである。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われる。甌cは口縁端部が短く外へ屈曲する。内外面の調整はハケである。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われる。

甕はa～gに分類した。甕aはやや厚みをもった弥生つぼさの残る甕を一括した。外面調整はハケが多く、内面調整はヘラケズリ・ナデである。時期は一応庄内式末に想定した。甕bは布留式影響の庄内甕で、時期の違いでb₁・b₂に分類した。b₁は原田編年布留Ⅰ～Ⅱ期と思われ、原田氏分類の甕Dである。外面調整がハケ、内面調整はヘラケズリである。b₂は原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われ、外面調整がハケ、内面調整がハケ・ヘラケズリである。甕cはいわゆる布留式甕のように口縁端部が内に肥厚しない、布留式傾向甕である。時期の違いでc₁・c₂に分類した。c₁は原田編年布留Ⅰ～Ⅱ期と思われる。c₂は原田編年布留Ⅱ～Ⅲ期と思われる。c₂は後述する甕fに含まれるかもしれない。甕dはいわゆる布留式甕で時期の違いでd₁～d₃に分類した。d₁は、口縁端部が内側に丸く肥厚し、外面調整は上半部がヨコハケが多い。内面調整はヘラケズリである。原田編年布留Ⅰ～Ⅱ期と思われ、原田氏分類はF₁である。d₂は口縁端部は内面に肥厚し、内傾して面をもつ。外面調整はハケ・ナデで、内面調整はヘラケズリである。原田編年布留Ⅱ～Ⅲ期と思われ、原田氏分類F₂である。d₃は、胴長の体部に、口縁端部がしっかりと肥厚する。外面調整はハケで、内面調整はヘラケズリが多い。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われ、原田氏分類はF₃である。甕eは複合口縁の名残りと思える稜を口縁部にもつ。原田編年布留Ⅲ期ぐらいに想定しておく。原田氏分類は甕Kである。甕fは口縁端部が肥厚せず直口のもので、最大腹径が体部の中央にあるものや、上半にあるもの、下半にあるものとバリエーションがある。外面調整はハケが多く、内面調整はヘラケズリ・ナデ・ハケである。原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期と思われ、原田氏分類の甕Gである。甕gは小形で、6Cの甕に続くような形態をもつ。外面調整はハケで、内面調整はヘラケズリ・ナデである。原田編年布留Ⅴ期以降と思われる。

以上が土師器の形態分類の説明であるが、どのように個々を分類したかは表25を参照願いたい。

次に、初期須恵器に関しては、中村編年Ⅰ-1より古い須恵器を生産したと思われる大庭寺窯跡(TG232号窯)、陶邑窯跡群(ON231号窯)等が発掘され、その内容が明らかにされている。『野々井西遺跡・ON231号窯跡¹¹⁾』のまとめで述べられている要素から、ここではTG232号窯→ON231号窯→中村編年Ⅰ-1の順で、新しいと認識して時期判断をしている。

さて、落込み416(下層)から出土した遺物を口縁が1/6以上残存しているものを抽出して数えて

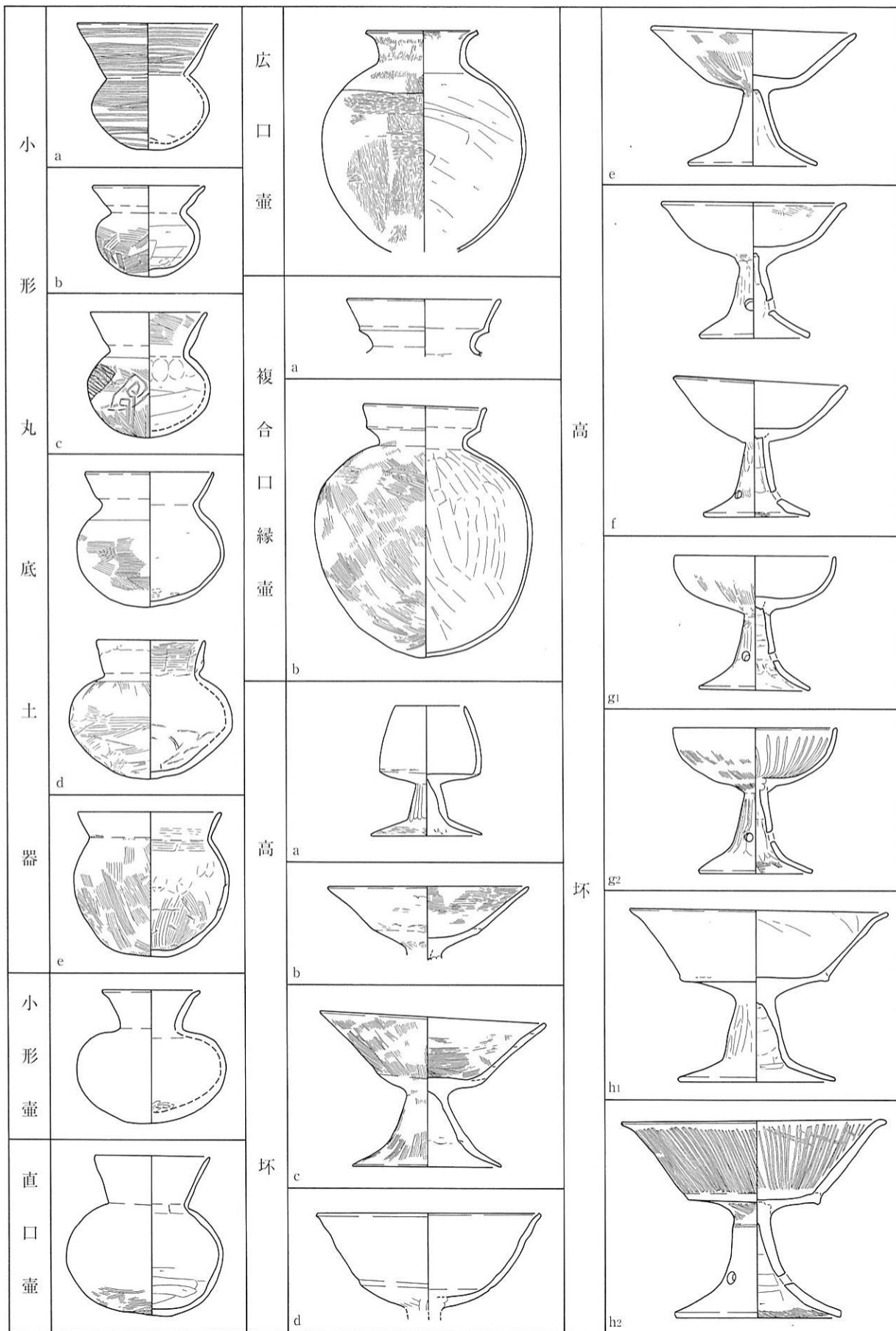


図115 第三面 落込み416出土 土師器の形態分類 (1)

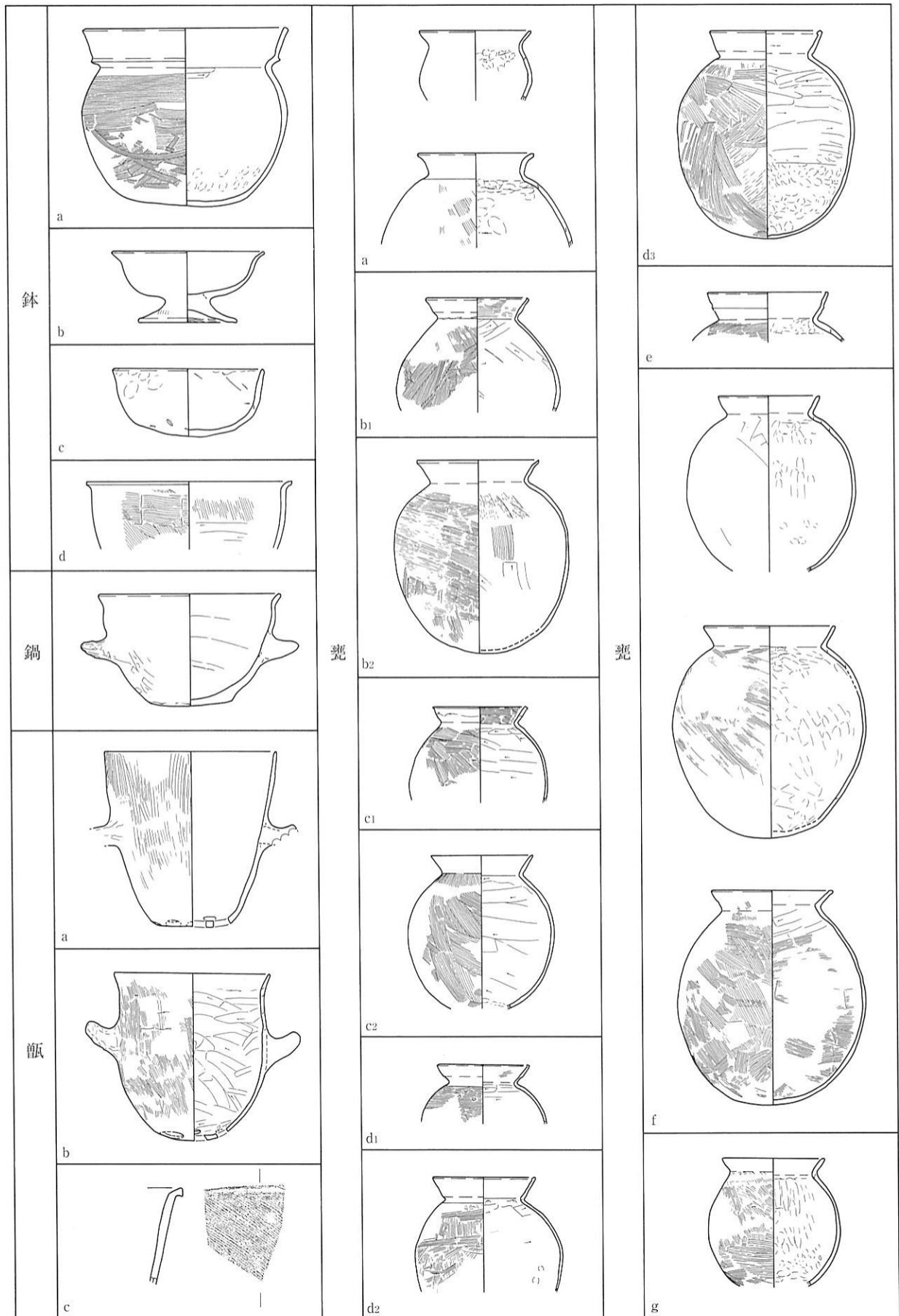


図116 第三面 落込み416出土 土師器の形態分類 (2)

みると、土師器が28点である。内訳は小形丸底土器4点、複合口縁壺1点、高坏3点、甕20点である。甕の中には庄内式甕1点を含んでいる。時期をみると、小形丸底土器と高坏が原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期のものがほとんどであるが、甕は原田編年布留Ⅰ～Ⅲ期のものである。

下層の遺物の中で特筆すべきは(1129)の小形丸底土器で、腹部に絵画文が一周描かれている。何をモチーフにしているかは不明である。甕(1137・1138)の肩に刺突の記号文が、(1146)には波状文の一部が施されており、布留式古相の要素をもつ。

落込み416(上層)からは、土師器157点、須恵器62点が出土し、それぞれが71.7%、28.3%を占める。

土師器の器種と時期構成は表2に示した。器種構成は甕が約4割、高坏が約3割、小形丸底土器が約1.5割を占める。時期構成は、布留Ⅳ～Ⅴ期が約8割弱を占める。器種毎に若干の説明をしたい。

土師器小形丸底土器は、b～eがあり、c・dが多い。c・dの平均口径は8.1cmである。ミニチュアの小型丸底土器も胴部だけのものも含めると3点出土している。壺は、小形壺、直口壺、広口壺、複合口縁壺a・bが出土している。高坏はa～h₂があり、g₁とg₂が約5割近くを占め、f、h₁・₂がそれぞれ1割強を占める。平均口径はfが16cm前後、g₁が14cm前後、g₂が13cm台である。鉢はa～dがあり、他の器種が原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期の占める割合が多い中で、鉢は原田編年布留Ⅱ～Ⅲ期と思われるaが半分を占める。cとして形態分類していないが、実測していないものに原田編年布留Ⅴ期と思われる口縁部が小さく屈曲する原田氏分類のE₂も1点出土している。形態分類するとすればcがc₁になり、原田氏分類のE₂をc₂としたい。鍋、甌は、図に載せた以外、底部片数点と把手片が十数点出土している。把手は牛角状のもの、その上に切り込みのあるもの、舌状のもの等がある。

甕は、a、b₂、c₁・₂、d₁・₂・₃、f、gがある。fが4割弱、a・d₂がそれぞれ1.5割を占める。下層でも他の器種より古い時期を示したが、ここでも他の器種は原田編年布留Ⅳ～Ⅴ期のものが8割強を示しているのに対して、甕は原田編年庄内末～布留Ⅲ期のものが4割強を占める。平均口径はfが15cm台、aが14cm台、d₂が15cm台である。

(1314～1316)は韓式系軟質土器と思われるもので、(1314)は外面に格子タタキ、(1315)は圏線と思われるのがみえ、(1316)は鍋で縄文タタキを施している。(1316)は陶質である。

次に須恵器について述べたい。須恵器の器種構成、時期構成は表3に示した。TG232号窯ぐらいのものとON231号窯ぐらいのものと中村編年Ⅰ-1と思われるものを初期須恵器として一括すると、初期須恵器が3.5割強を占め、次いで、中村編年Ⅰ-3と思われるものが3.5割強を占める。器種としては蓋、坏、高坏、碗、甌、壺、鉢、器台、甕、甌などが出土している。器種構成は高坏が約2.5割、蓋が約2.5割、甕、坏がそれぞれ約1.5割強を占める。

特筆すべきは、(1381)の内底面に絞り目のある甕が全体を把えられる状態で出土したことである。絞り目のある甕は堺市大庭寺窯跡(TG232号窯)、高松市三谷三郎池西岸窯跡、福岡県三輪町山隈窯跡の特徴とされている。

蓋(1317～1320)には刺突文が施されている。中村編年Ⅰ-3の坏蓋は口径12cm台で砂粒の動きは←である。(1329)はヘラ記号が施されている。

中村編年Ⅰ-3の坏は口径10～11cm台で、砂粒の動きは←が多い。(1335)は外底部にヘラ記号が施されている。

高坏は中村編年Ⅰ-2～3と思われるものが多い。壺(1368・1369)は土師器の複合口縁壺を模したものである。鉢(1372)の内底面には当て具痕が少し残っている。甕(1378)は縄文タタキを施して

表2 第三面 落込み416(上層)出土土師器構成

(口縁1/6以上残存のみ)(+実測していないもの)

器種	時期	庄内末~布留 I・II	布留 II ~ III	布留 IV ~ V	計	
小形丸底土器				20(+2)	20(+2)	16.3% (14.0%)
壺	(I?)1			6	7	5.7% (4.5%)
ミニチュア小形丸底土器				1	1	0.8% (0.6%)
高坏			5	33(+9)	38(+9)	30.9% (29.9%)
鉢			4	3(+1)	7(+1)	5.7% (5.1%)
鍋				1	1	0.8% (0.6%)
甌				2	2	1.6% (1.3%)
甕		11(+6)	9(+8)	27(+8)	47(+22)	38.2% (44.0%)
計		12(+6) 9.8%(11.5%)	18(+8) 14.6%(16.6%)	93(+20) 75.6%(72.0%)	123(+34) 100%(100.1)%	100% (100%)

表3 第三面 落込み416(上層)出土須恵器構成

(口縁1/6以上残存のみ)(+実測していないもの)

器種	時期	TG232	ON231	I-1	I-2	I-3	I-4	II-1	II-2	II-6	III-1	III-2	?	計	
蓋		2	1	(+1)	1(+1)	5(+2)		(+1)		2				11(+5)	23.4% (25.8%)
坏			(+1)	1		5(+1)	(+1)		(+1)	1	1	(+1)		8(+5)	17.0% (21.0%)
高坏		1	2	1(+1)	4(+1)	4	1							13(+2)	27.7% (24.2%)
碗			2											2	4.3% (3.2%)
甌				1										1	2.1% (1.6%)
壺		2	(+1)			(+1)								2(+2)	4.3% (6.5%)
鉢			1											1	2.1% (1.6%)
甕		3(+1)				4	1							8(+1)	17.0% (14.5%)
甌													1	1	2.1% (1.6%)
計		8(+1) 17.0% (14.5%)	6(+2) 12.8% (12.9%)	3(+2) 6.4% (8.1%)	5(+2) 10.6% (11.3%)	18(+4) 38.3% (35.5%)	2(+1) 4.3% (4.8%)	(+1) (1.6%)	(+1) (1.6%)	3 6.4% (4.8%)	1 2.1% (1.6%)	(+1) (1.6%)	1 2.1% (1.6%)	47(+15) 100% (99.9%)	100% (100%)

いる。(1379)の内面に一部分布目痕が残存している。(1388)は甌とした。外面は平行タタキを格子状に施している。

土錘(1394~1397)が4点出土した。すべて管状である。重さは210~290gである。

以上概説して来たように、須恵器からみるとTG232号窯ぐらいのものから中村編年I-4のもの、さらに部分的に中村編年II型式末~III型式初めのものを含んでいる。そのため、初期須恵器と土師器のセットを明確に示せないが、一資料として参照していただければ幸いである。

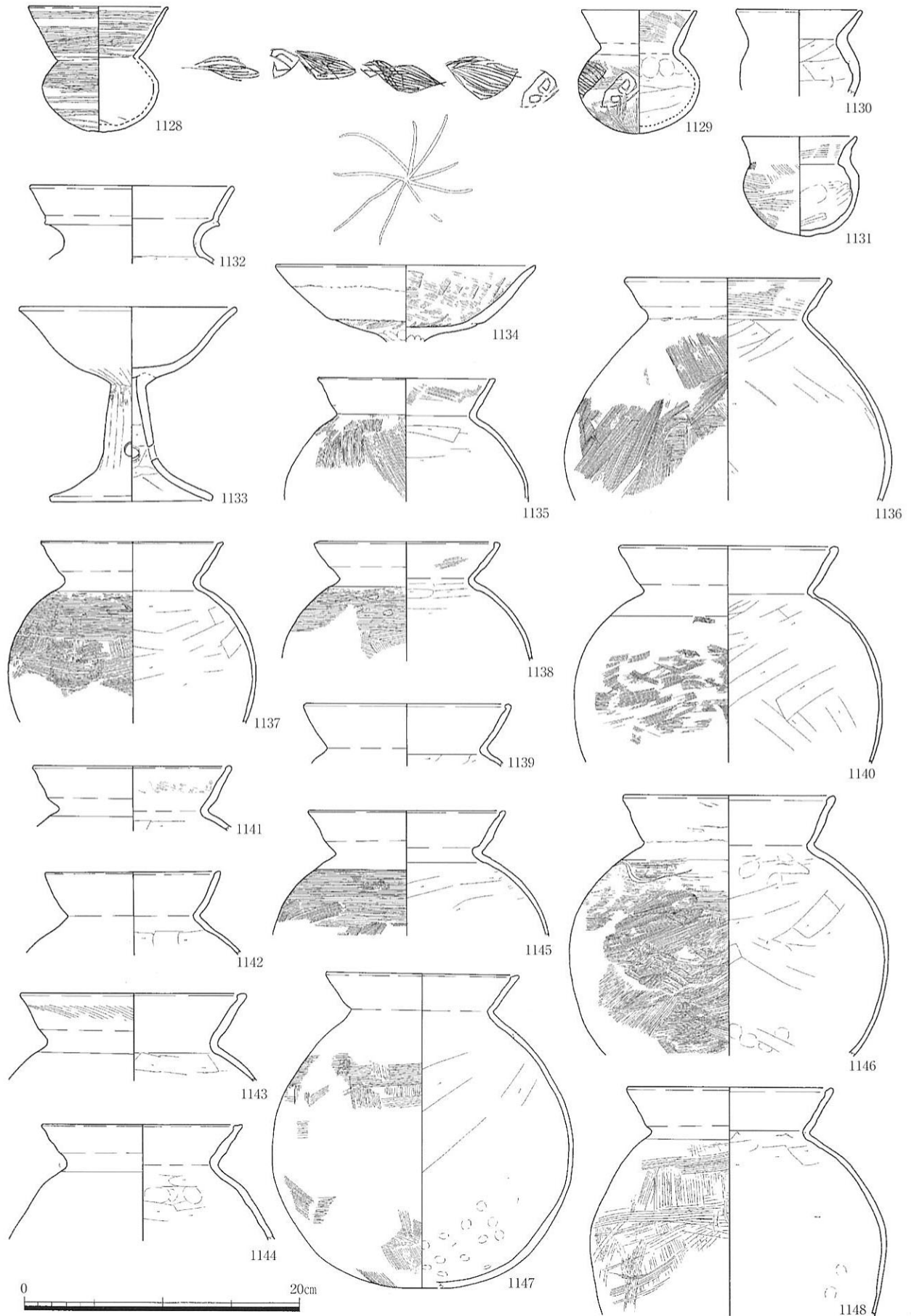


图117 第三面 落込み416 出土遺物 (1)

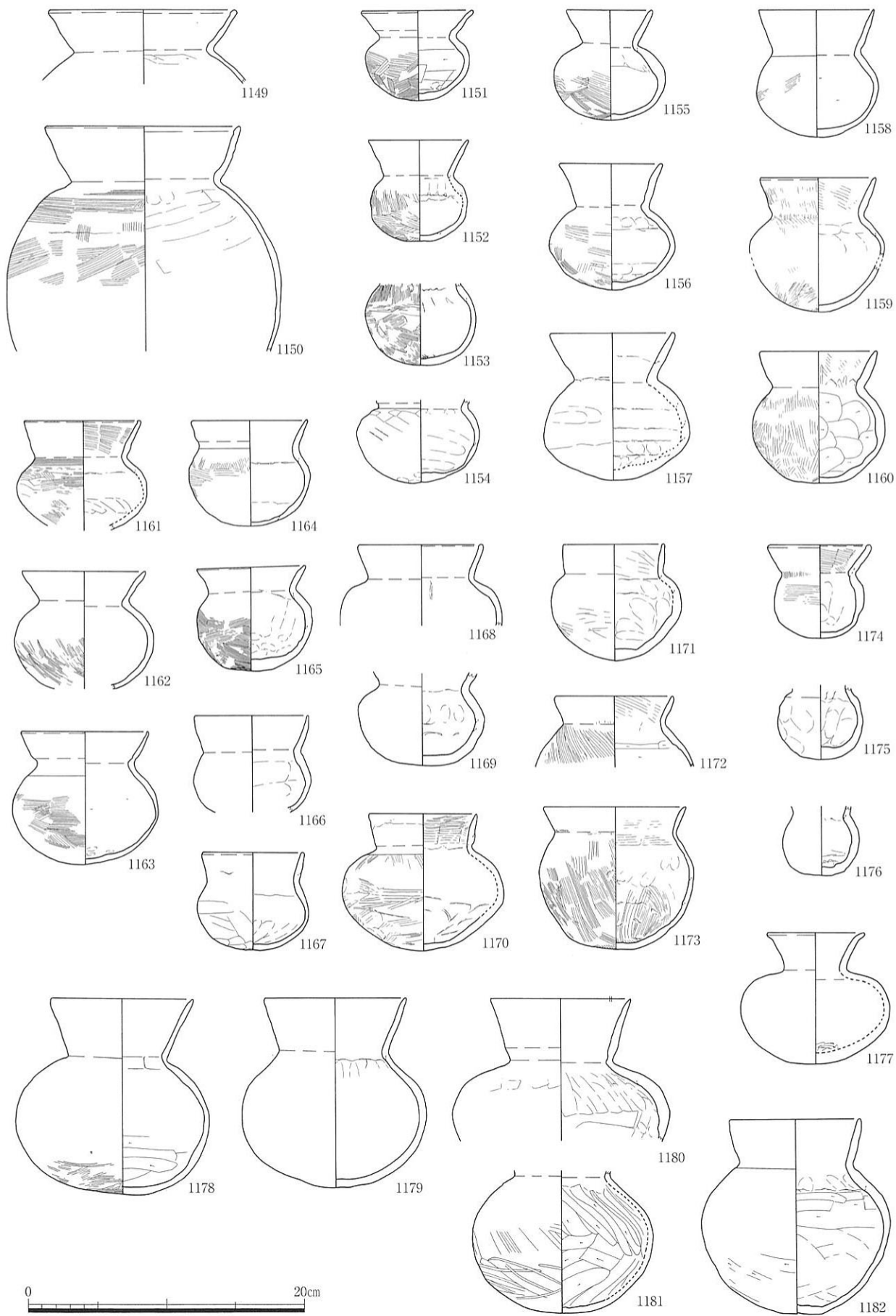


图118 第三面 落込み416 出土遗物 (2)

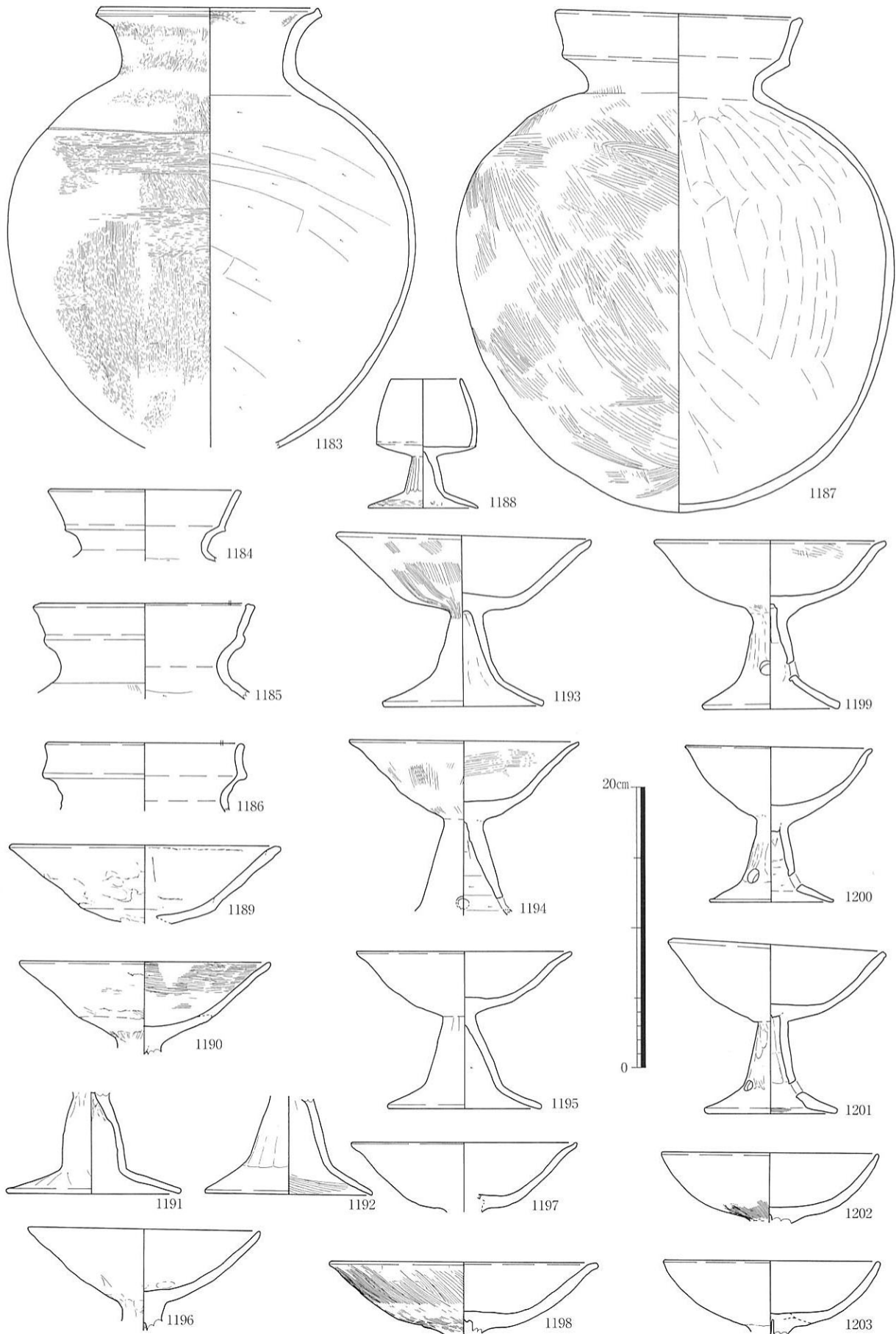


图119 第三面 落込み416 出土遺物 (3)

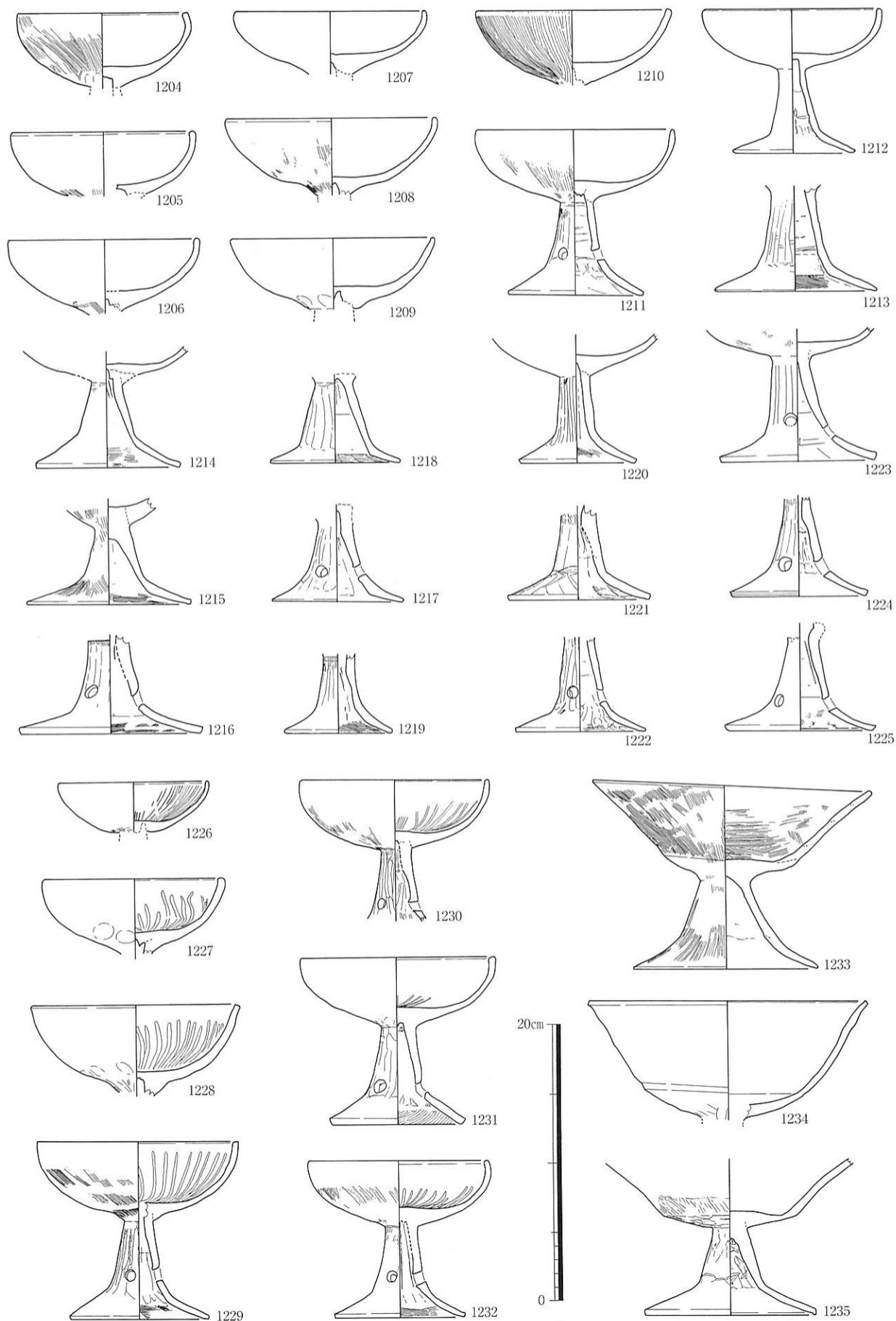


图120 第三面 落込み416 出土遺物 (4)

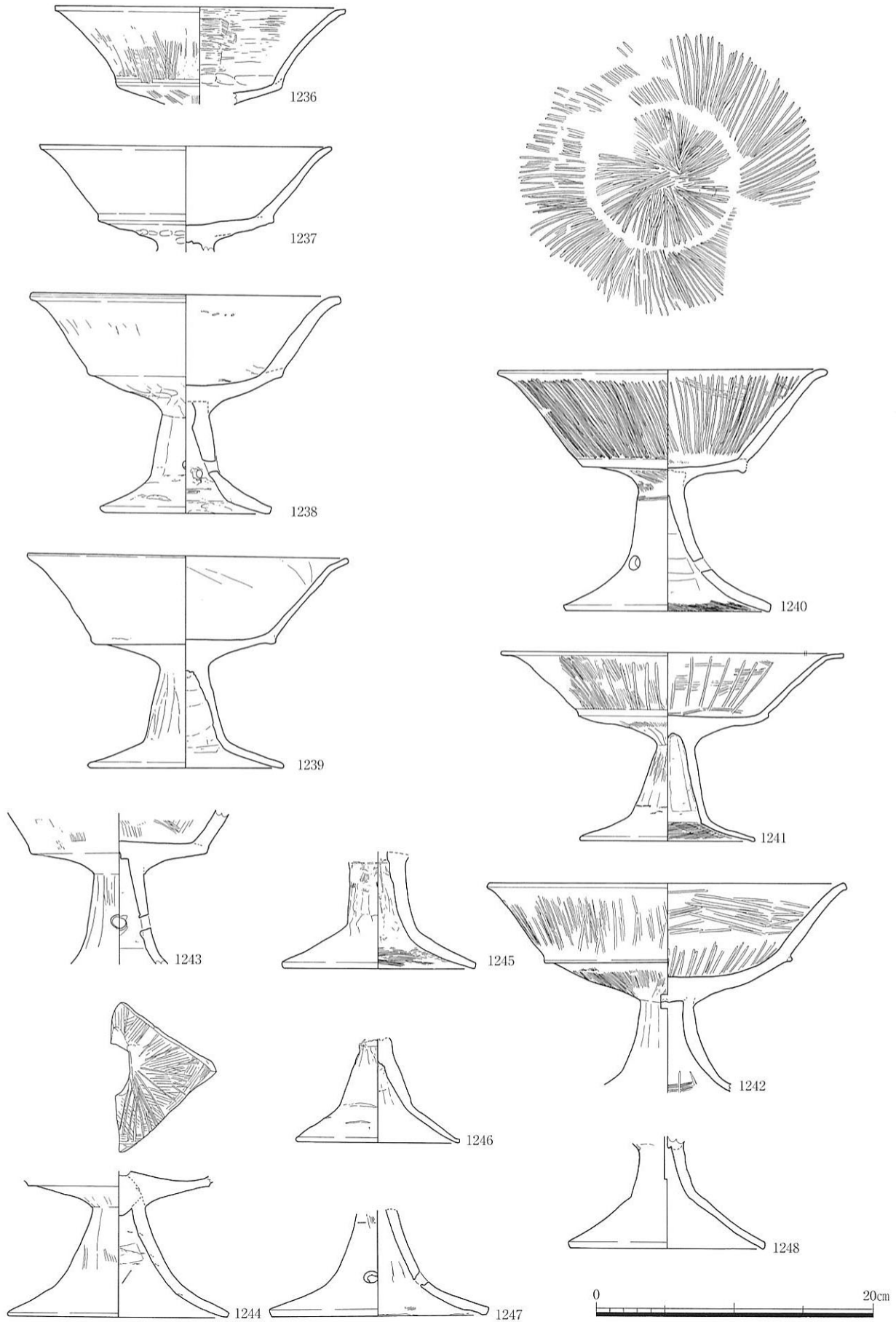


图121 第三面 落込み416 出土遺物 (5)

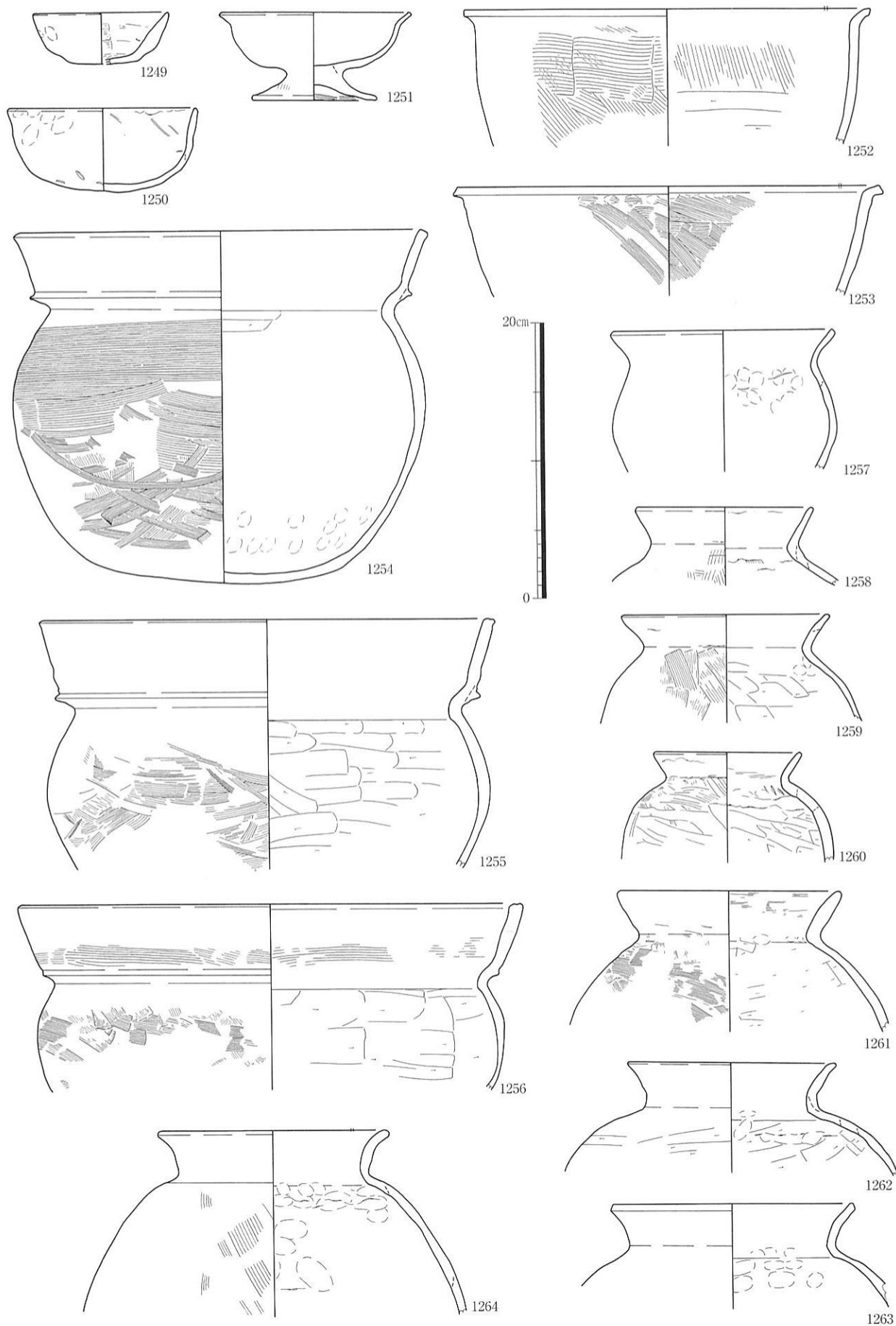


图122 第三面 落込み416 出土遺物 (6)

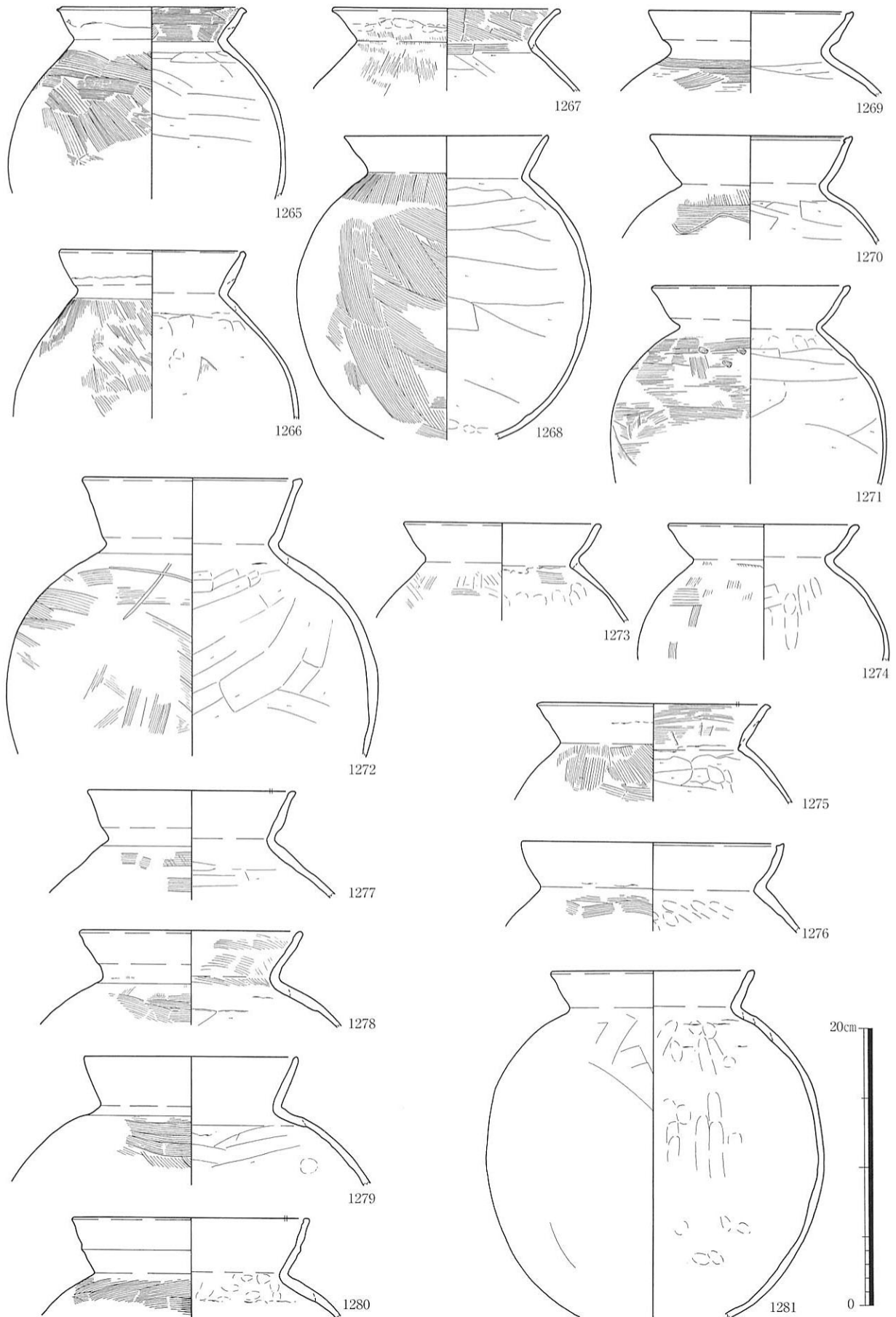


图123 第三面 落込み416 出土遺物 (7)

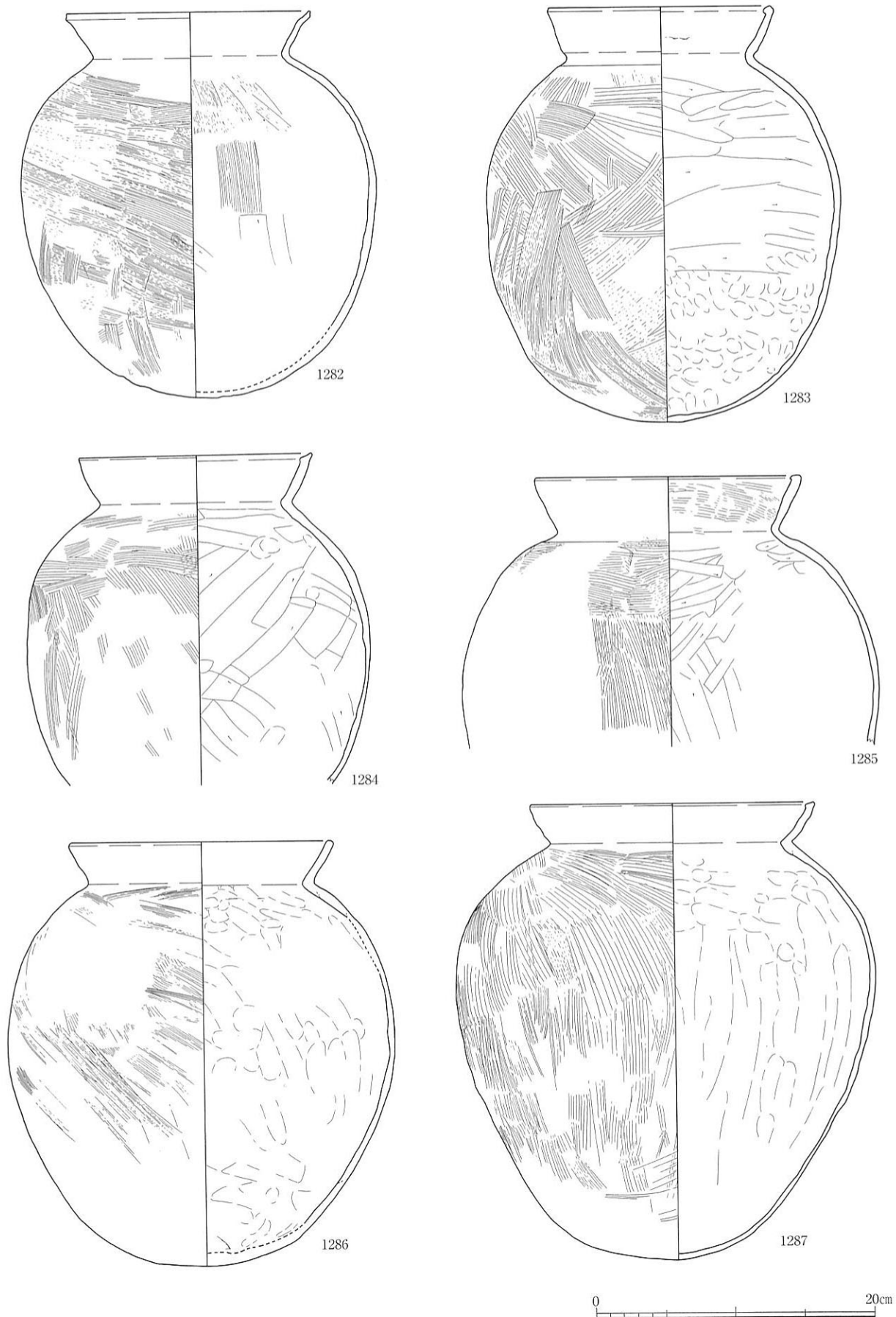


图124 第三面 落込み416 出土遺物 (8)

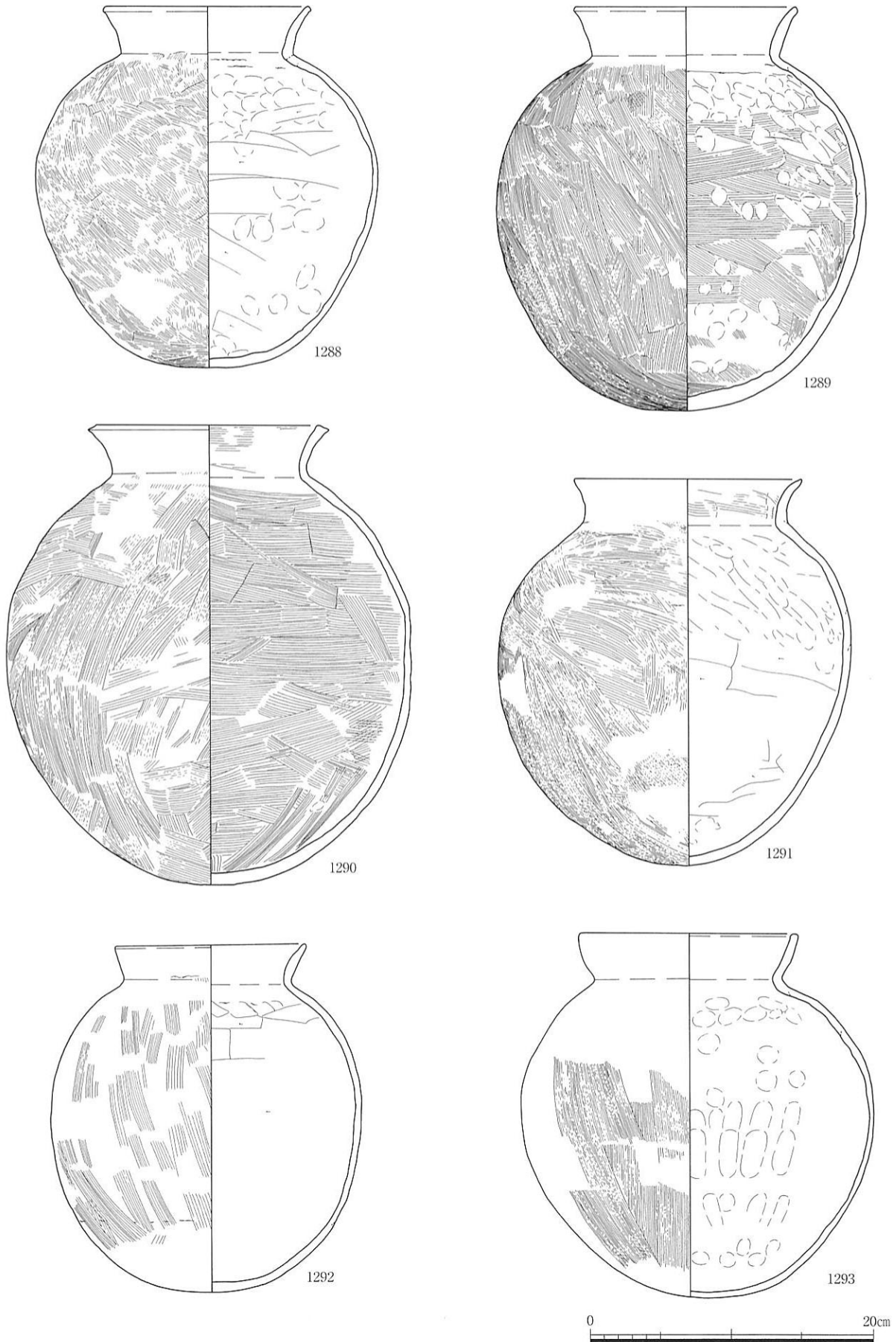


图125 第三面 落込み416 出土遺物 (9)

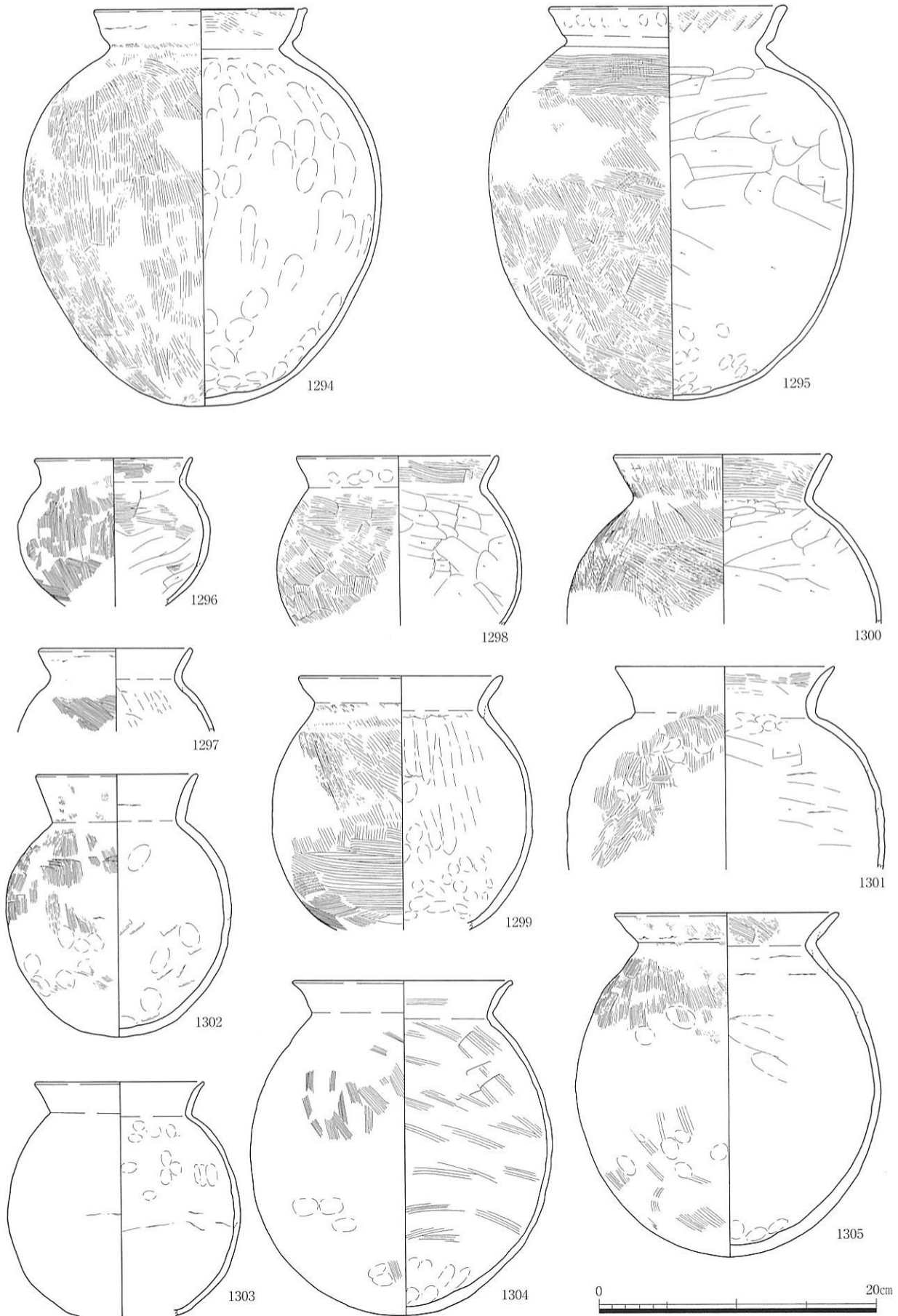


图126 第三面 落込み416 出土遺物 (10)

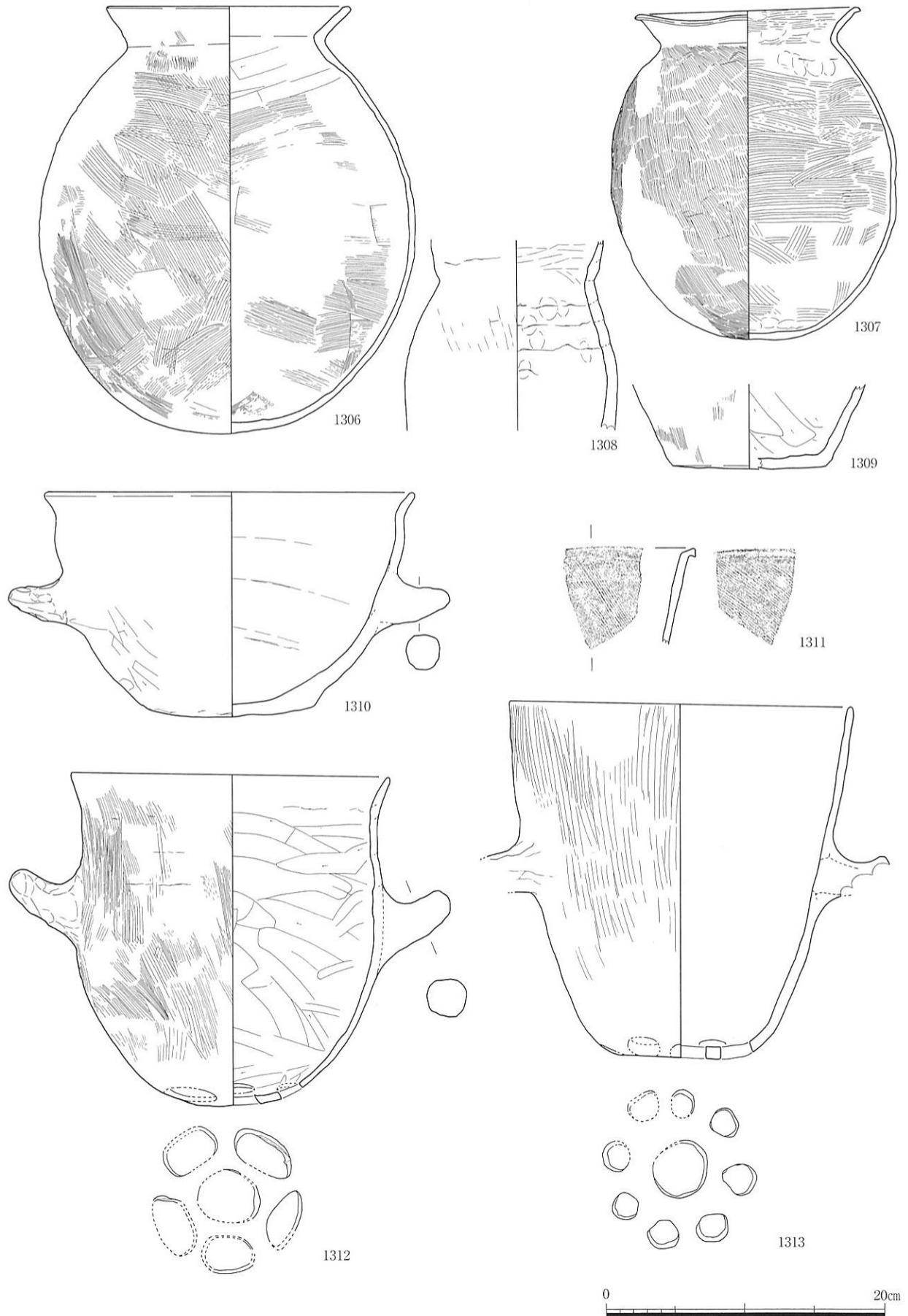


図127 第三面 落込み416 出土遺物 (11)

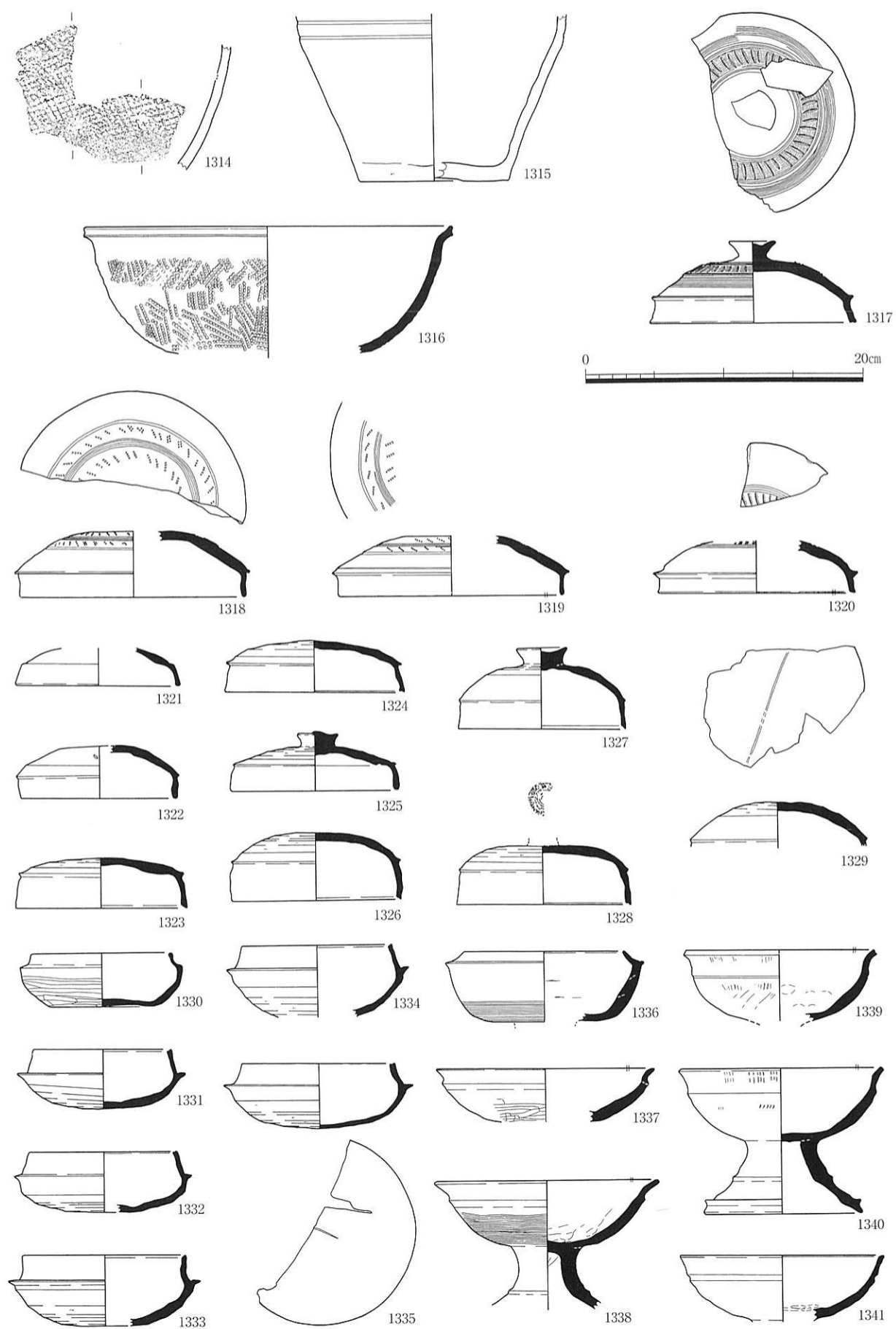


图128 第三面 落込み416 出土遺物 (12)

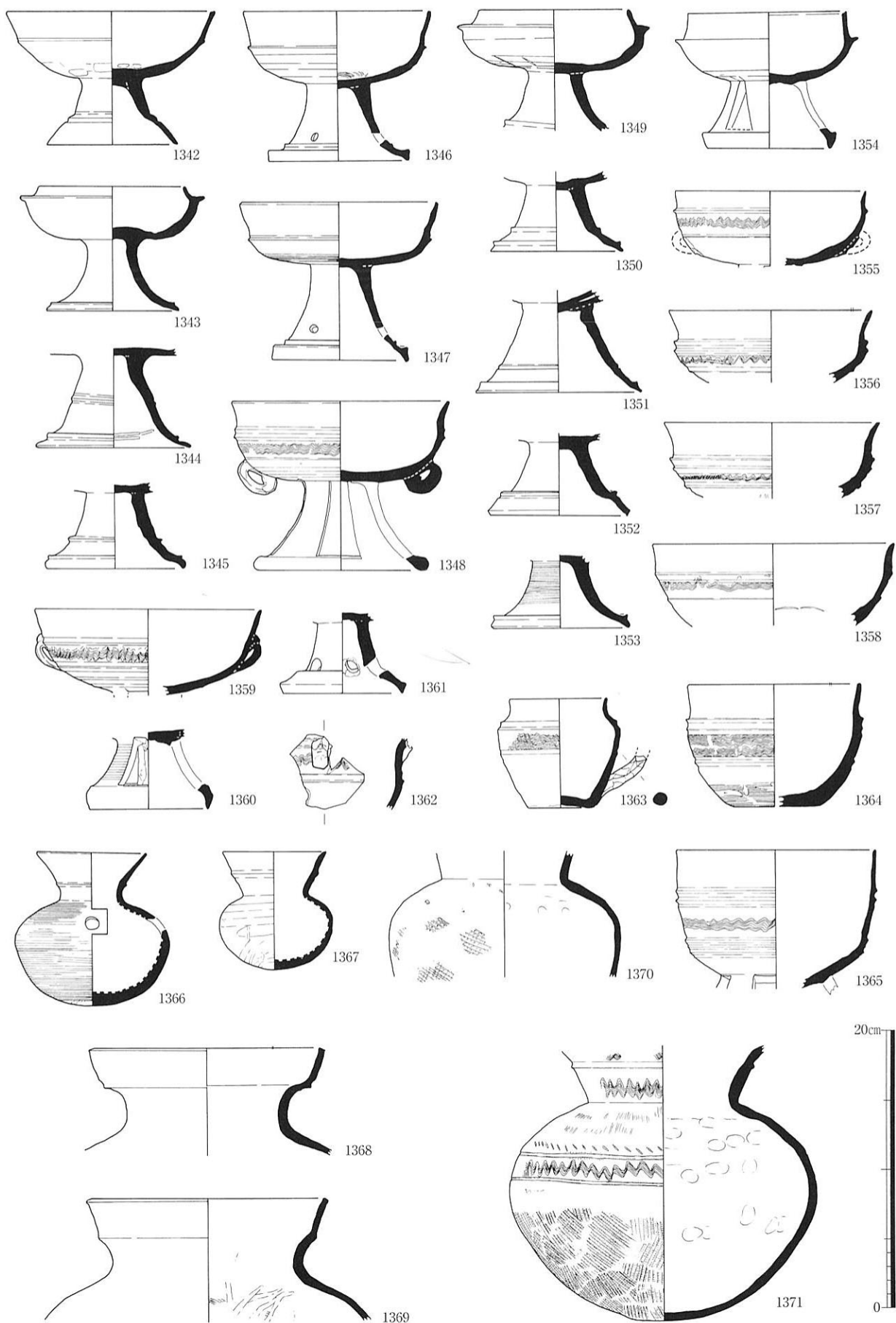


图129 第三面 落込み416 出土遺物 (13)

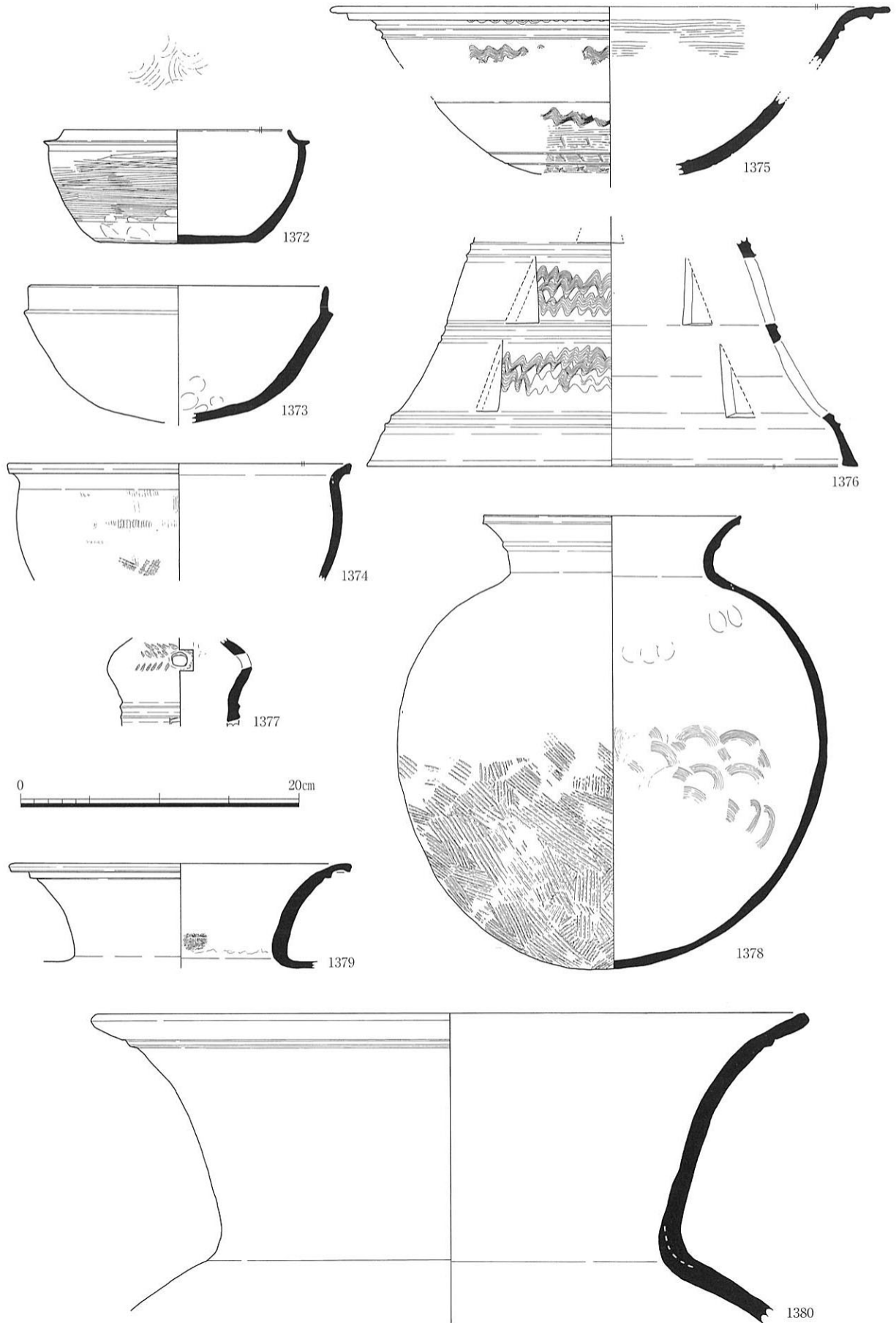


图130 第三面 落込み416 出土遺物 (14)

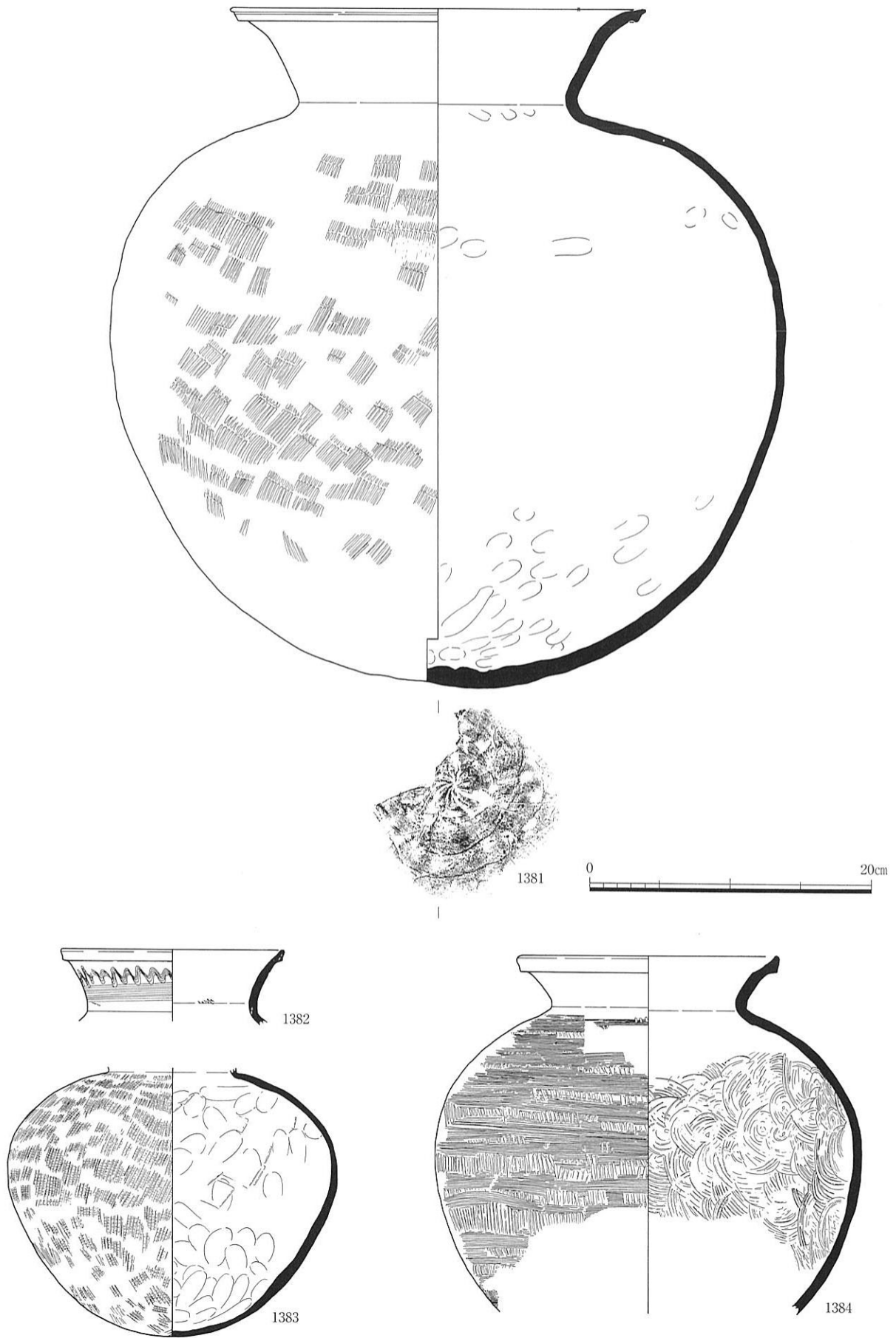


图131 第三面 落込み416 出土遺物 (15)

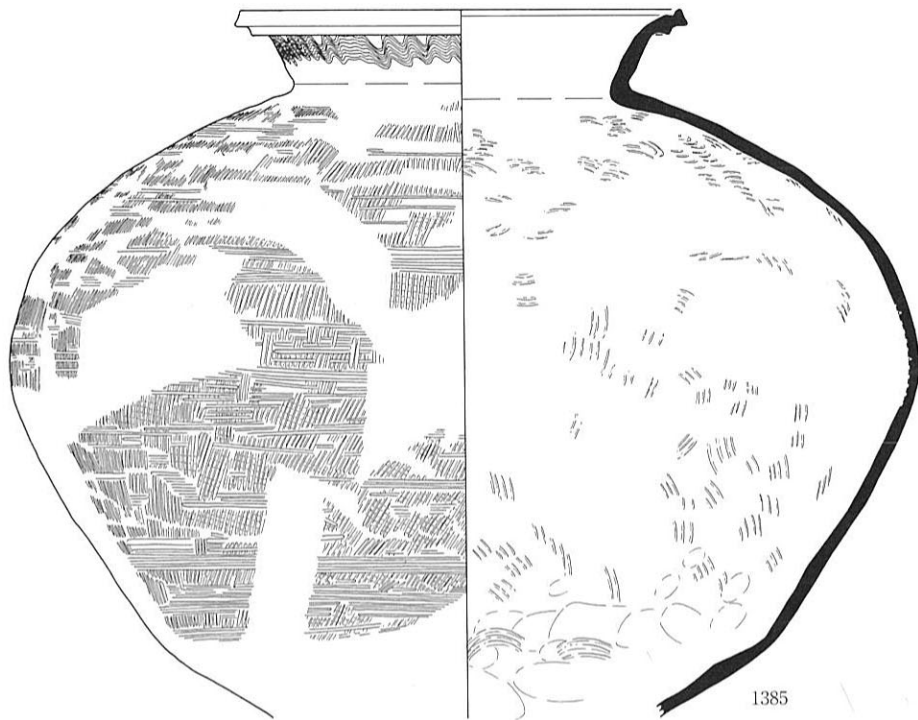


图132 第三面 落込み416 出土遺物 (16)

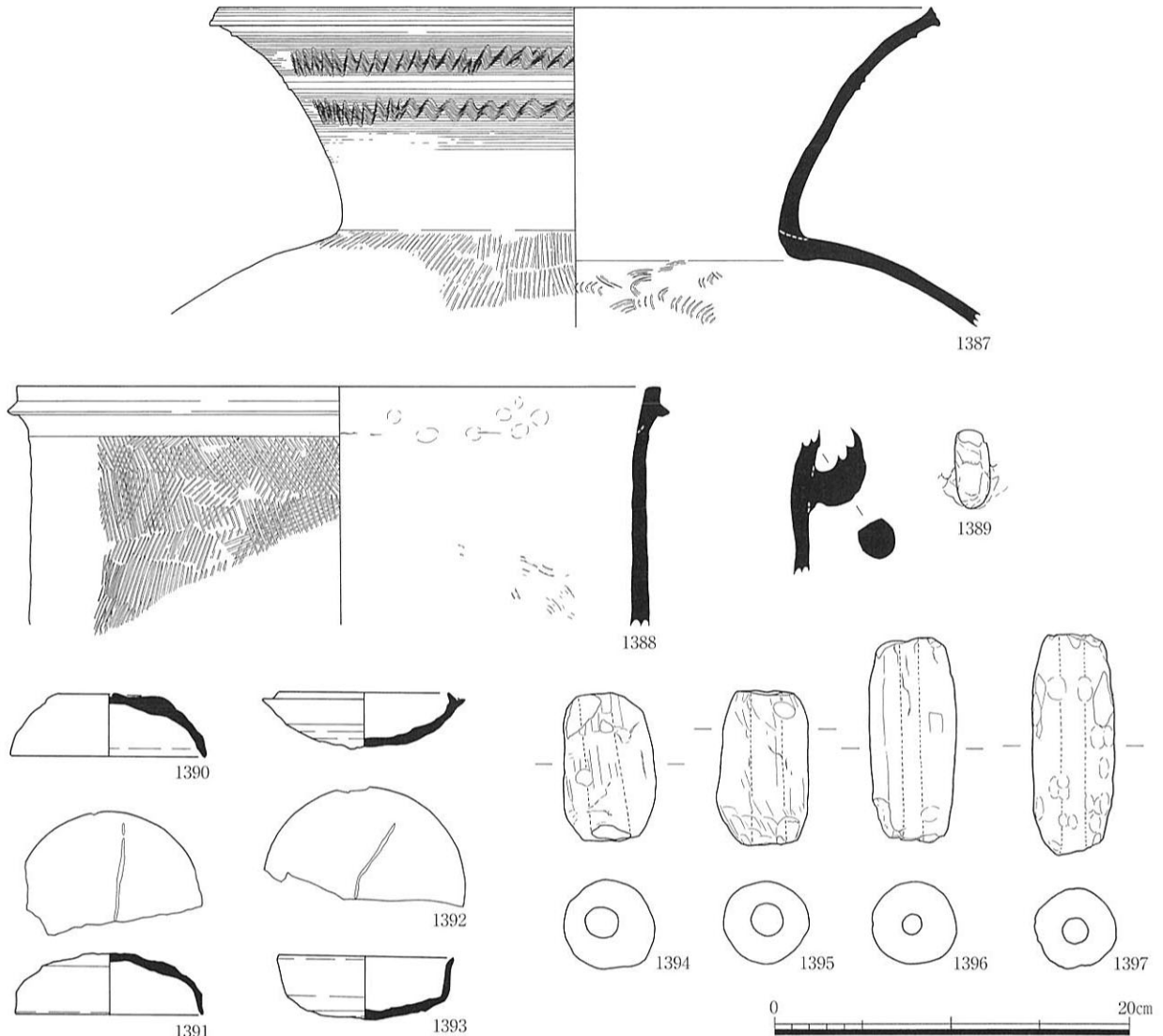


図133 第三面 落込み416 出土遺物 (17)

第IV面遺構出土遺物

溝309出土遺物 (1398) 土師器直口壺。口縁端部が内側に肥厚し、口縁端部・頸部外面にヨコナデを加え、肩部にヨコハケを施す点、さらに球形の体部は、布留式甕に共通する。体部外面上半には付着物著しく調整不明瞭。同内面は一部にハケメ調整を、他はヘラケズリを施す。原田編年布留I期。

土坑284出土遺物 (1399) 須恵器器台脚端部片。外面の凸帯間には3回にわたって施文された波状文があり、長方形透かしを穿孔する。この透かしの1つには焼成前に打ち欠いた部分がある。外面の一部には自然釉が付着する。

土坑100出土遺物 (1400~1403) (1400・1401)は土師器高坏片。(1400)の坏部内面にはヘラミガキを施し、同外面上半はヨコナデ、緩やかな稜以下はハケメが残る。脚柱部外面はかろうじてヘラナデが残り、同内面は絞り目がみえる。坏部・脚部とも粘土の継ぎ目付近で剥離する。(1401)は脚柱部片。外面にヘラナデがかろうじて残り、内面はヘラケズリを施す。(1402・1403)は布留式甕。ともに口縁端部・頸部をヨコナデし、体部内面はヘラケズリを施す。しかし(1402)は肩部にヨコハケが残るものの、胎土に多量の砂粒を含み、器壁に微妙な凹凸があること、(1403)は肩部のヨコハケが崩れ、焼成があまい。(1403)は体部中位に煤付着。

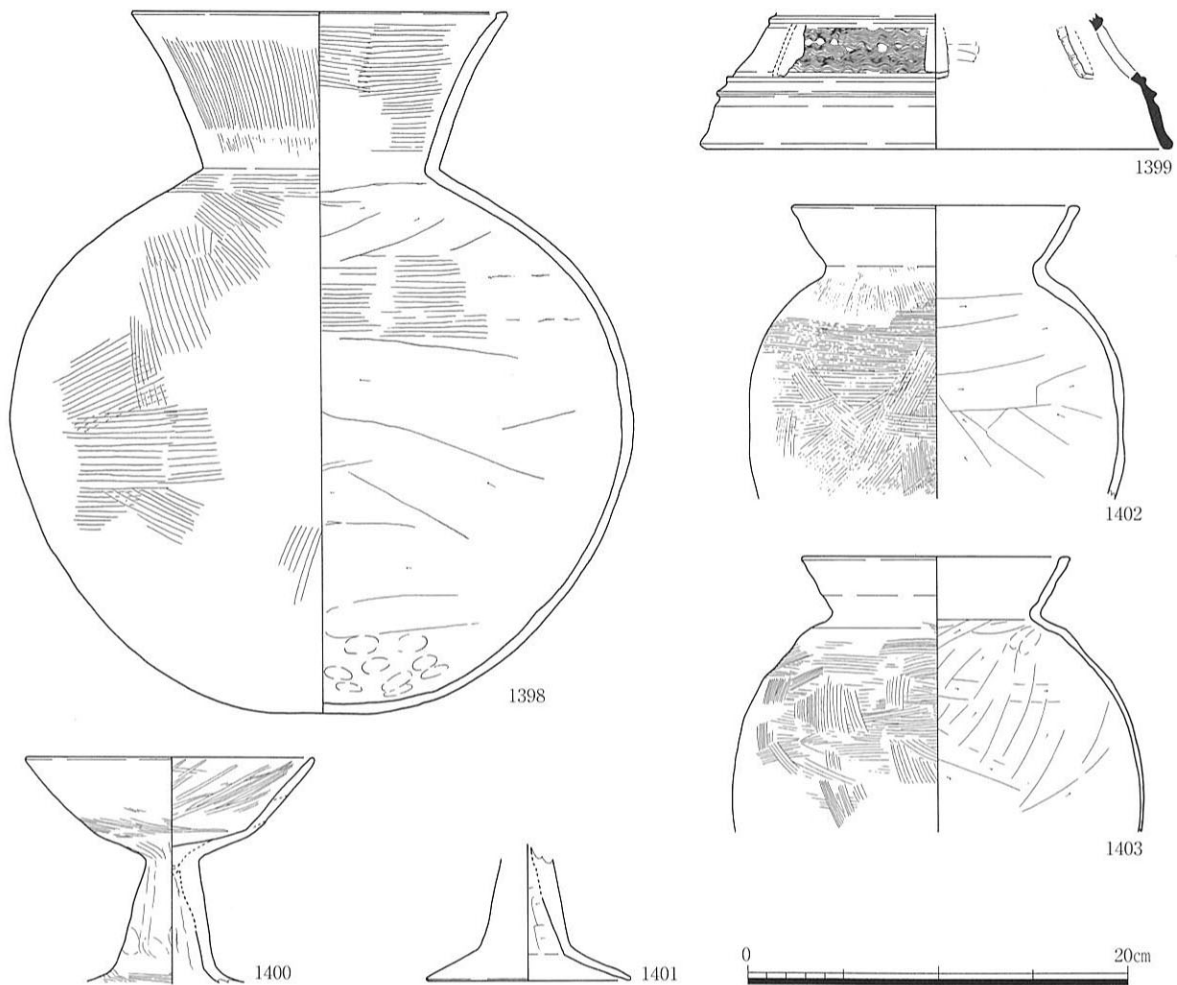


図134 第IV面 溝309, 土坑284・100 出土遺物

落込み310出土遺物 (1404~1429) (1404~1406)は土師器複合口縁壺片。(1404)は口縁端部を打ち欠く。体部上半には右上がりのハケメが残り、内面は頸部直下よりヘラケズリを施す。(1405)は口縁端部の外反度が最も強い。口縁部内面はわずかにヘラミガキが残り、淡黒色の付着物がある。体部内面はヘラケズリ、同外面は受部以下に縦方向の、体部上半に横方向の細かいハケメを施す。(1406)は全体的に摩耗著しいが、肩部に列点文を施文し、体部内面はヘラケズリを施す。(1407・1408)は土師器直口壺片。(1407)は口縁部を打ち欠く。口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面はナデ、同内面は指頭痕残る。(1408)の体部外面にはかろうじてヨコハケがみえ、同内面はヘラケズリを施す。口縁端部に黒斑あり。(1409・1410)は小形丸底土器。いずれも口縁部内外面・体部外面に回転力を利用した細かいヘラミガキをし、(1409)は底部に、(1410)は体部下半~底部にかけてヘラケズリを施す。(1409)は底部付近に焼成後外面からの穿孔あり。小形壺(1411)は、体部内外面に粗いハケメ調整を加え、外面底部付近のみヘラケズリを施す。胎土に細かい砂粒を多量に含む。外面に黒斑あり。(1412・1413)は無稜外反高坏片で、(1412)は内外面とも細かいヘラミガキを密に施す。(1413)は口縁部内面にわずかにヘラミガキが残る。高坏脚部片(1414)は3ヶ所の円孔をもち、穿孔の際内側にはみ出した粘土を削り取る。脚柱部内面は一部ヘラケズリ。(1415~1429)は布留式甕。口縁端部は内傾しつつ肥厚するもの、水平方向に肥厚するものなど様々であるが、いずれも口縁端部・頸部を強くヨコナデする。体部は完存するかあるいはそれに近いものについては球形を呈し、肩部にはヨコハケを施す。(1416~1418)は列点文を施文する。(1415)は体部に2ヶ所焼成後に穿孔する。体部内面はほとんどが

下半までヘラケズリを施し、底部付近には指頭痕が顕著に残る。

第V面遺構出土遺物

溝216出土遺物 (1430～1438) (1430～1432・1434) は弥生土器壺。(1430) は口縁部内外面をハケメ調整のち丁寧ヘラミガキし、口縁端部は上下方に刻み目を入れ、円形浮文を14ヶ所貼り付ける。頸部欠損部にも刻み目を施していた可能性がある。広口壺口縁部片 (1431) は、内外面ともハケのちヘラミガキを施す。口縁部内面に黒漆色の付着物あり。体部外面はハケのちヘラミガキ、同内面はナデを加える。(1432) は内外面ともに剥離著しく調整不明。生駒西麓の胎土。(1434) は広口壺の完形品。体部外面に縦方向のヘラミガキ、体部下半には接合痕残る。底部に黒斑あり。埴形高坏 (1433) は、口縁端部外面をヨコナデし、内面は板状工具によるナデを施す。脚柱部が短く、庄内式後半の特徴を示す。(1435～1441) は弥生土器甕。(1435) は体部外面にタタキのちハケメ調整を加えるが、接合痕が数ヶ所残る。(1438) の体部内面には一部ハケメ調整が残る。これらは (1433) を除き弥生時代後期後半の所産。

井戸866出土遺物 (1422～1445) (1442・1443) は庄内式甕で、胎土はともに生駒西麓産。(1442) は口縁端部がやや内傾気味で、頸部内面がやや粗雑化し、体部上半の叩きが細くなることから、原田編年布留I期の所産と思われる。(1443) は口縁端部を上方につまみ上げ、口縁部内面はナナメハケのちヨコナデ。体部外面は細かいタタキのちハケメを、同内面は一部ハケメが残るがヘラケズリを施す。原田編年布留I期。(1444) は大形の庄内式甕。口縁端部を内弯気味におさめ、内側をやや肥厚させる。口縁部内側はヨコハケのち横方向のヘラミガキを施す。頸部外面はヨコナデ。体部外面は、縦方向の粗いハケメ調整のち肩部に布留式甕に共通する横方向のハケメを、同内面はヘラケズリのち横方向のヘラミガキを施す。体部外面最大径以下には煤が付着する。完全に丸底化しており、原田編年布留I期と考えられる。(1445) は直口壺片。外面は口縁部～頸部付近までヨコナデのち雑なハケメ調整を加え、体部は縦方向のヘラミガキを施す。内面は口縁部～頸部にヨコナデ、体部は雑なナデを加えるが接合痕が顕著に残る。体部外面に黒斑あり。

土坑321出土遺物 (1446・1447) ⅢA (1446) は、丸底気味の底部と内弯気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部は丸く肥厚する。外面はb₀手法。内面は底部にラセン状暗文を、口縁部～底部に細かい放射状暗文を施す。平城宮Ⅲの所産であろう。須恵器蓋 (1447) は、宝珠つまみとかえりのある端部からなる。外面には自然釉が付着し、内面は墨を彷彿させる淡黒色の付着物がある。しかし研磨されておらず、転用硯とは認めにくい。飛鳥Ⅲの所産。

井戸414出土遺物 (1448) 土師器手捏ね皿。平安時代後期か。

井戸538出土遺物 (1449) 陶質土器の影響を受けた須恵器体部片で、外面に細かい格子タタキを施したのち、ラセン状の沈線を巡らす。なお当遺構は第2節で記したように (59ページ)、第Ⅲ面遺構と考える。

井戸198出土遺物 (1450～1453) 口縁端部外面にヘラミガキを施した (1450) や、下田所～亀川上層に編年される吉備系甕 (1451)、布留式甕 (1452・1453) がある。(1453) は原田編年布留I期に属する完形品で、体部最大径付近に弱い稜が巡る。

土坑890出土遺物 (1454～1457) (1454) はほぼ完形品の土師器壺で、内弯気味に立ち上がる口縁部と、大きく張った肩部と平底気味の底部からなる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整

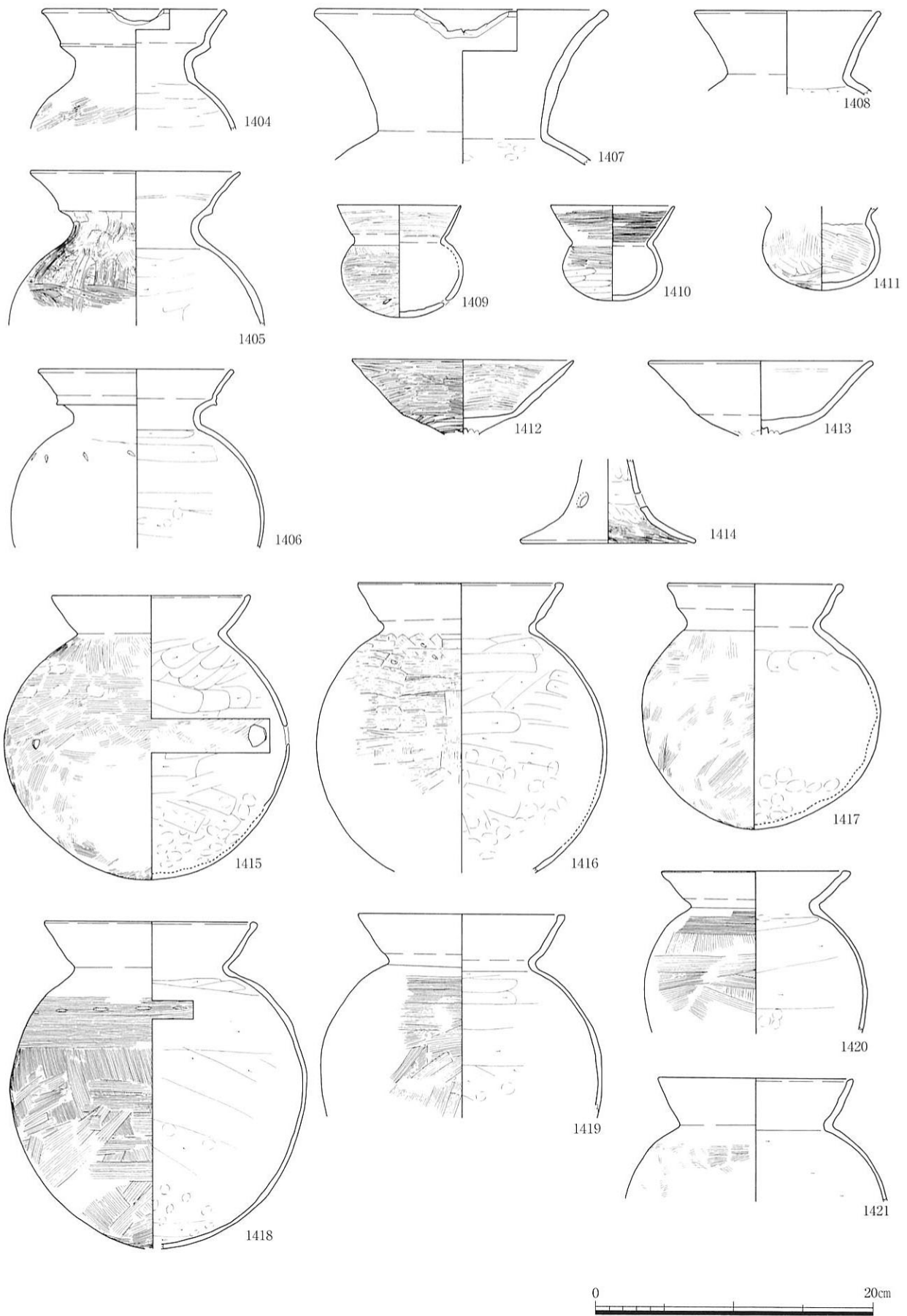


图135 第四面 落込み310 出土遺物 (1)

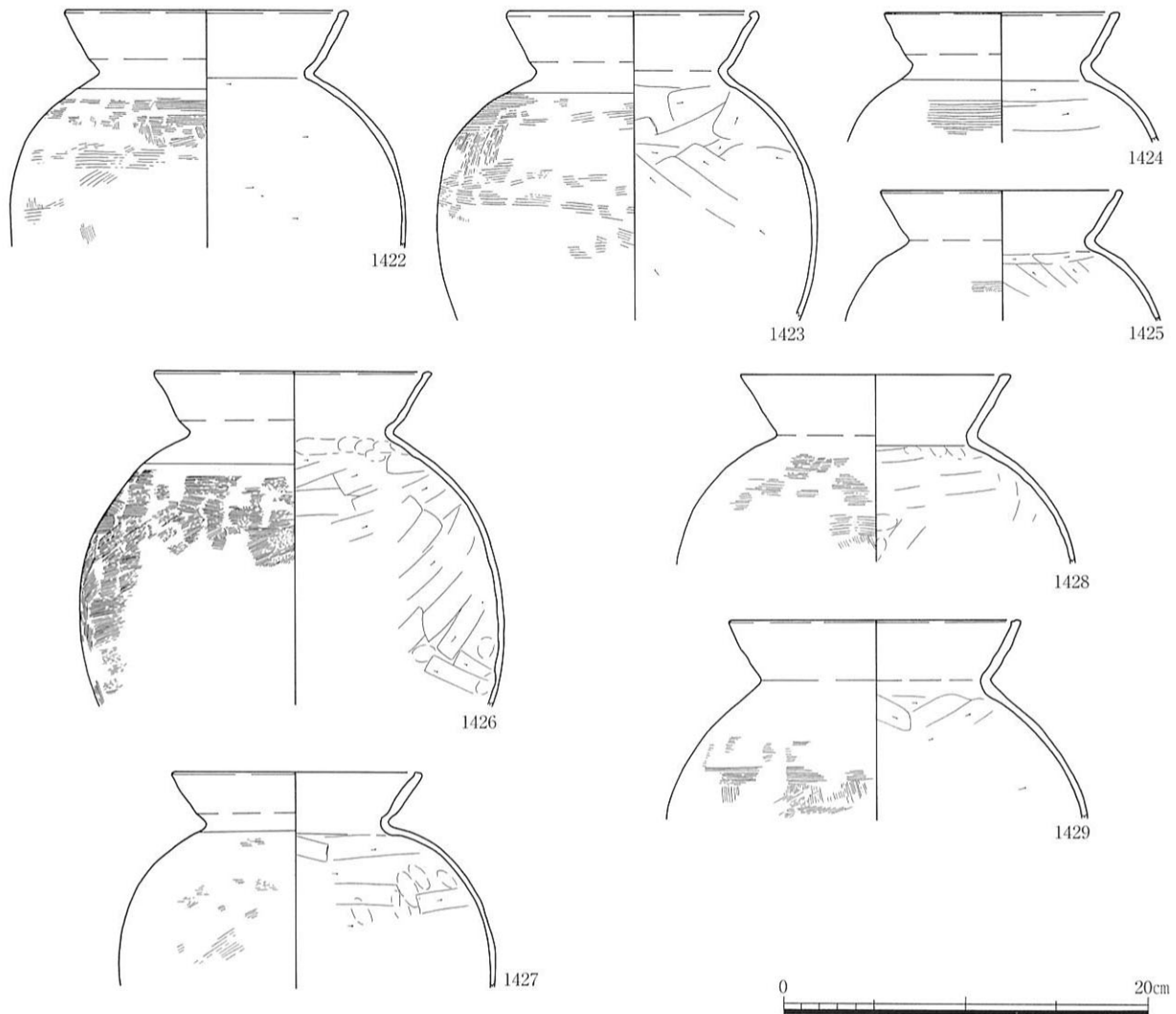


図136 第IV面 落込み310 出土遺物 (2)

を加え、体部内面には指頭痕が顕著に残る。須恵器壺を模した形態である。(1455)は、口縁端部が内側にやや肥厚し、端部・頸部に強いヨコナデを加え、体部は球形を呈するが、肩部には横方向のハケメはなく、器壁は厚い。また体部内面上半は左上がりの指ナデのみで、同下半は指頭痕が顕著に残る。頸部内面・肩部に黒斑があり、体部内面には炭化物が付着する。(1456)の口縁端部は内傾する平坦面をもつが肥厚せず、端部・頸部を強くヨコナデする。肩部にはヨコハケを施すが、体部は長胴化し器壁も厚い。体部内面はナデ調整のみ。底部内面には炭化物付着し、同外面も煤付着する。なお体部上半に焼成後外面から穿孔した穴がある。これらはいずれも布留式後半の所産。(1457)は黒斑のある数珠形の土製品で、1mm前後の穴が貫通する。土玉であろうか。

土坑543出土遺構 (1458) 有稜外反高坏片。内外面とも剥離・磨耗著しく、調整は不明。

土坑897出土遺物 (1459～1484) (1459～1484)は土坑897出土遺物。(1459・1460)は土師器高坏の脚部片。ともに脚柱部外面はヘラナデ、内面は横方向のヘラケズリを全面に施す。布留式後半の所産であろう。土錘は(1461～1484)の24個が出土した。いずれも灰白色の完形品(1474を除く)で、重量は14.5～26.1g、平均21.4g。

川410出土遺物 (1485～1496) (1485)は佐藤編年Ⅱ期中～Ⅱ期新(10世紀前半)頃の土師器壺B。口縁部外面をヨコナデし、体部は不調整。器壁は剥離しているが、指頭痕による凹凸は顕著ではない。

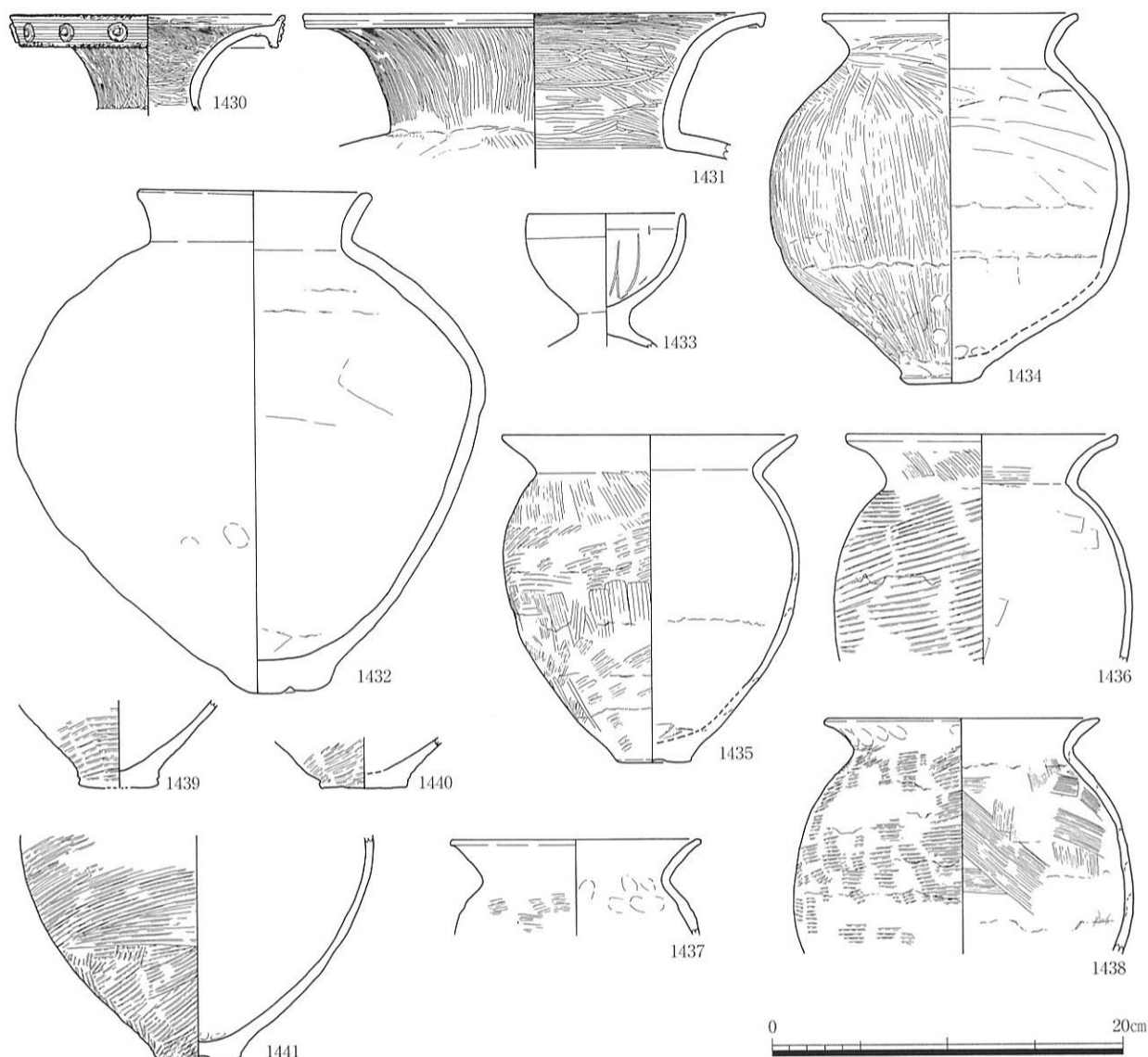


図137 第V面 溝216 出土遺物

内面はナデナデ調整で、煤が付着する。器壁は厚く、比較的しっかりした高台をもつ。(1486)は稜が短く尖り、平坦な天井部をもつ中村編年I-3(田辺編年TK208)の須恵器蓋で、外面には自然釉が付着する。把手付碗(1487)は、体部外面中位に細かな波状文帯を配し、体部外面下半はヘラケズリを施したのち回転ナデを加える。欠損した把手上面には渦巻き文を付加する。歪んだ坏部をもつ大形有段高坏(1488)は、内外面の剥離が著しく調整は不明。口縁部に黒斑あり。(1489)は土師器直口壺で、口縁部外面はタテハケのちヨコナデ、同内面はヨコハケ調整。やや扁平な球形を呈する体部は、外面がハケメ、内面はヘラケズリで、底部内面には指頭痕が残る。体部最大径付近に黒斑あり。(1490~1494)は小形壺。(1490)は、口縁部外面から体部外面上半にかけて連続したハケメを施したのち、頸部をヨコナデする。体部内面はナデ調整を加えるが凹凸著しく、器壁は厚い。体部外面下半に黒斑あり。(1491)も口縁部から体部外面上半にかけて縦方向のハケメ、体部下半は不定方向のハケメを施す。体部内面はナデ調整を加えるが、(1490)に比べて薄手である。内外面とも頸部に接合痕が残る。外面には全体的に煤付着。(1492)は外面をヨコナデあるいはナデ調整するが、底部付近はハケメがわずかに残る。ヨコハケを施した口縁部内面にはヘラ記号と思しき焼成前線刻がある。体部最大径付近に緩やかな稜が巡り、黒斑がある。全体をヨコナデもしくはナデ調整する(1493)も、体部最大径付近に稜が巡

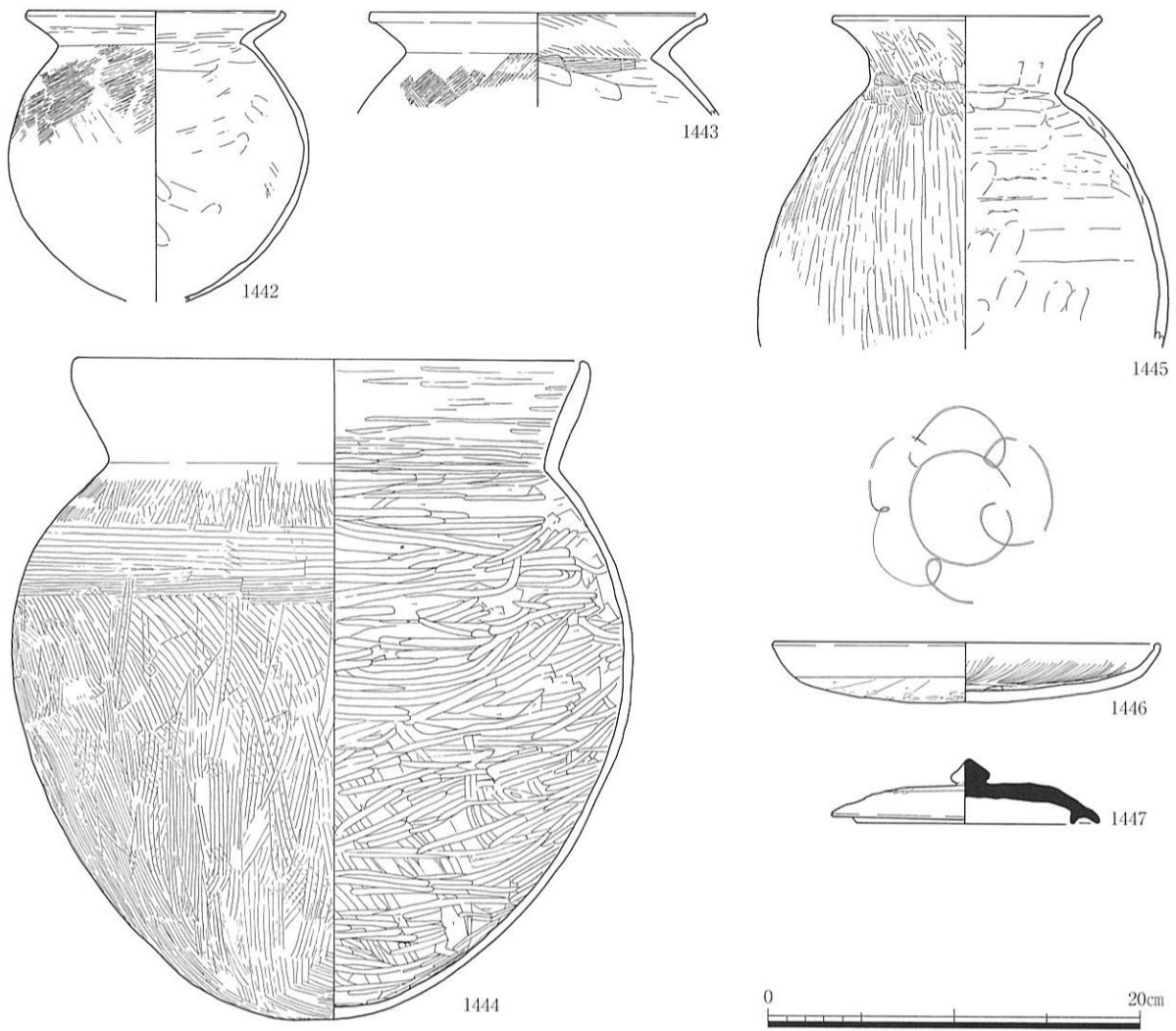


図138 第V面 井戸866, 土坑321 出土遺物

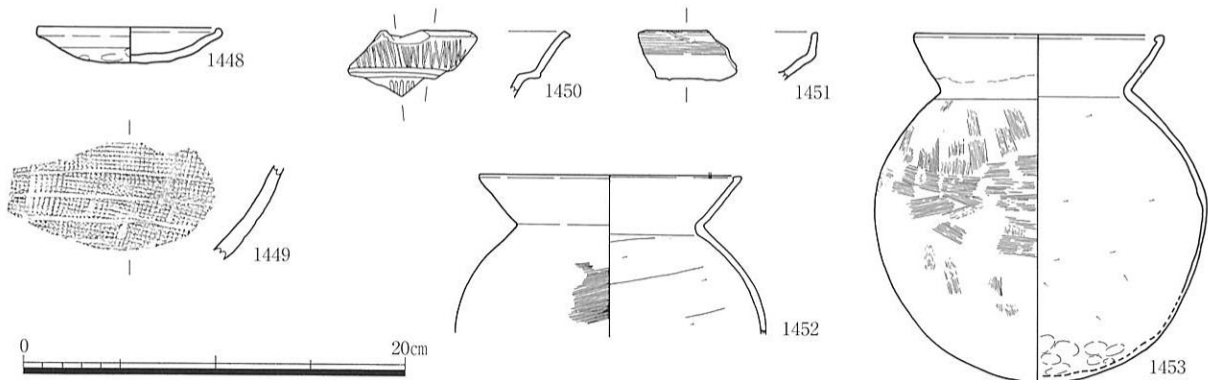


図139 第V面 井戸414・538・198 出土遺物

り、内面には接合痕残る。(1494)はナデを施した体部外面にわずかにハケメが残り、同内面は部分的に指頭痕が残るもののヘラケズリを施す。(1495)はV様式系甕を基本に、体部外面上半をナデ(一部ヘラケズリ)、下半はヘラケズリのみで仕上げ、底部には小さな平底がある。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整。庄内式後半。(1496)は頸部に4条の削出し突帯が巡る弥生時代前期中段階の壺。

川415出土遺物(1497~1592) (1497~1505、1498・1501を除く)は布留式甕。(1497)は、口縁端部・頸部を強くヨコナデするが肩部のヨコハケが消滅し、体部上半が張り長胴化する。(1499)も口

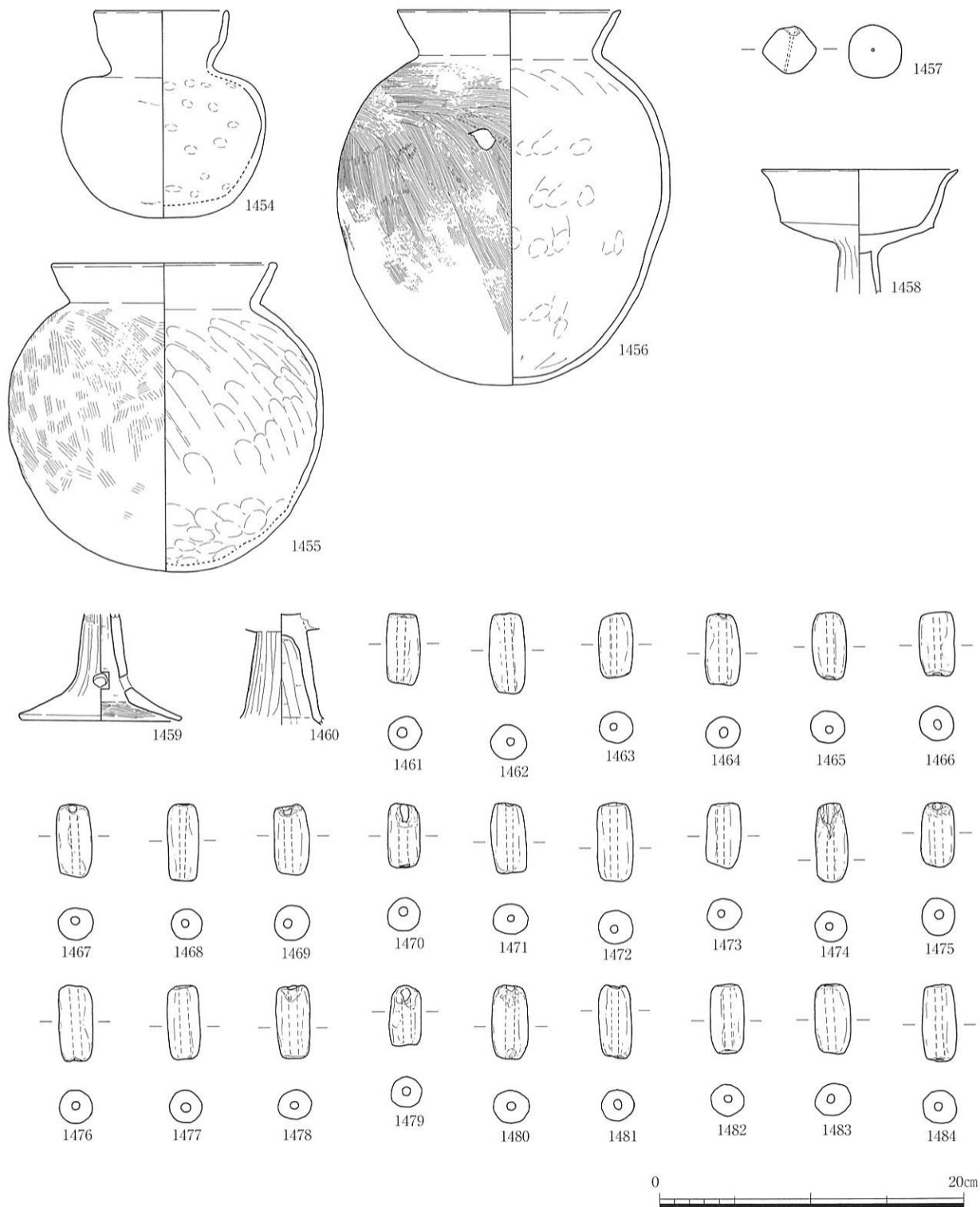


図140 第V面 土坑890・543・897 出土遺物

縁部形態は布留式甕の特徴を備えるが、肩部のヨコハケ・体部内面のヘラケズリが消滅し器壁の厚みが増加する。(1500)は肩部に列点文を施すが軟質焼成である。これらはいずれも布留式後半の所産。これに対し、(1502～1505)は、口縁部形態や肩部のヨコハケ、体部内面のヘラケズリ、さらには硬質焼成という特徴を備えており、布留式前半であろう。(1503)口縁部外面にはスリップ付着痕あり。直口壺(1498)の口縁部形態、肩部の横方向のハケメ、体部内面のヘラケズリなど、布留式前半通有の特徴を兼ね備える。口縁部形態の異なる直口壺(1501)についても、同様の時期を考えることができる。

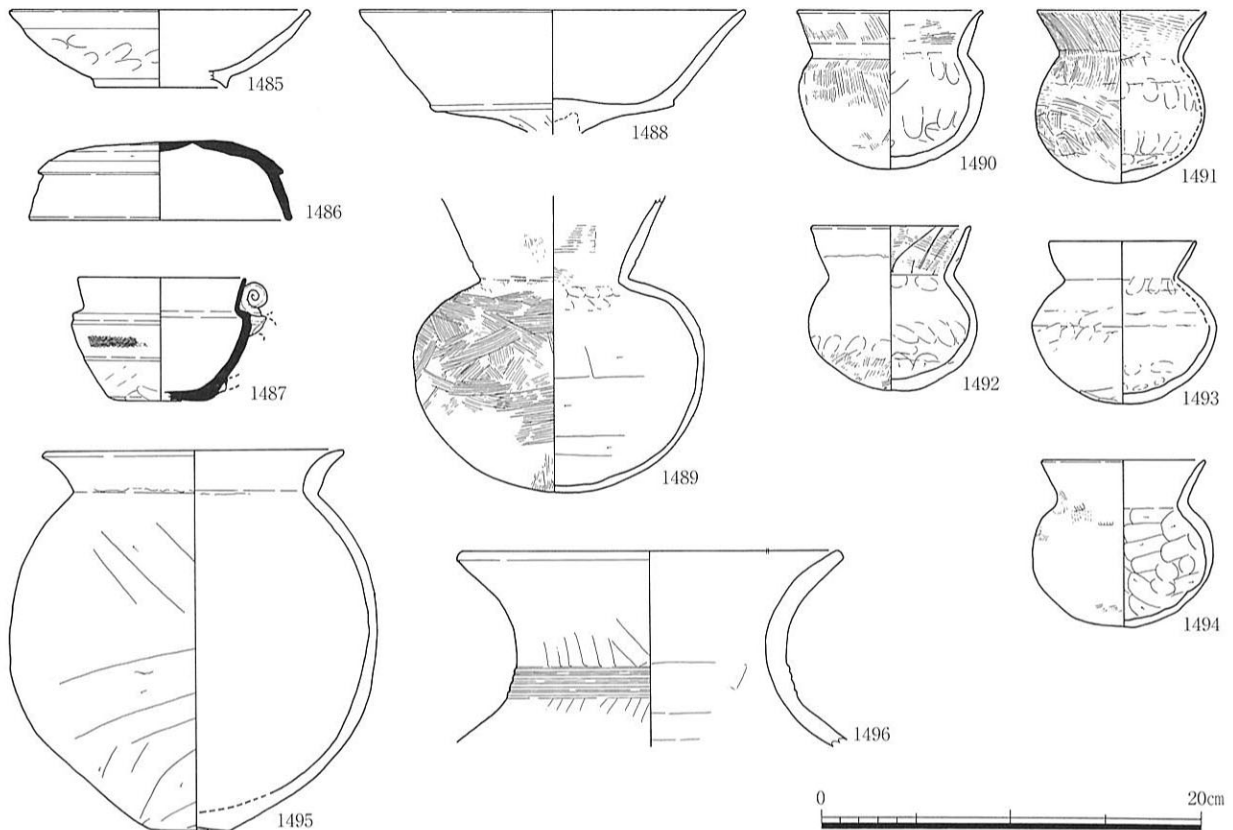


図141 第V面 川410 出土遺物

(1506) は外反気味に立ち上がった口縁端部が上方にのび、左下がりの細かいタタキのち右下がりのハケメを施した体部外面、同内面はヘラケズリで、底部付近に指頭痕が顕著に残る庄内式甕である。底部は完全に丸底化しており、原田編年布留Ⅰ期の所産であろう。体部最大径部分に緩やかな稜が巡る。(1507) はV様式系甕に似た口縁部形態、体部外面はヘラケズリのちナデもしくは調整に布を用いたり、ヘラミガキ様の調整を加える。内面は主としてヘラケズリを施す。体部外面に黒斑あり。原田編年庄内Ⅲ～布留Ⅰ期の所産。(1508) の口縁端部は布留式甕に類似した形状をなすが、主として中位に煤が付着する体部外面は、タタキのち下から上へのヘラケズリを施し、丸底化した底部をもつ。体部内面はナデ調整のみで、底部付近に炭化物が付着する。布留式初頭にみられるV様式系甕の最終形態であろう。(1509) も(1508) 同様の甕で、体部外面は左下がりのタタキのち、庄内・布留式甕の影響を受けた縦方向の細かいハケメを施す。同内面上半はハケメ、下半はハケメ後ナデ調整を加える。(1510) は口縁部内外面及び体部外面に、横方向もしくは縦方向のハケメ調整を施す。体部内面は頸部よりやや下がったところからヘラケズリ。やはり原田編年庄内Ⅲ～布留Ⅰ期の所産。(1511) の口縁端部は、布留式甕を意識したのかわずかに内側に肥厚するが、その他は(1510) と同様の調整を施す。原田編年布留Ⅰ期の所産。(1512) も口縁部内外面、体部外面にハケメ調整。体部内面は雑なヘラケズリを施すが、器壁5mmと厚手である。(1513) はV様式系甕であるが、体部上半が球形に張ることからみて、庄内式前半の所産かもしれない。(1514) は山陰系甕と思しき破片で、口縁端部は外方に肥厚し、口縁部内外面はヨコナデ。ヨコハケを施した体部外面に1条の沈線が巡る。内面はヘラケズリ。(1515) は亀川上層に対応する吉備系甕片。ただ口縁部外面の櫛描横線文は亀川上層より古い要素をもつ。(1516) は吉備系甕を意識した甕であるが、頸部が分厚く吉備系の範疇には含まれない。

壺(1517～1519) は、いずれも口縁端部・頸部に強いヨコナデを、体部外面上半にヨコハケを、体部

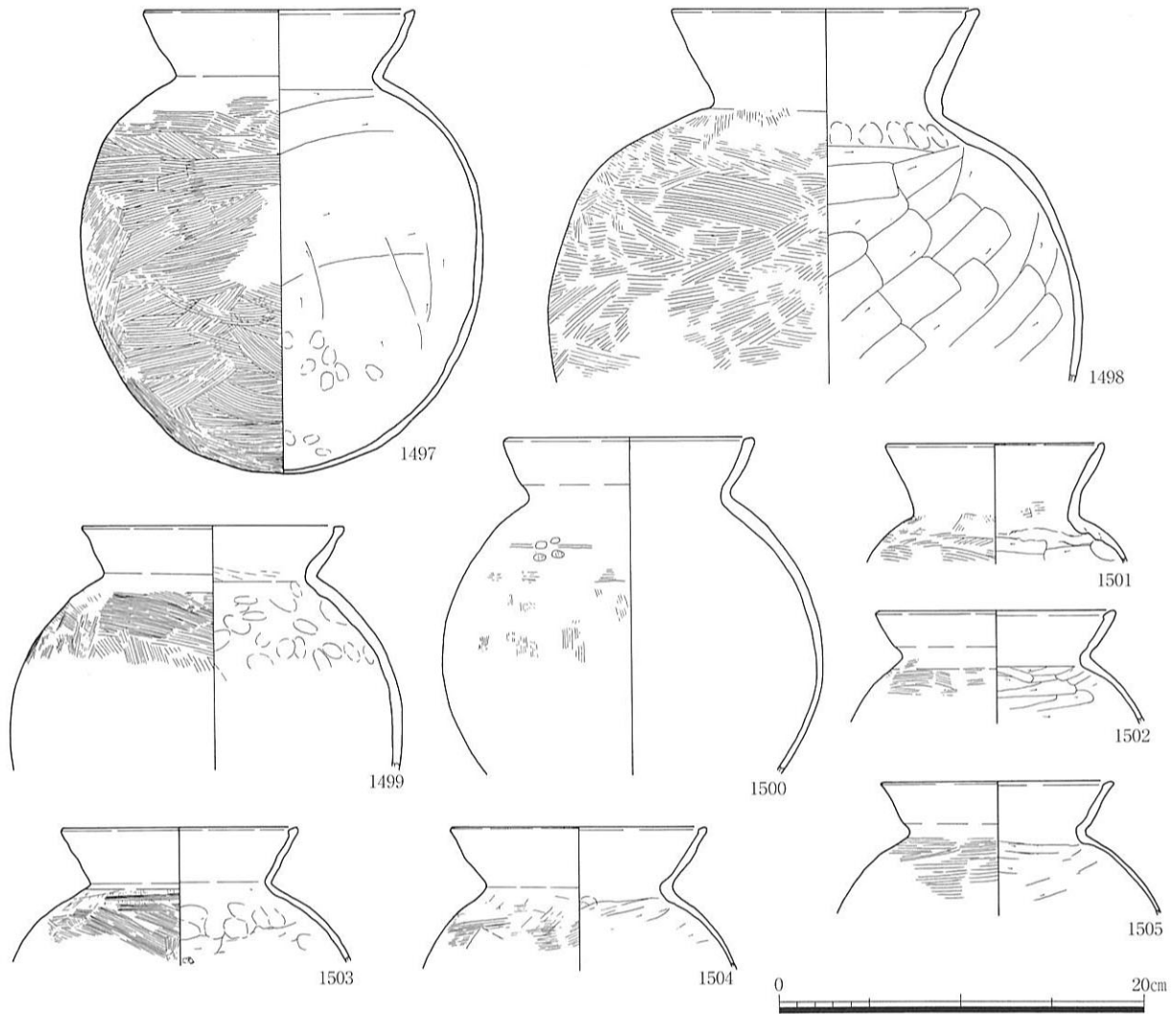


図142 第V面 川415 出土遺物 (1)

内面はヘラケズリをそれぞれ施し、底部付近には指頭痕が残る。いずれも布留式前半の所産。全体的に磨耗著しい直口壺 (1520) についても同様の特徴を備える。(1521~1540) は小形壺。口縁部内外面はヨコナデを施すものが多いが、(1528・1538) はハケメ調整を施す。また口縁部外面に接合痕をとどめるものも多い (1521・1522・1529・1533・1534)。体部外面の調整は以下の通り。(1521) はヘラケズリを施すが、削る際工具と器壁の摩擦によって生じた凹みが残る。(1522) はナデのみ。不定方向のハケメ調整を施す (1523~1532) のうち、(1524) は体部最大径付近に一部ヘラケズリを、(1525) は肩部に特に細かいハケメを施す。また (1526・1528) は体部最大径付近にわずかな稜をもち、(1530) は最大径付近でハケメの方向を違える。(1533) は体部上半にナデ、下半にのみヘラケズリ。ナデ調整のみの (1534) の体部中位には赤色顔料が付着する。(1535・1539) はハケのちナデを加える。体部最大径付近に稜をもち (1536) は、稜以上をナデ、以下をハケメ調整する。(1537) はハケメのちヘラケズリを施すが、砂粒の動きは非常に細かい。体部内面はナデ調整を施すものが一般的であるが、(1526) は体部下半を、(1528・1530・1536) と (1526) の体部下半はヘラケズリを施す。また (1537) の底部付近はヘラケズリのちヘラミガキを施す。(1540) は手捏ね成形の小形壺で、底部は平底気味。体部内面はヘラケズリを施す。(1541) は大きな平底と細い頸部をもつ壺で、肩部にハケメを施す。底部に黒斑あり。小形丸底土器 (1542) は剥離著しいが、形態からみて原田編年布留 I 期の所産。小形鉢? (1543) は口

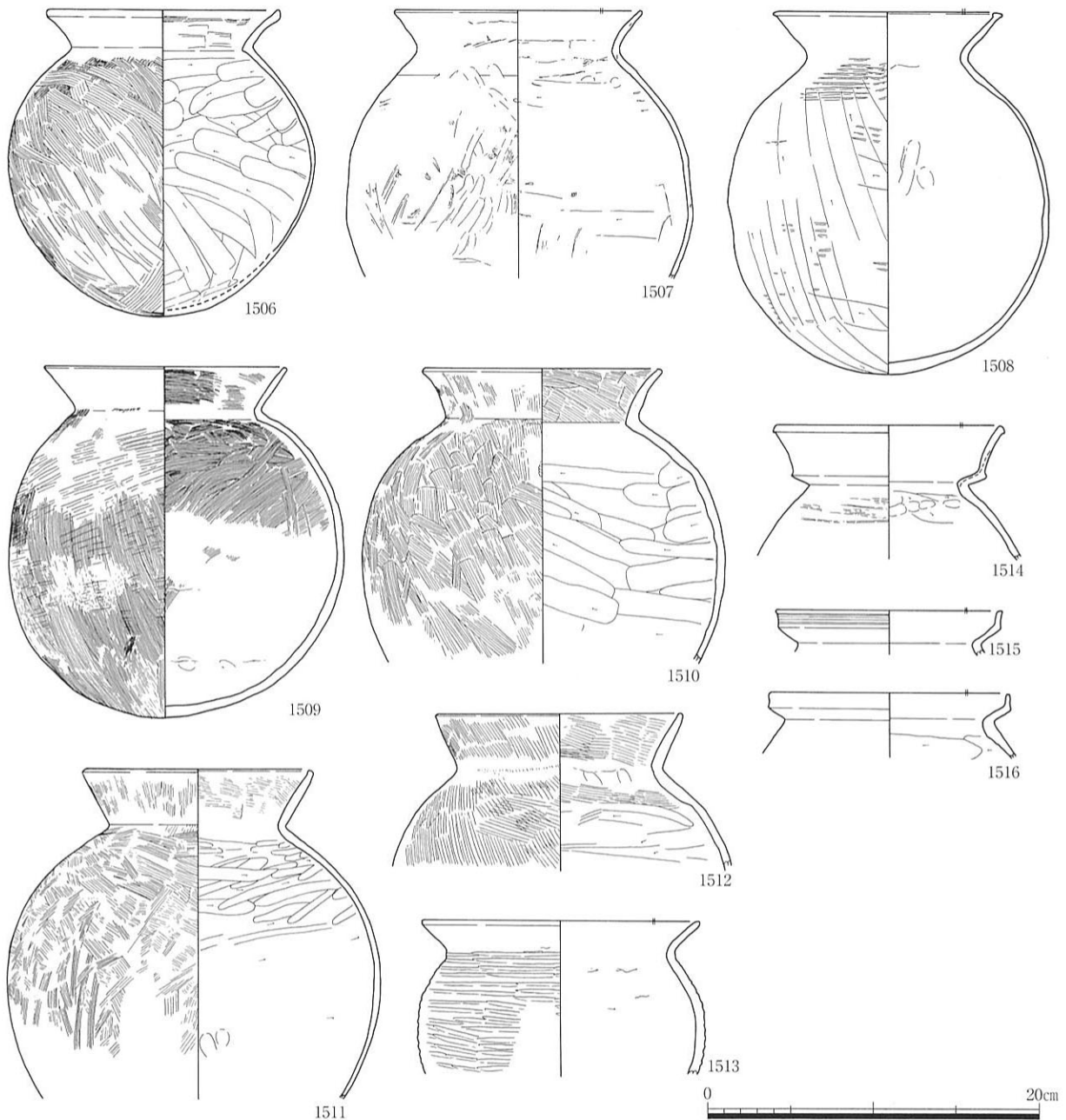


図143 第V面 川415 出土遺物 (2)

縁端部がわずかに内側に肥厚する。体部外面最大径付近に接合痕あり。器台 (1544) は受部内外面ヨコナデのち部分的にヘラミガキ。脚部内面はヨコハケのちナデ、同外面はタテハケのち部分的にヘラミガキを施す。埴 (1545) は口縁部内外面及び体部内面をヨコナデ、体部外面はヘラケズリを施す。(1546) は甕の脚台か。内外面ともハケ状工具によるヨコナデ調整。土錘 (1547) は114.4 gをはかる。(1548～1552) は手捏ね成形によるミニチュア壺 (1548～1551) と埴 (1552) である。(1549) の体部には焼成後に穿孔された穴があり、特に外面に煤が付着する。(1550・1551) も内外面に煤が付着する。(1552) は粘土板を折り曲げて成形したためか、外面には粘土がのぼされた際に生じたひび割れが残る。

(1553～1557) は大形有段高坏で、口縁部内外面はハケメ調整しヨコナデしたのち、(1555・1557) のように内外面に縦方向のヘラミガキを施すものもある。体部外面はハケのちナデであるが、(1557) は部分的にヘラケズリを施す。(1553) の口縁部内面には黒斑があり、脚柱部外面はタテハケのちナデ、内面はナデ調整のみ。有稜外反高坏 (1558～1561) は、口縁部内面にのみハケメ調整痕をとどめる

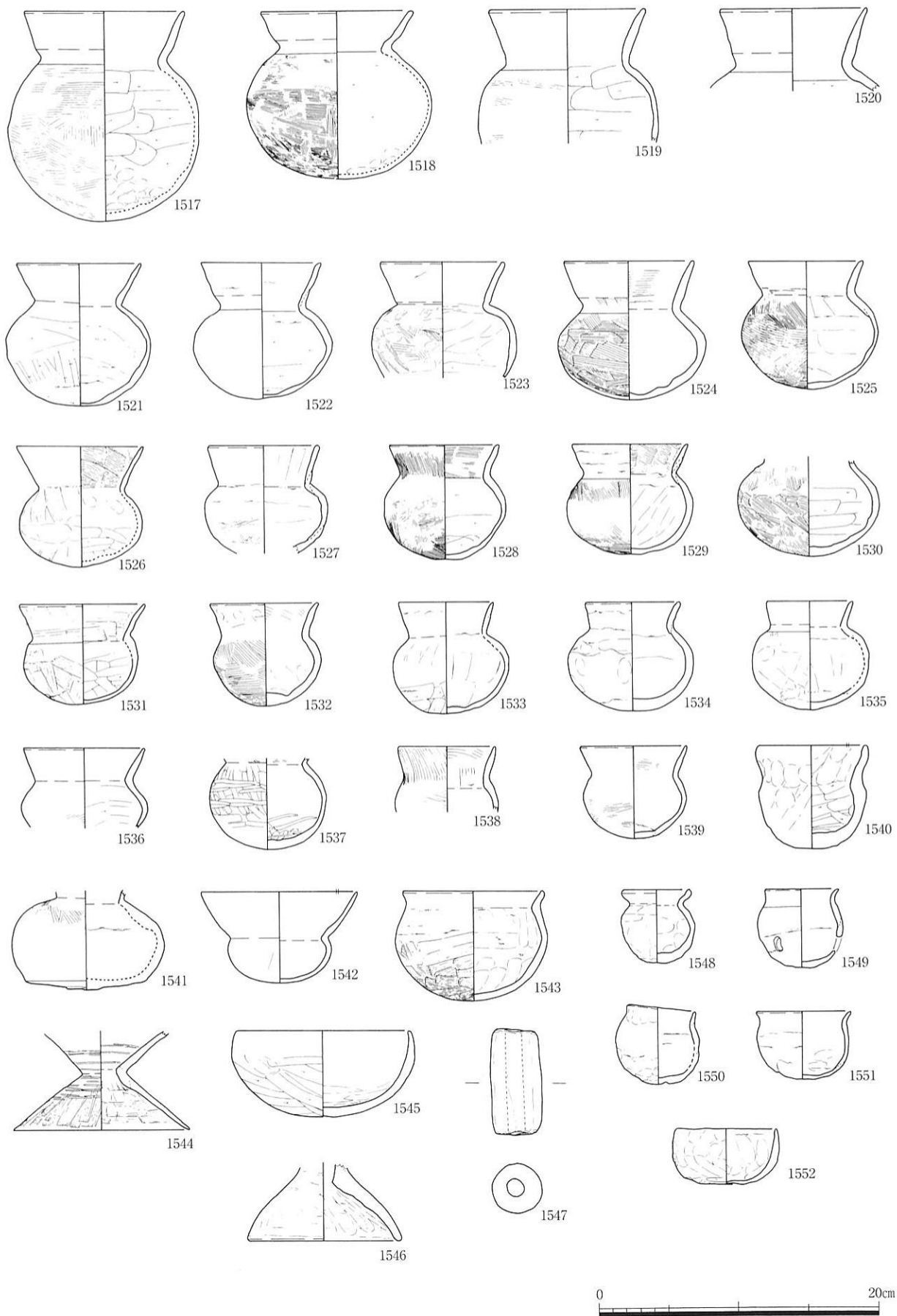


图144 第V面 川415 出土遺物 (3)

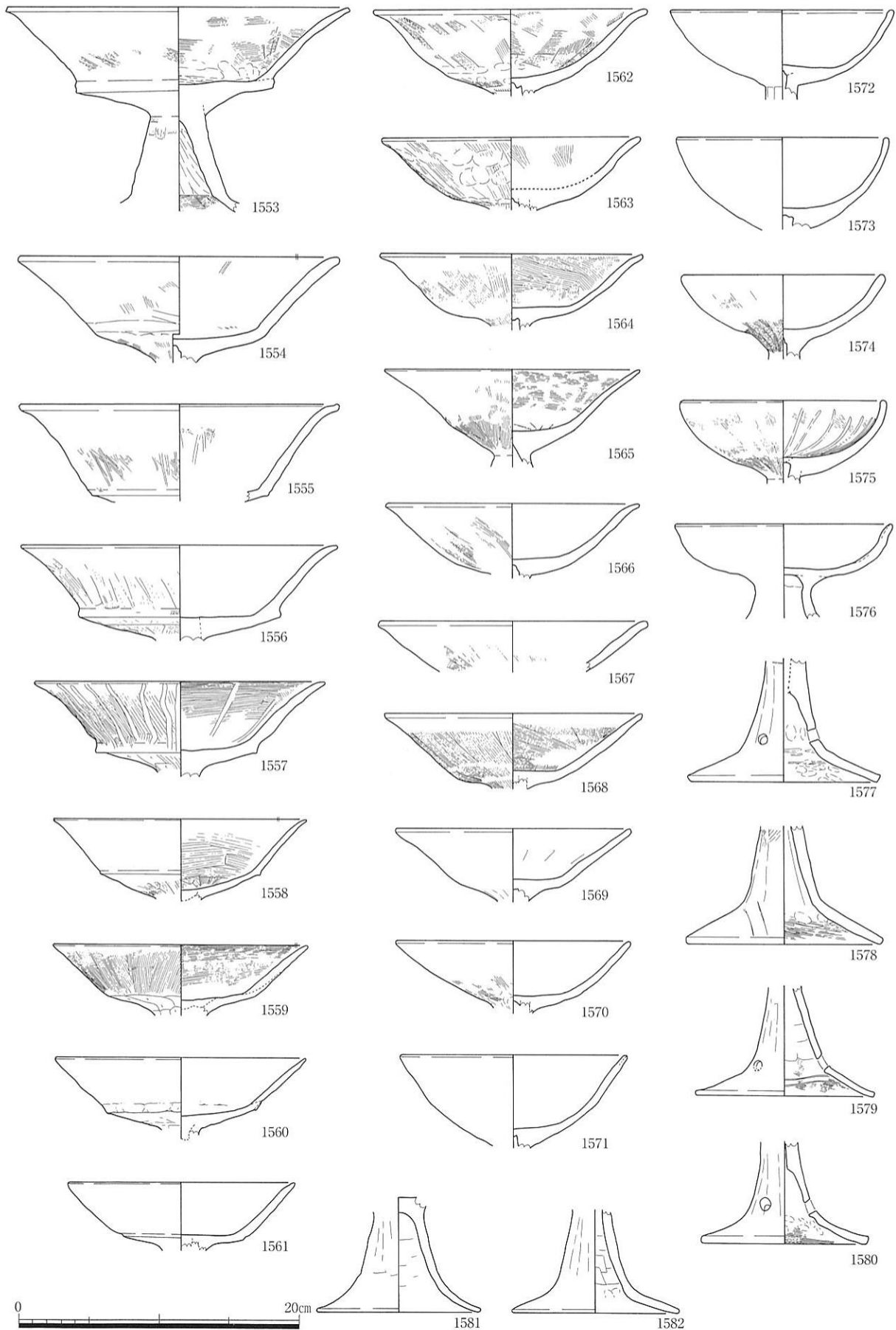


図145 第V面 川415 出土遺物 (4)

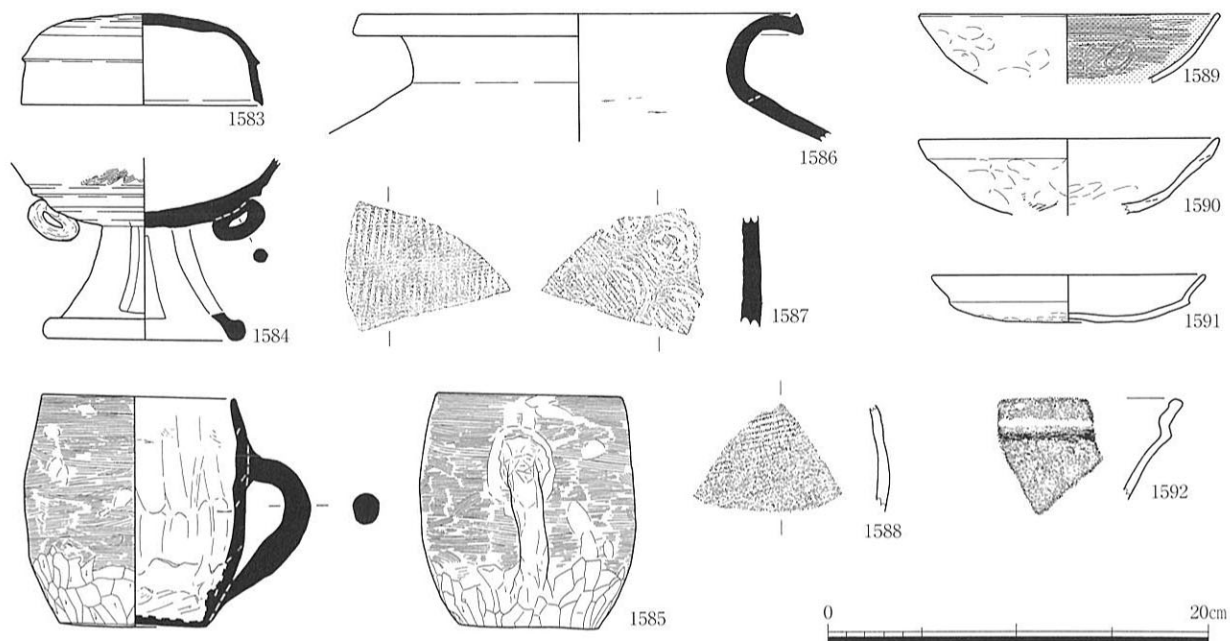


図146 第V面 川415 出土遺物 (5)

(1558)、内外面にハケメを施す (1559)、内外面ともヨコナデを加える (1560・1561) がある。体部外面はハケメのちナデを施す (1558・1559) のように、ヘラケズリを加える場合がある (1561) の内面には煤が付着する。無稜外反高坏 (1562～1569) のうち、内外面をヨコナデする (1569) 以外はすべてハケメ調整を施し、ナデを加える。(1562・1564・1566・1568・1569) の口縁部には黒斑あり。(1570) は無稜直口高坏で、外面はハケメ調整、内面はナデを施す。(1571～1576) は碗形高坏。口縁部外面を強くナデる (1571)、粘土を型に巻きつけた際生じるような粘土のひび割れを外面に残す (1573)、口縁部外面にハケメ調整を施す (1574)、内外面ハケメ調整のち、内面にヘラミガキを施す (1575) などがある。(1576) は口縁端部を外反させる。脚部片は一様に脚柱部外面をヘラナデ調整するが、脚柱部内面に絞り込み痕をとどめる (1577)、ヘラケズりする (1578・1579・1581・1582)、ナデ仕上げする (1580) がある。(1578) は脚裾部外面に、(1579) は同内面にヘラ記号を施す。

(1583) は中村編年 I - 3 (田辺編年TK208) の蓋。無蓋高坏 (1584) は、脚部に4方透かしをもつ。コップ形土器 (1585) は、口縁部～体部外面に横方向のハケメを施し、把手接着後底部付近にヘラケズリを施す。体部内面は縦方向の、底部付近は横方向のナデを加える。口縁端部を大きく外反させる須恵器甕 (1586) は9世紀代か。須恵器甕体部片 (1587) は、内面に車輪文当て具痕あり。(1588) は韓式系土器体部片。黒色土器A類碗 (1589) は佐藤編年II期古～II期中 (9世紀後半) の所産。土師器碗 (1590) や9世紀前半頃の土師器皿A (1591) が出土。(1592) は縄文時代晩期の浅鉢片。

(第VII面遺構出土遺物)

土坑918出土遺物 (1593) は大形有段高坏片で、辻編年3段階 (TK73～TK216) の所産。第2節で記載したように (61ページ)、当遺構は第II面土坑577と同一遺構と考える。

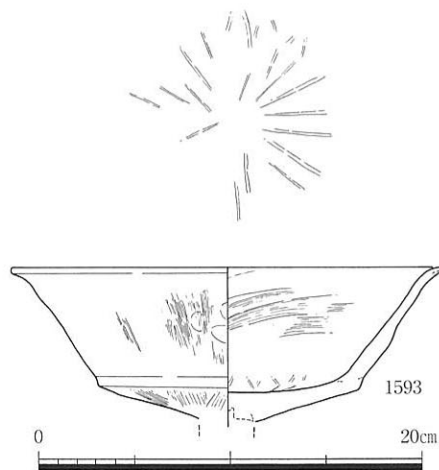


図147 第VII面 出土遺物

第4節 包含層出土遺物

包含層出土遺物総数は63747片である。その内訳は、遺構の場合と同様土師器が39203片と最も多く、次いで須恵器の14751片、弥生土器5409片、瓦器1667片、瓦727片、黒色土器676片、瓦質土器319片と続く。微量ながらサヌカイト製品・剥片が134片、さらに韓式系土器が15片出土した。

層別傾向では、全調査区に堆積していた第Ⅲ層出土遺物が30416片と最多で、次いで第Ⅳ層出土遺物の15800片と続き、最下層である第Ⅶ層出土遺物は、弥生土器19片（内訳は中期12片、後期1片）、土師器2片である。土師器を混入とすれば、第Ⅶ層は弥生中期の包含層と考えることができ、98-7区第Ⅶ面検出の水田面の時期を考える上で重要である。

包含層出土遺物は、概ね遺構出土遺物と重複する部分が多い。従ってここで掲載する遺物は、庄内式を中心とする外来系土器や、その他特徴的な遺物に限定する。

(1594)は弥生時代前期中段階の壺。頸部に焼成前穿孔の穴が2ヶ所ある。(1595)は弥生時代後期後半の壺。大きく外反した口縁端部に、半截竹管を上下逆向きに押捺して施文し、肩部の一部にも波状文を施文する。体部中位には焼成前に穿たれた穴が1ヶ所あり、全体をナデ調整にて仕上げる。体部下半～底部にかけて黒斑あり。壺(1596)は、口縁端部を除く内外面全体にヘラミガキを施したもので、体部中位に焼成後に打ち欠かれた孔がある。底部には小さく極めて不安定な平底をもつ。庄内式の所産であろう。複合口縁壺(1597)は、口縁部内外面には粗いヘラミガキが残る。体部外面のハケメは、最大径を境にナデによってほとんど消される上半に対し、下半はほとんど残る。体部内面上半はヘラケズリ、下半はハケメを施す。体部外面中位に焼成後の穿孔あり。生駒西麓の胎土で、庄内式後半の所産。(1598・1599)は原田編年布留I期の小形丸底土器。ともに回転力を利用した細かいヘラミガキを施す。(1600)は口縁部外面に櫛描文を施文。口縁端部を打ち欠く複合口縁壺(1601)は、口縁部内外面にヨコナデのち縦方向のミガキを、頸部外面にタテハケのち縦方向のミガキを、頸部内面にヨコハケのち縦方向のミガキを施す。口縁部内面は部分的に黒色を呈する。(1602)は口縁端部外面に沈線を数条巡らせ、外面頸部以下をハケメ調整のち肩部には細かいヘラミガキを施す。(1603)は口縁部内外面をヨコナデするが、内面には接合時の指頭痕が顕著に残る。口径34cmをはかる大形複合口縁壺(1604)は、口縁部内外面をハケメ調整したのちヨコナデを加える。口縁部外面には黒斑あり。胎土に結晶片岩を含む壺(1605)は、口縁端部を打ち欠く。体部外面はハケメ調整のち縦方向のヘラミガキを施し、同内面は指頭痕が顕著に残る。同じく胎土に結晶片岩を含む壺(1606)も同様の調整を施す。体部内面下半は板状工具によるナデ。体部に大小4ヶ所の焼成後穿孔あり。ともに阿波系土器。

(1607)は弥生時代中期の甕で、体部外面に櫛描文を3単位施文。(1608・1609)は第Ⅲ面住居857壁面際で出土したV様式系甕で、体部外面下半には接合痕が残り、それを境にタタキの方向が変わる。(1609)の口縁端部は上方につまみ上げる。やや球形に張った体部は庄内式前半の所産か。(1610～1612)も同様に庄内式前半のV様式系甕。(1610)の体部内面は板状工具によるナデ。(1611)の胎土は生駒西麓産。(1613)は、体部外面のタタキが右下がりの大和型庄内甕。内面は口縁部～頸部直下にかけてハケメを施し、体部はヘラケズリ。底部はわずかに残る。外面にはスリップが付着する。(1614～1618)は吉備系甕。このうち(1614)は今回の調査で出土した吉備系甕の中で唯一全容のわかる個体。口縁端部に櫛描横線文を施し、体部外面はハケメのち縦方向のヘラミガキ、体部内面上半はヘラケズリ、同下半には指頭痕が残る。才の元～亀川上層。(1615)は才の元～亀川上層、(1616)は才の町Ⅰ～才の町Ⅱ、

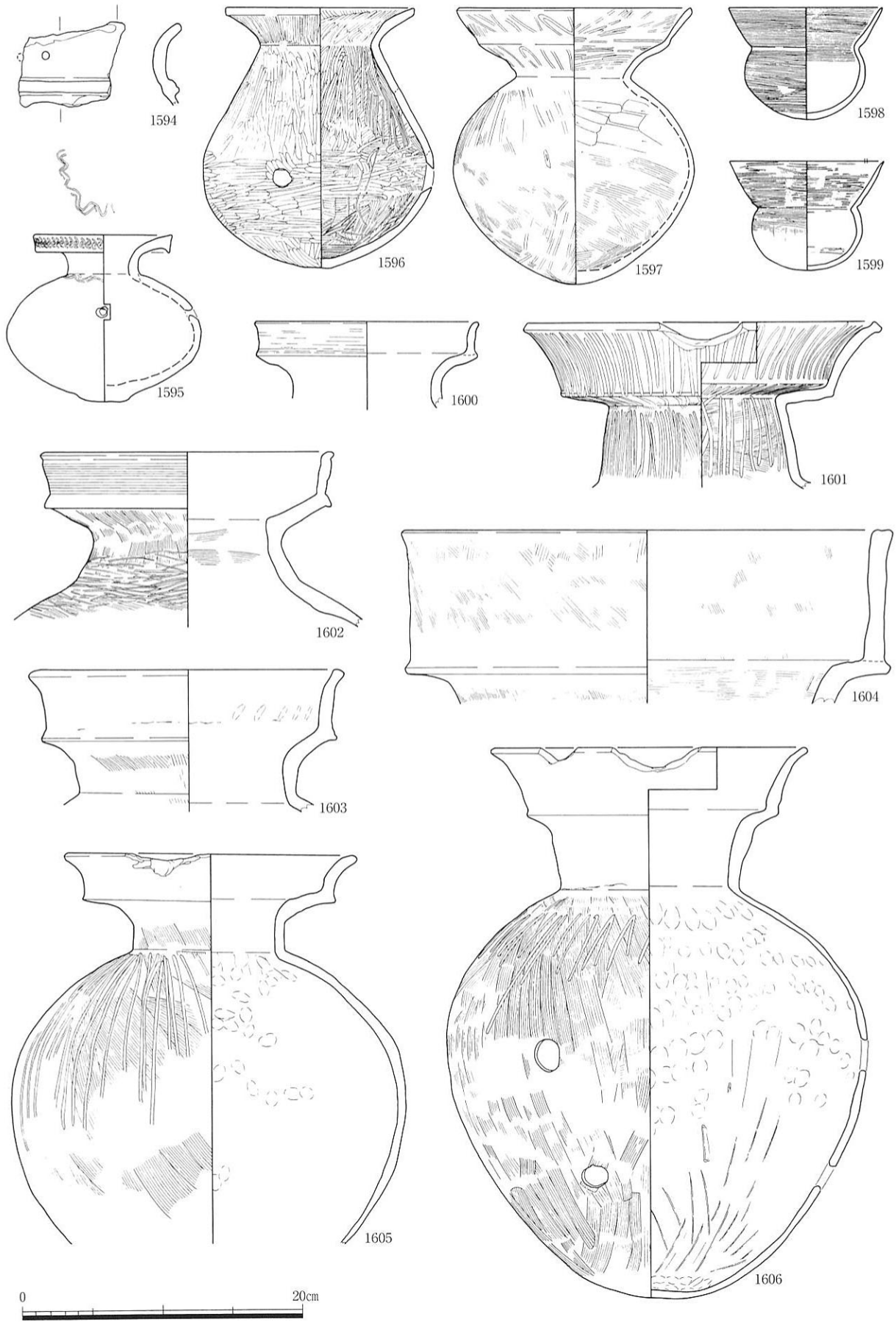


图148 包含層 出土遺物 (1)

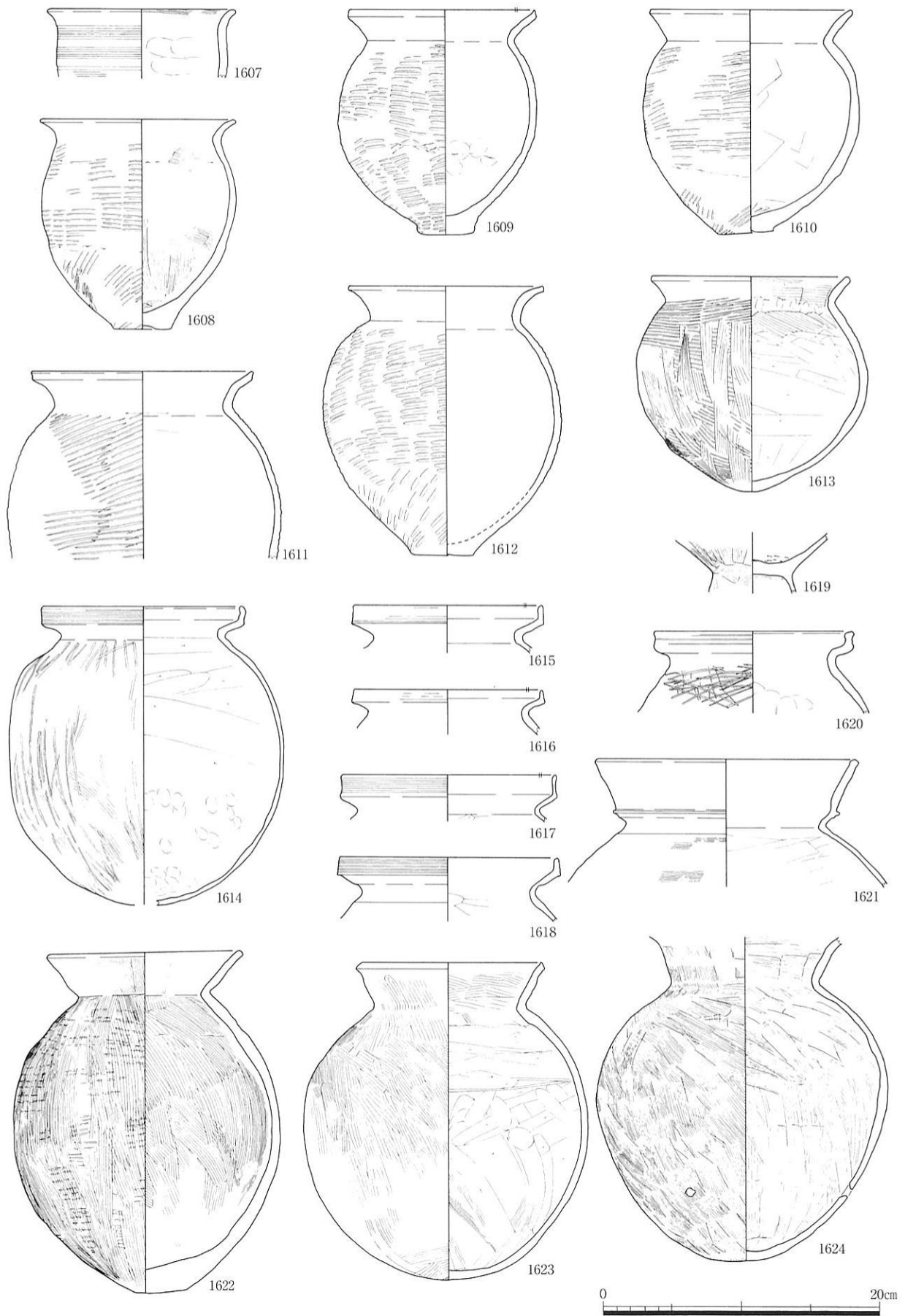


图149 包含層 出土遺物 (2)

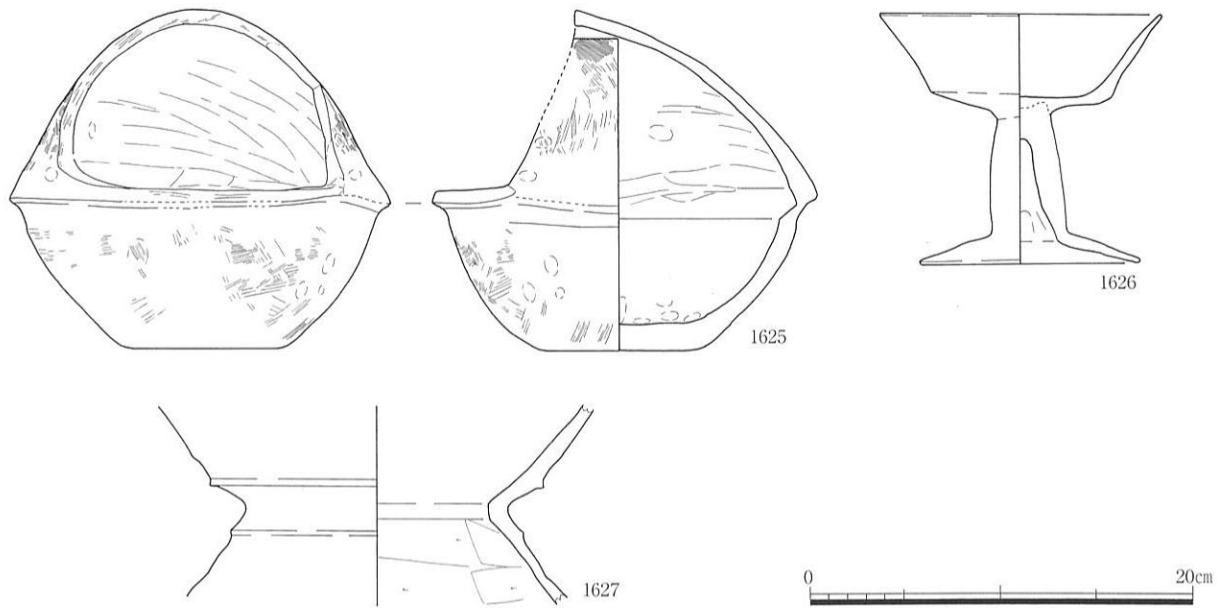


図150 包含層 出土遺物 (3)

(1617) は下田所、(1618) は才の町Ⅱ～下田所の所産。(1619) は東海系甕片。底部内面には脚部接合時に付着した爪跡残る。(1620) は近江系甕。口縁端部外面に沈線文を2～3条、体部上半には間隔が広く明瞭な沈線文帯が巡る。胎土に湖東流紋岩を含む庄内式後半の所産。(1621) は山陰系甕で、口縁部内外面をヨコナデし、端部をやや肥厚させる。体部外面はヨコハケ、同内面はヘラケズリを施す。庄内式併行。甕(1622)は、口縁部内面を板ナデ、同外面をハケのちナデ仕上げする。体部外面は横方向のタタキのち縦方向のハケメを施し、内面は底部付近を除いてタテハケを施す。全体的に器壁は厚く、底部は特に著しい。不安定な底部外面には黒斑がある。四国系か。甕(1623)は、口縁部外面をタテハケのちナデ、内面をヨコハケのちナデ調整し、体部外面をハケメ調整、内面をハケメ調整のちにヘラケズリする。全体的に煤が付着する。布留式初頭の所産。口縁端部を欠損する甕(1624)は、口縁部外面をタテハケのちヨコナデ、内面をヨコハケ調整し、体部外面はタタキのち細かいハケメ、内面はハケメ調整を加える。体部下半に焼成後の穿孔あり。庄内式後半の所産。体部内外面下半に煤が付着する。

(1625) は今回の調査で唯一確認できた手焙形土器である。口縁端部外面及び内面は淡黒色を呈する。外面は不定方向のハケメのちナデを施し、底部外面は不調整。内面はナデのみ。有稜外反高坏(1626)は、脚柱部外面をヘラナデ、全面をナデ調整した丁寧な作り。鼓形器台(1627)は、赤褐色を呈する。

天井部を手持ちヘラケズリする(1628)や扁平な天井部をもつ(1629)は、ともに稜が外上方に突出する中村編年Ⅰ-2(田辺編年TK216)の蓋。(1630)は中村編年Ⅰ-3(田辺編年TK208)の所産で、内面は全体に回転ナデを施す。坏(1631・1633)は底部外面に丁寧な回転ヘラケズリを施す。(1633)の口縁端部にはわずかに凹面をもつ。ともに中村編年Ⅰ-3(田辺編年TK208)の所産。(1632)は丸みをもつ底体面に、やや粗めのヘラケズリを施す。受部には自然釉付着。中村編年Ⅰ-4～5(田辺編年TK23～47)。坏(1634)はヘラ切り不調整の平底に、短い立ち上がりがわずかに内傾する。底部外面にヘラ記号あり。中村編年Ⅱ-6(田辺編年TK217)。8世紀前半の坏B(1635)は、底部外面に爪圧痕とヘラ記号がある。(1636)は中村編年Ⅰ-1～2(田辺編年TK73～216)の有蓋高坏片で、底体部外面は手持ちヘラケズリを施す。脚部を欠損した有蓋高坏片(1637)は、口径10cm余の厚手の製品であるが、底体部外面は丁寧なヘラケズリを施す。把手付碗(1638)は、体部下半～底部を手持ちヘラケズ

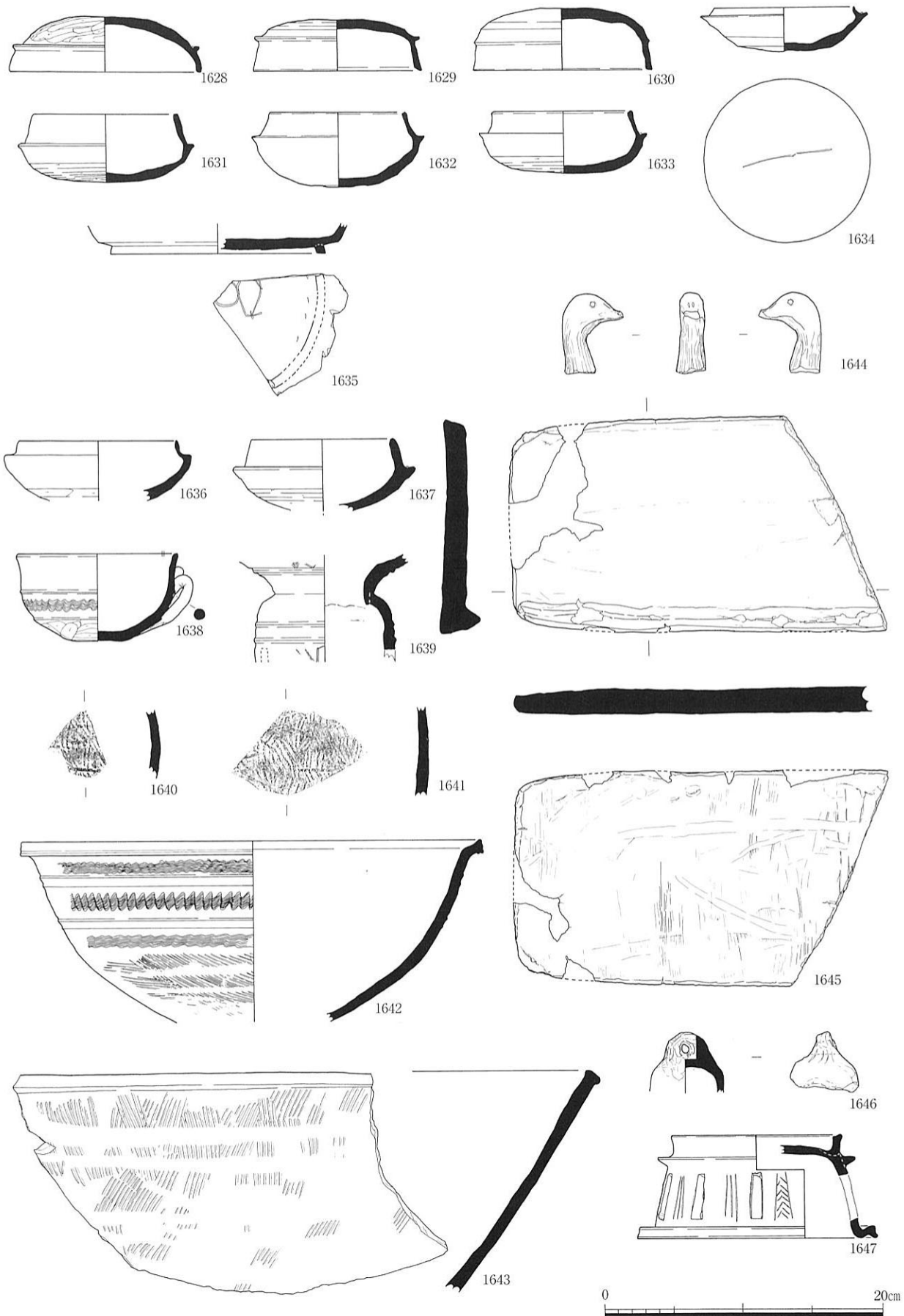


図151 包含層 出土遺物 (4)

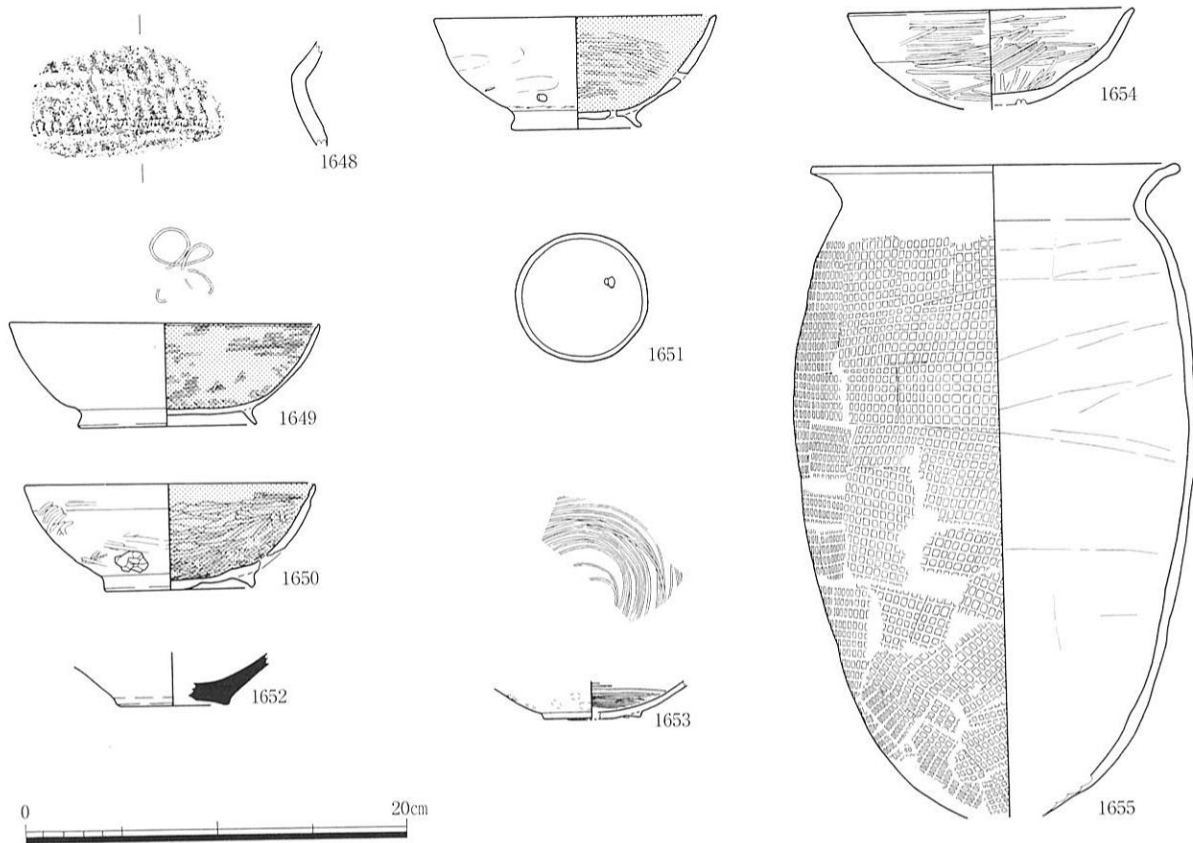


図152 包含層 出土遺物 (5)

りにて成形する。把手上端には球形の装飾あり。中村編年Ⅰ-2 (田辺編年TK216)。筒形器台 (1639) は受部~筒部にかけての破片で、筒部には方形透かしと刺突文がある。(1640・1641) は須恵器壘体部片で、外面に綾杉状タタキ、内面はナデを施す。高坏形器台 (1642) は平坦面をもたせた口縁端部を外反させ、口縁部外面上半には3単位の波状文帯を施文し、下半はタタキのち回転ナデを施す。内面には自然釉が付着する。(1643) は須恵器大形鉢?の口縁部片。口縁端部は外傾する面をもち、体部外面は平行タタキのち回転ナデを加える。内面はナデ。(1644) は鳥形土製品。両目・鼻孔は刺突によって表現するが、やや開き気味のくちばし部分の先端は欠損する。頸部はヘラケズリによって成形する。壺あるいは甗の装飾の一部か。(1645) は須恵質に焼成された埴状土製品で、全面をナデ仕上げする。片方の長側縁に突起を付ける。(1646) は須恵器のイイダコ壺。内面は回転ナデを施す。圈足硯 (1647) は脚部に推定10ヶ所の透かし穴があり、篋による線刻とを交互に配す。陸部は著しく研磨されている。

縄文土器深鉢 (1648) は半截竹管の形状からみて、船元式 (中期前半) 前半の所産であろうか。全体に水磨著しい。(1649~1651) は黒色土器A類埴。内面に細いヘラミガキを密に施す (1649)、幅広のヘラミガキを雑に施す (1650) があり、口径・器高が微妙に変化する。(1650) の体部には焼成後内面からの穿孔が、(1651) の体部・底部には焼成前穿孔あり。(1652) は3片出土した越州窯青磁碗のうちの1点。平安京編年Ⅱ期中。(1653) は樟葉型瓦器埴。(1654) は (図45-95・96) と同一焼成の韓式系土器の高坏で、内外面にヘラミガキを施す。軟質系長胴甕 (1655) は、口縁部及び底部を欠損する。

弥生時代の石器は (1656・1657) の磨製石庖丁、(1658) の打製石剣、(1659) の打製石鎌、(1660) の不定形刃器を図化した。

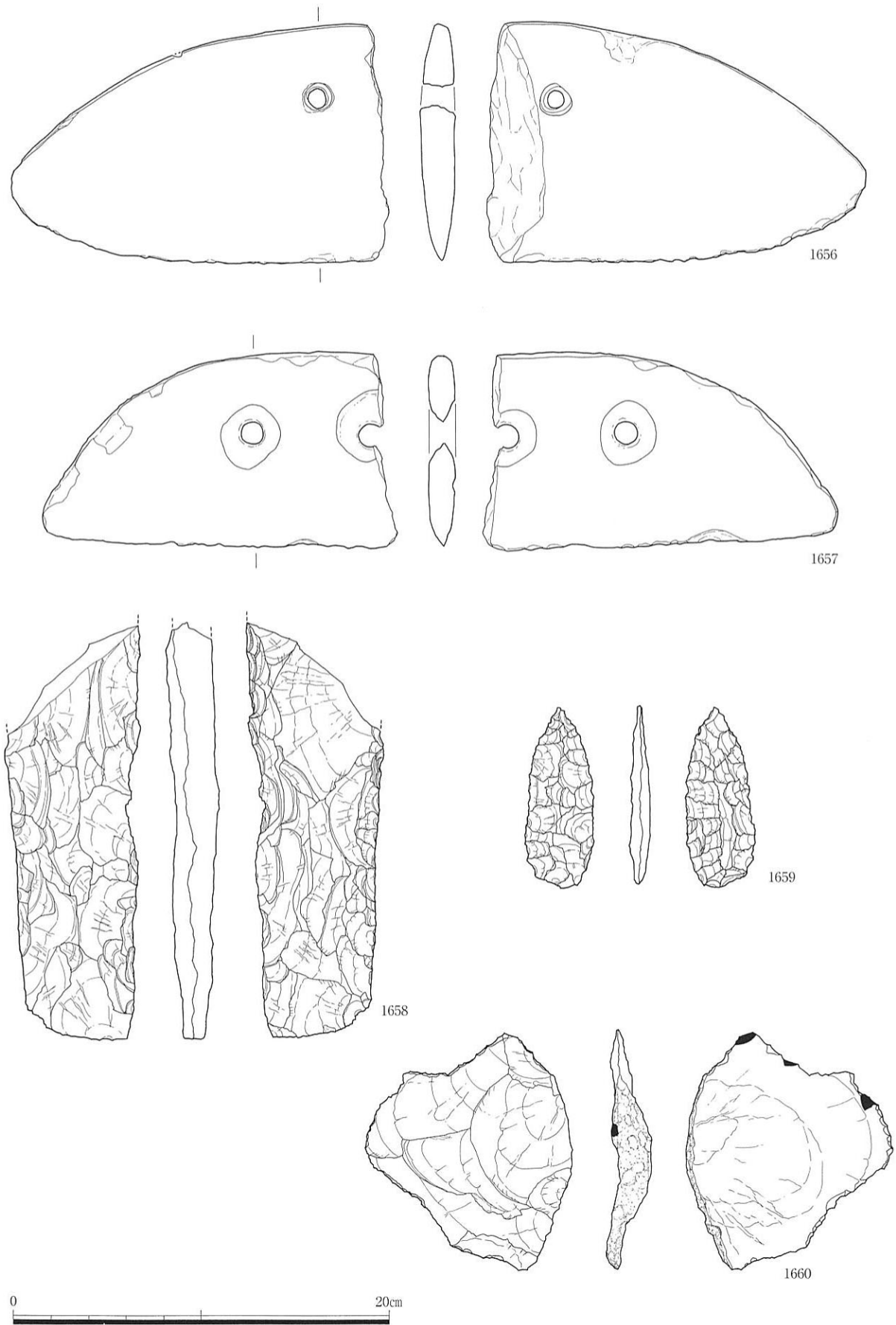


图153 包含層 出土遺物 (6)

第5節 施釉陶器

今回の出土遺物の中で、最も特徴的なものの一つに施釉陶器がある。出土総点数は186片で、その内訳は緑釉単彩陶器3片、緑釉陶器113片、灰釉陶器70片である。出土地区はその大半が調査区西半、つまり98-4・5・6・7区に限定でき、それ以外は98-1区で灰釉陶器が2片、98-2区で緑釉・灰釉陶器が各1片ずつ、3区で緑釉陶器1片・灰釉陶器4片出土したにすぎない。以下平尾政幸氏の分類に従って記載する。¹²⁾

(1661~1663)は緑釉単彩陶器で、(1661)は98-7区第Ⅱ層出土の蓋のつまみ、(1662)は98-5区

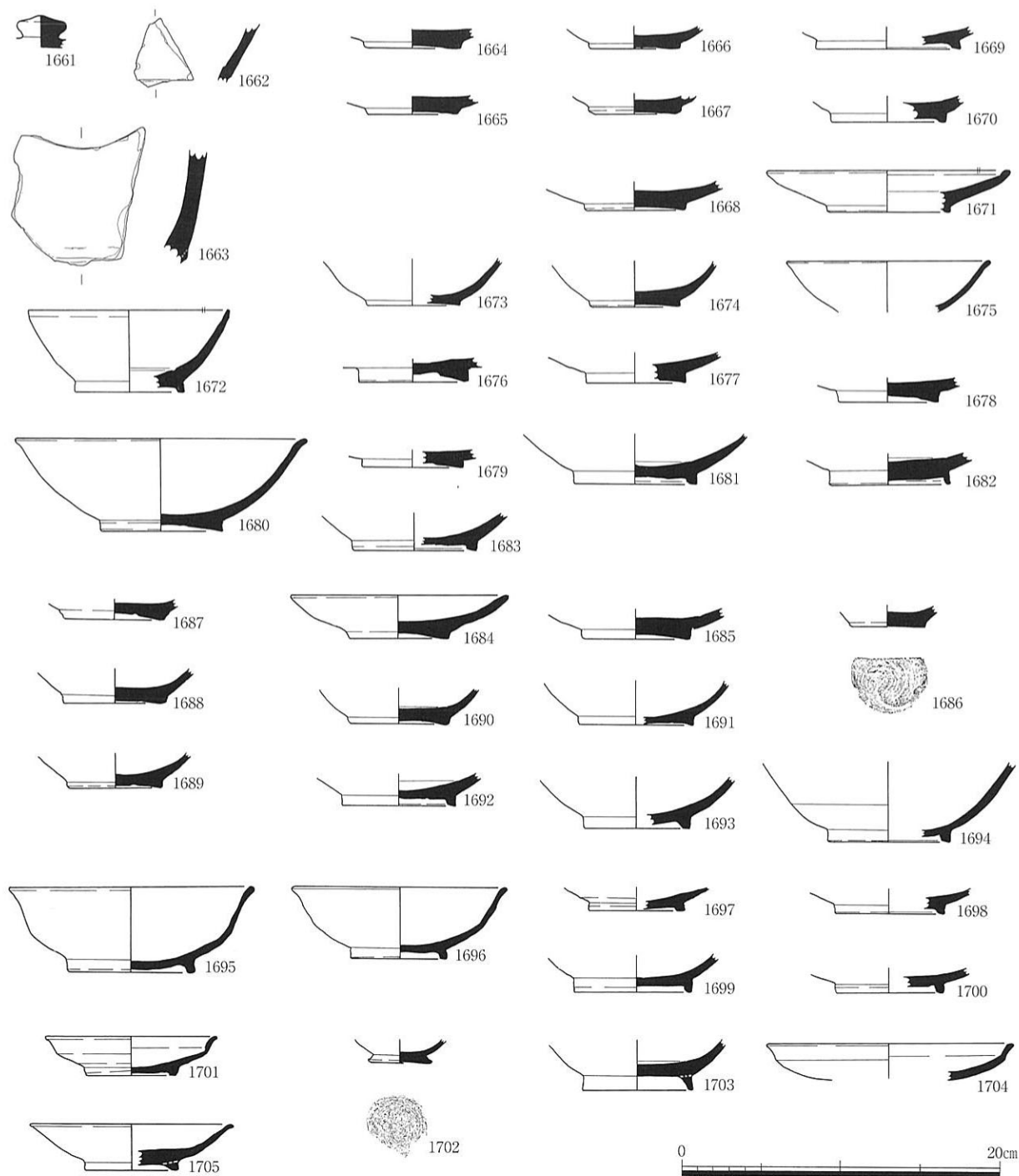


図154 施釉陶器 (1)

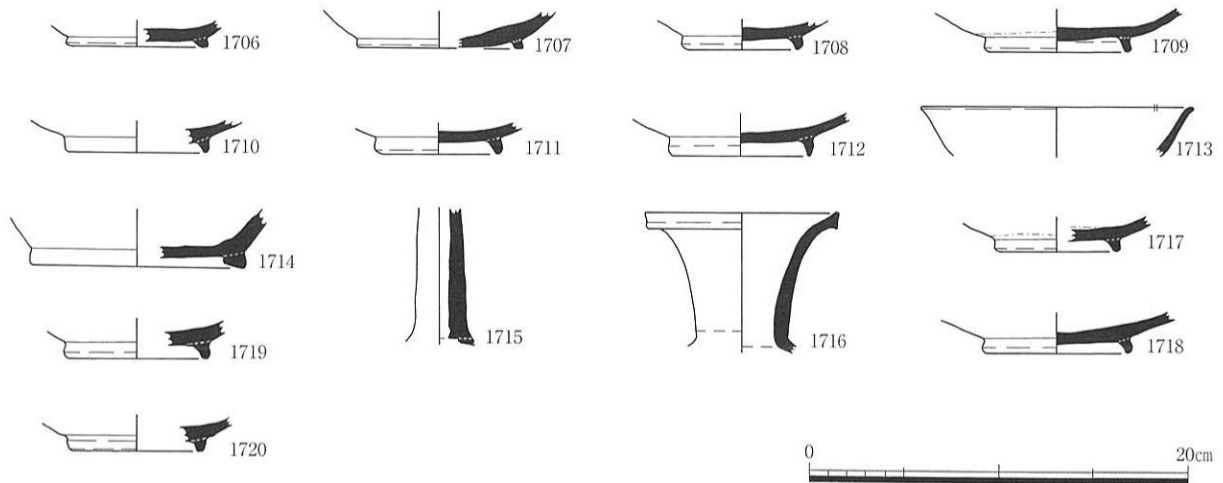


図155 施釉陶器 (2)

第Ⅱ面ピット164から出土した甑の体部下半片、(1663)は98-7区第Ⅰ層から出土した火舎の体部下半片である。いずれも平安京編年Ⅰ期中～Ⅰ期新(780年頃～840年頃、以下平安京編年を省略)の洛北栗栖野産。これまで緑釉単彩陶器の出土遺跡は、平城京内(平城宮・平城京・興福寺・西隆寺・大安寺)、長岡京内、山城国府跡、平安京内(平安宮・平安京・北白川廃寺・北野廃寺)、崇福寺、岸辺瓦窯・栗栖野瓦窯など畿内のごく一部に限定されており、目下大阪府下では藤井寺市葛井寺遺跡¹³⁾以外出土例がない。(1664・1665)は糸切りによる円盤状高台(ⅠA)の碗で、Ⅱ期古(840年頃～870年頃)の洛北産。当該期の資料はこの2片のみ。素地はともに軟質で、淡黄緑色を呈する。(1666～1671)はⅡ期古新相の資料で、(1666～1668)は削出しによる円盤状高台(ⅠA)の碗、(1669・1670)は削出しによる輪高台(ⅠBb)の碗、(1671)は同じくⅠBbの皿である。素地はいずれも軟質で、洛北産。(1672)は削出し輪高台(ⅠBb)の碗で、Ⅱ期古新相～Ⅱ期中(870年頃～900年頃)古相の所産。濃緑色を呈し、素地は硬質。(1673～1683)はⅡ期中古相に属する資料。削出し円盤状高台(ⅠA)で洛北産の(1673～1675)、削出し輪高台(ⅠBa)で洛北産?の(1676～1679)、同じくⅠBaで洛西産の(1680)、削出し輪高台(ⅠBb)で洛西産?の(1681～1683)に分類できる。素地は硬質の(1673・1676・1677・1681・1682)と軟質の(1674・1675・1678・1679・1680・1683)に分れる。(1684～1694)はⅡ期中の製品である。削出し円盤状高台ⅠAの皿(1684)と碗(1685)は洛西産、糸切り円盤状高台ⅠAの耳皿(1686)、洛西産の削出し輪高台ⅠBaの碗(1687～1691)、同じく洛西産の削出し輪高台ⅠBbの碗(1692～1694)に分類できる。素地は軟質の(1685・1686)以外はすべて硬質である。同じくⅠBbの(1695～1700・1704)はⅡ期新(900年頃～930年頃)～Ⅲ期古(930年頃～960年頃)の篠産。皿(1704)以外はすべて碗。素地はいずれも硬質。(1701～1703・1705)はⅢ期古～Ⅲ期中(960年頃～980年頃)の所産。削出し輪高台ⅠBbの皿(1701)は篠産。糸切り円盤状高台ⅠAの耳皿(1702)の底部処理はかなり粗雑化する。貼付け輪高台ⅡBの(1705)は東海産。なお東海産緑釉陶器は(1703)を含め6片を数えるのみである。素地は軟質の(1705)以外すべて硬質。

碗・皿中心だった緑釉陶器に比べ、灰釉陶器は壺などの器種が加わる。(1706・1707)はⅡ期中古相の碗。Ⅱ期中には(1708～1715)があり、水瓶(1715)以外は碗。Ⅱ期中～Ⅱ期新には壺(1716)・碗(1717・1718)がある。(1719・1720)はⅡ期新～Ⅲ期古の碗。

表4 施釉陶器一覽表

高台形態	緑釉 単彩陶器	緑釉陶器					灰釉陶器	計
		0A	I A	I B a	I B b	II B		
I 期中 ～ I 期新	1661～1663 (栗栖野)							3
II 期古		1664・1665 (洛北)						2
II 期古 (新相)			1666～1668 (洛北)他 19片		1669～1671 (洛北) 他3片			28
II 期古 (新相) ～ II 期中 (古相)					1672 他3片			4
II 期中 (古相)			1673～1675 (洛北) 他8片	1676～1679 (洛北?) 他2片 1680(洛西)	1681～1683 (洛西?) 他2片		1706・1707 他1片	26
II 期中		1686(洛西)	1684・1685 (洛西) 他8片	1687～1691 (洛西)	1692～1694 (洛西) 他4片		1708～1715 他51片	82
II 期中 ～ II 期新							1716～1718 他2片	5
II 期新 ～ III 期古					1695～1700 ・1704 (篠) 他18片		1719・1720 他1片	28
III 期古 ～ III 期中		1702			1701(篠)	1703・1705 他4片		8
計	3	4	43	12	48	6	70	186

(注) 4桁のゴシック数字は本書掲載の遺物番号をあらわす。

計は、掲載遺物点数に破片数を加えた総数である。

第6節 墨書・刻書土器

今回の調査で出土した墨書・刻書土器は、墨痕も含めると98片を数える。そのおもな内訳は、第Ⅲ面川200・719から73片、第Ⅲ面井戸565から13片、第Ⅲ面井戸844から5点である。ここでは墨痕の付着した土器も含めすべてを図化し、掲載した¹⁴⁾。

(1721～1793)は第Ⅲ面川200・719から出土したものである。(1721)は内底面にラセン状暗文、放射状暗文を施文する土師器皿Bで、体部外面に稜が巡る。墨書は、「戸」1文字が書かれてあったところに「秋家」を上書きしたらしく、「秋」と「家」の間にやや薄れた「戸」がみえる。8世紀前半の所産。土師器高坏(1722)は、坏部外面に「長」と墨書する。坏部内面に放射状暗文・ラセン状暗文を施文する8世紀前半の所産。口縁端部が外方へ屈曲する土師器皿A(1723)は、底部内面に粗雑なラセン状暗文を、体部には放射状暗文を施し、外面はb手法による。底部外面には「上」を刻書する。8世紀中葉。(1724)は、内面底体部にラセン状暗文や放射状暗文を施す土師器坏もしくは皿片で、b手法による外面には(1723)同様の「上」を刻書する。8世紀前半か。内面底部に粗雑なラセン状暗文がわずかに残る(1725)は、b手法の外面底部に「木」を墨書する。8世紀中葉。内面に放射状暗文を施文する土師器坏A(1726)の口縁部外面に「カ」を記すが、判読不能。8世紀前半。

(1727)は、口縁部内面に連弧状暗文を施文する佐藤編年Ⅱ期古(9世紀第1～第3四半期)の土師器碗A。不調整の低部外面には「福」を記す。土師器碗A(1728)は体部外面不調整ながら、(1727)同様器壁の凹凸はほとんどない。佐藤編年Ⅰ期(8世紀末～9世紀初頭)の所産。底部外面には墨書「根^ㇿ」を記すが、「^ㇿ」は後世の花押のようなものという。同様の墨書土器が、今回の調査区に隣接する東郷遺跡第52次調査で出土している(土師器皿A、8世紀後半)¹⁵⁾。土師器皿A(1729)は佐藤編年Ⅱ期(9世紀前半)頃の所産であるが、不調整の底部外面に「冬」の墨書あり。(1730)は土師器碗Bの底部片で、内面には連弧状暗文が残り、外面には「家」の墨書あり。佐藤編年Ⅱ期古～中(9世紀代)の所産。佐藤編年Ⅱ期の土師器碗(1731)底部外面にも、「家」を墨書する。(1732)は、b手法による土師器坏もしくは皿の底部片で、「南家カ」を記す。8世紀代。(1733)は土師器碗の底部片で、「義」1文字を記す。b手法による土師器坏(もしくは皿)片(1734)には、「方吉」と記す。内面にはラセン状暗文が残り、8世紀前半の所産であろう。(1735)は8世紀代の土師器坏もしくは皿の底部片で、a手法による。底部外面に「福□」の墨書あり。(1736)はa手法による土師器坏皿類で、底部外面に木葉痕が残り、「岡」を記す。底部内面にはラセン状暗文を施す。8世紀前半。(1737)はa手法による土師器坏皿片で、底部外面には墨書を記すが判読できなかった。内面にはラセン状暗文が残る。8世紀前半。8世紀後半頃の須恵器坏B(1738)の底部外面には、爪圧痕とともに墨書「□佐(依カ)女」がある。(1739)も8世紀後半頃の須恵器坏Bである。底部外面には「大川」と記すが、文字はやや滲む。須恵器杯B(1740)の底部外面には、「十十」と墨書するが、筆遣いからみると文字というより記号である可能性が高い。(1741)の墨書は「置」。(1742)は須恵器皿B底部片。外面及び高台には自然釉が付着する。底部外面に記された墨書は、稚拙な筆遣いで「上」と記す。(1740)同様文字というより記号とみるべきかもしれない。8世紀前半の須恵器蓋(1743)外面に記された「上」についても、筆遣いから判断して記号ではないか。須恵器坏B(1744)底部外面には、「□家器」の墨書あり。(1745)は須恵器蓋であろうか。外面には墨書「井カ」がみえる。

(1746)はb0手法で成形された完形品の土師器皿Aで、底部の一部をヘラケズリする。口縁部内面

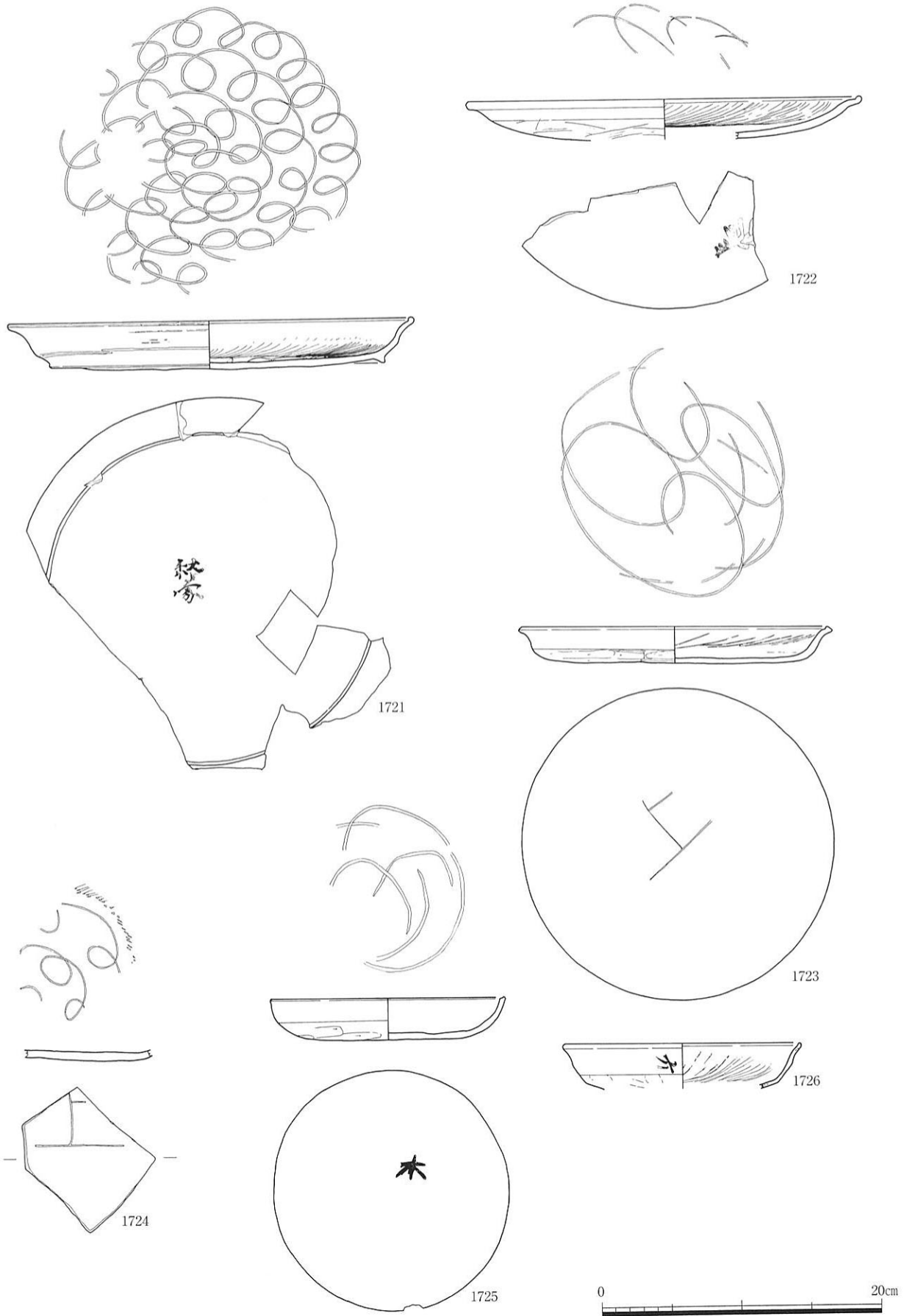


图156 墨書·刻書土器 (1)

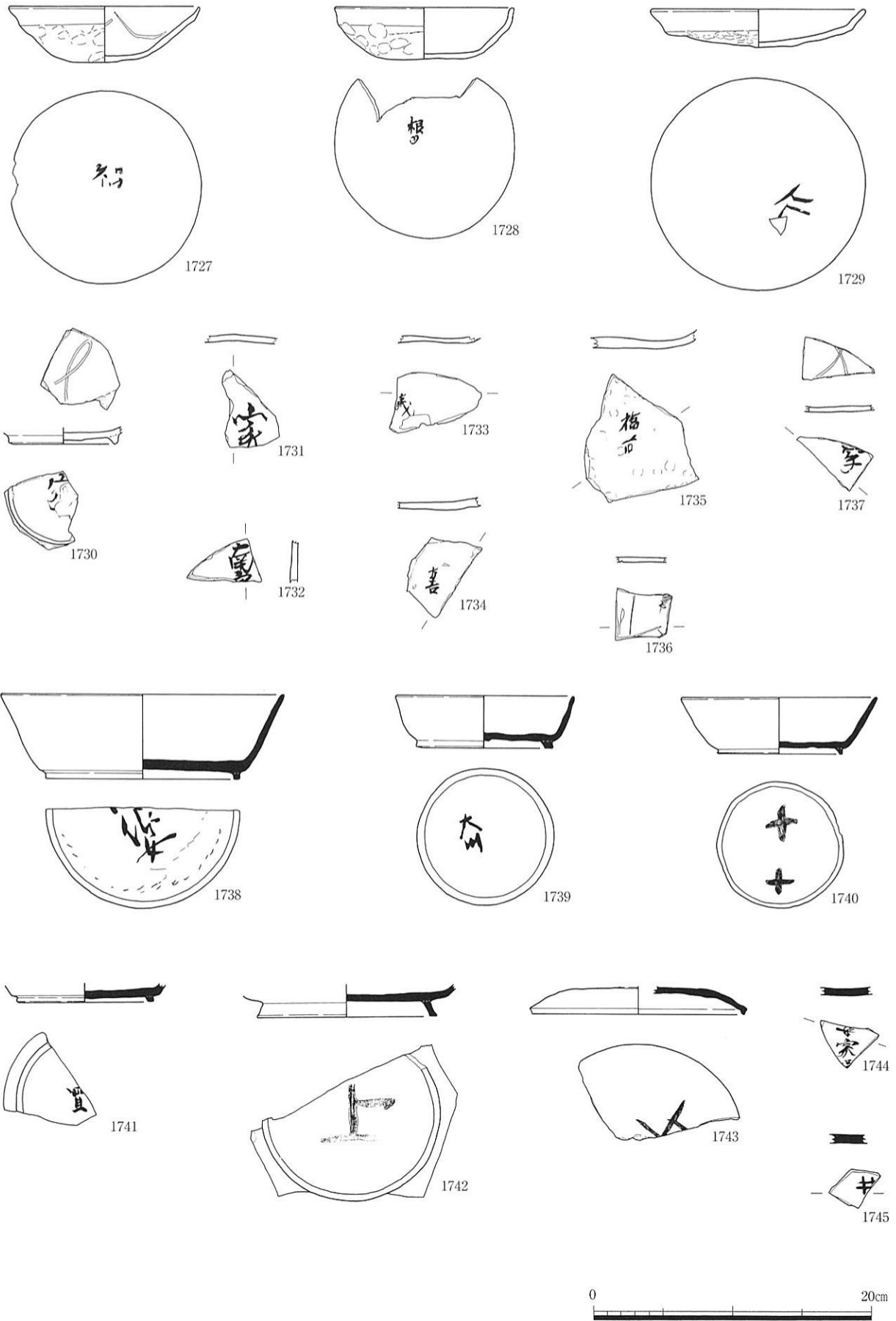


図157 墨書・刻書土器 (2)

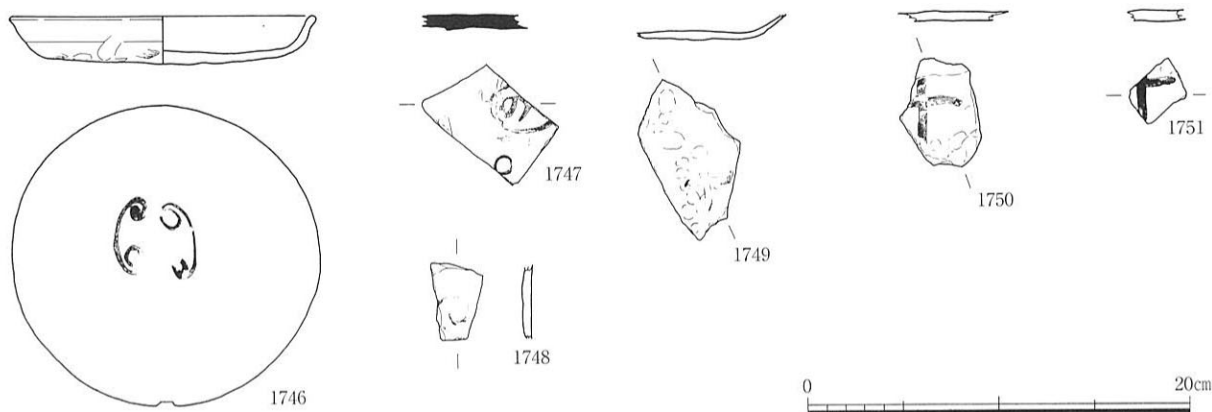


図158 墨書・刻書土器 (3)

及び底部内面の一部には煤が付着する。灯明皿として使用されたものか。底部外面には記号「㊦」を墨書する。8世紀後半。須恵器坏B底部外面(1747)には、平仮名の「の」字のような墨書を記す。(1748)は、奈良時代の土師器坏皿類の底部外面に渦巻き状の墨書を記す。(1749)は、平安時代の土師器碗皿類の底部外面に「十」を墨書する。遺存状態が必ずしも良好ではないので筆遣いが判りにくい、文字とも記号ともみなせる。平安時代の土師器碗(1750)の底部外面にも「十」の墨書あり。筆遣いからみると、文字というより記号ではないか。(1751)についても同様である。

内面にラセン状暗文・放射状暗文のある土師器高坏(1752)は、ヘラケズリを施した外面に墨痕がある。8世紀前半。土師器皿A(1753)は、内面に放射状暗文・ラセン状暗文を施し、外面はa手法による。外面底部中央付近に文字の一部と思しき墨痕あり。8世紀前半。口縁端部を外方へ屈曲させる坏A(1754)は、内面に放射状暗文を施し、外面はb手法による成形。底部外面に文字の一部らしき墨痕あり。8世紀中頃の所産。底部内面に太い連弧状暗文を施文する土師器皿A(1755)は、外面をe0手法で仕上げる。底部外面には判読不能な文字?記号?あり。佐藤編年Ⅱ期古~中(9世紀代)の所産であろう。(1756)は放射状暗文・ラセン状暗文を施文した内面に、光沢のある黒色の付着物あり。底部外面に太く塗りつぶした墨痕あり。8世紀前半。須恵器坏B(1757)の底部外面に、判読不明の墨書あり。内面には煤が付着する。(1758・1759)は平安時代の土師器碗片で、底部外面に墨痕あり。底部内面にラセン状暗文・放射状暗文のある土師器片(1760)には、外面に文字の一部らしき墨痕がある。8世紀前半。(1761)は底部外面に文字の一部らしき墨痕のある、佐藤編年Ⅱ期頃の土師器碗B底部片。(1762)は8世紀代の坏底部片で、判読不能な墨痕あり。平安時代の碗(1763)の底部外面には明らかに文字の一部が見えるが、判読できなかった。(1764)は平安時代の碗A、(1765)は平安時代の皿、(1766)は須恵器坏であるが、それぞれ底部外面に文字の一部らしき墨痕あり。平安時代の碗(1767)底部外面には、焼成前の線刻に墨書を重ねて記す。

(1768~1787)は人面墨書土器の一部で、大半は土師器甕Cに描かれている。(1768)は頸部直下に描いた人面で、繋がった左右の眉と鼻筋、切れ長の目からなるその表情は、貴人を彷彿させる。(1769)は体部上半の人面で、荒々しい筆遣いで目鼻を描く。左目に該当する部分は黒斑と重複するため不明である。(1770)も人面であろうか。短い縦棒を鼻、その両側の墨書を目、鼻の下の墨書を口とすると、極めて幼い表情となる。(1771)は眉の端が大きく曲がり、切れ長の目を表現する。(1772・1773)は目と眉毛の一部が残る。(1774)は眉毛か。(1775)に表現されたのは、眉・目であろうか。(1776)は人面の一部と思しき墨書が残るが、部位は不明。体部外面にヘラケズリを施した甕(1777)にも墨書を施

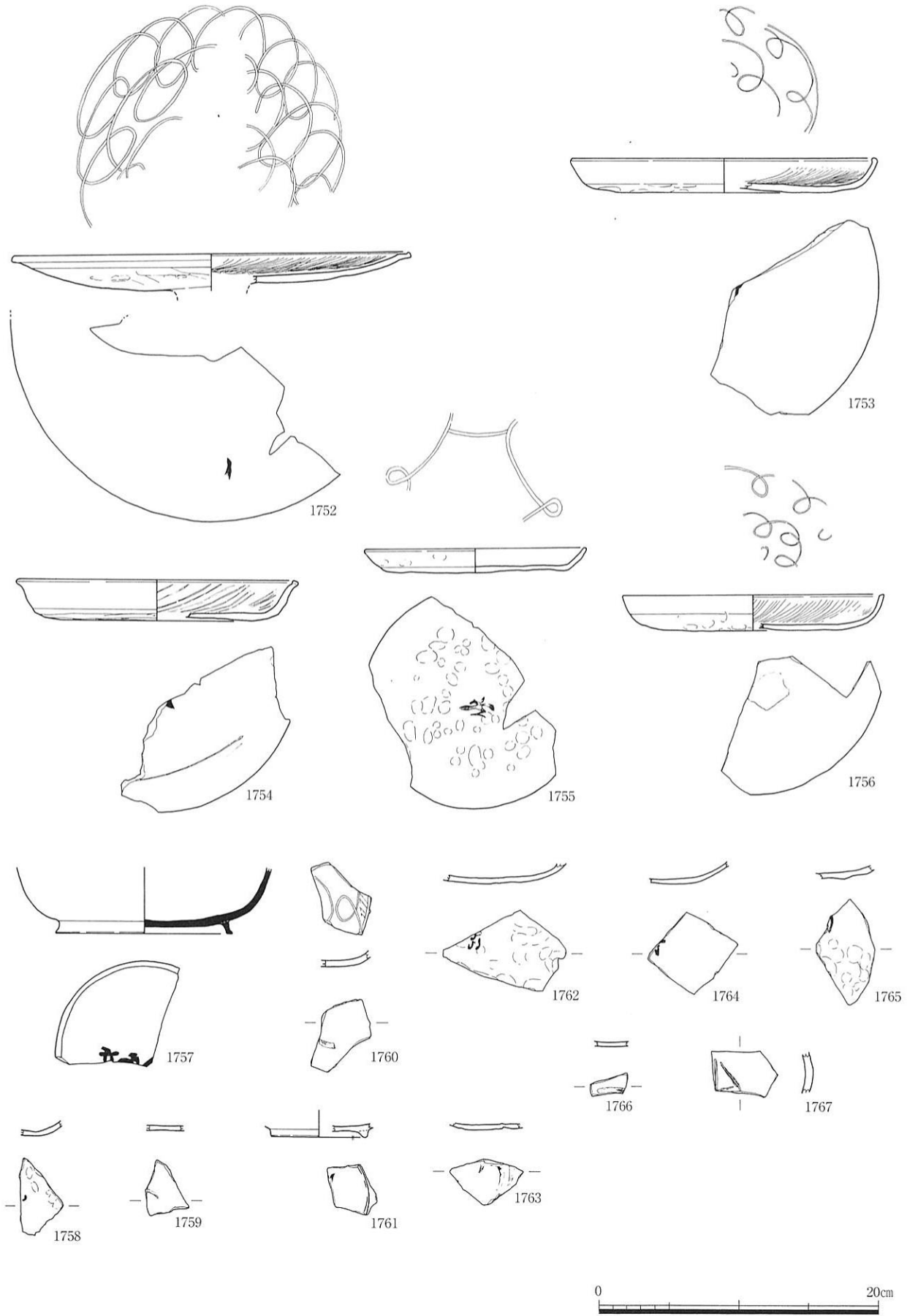


図159 墨書・刻書土器 (4)

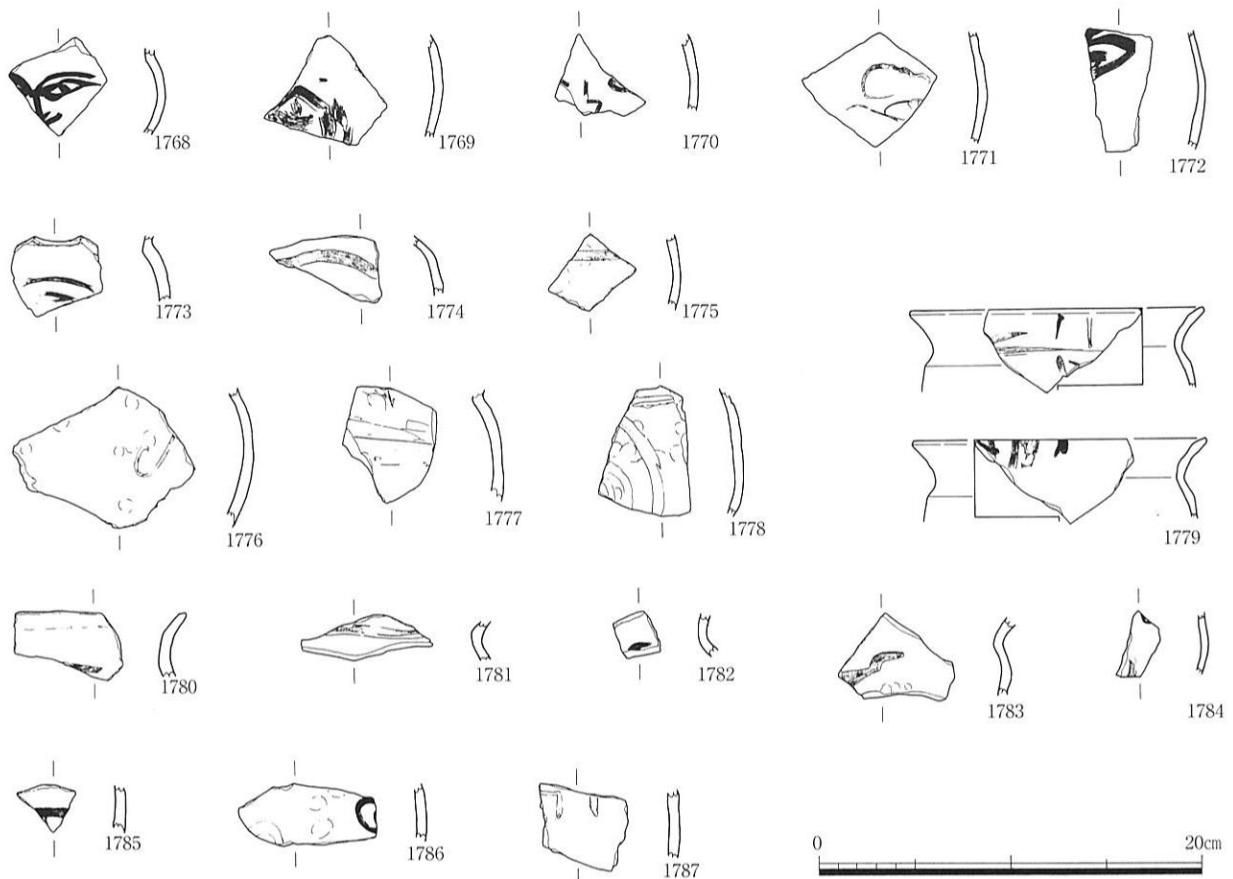


図160 墨書・刻書土器 (5)

すが、それが人面なのか否か、人面ならばどの部位に相当するのか不明である。(1778)は器壁の形状から縦長の破片と判断したが、墨書は眉毛と目を表現しているのかもしれない。(1779)は図示したように、口縁端部内外面及び外面頸部に意味不明の墨書がある。(1780・1781・1782)は頸部外面に墨痕が残る。いずれも人面の一部であろう。(1783)は頸部～体部にかけて人面の一部と思われる墨書あり。(1784・1785)も体部に描かれた人面の一部。(1786)は濃淡異なる2種類の墨書を残す。(1787)も人面の一部か？

(1788～1793)はいずれも98-5・7区側溝掘削時に出土したものであるが、川200・719出土とみなしてよいと判断した。(1788)は平安時代初頭と思しき土師器皿Aで、底部内面には連弧状暗文を施文する。底部外面に記号を墨書きする。a0手法による土師器杯A(1789)は、底部外面に渦巻き文を描く。8世紀後半か。土師器碗A(1790)は、不調整の体部外面の凹凸が少なく、平安時代初頭の所産か。底部外面に「十」を墨書する。e0手法による土師器皿A(1791)の底部外面には、文字の一部と思しき墨痕あり。平安時代初頭。(1792)は人面墨書土器の一部か。(1793)は口縁端部内面に墨痕のある甕Cで、体部片には両目を描く。

(1794)は第Ⅲ面井戸1から出土した人面墨書土器。体部には黒斑がある。人面は目のみで、鼻・口などは描かれていない。3面分を表現するにもかかわらず、目は5つしかない。完形品。(1795)は第Ⅱ面落込み138出土の土師器杯皿類の底部片。外面には「祐」を墨書する。奈良時代の所産か。(1796)は平安時代の碗A底部片。外面の墨書は判読不能。(1797)は第Ⅱ面溝569周辺サブトレ出土の甕C片。おそらく人面墨書土器であろうが、部位など不明。(1798)は98-4区側溝出土の埴。須恵質に焼成され、表面に線刻文字を記すが、文字不明。

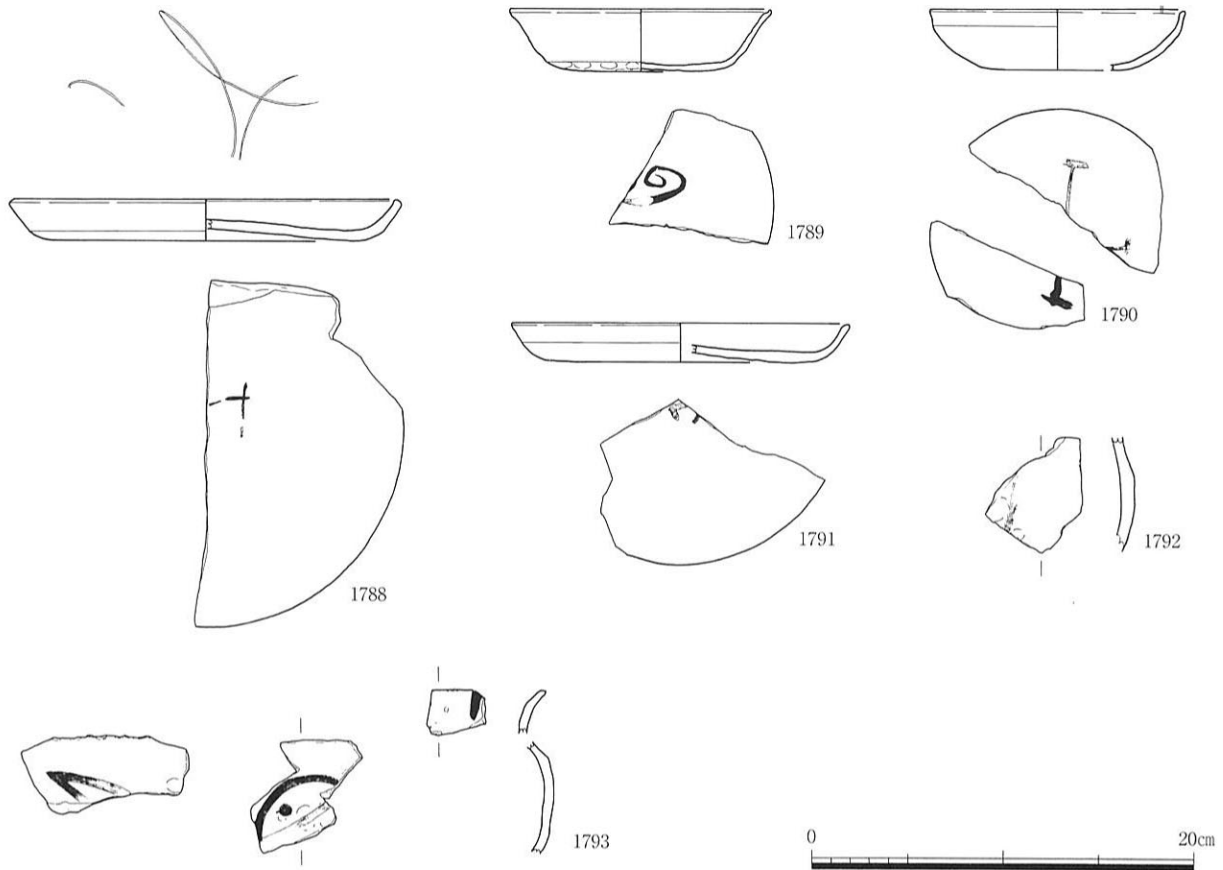


図161 墨書・刻書土器 (6)

(1799~1811) は第Ⅱ面井戸565出土墨書土器。(1799) は内面に細く密なヘラミガキを施し、口縁端部に連弧文を施文した完形品の黒色土器A類碗。底部外面に「子龍」と墨書するが、「龍」とみなすには偏の崩し方に問題が残る。(1800) は黒色土器A類碗の底部片。内面には密なヘラミガキと暗文を施文し、外面には「長」を墨書する。ともに佐藤編年Ⅱ期古~中(9世紀後半~末)。(1801・1802) は土師器碗の底部外面に、「長」を墨書したもの。筆跡は(1800)と(1802)が比較的類似する。(1803) は奈良時代前半の須恵器蓋で、外面に墨書をとどめる。その形態から判断すると、「上」の可能性はある。土師器碗B(1804)は、体部外面に指頭痕を比較的顕著に残し、高台はやや歪な円形である。底部外面に「榮」1文字を墨書する。佐藤編年Ⅱ期古~中の所産。(1805) は土師器碗A。墨書のある底部外面には粘土小片が多量に付着しており、平滑ではない。そのため墨書も不明瞭であるが、「家」と読める。佐藤編年Ⅱ期古(9世紀中葉前後)。(1806) は灰釉陶器皿、(1807) は灰釉陶器碗。前者の墨書は判読不能で、断面に煤付着。後者は「代」か。(1808) は土師器碗皿類の底部片。(1811) に似た筆遣い。文字は「十」か。(1809) は黒色土器A類碗の底部片。内面は丁寧なヘラミガキを施す。底部外面にはわずかに墨書が残るのみであるが、(1805)を参考にすると、「家」の可能性はある。須恵器(1810)の回転糸切り底にも墨書が残る。文字か記号か判断しがたい。(1811) は体部外面を比較的平滑に仕上げた土師器碗A。底部外面に「十」を墨書するが、筆遣いから判断すると、(1808)同様記号の可能性はある。(1812) は第Ⅱ面井戸566出土の黒色土器A類碗の底部片である。内面は丁寧なヘラミガキを施し、底部外面には「大」と線刻文字を記す。やはり9世紀後半の所産。土師器碗or皿類(1813)の底部外面にも墨痕あり。(1814~1818) は第Ⅲ面井戸844出土墨書土器。黒色土器A類碗(1814)は、口縁端部内側に1条の沈線が巡り、体部から底部にかけて粗いヘラミガキを施す。底部外面には「大」を墨書。

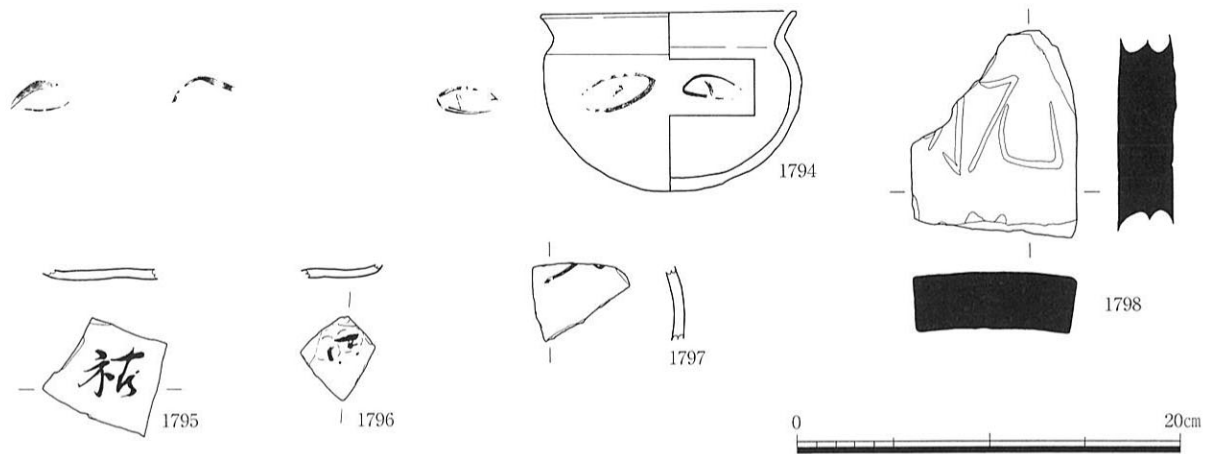


図162 墨書・刻書土器 (7)

(1815) は土師器碗Bで底部外面に痕跡的な高台がつく。墨書は体部外面に「大」と記す。土師器碗A (1816) の底部外面にも「大」の墨書あり。これら3点の「大」の墨書は微妙に形態が異なる。土師器碗B (1817) は、成形時底部付近に穴が開いたらしく、内側より粘土を補強する。底部外面には全く用を足さない高台が残る。墨書は「長門」で (1818) に比べ文字は丁寧である。土師器碗A (1818) の底部外面に「長門」の墨書あり。これらは佐藤編年Ⅱ期新 (10世紀後半) にあたる。

表5 墨書・刻書土器一覧表

番号	器種	記載内容	記載位置	墨/刻	出土遺構・層位	時期	備考
1721	土師器皿B	「秋家」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	施設
1722	土師器高坏	「長」	坏部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1723	土師器皿A	「上」	底部外面	刻書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1724	土師器坏 or 皿	「上」	底部外面	刻書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1725	土師器皿A	「木」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1726	土師器坏A	「オ」	体部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1727	土師器碗A	「福」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	佐藤Ⅱ古	吉祥句
1728	土師器碗A	「根」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	佐藤Ⅰ	個人名
1729	土師器皿A	「冬」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	佐藤Ⅱ	
1730	土師器碗B	家	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	佐藤Ⅱ古～中	施設
1731	土師器碗	家	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	佐藤Ⅱ	施設
1732	土師器坏 or 皿	「南×」[家カ]	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代	施設
1733	土師器碗	「義」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平安時代	吉祥句
1734	土師器坏 or 皿	「方吉」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	吉祥句
1735	土師器坏 or 皿	「福」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代	吉祥句
1736	土師器坏 or 皿	岡	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代前半	個人名
1737	土師器坏 or 皿	「口」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1738	須恵器坏B	「口佐(依カ)女」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代後半	個人名
1739	須恵器坏B	「大川」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代後半	
1740	須恵器坏B	「十十」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代	
1741	須恵器坏B	「置」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代	
1742	須恵器皿B	「上」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代	
1743	須恵器蓋	「上」	外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代前半	
1744	須恵器坏B	口家器	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719		
1745	須恵器蓋?	口(井カ)	外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719		
1746	土師器皿A	㊦	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅳ	
1747	須恵器坏B	記号	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719		
1748	土師器坏 or 皿	記号	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代	
1749	土師器碗 or 皿	「十」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平安時代前半	
1750	土師器碗	「十」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平安時代	
1751	土師器碗	口(十カ)	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平安時代	
1752	土師器高坏	墨痕	坏部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	奈良時代前半	
1753	土師器皿A	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1754	土師器坏A	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	
1755	土師器皿A	「口」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	佐藤Ⅱ古～中	
1756	土師器皿A	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川 200・719	平城宮Ⅲ	

番号	器種	記載内容	記載位置	墨/刻	出土遺構・層位	時期	備考
1757	須恵器環B	□ □	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代前半	
1758	土師器埴	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	平安時代	
1759	土師器埴	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	平安時代	
1760	土師器環 or 皿	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	平城宮Ⅲ	
1761	土師器埴B	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	佐藤Ⅱ	
1762	土師器環 or 皿	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	
1763	土師器埴	「□」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	平安時代	
1764	土師器埴A	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	平安時代	
1765	土師器皿	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	平安時代	
1766	須恵器環	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	
1767	土師器埴	記号	底部外面	墨/刻	第Ⅲ面川200・719	平安時代	
1768	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1769	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1770	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1771	土師器甕		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1772	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1773	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1774	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1775	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1776	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1777	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1778	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1779	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1780	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1781	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1782	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1783	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1784	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1785	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1786	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1787	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1788	土師器皿A	記号	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	佐藤Ⅰ	
1789	土師器環A	記号	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代後半	渦巻き
1790	土師器埴A	「十」	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	佐藤Ⅰ	
1791	土師器皿A	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	佐藤Ⅰ	
1792	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1793	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面川200・719	奈良時代	人面
1794	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面井戸1	平城宮Ⅵ	人面
1795	土師器環 or 皿	「祐」	底部外面	墨書	第Ⅲ面落込み138	奈良時代	吉祥句
1796	土師器埴A	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅲ面川410	平安時代	
1797	土師器甕C		体部外面	墨書	第Ⅲ面溝569	奈良時代	人面
1798	須恵質用途不明品	□	表面?	刻書	側溝	不明	
1799	黒色土器A埴	「子龍」	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	佐藤Ⅱ古～中	
1800	黒色土器A埴	「長」	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	佐藤Ⅱ古～中	
1801	土師器埴A	長	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	佐藤Ⅱ古～中	
1802	土師器埴A	長	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	佐藤Ⅱ古～中	
1803	須恵器蓋	上	体部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	奈良時代前半	
1804	土師器埴B	「榮」	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	佐藤Ⅱ古～中	吉祥句
1805	土師器埴A	「家」	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	佐藤Ⅱ古	施設
1806	灰釉陶器皿	□	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	平安京Ⅱ中	
1807	灰釉陶器埴	「□」〔代カ〕	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565	平安京Ⅱ中	
1808	土師器埴or皿	□〔十カ〕	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565		
1809	黒色土器A埴	□〔家カ〕	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565		施設
1810	須恵器埴	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565		
1811	土師器埴A	「十」	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸565		
1812	黒色土器A埴	「大」	底部外面	刻書	第Ⅱ面井戸566	佐藤Ⅱ古～中	
1813	土師器埴or皿	墨痕	底部外面	墨書	第Ⅱ面井戸566		
1814	黒色土器A埴	「大」	底部外面	墨書	第Ⅲ面井戸844	佐藤Ⅱ新	
1815	土師器埴B	「大」	体部外面	墨書	第Ⅲ面井戸844	佐藤Ⅱ新	
1816	土師器埴A	「大」	底部外面	墨書	第Ⅲ面井戸844	佐藤Ⅱ新	
1817	土師器埴B	「長門」	底部外面	墨書	第Ⅲ面井戸844	佐藤Ⅱ新	
1818	土師器埴A	「長門」	底部外面	墨書	第Ⅲ面井戸844	佐藤Ⅱ新	

凡例：「」は文字が完結していることを示す。
 ×は少なくとも一字以上を推定したもの
 □は欠損文字のうち字数を確認できるもの
 □ □は欠損文字のうち字数を確認できないもの
 カは疑問の残るもの

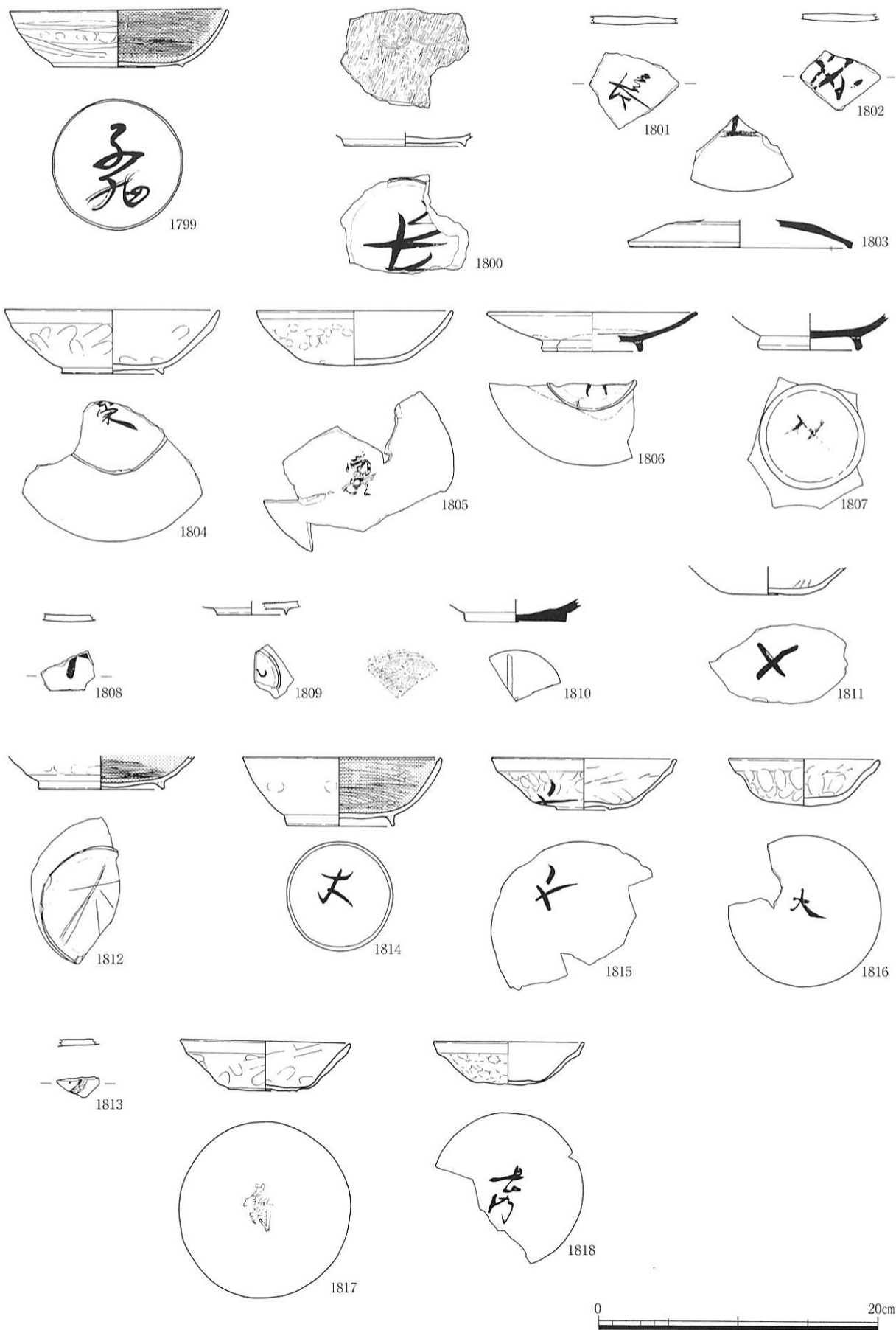


图163 墨書·刻書土器 (8)

第7節 瓦

瓦は98-1~7区の遺構・包含層中から計1227片出土した。その大半は細片化した平瓦・丸瓦であったが、その中に古代・中世の軒瓦が計7片あった。出土瓦を時期別にみると、近世瓦257片、中世瓦175片・古代瓦795片を数え、古代瓦が約65%を占める。また古代瓦の平面分布をみると、特に98-4区西半、98-5区、98-6区南半に集中する。

(1819~1825)は軒瓦である。(1819)は第Ⅲ面ピット733出土の複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。中房には1+6個の蓮子を配し、細長い2本の子葉は花卉中央の一段低い部分に表現し、弁中央には稜線をもたない。2本の圈線で挟まれた部分には珠文を巡らせる。外縁は斜縁。瓦当裏面はヘラケズリを施す。中房から外縁にかけて筈傷あり。讃岐国分寺僧坊創建瓦SKM03Aと同範¹⁶⁾。同型式の(1820)は第Ⅱ面溝140から出土した。この個体に筈傷はなく、(1819)とは接合しない。第0層出土の軒平瓦(1821)は、中心飾り付近の破片であるが、瓦当表面の剥離が著しく文様は不鮮明。下外区の鋸歯文帯と内区の中心飾りの一部がわずか残る。曲線顎。同じく第0層出土の(1822)も同一型式である。これは讃岐国分寺SKH09と同範で、東郷遺跡においても出土例がある。軒平瓦(1823)は第Ⅲ面土坑502出土で、瓦当面には鋸歯文と界線が残るだけである。曲線顎。(1824)は軒平瓦瓦当端の破片で、界線及び子葉が残る。第Ⅲ層出土。(1825)は段顎をもつ半截菊花唐草文軒平瓦で、第Ⅱ層出土。

平瓦には、凸面に有軸綾杉文タタキを施す(1826)、回転ナデを施す(1827)、縄タタキを施す(1828~1830)があり、いずれも凹面は模骨痕が残る。その他1枚作りで、凸面に縄タタキを施す(1831・1834・1835・1837・1838)、凸面に斜格子タタキを施す(1836)がある。(1838)の側縁には、凹型成形台使用を物語るバリが残る。丸瓦は(1832・1833・1839)を図化した。このうち(1828・1839)は全長のわかる資料である。

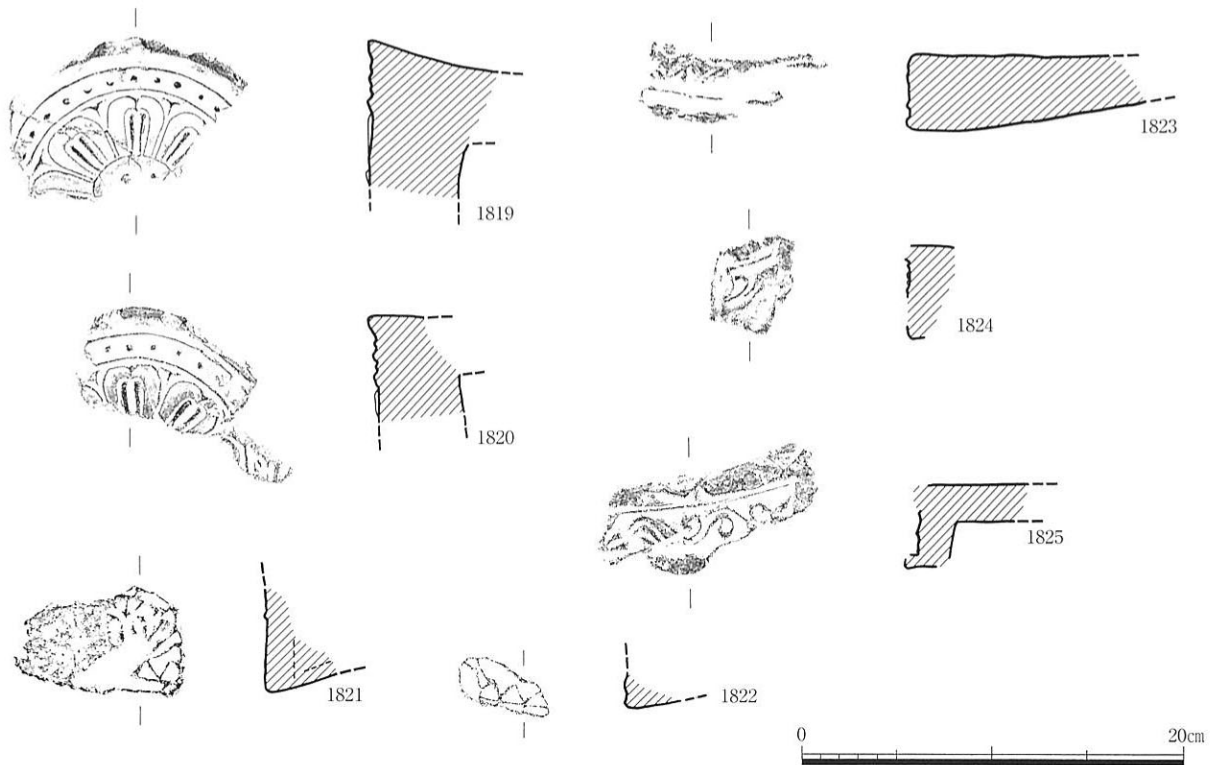


図164 瓦(1)

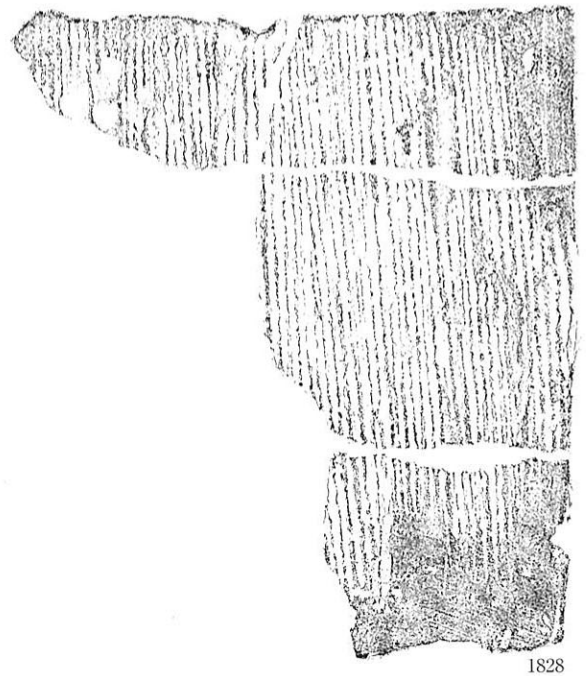
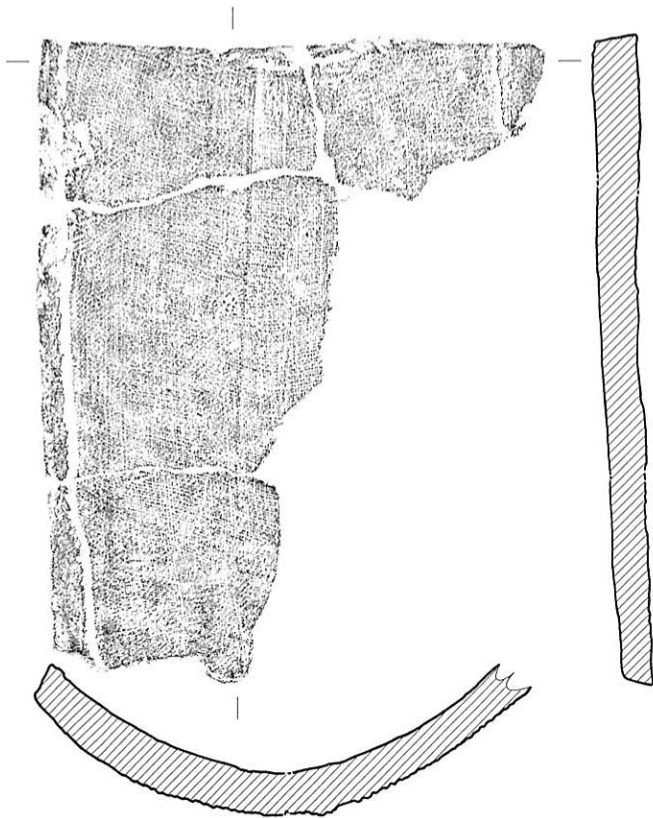
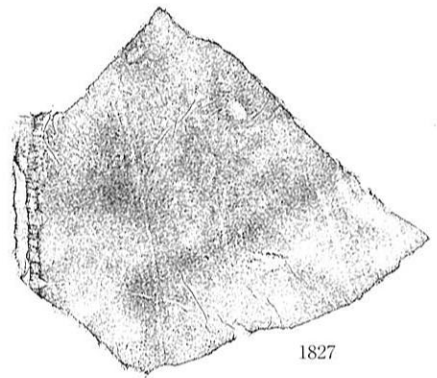
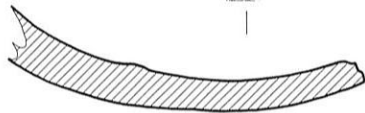
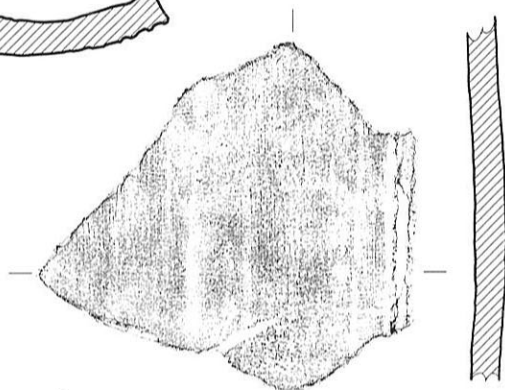
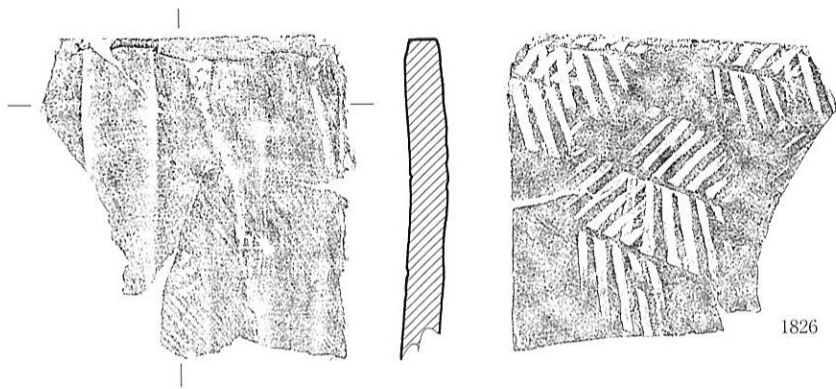


图165 瓦 (2)

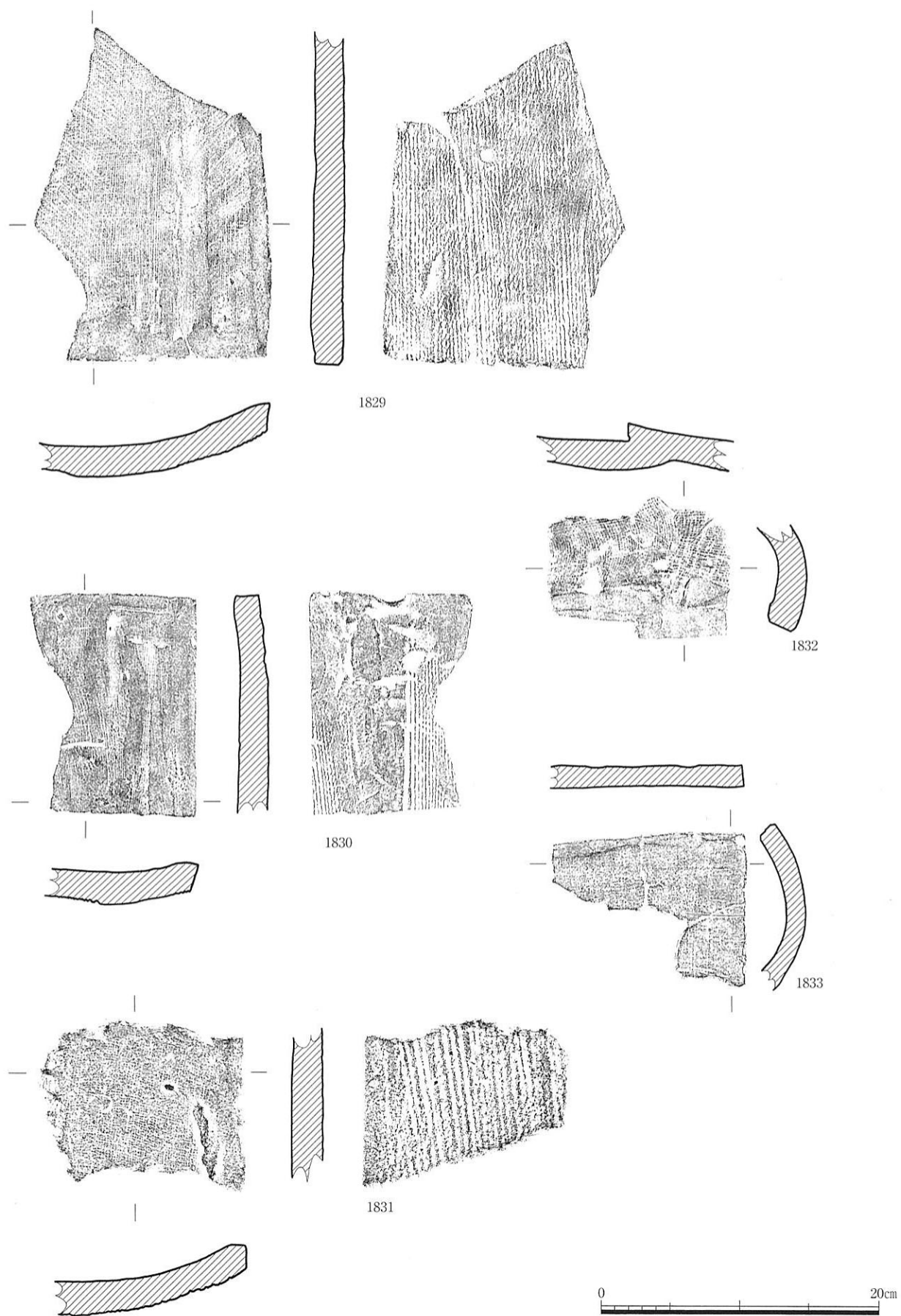


図166 瓦 (3)

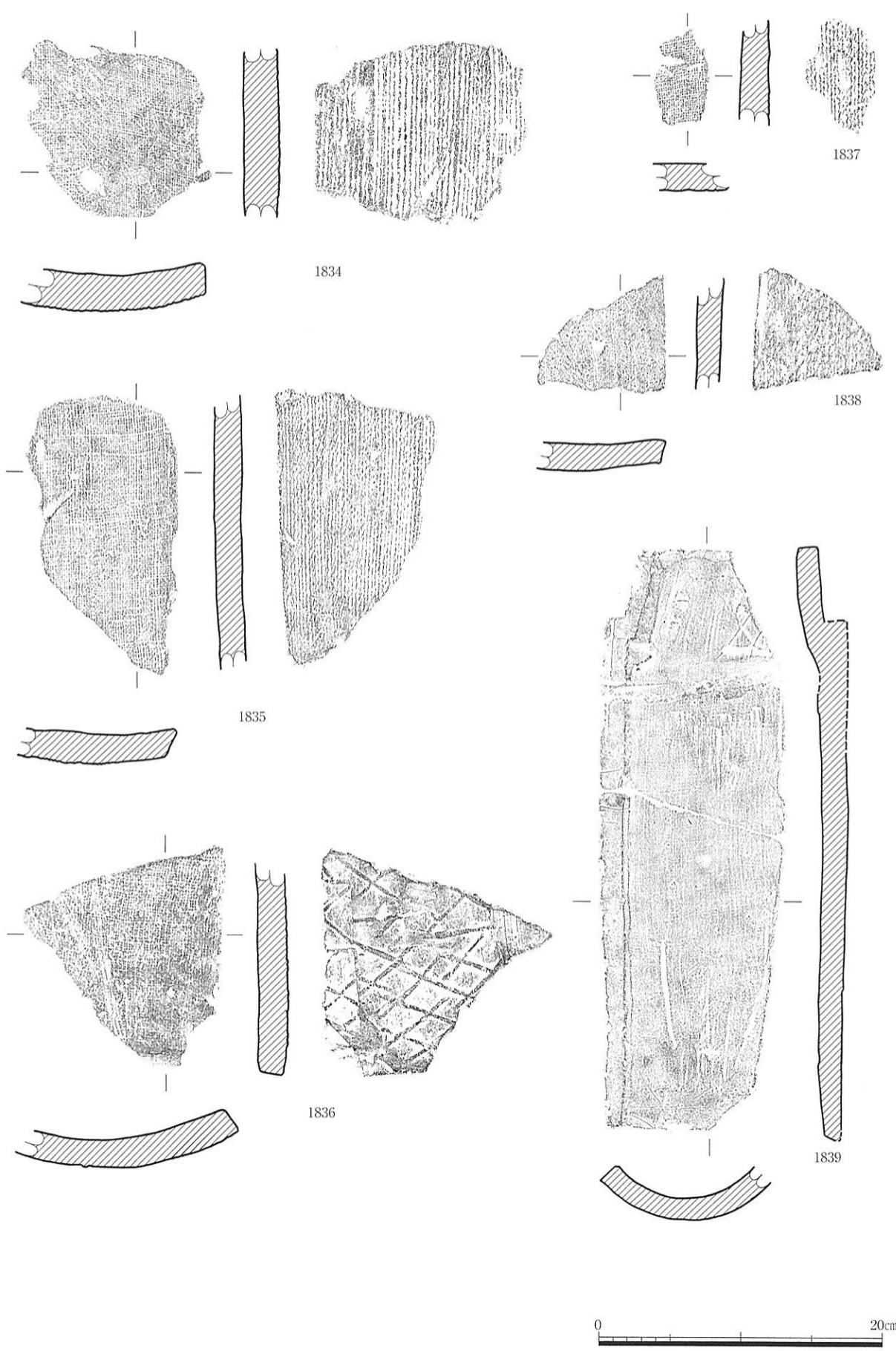


图167 瓦 (4)

第8節 その他の石製品

弥生時代の打製石器・磨製石器や砥石を除く石製品をまとめた。具体的には紡錘車、有孔円板などであるが、概して調査区西半にまとまって出土した。

紡錘車は2点出土（1840・1841）した。（1840）は外面に装飾を施さず、表面には成形時の擦痕が残る。98-5区第Ⅲ面川200出土で、表面には鉄分が著しく付着。鋸歯文を施す（1841）は98-7区第Ⅰ層出土。表面の欠損が著しい。

有孔円板は6点出土したが、大きさからみて径3cm前後の（1842～1844）、径2.5cm前後の（1845）、径2cm未満の（1846・1847）に分類できる。いずれも表面に成形時の擦痕が残る。98-6区第Ⅱ層出土の（1842）は中央に2ヶ所の穴をあけ、やや楕円形を呈する（1843）は中央に1ヶ所穿孔する。98-3区第Ⅲ面落込み416出土。また（1844）は何らかの理由で穴を開け直したもの。98-6区第Ⅱ層出土。穿孔部分で折れた（1845）は98-7区第Ⅲ面川719出土。小形の（1846・1847）はともに98-5区第Ⅲ面川200出土である。

（1848）は径4cm弱の円板で、表面には擦痕が顕著に残る。有孔円板製作途次で放棄したものか。98-7区第Ⅲ面井戸721から出土した。

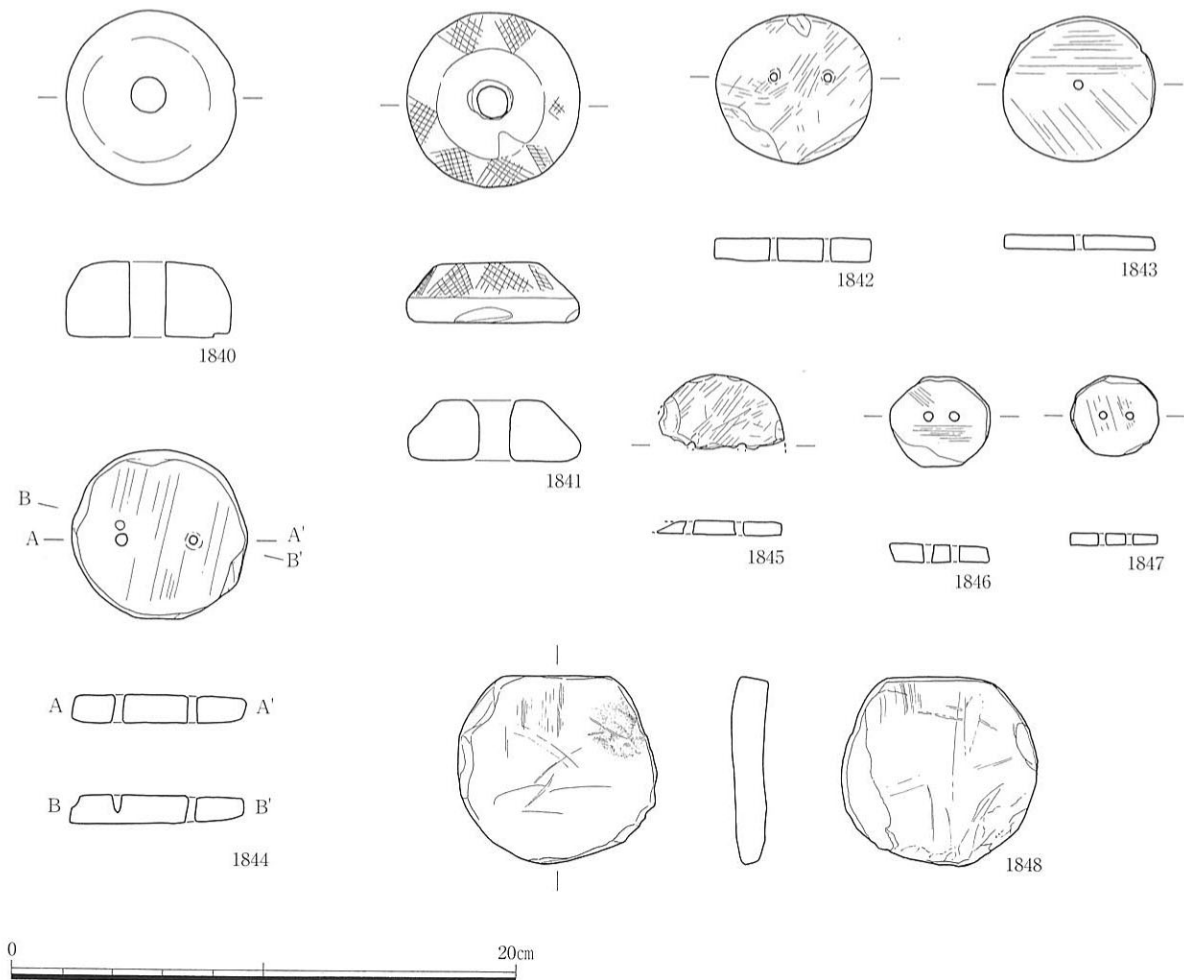


図168 紡錘車・有孔円板・不明石製品

第9節 金属製品

金属製品には銅製銚帯、皇朝銭以外に角釘を含む鉄製品8点が出土したが、本来の形状のわかるものはなく、今回の報告では割愛した。

(1849)は98-7区第Ⅲ面川719から出土した銅製銚帯(巡方)で、鑄造された表金具とその四隅に残る銚足、銚留された裏金具からなる。ともに横幅2.8cm、縦幅2.5cm、銚で固定された両者の間隔は2mmをはかる。表金具の四周には稜が巡り、中央部に向かって緩やかな凹面をなす。下方には横長の透かし孔がある。遺存状態は極めて良好で、現在もお赤銅色を呈する。表金具表面・側面には仕上げの際の研磨痕が明瞭に観察でき、部分的ではあるが黒漆が残る。

今回の調査で出土した皇朝銭は70枚を数え、資料編表18に示したように1遺跡出土事例としては、摂河泉地域で五指に入る。出土地点は図20に示したように第Ⅲ面川200で2ヶ所、第Ⅲ面川719で数カ所、さらに第Ⅲ面落込み341¹⁷⁾である。なお個々の計測値は表6に示した。

(1850~1877)は98-5区第Ⅲ面200で出土した和同開珎28枚である。すでに記したように、これらは本来緡銭であったものが、何らかの理由で散乱したものである。出土当初はいずれも赤銅色を呈していた。28枚の和同開珎の銭文をみると、極めて鮮明な(1852)もあるが、鑄型の劣化のため文字がやや肉太になった(1875)や、文字に傷が入った(1873)などがある。しかし(1855)を除くすべての表面に研磨痕が残り、顕著なもの(1858・1859)から、ごくわずかに研磨痕の残る(1869・1871)までである。このように一群の和同銭は、未使用もしくはそれに近い状態だったことがわかる。また湯口にあたる部分が欠損した(1852)やその痕跡の残る(1894)、鑄不足の(1876)がある。

(1878~1907)は、98-5拡張部第Ⅲ面川200から緡銭状態で出土した30枚の和同開珎である。(1886・1892)を除くすべてに程度の差はあれ研磨痕が残り、ほとんど未使用状態であったらしい。(1889)は今回出土した和同開珎の中で最も重く、5.1gをはかる。

(1908~1918)は98-7区第Ⅲ面川719出土。3枚の和同開珎以外に隆平永寶(1911)・富壽神寶(1913)・承和昌寶(1915)にも研磨痕残る。長年大宝(1916)・饒益神寶(1917)の文字は不鮮明で、文字の鮮明な承和昌寶(1915)ともども裏面の型ずれが著しい。また承和昌寶の裏面には、縁が重なった状態で鑄造したため、その一部が削り取られずに残る。このように小形銭は表面重視の傾向が著しい。

その他第Ⅲ面落込み341でかなり腐蝕の進んだ萬年通寶が1枚出土した。

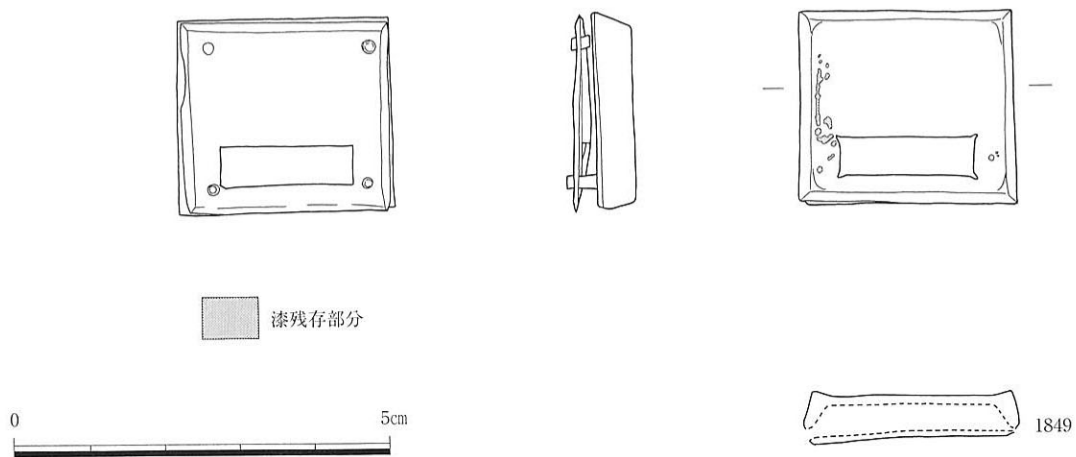


図169 銚帯

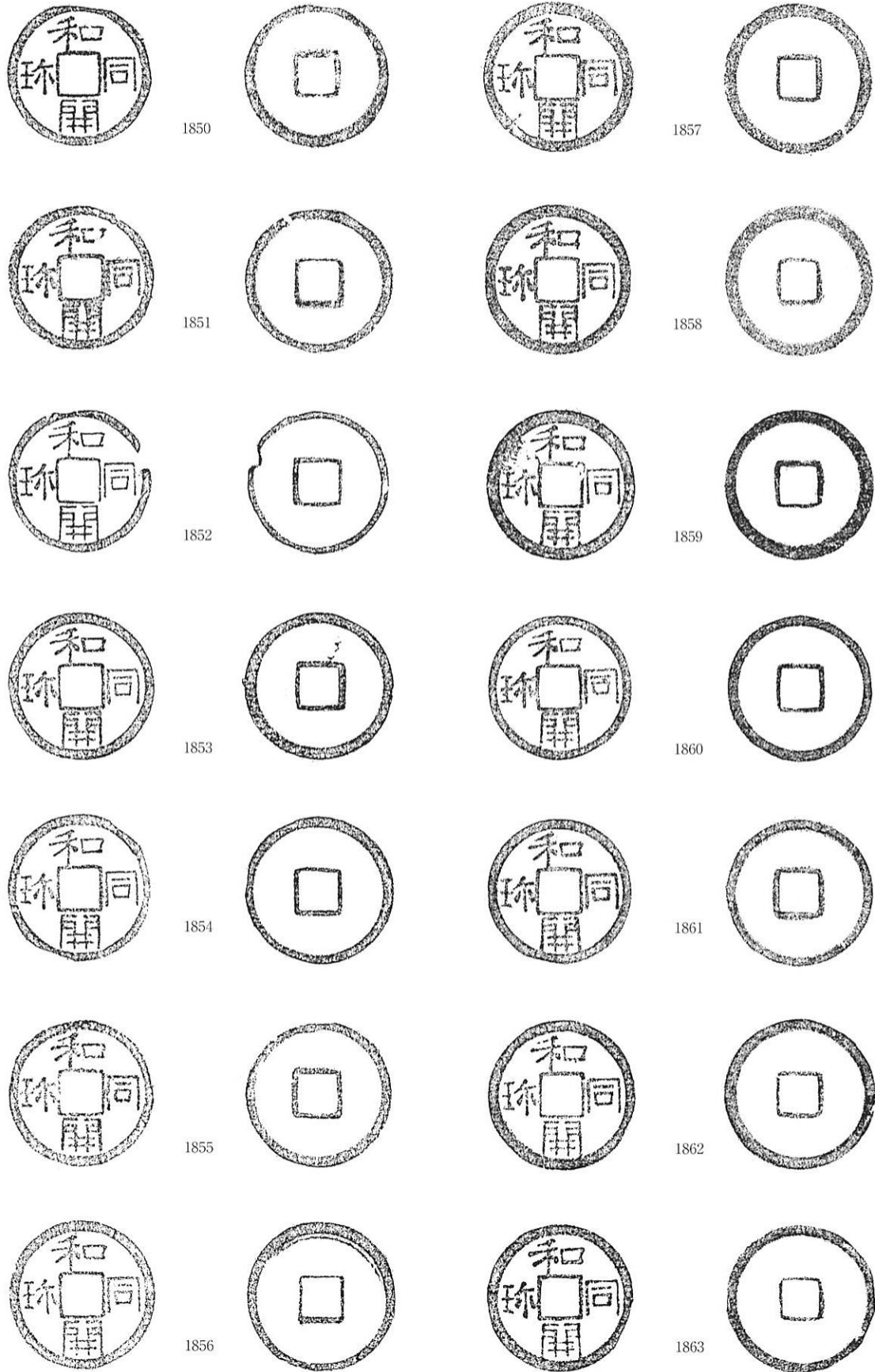


図170 皇朝錢 (1)

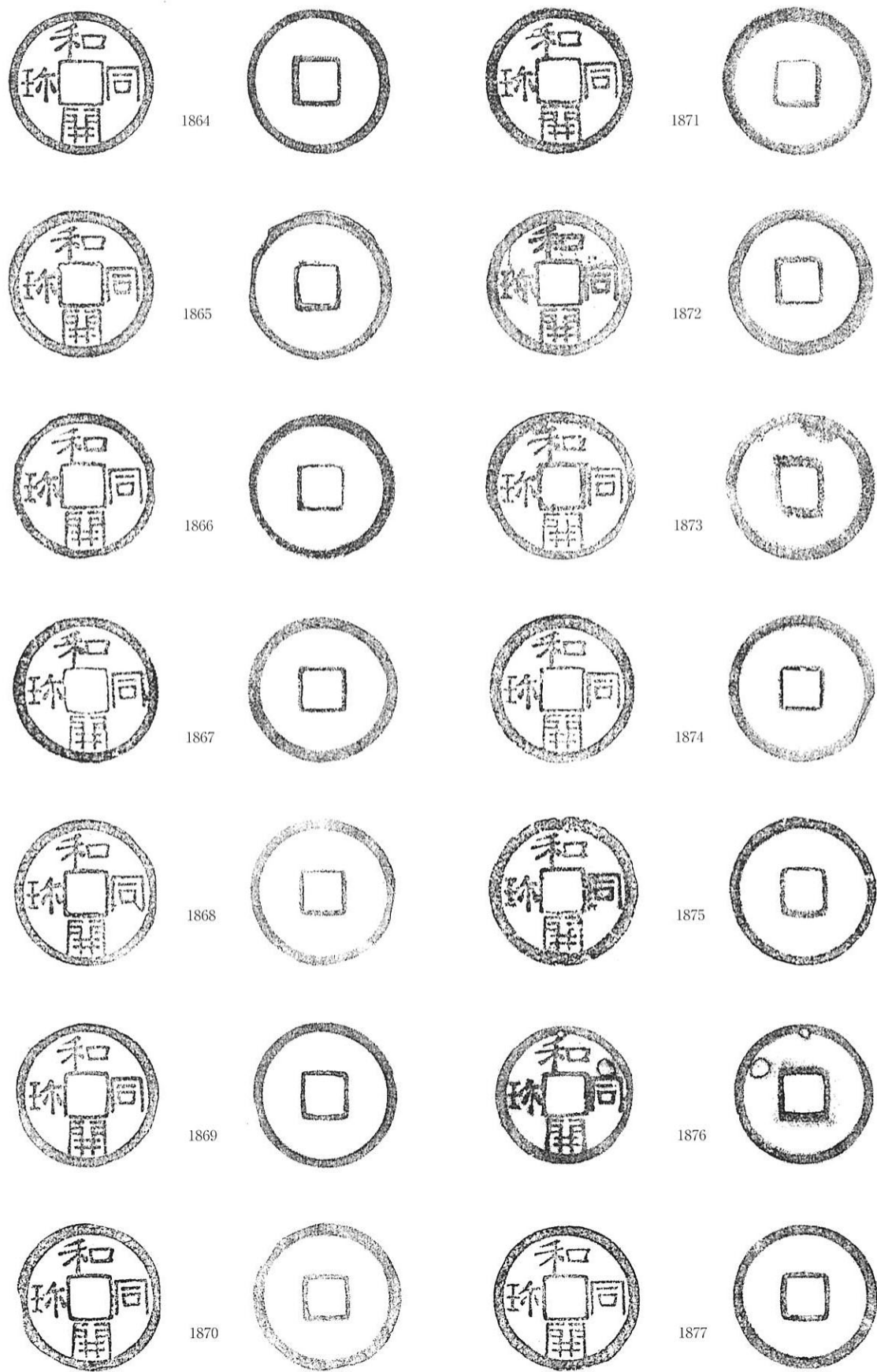


图171 皇朝钱 (2)

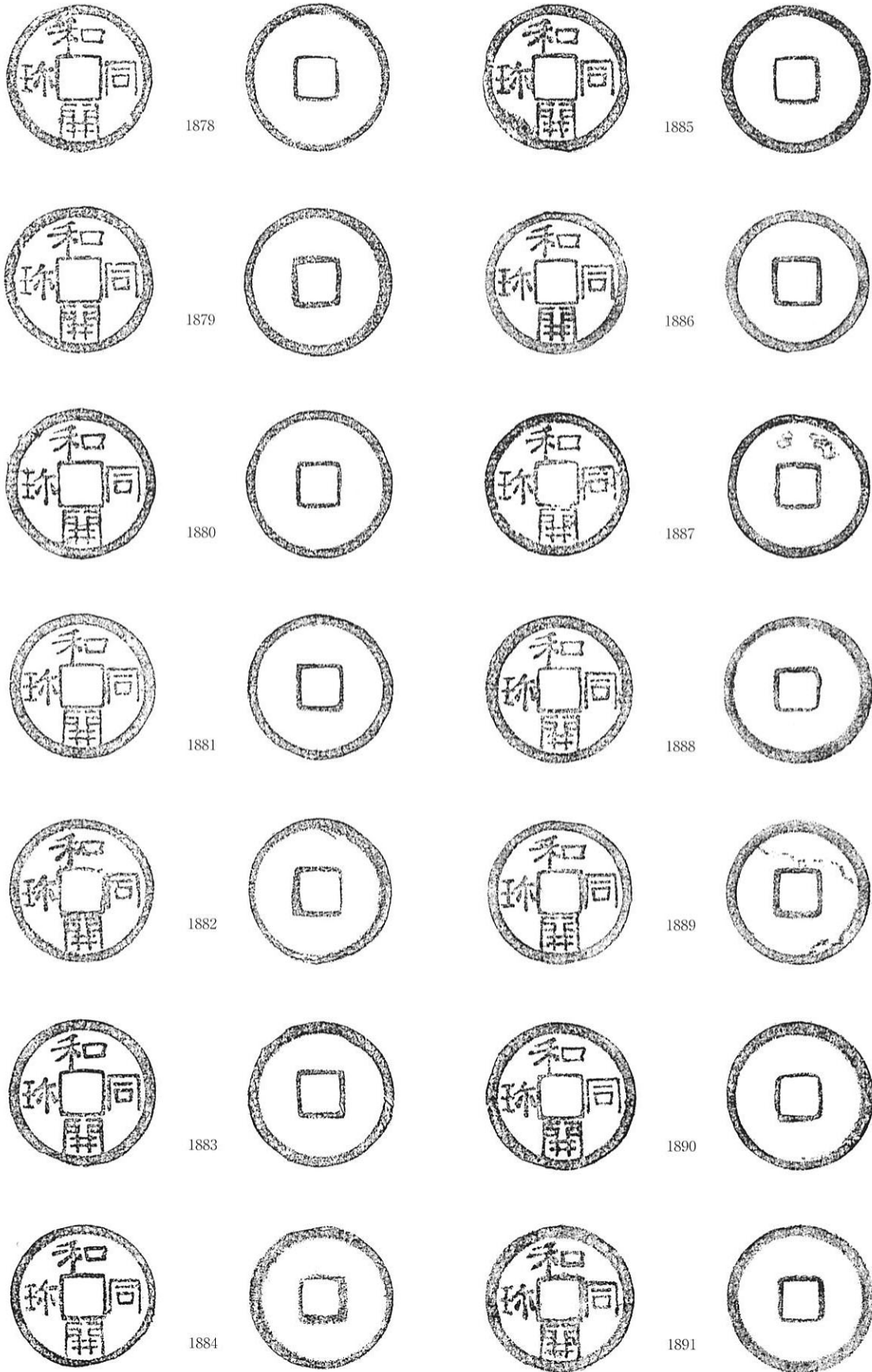


图172 皇朝錢 (3)

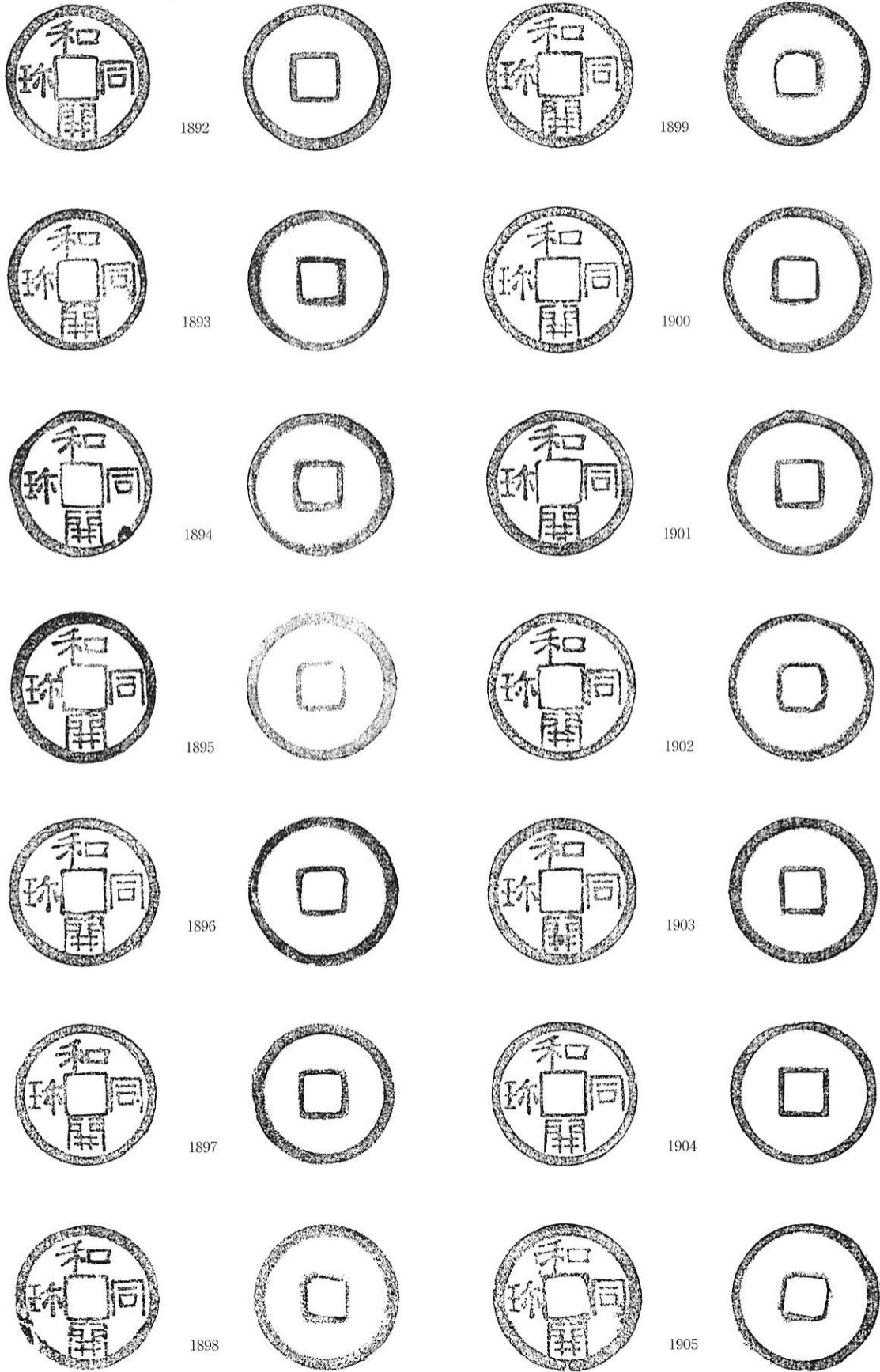


图173 皇朝钱 (4)

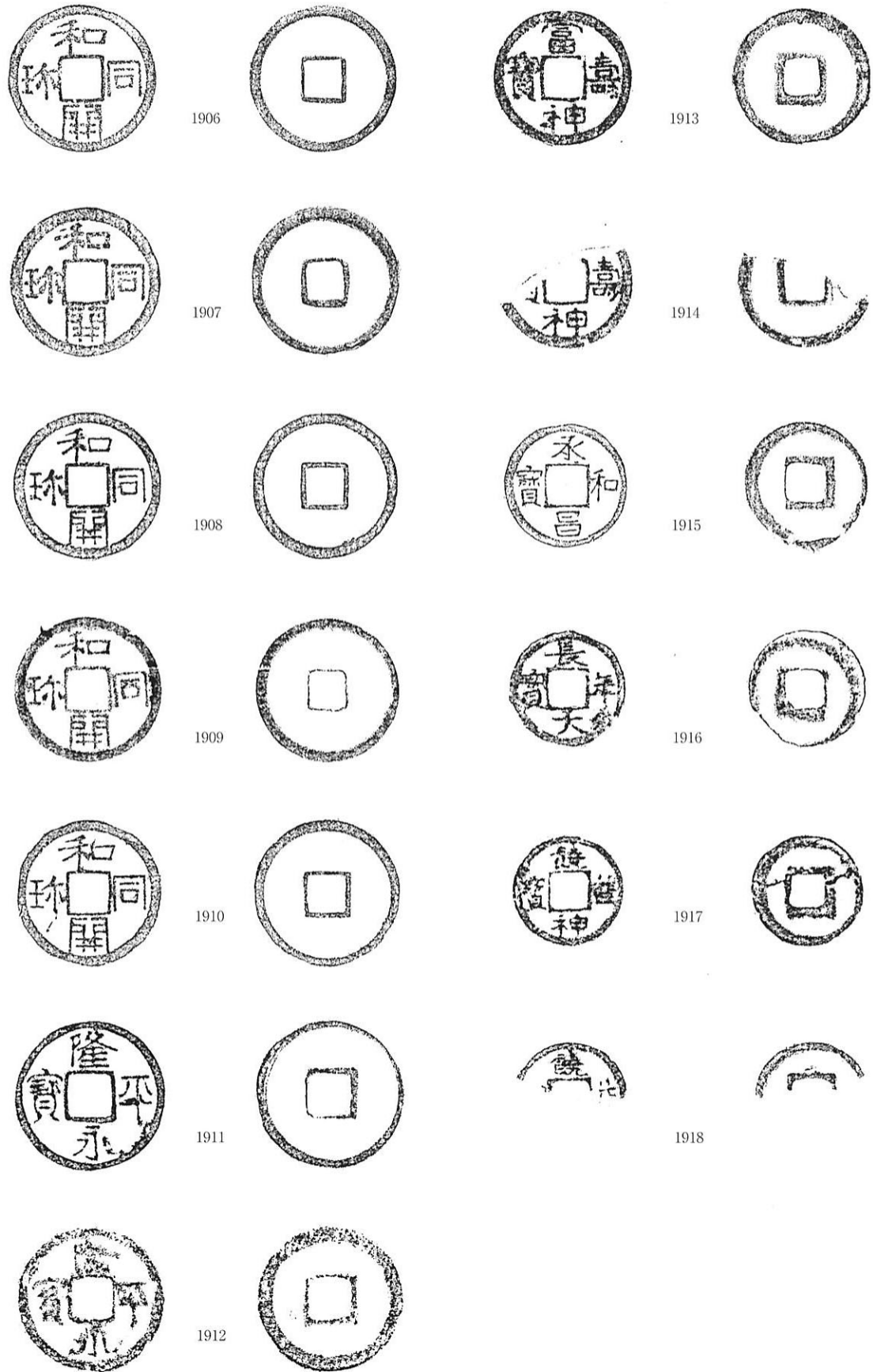
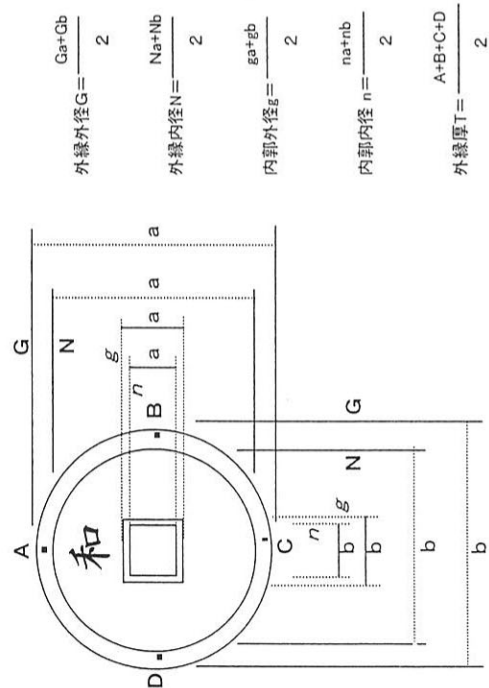


図174 皇朝錢 (5)

表 6 錢貨計測値

錢貨名	No	測定点	外縁外徑 内部外徑 外縁内徑 内部内徑 外縁厚										重量 (g)							
			G a	G b	g a	g b	N a	N b	n a	n b	A	B		C	D	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)
〃	1850	〃	25.00	25.00	9.00	9.00	21.50	21.50	7.00	7.00	1.13	1.11	1.06	1.15	25.00	21.50	9.00	7.00	1.11	2.40
〃	1851	〃	24.50	24.00	8.00	8.00	21.00	20.50	6.50	6.50	1.15	1.35	1.27	1.26	24.25	20.75	8.00	6.50	1.26	2.49
〃	1852	〃	24.06	24.00	7.90	7.68	20.40	20.50	6.63	6.63	1.69	1.52	1.71	1.76	24.04	20.45	7.79	6.59	1.67	3.97
〃	1853	〃	24.52	24.96	8.16	7.92	19.81	20.02	6.35	6.35	1.50	1.46	1.32	1.27	24.74	19.92	8.04	6.35	1.39	3.38
〃	1854	〃	24.59	24.62	8.89	8.45	21.12	21.32	6.34	6.41	1.39	1.32	1.31	1.36	24.61	21.22	8.67	6.38	1.35	2.45
〃	1855	〃	24.54	24.58	8.73	8.42	20.87	20.81	6.49	6.51	1.15	1.13	1.15	1.19	24.56	20.84	8.58	6.50	1.16	2.84
〃	1856	〃	24.60	24.64	8.31	8.33	20.80	20.86	6.47	6.33	1.38	1.42	1.32	1.36	24.62	20.83	8.32	6.40	1.37	2.45
〃	1857	〃	24.85	24.81	8.13	9.18	20.87	21.05	6.29	6.10	1.19	1.27	1.27	1.09	24.83	20.96	8.65	6.20	1.21	3.01
〃	1858	〃	25.07	25.12	8.19	8.19	21.00	20.82	6.32	6.23	1.43	1.49	1.48	1.37	25.10	20.91	8.19	6.28	1.44	2.73
〃	1859	〃	25.18	24.74	8.46	8.37	20.83	20.96	6.32	6.32	1.26	1.26	1.21	1.25	24.96	20.90	8.42	6.32	1.25	2.01
〃	1860	〃	24.29	24.28	8.50	8.19	20.58	20.87	6.60	6.38	1.30	1.29	1.28	1.31	24.29	20.73	8.35	6.49	1.30	2.54
〃	1861	〃	24.51	24.52	9.09	8.55	20.77	21.05	6.51	6.45	1.31	1.28	1.19	1.19	24.52	20.91	8.82	6.48	1.24	2.39
〃	1862	〃	25.31	25.18	8.65	8.65	21.07	21.06	6.27	6.43	1.62	1.56	1.51	1.66	25.25	21.07	8.65	6.35	1.59	3.28
〃	1863	〃	24.90	24.99	8.63	8.36	21.09	20.62	6.39	6.25	1.42	1.46	1.43	1.35	24.95	20.86	8.50	6.32	1.42	2.22
〃	1864	〃	24.38	24.39	8.49	8.48	20.86	20.89	6.54	6.56	1.13	1.13	1.11	1.15	24.39	20.88	8.49	6.55	1.13	2.21
〃	1865	〃	25.01	25.00	8.69	8.41	20.53	21.62	6.25	6.37	1.30	1.18	1.22	1.29	25.01	21.08	8.55	6.31	1.25	2.28
〃	1866	〃	24.98	24.96	8.72	8.47	20.93	21.04	6.39	6.36	1.34	1.37	1.36	1.35	24.97	20.99	8.60	6.38	1.36	2.30
〃	1867	〃	24.87	24.92	8.67	8.39	21.22	20.76	6.55	6.49	1.19	1.19	1.45	1.28	24.90	20.99	8.53	6.52	1.28	2.29
〃	1868	〃	24.67	24.62	8.26	8.21	20.69	20.99	6.35	6.36	0.95	1.00	1.06	0.99	24.65	20.84	8.24	6.36	1.00	1.77
〃	1869	〃	24.25	24.45	8.76	8.39	20.69	20.70	6.59	6.56	1.13	1.17	1.15	1.12	24.35	20.70	8.58	6.58	1.14	1.95
〃	1870	〃	24.57	24.72	8.65	8.55	20.54	21.30	6.47	6.62	1.18	1.21	1.27	1.12	24.65	20.92	8.60	6.55	1.20	2.67
〃	1871	〃	25.12	24.86	9.09	8.49	20.75	20.75	6.41	6.29	1.36	1.47	1.45	1.30	24.99	20.75	8.79	6.35	1.40	2.57
〃	1872	〃	24.72	24.76	8.70	8.48	20.63	20.74	6.51	6.42	1.36	1.25	1.62	1.84	24.74	20.69	8.59	6.47	1.52	3.61
〃	1873	〃	24.88	25.01	8.85	8.57	20.89	21.25	6.30	6.14	1.42	1.52	1.44	1.50	24.95	21.07	8.71	6.22	1.47	2.88
〃	1874	〃	24.80	24.59	8.46	8.09	20.44	20.44	6.25	6.29	1.51	1.42	1.50	1.46	24.70	20.44	8.28	6.27	1.47	3.16
〃	1875	〃	25.40	25.28	8.60	8.41	20.89	20.89	6.69	6.41	1.42	1.36	1.40	1.37	25.34	20.89	8.51	6.55	1.39	2.17
〃	1876	〃	23.50	23.37	8.72	8.47	19.95	19.94	6.20	5.98	1.11	1.01	1.12	1.20	23.44	19.95	8.60	6.09	1.11	2.20
〃	1877	〃	24.56	24.59	7.85	7.87	20.80	20.67	6.29	6.23	1.74	1.74	1.74	1.71	24.58	20.74	7.86	6.26	1.73	3.97
〃	1878	〃	24.68	24.63	7.79	8.11	20.79	20.71	6.46	8.10	1.27	1.22	1.32	1.33	24.66	20.75	7.95	7.28	1.29	2.73
〃	1879	〃	24.97	25.14	7.99	7.76	21.08	21.28	6.51	6.47	1.46	1.55	1.50	1.44	25.06	21.18	7.88	6.49	1.49	3.05
〃	1880	〃	24.99	24.95	7.95	7.85	20.80	21.01	6.23	6.25	1.61	1.50	1.49	1.50	24.97	20.91	7.90	6.24	1.53	3.40
〃	1881	〃	24.50	24.50	7.65	7.65	20.36	20.31	6.38	6.35	1.25	1.29	1.33	1.27	24.50	20.34	7.65	6.37	1.29	3.09
〃	1882	〃	24.34	24.36	8.72	8.60	20.89	20.45	6.59	6.63	1.31	1.17	1.39	1.44	24.35	20.67	8.66	6.61	1.33	2.95
〃	1883	〃	24.87	24.82	7.99	7.89	20.99	20.93	6.44	6.50	1.21	1.28	1.25	1.25	24.85	20.96	7.94	6.47	1.25	3.25
〃	1884	〃	24.32	24.41	7.87	8.01	20.81	21.01	6.22	6.12	1.19	1.14	0.95	1.13	24.37	20.91	7.94	6.17	1.10	2.67
〃	1885	〃	24.98	25.15	8.01	8.05	21.07	21.06	6.82	6.53	1.32	1.43	1.31	1.31	25.07	21.07	8.03	6.68	1.34	3.14
〃	1886	〃	24.34	24.26	8.00	7.77	20.44	20.17	6.68	6.62	1.43	1.08	1.21	1.37	24.30	20.31	7.89	6.65	1.27	3.35
〃	1887	〃	24.35	24.48	7.91	7.72	20.31	21.00	6.68	6.07	1.33	1.44	1.43	1.57	24.42	20.66	7.82	6.38	1.44	2.75
〃	1888	〃	24.86	24.95	7.81	7.72	20.65	20.92	6.25	6.27	1.65	1.54	1.65	1.55	24.91	20.79	7.77	6.26	1.44	3.49
〃	1889	〃	24.47	24.47	7.99	8.13	20.25	20.47	6.44	6.41	1.79	2.06	1.85	1.85	24.47	20.36	8.06	6.43	1.89	5.10
〃	1890	〃	24.96	25.26	8.02	8.03	21.00	21.07	6.05	6.60	1.40	1.40	1.37	1.33	25.11	21.04	8.03	6.33	1.38	2.94
〃	1891	〃	25.09	25.12	8.39	8.06	20.70	20.84	6.34	6.17	1.48	1.68	1.49	1.48	25.11	20.77	8.23	6.26	1.53	3.45
〃	1892	〃	24.78	24.69	8.03	7.88	20.46	20.81	6.49	6.95	1.39	1.37	1.39	1.35	24.74	20.64	7.96	6.72	1.38	3.47
〃	1893	〃	23.89	23.81	7.98	7.51	20.32	20.24	6.38	6.38	1.27	1.43	1.34	1.31	23.85	20.28	7.75	6.38	1.34	2.78
〃	1894	〃	24.57	24.32	7.86	7.65	20.70	20.70	6.46	6.46	1.40	1.46	1.48	1.32	24.45	20.70	7.76	6.47	1.42	3.07
〃	1895	〃	25.07	25.27	8.11	7.82	21.18	21.48	6.57	6.89	1.40	1.34	1.29	1.28	25.17	21.33	7.97	6.73	1.33	2.80

錢貨名	No	測定点	和										重量 (g)							
			G a	G b	G a	g b	N a	N b	n a	n b	A	B	C	D	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	
和同開跡	1896		25.15	25.18	8.03	7.76	21.02	21.53	6.78	6.48	1.42	1.43	1.35	1.33	25.17	21.28	7.90	6.63	1.38	2.89
〃	1897		23.97	24.00	7.35	7.68	20.58	20.24	6.26	6.59	1.18	1.22	1.21	1.19	23.99	20.41	7.52	6.43	1.20	2.79
〃	1898		24.57	24.56	8.04	7.97	19.73	20.78	6.65	6.54	1.33	1.01	1.22	1.19	24.57	20.26	8.01	6.60	1.19	2.78
〃	1899		24.61	24.60	8.02	8.17	20.86	20.91	6.57	6.70	1.11	1.26	1.21	1.10	24.61	20.89	8.10	6.64	1.17	3.27
〃	1900		24.93	24.97	7.86	7.86	21.28	21.28	6.44	6.40	1.44	1.45	1.37	1.32	24.95	21.28	7.86	6.42	1.40	3.07
〃	1901		24.51	24.62	7.64	7.77	20.12	20.70	6.39	6.14	1.27	1.28	1.43	1.30	24.57	20.41	7.71	6.27	1.32	3.17
〃	1902		24.95	24.82	7.96	7.96	21.28	21.41	6.60	6.61	1.73	1.52	1.31	1.41	24.89	21.35	7.96	6.61	1.49	3.08
〃	1903		24.73	24.88	7.77	7.60	20.82	21.01	6.50	6.36	1.37	1.47	1.48	1.44	24.81	20.92	7.69	6.43	1.44	3.38
〃	1904		24.51	24.47	8.08	7.93	21.11	21.05	6.67	6.63	1.20	1.17	1.21	1.23	24.49	21.08	8.01	6.65	1.20	2.26
〃	1905		25.11	25.13	8.08	8.08	20.71	21.06	6.41	7.06	1.32	1.16	1.19	1.18	25.12	20.89	8.08	6.74	1.21	2.74
〃	1906		24.63	24.76	8.02	7.99	21.19	21.08	6.35	6.31	1.23	1.28	1.30	1.24	24.70	21.14	8.01	6.33	1.26	3.02
〃	1907		25.26	25.15	7.67	7.75	20.73	20.73	6.36	6.36	1.43	1.45	1.52	1.49	25.21	20.73	7.71	6.36	1.47	3.37
〃	1908		24.61	24.55	8.21	7.73	20.56	20.60	6.20	6.26	1.55	1.43	1.46	1.57	24.58	20.58	7.97	6.23	1.50	3.00
〃	1909		24.47	24.21	7.87	7.47	21.00	20.17	6.62	6.00	1.13	0.93	1.05	1.00	24.34	20.59	7.67	6.31	1.03	1.80
〃	1910		24.38	24.35	7.68	7.69	20.41	20.63	6.30	6.33	1.23	1.13	1.26	1.24	24.37	20.52	7.69	6.32	1.22	2.10
隆平永寶	1911		24.97	25.04	8.93	8.82	22.52	22.15	6.71	6.75	1.44	1.69	1.62	1.44	25.01	22.34	8.88	6.73	1.55	3.20
〃	1912		24.86	24.79	8.08	8.02	20.71	20.19	6.46	6.46	1.91	1.85	2.06	2.01	24.83	20.45	8.05	6.46	1.96	3.70
富寿神寶	1913		23.15	23.19	7.68	8.19	18.93	19.05	6.03	5.74	1.54	1.42	1.40	1.33	23.17	18.99	7.94	5.89	1.42	1.40
承和昌寶	1915		20.60	20.71	7.37	8.07	17.35	17.31	5.78	5.94	1.47	1.46	1.40	1.55	20.66	17.33	7.72	5.86	1.47	2.50
長年大寶	1916		19.71	19.79	7.70	7.69	16.09	16.33	6.00	5.91	1.25	1.11	0.96	0.99	19.75	16.21	7.70	5.96	1.08	1.70
隆益神寶	1917		18.86	18.94	7.17	7.32	15.47	15.14	5.11	5.21	1.67	1.47	1.38	1.61	18.90	15.31	7.25	5.16	1.53	2.50
萬年通寶			24.69	24.67	8.23	7.78	20.12	20.21	6.18	6.33	1.51	1.58	1.31	1.33	24.68	20.17	8.01	6.26	1.43	3.00
平均値			24.45	24.46	8.19	8.09	20.54	20.62	6.41	6.41	1.37	1.35	1.35	1.35	24.45	20.58	8.14	6.41	1.36	2.83



注) 富寿神寶 (1914)、隆益神寶 (1918) については、測定箇所を欠損している場合が多く、表から外した。

註

1. 『上津島南遺跡発掘調査概報』1984 府営上津島住宅遺跡調査団
2. 『大陸文化へのまなざしー発掘速報展大阪ー』1998 (財)大阪府文化財調査研究センター
3. 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』1995 (財)大阪府埋蔵文化財協会
4. 『平城宮発掘調査報告Ⅺ』1977 奈良国立文化財研究所編
5. 菅原正明「畿内における土釜の制作と流通」『文化財論叢』1993 同朋舎出版
6. 『高井田遺跡Ⅲ』1989 柏原市教育委員会
7. 『小阪合遺跡』1990 (財)八尾市文化財調査研究会
8. 『萱振遺跡』1996 (財)八尾市文化財調査研究会
9. 原田昌則「Ⅱ 久宝寺遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告37』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
ただし、小型壺Bは小形丸底土器とした。
10. 『恩智遺跡Ⅲ(資料編)』1981 瓜生堂遺跡調査会 SD-27から出土している。
11. 西口陽一「第Ⅴ章 まとめ」『野々井西遺跡・ON231号窯跡』1994 (財)大阪府埋蔵文化財協会
12. 『平安京右京三条三坊』1990 (財)京都市埋蔵文化財研究所
なお施釉陶器全般については、(財)京都市埋蔵文化財研究所 平尾政幸氏、関西文化財調査会 吉川義彦氏よりご教示を賜った。
13. 藤井寺市教育委員会 上田睦氏よりご教示を賜った。
14. 墨書土器の判読に際しては、向日市教育委員会 清水みき氏よりご教示を賜った。
15. 「東郷遺跡第52次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』1998 (財)八尾市文化財調査研究会
16. 『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』1987 国分寺町教育委員会
17. 皇朝銭については、出土銭貨研究会 永井久美男氏、尾上実氏よりご教示を賜った。

第V章 遺構・遺物の検討

第1節 出土瓦の検討

はじめに 前章において今回実施した小阪合遺跡の調査成果を報告した。縄文時代以降中世にいたる豊富な遺構・遺物は、既往の調査成果と照らし合わせても遜色はない。特に奈良・平安時代の遺物－施釉陶器、墨書・刻書土器、皇朝銭の出土量は、摂河泉地域の中でもトップクラスで、小阪合遺跡の性格を考える上で貴重な成果をもたらした。本来ならばそれぞれの遺物について検討すべきところではあるが、ここでは香川県国分寺町所在讃岐国分寺・同丸亀市郡家町所在宝幢寺跡^{ほうどうじ}出土瓦と同範関係にある軒瓦を中心に若干の検討を加えてみようと思う。

出土瓦 前章第7節で触れたように、今回の調査ではいずれも破片資料ばかりであるが、軒丸瓦1種類、軒平瓦4種類が出土した。このうち讃岐国分寺・宝幢寺跡^{ほうどうじ}出土瓦と同範関係にある資料は、軒丸瓦(図164-1819・1820)と、軒平瓦(図164-1821・1822)の2種類である。

讃岐国分寺僧坊創建瓦SKM03Aあるいは宝幢寺跡出土軒丸瓦HD103と同範である複弁8弁蓮華文軒丸瓦は、中房に1+6個の蓮子を配し、花卉は中央の一段低い部分に細長い2本の子葉を表現し、弁中央には稜線をもたない¹⁾。2本の圈線で挟まれた部分には32個の珠文を巡らせる。外縁は斜縁。瓦当裏面はヘラケズリを施しているため、製作時の痕跡(特に布目)は残っていないが、断面を観察する限り瓦当と丸瓦の接合痕はなく、「1本作り」技法によるものである。焼成はいぶし焼で、中房から外縁にかけて範傷がある。なおこのような弁表現をする軒丸瓦は、摂河泉地域では見当たらず、後にも触れるように讃岐国分寺出土軒丸瓦SKM01の退化型式と捉えることができる。

讃岐国分寺出土軒平瓦SKH09と同範である唐草文軒平瓦(図164-1821)は、中心飾り部分の破片で、(図164-1822)は下外区の鋸歯文帯の破片である。両者とも遺存状態は不良で、赤褐色を呈する。

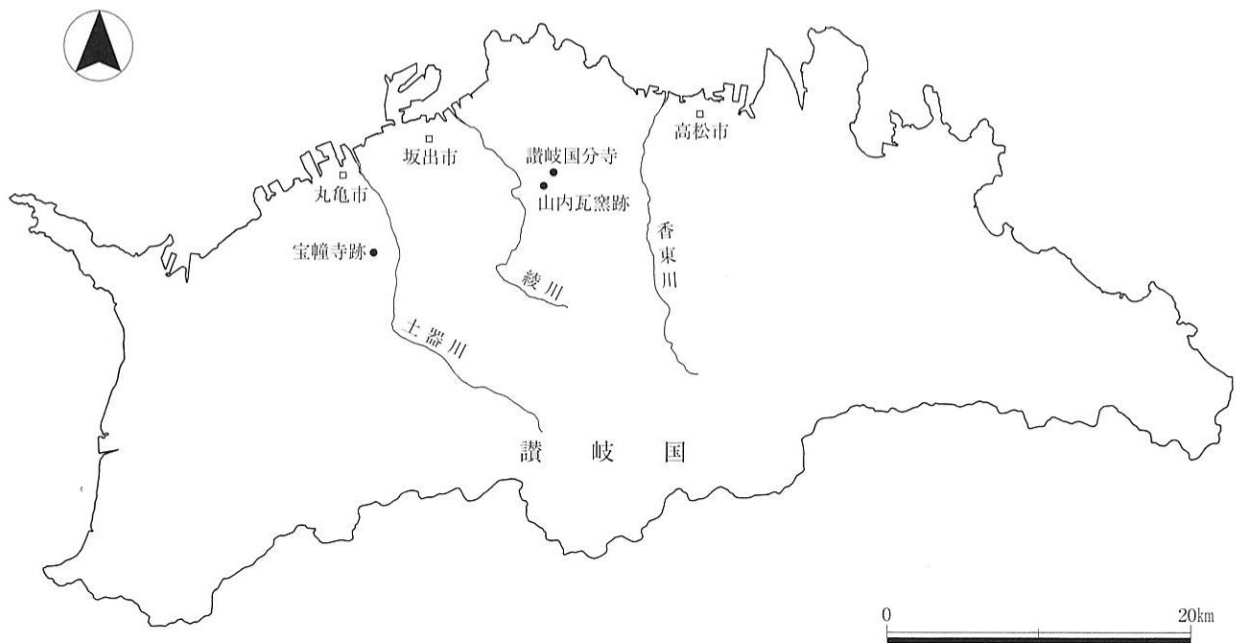


図175 讃岐国分寺・宝幢寺・山内瓦窯位置図

比較的良好な資料は、1987～1988年大阪府教育委員会が実施した東郷遺跡の調査で出土している²⁹⁾。両者を比較すると、(図164-1821)の中心飾上に配された三叉状の文様部分に範傷はないが、東郷遺跡出土瓦には範傷が存在する。これら讃岐国分寺・宝幢寺跡出土瓦と同範関係にある軒瓦がすべて98-5・7区から出土したのに対し、以下の3種類の軒平瓦は、調査区東半である98-1・2・3区からそれぞれ出土した。

軒平瓦(図164-1823)は界線らしき直線と、上縁付近に鋸歯文と思しき文様がかろうじて残る以外、瓦当文様はわからない。鋸歯文を配する点や直線類であることから、奈良時代の所産と考えてよからう。わずかに唐草文が残る軒平瓦(図164-1824)は、唐草文の形状あるいは外区に珠文帯がないことなどから、鎌倉時代に下るものとする。半截菊花唐草文軒平瓦(図164-1825)は室町時代前期に帰属するだろう。これらの瓦は、讃岐国分寺・宝幢寺跡はいうまでもなく、周辺で実施された既往の調査では未発見である。

一方、凸面に有軸綾杉文タタキを施した(図165-1826)やすり消した(図165-1827)、あるいは凸面の縄叩きが全面に施されない(図166-1830)といった特徴的な平瓦が出土した。しかし少なくとも前二者は桶巻作りによる平瓦であり、特に有軸綾杉文タタキ平瓦は、すでに中河内地域一帯に分布する原山廃寺式軒丸瓦と関連深いことが指摘されており³⁰⁾、讃岐国分寺に結びつくような平瓦を見いだすことはできなかった。

讃岐国分寺 ここで小阪合遺跡出土軒瓦と関係の深い讃岐国分寺、宝幢寺跡について触れておこう。讃岐国分寺は高松平野の南西部本津川沿いに位置し、律令制下の阿野郡新居郷^{あやにいのみ}にあった。1983年以降史跡整備に伴う調査が継続的に実施され、これまでに20種類24型式の軒丸瓦と、25種類29型式の軒平瓦が出土した。創建瓦は鐘楼跡で軒丸瓦SKM01、軒平瓦SKH01A、僧坊跡で軒丸瓦SKM03A、軒平瓦SKH01Aの組合せを想定する。この2種類の軒丸瓦-SKM01とSKM03Aを比較すると、前者の外縁に配された鋸歯文帯は後者になく、子葉を含む花卉表現をみると、比較的肉厚なSKM01から肉薄なSKM03Aへと、型式学的な変化を想定することが可能であり、前者が後者に先行するのは明らかである。さらに製作技法に注目すると、SKM01には瓦当に丸瓦を接合するものと(写真3-上段)、両者を一体に製作する「1本作り」技法による二者が存在する(写真3-中段)⁴¹⁾。ところがSKM03Aは、すべて「1本作り」技法によっている(写真3-下段)。この観点からみても、SKM03AはSKM01に後出するのは明らかだ。これらの軒瓦の時期は、国分寺建立詔との関係で8世紀中葉を想定する。なお讃岐国分寺出土軒丸瓦SKM03Aは、すべていぶし焼である。

一方軒平瓦SKH09はわずか出土総点数11点にすぎず、軒丸瓦との組合せも判然としない。唐草文の形状などから10世紀代の所産と想定する(写真4)。

宝幢寺跡 丸亀平野の中央部を流れる土器川西岸に位置し、那珂郡郡家郷^{なかがんげ}に属した。宝幢寺池と呼ばれる溜め池内に塔心礎と礎石が残る。現在のところ関連する遺構その他は未確認であるが、その所在地は今日も郡家郷と呼ばれているように、古代那珂郡衙の所在地と推察されている。とすると宝幢寺是那珂郡衙に付属する郡寺であった可能性もある。宝幢寺跡所用軒瓦は軒丸瓦6種類、軒平瓦1種類が採集されている。

創建瓦と考えられる複弁8弁蓮華文軒丸瓦HD101は、外区に珠文帯・鋸歯文帯が巡り、全体として藤原宮式軒丸瓦の強い影響を受けた文様構成をとる。讃岐国分寺SKM03Aと同範である軒丸瓦HD103は、HD101の退化型式HD102に後続するという。実見した軒丸瓦HD103は2点にすぎないが、いずれも中房

	いぶし焼	須恵質焼成
<p>範傷進度①</p>	<p>讃岐国分寺 SKM03A</p>	<p>宝幢寺跡 HD103 (安藤文良氏蔵)</p>
<p>範傷進度②</p>	<p>小阪合遺跡</p>	
<p>範傷進度③</p>	<p>(s=1/3)</p>	<p>宝幢寺跡 HD103 (郡家小学校蔵)</p>

図176 範傷の進度

部分から外縁にかけて範傷が残り、須恵質焼成である（写真4）。

山内瓦窯 高松平野の南西綾川流域にあり、讃岐国分寺の南西1kmの地点に位置する。讃岐国分寺ならびに宝幢寺に瓦を供給した窯という。現在登り窯・ロストル窯各1基が並んで保存されているが、さらに数基の窯が存在するらしい。

小阪合遺跡出土軒瓦の位置づけ 讃岐国分寺僧坊創建瓦SKM03Aは、讃岐国において那珂郡寺の可能性が指摘される宝幢寺跡以外では確認されておらず、SKH09は讃岐国分寺以外では出土例がない。つまり讃岐国の官寺級寺院にのみ供給されたということになる。

焼成に注目すると、讃岐国分寺出土SKM03Aがいぶし焼であったのに対し、宝幢寺跡採集HD103は



讃岐国分寺 SKM01 (国分寺町教育委員会蔵)



讃岐国分寺 SKM01 (国分寺町教育委員会蔵)



讃岐国分寺 SKM03A (国分寺町教育委員会蔵)

写真3 讃岐国分寺出土瓦

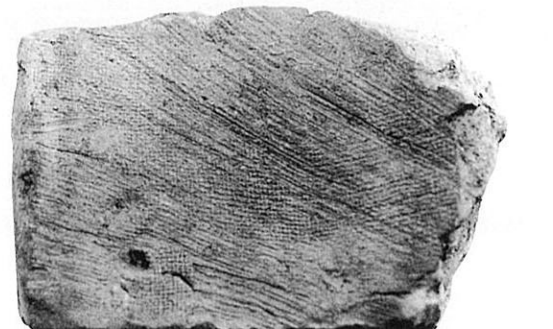
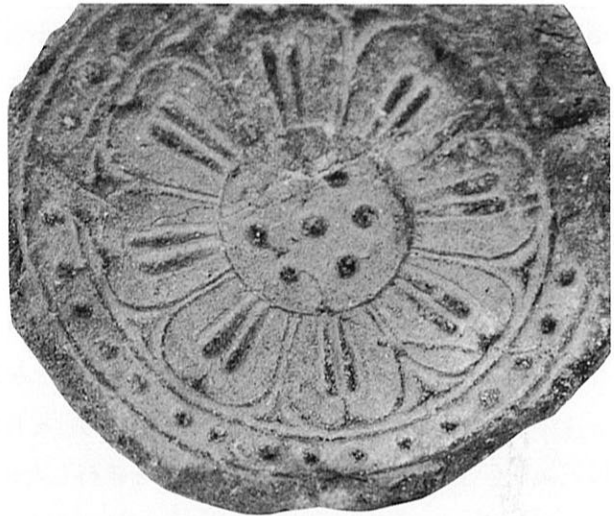
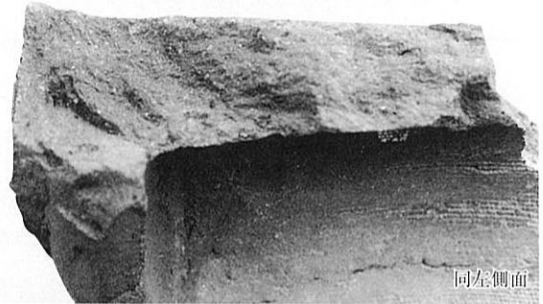
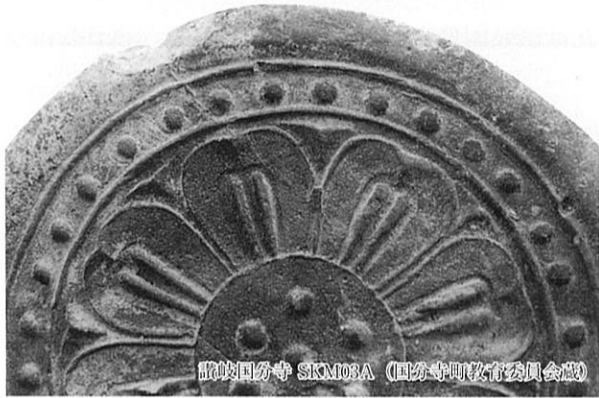


写真4 讃岐国分寺・宝幢寺跡出土瓦

いずれも須恵質焼成であった。山内瓦窯では、SKM03Aの供給先によって登り窯・ロストル両瓦窯を使い分けていた可能性がある。なお小阪合遺跡出土瓦は讃岐国分寺同様にいぶし焼であり、SKH09についても、ともにいぶし焼であった。

範傷に注目してみよう。讃岐国分寺SKM03Aの範傷進度は、図176に示したように小阪合遺跡例に比べ進んでいない。同じような範傷は安藤文良氏所蔵の宝幢寺跡採集SD103にも存する。つまりこの軒丸瓦は、山内瓦窯から讃岐国分寺・宝幢寺に向けてほぼ同時に供給されたということになる。小阪合遺跡と同程度の範傷進度の資料は、讃岐国分寺でも確認することが可能である。丸亀市立郡家小学校所蔵宝幢寺跡採集HD103は、これよりさらに範傷が進行したものである。

なおこの範傷は、小阪合遺跡出土例の場合瓦当上半にあったが、讃岐国分寺例を管見した限りでは範傷は180°逆の瓦当下半にあり、宝幢寺跡出土例の範傷は瓦当上半・瓦当下半各1例ずつであった。つまり瓦範は方形を呈していたようで、今後90°あるいは270°ずれるものがなければ長方形であった可能性が高いということになる。

SKH09は、中心飾りにある範傷の有無からみて、讃岐国分寺へ供給を開始してしばらく後に小阪合遺跡にもたらされたと想定する。

以上のことから、山内瓦窯で焼成された軒丸瓦SKM03Aは、ほぼ同じに讃岐国分寺・宝幢寺に供給を開始した後、小阪合遺跡に製品を搬入した。一方SKH09も讃岐国分寺にある程度供給した後に小阪合遺跡にもたらされた。焼成が一致することからみて、やはり製品を直接搬入したのだろう。ただ小阪合遺跡に搬入された僧房創建瓦SKM03Aと10世紀代の所産とされるSKH09の間には、少なくとも150年以上の開きがある。その間連綿と関係を維持したのか、あるいは同範瓦が搬入されたときのみの関係だったのか、という問題が残る。今後の検討課題だろう。

中河内と讃岐 最後に軒瓦にみられる中河内と讃岐との関連に触れておこう。両地域から出土する軒瓦のうち、文様あるいは製作技法上類似する例が2例ある。1つは、7世紀中葉～8世紀前半にかけて中河内地域に展開する原山廃寺式軒丸瓦と、讃岐東部寒川郡下り松廃寺出土軒丸瓦・同郡極楽寺跡出土軒丸瓦例であり、他例は7世紀末の河内田辺廃寺・五十村^{さか}廃寺と讃岐中部阿野郡開法寺跡出土軒丸瓦・軒平瓦例、同郡鴨廃寺出土軒丸瓦・軒平瓦である（ここでは田辺廃寺式軒瓦と仮称⁵⁾）。3例目となる河内東郷廃寺と讃岐中部阿野郡讃岐国分寺跡・那珂郡宝幢寺跡間の同範関係は、8～10世紀代まで地域間交流が存在したことを示す事例である。

上田陸氏によれば8型式に細分される原山廃寺式軒丸瓦は、7世紀中葉の河内高井田廃寺V型式を祖型とする⁶⁾。讃岐出土例に類似するのは、「T」字形間弁をもつI Ab型式である。これと下り松廃寺出土軒丸瓦あるいは極楽寺出土軒丸瓦を比較すると、弁表現に類似性を見いだすことはできるが、中房の形態が異なり、さらに下り松廃寺例の場合丸瓦の接合位置がかなり下がる。ともに奈良時代前半を想定する。

一方田辺廃寺式軒瓦は、素弁8弁蓮華文軒丸瓦・偏行唐草文軒平瓦ともに極めて類似し、軒平瓦の製作技法にも共通性を認めることができる。ただこの偏行唐草文は当時讃岐で盛行していたものとは別系統、統一新羅系の範疇とすべきであろう。

第2節 奈良・平安時代の小阪合遺跡とその周辺

はじめに 今回の最大の成果は、何といても奈良～平安時代の豊富な資料が出土したことにあり、その評価は北に隣接する東郷廃寺と表裏一体をなすものと考ええる。

この東郷廃寺は、大阪府教育委員会が実施した東郷遺跡1987～1988年調査地や八尾市教育委員会1991年調査地で軒瓦が出土したことで、にわかには注目されるようになった寺院跡である。後者の調査を担当した湊斎氏は、①軒丸瓦5型式・軒平瓦2型式さらに平瓦6型式の編年案を提示し、東郷廃寺が7世紀中葉から9世紀初頭にかけて存続したこと、②創建当初が原山廃寺式軒瓦を採用する在地性の強い寺院であったにもかかわらず、7世紀末以降中央系軒瓦が主体を占めること、③出土した軒丸瓦のうちB型式(図179-2)と、7世紀後半～8世紀前半の備中国にみられる「吉備寺式」あるいは「備中式」と呼称される軒丸瓦の関わりを指摘した⁷⁾。これによって、若江郡内若江寺跡・西郡廃寺に続く3番目の飛鳥・白鳳寺院が確認されたのである。

ところで第II章で記したように、若江郡を含む中河内地域は他地域に比べ『統紀』に頻繁に登場する。それは、当地域が畿内の中でも難波津と大和国を結ぶ極めて重要な位置にあり、律令体制に深く関与したからに他ならない。大和川水系の氾濫は、即古代主要交通路の遮断を意味するし、聖武天皇の智識寺参詣は大仏建立の契機となり、さらに道鏡事件は律令制存亡の危機を招いたことから明らかである。しかし『統紀』を含む六国史の記載事項は、天皇を中心とした極めて限られた内容であり、それゆえ当時の社会を復元するにあたって考古資料の果たす役割は極めて大きい。

ここでは、今回の調査成果をはじめ、既往の小阪合遺跡・東郷廃寺の調査成果をまとめ、若江郡内の若江寺跡や西郡廃寺との比較などを通して、当該期の小阪合遺跡あるいは若江郡の特質を醸し出せればと思う。

センター調査区における検出遺構 時期を限定できる遺構として、8世紀中葉の第Ⅲ面井戸723、8世紀末の第Ⅲ面井戸1、9世紀後半の第Ⅱ面井戸565・566、10世紀後半の第Ⅲ面井戸844、10世紀前後の第Ⅰ面掘立柱建物935と第Ⅲ面掘立柱建物937、8世紀～10世紀代の遺物を含む川200・719がある。これら8～10世紀にかけての遺構は、第Ⅲ面井戸1を除くとすべて調査地西端の98-5・6・7区に集中する。

第Ⅲ面川200・719は、98-4・6区で検出した古墳時代の自然河川-第Ⅴ面川410・415がさらに西に流れを変えたものであり、それまでの水深に比べかなり浅くなっていた。そこに多量の土器類が投棄され、獣骨や皇朝銭が投げ込まれたのである。川200・719出土の和同開珎は、すべて川底付近で出土していることからみて、流路が安定した直後-洪水砂の堆積が始まる以前に投棄されたものと推察される。一方川719では隆平永寶・富壽神寶・長年大寶・承和昌寶・饒益神寶が、川底付近から出土した。このうち隆平永寶・富壽神寶・長年大寶・饒益神寶が方形の土坑状を呈したところから出土している。ある程度埋没した河川を掘削して投げ込んだのではないかと考える。獣骨は図20にも示したように、川200・719のある箇所集中して出土したが、肋骨・背骨は皆無であった。

この川の流路が安定したのは奈良時代前半の第Ⅲ面井戸723が営まれた。その上面あるいは同一面でピットも多数検出したが、建物を復原するには至らなかった。おそらく関連する遺構は調査区西方に展開していたのであろう。一方調査区東側の当該期の遺構は、8世紀末の第Ⅲ面井戸1のみで、その他関連遺構は皆無であった。

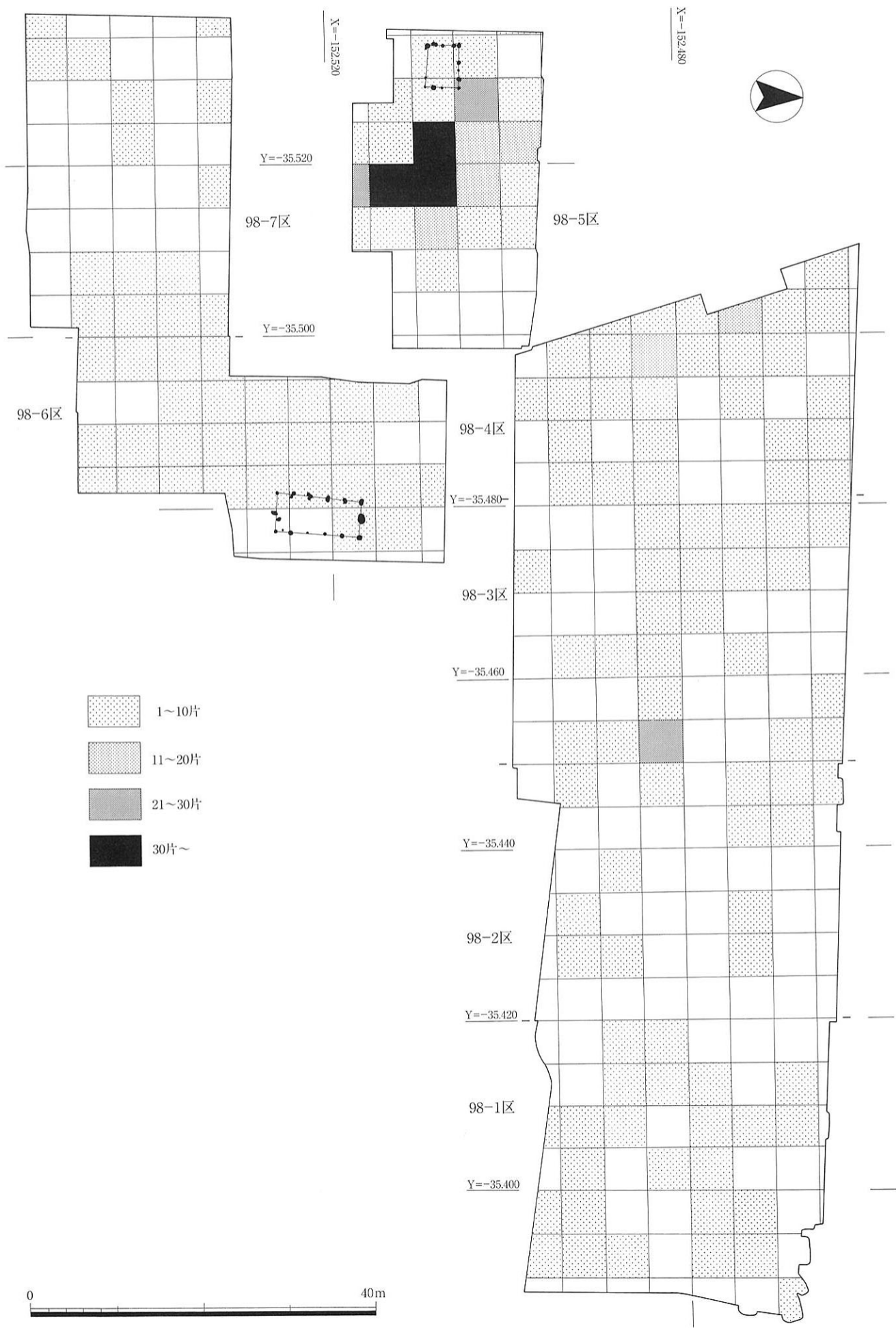


图177 古代瓦分布图 (川200・719除く)

9世紀後半には第Ⅱ面井戸565・566が相次いで掘削されたが、掘立柱建物935・937との共存関係は、ピット出土遺物が黒色土器A類細片のみのため正確にはわからない。ただ第Ⅰ面掘立柱建物935一帯は、第Ⅱ面においてもピットを確認しており、ピットの重複がほとんどみられなかった掘立柱建物937に比べ長期間存続した可能性はある。この掘立柱建物2棟は意図的に配置されたと考えるのが自然で、その頃すでに川200・719や明確に検出できなかった平安時代の遺物を含む川410・415は、ほとんど埋没していた可能性が高い。

ところで図177は川200・719以外から出土した1枚作り平瓦を中心とする古代瓦片の平面分布図である。これによると98-5区の一画-第Ⅲ面川200埋没後の窪地部分-に比較的集中していることがわかる(出土破片数は多くても1グリット数十片)。この集中地点と掘立柱建物935とはいささか距離を隔てるが、あえて両者を関係づけるとするなら掘立柱建物935が一部瓦葺建物であったと想定することもできる。しかし2×2間の東面庇掘立柱建物935という小規模建物に、果たして瓦を葺いたのかという疑問がないわけではない。

ところが10世紀後半の第Ⅲ面井戸844を最後に、11世紀以降-つまり瓦器埴出現以降になると、当該期の遺構は98-2・3区へと拡散するとともに、条里地割に規制された耕作溝もみつき、一帯が耕地化したことをうかがわせる。

センター調査区における出土遺物 川200・719をはじめとする遺構群・包含層から出土した膨大な奈良~平安期の遺物の中には、文字・記号を記したり人面を描いたりした墨書・刻書土器、186片を数える施釉陶器、円面硯・風字硯や転用硯、瓦、69枚もの皇朝銭、銅製の巡方などがあつた。

川200・719から出土した土器の主体は、8世紀初頭~9世紀代にかけてのものであり、7世紀に遡るものはごくわずかであった。この土器群に続く資料は9世紀後半の井戸565・566出土土器であり、若干の開きはあるが10世紀後半の井戸844出土土器へと続く。さらに出土地点は異なるが11~12世紀代の瓦器も出土しており、遺物を見るかぎり8世紀から12世紀にかけて生活が連綿と営まれていたといえよう。調査面積も関係するが、管見による限り摂河泉地域の単一調査で8世紀から12世紀にかけてこれほど膨大な遺物が出土した事例はないといっても過言ではない。以下特徴的な遺物についてのみ触れてみよう。

まず川200から出土した2点の須恵器壺H。この壺Hは、8世紀から9世紀中葉にかけて主として都城遺跡-京域から出土する「都市的」な土器で、何らかの祭祀遺物と共伴することが多いとい⁸⁾う。

今回出土した奈良時代の製塩土器1897片のうち、実に1276片が第Ⅲ面川200・719から出土し、その57%にあたる726片がK16b2-IIからみつかった。最近当センターが発掘調査を行った羽曳野市駒ヶ谷遺跡では、井戸424から実に2109片の製塩土器が出土した。担当者は、製塩土器が1000片以上出土する遺跡はそれを大量消費する都城あるいは官衙遺跡にほぼ絞られると指摘する⁹⁾。

施釉陶器は緑釉単彩陶器3片、緑釉陶器113片、灰釉陶器70片を数えるが、摂河泉地域で一遺跡からこれほど大量に出土した事例はほとんど知られていない。中でも緑釉単彩陶器は、先に述べたように長岡京・平安京以外では数ヶ所の出土例があるのみで、大阪府下では目下藤井寺市葛井寺遺跡が知られているにすぎない。今回出土した9世紀後半を中心とした緑釉・灰釉陶器の比率はおおよそ2:1となり、同時期の平安京出土事例と類似した比率を示す¹⁰⁾。また3片ながら出土した9世紀後半の越州窯青磁は、八尾市内では初出であるとい¹¹⁾う。

墨書土器は、川200・719出土土器(図156-1721)などにみられるように8世紀前半(平城宮Ⅲ)を初例とし、10世紀後半(佐藤編年Ⅲ期)に属する井戸844出土土器(図163-1814~1818)を最新例とす

¹²⁹。その中には8～9世紀代の土師器に施設を表わす「家」を記したのものや(図156-1721、図163-1805など)、吉祥句を記したもの(図157-1727・1734・1735など)、個人名を記したもの(図157-1728・1736・1738など)など総じて単字句が多い反面、「厨」といった公的施設や職名を示すような墨書資料がなく、さらには「寺」と記した資料はない。人面墨書土器は、井戸1や川200・719から数個体以上が出土した。

前節にて触れたように、今回出土した瓦には讃岐国分寺SKM03A(僧房創建瓦)やSKH09(10世紀代の補修瓦?)をはじめとする奈良～室町時代の軒瓦5種類がある。その他川200では凸面調整に有軸綾杉文タタキを施したり、縄タタキを施したり、あるいは調整を完全にナデ消した桶巻作り平瓦が出土した。後述するように、周辺の古代瓦の出土状況、今回の出土量、また当時の地形などを考え合わせると、98-5・7区に寺院が存在したとは考えにくく、98-1～4区の可能性も低いと思う。

緡銭あるいは緡銭だったと考えられる2群の和同開珎は、ほとんどが未使用状態であった。それらを含めて69枚もの皇朝銭が川200・719から出土したことは、摂河泉地域の出土皇朝銭を集成した表18をみてもわかるように、ほとんど類例のない極めて特異な在り方であるといえる。これらは誤って川に落としたとは考えられず、何らかの祭祀に伴う行為の結果といわざるを得ない。

さらに河川内から出土した獣骨は、第Ⅶ章で詳しく触れるように少なくとも馬7体分・牛骨1体分で、若い骨を含むという。河川出土のため廃棄時の様子はわからないが、肋骨や背骨が皆無であったため、他所で解体し骨を選別した結果かとも考えたが、それらは腐食しやすい性質があり、実態は不明である。もしこれが祭祀行為の結果とすると、かなり贅沢な祭祀といえるだろう。

周辺調査の成果 ところでセンター調査区周辺では、これまでに大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会による調査が実施され、数多くの奈良・平安期の資料がみつまっている。以下それぞれの概略を列記する。

東郷廃寺(東郷遺跡)周辺の調査は、1981年度八尾市教育委員会による第2次(図178-④)・第6次(図178-⑦)調査を端緒とする。しかし報告書では包含層中から瓦片が出土したことを記すにとどまり、寺院の存在を示唆するまでには至らなかった。¹³⁾

1987～1988年センター調査区北側の楠根川改修工事に先立つ調査が実施され、旧楠根川右岸を検出し、旧楠根川を埋め尽くす砂層内から奈良～平安期の土器類・新羅系土器・銅鏡・皇朝銭(萬年通寶・隆平永寶)・瓦類などが出土した(図178-①)。中でも瓦には、原山廃寺式軒丸瓦(図179-1)・「吉備寺式」軒丸瓦の祖形となった摂津堂ヶ芝廃寺・百済尼寺(細工谷遺跡)と関係の深い重弁8弁蓮華文軒丸瓦(同-2)・重圈文軒丸瓦(同-4)・細弁12弁蓮華文軒丸瓦(同-6、以下野中寺式軒丸瓦と仮称)・青谷(河内国分寺)式軒平瓦(C種、同-7)¹⁴⁾・讃岐国分寺SKH09軒平瓦(同-8)といった7世紀中葉～10世紀代の軒瓦を含む¹⁵⁾。なお讃岐国分寺SKH09の表面には煤が付着する。この調査の意義は、付近に古代寺院が存在したことを示す軒瓦の出土、さらには古代宮都や古代官道に近接した拠点的な遺跡に多くみられる新羅系土器の出土、つまりごく近隣にそのような遺跡がある可能性を示唆したことにある。

1990年、センター調査区北西200mの地点の調査では、奈良～平安時代前期の掘立柱建物5棟、井戸1基を検出した(図178-⑧)。調査区内から瓦の出土はなかったが、調査担当者は寺院関連施設あるいはその周辺の一般集落を想定する。¹⁶⁾

1991年、センター調査区の北200mの地点で45m²という小面積の調査が行われ、二彩陶器片や軒丸瓦

4点(図179-1・2・3)を含むコンテナ8箱分の瓦類が出土した(図178-②)¹⁷⁾。

1994年にはセンター調査区西隣で共同住宅建設に伴う調査が実施されたが、関連する遺構はほとんどなく、奈良時代の土器や平瓦片が少量出土したにとどまった(図178-⑩)¹⁸⁾。

1995年度の調査地点は、1991年度調査地点のすぐ北側にあたる。調査担当者は、最も北側に設定したトレンチで遺構・遺物が皆無であったことから、寺域北限の可能性を指摘する。その他のトレンチでは平瓦・丸瓦細片が出土した(図178-③)¹⁹⁾。

1996年度センター調査地の北西に隣接する地点で調査が実施された。奈良～平安時代初頭にわたる多数のピットや溝をはじめ、土坑SK-201から奈良時代末～平安時代初頭の土器がまとめて出土した(図178-⑨)。この中の1点(土師器皿A)の底部外面には、川200出土土師器碗A(図157-1728)と同様の墨書を記す²⁰⁾。

1997年度の調査地点では、1991年度もしくは1995年度調査時に確認された平安時代整地層の対応層を、約1m低く検出した(図178-⑤)²¹⁾。さらに付近で実施された1999年度の調査においても、東側に約60cm高まる整地層を確認したという(図178-⑥)²²⁾。

東郷廃寺と小阪合遺跡 近年東郷廃寺と称されるようになった桜ヶ丘2丁目一帯はすでに宅地化が完了しており、今後新たな開発が見込めない昨今、東郷廃寺に直接結びつくような遺構-七堂伽藍をはじめとする寺院関連遺構-を検出する可能性はほとんどない。しかし瓦類の出土地点が古墳時代前期にほぼ埋没した旧楠根川河道上周辺径約300mの範囲内にみられること、さらに1997・1999年度の調査でみつかった整地層の高まりを伽藍地とみなせば、東郷廃寺の位置はおおむね旧河道上の微高地に想定するこ

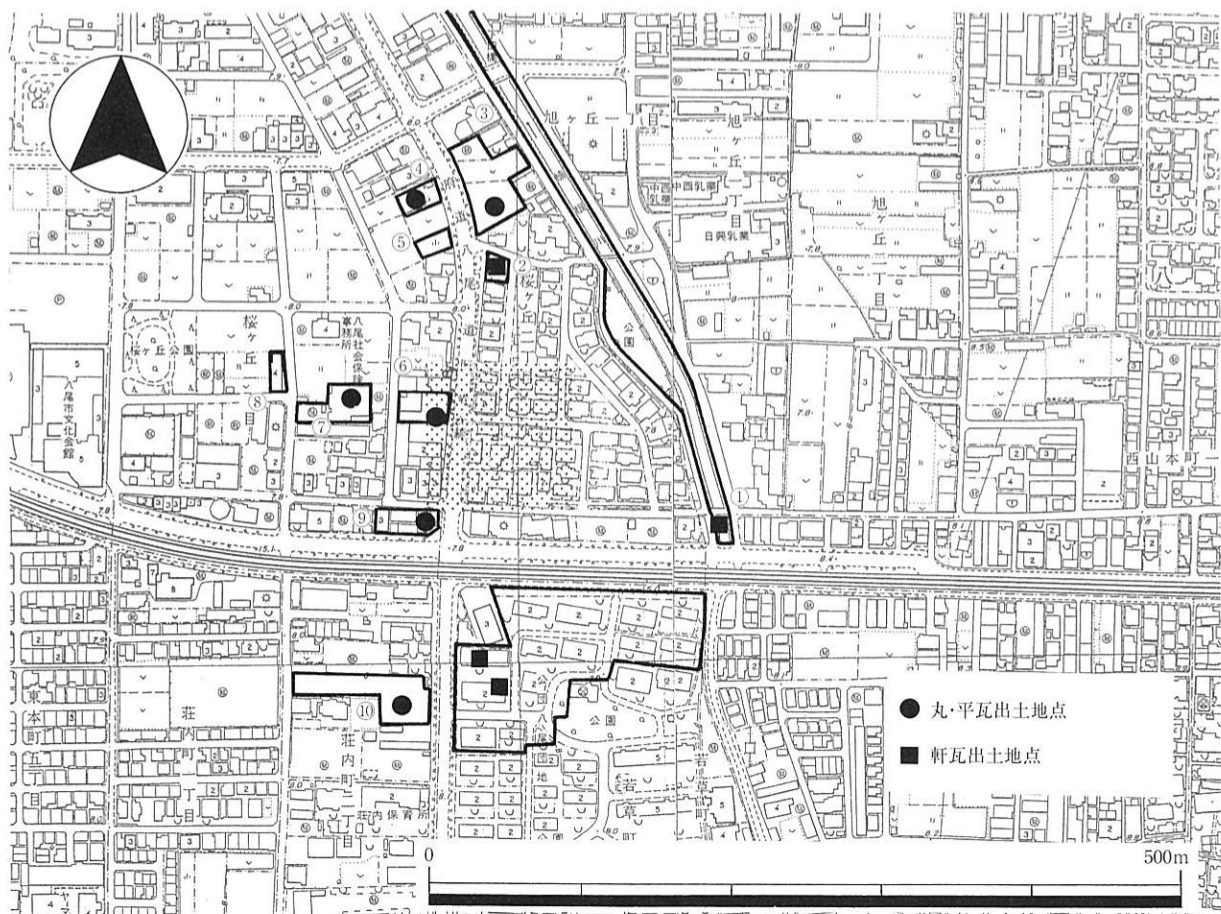


図178 東郷廃寺周辺の調査地点と想定寺域

とが可能である。このような旧河道上に立地する可能性のある寺院として、隣接する渋川郡の渋川廃寺をあげることができる。

遺構に比べて遺物の内容は豊富である。1987～1988年度の調査以降軒瓦をはじめとする瓦類の出土は、東郷廃寺の創建時期やその後の寺院の変遷を考える上で貴重なデータを提供した。つまり7世紀中葉の原山廃寺式軒丸瓦、7世紀後半の重弁8弁蓮華文軒丸瓦・紀寺式軒丸瓦、8世紀前半の重圈文軒丸瓦・青谷式軒平瓦、8世紀中葉の讃岐国分寺式軒丸瓦、8世紀末の野中寺式軒丸瓦、10世紀代の讃岐国分寺式軒平瓦という、約300年間の軒瓦の存在が明らかとなったことだ。これによると創建当初は、原山廃寺式軒丸瓦分布圏（若江・高安・大泉・安宿・志紀郡）に包括された氏寺であったが、早くも7世紀後半には百済王氏ゆかりの撰津堂ヶ芝廃寺・百済尼寺出土軒丸瓦に似た重弁8弁蓮華文軒丸瓦を用いる。ところが一方で7世紀後半から8世紀代にかけては紀寺式・重圈文軒丸瓦や青谷式軒平瓦が示すように、中央あるいは国衙との結びつきがより密接になる。同時に8世紀中葉～10世紀代にかけて讃岐国分寺との関係も深めたようだ。

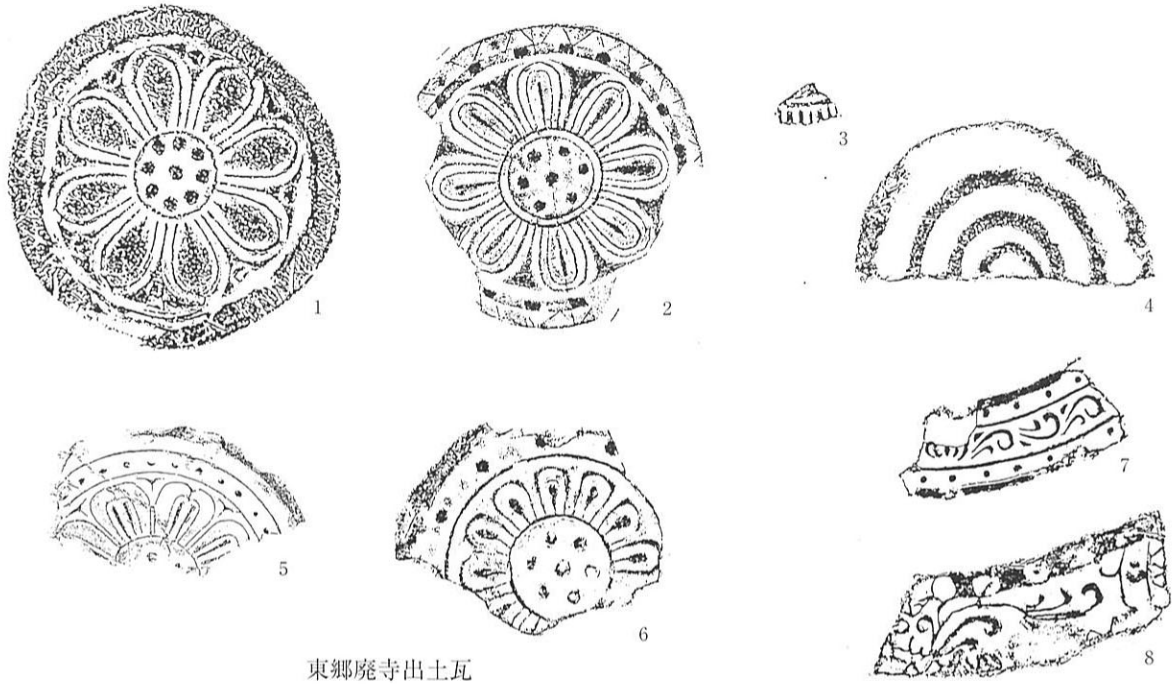
さて今回の調査地点－特に98-5・7区－では、6～7世紀代の遺構・遺物こそ皆無に等しかったが、8世紀以降10世紀代にかけては膨大な遺物と、奈良・平安時代の施設の一端をうかがわせる井戸・掘立柱建物を検出した。これらの遺構・遺物は東郷廃寺出土軒瓦の年代と併行しており、特に川200などからは東郷廃寺と密接な関わりをもつ有軸綾杉文平瓦や、讃岐国分寺と同範軒瓦が出土していることもあり、同廃寺と関連深い何らかの施設が存在した可能性を示唆する。また「根^ツ」と記した墨書土器が1996年度調査地においても出土していることは、この集落域が東郷廃寺西側に広がっていたことを想像させるだろう。

ところで奈良時代の須恵器壺Hや平安時代の緑釉単彩陶器、緑釉・灰釉陶器、越州窯青磁、1988年度調査地で出土した新羅系土器片、1991年度調査出土の二彩陶器片といった土器類がもつ属性は、奈良～平安時代前期を通じて中央との強い繋がりを彷彿させる。さらに大量に出土した製塩土器は、公的施設の存在を示すものかもしれない。しかしその一方で規格性の強い建物群がみつかっていないことや、墨書土器に公的施設を暗示させるものがないことから、現状では官衙を含む公的施設の可能性は低いといわざるを得ない。また瓦こそ出土するが立地的にみて旧河道より低いこと、さらに寺院を意味するような墨書土器もなかったことから、寺院地内にあったであろう雑舎群とも積極的には考えにくい。東郷廃寺西方に展開した施設群は、現状では同寺建立氏族宅であった可能性が高いのではないかと思う。

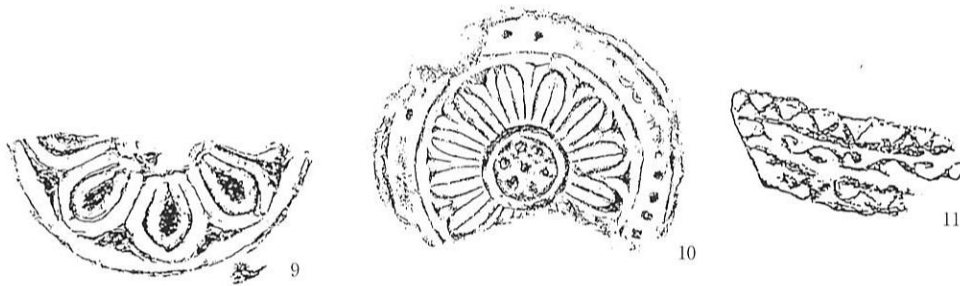
平安時代後期－11世紀以降東郷廃寺の実態を示す直接的証拠はない。奈良～平安時代前期においては98-5～7区に遺構が集中し、想定される東郷廃寺の寺院地の前面に相当するであろう98-1～4区に遺構らしき遺構はほとんど営まれることがなかった（図13・18）。しかし11世紀以降は98-5～7区の遺構が激減するとともに、98-1～4区にその規制がなくなったかのごとく遺構が出現する（図11）。平安時代後期を境に、東郷廃寺の変質をうかがうことはできないだろうか。

讃岐国分寺と東郷廃寺 では讃岐国分寺SKM03Aが東郷廃寺にもたらされた契機は何か、言い換えれば両寺を結びつける要素は何か。東郷廃寺が7世紀後半以降中央系あるいは国衙系の軒瓦を所用するとはいえ、なぜ讃岐国衙直属の国分寺所用瓦を共有するのか。残念ながら今回を含めこれまでの出土遺物には、この軒瓦以外に両遺跡あるいは両地域を結びつけるものはない。ただ『統紀』に記載された讃岐国・河内国の国司の動向に注目してみると、以下の事例がある。

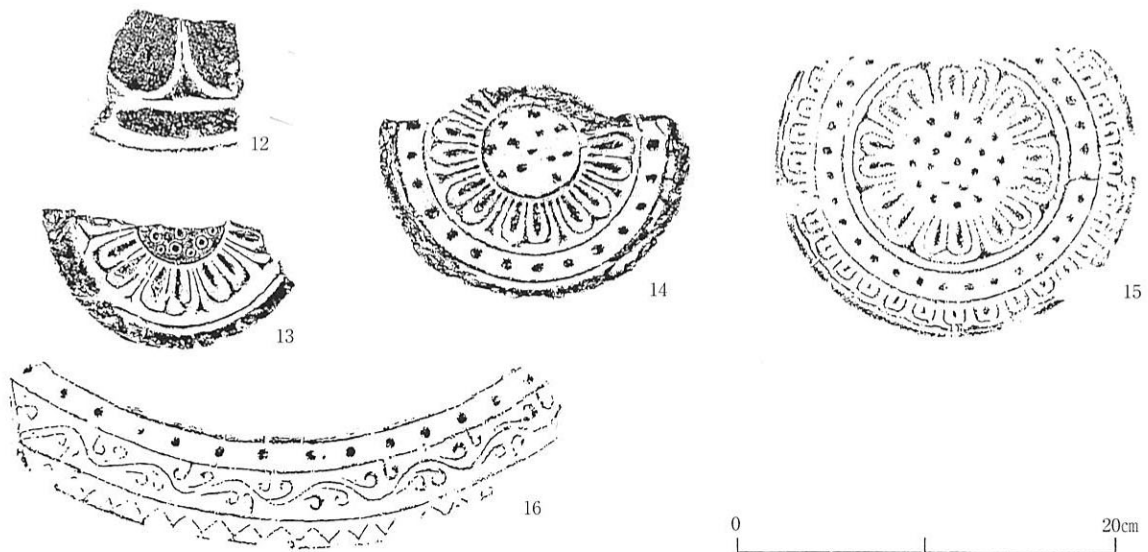
天平宝字7年（763）百済王敬福が、神護景雲2年（768）多治比土作がそれぞれ讃岐国守として赴任



東郷廃寺出土瓦



西郡廃寺出土瓦



若江寺跡出土瓦



図179 若江郡所在の古代寺院出土瓦

する。特に百済王氏の場合、その氏寺と考えられる堂ヶ芝廃寺・百済尼寺所用瓦と関連深い軒丸瓦が東郷廃寺でも出土しており、讃岐国守百済王敬福と東郷廃寺に間接的な繋がりを指摘することができる。しかし東郷廃寺近隣に蟠踞した氏族と百済王敬福との関わりを示すような文献史料は、管見の限り見いだすことはできなかった。時期は前後するが、家地が堂ヶ芝廃寺・百済尼寺のあった東成郡にあった長屋王の息子安宿王が、天平勝宝8年(756)讃岐国守として赴任している。

続いて宝亀6年(775)佐伯宿禰国益が、宝亀10年(779)佐伯宿禰真守がそれぞれ河内国守として着任する。佐伯氏は古代有数の軍事的伴造氏族で、大きく大伴氏と同祖といわれる佐伯宿禰と、地方豪族として播磨・安芸・讃岐・阿波などで国造族を形成した佐伯直に分れる。佐伯直は必要に応じて宮廷の防守にあたり、それを中央で指揮統率したのが佐伯宿禰らだったらしい。ここに讃岐の佐伯直と河内国守佐伯宿禰との繋がりを見いだすことができる。しかし河内国守佐伯宿禰国益・真守がなぜ国府近隣の寺院ではなく、東郷廃寺に瓦をもたらしたのかが不明瞭である。

以上のように、天平13年(741)3月の国分寺建立詔後の天平勝宝8歳から宝亀10年にかけて、河内ゆかりの国守が讃岐へ、あるいは讃岐ゆかりの国守が河内へ赴任していた。国守が讃岐国分寺所用瓦の移動に何らかのかたちで関与した可能性があるかもしれない。

若江寺と西郡廃寺 それでは若江郡に存在した若江寺跡や西郡廃寺はどうであったのか。若江寺は、元慶年間(877~885)の文献にその名をみせることから郡名寺院と考えられており、付近から「若」と記した墨書土器が出土していることからみて、若江郡衙が存在した可能性がある。若江寺跡の位置する若江遺跡一帯は、80次近い調査で若江城に関連する遺構がみつき、ほぼ同一場所にあったと想定される若江寺は築城に際してことごとく破壊されたと考えられている。包含層中からは、7世紀前半に遡る素弁8弁軒丸瓦(図179-12)、7世紀後半の粟原寺式軒丸瓦(同-13)、7世紀末の紀寺式軒丸瓦(同-15)、吉志部瓦窯産の軒丸瓦・軒平瓦をはじめ、鎌倉・室町時代に至る軒瓦が出土する。ただ傾向として10・11世紀代の軒瓦は些少という²⁴⁾。

瓦以外の出土遺物には、奈良時代の唐三彩、平安時代の長沙銅官窯・越州窯の輸入陶磁器、緑釉・灰釉陶器があり、東郷廃寺・小阪合遺跡と似た状況を呈する²⁵⁾。

一方若江寺の南方約600mの地点、天神社境内に西郡廃寺塔心礎が遺存する。若江寺跡一帯に比べ調査次数は少ないが、7世紀中葉の原山廃寺式重弁8弁軒丸瓦を創建瓦(図179-9)とし、河内郡所在の河内寺跡出土軒丸瓦と同文の7世紀後半細弁13弁軒丸瓦及び細弁12弁軒丸瓦(同-10)がこれに続く。現在のところ8世紀代に下る可能性のある偏行唐草文軒平瓦(同-11)以降は、鎌倉時代の巴文軒丸瓦・連珠文軒平瓦が知られているにすぎない²⁶⁾。

さらに約600m南方に位置する萱振遺跡では、1983~1984年の調査で、計画的に配置された8世紀代の掘立柱建物群がみつかった。担当者は、出土遺物に墨書土器や銚帯、西郡廃寺所用瓦が含まれることから、この地に西郡廃寺建立氏族宅があったと想定する²⁷⁾。室町時代初頭の井戸に西郡廃寺所用瓦が使用されていることを勘案すると、その頃までに西郡廃寺は廃絶していた可能性が高い。

考古資料からみた若江郡 第II章で記したように、若江郡は旧大和川本流とその支流玉串川、さらに河内湖に囲まれた郡域をもち、『和名抄』によれば郡内は7郷に分れていたという。若江郡は現在の東大阪市・八尾市にまたがるが、このあたりは大阪府下でも屈指の遺跡密集地帯で、開発に伴う大小様々な発掘調査が頻繁に実施されており、各時代のデータが比較的蓄積されている地域でもある。そこで若江郡内の調査報告書にあたって、奈良~平安時代前期の遺構・遺物がみつかった地点に印をつけたとこ

る、図180のようになった。²⁸⁾

これによると印の分布は、八尾市八尾木・刑部一帯（Aブロック）、八尾市緑ヶ丘・桜ヶ丘・若草町・青山町・高美町・清水町一帯（Bブロック）、東大阪市若江北町・若江本町・若江南町・若江西新町、八尾市幸町・泉町・萱振町一帯（Cブロック）、東大阪市西堤学園町一帯（Dブロック）、の4ブロックに大きく分れる。Dブロックを除く3ブロックは、いずれも旧楠根川などの自然堤防上に立地していた可能性が高く、庄内式～布留式の集落立地とほぼ合致することが明らかとなった。²⁹⁾ 各々の広がり、最も広範な分布を示すCブロックが径約2.5km、Bブロックが約2km、Aブロックが約1.3km、最も狭いDブロックが約0.3kmと必ずしも一定ではない。しかしながらこのようなまとまりが存在するのは事実であり、奈良～平安時代前期の集落範囲をある程度反映するものと考えられる。それを敢えて『和名抄』記載の郷と対応させると、Aブロック＝弓削郷・Bブロック＝刑部郷・Cブロック＝錦織郷・Dブロック＝川俣郷となろうか。

各ブロックには、飛鳥・白鳳寺院の存在を示す瓦が一定の範囲内に散布する。Bブロックではそのやや北寄り部分に、Cブロックでは2ヶ所に集中地点がある。つまりそれぞれの分布が東郷廃寺・西郡廃寺・若江寺跡を示す。東郷廃寺や西郡廃寺における瓦の分布範囲が、径2～300m前後でおさまるのに対し、若江寺跡ではかなり広範囲に散布しているのがわかる。それが若江寺の寺院地の広がりを示すものなのか、後世の若江城築城に伴う遺物の流出とみるべきなのか、あるいはそれ以外の要因があるのかは今後の課題であろう。

Aブロックを弓削郷に対応させたが、当地は『続紀』神護景雲3年（769）10月などの記載にみえるように由義宮造営地である。足利健亮氏は、『続紀』や現存する寺社・地名などを手がかりとして、由義神社と弓削神社を結ぶ南北3里を西辺とし、生駒西麓を南北に走る東高野街道にほぼ合致する部分を東辺にあて、3里四方を由義宮域として復元した。³⁰⁾ この復元案にAブロックを重ねると、その半分は宮域外であったことになる。

現在のところAブロック内では奈良時代の土器が散発的に出土するが、掘立柱建物など明瞭に居住痕跡を示すような遺構は未発見である。ただ1967年大阪外環状線建設中に瓦類や緑釉陶器がみつかったり、1994・1997年度東弓削遺跡調査地点で、東郷廃寺・野中寺と同文の野中寺式軒丸瓦などが出土している。³¹⁾

刑部郷に対応させたBブロックは、大きく①現八尾市南本町・東本町などにみえる旧大和川支流の河道沿いと、②旧楠根川沿いの2つの小ブロックからなる。①では成法中学校一帯の調査で、7世紀後半～8世紀前半及び8世紀末の資料がみつかっており（aブロック）、②ではBブロックの中心というべき東郷廃寺付近（bブロック）以外にも、やや南で①とほぼ同時期の資料を出土する地点がある（cブロック）。東郷廃寺の北側の八尾中学校一帯にも散発的に遺物は出土するが、北側に接するCブロックとの境界は今一つ判然とせず、bブロックとは別個の小ブロックを形成するのか否かも不明である。今日までに報告されている平安時代前期の資料は僅少であるが、奈良時代の資料とほぼ同一範囲に分布する。a・b・cブロックを比較すると、いずれのブロックも人面墨書土器、瓦が出土する。つまり小ブロックごとに人面墨書土器を用いた祭祀を行っていたこと、a・cブロックにおいてもごく微量ながら奈良～平安時代前期の瓦・須恵器鉢が出土することから、奈良時代以降小規模ながら仏教施設（おそらく掘立柱建物）が営まれた可能性が高い。³²⁾ 特にcブロックから出土した軒丸瓦は栗栖野瓦窯（中央官衛系瓦屋）製品と同文という。³³⁾ これらは、村落の末端にまで律令祭祀と国家仏教政策が浸透していたことを示すであろうが、一方で若江郡は河内国内で式内社が最も多く、伝統的固有信仰の強い地域であった。³⁴⁾

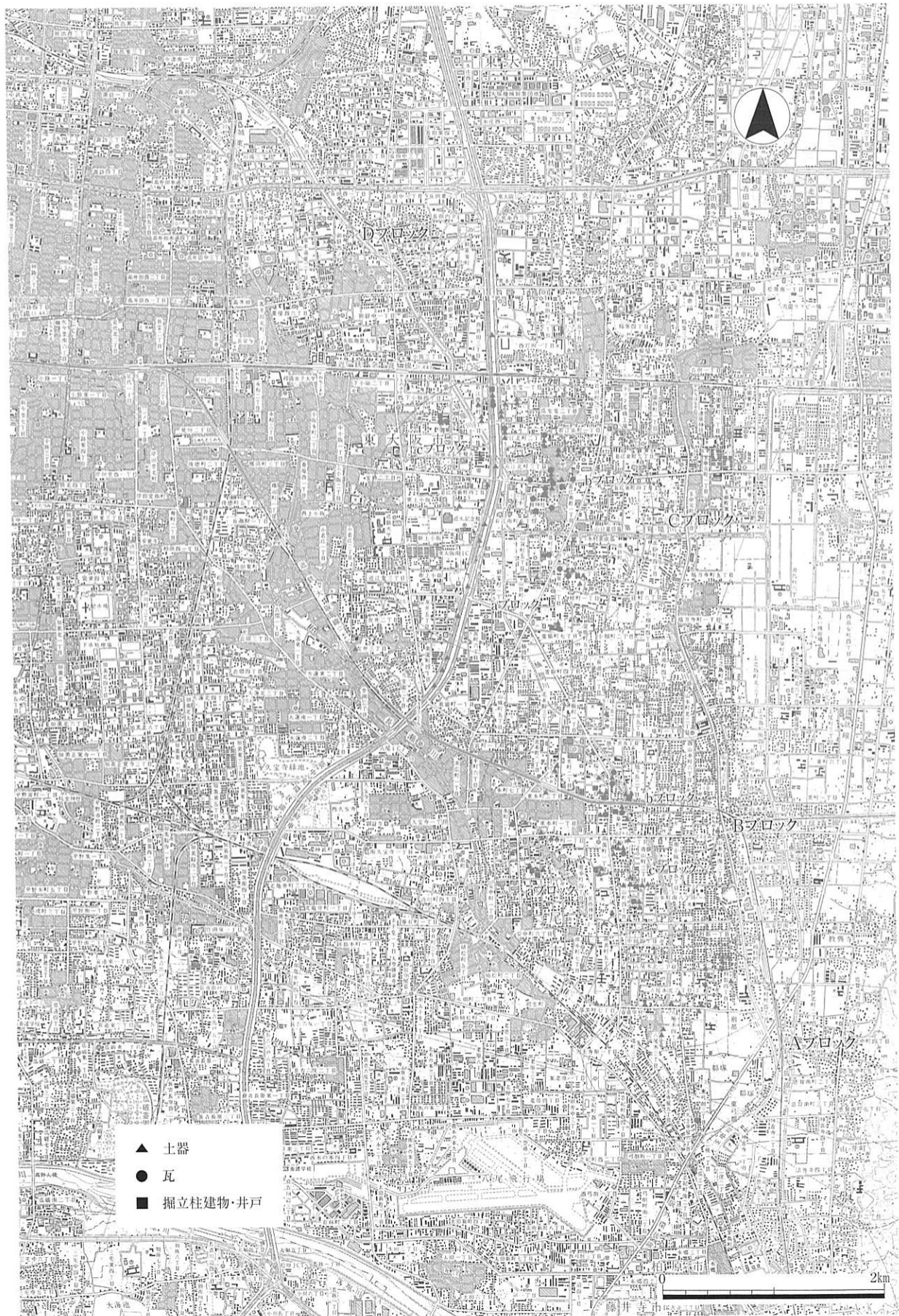


図180 若江郡における奈良時代～平安時代前期の遺構・遺物分布図

Cブロックには、若江寺跡と西郡廃寺という2つの古代寺院が存在する。若江郡衙の存在も想定されており(cブロック)、若江郡の中心的ブロックであったことがうかがえる。ここでも①西郡廃寺およびその南方600mの地点で建立氏族宅と目される建物群一帯(aブロック)、②若江寺跡(若江遺跡)一帯(bブロック)、③建物群がみつかった瓜生堂遺跡一帯(cブロック)の3小ブロックに分れる³⁵⁾。cブロックでは若江寺所用の紀寺式軒丸瓦が出土しているが、同寺で未見の平安時代前期単弁8弁軒丸瓦もみつまっていることから、別個の仏教施設が存在した可能性もある。Cブロックにおいても、量こそ少ないが平安時代の資料の分布は前代のそれとほぼ重複する。

Dブロックは、最も分布範囲の狭いにもかかわらず奈良～平安時代前期の遺物が出土する。その他近鉄大阪線弥刀駅前では奈良時代の土器が、また近畿自動車道建設に伴う調査では、連綿と続く遺跡群から奈良～平安時代前期の遺物がみつまっている。

奈良・平安時代の小阪合遺跡とその周辺 上記したことをまとめると次のようになる。若江郡には旧河道上に奈良～平安時代の村落が営まれていた。それは古く庄内式～布留式期以来基本的に踏襲されてきた集落立地である。各村落は複数の小ブロックからなり、最も有力と考えられる小ブロックに飛鳥・白鳳寺院が建立されたが、奈良～平安時代前期にはその他の小ブロックにも瓦葺きの小規模な仏教施設が作られたらしい³⁶⁾。また人面墨書土器を用いた律令祭祀も執り行われていたが、反面式内社が河内国内で最も集中することから、伝統的信仰も根深い地域であった。

各ブロック内の若江寺跡・西郡廃寺・東郷廃寺といった古代寺院は、7世紀前葉～中葉にかけて相次いで建立された。しかし各寺院ならびに周辺の様子は、後世の若江城築城に際し徹底的に破壊された若江寺跡周辺のように必ずしも明らかではない。西郡廃寺では塔心礎や奈良時代中葉の規則的に配置された建物群が同寺南方600mの地点で検出され、東郷廃寺では10世紀代の建物跡がみつかったとはいえ、伽藍地およびその周辺の実態はほとんど不明である。

一方出土瓦によれば若江寺跡・東郷廃寺は、ともに7世紀後半以降中央との結びつきを強め、若江寺跡吉志部瓦窯産軒瓦を所用し、東郷廃寺は8世紀代中央系の重圈文軒丸瓦・青谷式軒平瓦とともに讃岐国分寺との関係を持ち、それは少なくとも10世紀代まで続いた。瓦以外の出土遺物に注目すると、若江寺跡では奈良時代の唐三彩、平安時代の長沙銅官窯・越州窯陶磁器、緑釉・灰釉陶器、東郷廃寺・小阪合遺跡では奈良時代の須恵器壺や新羅系土器、平安時代の緑釉単彩陶器、緑釉・灰釉陶器、越州窯磁器といった極めて中央的な土器を豊富に出土することがわかった。小阪合遺跡における9世紀後半代の施釉陶器の比率は、平安京内の生活様式を当地に持ち込んだともいえる在り方だ。しかし西郡廃寺は今日まで中央系軒瓦を用いていた証拠はなく、それを反映してか輸入陶磁器あるいは施釉陶器の出土は皆無あるいは極端に少ない。

奈良時代若江郡のあった中河内地域は、難波津と平城京を結ぶ主要陸上・水上交通の要衝であったが、長岡・平安京遷都以降はその地理的優位性を失う。『日本後紀』以降の文献史料にみえる歴代天皇の行幸記事の激減や、官人層の移住記事などがそうだ。にもかかわらず若江寺跡や東郷廃寺・小阪合遺跡の在り方は、平安時代以降も中央との密接な関係を保持し、勢力を維持し続けたことを物語る。東郷廃寺のその後も含め、今後周辺地域との対比検討が望まれる。

謝辞 京都大学大学院教授上原真人氏には、小阪合遺跡出土瓦が讃岐国分寺出土瓦と同範関係にあることをご指摘いただき、徳島文理大学大久保徹也氏ともども資料実見の機会を設けていただいた。

讃岐国分寺跡出土瓦掲載に際しては、香川県国分寺町教育委員会松本忠幸氏より、また宝幢寺跡出土瓦掲載に際しては、香川県善通寺市安藤文良氏、香川県丸亀市立郡家小学校よりご高配を得た。また資料実見に際しては、松本忠幸氏、安藤文良氏をはじめ、香川県埋蔵文化財センター蓮本和博氏、森下英治氏、香川県三野町教育委員会白川雄一氏よりご教示を得た。

さらに讃岐国分寺出土瓦の評価に際しては、岡山大学名誉教授吉田晶氏、岡山理科大学亀田修一氏、高松市教育委員会川畑聰氏よりご教示を得た。

註

1. 『讃岐の古瓦展』1996 高松市歴史資料館 以下讃岐国古代寺院出土瓦の型式名は本書によった。
2. 『東郷遺跡発掘調査概要Ⅰ』1989 大阪府教育委員会
3. 道 斎 「第5章 東郷廃寺についての考察」『八尾市文化財紀要7』1995 八尾市教育委員会文化財課
4. 『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』1987 国分寺町教育委員会
5. 藤井直正「讃岐開法寺考」『史迹と美術』485 1978 史迹美術同友会
藤井直正「讃岐国古代寺院跡の研究」『藤沢一夫先生古稀記念論集 古文化論叢』1983 同刊行会
藤井直正「屋瓦文様の伝播とその背景－河内大県郡・安宿郡と讃岐国」『河内古文化研究論集』1997 河内古文化研究会
6. 上田睦「中南河内の古代寺院」『摂河泉の古代寺院とその周辺』1997 摂河泉古代寺院研究会
7. 註3に同じ。
8. 奈良美穂「須恵器壺Hの一考察」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1985 奈良市教育委員会
9. 『駒ヶ谷遺跡』1999 (財)大阪府文化財調査研究センター
10. (財)京都市埋蔵文化財研究所 平尾政幸氏よりご教示を賜った。
11. (財)八尾市文化財調査研究会 原田昌則氏よりご教示を賜った。
12. 墨書土器は、7世紀に畿内の寺院・諸京を中心に出現し、8世紀律令制が成立する平城京で爆発的に増え、地方官衙、やや遅れて周辺の集落へと普及するという。清水みき「墨書土器の機能について－都城(長岡京)の墨書土器を中心に－」『向日市文化資料館研究紀要2』1987 向日市文化資料館
13. 「東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』1983 八尾市教育委員会
14. 青谷(河内国分寺)式軒平瓦については、京都府大山崎町教育委員会古閑正浩氏よりご教示を賜った。氏によると平城宮6721を祖型とする青谷(河内国分寺)式軒平瓦は、A・B・Cの3種類があり、南河内地域を中心に摂津・山城地域さらには平安宮豊楽院にまで分布し、公的性格を有する遺跡が多いという。
15. 註2に同じ。
16. 「東郷遺跡(第33次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』1993 (財)八尾市文化財調査研究会
17. 註3に同じ。
18. 「東郷遺跡(第43次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』1994 (財)八尾市文化財調査研究会
19. 「東郷廃寺(94-730)の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ』1996 八尾市教育委員会
20. 「東郷遺跡(第52次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』1998 (財)八尾市文化財調査研究会
21. 「東郷遺跡(96-768)の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ』1998 八尾市教育委員会
22. 1999年度(財)八尾市文化財調査研究会調査
23. 「尊意贈僧正伝」『統群書類従』八輯下(伝部)1927 統群書類従完成会

24. 東大阪市教育委員会 福永信雄氏よりご教示を賜った。
25. 福永信雄・津田美智子「若江遺跡出土の唐三彩」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.5, No.1 1990
『若江遺跡第38次発掘調査報告』1993 (財) 東大阪市文化財協会
26. 『萱振遺跡』1996 (財) 八尾市文化財調査研究会
27. 『萱振遺跡』1992 大阪府教育委員会
28. この作業は、主として報告書に当該期の遺物が出土したことを記し、図化されたものを対象とした(文献は割愛)。上記の条件を満たす資料を、出土遺構・包含層あるいは量の多少を問わず点を落とした。今回の作業結果が比較的明瞭なまとまりをなしたのは、①若江郡が比較的広大な郡域をもつこと、②それに比べて郷の数が少ないこと、③発掘調査が頻繁に実施されていることによる。一方で発掘調査を必要とする開発が偶然集中したために、このようなまとまりを形成したという危惧もあり、今後とも調査成果を注視する必要がある。また全体的な傾向として奈良時代に比べ平安時代の遺物は少ない。
29. 当センター西村 歩の研究による。今回は5世紀以降7世紀代に至る遺構・遺物分布を確認していないが、基本的には集落立地は8世紀代に至るまで変化なかったものと考えている。なお5世紀～7世紀代の分布は、今回提示した8～10世紀代の分布との関連も含め将来の検討課題としたい。
30. 足利健亮「由義京の宮域および京城考」『考証・日本古代の空間』1995 大明堂
31. 「東弓削遺跡(94-484)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ』1995 八尾市教育委員会
「東弓削遺跡(97-188)の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅱ』1998 八尾市教育委員会
この細弁12弁蓮華文軒丸瓦(野中寺式軒丸瓦)は平城宮6133-Rをモデルとし、8世紀末に位置づける。
『野々上Ⅱ』1996 羽曳野市遺跡調査会
32. 瓦葺建築は古代寺院のみならず、地方官衙や平城京・平安京内の高級邸宅の一部にも存在し、一方で非瓦葺の古代寺院も知られていることから、古代寺院の定義を瓦の出土に求める議論は通用しないという。上原真人「仏教」『岩波講座日本考古学6』1984 岩波書店
33. 「小阪合遺跡(第26次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告61』1998 (財)八尾市文化財調査研究会
34. 直木孝次郎・森 杉夫編『大阪府の地名』日本歴史地名大系28 1986 平凡社 781p
35. 『瓜生堂』1980 (財)大阪文化財センター
36. 近年関東地方-特に千葉県下では、律令村落内に小規模な仏教施設(村落内寺院)が存在したことが明らかになってきている。これらは、大規模開発に伴い堅穴住居で構成される村落内に四面庇建物に代表される仏堂風の建物や、「寺」「佛」といった墨書土器の存在から判明したものだ。ところが摂河泉地域では、律令制前代に一般集落は掘立柱建物になり、表17に示したように「寺」と記した墨書土器は古代寺院以外での出土はほとんどないことから、村落内寺院の認定にはかなり困難が伴う。ただ今回確認した事例は、村落内寺院に匹敵する可能性が高い。

なお若江郡内の各ブロックにみられる仏教施設の在り方を類型化すると次のようになる。

① 1ブロックに飛鳥・白鳳寺院が複数ある場合(小ブロックごとにある場合) = Cブロック

② 1ブロックに飛鳥・白鳳寺院1ヶ所、8～9世紀代に仏教施設造営 = Bブロック

③ 飛鳥・白鳳寺院なく、8～9世紀代に小ブロック内に仏教施設造営 = Aブロック